THE CENTRAL REVIEW

中央公論

12-1925

十二月號

11　　40

第四十年　第十三號　第四百五十五號



今や社會はあらゆる方面に
健腦の人を要求す
故にあらゆる腦神經病者は

腦病良藥
健腦丸
を要求す

奥村博士發明
腦病良藥
健腦丸
KENNOGWAN

主効
腦充血　神經痛　頭痛　眩暈
腦膜炎　腦貧血　耳鳴　健忘
逆上症　卒中　中風　便秘

特長
逆上を引下げ、便通をよくし怖るべき中風卒中を未發に防ぎ腦充血を快治し記憶力を增進す。

藥	價
五回分	參拾錢
四日分	六拾錢
一週分	壹圓
二週分	壹圓九十錢
三週分	貳圓七十錢
五週分	四圓
十週分	七圓

全國各藥店に取次す

本舗 大阪市順慶町 東京市南鍋町 丹平商會藥房

増富平藏譯

宇宙及人生

▼二千五百二十餘頁
▼四六判九ポイント組
▼總洋布製函入

上巻　四圓五拾錢　郵税十八錢
中巻　定價四圓　郵税十八錢
下巻　定價四圓　郵税十八錢

●三巻● ●完成●

本書は獨逸の大哲學者ショーペンハウエルの大著**「意志及び心識としての世界」**の逐字的口語譯である。原書は**ニイチヱも「二週日の間、二時に寝ね、六時に起きて二千ページを讀破した」**といつた位、深淵の思想と無限の興味とを兼ね具ふる點に於て有ゆる哲學書中の白眉を以て目さるゝ世界的名著である。

(批●評)

「……所謂る哲學臭い言ひまはしや、文字面をならべずして、しかも深遠廣大を極めた哲理を該博なる引用をなして、興味津々と說いたところは恐らく他にその比を見まいと思はれる**凡書一萬册もこの書一册には遠く及ばぬ**こと論を俟たぬ。——特に附錄のカント哲學の批評一篇は堂々二百餘頁に亘る大論策で、カントとショ氏の相違をうかゞうには何よりのものである。又意志について第二の觀察中にある性愛の形而上論とか、種屬の特質とか、生きやうとする意志の主張と棄却などの文章は流石に驚くべき暗示に富んだもので**一讀三嘆を強ひられる。**それにしても大部なものを此れで譯了した増富氏とそれを廉價にて分賣にして來た書肆の勞は大抵なものではなかつたらうと思ふ」——(日本及日本人)

東京本郷片町　**玄黄社**　電話小石川一三一九番　振替東京七九九五番

講談倶樂

大衆文藝の逸品集る！

堂々七百頁の大冊四大附錄つき

見よ誌界無双の出來!!　乞ふ期して俟たれよ!!

長篇小說作家
顏觸の華々しさ!!
內容充實天下無比！
破天荒の大提供、こんな安い雜誌はない。一冊あれば一家殘らず一月中樂しめる
ホンの概要をかゝげます

◎戀愛小說　**月火**……小栗風葉

本誌にのみ見るを得る風葉先生一世一代の大作。中年者の本能的な肉的な戀愛生活の種々相を描いて深刻を極めた小說、紅葉門下の逸足明治文壇の巨匠の最大傑作

◎新小說　**怪人**……中村武羅夫

新文壇第一の權威者、長篇小說の天才作家中村氏が極秘の題材を扱つた大篇。光源氏を今にして見る戀愛の化神とも云ふべき一箇男性を中心にして愛慾生活の展開。

◎**東慶寺供養**　眞山靑果

千姫の正體を掴んで、いま迄の傳說を引つくり返した觀りあるのはこの小說である。戰國の世に於て[illegible]

特別讀物

名士巨豪自敍傳物語

雜誌界嘗ての驚異、[illegible]

觀出土　新年號の　部

觸を見よ本誌ならでは出來ない

○淸浦奎吾○鎌田榮吉
○田中義一○石黑忠悳
○高田早苗○山本唯三郎
○澁澤榮一○福田雅太郎

四大附錄

一家團欒の好資料、笑ひつゝ興じつゝ一家幸福に樂しいお正月を尙樂しく出來る

(1)卓上鬪球盤遊戲
(2)新案競技 武者修業双六
(3)娛樂餘興滑稽ニコニコ大會
(4)勇士快傑美人俠客 一世一代痛快物語

十二月五日發賣

定價壹圓貳拾錢（送料五錢）

となつて大切な操をむくつけき荒男共に蹂躙された幾多可憐の女性の運命は讀む者に一種云ふべからざる感慨を與ふ

新小說 勘八物語…佐藤紅綠

勘八といふ男の好色生活である、宛然たる大正の「好色一代男」である。獨身者讀むべからずといふ快小說

探偵小說 妖怪無電 保篠龍緒

探偵小說壇に突として現れた新人が提げて立つた大探偵小說、舞臺は東西兩洋に跨り事件は奇々怪々、人情の機微、世相の表裏までを描破して探偵小說最高のレヴエル。

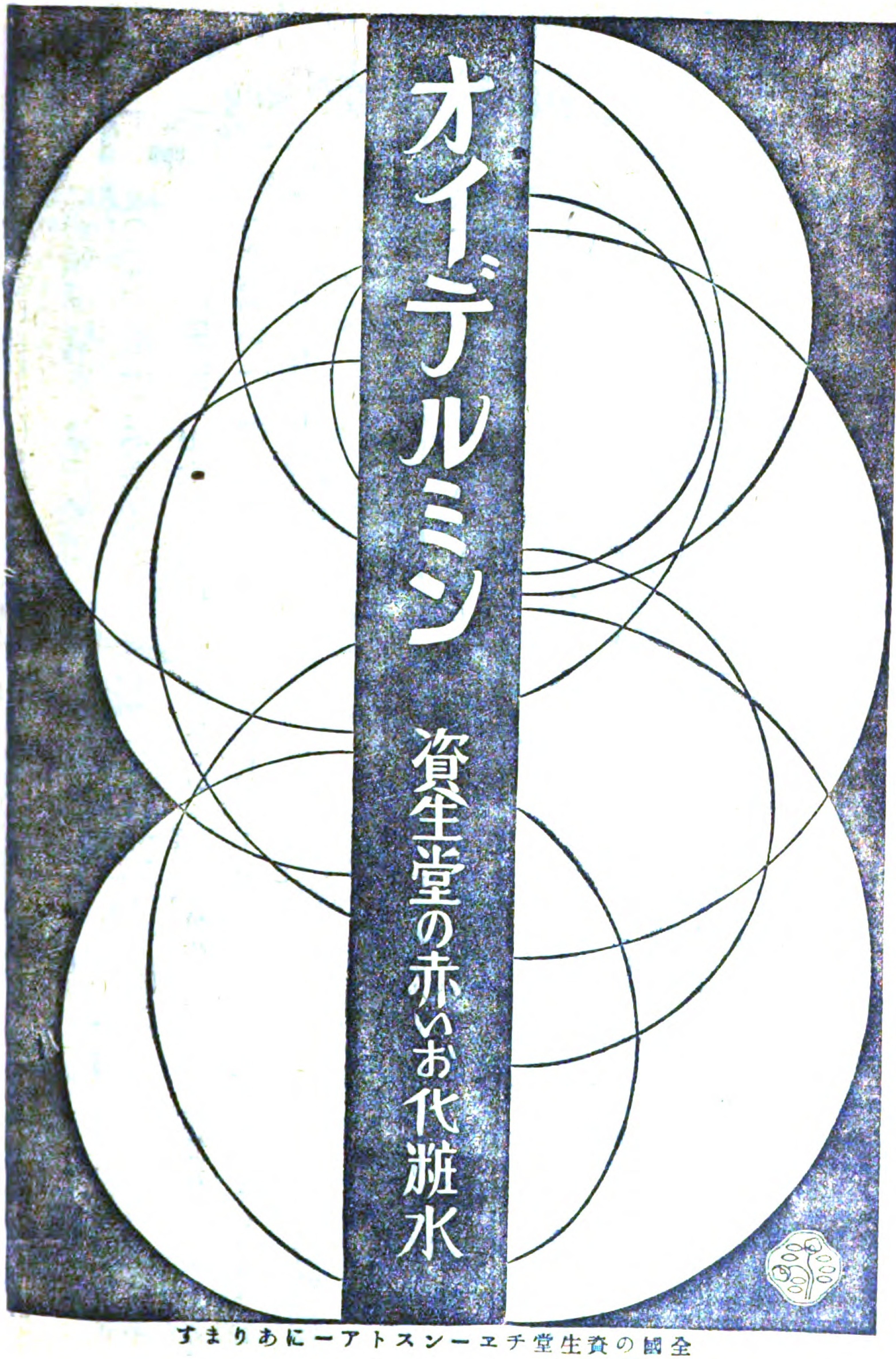
幕末秘史 春の喘ぎ…前田曙山

幕末物にかけて獨壇場の前田氏の勞作。

武俠小說…吉川英治

近來一作每に盛名を堅めたる吉川氏の力作劍々相搏つ熱血鐵腸の大武俠小說

東京本鄉 講談社（振替東京六六二九）


オイデルミン
資生堂の赤いお化粧水
全國の資生堂チエーンストアーにあります


クラブ煉歯磨
學理上實驗上
効力舶來品以上の歯の爲に一番よいクラブ歯磨
便利で衛生的なチューブ入りのクラブ煉歯磨
耐久力三倍以上のセルロイド製
クラブ歯刷子



菊　小林古徑筆

見よ此の壯觀！正に

現

新年特大號豫告

（十二月十八日發賣！
本誌同人が半歳の間東奔西走、眞に汗みどろの大活動の結晶が即ちこれ！是非！是非！お求め下さい。）

◎政界の前途と國民の覺悟……代議士尾崎行雄

◎秩父宮殿下御近況…伯爵二荒芳德

◎道は近きにあり…曹洞宗管長新井石禪

◎笑ひと人生……工學博士伊東忠太

◎皇國の大精神……文學博士大類伸

◎私を感動せしめた偉人の言動（多數名士）

此外 尚記事數十篇！堂々六百頁の大冊に玉篇佳稿山と滿載！

◎名士から觀た名士の青少年時代（數名士）

◎壯絕！スキースケート物語（三島章道）

◎名砲手血染の軍旗（虎狩實話）……（古賀綠）

◎政界巨頭連屠蘇機嫌（漫畫）……（岡本一平）

◎各會社腕利き總まくり
—（五大銀行並に五大呉服店の內幕秘話）—

◎斬新奇拔の販賣術……明大教授井關十二郎

◎共同經營の模範村（農村美談）……根津正藝

◎世界的發明家苦心談（豐陵學人）

◎健康長壽と食べ方の話（宮入博士）


深める秋に
この健康!!
ビールより攝取せるヴイタミンB
營養ビールが結果せる血精作用
品質に定評ある
サクラビール
TRADE MARK
Sakura
BEER
東京—大阪—門司
帝國麥酒株式會社

大正十四年

中央公論

十二月一日發行

十二月號

第四十年　第十三號

第四百五十五號

學生間に於ける社會科學研究の問題

早稲田大學當局が先頃學生の軍事教育反對演說會を禁止したと云ふ事件は、種々のことを私共に考へさせる。制度としてきまつたものを示威運動的に執拗に學生から反對されるのでは、當局者も難困ることであらう。斯うした問題に付て反對の氣勢を擧げやうとなら、殊に學校內の運動としてやるのなら、學生諸君の側に於て亦格別愼重な態度を取るを賢明とすべく 此點に於て學生諸君に反省を求むべき點も多々あつたらうとは思ふ。が、當局者が唯ひたすらに高壓的禁止命令を以て無理押しに學生の熱情を抑止せんとするのは、どう考へても思慮ある方策と稱することは出來ない。

就中早大當局の禁止理由として擧ぐる所の「學生は時事問題に容喙すべからず」との說に至ては、謬妄固陋も亦甚しい。今日の樣な時代に於て、政治法律を學ぶ靑年に時事問題の論究を阻止するは、去勢にも比すべき無謀な教育法である。實際社會に何等かの效果を顯さうとする底のキャムペインをやるのなら、學生の分際を超えた不當の行動として之を取締るに相當の理由はある。此「分際を超えぬ」との注意を加へつゝ、自由に時事問題を論究させるのが寧ろ學校當局の指導に期待さるゝ點であり 同時に亦公民教育の徹底を圖る最要の方法ではないか。若い者の常として動もすれば常規を逸するの嫌はあらう。だから全然之を阻止すべしと云ふのは、所謂羹に懲りて膾を吹くの痴態にひとしく、餘りに臆病な處置ではないだらうか。

併し早大當局の禁止命令は、實際のところ、純ら斯の理由のみに出でたものではあるまい。之はたゞ表面の理由として假用されたもので、根本は恐らくもつと深いところにあるのだらう。そは何かと云ふに、即ち昨今各學校に頻々として起て居るかの社會科學研究團に對する壓迫と共通の思想が働いて居るのではなからうか。若しさうだとすると、事はもはや一早稲田大學の問題ではなくなる。

高等學校程度以上の諸學校に、この數年來、社會科學の研究を標榜する團體が生れて居る。名稱は區々になつて居るが、社會主義に共鳴し進で更に之が研鑽を目的とすることは皆同樣である。社會主義の共鳴者が學生間に殖へるのは一體憂ふべき現象なりや否やに付ては、別に大に論すべきものであるが、假りに之を大に憂ふべしとするも、今日の教育當局者のやるやうに高壓的に之を禁止するのは、果して其目的に協ふや否や大に疑なきを得ぬ。目的に協ふ協はぬは暫く別論としても、爲に青年を無用に亢奮せしめ、冷靜自由なる研究心を害はしむるの弊に至つては、實に痛心に堪へざるものがある。若し今日の青年を目して時の流行に血迷て居ると云ふ者あらば、吾人は血迷て居る者は寧ろ教育當局者の方に多いことを指摘せんと欲するものである。

尤も教育當局者の立場に同情して考へて見るに、學生間に於ける所謂社會科學研究の現狀には何等危惧すべき點なしといふわけには行かないかとも思ふ。指導者としての老婆心から、あゝでないかかうでないかと心配するのは無理もないと考へらるゝ節もある。試みに疑惧の種となるべき二三點を舉げん乎、(一)彼等のうちには或る種の社會理論を無條件に信奉するといふ先入の偏執に捉へられ、自由討究の若々しい彈力性を喪ふものはたいか、(二)本當の意味の研究を離れ、寧ろ宣傳といふ方に格別の興味を感じ、其結果反對の立場に對する寛裕の德を亡ひ、自家の主張を無暗に他に強制するといふやうな嫌はないか、(三)宣傳に興味を感ずるの結果、學生に相應しい自由な論究よりも外形的勢力の振張といふことに焦り過ぎ、それ大會だそれ全國聯盟だと、丁度政黨の擴張運動のやうな空騷に浮身をやつすことがないか。數へ上げれば外にもあらうが、先づ之等は當局者としても又學生自身としても最も戒心を要する點であらうと思ふ。學生の教養訓育に心思を勞する者に取て、之等は決して等閑に附すべき問題ではないと思ふのである。

それにしても、之等は教育當局として森嚴なる警察的取締を以て臨むべき問題では斷じてない。如何なる方策を可とするやは玆に論するの限りでないが、早大當局を始め現時多數の教育當局の執る所の手段が、學生間に於ける一種流弊の弊むべきもののあるを認めながら、之に對する自家の指導責任を丸で忘却した驚くべき失當の處置たることだけは疑ひない。若し夫れ單純な社會主義思想の研究そのものをすら恐るべしとする者に至ては吾人はもはや之に對して謂ふべき言葉を知らない。(十一・じ)

中央公論



第四十年第十三號
十二月號
第四百五十五號

軍事教育の階級性の發現

小樽高商の野外演習に於ける所謂『想定問題』に關する一批判

大山郁夫

一　軍事教育の反對運動に於ける戦線の擴大

去る十月十五日に、小樽市の高等商業學校内の軍事教練に關聯して、擧行された野外演習に於ける所謂『想定事件』が惹き起されたのを導火線として、最近半年以上にも亘つて稍々鳴りを鎭めてゐたかに見えた軍事教育反對の聲が、俄に猛

然として復活して、しかもこの上急速に全國的に擴がつて行かうとしてゐる形勢さへ、明かに我々の眼前に動き始めた。

右の小樽高商の野外演習に於ける想定事件を動機として新たに擡頭した軍事教育反對運動は、それの規模、及びそれへの參加團體の範圍に於て、最早昨年末に見られた同名の運動の比ではなくなつて來てゐる。それは、その野外演習に於ける『想定』が、在留朝鮮人及び日本の無產階級を假想敵として構成されたものだといふことが、それの表面の上に明かに認知し得られるからである。それ故に、當初の軍事教育反對運動は、主として學生ばかりから成立つて居たのであるが、今日では、多數の朝鮮人や無產階級側の諸團體の運動がそれに加はつて來たのである。

もつとも、若し右の野外演習に於ける想定が、昨今支配階級側の一部の人々が頻りに辯解して居る通りに、軍事教育の本質とは沒交涉に生じた一個の偶發的事件にすぎないものだといふことが眞實だとするならば、それは、縱しそれ自身としては極めて重大な影響を伴ふものであるにもせよ、それの關係は比較的に簡單なものだといふことが出來もしよう。即ちその場合には、その想定事件は當然軍事教育そのものから切り離して取扱はれなければならないものであり、從つてその場合にはまた、その想定に對する抗議は、當然軍事教育そのものに對する反對とは區別されなければならないものである。けれども、實際に於ては、私が後に詳しく述べようとしてゐる通りに、右の想定は、種々の根據から、單に軍事教育そのものと不可分の關係を持つてゐるものであるばかりではなく、全然軍事教育そのものの組織の上に生じたものであり、且つまた軍事教育そのものの精神を反映してゐるものだと推斷し得られる理由があるのである。そして少くとも、小樽高商の野外演習に於ける右の想定問題の勃發を機として軍事教育反對の氣勢を擧げてゐる人々は皆、そこをはつきりと見て居るのである。

殊に彼等は、右の想定が、在留朝鮮人及び日本の無產階級を假想敵としてゐる點を最も重大視してゐるのである。從

つて彼等から見れば、それは我國の支配階級が年來抱懷する帝國主義的政策に依つて養はれて來た或る種の民族意識、及び無產階級を敵視する尋常一樣の資本階級意識の發現として見られ得る點に於て、それと同じ原因から派生したものと推斷し得られる軍事教育そのものからの當然の產物だと考へられるのである。彼等はそれ故に、現在に於ては、右の想定問題は、それの發生を促した根源となつた軍事教育そのものと共に、朝鮮人及び無產階級の生活上の利害關係の上に最も直接的な關係のあるものと思惟するやうになつて來てゐるのである。だとして見れば、當初に於て單に學生の孤立的運動に過ぎなかつた軍事教育反對運動が、今となつては最早、多數の朝鮮人及び無產階級の所屬者たちの運動にも化成しつつある形勢が誰にも認め得られるやうになつたのは、決して偶然ではないと言へるのである。それは明かに、軍事教育反對運動の戰線の擴大を意味するものである。そして、かうした軍事教育反對運動の戰線の擴大は、その根本に於ては、所謂軍隊の國民化の名目の下に於て行はれてゐる軍事教育が、その實、一部少數の社會層の生活上の利害關係に基礎づけられた帝國主義的政策からの派生物にすぎないといふ事實に對する認識の增進及び明確化の趨勢から來てゐるものに外ならないのである。

二　軍事教育運動と學術擁護運動

かういへば、或は當初から軍事教育反對の叫びを擧げた學生たちは、純粹に學問の獨立及び研究の自由の擁護に終始することを目的とした學生の立場からこの問題を眺めただけに止まつて、それを一つの社會問題として見たのではなかつた？　といふやうな疑問を起すものがないには限るまい。が、この考へ方は、明かに事實の眞相から外れてゐるものである。といふことは、私——當初から軍事教育反對運動を起して居た學生たちと絕えず直接の交渉を持續して來た

私――の立場から、率直に斷言することが出來る。で、私は今、その點を明かにするために、當時の學生の軍事教育反對運動が、どういふ動機から提起されたのもであつたかを、まづ一應追懷的に略述しようと思ふ。

昨年末に陸軍及び文部當局に依つて立案された軍事教育計畫の内容が世間に暴露された際に當つて、多數の學生たちが奮起して反對運動を開始したのは、無論何よりもまづ、若し該計畫に現はれて居た通りに、陸軍省の直轄の下に置かれてゐる現役將校が中等以上の各學校に配屬されて、教育の一部を擔當し指導するやうになるとすれば、それがために教育の獨立性が根本的に破壞されることになるであらうことを氣遣つたからである。もとより、現在の我國に於ては、教育の獨立性と言つたところで、制度上及び實際上甚だ稀薄にしか存在して居ないものであることは、疑ふべくもない事實であるが、しかしそれは、教育界及び學界から見れば、それを維持し增進することを要求する理由とこそなれ、それがこの上破壞されようとするのを默過する口實にはならないのである。それ故に、學生たちは、先つこの點から軍事教育反對の口火を切つたのである。そしてその際には、教育界の側にも、この同じ一點から、學生たちの主張に共鳴するものが幾分かは現はれたが、しかし社會的に或る意味に於て弱者の地位に置かれてゐる彼等は、表面上何時とはなく、その聲を潜めてしまつたのであつた。

が、學生たちは、單に軍事教育實施の下に於て教育の獨立性が破壞されるであらうことを氣遣つたばかりでなく、同時にまた、それに依つて學術研究上の自由が抑壓されるであらうことをも豫想して、その點を極度に警戒する必要を感じたことも事實である。殊に今日の大學の存在の理由の重要なる一部分が、學術研究の上に置かれてあるものとする以上、その點が學生たちに依つて重大な性質のものとして見られたのは、當然至極のことである。學生たちの立場から見れ

ば、學術研究の態度には、軍隊精神とは絶對に相容れないものがあるのである。それは大學に於ける學術研究といふものは、單に古來の舊學説の蒐集及び保存といふことを以て終始するに止まらず、同時に現實の諸問題に對する學理的解釋及び批判の提供といふとを意味してゐるものでもあり、更らにまた、新研究の推進及び學説の創造といふとを包含してゐるものでもある。この最後の項目は、大學に於ける學術研究上の使命の中心點でもあり、それの歸着點でもある。そしてそれは、未知の世界への不斷の探究の進行である。それ故に、それは自由かつ進歩的な創造的精神の上に立たなければならないものである。處が、軍隊の生活は、その根本に於て上官に對する絶對服從精神に依つて支持されなければならない者である。それは、古來軍隊の事實上の維持者としての支配階級が、常に社會的に極端なる保守的傾向を代表して來たといふ歴史的一般事實から來てゐるばかりでなく、本質上一種の嚴格なる階級制度の上に基礎づけられてゐる今日の軍隊生活に於ける規律そのものが、さうした絶對服從精神の支持なしには立ち行かないからでもある。この意味に於て、それは少くとも現在の軍隊に於ては、一の必要物である。けれども、それは縱し軍隊内に於てこそは如何に必要なものであるにもせよ、學術の研究の府としての學校内に於ては、場處錯誤的のものとして、絶對的に警戒されなければならないものである。少くともそれが、一たび學校内に持ち込まれる時には、そこでの學術研究の仕事は、忽ち一大障碍に逢着しなければならないことになるのである。學生たちは、この點からも、軍事教育に對して極力反抗の聲を擧げなければならない衝動を感じたのである。

のみならず、學生逹は、世間で師團減縮の必要さへ一般に唱道され、且つそれが財政計畫の必要上から幾部分實現されようとしてゐた當時の情況の下に於て、當局が突如として軍事教育計畫を實施しようとしたのを見て、本能的に、それが現在の我國の、支配階級が强硬に支持してゐる帝國主義的政策の現れであるとを直感したのである。だとすると、

それはその事だけでも單獨に、立派に一の社會問題を構成する譯になるものである。當時率先して軍事教育に對する反對の叫びを擧げた學生たちの大部分は、社會問題の科學的研究の方面に於て相當の訓練を受けたものから成立つて居たといふのが實際であつたから、彼等が直ぐにそこへ氣がついたのは、別に不思議とすべきことではないのである。で、彼等は若し右の軍事教育計畫が、我國の支配階級が、一齊に支持してゐる帝國主義的政策の一産物だとするならば、それは單に學生たち自身の問題である以上に一般の被抑壓階級若しくは無産階級に取つて更に一層重大なる意義を帶びた問題であることを看取したのである。この事は、學生たちの立場からは、別に隱し立てする必要のないことである。といふのは、彼等學生たちを含めての我國の一般知識階級が現在置かれてある社會的地位から見ても、彼等が無産階級問題に對して無關心で居ることが出來ないのは、當然すぎる當然だからである。縱しまた、それが當然だとか、でないとかの問題を離れて考へても、それは、支配階級側が勝手に捏ち上げた理論を以てしては、到底如何ともすることが出來ないところの、活きた現實の事實だからである。

けれども、學生たちとしては、さうしたことの外に尙ほ、軍事教育計畫が帝國主義的政策の現はれとして見られる以上、それが早晩必然的に、近年に於て學生間に異常の勢を以つて勃興した社會科學研究に對する壓迫を伴はないでは已まないであらうことを、考慮しない譯には行かなかつた。否、彼等の多くは、社會科學研究に對する壓迫の意圖が、軍事教育計畫そのものの目的の裡に含まれて居るものであることを痛感した。いふまでもなく、今日に於て金融資本の支配を具體化してゐる帝國主義は、資本主義發達過程上に於ける一歷史的形式として見る時は、それの最後の段階を標識してゐるものである。この點に於て、帝國主義は、資本主義の沈退期の徴候を反映してゐるものであつて、從つてその初期に於て見られたやうな自由主義とは根本的に反對の方向を指して進むものであり、且つまた、それは海外の植民地及

び屬領地に對する誅求と內地の無產階級に對する壓迫とをそれの成立上の必須條件とするところから、思想上の方面に於ても、極端に保守的反動的政策の採用に赴く必然性のあるものである。だとして見れば、軍事教育實施後に於ては、學生の社會科學研究が取り返しのつかないやうな打擊を受けるであらうといふやうなことは、誰にも容易に想像がついたことである。もつとも、社會科學の研究にしたところで、支配階級側の氣に入るやうな研究方法に依つて、支配階級側の氣に入る樣な題目に就いて遂行されて行く以上は、そこに何等の壓迫を懸念する根據のないものであることは、いふまでもないことである。けれども、社會科學研究が、それの本來の精神に依據して、純粹の科學的研究方法に依つて、任意の題材に就いて遂行される段となると、それは如何なる場合にも、絕對に安全に遂行されることが許されないやうな結果に陷らうとする危險が、その頃から次第に明瞭に現れ始めたのである。殊に、社會科學研究が、現代社會に於ける階級對立の活きた現象の檢討とか、資本的帝國主義の實相の解剖とかに向ふときには、その社會科學研究の結果として、表面上軍隊の國民化の名目の下に行はれる軍事教育も、實は階級專制の具としての效果のあるものであり、且つまたそれは、軍隊の國民化の結果を將來するよりは、寧ろ端的に學校の部分的兵營化及び教育の軍國主義化の實現に導くものだといふやうな點も明かにされ、從つて軍事教育そのものが、それに依つて一も二もなく、それの假面を剝がれ、それの正體を暴露しなければならない破目に陷らなければならないことにもなるのである。それ故に、一旦軍事教育計畫を强行しようと決心した文部省は、事の序に學生の社會科學研究壓迫の手段を講ずるやうにもなるであらうといふやうなことは、論理の當然の歸結として、容易に推斷し得られたことである。で、さうしたことには特に異常に敏感な青年學生たちは、直ちにそこに想到して、一種の危惧に襲はれない譯にはゆかなかつた。

そして、彼等のその危惧が、決して根據のないものでなかつたことが、間もなく完全に證據立てられた。即ち、學生

の軍事教育反對熱が昂騰し始めたと同時に、諸地方の高等學校内に於ける學生の社會科學研究會が、續々と當局から解散を嚴命されかけたのである。もとより諸學校内に於ては、社會科學研究會以外に、他の幾多の題目に關する幾多の研究會が存してゐるのに、獨り社會科學研究會だけに對して壓迫の手が加へられるには、文部當局の側にも相當の口實がなければならない筈であつた。文部當局としても、まさか學生が社會科學を研究するのは、支配階級の利害關係から見て許すべからざる事だ、とは言ひ兼ねたのである。それは、近代的立憲國家制度の下に、たとへ名目上だけにもせよ教育の國民性が强調されてゐる情態の下に於て、それの階級性を楯に取つて、學生の社會科學研究を壓迫するとは、彼等といへども躊躇しない譯には行かなかつたことだつたには相違ない。そこで彼等は、或は、高等學校の學生はまだ社會科學研究の能力を持つてゐないと言つたやうな、學生を侮辱し、且つ當局の教育行政上の無能力を自白するにすぎないやうな辭柄を設けたり、或は、社會科學の研究のためには相當の程度の哲學上の豫備知識が必要だと言つたやうな、自分達の無理解を廣告するにすぎないやうな、見當違ひの理窟を述べたり、或はまた、社會科學を研究する學生の行動が政治運動になつたから、社會科學の研究そのものをも禁止するといふ意味に歸着するにすぎないやうな、筋の通らない暴論を盛に吐き散らしたりなどして、飽くまでもその暴擧を立て通したのである。で、學生たちから見れば、學生の社會科學研究の禁止に際して示されたかうした高壓手段を基礎づけたところの階級的專制の精神は、同時にまた、帝國主義的政策の現はれの一つとして見られる軍事教育を基礎づけた精神でもあつた。さうしたことの表裏を充分に見透かして居る學生たちが、容易にそれに屈服する譯はないのである。それ故に、それ以來の學生側の軍事教育反對運動は、自然と學術研究擁護運動の性質を取つて現はれるやうになつたのである。

三　小樽高商の野外演習に於ける想定問題

文部及び陸軍當局は、學生側から出た抗議や、世間の反對論を無視して、遂に軍事教育計畫を實施した。もつとも彼等は、それを實施するに當つて、當初の計畫の上に多少の變更を加へ、殊に各學校に配屬される現役將校（軍事教官）を校長の監督の下に置くことを聲言し、更らにまた、該軍事教育が教育の軍國主義化を伴ふものでないことを、極力辯明することに努めたことは事實である。がしかし、我々はもとより、さうした聲言や辯明やを、そのまま信用するほど無邪氣ではあり得なかつた。けれども我々は、文部及び陸軍當局としても、相當に激烈な世間の反對論を冒してこの計畫に着手したものである以上、可なりの注意を以てそれの實施に從事するであらうから、さう早く馬脚を現はすこともあるまいと考へないではなかつた。そして我々の懸念は、却てそれがために一層高められたやうな結果にさへ陷つた。即ち我々は、軍事教育の惡影響が隱微の間に作用して、暗々裡に深化し普遍化しつつ、社會層の各方面に波及して行くであらうことを恐れて、どこまでもそこを警戒しようと決心したのであつた。

ところが、幸か不幸か、我々のこの想像さへも、意外に早く、まづ第一に、小樽高商の野外演習事件に於ける想定問題の勃發に依つて、次には間もなく山形縣の方面から傳はつて來た同種の事件の報道に依つて、見事に裏切られたのである。そのうち、山形縣で起つた事件は、如何なる理由に依つてか、中途でそれとなく揉み消されて、いつとなく有耶無耶の形に終つてしまつたが、しかし小樽高商で起つた事件の方は、同校の有志學生たちを始めとし、小樽勞働組合、小樽在住の朝鮮人、政治研究會小樽支部員、及び同會札幌支部員などの敏速な活動と機宜を得た措置とに依つて、事實の眞相が正確に突き留められ、且つ新聞紙の上にも報道される運びに立ち至つたのである。

小樽高商で起つた事件は、先づ第一に、現行の軍事教育制の下に於て、軍事教官に對する校長の監督がどれほどの範圍にまで及ぶものであるかを指示し、第二には軍事教育が教育の軍國主義化を伴はないといふ當局の聲言には、どこまで信用が置けるものであるかを表示し、第三には、軍事教育が如何なる關係に於て帝國主義的政策と交渉して居るものであつて、從つてそれが如何なる程度に於て階級的色彩を帶びて居るものであるかを暗示して居るばかりでなく、同時に當局が軍事教育の辯護のための最後の論據としてゐる國防上の必要といふ一點から見ても、それが如何に有害なものであるかに關しても、誰れもが承認しなければならないほども有力な實物教訓を與へてゐるものであるやうに、我々には考へられるのである。若しこれらの諸點のどの一つをでも疑ふ人があるならば、右の所謂『想定』を取つて一讀して見るがいゝ。で、私は、既に新聞紙上に公表されたそれを、左に再錄して、私のこれから先の批判の言葉の基礎的材料として用ひようと思ふ。即ちその想定の全文は、次の通りに讀まれるのである。——

（一）十月十五日午前六時、天狗嶽を中心とし、俄然大地震あり。札幌及び小樽の家屋殆んど崩潰し、諸處に火災起り、折柄の西風に火勢を强め、今や小樽市民は人心恟々として適從するところを知らず。

（二）無政府主義者團　　　を煽動し、この時機に於て札幌及び小樽を全滅せしめんと、小樽公園に於て畫策しつゝあるを知りたる小樽在郷軍人團は、忽ち奮起し、これと格鬪の後、東方に擊退したるが、敵は汐見台高地の天險に據り、頑强に反抗し、肉飛び骨碎け、鮮血に滿山紅葉と化せしも、獅子奮迅一歩も退かず、ために追擊は一頓挫するに至れり。

（三）小樽高等商業學校生徒隊に應急準備令下り、該隊は午前九時校庭に參集し、隊を編制す。その任務は、在郷軍人團と協力し、敵を絕滅するにあり。（十月二十日の『東京日日』參照。句讀點は本文の筆者が施したもの。）

かうした想定の下に於て、その野外演習に參加した小樽高商の學生たちは、軍事教練を受けたのである。そしてその想定が明かに在留朝鮮人及び社會思想家及び勞働運動者(原文には單に『無政府主義者團』とあつたが、無政府主義及び社會主義の區別に對する軍隊側の理解がどれほどの程度のものであるかは、少くとも一昨年九月一日の大震火災直後の慘劇を回想するものには、容易に類推し得られるのである)を假想敵としたものであることは、一目して直ちに見當がつくのである。しかも學生たちは、內心それを快く思つたと否とを問はず、一樣にそれに從つて行動しなければならなかつたのである。萬一それに反抗するならば、その理由の如何を問はず、それからの當然の歸結としての、或る種の制裁に服しなければならなかつた――少くとも或る種の不利益を受けなければならなかつた――に相違なかつたことが考へられる。少くとも、さういふことが、軍隊精神といふものに對する我々の理解から類推される。かういふ風に、苟しくも命令一下すれば、それの理非曲直を問はず、それへの絕對的服從が强要されるやうな氣風が一たび軍事教育に依つて學校內へ引き入れられると、そのことが教育上に如何に有害なる影響を及ぼすであらうかは、別に事々しく取り立てて論議するまでもないことである。けれども、問題はただそれだけに止まるものではない。――

四　軍事教育の階級性の表示

右の想定は、何より殊に、一昨年の九月一日に於ける關東地方の大震火災直後の大慘劇を追懷せしめる材料を提供したものである。當時罹災諸地方に亘つて一面に流布された例の惡辣極まる流言蜚語のために、在留朝鮮人や、日本の社會思想家及び勞働運動者たちの多數が、如何に悲運に遭遇したかは、今日に於てそれを回想してさへ、我々は一種の深刻な、悽慘な氣分に襲はれるのである。それは朝鮮人及び無產階級側の多くの人々の腦裡に於て、忘れようと

して忘れることの出來ない無限の悲痛感を印刻したものである。殊に朝鮮人及び無産階級を國賊扱ひにしたあの流言蜚語が、如何なる源泉から如何なる動機に依つて醸し出されたものであるかを考へるときには、それのための直接の遭難者であつた彼等としては、今日でも尙ほ一種の言ふに言はれない氣分に驅られるも、決して無理だとはいへないのである。これは今更隱し立てしても益のない現實の事實なのである。

けれども、支配階級としては、彼等が賢明である限りは、彼等は朝鮮人や無産階級をして、一日も早くさうした不快な記憶から脫却せしめることを努めなければならない筈である。縱し彼等が、さうした努力が無効であることを自覺してゐるにしても、――若し彼等がさう考へて居るならば、それは正しい。といふのは、それは、どのユダヤ人に取つても、往年のキシネフ事件のやうなものを忘れることが不可能だといふのと同理だから、――それにしても、今となつて態々あの慘劇を持ち出して、平地に波瀾を捲き起すやうなことをするのは、如何なる點から見ても、彼等としては愼しまなければならないことである。しかるに、小樽高商の野外演習に於ける『想定』の作者は、さうした輕擧を平氣で演じたのである。しかも、それをした際に當つて、彼は幼稚な耳にはいかにも華麗に聞える樣々の形容詞を鏤みかけて使用して、得意になつてゐた跡さへ覗はれるのである。かういふことは、軍隊内では普通に行はれてゐることかどうかは、我々の知る所ではないが、しかし我々から見れば、縱しそれが軍隊内で行はれたにしたところで、その責任を最少限度に見積つても、不穩當若しくは不謹愼の譏りを免れない筈だと思へるのである。が、それが更らに學校内へまで持込まれるとなると、それは何とも形容のしようのない暴擧だといはなければならないことになるのである。しかも當局にはさう考へられないと見えて、この想定の作者は、事件が起つてから殆んど一個月も經過してゐる今日に於てさへ、如何なる處分をも受けて居ないのである。それは、支配階級の民衆の感情に對する無知若しくは冷淡を標示してゐるも

のでなくて何であらう！

のみならず、右の想定は、軍人の一部の間に於て、今日に於ても猶ほ、無政府主義者だとか朝鮮人だとかは、將來大震火災のやうな天變地異の突發に際しては、その機會に乘じて、無辜の市民を　　しようとするやうな大それた意圖を起す可能性があるものだ、といふやうな妄想を懷いてゐるものが存在してゐることを、民衆に考へさせるに充分な根據となるものである。更らにまた、當局が今日に至るまでそれを默過して居るらしいところを見ると、當局もまた同じ妄想を懷いてゐるものでないかと考へられても、彼等に何の辯解の言葉もない筈ではないか？　若しまた、彼等が果してさうした妄想を懷いてゐるものとするならば、彼等は過去の歷史の教訓を忘れたものだと言はれても仕方がない筈ではないか？　即ち、將來のことは知らず、過去に於て、少くとも一昨年九月一日の大震火災の直後に於て、あの機會に不祥なる流言蜚語を放つて、あゝした　　　が演ぜられた端緒を作つたものは、一體誰れであつたらうか？　それは、我々には明言が出來ない。ただしかし、それが朝鮮人や無政府主義者團でなかつたことだけは、何よりも確實である。

それは兎に角、問題の想定が、朝鮮人や無政府主義者團を假想敵に擬して居るとは、我々から見れば、許すべからざる褻悛である。尤も想定の原文には、單に『無政府主義者團』とあるだけだつたが、しかし無產階級の心理からしても、また一昨年九月一日の經驗からしても、それは漠然と無產階級を目指してゐるものと感じられるのである。少くとも、無產階級中の多數者は、現にさう認定して、在留朝鮮人と共に、義憤の焰を炎々と燃え立たしてゐるのである。若し當局が、反對の結果を豫想してゐたものとするならば、彼等は朝鮮人や無產階級から、人間以上若しくは人間以外の忍辱を望んでゐるものとしなければならないのである。いふまでもなく、朝鮮人や無產階級の人々も、人間以上のものでもなければ、人間以外のものでもなく、矢張り尋常一樣の人間に外ならないものであつて、從つて彼等の問題は、徹頭徹尾人間

的の問題である。それ故に、彼等が例の想定を見て極度に血を沸かせたのも、決して不當だとはいへないのである。

この點へまで來ると我々は、當局が軍事教育を辯護する際に用ひるのを常としたところの、それは國防上必要だといふ常套語の論據の妥當性を疑はずには居られない。昔の兵家は、『天の時、地の利、人の和』を尊重した。ところが、小樽高商の軍事教官の右の想定は、千八百萬人の朝鮮人と內地人口の大部分を占めてゐる無産階級中の眼ざめたる多數者の心の裡に激怒の種を蒔きつけたことに依つて、『人の和』といふよりも、寧ろ社會的不和を激成した效果を持つたところから、國防上重大なる禍根を藏してゐるものといへるのである。それにも拘らず、その想定の作者であつた一軍事教官は、本文執筆の當時までは、まだ當局から如何なる處分をも受けて居ないのを見るとき、我々は、當局が國防上の必要から軍事教育を辯護して居る動機がどこにあるかを、怪まない譯に行かないのである。

この問題に關聯して、私の聯想は自然と、一八七八年から一八九〇年までのドイツに行はれて居たところの、苛酷のために有名になつてゐる例の社會主義鎭壓法に結び附けられるのである。この自國內の無産階級運動者を敵とする惡法の創始者であつたビスマークは、その追懷錄に於て、『社會民主々義は、現在に於ては外國より以上の程度に於て、君主制及び國家に對して一箇の戰爭の危險を意味してゐるから、それは國家の側からは、法律問題としてよりも、寧ろ國內的の戰爭問題として、及び權力問題として見られなければならないものだ』（Bismarck: *Gedanken und Erinnerungen*, III. Ed., P. 42）と述べてゐる。ビスマークは必ずしも、今日我々が使用して居る意味に於ける帝國主義を抱懷してゐた政治家だとはいへないけれども、しかし彼が放つた右の言葉は、我々から見れば、今日の各國の帝國主義的政治家に通有の心理の一面を適切に說明してゐるものである。我々は第五十議會に於て治安維持法が制定された際に於て既に、その惡法のことを追懷せしめられた。が今や再び不幸にも、軍事教育の上に起つた一事件のために、その追懷を新たに

しなければならないことを悲しむものである。

五　想定問題と軍事教育

既に述べた通りに、或る一部の人々は、小樽高商に起つた想定問題は、單にその當事者の不注意から來たものにすぎないのであつて、軍事教育そのものとは何の關係もないものだと言つてゐる。しかし我々はこの點に於てもまた、不幸にも彼等と見解を異にするのである。といふのは、先づ第一に、私が上來既に暗示した通りに、今日の我國の爲政者の全般の態度から見ても、軍事教育實施の動機がどこにあるかといふことが、我々には直感的に察知し得られるやうに思へるからである。けれども、若し、さういふことよりも一層具體的な證據を示すことが我々に要求されるならば、我々は、想定問題の責任者であつた一軍事教官が、私の本文の執筆の當時までに、當局からまだ如何なる處分をも受けたことを聞かない、といふ事實を擧げることが出來る。しかも他方に於ては、新聞紙の報道に依ると、その想定問題に關して反對の聲を擧げた小樽高商學生のうちの十四名が、その首謀者として、學校から無期停學の處分を受けたといふことである。で、今若しこの報道が事實の眞相を傳へてゐるものとすると、我々は當局のかうした理不盡な遣り方のうちにもまた、軍事教育の本質を一層明確に摑めるやうに感じるのである。無論、今後幾日かを經た後に、當局がこの問題の善後處分を講ずるやうなこともあらうとは考へられるが、しかしそれにしても、それが我々の右に述べたやうな疑念を解くには、時期が既に遲れたといはなければならないのである。

それに加へて我々は、陸軍省に於て相當に責任のある一地位を占めてゐるものとして考へられる一軍人が同問題に關して述べてゐる意見に依つて、右の想定問題と軍事教育との間の關係に關する我々の見解が、一層明確に基礎づけられ

たことをも感じるのである。即ち十月二十日の『東京日々』には、陸軍省副官伊藤少佐の右の想定問題に對する談片が載せられてゐる。それに依ると、彼はその想定を『稍々奇拔すぎる』とは言つてゐるが、それが不穩當だつたとさへも言つてゐないのである。のみならず彼は、尚ほそれに附け加へて、『學生はこんな想定を好むものである』といひ、更らにまた『陸軍省としては、想定の內容にまで立ち入つて指示するやうなことはない。たゞ大局の方針だけを示してゐるが、今度の事は別段問題にする必要はない。地方では問題になつても、陸軍省として取りあぐべきものではない。……想定は、あり得べからざるものまで仕組んで效果を餘計にあげようとしてゐる』とも言つてゐるのである。

伊藤副官は、『學生はこんな想定を好むものだ』と言つて居るが、しかしすべての學生が、『こんな想定』を好むものでないことは、單に小樽高商だけに就て言つても、それに抗議した學生が、縱し一時的にもせよ、少からず見られたといふ事實に依つて證明されてゐるやうに、我々には考へられる。殊に全國の中等以上の學生を見渡す段となると、猶更らさうであつて、そして學校の程度が高まるほど、それを好まない學生が益々多くそこに見られるのである。今日我國に於ける多數の學生の社會意識は、『こんな想定』を好むほども低級なものではない。それは、現在學生間に於ける軍事教育反對熱が、或る方面からの苛酷な壓迫にも拘らず、益々盛んに火の手を擧げつゝある事實に依つても證明されてゐる。そしてこの點に關しては私は、當局が自ら好まない種類の學生の行動を、その理非曲直を問はず、一律に高壓的に阻止するやうなことは、決して望ましき結果を産む者でないといふことを、事の序に一言附け加へておきたいのである。

伊藤副官が右の談中に於て、あり得べからざることを仕組むのが想定の想定たる所以だといふ意味を述べてゐるのは、想定ならば如何なる種類の想定をしても構はないといふ意味を仄めかしてるもののやうに我々には受取れるが、それも我々には、斷じて承認が出來ない言ひ分である。殊に學校に於ける學術研究の場合には、學生は『眞』の追求を以てその中心目的としなければならないものであるから、たとへその研究過程の上に於て、或る種類の想定が許される場合が

あるにもせよ、それはあり得べからざる想定であることが初めから判り切つてゐるやうな種類の想定であつてはならないのである。『あり得べからざる』こととか『あり得べき』こととかよりも、寧ろ端的に『ある』ことの認識に進まうとする學術研究は、極度に緊張した仕事であつて、そこでは、途中で、『あり得べからざる』ことの想定などに耽つて、道草を喰ふやうなことが、絶對に許されてはならないのである。が、假りに學術研究以外の學生の集團行動に於て、あり得べからざることの想定が許される場合があるにしても、その場合にも、その結果を考慮して掛るだけの注意若しくは思慮が、當然のことゝして學生から要求されなければならないのである。

が、若し軍隊に於てはさういふ注意若くは思慮が要求されるやうなことが決してないといふならば、それを肯定するやうな軍隊精神は、軍隊内でこそはどれほど必要なものにもせよ、學校教育とは徹頭徹尾相容れないものだといふことになるのである。それ故にその軍隊精神を學校教育の中へも引入れる道を開く可能性の充分にある軍隊教育は、學校教育上有害だといふ我々の主張が、この一點からだけでも、強く力づけられるといふ結論が、そこから生じて來るのである。また、伊藤副官の右の言葉から我々に解釋される通りに、苟くも『想定』の名の下に於てならば、如何なる想定をしても構はないといふやうな理窟が軍隊に於て許されるものとするならば、それは軍隊のためにも決して喜ばしいことではないといふことが、我々には考へられるのである。少くとも、朝鮮人や無政府主義者團が萬人の不幸である天變地異を利用して全市民を　　　　する計畫をするといふやうな想定が常に繰り返されてゐて、そしてさうした考へ方がその想定の下に行動する人々の潜意識の中に入り込むやうなことにでもなると、その結果はどうであらうか！　我々はそれを想像するだけでも、戰慄を禁ずることが出來ないのである。

けれども、さういふ事よりも、更に一層深く我々を考へさせたのは、「今度の事は別段問題とする必要はない。地方で

は問題になつても、陸軍省としては取りあぐべきでない』と述べてゐる伊藤副官の言葉である。それは、問題の想定が軍事教育の『大局の方針』と背馳してゐるものでないといふ意味を述べたものとしか、我々には受け取れないのである。また假りに、それは彼が個人として述べた言葉にすぎないものとしても、それにしても、それが當局の間に漂うて居る空氣を反映して居るものとする我々の推定を不成立にする反證が、そこに求められないのである。が、假りに我々のその推定が成立たない場合を考へても、それでも倘ほ我々は、右の想定問題に對する善後處分が、十四名の小樽高商學生の無期停學といふこと以外に、當局に依つて講ぜられたことの聞かれないことが、この問題と軍事教育との關係に關する我々の疑念を裏書きしてゐるものであることを感じさせられるのである。否、その善後處分が今後當局に依つて講ぜられるやうなことがあらうとも、それでも倘ほ、上來永々と述べた理由に依つて、我々のその疑念は、容易に解かれるべくもないのである。それ故に現行の軍事教育が計畫された當時からそれに反對して來た我々は、今日になつても倘ほ、その態度を改めることが出來ないのである。

一部の人々は、現行の軍事教育に反對するのは、國防を無視するものだといつたやうな難題を持ち出して、極端な御用振りを發揮してゐる。もとより、帝國主義を以て今日の國際戰爭の根源だと考へ、殊に現在の我國の國情から帝國主義的政策を危險視してゐる我々の國防觀は、彼等のそれとは根本的に相違してゐるものであらう。しかし、それは國防無視から來てゐるものでなく、却て國防重視から來てゐるものである。だが我々は、當初から全然その問題を離れて、單に現行の軍事教育に就いてのみ、我々の反對意志を表明して來たまでである。のみならず、我々は倘ほその上に、前に述べた通りに、國防上から言つても、現行の軍事教育は否認すべき根據のあるものだとさへも言つてゐるのである。それにも拘らず、一部の人々が、國防無視の口實の下に、現行の軍事教育反對論者を一律に誣ひようとするのは、强いて他人を陥れようとする卑怯、陋劣、陰險、惡辣な奸策としか、我々には受取られないのである。

編輯 岡本綺堂 菊池寛 中村吉藏 山本有三 仲木貞一

菊判大本全十六巻

第二版 豫約募集

現代戲曲全集

現代戲曲全集は明治大正の四半世紀に亘る我が劇壇の巨匠大家が、心血を注いだ全劇文學の精粹であり、眞髄である。言ふまでもなく、其の内容と技巧に於て泰西の名戲曲に拮抗して敢て遜色なく、殊に我が國土に生え抜きの生一本の純眞無垢なる國民的意志の體現であり、情感の發露である、雄篇傑作を網羅したる所に最大の價値がある。

第一巻 坪内逍遥
第二巻 岡本綺堂
第三巻 松居松翁 高安月郊 山崎紫紅 伊原青々園 岡鬼太郎
第四巻 中村吉藏
第五巻 菊池寛
第六巻 谷崎潤一郎

第七巻 武者小路實篤
第八巻 倉田百三 長與善郎 吉井勇
第九巻 里見弴
第十巻 長田秀雄
第十一巻 木下杢太郎 小内山薫 久保田万太郎
第十二巻 久米正雄

第十三巻 山本有三
第十四巻 秋田雨雀 仲木貞一 藤井眞澄
第十五巻 灰野庄平 島村民藏 關口次郎 近藤經一 小寺融吉 田島淳

第十六巻 池田大伍 額田六福 川村花菱 岡榮一郎 金子洋文 清見陸郎 邦枝完二 瀬戸英一 眞山青果 正宗白鳥

▲内容見本申越次第進呈
▲豫約申込十二月二十五日限

略規

▲申込金金五圓▲毎月拂込金四圓▲一時拂金六拾五圓▲外に送本料を要す▲送本大正十五年二月より毎月一冊宛

體裁

▲菊版天金▲表布製極美本▲全部九ポイント組▲紙數五百五十頁餘

東京市麹町區内幸町一丁目
電話銀座七八三・二一八八
振替東京五二二九八

國民圖書株式會社

明治社會史より觀たる農民團體運動の諸相

農學博士 小野武夫

はしがき

農民團體、其れは日本の農村社會に於ける階級競爭の表徴である。廣い意味に於ける階級は或は其從事する産業の種類により、或は住居する地域を異にする毎に、又は貧富の別によりて生るゝこともあらふが、農民團體は此の階級競爭乃至は鬪爭の道具として、又は屋臺として諸方面から生れ出たものである。此等の諸團體が明治五十年間に如何に動き、如何に變り、又は如何に流れつゝあるかは向後の日本農民問題に心を注ぐ士に取りて逸してはならぬ社會現象であらねばならぬ。

私が玆に剖析したい農民團體運動の諸相とは、無論會則のことでもなければ事務所のことでもない。況んや其幹部を組織する人材のことに於てをや。私の視野に照して見たい農民團體は、維新以來の社會潮流の中を泳ぎ來つた種々なる團體の群衆意識や、其意識の作用によりて農村社會が何程の福祉に浴し、又其福祉を享け得ぬ者の嫉みから、舊團體の足許より如何なる新芽が萌出して、舊い親木の團體を脅かしつゝあるかと云ふことを、廣い長い日本の社會を背景として、觀照したいと思ふのである。

本篇に一瞥を與へられたる讀者は私の筆の序に新興農民團體の現在の運動と、其運動意識の方向に就きて剖析と批判とを求めらるゝかも知れない。實を云へば、私の思索的興味も亦此重要問題に觸れんことを欲して居るのではあるが、紙數に制限があるのと、論辯の中心點は成る可く一論文に於て狹く深く限るを可なりする信條から、爾他の問題は姑く之を他日の機會に讓ることにする。

一 明治維新の社會史觀

徳川幕府に率ひられたる日本の封建制度が、慶應三年を最期として崩壊したるに就ては、其原因を或は內部より、又は外部より、或は又之を遠きに遡りて觀照し、更に夫れより最近の原因を討ねて此の有史以來の政治的大變革の跡を檢覈すべきであるが、私は本論文の標示する命題の範圍內に於て明治維新史の一端を概觀しつゝ專ら財政經濟及び人材の沈滯と其が勃立との兩關係に端緒を求めて觀察したいと思ふ。

封建制度は言はゞ腕力の表徵を意味する武門の階級が、一方從順にして無抵抗なる庶民を支配するの制度であるが、其の最も顯著なる經濟的特徵は土地を財政上の基本とする點にある。

洵に封建制度の成容と其れに伴ふ實質とを併せ有せんとせば、廣大なる地域の土地を占領すると共に、其占領地域に於ける人民――庶民――の絕對服從を必須の條件とする。故に封建の領主權は今日の文明國に於ける土地所有權とは著しく異つて居る。

封建領主の支配權は其領地內に於ける人民の生命及び諸々の財產の上に絕對の支配を行ひ得るのであるが、今日の土地所有權者は唯其所有權の目的たる土地の經濟的効用を收穫するに止まるのである。而して此の土地所有權の經濟的効用は、封建領主の絕對的支配權の刈除によりて始めて享有し得るに至りしことは、兩者の差異を極むるに際して忘失してはならぬ經濟史觀の行程である。

偖て封建領主が財政經濟上の基本とするものは土地であるから、其封建領主及び封建制度を維持存續するに必要なる處の武士は、一に其の生活の根據を土地に置かねばならぬことになる。而して其土地の生產物としては固より農產の外にないのであるから、一方に於ては成可く此農業生產に從事する百姓を拌りて自分階級の生產を豐かならしめんことに力むると共に、又餘り搾取し過ぎて武士の生活の支持者たる百姓の骨と肉の枯渴することを防ぐの必要があつた。後世の歷史評論家が封建治下の農民を以て或は大に虐待せられたと云ひ、又は頗る愛護せられたと云ふのは、何れも其兩極端を捕へての評論であつて、實際には彼等は或は虐使せられ、又は愛撫せられてゐたのである。夫の有名なる水戶烈公が自製の農人形に寄せて

朝な夕な飯食ふことに忘れしな
　惠まぬ民に惠まるゝ身は

と詠じたる歌詞の意は、功利觀念を離れたる純眞なる農民愛護の思想に充ちて居るようではあるけれども、「然らば何故に絕對權ある封建君侯たる烈公は、惠まぬ民に惠まるゝことに感謝

の意を表したのであるか』と反問せられたならば、必ずや『百姓無くては生きられぬ故に』と地下に答ふるであらふ。今日の道德家先生等は克く烈公の農人形と此の歌詞とを以て封建領主の崇高なる倫理觀の代表的象徴として稱讃する傾があるけれども、其さに封建制度の社會階級性と、封建武士が農民階級に對する經濟的依據性とを洞觀して見るならば、農人形と其歌詞の半面に潛む封建王侯の經濟的寂寞と空虛の悲哀とを感ぜぬ譯には行かぬであらふ。此の寂寞と空虛が永い年月の間に積り積つて最後の悲哀に導かれたものが、夫の明治維新史に對する經濟的說明の一端である。

封建王土たる列藩の領域を支配する力の原泉は其の封建的に積み上げられたる組織其者の威力である。此の威力を行使する表面の形式は諸法度であるけれども、法度の背後には鋭い劍の光りと、斷獄の牙が控えて居るのである。然るに此の鋭劍や斷獄は使用せざること久しきに及ぶが、又は用ふること餘り屢々なるに於ては、其の威力の大半は失はれて仕舞ふばかりでなく、其劍を振り、牙をむき出す上級社會の尊嚴を疑はるゝようになる。實に德川時代の中葉以後に於ける武士は永年に亘る太平に馴れて、尙武錬魂の風を失ふて、腰拔けとなり、一旦事ありても物の役に立たなくなつたばかりでなく、徒らに百姓の上納する貢米に座食したる結果、體力智力共に衰へて、封建社會の支配者たる實力は漸く消耗し行く有樣となつた。斯る風潮は武士階級の上層に至れば至る程甚しく、遂には日本全國二百七十有餘の諸侯を通して「大名小名安本丹」の綽名を以て呼ばるゝ程にまでなつた。

智能の退萎した武士でも、腹は腹で背には更へられず、食ふ物は食ひ、着る物は着ねばならぬのであつたが、德川時代の中葉以後、夫の參覲交替制度を最も著しい其原因の一として、江戶大阪の文化は續々と各藩の城下町に輸入せられたので、武士の生活程度は日に月に膨脹し、爲めに上に於ては一藩の財政困難を來し、下は各級藩士の生活難を導くに至つた。斯る財政窮乏と經濟逼迫に際しても、唯一の財源をなすものは唯其領內の農產物のみである。即ち封建制度の特質たる土地經濟力を全幅に作用せしむることによりてのみ、彼等の飢餓と生活用度の不足は補充せられたのである。列藩の苛斂と誅求は斯る處から手代へ品代へして各方面に行はれたのであるが、百姓が其苦みに堪え得ざるに至るや、或は一揆を起して抵抗し、又は密かに其領內を脫出して他領の救助を受くるのであつた。

一見尨然たり、又整然たるかに見えたる封建制度は其頻發したる百姓一揆の爲めに、又は江戶大坂あたりの町人に負ふたる

負債の爲に、時に或は內部より、又は外部より其の衰頽の眞相を暴露しつゝあつたのであるが、德川時代の晩期に至り、海外諸國よりする通商交通の强促と、百姓一揆の有機的統制運動とも見るべき夫の列藩志士の倒幕運動とにより、遂に七百有餘年の永き間、日本の國家を支配したる封建制度は、德川氏三百年の治世を最期として、慶應年度に崩壞して仕舞つたのである。

封建制度の崩壞は土地經濟時代の終末を意味する。政治的に云へば、法度と劍の力で支持したる武士の社會支配力が刈除せられたのであるが、更に之を經濟的に云へば、土地の上に勞作して得たる生產物の大半を搾取して居た支配階級の滅亡したるより、土地の上の實際的勞營者は原則として其處に新なる快明の天地が開き與へられた譯であるのに、此原則的土地經濟上の勞作者の中から、明治維新後間もなくして、新なる二つの階級を分生し、其中の一方は、昇天の勢を以て上方に進向して商工階級と抗爭し、他方は遲々として進まず、却て舊位置に取り殘されて昨日に變らぬ闇晦雜遝の生活に甘んぜねばならぬ境遇に置かれたと云ふ處に、明治農民運動の基礎があり、凡べての農村社會問題は此の機微の裡より發足し、爾後一伸一張を續けて今日に及んで居るのである。

二　商工階級の擡頭と農民團體の起生

封建制度が倒壞して粉微塵と碎けた後に現はれ出て、新日本の建設運動に着手した者は既に前年來より國の東西を奔馳して諸國の志士と脈絡を通じて居た所謂足輕級の浪人である。木戶孝允然り、大隈重信然り、西鄕、大村、大久保の諸將に至るまで悉く封建治下に於ては頭の上らぬ連中ばかりであつたが、今や彼等は其幼少より經學を學び、兵法を習ひ、且つ絶えず諸國同志の間を來往した爲めに、才智縱橫に發達し、時務に明るく、政治革命後に於ける一國文明の進運を誘導する大船の舵機を任せられても敢て引けを取らぬ天晴れなる智勇兼備の青年政治家で、夫の永年の間溫室の中に安置せられて、美衣と美食をあてがはれ、水太りに肥つた舊大名や、小名や、家老等の鈍頭なのとは迚も比べ物にならぬ俊豪であつた。

此等の俊豪が明治新政府の廟堂に立て新日本の建設運動に着手するに當り、第一に必要を感じたのは其政治施行の費用たる財政收入を如何に求むべきかであつたと共に、自分等の政治的活動に要する費用を誰の手から捻出せしむべきかであつた。此點に就て彼等青年政治家が第一に着目したのは町人階級であつた。町人階級には或は旣に德川時代より其大を成したる三井、

鴻池、住友、藤田等があつたが、此等の豪商は今姑く之を別とし、各地方に存在する大小の商人階級の發達と膨脹を促して新日本の經濟的基礎を確實にすることは、先づ彼等青年政治家により最初に着眼せられたる財政經濟政策であつた。

國の内部に於て斯の如く當面の必然的要求に促されて新舊町人階級が明治新政府より保護を受くべき境地を與へられたばかりでなく、更に國の外部よりして資本主義文明の風が、或は亞米利加から、歐羅巴から、續々と輸入せられつゝあつた。當時日本の政府から海外視察の命を受けて歐米に遊んだ者は尠らずあつたが、彼等が故國を出づる時には其思想は半はチヨン髷、半は洋服姿であつたのが、一年二年の後に視察を終へて歸朝するや、彼等は既に內實共に歐米文明の心醉者と化して居つたから、此等の新人が新政府の要路に入つて或は經濟政策に、文教政治に參與するに至れば、一にも二にも歐羅巴風の文化を日本の國土に植え付けねば止まぬと云ふ思想を懷くに至つた。斯の如くして國內に於ては新政府の財政收入及び青年政治家の活動費を町人階級に求めざるべからざる必要に迫つて居た際、歐米より齎らせる資本主義文明の燦爛たる光彩が若き日本の政治家の心境に輝いたから、封建制度の倒壞後に於ける庶民階級としては、町人一派が最早く新社會の廣居に運び出されたのである。

斯くて明治維新の當初、新日本の政治の筵は所謂浪人級たりし青年俊豪と明治町人との結托誘掖によりて建設運動への洋上に其大船を乘り出した。顧へば昨日迄の封建諸侯は財政經濟の基礎を其領域に生產する農產物によりて維持し、農民の奉仕的給付に依據することにより其命脈を保つことを得たのであるが、今や明治新政府の政治家は早くも町人階級に眼を注ぎ、町人を保護し又は之と結びて、其の仕送りと貢獻に待ちて財政經濟の遣り繰りをすることゝなつた。洵に何れの時代に在ても、政治と經濟とは相離るべからざる關係を有するものである。劍の力を以て天下に霸を稱ふる封建君主も、智と實力を以て廟堂に立ちたる明治の新專制政治下の青年政治家も、均しく何れの處にか自己の血と肉とを培養すべき經濟力を發見せざるを得なかつた。唯封建時代の列侯群伯が土地と農民とを其米櫃としたるに反し、明治政府の新政治家が通貨經濟の勞營者たる商人に求めたることに於て兩者の差異があるのである。語を換へて言へば、土地經濟時代が終末を告げて、貨幣經濟全盛の時代が今や當に其の幕を開いたのである。

新政府の要路者が市府の町人に對する保護と誘導とは種々の方面に向つて加へられた、其或者に對しては所謂士魂商才を鼓

備したる番頭を振り向けて新商業主義に順應せしめた。此際前來からの舊町人は百萬千萬の巨富は擁して居つても、何れも皆舊式の大福帳式の前垂掛けであるから、新時代の資本主義經濟社會に棹すには其力が足らないから、新人材を自分の圏外に求めざるを得なかつたのであるが、此の人材供給に對しても明治新政府は相應の助力を致した其れのみならず、政府は此等町人に或は政府の事業を請負はしめ、又は其事業の或ものに對しては國庫より補助して其の進運を促した。廟堂の大官と民間の政商との密約結托の悪弊は斯くして多く此間より其の端を發したのであるから、此等市府の舊豪商と對立の地位に立たねばならぬ地方の大地主等が此事實を閲睹して大に不快を感じ、藩閥政治の弊失を數へて之が覆滅を企て始めたのも無理ならぬことである。

背後に町人を擁し、此町人の援助と支持を受けつつ新日本の建設運動を力行したる明治政府に對する最初の障碍は民權運動の突發であつた。民權運動は明治七年民選議院の設立請願を手始めに、各地に於て大小の事變を引き起し、明治十三年には自由黨の組織成り其綱領としては「自由を擴充し、權利を伸張し、及び之を保存せんとする」に至つたのであるが、此の自由黨は土佐の板垣退助を盟主とする全國の大地主が多數に包容せられて居つたことは、事實である。地主と云つても唯の平百姓の土地所有者と云ふのではない、封建時代に其郷藩に於て苗字帶刀を許されたる田紳級の郷士である。彼等は藩制時代に於て一方には領主又は幕府より武士の待遇を受けると共に、一方には自作し又は其所有地を小作人に耕作せしめながら、或は村の政治に與り、又は藩廳の役人と來往して居たから、封建治下の農民としては最も才智あり、且つ經濟上の實力を具有するものであつたが（拙著「郷士制度の研究」參照）今や明治維新は成り立つたけれども、政府の要路は唯一、二の舊藩の閥族によりて占有せられ、全國の人民は此等少數政治家の酷使と濫費を傍觀しなければならぬ境遇に置かれたから、一日も早く立憲制度を確立し、普く全國の人民に參政の權を許與すべしと云ふのであつたが、其聲は幸に上に聽かれて、明治十四年には國會開設の**詔勅が發せらるゝに至つた。此の自由黨の主唱する政治運動の中には多分に農民的色彩と分子とが含まれてゐたことを忘れて**はならぬ。後年自由黨を燒き直し、之を地方の地盤として組織したる政友會が常に自ら日本の農民黨を以て任じて居たこと、慶應義塾の分子を尠からず包含したる夫の改進黨が、大隈――明治初年商人を保護し之と結托して其地歩を築き上げたる――の系下に集つて商工的色彩を發揮したることゝは、正に相反する

民衆運動の時代的特色として見るべきである。

藩閥を向ふに廻して戰はんとする政黨中、自由黨は多分に農民的色彩を帶び、改進黨は商工的色彩を帶びて兩者の間の經濟的特色は最初の間甚しく異つて居るやうに見えたのであるが、明治二十二年に憲法が發布せられてから後は、政府と政黨と相接近し、殊に自由黨の盟主たる板垣と改進黨の盟主たる大隈とが握手して内閣を組織したる明治三十年前後に至るや、在野黨の幹部も天下を取るには大小の町人と接近して彼等の援助を待ち、且つ資本主義國家の政治を運用するには自ら商工業者の勃興を促すことの餘儀なきを看取したから、其立案に係る百般の政策は概ね商工業に厚くして農民に薄しと看做さるゝに至り、遂に此頃より全國の農民——地主——は地租輕減を政策の眼目に數へて農民運動を開始するに至つた。顧へば明治維新の革命後新政府の組織者の藩閥的專恣を見るに見兼ねて屈起したる自由黨の群集心理の働きは、專ら民權獲得なる政權普及運動の一點に集中せられたのであるが、其の黨員中に尠らざる有爲有能なる地主が參加して居たと云ふことは、徳川時代に於ける村落文化の啓沃により育成せられたる舊田紳の活動舞台が時代の推移によりて新に開けたと云ふべきである。舊城下町の貧乏士族も新政府に對して不服はあるものゝ、彼等は永年の間型に嵌つた城下の勤仕生活に囚はれて新社會に活動する丈けの能力を有せず、且つ皆な貧困にして糊口に追はるゝ徒輩ばかりであるから、金錢を消費することと最多き政治運動に參加する丈の實力を缺いで居た故、維新後に於ける民權運動の中樞は勢ひ地方の大地主等によりて行はれざるを得なかつたのである。然るに一旦立憲政治成るを告げてから、政黨競爭の方向も自ら轉變し且つ永年の政治運動に馴致せられて、或者は官僚に接近し、又は其の黨與となり、曾ては單に其片鱗をしか現はして居なかつた商工愛護の色彩が、政界の上下に瀰漫するに至つたから、茲に全國の地主は政黨を離れて純然たる農民團體を組織し、仍て以て一方に於ては政黨と握手して之を利用すると共に、他方には全國農村の有志を糾合して其等を大にすると云ふ氣運を醸成したのである。

封建制度の桎梏より解放せられたる全國の農民が自由黨の民權運動によりて民衆的策動の手段を學び、更に其政黨の官僚的、都市的、商工的墮落を嫌厭して民間に農民團體を起生せしめたる處に明治日本の地主運動の源泉的發端が存在する。

三　明治農民團體發生の事情

明治初期に於ける農民團體運動起生の原因は二つの方面から

親察の歩を進め得る、一は前來詳論した處の對商工運動への初期現象として現はれたる政黨運動の農民的色彩と、他の一つは農業界それ自身の營利心より起りたる重農主義を標榜する團體運動である。前者の場合に於ても、後者の場合に於ても、其運動の進む方向は何れも時の政府に對する有形無形の保護援助の要求と一般社會に對する自己の立場の闡明及び了解の要求とであるが、此の二つの運動形式は時日の經過するに從ひ時に或は單獨に策動して社會の耳目を聳動し、又は兩者互に混融して一體を成せる場合がないではなかつた。

日本に於ける農民團體が兎にも角にも一個の纒りたる形式を成すを見たのは、明治十四年に於ける大日本農會の組織である（「全國農事會史」）。此年第二回內國勸業博覽會が東京に開催せられたる際、之を機會に東京に集りたる全國農談會や、下總牧羊場卒業生の組織せる東洋農會や、駒場農學校現業科卒業生から成る混同農會や、勸農局員や三田育種場員其他によりて組織せられたる東京農談會等の四農會を打つて固めて大日本農會を組織したのが、明治新社會に於ける日本の全國的農業團體の嚆矢である。斯く大日本農會は其の創立當時より既に日本の有志團體たるの特徴が明瞭に示されて居る。此の農會が既に有志團體のことであれば、一面に於ては學術を硏究する學會でもあり、農業技術を普及する講習所でもあり、又將來の農業界に事を起す相談所たる農業倶樂部の用をもなすものであつた。新日本の政府も社會の組織も未だ充分に固つてゐない當時に於て、田舍の大地主中の名望家が自由黨の民權運動に夢中になつて奔走して居た際の明治十四年頃に、早くも大日本農會と云ふ有志團體が東京に組織せられたことは、新日本の農民運動の將來ある胞子として特筆するに足る重要の出來事であつた。

僅か十五年前迄は百姓が集會をすれば徒黨の罪に問はれ、陳情をすれば强訴の故を以て斷獄せられたのに、維新後間もなき明治十年代に農民が臆病顏をしながらも、農業團體の一つも創設して見ようとの氣を起したのは、極めて漠然たるものではあるが、其頃既に深く商工界に食ひ込んだ資本主義の企業營利熱が田舍の人の頭腦を刺戟し始めたからである。即ち程遠からぬ前までは、土地は持つて居ても税が高くて利にならず、封建制度と云ふ四手八手の搦めの爲めに田舍の社會では唯土を掘つて漸く其日の糊口を凌ぐに過ぎざる有樣であつたのに、今や土地を買へば地價は年々騰貴する、儲かる作物ならば何を植えようが、お上の咎めは無し、隨て金が儲かれば思ふが儘の生活を營み得ることゝなつたから、田舍の村にも永い間の嚴冬の後に春陽の溫風が吹く樣に、百姓の心頭に營利享樂を欲する意識の芽

が崩し始めた。東京の眞ん中に僅に田舍人の意志を代表する少數の有志ながらも、大日本農會と云ふ全國的團體が創立せられたのは、時代の潮流に投ぜんとする若き日本の田舍人の心意氣の迸りからであつた。

此頃は日本の農業界は所謂老農全盛時代で、泰西農學は札幌農學校や、駒場農學校あたりで既に教授せられては居たけれども、未だ一般に普及するに至らず、農業技術にかけては宮崎安貞の農業全書、農政にかけては佐藤信淵の諸書を祖述する故老の學問が重んぜられて居つた、故に大日本農會が農業技術を普及せしむるには各地の老農を連れ出して諸國を行脚せしむる方法を取つた、前田正名や、樋田魯一が石川理紀之助や、中山太一郎等を引き廻はして講演旅行を遣つたのも此頃であるが、其後間もなく泰西農學、殊に獨逸農學が蔚然として日本の農學界を風靡するに至て、此等の老農家は曉天の星の光の如く其影を潜め、其業績も亦忘れられて仕舞つたのは、近世の日本農學史上の激變を語る一の悲痛事である。讀者若し秋田に遊ぶの日あらば、一日其杖を南秋田郡山田村の石川理紀之助翁の遺跡たる山莊の書庫に曳け、其處には明治老農の第一人者たる村落の大天才にして絶倫の精力家たりし石川翁が六十年の生涯の間に德川時代の農學農書を師として研鑚を積み、遂に一家を成して其學風一時全國を風靡し、然かも間もなく泰西輸入農學の壓倒を受けて無慘にも其著書と業績が今堆塵の裡に埋れて哀泣し居る狀を見るであらふ。

實に明治初期の文明史も、社會史も、經濟史と年又年と激變激化を續けて居る、政府の下す命令布達が朝令暮改であつたのは未だ好いとしても、社會狀態が五年、十年にして移り行く其樣は、到底他の日本時代史の何れの部分に於ても見ることの出來ぬ現象であつた。

明治二十三年に前田正名は農商務次官の地位を棄てゝ民間に下り、大日本農會の幹事長として農民運動の先鞭を着けたが、彼は此頃よりして、既に所謂系統農會の組織に着眼して居たと云ふことであるが、其の機會は未だ熟して居なかつた、何となれば、當時中央に於てこそ大日本農會と云ふ如き團體が出來、僅に中央の學者や有志の者が集つて農民の團體運動の必要なることを感じて居たけれども、地方縣郡の方では未だ其れ程に進んで居らず、況んや、村々の百姓は農會の字の意味も判らぬ程であつた。故に系統農會の組織は稱へられても、實行の機會は容易に到達し得なかつたのである。

然るに明治二十七年に至り、日清戰爭と云ふ大事件が突發して日本の經濟界にも非常なる影響の及ぼされることが豫期せら

れ、且つ十數年來極めて漸進的ではあつたが、地方的農會が彼處此處に設けられて居た等の事情により、既設大日本農會に對立すべき全國農事會の創立が實現せらるるに至つた、是れ日本に於ける民間農政團體の濫觴を成すものであつて、今の帝國農會の前身である。

明治十四年に大日本農會が創立せられてから明治廿七年に至るまでには十三年の日月を經過し、此間に於ける此の農會の事業の成績は相當に見るべきものあり、又其基礎も漸く鞏固となつて居たに拘らず、此の大日本農會以外に更に別に全國農事會なる團體を設くるの必要が何故に起つたかと云ふに、其れには深い理由がある、元來大日本農會は田舍の大地主が民權運動と云ふ如き、藩閥政府に對する封建制度の餘臭の刈除を絶叫しつゝあつた頃に創立せられた丈けあつて、其設立の動機及び其の發起者の思想は單純に農業の進歩發達を圖ることに在つて、其が團體運動を以て日本農民の國家的存在の重要さを宣傳しようとか、又は政府に農民保護政策を實行せしめようとかする如き處まで其手を伸ばし得ず、何處までも、學會的又は倶樂部的に仕事をして行かふと云ふ態度が濃厚であつた故に、大日本農會は日本の農界に必要のある種々の會や組合を製造する機關としては甚だ適切なる組織であつたけれども、此農會が所謂農民運動の衝路に立て世間の荒風に揉まるゝには甚だ適當ならざる組み合はせになつて居つたのである。

全國農事會の創立せられたる當時、大日本農會を燒き直して全國農事會に併合するの意見があつたかどうかは私の知る處ではないが、當時の有志の中には少くとも此の問題に就て考慮するものがないではなかつたらうと思はれる、其れは後年帝國農會が全國農事會に代て農會令の中に公認せられた際、大日本農會との間に於ける事業の範圍に關し、兩團體併合問題に就て二三子の意見のあつたことにより類推することが出來る。否た是のみならず、日本の蠶業界に於て恰も帝國農會と大日本農會との間に於ける如き關係にある大日本蠶糸會と蠶糸業同業組合中央會とか近年合併非合併論で永く保ち合て居ると同樣の關係である。而して合併の不可能なる理由の中には既存團體の有する財産や、幹部の處分問題や、其他色々の感情等もあることであらふが、要は既存團體の歴史的存在性、即ち其會を創立したる當時、之が存在を必要ならしめたる社會的要求が新團體設立後に於ても尙ほ存在するものたるに過ぎぬ。大日本農會が爾後三十年の間迂餘曲折を經ながらも益々膨脹し、殊に其經濟に係る東京農業學校を最近日本唯一の私學として今日の盛大に盛り立てた功績は、向後幾久しく此會の必要を世間に認識せしむるに

充分であらふ。

斯くて大日本農會を母胎として生れ出でたる全國農事會は如何なる仕事を以て其會の存在の價値を世間に知らしむることを得たかと云ふに、其れは取も直さず、所謂農政運動を以て全國の農民を率ひ、依りて以て時の政府に農業尊重、農民保護の政策を實行せしめ、其結果として當時既に政府部内及び政黨員間に漸く其空氣濃厚となつて居つた商工偏重の政策を矯正せしめようとするのであつた。

實に此の全國農事會は今日の系統農會の中樞機關たる帝國農會の前身であるが、前身とは云ふものゝ、此全國農事會は單に中央に一ツ設けられたばかりであつて、地方には府縣農會、郡農會等が未だ遍く設けらるゝに至らず、假令設けられてあつても、萎微として振はぬものばかりであつた。元來農民團體の如き地方農民を根據とするものに至ては、先づ村々の農民を教育して其會を組織せしめ、其の基礎の漸く堅固となるに從て郡市農會を組織せしめ、夫れより更に府縣農會に及び、最後に中央農會の編組に及ぶが至當の順序であるのに、當時地方農民の智識が充分に熟しない前に俄に上の方から先きに系統農會を組織したから、今日に至るまでも農會は同じ系統組織を有する團體でも、夫の中央金庫を中央機關とする產業組合の方より餘程其內容と重味が劣つて居る。固より農會と產業組合とは甚しく其性質を異にするけれども、產業組合に在りては地方的組織を先きにして中央組織を後にし、中央金庫を最後に設けたのに反し、農會に在りては中央機關が眞先きに出來、地方農會は後から之に結び附くると云ふ風にした點に於て、兩者の間に差異がある。

偖て全國農事會設立せられてより、每年總會を開いて或は決議をなし、又は建議を政府にしたのであるが、是より後日本の農界に在りては此の全國農事會が中央の眼目となるに至つたのである。顧へば明治の初年地租改正の行はれたる際、各地の地主は政府の定めたる地租率の百分の三が高過ぎるとて暴動を起し、其結果、明治十年に至り詔勅を以て百分の二半に低減せしめたのであるが、今や憲法發布せられ、暴力を以て事を決するの必要なきに至つたから、農民團體運動を以て一方には政府に其意を陳辨すると共に、各政黨の黨員を動かして農民の利益を圖らしむるように策動せんとするのである。其結果として商工界の豪富者は明治初頭以來歷代の政府の大官と結托し其保護の下に思ふ存分の活躍をして來たのであるが、今や全國農事會なる農政團體が出來て、或は政黨を動かし、又は政府に重農政策採用の議を強要するに至れば、直接間接に彼等の蒙る影響は少

らざる有様となつた、即ち全國農事會の企てたる農民運動は直接には農民自身の利益を增進せんとする地主等の農政運動機關ではあるけれども、間接には政府を牽制して商工政策に薄く農業政策に厚からしむるように誘導しようとするものであつた。後年商業會議所を策源地とする商工團體が營業税全廢運動を以て帝國議會を動かさんとすれば、帝國農會の別働體なる農政團體が地租輕減を以て政府に迫り、以て間接に營業税全廢運動の効果を稀薄ならしめたる如きは、兩者の對立關係を最露骨に現はしたものである。

其後明治三十二年に至り農會法發布せられ、翌三十三年には農會令を發布し系統農會の法律的統制を行ふに至つたのであるが、此農會法の規定によりて政府が毎年十五萬圓以内の範圍に於て補助金を農會に交付することゝしたのは、當時に於ける農民運動の一大獲物であつたらふ。然しながら、斯くして系統農會は組織せられても、法律に認められたる系統農會は道府縣農會以下の農會であつて、全國農事會を系統農會の主盟として法律の中に加へなかつたのは、當時に於ける全國農事會の實力が法律以上に重きを成して居つた關係であつたらうが、後ち明治四十三年に至り農會令の改正により全國農事會をも法律上の系統農會に加へ、其名を更めて帝國農會と改めて今日に及んで居るのである。

顧來れば、明治の初頭以來地主を筆頭に戴く農民運動は一時は政黨の分子に加りて民權運動を助け、其運動效を奏し、立憲制度が完成を告ぐるや、彼政黨員や政府によりて立案せられたる政策が重商主義に流るゝを遺憾として、遂に明治二十七年既に農業有志團體たる大日本農會を母胎として全國農事會を創設し、此の農民團體の誘掖によつて系統農會の組織を促し、遂に法律を以て之を統制し、國庫の補助金までも支出せしむることとなつたのであるが、其運動に參加する地方の有志も亦農會の議員も皆土地所有者たる地主であることを忘れてはならぬ、此等地主の唱導する農民運動に引きずられながら、何等の不平も不滿も漏らさずして、明治の全時代を通り越した者は自作農以下小作者を含む全國數百萬の小農階級であつたのである。

四 農民團體の縱列的發達

明治新政府が其財政經濟の大方針を資本主義に取り、百般の立法行政悉く資本主義を基礎として施設せられたるより、新日本の財政經濟界に於ては財産と個人の營利心とが結合し其裡より生ずる利潤は更に後日の資本となりて新事業の發達を促すと共に、資本主義によつて得たる利得が個人の享樂に寄與するも

の甚大なりとの體驗は社會の上下をして彌々益々營利心を發揮して資本の增殖に專念せしむるに至つた、斯の如くして世は滔々たる資本主義萬能の時代となり、資本を全く有せざるか、又は之を有するも資本維持又は增殖の能力なきものは爲めに社會の經濟的弱者となつて飢渇と窮乏の苦痛に泣かざるを得なくなつた。

上は日本政府の施設に於て、外は歐米諸國より斯くも洪水の勢を以て押し寄せ來る資本主義經濟の風潮に乘じ、其甘味を逸早く攝取して我物になさんことを企てたものは農村社會に於ては土地所有者たる地主であつた、此の地主階級が資本主義の風潮に乘じ得るには二つの大きな好條件が與へられて居つた、二つの條件とは彼等が既に土地資本の所有者であつたことが即ち其れであるのであるが、更に他の一つの條件は彼等の多くが德川時代よりして村の有閑階級として學問を爲し、且つ渡世の上に必要なる訓練を經て居たから、克く世間の事情に通じ、自分等より低劣なる智識の持主を押し除けて利益を獲得し得る才力と能力の所有者であつた。其餘りに才あり、智ある者が政黨狂ひをして資産を蕩盡したことは別とするも、其他の地主は皆農村社會に於ける才あり、智ある有産者であつたのである。洵に智識と學問とは有閑階級――資產の給付力に依賴して自ら勞働するを要せぬ有閑階級――によりてのみ享有し得られることは何れの時、何れの處を通じても見るを得る現象であつた。

新日本の農村社會の有閑、有識、有產階級である地主及び其他の物持が新日本の經濟社會に或は個人として又は社會人として優等の地步を占むべき方策として先づ第一に考へ出したものは自分等同業者の團體であつた、團體運動は全社會の中に置かれたる楯である、鉾である、軍隊の戰術に譬ふれば奈翁の所謂分進攻擊法である。其生產と、利害と、感情を等しふする同業者が相集りて或は時の政府に肉薄し、政黨を誘導し、又は自分等の營利的企圖の妨碍をなすものがあれば、之を打止して初一念を貫徹せんとする處に團體運動の眼目がある。團體運動は其團體を中心としたる、排他的且つ自己中心の取込み主義に其特色が存するのであるが、然も其は個人の營利的、排他的經濟心理が群集心理に反映して現顯したのであるから、何れにしても、資本主義的經濟社會の所產たることに違ひは無い。

斯くして明治十四年に大日本農會が生れ、翌けて明治十五年一月には大日本山林會と大日本水產會が生れた、此三つの會が一つ棟の下で事務を取つて居つたので三會堂と云ふ「ビルデング」が赤坂の溜池にあつたのは明治初期に於ける農民團體の縦列的分立主義の萌芽の名殘を語る歷史的遺物として見れば面白

い。其後茶業組合中央會議所なるものが大谷喜八郎や大谷嘉兵衛等により明治二十一年三月に設立せられ、越えて明治二十五年四月には大日本蠶絲會が生れ、明治二十七年には既設の全國農事會が生れ、明治三十八年には産業組合中央會が創立せられ、更に其後に至り大正四年七月には中央畜産會、同年十月には蠶絲業同業組合中央會が設立せられた。當に日本の産業界に於ける縱列的團體の全盛時代である。今吾人の記憶力を集中せしむる方便の爲に、此等の諸團體の設立年月日を年代順に列記すれば

明治十四年	大日本農會
明治十五年	大日本山林會
明治十五年	大日本水産會
明治二十一年	茶業組合中央會議所
明治二十五年	大日本蠶絲會
明治二十七年	全國農事會
明治三十八年	産業組合中央會
明治四十三年	帝國農會（全國農事會解散）
大正四年	蠶絲業同業組合中央會
大正四年	中央畜産會

此等の諸團體が其會則の初頭に於て稱へ「[illegible]を圖り」と云ひ「林業」又は「水産業」の進歩を企圖せんと云ひ又は「蠶絲業者の利益を增進せん」と云ふ其の集團心理の働きの裏面には日本の田舎の有閑、有識、有産者が、各々其特殊なる團體を組織し、之を國内又は海外に對する經濟的、政治的競爭の武器として使用するのであるが、斯く縱列的に組織せられたる團體構成員の下には多忙にして無産無識なる小作農夫があり、樵夫があり、炭燒があり、漁夫があり、養蠶家あり、牛飼あり、馬飼があつたのであるけれども、彼等は未だ長夜の眠りから醒まされる機會が與へられなかつた、設令若干は目醒めても、其聲を大きくして自分等の利益を主張するには餘りに多忙であつた、随つて社會の新なる潮流を認識して起つ丈けの智力と資力が與へられて居なかつた。

思ふて玆に至れば、明治時代の資本主義制度下に於て日本の政治、立法、産業、教育、其他が斯くも長足の進歩を遂げたのは、徳川時代に於ける文化と教育と經濟的潜勢力が多分の原因を成して居るのである、明治時代の文化を明治の人物によりてのみ建設せられたと觀るのは、文明潮流の史的因果を解せぬ謬論であると同時に、明治時代の農民團體が縱列的に分立し、其の分立したる各團體の下敷きにせられて五十年の永き間動かず、從はず、黙々として上層運動の産業階級に信を置きて[illegible]

に隨從し來つたのも、同じく徳川時代に於ける文化と教育が庶民に薄かつた其所產に過ぎぬことを知るべきである。此間隙、即ち明治維新が單なる政治革命を以て終始し、社會階級の解放に及ばなかつた其間隙に乘じ、明治產業界の上層者が其の下級者を下積にして各自に創設したる團體内に割據しつゝ、排他的直進運動を續け、其結果必然的に上層者にのみ厚くして、下層者を下敷にする事實を下層者は目擊しながらも其の眞相を知らず、知つても之が革正を策しようとする力が彼等に與へられて居なかつた爲に、縦列的農民團體が斯くも林の如く分立するに至つたのである。

五　農民團體の横列的分立

明治文化の啓沃によりて發達したる資本主義社會の半面の現象として組織せられたる農民團體は斯く其の時代の有產、有識の者の誘導と施置によりて頻りに縦へ〳〵と別れて分立したのであるが、明治五十年の歲月の間に國家が施したる夫の國民教育や、國民各自が習得したる自我意識の覺醒によりて、是迄上層階級者が先導となつて行ひ來りたる縦列運動に慊らなくなり、遂に自立展開の運動を起して舊存團體の基礎を動搖せしめんとして居る。

勿論日本の資本主義政府の下に施されたる政策や教育は殆んど全く資本主義的政府と社會を維持するに都合の好いものばかりであつたが、其れでも下層社會の貧民は其の資本主義的なる社會の團體から多少ずつなりとも反資本主義的なる肉や血を吸收し、他方全々反資本主義的なる思想や生活方便を或は海外から、又は日本内地同胞の行ふ啓蒙運動により引き立てられて、其乳臭い赤兒から次第に生長して今や獨り立ちの出來得る迄に成育したのである。

獨り立ちが出來る丈に生長して見れば、今迄彼等の氣附かなかつた種々なる農民運動の現象は、彼等の利益を圖る爲めの機關では無くして、彼等を踏臺とし、彼等の勞働と生產により其生を維持しながら、其生產の國民的寄與を却て上層者自身の成果でもあるかの如くに吹聽することに不滿を懷かざるを得なくなつた。地主を其の構成者とする系統農會の中樞機關たる帝國農會が、毎年の總會に於て地租の輕減と米價の吊り上げを行事として居る矢先に、全國の小作組合を統制せんとする日本農民組合が成立したのは、社會進化の理法を辨へぬ地主等には青天の霹靂であつたかも知れないが、事實は不思議でも何でもない、永い間の日蔭の下に鬱屈しながら養ひ來つた潜勢力が歐洲大戰と云ふ世界未曾有の破壞行動により刺戟せられて日本の村

ゝ迄も其影響を受けたるものに過ぎぬ。

小作農民の農界横列運動は事餘りに新しくして然かも誰でも知つて居る社會現象であるとしても、蠶絲業同業組合の中央的運動から全國の養蠶業者が離脱しようと努力して居ることは、日本の資本主義經營の頭目たる製糸業者の搾取組織から繭の賣り方たる養蠶業者が自ら獨立獨歩の運動を始めたいとの集合意思の働きに外ならぬ。又産業組合は其設立當時よりの方針が上下を縱斷したる農村經濟團體の代表的なるものであつた丈け、政府に於ても、中央會あたりに於ても、努めて其の横列的分離を防止しようとして居るにも拘らず、近時小作組合に於て産業組合の仕事を經營する傾向が顯著となつて來た。地方長官が産業組合法の認可主義なることを笠に着て、小作組合の經營する産業組合に認可を與ふることを澁ると云ふのは、何かに對する遠慮からでもあらふが、小作農民の方では其れに構はずどしどし事業を進めて行きつゝあるから、産業組合の横列的傾向は所詮抑へ得べからざる農村社會の趨勢となるであらふ。

縱列的運動によつて或は對政府的又は排他的運動を續け、其れで相當の成績を擧げ來つた既設農民團體に於て、其足許から自分の足場を顚覆させようとするにも等しい横列運動が起れば、彼等が爲めに大に不安を感じ、力を極めて其の横列的分裂を防止しようとするのは自己防衛上自然の措置ではあるが、其が果して何程の効果を收め得るか否かは兩者の保持する實力如何に存する。

縱列形式と内容とを維持しようとする上層社會者の運動と、下層者が縱列組織に見切りを附けて、新に自ら横列的に進まふとする處に、或は陽なる或は陰なる又は種々なる形式の下に於て葛藤と、技巧と暗鬪とが起る。大正十一年改正の新農會法第三條に農會の目的の中に

一、農業に從事する者の福利增進に關する施設

一、農業に關する紛議の調停又は仲裁

を擧げて在るのを、實際の農業者たる自作者小作者が一瞥して「實際には農業をして居らぬ地主が、どうして吾等の幸福を增進して吳れようか」、又「地主の得分を削り減さずしては問題の納まらぬ小作爭議を地主團體で調停するなんて、奇怪極まる立法ぢやないか」と難詰したがるのも無理からぬ農民心理の作用である。

昨日迄下敷きにせられて居た下層者が縱列團體の足下から蠢動し始めたのは、其本則として他人の煽動や一時の出來心から起つたのではない。彼等には最早彼等自身で獨行し得る丈けの智識と實力とが備つたのである。其れは宛も彼等有產階級が、德川時代の封建制下に抑壓せられながらも、其の封建社會組織の中から維新後に於ける資本主義社會に活躍するに必要なる丈けの智力と實力とを吸收し居たる如く、下層民は明治維新の政治革命に置き去りにせられ、却て其の新社會の資本主義經濟組織の下に壓制せられながら、五十年の歲月の間に其中から所要の養料を吸收して今や更に新なる社會への更生と共に建設運動

に向て漸進しようとするに至つたものに過ぎぬ。吹かば倒れん弱々しい爺や婆の懐の中から鬼をも挫ぐ強勇の悴が生れ、併も其の悴には更に後代の活動者たらん爲めの三歳の童兒が豫備せられてあることを知らねばならぬ。

左樣洵に左樣である、今や日本の農民團體は他の諸他の——商業界の——工業界の——團體運動にも明に見ることを得る如き上下背馳の形勢が不可避の現象として目前に去來して居る。其れは恰も夫の腐爛したる古代の氏族制度の中から大化の改新を誘ひ出し、班田制度の胎內より庄園制度が起り、庄園を踏台にして更に封建制度が起され、封建制度を薙ぎ倒した跡に明治の資本主義社會が代位して勃興したと共軌を同じうするものである。人間個人の體內に生命の力が後續するように人類集團の社會にも永續的進化の生命力が與へられて在る。熟柿は腐れ落ちても、柿樹の生命の最後を語るものではない。熟柿の腐肉の中には更に次年の生命の種子が藏せられて居る。農民運動の橫列的傾向の顯現を觀て、日本の農村社會の末期の如くさかしらに云ひ觸らす世間の賢者よ、試に秋の風淋しく吹く柿の枝の熟柿に御身の指を突き差して見よ、中には固く肥つた柿の核子が「此處に居るぞ」と答ふるであらふ。

六　農民運動潮流の錯交

明治維新の政治的變動が幕末數十年前より漸進し來り、慶應三年に至て其斷末魔を見せたと等しく、今日に於ける社會變動が五年や十年で判然たる區劃を切るものとは思はれない、年號の變り目や、將軍の代變りや、さては中央集權政府の變り目を以て時代を區切り、其度毎に人民の社會生活に變動が急起するかのように思ひ做したり、書いたりして人を過まる史學者の轍を踏むまいとの用心深い觀察者ならば、今日の日本に於ける農村社會の變動は三十年乃至五十年を期して始めて更革せらるべき其の全體の中の一つの刻み目が今や年又年と人の目に映ずるものであることを認識するであらふ。即ち德川時代の社會相が明治時代に於ては勿論のこと、大正の今日に至るまでも片田舍は云はずもあれ、開化を謳はるゝ村の隅の何處かに未だ殘て居ることに徵して見ても、現代の農村社會變動が決して五年や十年を期して完成せらるべきもので無いことが判るであらふ。今の日本の農民運動が斯る漸進的社會變動の特異性があればこそ、今の日本の農民運動が一方には從來よりの縱列的組織を維持せんとして尙ほ活動を續け、然かも直ぐ其下からは村の貧民階級が力強く橫列的に活動して上層階級の縱列的運動から離脫せんことを努めて居るのである。

縱列的なる運動に在ては、其の集合意思により絕えず政府に對して地主保護の政策を要求し、之により間接的に商工業者の社會的利權を抑制しようとするのである。帝國農會が數年前までは小作法の制定に絕對反對の態度を示して居ながら、最近に至り却つて小作法の制定の急務なるを政府に建議したのは、帝國農會の小農保護的氣分の增加したものではなく、今や小作

法でも制定して所有權の半分丈けでも法律により保護して貰はなければ、祖先相傳の大事な土地を根こそぎ小作人に奪ひ取られはせぬかとの心配からであつて、其建案の動機と目的とは縦列的農會の農政運動には應はしい夫の地租輕減運動や米價吊り上げ運動と同一軌上を走る列車の汽笛の餘響と見ても不可あるまい。

斯くて縦列的なる農民團體の頭目を成す帝國農會は日本農民の福祉を増進するてふ農會法の指示の下に或は米價の引き上げ――小作料が金納に更まらぬ限り米價政策は小作農に及ばぬ――や、地租輕減運動――其れは勿論土地を澤山所有するもの程痛痒を感ずる重要問題――やに就て聲を大きくして一時の利益を圖つて居る。彼等の足許からは今や洪水のやうな、火事のような、將た軍のような騒ぎが起つて居ても一度乘り出した汽車の軌道は變へられず、同じ路程を見重たげに走つて居る。

斯くて今の日本の農民運動は其の上部の動き行く方向と、尻尾の動く方向とは各々異り、東と西と、南と北と、天と地との反對なる方角に進んで居る、此の狀を看取した社會評論家の一人は「渾沌たる農村問題」と叫び、氣の小さい道德家や、政府の吏僚は首尾相犯す農民運動は社會の風紀を紊亂するとあつて、矢繼早に種々なる彌縫が施されて居る。

一夜にして其伸長一尺にも及ぶ初夏の筍子の芽尖きを瞬きもせずに瞳めて居たとて、一分、二分の間には其伸長の長さは肉眼に見えないが、一夜過ぎて朝まだきに起き見れば、既に見逆へる程に筍子の芽が長く伸びて居ることに氣着くと同じように、今、吾人の眼前にちらつく農村社會の騒動の種々相は、其の甲と乙と、大なると小なると、遠きと離れたると、又高きと低きとが互に相倚り相助けて巍然たる山の如き、潮の如き流れを形りながら、徐行して居るのであるから、今の渾沌や、錯雜や、停頓やは其が漸進的大運動の過渡的現象たるに過ぎぬことを會得すべきである。

社會の下層者の抗命的、對峙的なる運動は必然的に内裏による上層階級者の生活脅威と、社會存在の困難を誘出する、故に下層運動の熱火が高潮すればする程、上層者及び其擁護者の口より詠歎的文章や自棄的言動が勃發せらるゝ。其れは宛も讃岐の屋島を落ちた平家の將相が瀬戸内海の船中に相擁して哀泣したらんようにも見え、明治維新後に武士階級が農民の米櫃から離れた時の慘狀のようにも聞えるが、然かも實際は平家の哀泣の聲の下から直ちに、**中世日本の封建國家の建設者源頼朝が東國を根據として六十餘州の總統政治を創始したように、明治維新の武士の慘話の舌の根の乾く間もあらせず、新日本の社會が**生れ出た時のように、今の日本の農村資產家の流す「憂國の涙」の湛へられたる池の端には今や鍬と肥柄杓とを携へた剛健の男達が、やをら起つて自己の腕と頭の力によりて眞新日本を建設しようと、…………待て居る。…………。

(終り)

國際主義に對する一貢獻
——太平洋關係調査會の感想——

高木八尺

一 國内關係に於ける社會公益主義と對外關係に於ける帝國主義

ルーズヴエルトは幸福な人である。

大統領マツキンレーが、測らずも一虚無黨員の兇手に斃れたとは、ルーズヴエルトを副大統領の閑職より引き出して白堊館の主とならしめたのであつたが、其の翌一九〇二年、所謂「ルーズヴエルトの僥倖」の著しき一例と數えらるゝ石炭坑夫の大ストライキが起つた。然るに此の難事件も亦ルーズヴエルトにとりては、彼の勇邁果斷なる性格と、彼の抱ける政治の革新の理想とを、全國民に表明するの機會となつたのである。

今少しく遡つて廿年前の該事件を顧るに、事件の當面の問題は坑夫の賃銀增額に關してゞあつたが、眞の爭點は寧ろ、石炭坑夫組合が集團交渉權を主張せしに對して、鑛業主側が之を拒絶せんとせし事に存した、換言すればユニオンを承認するや否やが此の爭の中心であつたのである。

石炭坑夫大罷業は同年五月より半年の間續いた、其の損害は一億弗を超え、石炭の市價は五倍六倍した。一般國民は石炭無き嚴冬を豫想して不安の念を加へ、恐慌の惧すらあつた。紐育の學校中に石炭の節約の爲めに休校するものを生ずるに至り、病院は燃料の不足に苦しんだ。少數の大鑛山主の特權維持の爲めに社會の利益は此の如く脅かされたのである。之を見たルーズヴエルトは、先づ自ら斡旋して華府に協定の爲めの會議を開催せんと欲し、鑛業主及坑夫の双方の代表者を招いた。然るに鑛業主側は容易に協定の申出に應ぜんとしない。於是ルーズヴエルトは其政治的生命を賭しても公益の爲めに鑛山主及鐵道會社の獨占的勢力の横暴を抑壓せんと決意し、剛直の前大統領クリ

ーヴランドに乞うて實業合同に對して峻烈なる調査委員を組織せんとし、又必要に應じて聯邦軍隊の力を以て炭坑を占領し、管理經營せしむる途に出でんとした。玆に至つて鑛業主側も遂に屈し、政府任命の委員の下に、事件は無事妥協解決を見たのであつた。

此の如くにしてルーズヴエルトは一般公衆の利益の爲めにする革新政策の戰士として、一躍して國民渇仰の的となつた。蓋し、當時民衆は漸く自覺を加へ、政治の革新の要求は動かし難き社會的潜勢力であつたと云へる。公益保護の目的を以て大實業の横暴を抑制する所謂トラスト征伐の事業は、此の方向に進むルーズヴエルトの努力を一層明に語るものである。思ふに、無制限なる個人主義の主張、極端なる自由放任主義若しくは自由競爭の遂行を見たる時代として、米國に於ける十九世紀末葉の如きは稀であらう。一九〇二年の石炭ストライキはかゝる思想の絶頂を示す著しい出來事であつた。而して此の時より以後所謂公益尊重の理論に基き、産業に對する政府の干渉を必要なりとする新傾向が漸く顯著となつたのである。此の意味に於て同年のストライキは米國内に於ける政策の一轉換を示し、ルーズヴエルトの「新國家主義」の思想に基く改革を豫告する代表的の事件と云ひ得よう。立法、行政、司法の各方面に於て所謂社會的政策或は社會的倫理主義の傾向を明確に認め得るは略、此の年以後と云ひ得るのである。更に法律學の方面を見れば之と相前後して所謂社會學的法學の興起が顯著なる新現象となり來れることは人の知る如くである。

無節制、大膽なる個人主義の主張は、大實業の旗印として、また、所謂カピテン・オブ・インダストリーの拘束なき活躍の議論として、十九世紀末年に高唱せられたる事は前述の如くであるが、右の石炭ストライキも亦かゝる極端なる放任主義の思想の典型的なる聲明を呼起したことは特に興味深いと云はねばならぬ。それは鑛業主側の代表者ベーア氏の筆に成るとせらるゝ所であるが、彼は抗夫側の主張する勞働條件改善の交渉を排斥しつゝ、拘束なき大企業家の活動が、結局は國家並に庶民の眞の幸福なりとする思想を表明し、自己並に其の代表する大資本家大實業家を呼ぶに「神が其の無限の智慧に基き、國家の財産、資源の管理を委託したる基督教的紳士」なる名稱を以てしたのである。言を換ふれば、之は、勞働者の團體交渉權の要求に對し、勞働者の眞幸福は賢明なる資本家の庇護的措置に浴するに在りと答へたる固陋なる反動思想の表明であつた。

却說、自己の政治的生命の危險を冒して大實業の横暴を抑制

せんとしたルーズヴェルトは却て、恰も醒め來れる輿論の後援を得、一般民衆の輿望を背ひて忽ちに國民的英雄となつた。個人主義に對抗して、「社會公共の幸福の爲めにする個人の犧牲」の必要を認むるとは少くも此の時より以後國内關係に於ては新政策の基調を爲す思想と云ひ得るのである。

然らば翻て對外關係の方面に於ける思想の變遷は如何であつたらう。

同じルーズヴェルトの一生は、此の問題について著しき對照を示し、面白い暗示を與へる樣に思ふ。人も知る如く一九〇三年にルーズヴェルトは、パナマ一帶の地を取つた。パナマ運河開鑿と同地占領の歴史的由來は必しも簡單でないが、兎に角にも、新興の世界的大强國たる合衆國が、大統領ルーズヴェルトの下に從來コロンビヤ國の領土たりしパナマに一地帶を獲得したることは明白である。而してルーズヴェルトは此の行爲の辯護の爲めに、理由を說明して「米國國家の利益、及び全世界のの利益が、コロンビヤが猶ほ引續き運河建設の計畫を妨碍することを許さゞる故に」と云つた。

是に由て觀れば、國内の政治に於ては革新主義、新民族主義の主張の急先鋒たりしルーズヴェルトは、對外關係に就ては徹底せる帝國主義の信奉者であつたと見える。國内に於ける極端個人主義の抑壓の爲めに戰ひたる彼は、國外に對しては自國の「天職」の主張者であつた。前年鑛山王ベーアが、國富の管理につき神の委託を受けたる者は吾等少數者である。國民は吾等の與ふる物を甘受する時に最大の幸福を享くるのであると論じたるに際して、彼ルーズヴェルトが一般民衆と共に感じたる義憤は、一度問題が對外關係に關する時は、少しも彼の心を煩はさなかつた。此の意味に於て彼は心に矛盾の苦しみを持たぬ人であつた。故に私は、ルーズヴェルトは仕合せな人であつたと云ふ。

二 國際主義への推移

乍然、國内關係と對外關係とに對する政策の根據に大なる差異を存せし事は、獨り米國に於てのみ存せし事では決してない。私は右の例を、各國に於て幾多發生せし事件の、中代表的のものとして、假りに選びたるに過ぎない。

然るに時代は推移して現代に於ては最早ルーズヴェルトに代表さるゝ「矛盾の幸福」はもはや何人にも許されざるかに見ゆる。今少しく其の事情を瞥見したいと思ふ。

世界の交通通信機關の發達、產業の國際的擴張等は十九世紀後半に至りて益々著しく、而して近年又殊に其の度を加へ

た。かゝる狀態に伴ふ直接の現象として帝國主義の唱導が先づ盛に行はれたのも無理はない。

帝國主義は往々にして、無遠慮なる搾取政策、露骨なる侵略主義而して又、假借なき軍國主義を伴つてゐた。國防の充實といふ目的の外に、產業の發達に伴ふ海外市場獲得の問題があつたに依り、從て運輸航路の確保、ひいては海軍の擴張が必要であるとする論理が、幾度となく繰返されたのである。

誠に產業主義と相伴ふ帝國主義は近代文明の著しき特色と稱し得よう。然れども翻て、若し深く潜在する意義を尋ぬるならば、其の帝國主義自身が既に、世界に於ける國際主義の發達の理由を明に豫告するものと云はねばならない。

蓋し、近代の世界に於て國際の交通、通商等の激增に因り異文明、異人種の接觸及衝突の機會は頓に加はりをるに、十九世紀中葉以降世界の一大思潮なりし國民主義は、此の狀態に面接し、之が解決の方法を先づ帝國主義に求めたと云へよう。然しながら現代の國際間の相依關係は殆ど世界を化して複雜精巧なる一大社會となし、交錯纏綿せる利害關係を有する諸國より成る一大系統に迄作り上げたとさへ云ひ得る。かゝる狀態に基いて侵略主義を斥け、協調を重んぜんとする國際主義は生れて來た。帝國主義は國際主義の先驅の役を務めたとは此の事を云ふのである。

かくの如くして起れる國際主義の根底は乍然、經濟的論據であるよりも寧ろ究極には道德的なるを要すると云ふ說が次第に有力となつて來た。眞正なる國際主義は國民の道德的良心の基礎に打ち建てられなければならぬ。國家間の關係も當に文明諸國に共通なる法の規律の下に立つべきであるとの意識を土台とせねばならぬと唱へられて來た。故に國際主義の努力と希望とは、文明諸國民の良心に共通なる正義の念を闡明し、之を國際法規其他の國際的制度に具體化するに存すると信ぜらるゝに至つたのである。

此の如き意義を有する國際主義の努力の跡、其の實際上に結べる果實は、近年之を見ると決して少くない。國際聯盟の如き、殊に國際司法裁判所の如きは其の著例であり、華府會議又今回の國際會議の如きは正しく、かゝる思想を其の根底に有するものと云ふべきであらう。

勿論國民主義は今猶ほ其の强大なる勢力を持續して居る。故に玆に特記せんとする點は寧ろ帝國主義的態度の國際主義的態度への推移といふ事實であつて、敢て國民主義の減退を語らんとするのではない。乍然國家主義についても世界の各國は一の到底忘れ得ない教訓を歐洲大戰に依つて學び得た。即ち、獨逸の

クルトゥーアに萬民を歸依せしめんとの思想が、敗慘の悲運を齎めたることは、何れの國民にもあれ自國の文明こそ、當に世界隨一の文明なりとする思想の、根本的誤謬であるとの警告に等しかつたのであつて、此の意味に於て國民主義の限度が如實に指摘せられたと云ひ得るのである。

斯く近年の傾向を檢し來り、再び溯て二十年前のルーズヴェルトを回顧すると、我等は此の短日月に於て國際思想の變遷の顯著なるものあるを認めざるを得ない。自國の文化の普及を標榜して世界の征服を企圖するの愚は、往年大資本家ベーアが唱へし神の委託に依る少數者の國富管理なる反動思想と共に、等しく今は世人の笑を買ふに至つた。又國家間の關係も文明諸國の認むる共同の規律に服せしめんとするは動かし難き世界の大勢となつた。而して國內關係に於て、曾て民衆の自覺と輿論の覺醒とが、遂に極端なる無制限の個人主義を抑壓して、公益保護を重ずる社會的倫理主義の時代を來したるが如く、國際關係に於ても各國民の發達自覺と、文明國に共通なる國際的正義心の成長とが、侵略主義に代るに協同主義を以てせしめ、更に進では、國際的倫理主義の時代とも稱すべき新時代を招來するに非るやを想はしめる。現在の國際法も亦、文明諸國民に共通なる正義思想の指示に隨ひ、人類の社會的勢力の要求に伴ひつつ、今後益々補足充實せらるべきではあるまいか。凡ての社會的政策の根柢が個人の人格の尊重に存したるが如く、國際的倫理主義の前提は世界に於ける各國民の使命の自覺と其の尊嚴の認識とに存するのではあるまいか。かゝる點に疑問を抱き興味を感ずる私は、今夏布哇に開催された太平洋調査會に殊に深き感興を以て列席したのであつた。

三　太平洋關係調査會と日米移民問題の討議

今年七月一日より二週間に亘りてホノルヽに開かれたる太平洋關係調査會（インスチチユート） Institute of Pacific Relations は、國際主義に對する重要の一貢獻といふべきである。殊に外交の民衆化に伴ひて起る必要を充す極めて有意義の新計劃である。

此の調査會は全然何れの政府とも關係なき獨立の機關であつて、布哇の會議には、合衆國本土、カナダ、日本、支那、濠洲、新西蘭、朝鮮、比律賓、布哇の九團體の參加を見た。而して今年集り來れる百餘人の人々は、皆個人の資格に於て參列し、政府又は其他の團體を代表する意味に於ての責任は、聊も之を有せざりし人々であつた。從つて彼等の言論は極めて自由率直であつた。無拘束なりしと同時に平然、彼等は、各國より精選せ

られたる人々にして、社會の各方面に堪能なる者を含ましむる趣旨によつて選られたる一團であつた。此の意味に於ては、彼等の議論は着實にして、空虚に走る危險は少なかつた。

インスチチユートの著しき特色の一は、そが初より所謂「仕事」を爲して、「成績」を舉ぐるに焦慮しまいと覺悟した事である。換言すれば會議は何等の決議をも爲さゞるべしと最初から定めてゐた事である。此の方針も亦如何に參會者の自由直截にして虚心坦懷なる談論を助長したか知れない。かくの如き性質の會議に於て、二週間の會期の間、一日數回宛大小の會合を催しつゝ、連日引續き、所謂太平洋の重要問題に關する攻究對議が行はれたのであつた。

調査會の目的とする所は、太平洋諸國に關係ある國際間、人種間の諸問題に就て、如上の自由なる精神を以て、十分なる研究對議を行ひ、之に關する知識の普及を圖り、各國に於ける健全なる輿論の構成に資し、進んでは法律上、制度上の實際的改善をも齎す事を期するにある。

布哇會議に於て議題として掲げられたる問題は、多種にして廣汎なる範圍に跨つたが、其の中にも最重要なりしは移民問題、支那治外法權及關稅問題、宗教上教育上の國際的協力問題、異人種接觸の問題、東洋の産業化問題等であつた。別して移民問題が、殆ど會期の全部に亘り、最も多數の人の注意の中心であつたとは避け難い所であつた。

而して移民問題の焦點は自然排日條項を含む一九二四年の米國新移民法となりしも不思議は無かつた。調査會の趣旨が太平洋の難問題の根本的なる解決を企圖し、今後無智と偏見とに基く紛議の發生を豫防せんとするに在る以上、日米間の移民問題は回避し難き所である。而して此の種のデリケートなる懸案の事件に關しても、會議が最も自由にして隔意なき意見の交換を重ね、彼我交々所信を披瀝して遺憾なく討議を續けたることは、所謂外交の民衆化の過程に有意義の經驗にして、思ふに夫れ自身大なる會議の收獲と云はねばなるまい。

かくの如くして行はれたる移民問題の討議に現れし意見の概要を顧るに、米國側正準會員約五十名の新移民法に關する意見は略之を三種に大別し得ると思ふ。而して便宜の爲めに簡略に之等三種の態度を一、新移民法維持論、二、修正論、三、折衷論と名附くることが出來ると思ふ。此の問題が如何に取扱はれたるかを檢するは會議其のものゝ性質を推知するにも便宜く多、且つ我等に最も重要の關係を有する點なれば次に少しく之を述べたい。

第一の強硬なる現行法維持論は、飽く迄東洋人の大數移住の

害を高調せんとするものにして、殊に加州に於ける日本移民の群居的生活と之に伴ふ弊害を指摘し、新移民法の歸化不能外國人移住禁止の政策を達眼賢明の措置なりと賞讚し、之を固守せんとする覺悟を聲明する態度を採る說であつた。此の種の論の最も顯著な主張者は加州勞働同盟の首領にして、排日運動の中心人物の一人なるシャレンバーグ氏であつた。

此の說は、懸案の移民法問題なるものに於ける日本側の要求が、決して今後大數の移民を送りたしといふ點に在らざる事實に鑑みれば、議論の重點を誤れる說と評すべきである。乍然此の種の論者、殊にシャレンバーグ氏は、强硬なる東洋移民制限の主張と共に、之に伴ふ他の重要なる一聲明を敢てしたことを我等は看過すべきでない。他でもない、之等の論者は、若し今後移民の流入阻止の確保をだに得たならば、翻つて、既に米國內に在住せる東洋人の地位改善の爲めに、一致協力して努むる所あるべしとの態度を表明したのであつた。此の在米本邦人の地位の問題は新移民の入國の問題と相牽連して誠に日米關係上の一重要事項たるを以て、如上の態度は著しく列席內外人の注意を惹いたのである。

東洋移民制限論者中チエスター・H・ラウエルも屢々其の熱辯を振つた。ラウエルは米國操觚界に縱橫の論議を逞しくする知名の人であるが、其說く所の要旨は、米國の社會組織には嘆かはしき事實として既に、社會の特殊階級たる黑人階級（ケースト）を存するのであつて、米國人は此の惡い經驗に毒されて居るから、再び此の種の現象の惹起せらるべき危險ある東洋移民の多數來住を阻止することは、双方の交通接觸の將來の爲め、最も安全にして必要なる方針であると云ふにあつた。

一日全會討議會の席上、ラウエルが如上の主趣を繰返して滔々たる一大演說を終へたる時、日本の一代表者が即座に起つて、かくの如き米國人の人種的感念に對して頂門の一針たる質問を放ち、各國民列座の前にて應酬を重ねた事があつた。米國の或者は當日の出來事を回顧して之を全會期中に起れる劇的場面の一に擧げて、米人自身必しもラウエルの所論に推服することなきを示して居るが、私は玆には詳述を避けて議論の大體の傾向を尋ねることを試みなければならない。（「ネーション」誌本年九月二日號、ハッチンソン論文中、鶴見對ラウエル對論の所參照）

第二種の議論として擧ぐべき修正論とも稱すべきものは、上述の現狀維持論とは全く異れる出發點より出づる主張であつて、其の論は要するに、現在日米關係上の懸案たる新移民法制定の事件の內容は、最早既に、實質上每年百名の移民の入國が可能となるべきか否かの問題ではない。そは國民間の信義の問

題であり、國家間の相互尊重の問題である。されば米國民は日本國民に對して、米國の眞正の輿論が何であるかを知らしむる爲めに、新移民法の修正を企圖すべきである。加ふるに米國々民自身の精神的覺醒の爲めにもかゝる重要問題の正當なる解決は必要である、といふ議論である。而して之等の論者の實際上の努力は、一九二七年に於て新移民法の所謂排日條項を撤廢し、日本にも歐洲各國と等しく一様に比率制を適用するものと法律を改むる事に注かれて居る譯である。

私は從來合衆國に於ける此の種の議論の興起に深い興味を有して居たものであるから、布哇に於ても其の唱導者の會議に於て採るべき地位を注意して看守つた。會議に於ては此の說はロウリンソン博士、テイラー博士等に依り熱心に主張せられたが、此の態度を採る者は會議に於ても餘程少數であつた。從つて米本國に於ける此の種の法律改正運動の前途に過大の好望を繫ぐ能はざる事は何人も感得した所であつた。蓋し、此の主張には免れ難き一のデイレンマが伴ふ。即ち此の說に對抗して加州を中心とする排日論者は既に警戒、抗爭の聲明を爲し、改正運動を淩犯すべき現行法維持の運動は何時にても惹發すべき形勢にあり、却て目的に添はざる結果を實際に惹起すべしとの事情がある。故に第三說が生ぜざるを得なくなる。

第三種の態度は折衷的、妥協的態度と云ふとを得よう。而して布哇に集りし米國人の大多數はかゝる態度を採つた。其の說に云ふ、排日條項を含む新移民法の成立に對しては、米國識者階級、殊に東部の知識階級、教會、新聞等の大多數は反對であつた。乍然既に同法の制定を見たる今日に於ては、同じく識者の多數は、法律の改正若くは撤廢運動を直ちに企つるとに反對である。かゝる運動は思慮無き行動たる誹を免れ難かるべく、却て實際には所期に反する結果を作ふに至るべし、故に少くも當分は新法律をして平靜に働かしむべし。一方に米國政府は法の執行について移民官其他の寛大にして好意的なる取扱を獎勵すべしと。

私は今一々之等米國人中の議論について論評を試むる積りはない。唯將來に於て之等有力なる代表的米國人の意見が如何なる果實を實際の上に結ぶかを大なる興味を以て注目せんとするものである。殊に、國民の眞の輿論、有識者階級の正當なる判斷に背反する行爲を、立法府が敢てしたる場合に、如何に之を監視し匡正し行くか。組織統轄ある少數者が、統一なき多數を宣傳の力により支配せるとき、醒め來れる多數は如何に其の潜在の眞勢力を振ひ得べきか、之等の近世政治の難問題の解決を、北米合衆國民がデモクラシーの先達として事實の上に例證する日

を目して期待するものである。

四　移民政策の原則の唱導

廣く移民に關する問題の討議を續けた會議中、我等の眼界は決して米國新移民法のみに限られた譯ではなかつたが、之に牽連して種々の重要なる主張の展開した事は注目の價値がある。日本の代表は、會議の劈頭に爲したステートメントの中に移民を論ずるに際して一言、人類の移動に對し專斷的なる制限を加ふるもの道德的根據を疑ふといふ考に言及したのであつたが、會議中日本代表の一員は「開明的なる移民政策の原則の提案」を提起して、會議に一巨彈を投じたるかの觀あらしめた。

右提案は、人類が本來移住に關する「自然權」とでも稱すべきものを有するものたるに、國際間に行はるゝ移住は、現時に於ては國際政治の社會に於ける既得權保護を目的とする現行國際法上の「主權」の規律を蒙ることを述べ、根本論としては一國の人類が新來の移住者を拒む道德上の權利ありや否やを疑ふ點に言及し。更に進んで右の如き主權の行使に當りては、當に人類共同生活の大義に基き、公正と禮讓とを重視すべきものとなし。而して移民政策の原則を論じて、就中入國の條件としては個人的資格を基礎とし、人種國籍等の標準とせざるべきを主張せしむのであつた。猶ほ同提案書は其の後半部に於ては既に入國せる移民の法律上の地位、待遇に關する提案を陳べ、最後に同化に關する政策の原則を揭ぐるものであるが、私は先に述べ來つた所謂國際的倫理主義の發達を將來に期待する立場から該提案の立論を殊更に興味深く感ずるのである。其の一節に近年の國際生活に於ける主權の行使の實際上の限度を述べて

「曾て十八、九世紀の法學者が私法に於ける所有權を絕對、無制限なりと考へし如くに若し吾等も主權を以て絕對無限と考ふるならば、國際的生活は堪え難きものとなり、世界の文明の爲めにする健全なる國際的協力は不可能となるであらう。

夫故に、余は、移民の律規に關する國家の主權の行使に際しては、人類全體の利害と要求とに適當なる考慮を與へ、所謂「サヴアレン・ライト」の極端なる主張に因り、自國民と區別して他國民の要望に對して不當の抑制を加ふることなく、或は他國民若しくは他人種の感情を不當に損するとなかるべきであると主張するものである」

となして居るのは、正に法律の社會化の思想を國際法の範圍に迄及ぼせる新しき國際主義の一傾向の表はれと云はねばならない。（「太平洋關係調査會」議事錄一一〇—一一二頁、高柳提

出案參照）殊に、本年ワルソウに開かれたる國際聯盟協會聯合大會に於て移民問題に關し、日、佛の代表が等しく人類的國際主義的立脚地より重要なる聲明を敢てした事實と併せ考へて、私は一層の意義を此の提案に認めるものである。

五　太平洋關係調査の空氣、直截の言論
謙虛の傾聽及相互の尊重

會議に於て移民問題に次での重要問題は支那に於ける治外法權並に、關稅の問題であつた。會議の第一日に、俊秀なる「若き支那」の代表者顧仁子君が、百五十の會員をして感激措く能はざらしめたステートメントの中に、漲つて居た大眼目は、今生れつつある新しき支那に醒め來れる國民的、人種的自覺の表明と、對外關係に於ける關稅自主權回復。治外法權撤廢等の國民的要望の聲明とであつた。而して此の二大主張は全會期を通じ、支那側代表全部が終始最も熱心に闡明に努めた所である。

私は、颯爽たる支那服の顧君が支那側のステートメントを陳ぶるに當り、先づ、現時の太平洋諸問題を一言に要約するならば、それは「一方には、主として白人種に屬する一團の諸國あり、過去に於て、東方の諸民より、各種の特權と領土とを獲得し居り、如何にもして其の既得の地位を維持せんと努むるに對し、他方には、新に國民主義と人種的自覺に覺醒しつゝある他の一團の國民あり、曾て自己の手中より奪はれたるものを回復せんと要望する」より起る問題であると説破し、之を以て「現今の太平洋諸問題の原理」を傳ふる要諦なりと斷ずるを聞いたとき、支那民族の衷に起れる澎湃たる新氣運を感得せざらんとするも能はなかつた。而して更に進んで、治外法權撤廢の要を說くに當り、溫厚誠實の顧君が「余の見解によれば問題の根柢は要するに東洋に於ける西洋の威信（プレスティーヂ）維持のための苦慮である。事實に於て東洋に於ける西洋のプレスティーヂは、歐洲大戰以來既に陸をも止めざるに、此の想像上にのみ殘存せる威信を支持せん爲めの道具立ては、依然として存續して居る。かゝる道具立てを一掃し去るに非れば、平和は望むべくもない」と論ずるを聞くに至り、東洋民族の覺醒と、國際關係の大勢の推移とを痛感せずには居られなかつた。

布哇會議の著しい特色の一は、人種國籍を異にする百餘名の會員の大部分が、會議場に當てられたる學校の寄宿舍に起臥して、朝夕、親しく個人的に接觸談論する機會を得た事であつた。特に食事毎に一堂に會食した事は一層和親の空氣を助くるに力あつた。直情徑行の談論さと、[illegible]態度と、從つて相互に生ずる。眞の敬愛の念とは、恐らくは會

員の多くの人に新しき啓示であつたらう。凡ての人は唯、人として相接し、國籍と人種とを時に忘却せるやの觀さへあつた。思ふに此の個人的接觸の効果は意外の深影響を有するのではあるまいか。一人の知己を外國に得る事により其國民を見る我等の眼界が一變することは我等の等しく經驗する所である。布哇の會議に各國より集り來れる名士は少くなかつた。今之等の人々につき語るべき時を持たないが、私も亦布哇に於て、舊交を温め、新たに相識る機會を與へられしことを深く感謝する一人である。而して殊にジエーソン博士に就て此の機會に一言したいと思ふ。

ジエーソンの舊姓は徐載弼彼は往年金玉均等と事を共にしたる朝鮮の志士であるが、三十年餘前より更に米國に逃れ、早く米國人に歸化して彼地に生活し今は費府に於ける有數の市民となつて居る。乍然ジエーソンの胸中に燃ゆるもは依然として愛國の至情である。布哇會議中の一夜深更迄寄宿舍の露臺に葉卷を燻らしながら此學者實業家にして又政治家なる老功の志士が、波瀾多き其の生涯を物語るを聞いて私は深き嚴粛の思に溢れた事があつた。ジエーソン博士も又其の他の朝鮮人も、夫々數千哩の道を遠しとせず布哇に集り來りながら、會議の初日に求められたるステートメントを陳述せし以外多くロを開かなかつたが、私は此の沈默の裡に、却て無限の餘韻を感ずるものである。而して日本人として自ら三思したいと思ふ。

現今の世界は最早無制限なる國家主義の主張を許さぬ世界である。而して比較的誕生の新しき國際主義の必要が經濟的に、又殊に倫理的に年と共に強く感ぜらるゝ時代である。文明世界の諸國民は覺醒して國際主義の建設に協力せねばならない。國内關係に於ける社會的論理主義の理想を更に國際化することは果して空想であらうか、それは自ら保存し向上せんとする人類の叫ではあるまいか。何れにもせよ太平洋關係調査會の誕生は現實の事實である。殊に其が永續的なる常設機關とせられたる所に一層の深意義を存する。私は各國に於ける支部の活動が今後益々根本的にして又建設的ならんことを祈つて止まない。

（一四、一〇、二七）

日本政治史における中央主義と地方主義

澤田 謙

一

「農村振興」が利を見るに敏なる政黨の表看板となつたるに應じて、學者思想家の間には「農村問題」の研究が盛んになつた。「地租委讓」も年久しき問題であるが、最近政友會がこれを政略的に使用せんとするにいたつて、やうやく白熱化せる政治問題となりつゝある。この「地租」の地方委讓論に追從して、なかには「文化」の地方委讓を說くものさへある。無產階級を中軸とする新政治運動が、またこの眼を「地方」に注ぎつゝあるは、具眼の士ありといふべきであらう。

以上、等々の社會事象は、これを政治史家の眼光よりすれば、現代日本を支配しつゝある「中央集權主義」に對抗するところの「地方分權主義」の主張、その諸徵候と觀ることができるではあるまいか。

政治傾向または政治思想としての「中央集權主義」と「地方分權主義」（略してこれを中央主義、地方主義とよぶ）その對立と轉向、それは政治史の進行を裏づける力强い動力の一つである。中央集權にも地方分權にも、それぞれ一利あれば從つて一害あり、純粹の政治思想としては、兩者を並立せしむべきものなるべけれど、政治事實としては、中央主義と地方主義とは、たとへば海波の一去一來するごとく、相交替して興隆衰退するものである。中央主義の弊極まつては地方主義興り、地方主義しだいに固陋なるにいたつて中央主義の擡頭をみるのが、政治史上の事實である。わたくしはこの視地にたつて、その交替關係と利弊とを、日本政治史について檢討するとともに、これらの政治主義の基礎をなすべき社會的要請の背景をも、併せて一瞥してみたいと思ふ。もとより大觀である、委曲はこの小論の任ではない。

由來日本の政治史は、中央主義の政治史であつた。中央集權の勢ひ盛んにして、國政の組織制度おおむね整へられた時代をば、「[illegible]令時

代」として推賞するはなほ可なり、中央の綱紀やうやく衰へて、政權地方に分散するや、これを「暗黒時代」として一概に葬り去らんとするにいたつては、その眼光の不徹底、かれらこそ却つて惆殺さるべきものではあるまいか。中央主義にその時代の社會的要請あれば、地方主義にもまた時代社會の必然性がある。古來の大政治家が、まづ時代社會の要請に聽いて、その適合點を政治に求めたるがごとくに、時代歴史の眞相も、その政治の善惡正邪も、またその社會的環境を基として判斷されねばならぬ。

およそ政治上の中央主義は、その規模は雄偉にして廣大、その規律は劃一にして普遍的その組織體制は整然として一糸紛れず、國力もまた昂上し發展するを特色とする。さりながら、廣大なるは際あり、劃一なるは無理に陷り易く、整然たるもの生氣を失ふがごとく、國力もまたあまりに昂上するときは、とかく浮足なるを免れない。こゝに地方主義の乘ずべき間隙がある。地方主義はすべて中央主義の利弊を表裏するものであつて、その特色も質實、自然、生氣あるにあり、國力もまた昂上より積重、發展よりも充實を尚ぶにある。したがつて政治上の「地方主義」なるものは、地方に蓄積せる「實力」がその興起の原動力たるべきものにして、決して中央政界の雄辯と廣告とが、これを興すものでない理は、しだいにこれを明らかにするであらう。

二

大化改新はわが國第一の政治革命なりしのみならず、國家政治の端を開きし轉換期であつた。日本政治史は大化改新より始むるを適當とする。

もとより大化改新以前に「政治」がなかつたといふのではない。しかし眞に人民の生活に則する政治は、主として改新以後の出來事である。それ以前の政治、われらのいはゆる「氏族政治」の時代においては、「氏族」が政治の單位にして同時に政治の組織であつた。族長交々天皇を挾んで、廟堂に權威を爭ふの事實は、大化改新以前にもみるところであるが、これ宮廷の事件にして、人民の生活に關するものではない。

族長政治の時代に於て、その社會組織は、共同の祖先を有し、または有すと信ずるものの血緣團體たる「氏」を中心とする。「氏」は幾多（四五より數百にいたる）の「戸」よりなり、「戸」はいはゆる「大家族」にして、親子兄弟姉妹のみならず、伯叔・父母甥・姪・從父兄弟姉妹などの血族をも包んだものである。これを組織するものが「氏人」にして、氏人は當時の貴族階級で

ある。

「氏」には「部(べ)」と稱する半自由民の團體が隸屬してゐる。世襲的に同一の産業その他の活動に從事するものの團結である。「部」には皇室に屬する公的のものと、豪族に屬する私的のものあつて、前者を「品部(ともべ)」、後者を「部曲(かきべ)」といつた。部は各「戸」に屬することなく、別に一戸をなして、直接に「氏」に屬してゐたものである。

その他に「奴(やつこ)」と稱する奴隸階級があり、或は「戸」に或は「氏」に屬して、家事耕作の賤役に服して、部民よりも一層賤視されてゐた。

さてこれ等の三階級よりなる社會組織の政治關係はどうであつたかといふに、國家の元首はいふまでもなく天皇であつた。しかし、天皇の直接に支配せらるゝは、その一族にかぎり、他の諸々の民は「氏上(うぢのかみ)」に屬するをもつて、天皇は氏上を通じて間接に支配せらるゝにすぎなかつたのである。強いて類比をもとむれば、あたかも徳川氏が、自ら四百萬石の大侯にして、旗本八千旗を擁し、他については、「將軍」として、たゞ譜代外樣の諸侯を支配せるにすぎざりしと同じく皇室も一つの大氏にして、天皇はこの大氏を支配さるゝとともに、國家の元首として、諸「氏上」を統率せられてゐたものである。たゞ徳川幕政と異るは、「諸侯」は一の地縁團體たりしに對して、「氏」は一の血縁團體にすぎず、その私領私民も一個所に集らず、各所に散在せしことである。

南淵先生門下の二俊才、中大兄皇子と中臣鎌足の合同事業たる大化改新は、實にかくの如き政治組織の根底を破壞して、日本に新らしき且つ最初の中央主義政治を現出せしめたものである。しからばこの政治的原因は如何。普通、大化の改新は、豪族蘇我氏を誅することによつて成就されたと稱せられる。なるほど、蘇我氏は當時の宮廷を壟斷せんとする豪族であつて、鬪勇なる皇子が自ら長槍を執つて入鹿を暗殺し、さらに兵を放つて子蝦夷を征したることは、政治史上有名なる事實である。しかしこれ大化改新の「事實」にしてその「說明」ではない。或は改新事業の原因として、儒學佛教の渡來を說くものもある。然り、儒學佛教、殊に當時の先進國たる唐の政治制度が、改進制度の施行について、多くの範例となりしことに疑ひはない。しかしわれらの問はんと欲するところは、如何なる社會的環境が「氏族政治」の轉覆を要請し、中央主義の新政治組織を促進せるやの、その動力、之の原因である。

三

私見によれば、大化改新なる政治革命を要請せる社會的原因は、「部」の代表せる生産力が、しだいに發展擴大せることにある。上述せるごとく、「部」は「氏」に隷屬せる半自由民の團結であるが、その社會的職分は産業にある。もちろん上古においても「奴」と稱する奴隷階級があつたが、これは主として氏人の家事をつとめ、産業上はあまり重要視されなかつた。すなはち産業は主として「部」の掌るところにして、各部それぞれ産業部門を世襲し、はじめは農村または漁獵のごとき原始産業に從事してゐたが、久しうしてやうやく手工業が起り、殊に三韓を經て支那大陸の文明が輸入さるゝや、「部」の生産力はますます擧つたのである。

これらの「部」を私有する「氏」が、したがつて政治的權力を要求するにいたるのは、自然の傾向である。氏族政治が進行するにしたがつて、武内・大伴・平郡・巨勢・物部などの豪族が交々起り、つひに蘇我氏がこれらの諸氏を抑壓して、獨り宮廷に權威をはるに至つたのは、この「部」の勢力を背景としてゞある。もとより皇室なる大氏にも、多くの「品部」あり、「御縣」「屯倉」などの皇室領あり、また「御名代」「御子代」など、天皇・皇后・皇子などの御名を後世に傳へ、同時に供御その他の費用の資とせしものも諸方にあつたのであるが、他方豪族の私有する「部曲」や、その私領たる「田莊」の發達も迅速で、つひに一氏族の專權、土地兼併の勢を生じたのである。大化改新の詔は、この形勢を見て、『或は數萬頃の田を兼併し、或は全く容針少地も無し』と歎かせられた。改新事業の第一歩が、まづ豪族の轉覆にはじまり、つひに「部」の制度の改革によつて完成されたるは、この理に基くものである。

「部」の發達は、かくのごとく、豪族の專制を誘ひたると同時に、他方において、「氏」なる血緣團體を崩壞するに作用した。「部」は一定地域に所在する産業民であつて、血緣團體といふよりもむしろ地緣團體である。はじめ「氏」は、各所に散在するこの地緣團體を所有統轄してゐたのであるが、「部」が發達するとともに、その結緣力はしだいに弱くなり、かへつて管理者たる「伴造」「國造」「村首」等が、事實上の權力を主張するにいたつた。或は獨立して自ら「氏」を潜するものもあり、或は僭にして「氏」の命をきかざるものあり、氏族制度はやうやく破綻を示し、血緣主義すたれて地緣主義おこらんとするの傾向を生じたのである。大化改新はこの形勢に應じて起つた。

改新第一の天皇、孝德天皇が、まづ宮内の廣庭に蒼々として聳ゆる大槻の下に群臣を召集して、「天は覆ひ地は載す。帝道は唯だ一のみ」と、第一聲をあげ給ひしがごとく、大化改新は中央

主義の政治であつた。はたして當時の社會が、後にのぶるがごとき徹底的なる中央主義を要請したりしや否やは別問題として、新興勢力たる地緣團體（「部」）が、舊勢力たる血緣團體（「氏」）の檢束を脱せんとしつゝありしは、蔽ふべからざる社會の聲である。むしろ中大兄皇子はこの「部」解放の社會的要請を利用して、自己の政治的理想たる中央主義を敢行したるかの觀がある。皇子入鹿を宮廷に誅するや、古人大兄皇子をして『韓人殺鞍作臣』と皮肉らしめたるほど、外國文明の崇拜者にして、同時に過激なる進歩主義者たりし中大兄皇子の中央主義は、まもなくそこに破綻を見出したるにも拘らず、その「部」解放の大方針において、まさに當時の社會傾向に合致したのであつた。

四

日本政治史を通じて、大化改新ほど徹底的に中央主義を斷行したものは、明治維新を除いてはほかにない。實に中大兄皇子は、後に、源頼朝が企て及ばず、後醍醐天皇が失敗し、豐臣秀吉が中道にして斃れたる大事業を、悠々として敢行されたのである。

大化改新の事業は、こゝに事新らしく述ぶるまでもなく、（一）昔から天皇等の立てられた子代の民を罷むるとともに、處々の屯倉や、別・臣・連・伴造・國造・村首の有する部曲の民を廢し、處々の「田莊」を罷める。その代り大夫以上には食封を、官人・百姓には布帛を賜ふこと。すなはち從來の領地・領民の世襲を收めて俸祿に代ふるものである。（二）京畿及び地方の區劃を定め、京師には坊毎に長を置き、四坊に令を置く。畿內には國司・郡司・關塞・防人・驛馬・傳馬を置き、地方の區劃は國・郡・里の三級に分つ。地方との連絡を保つために鈴・契を給すること。すなはち、行政區劃の改定である。（三）はじめて戸籍・計帳をつくつて、班田收授の法を定め、田の長さ三十歩廣さ十二歩を段とし、十段を町とし、一段の租稻を二束二把と定めたこと。すなはち土地制度の革新である。（四）、舊の賦役を罷め、田ノ調・戸別ノ調・調ノ副物、及び庸役の法を新定したこと。すなはち租庸調の徴收である。

六四六年（大化二年）發布せられたるこの四大政綱によつて、氏族政治の時代は去り郡縣政治の時代は來つた。「氏」は「部」と「田莊」なる爪牙をはがれて、宮廷に爵位を擁するにすぎず、土地人民は私有を禁ぜられ、土地は公有にして、天皇は解放されたる部民を直接に統治せらるゝことになつた。すべての權力は天皇を中心とする中央政府に集中することになつたのである。

中央主義の特色の一は、その制度の劃一・整然たるにも

る。王朝時代の政治組織は、中央に八省百官あり、京師に左右兩職あり、地方に國司郡司あり、衣冠は二十六階、官位は四級、位階三十階勳位十二等整然として一絲亂れず。京師に五衞府あり、諸國に軍團あり、三軍の制、粛として定まる。その他大學寮・陰陽寮・雅樂寮などにいたるまで、國制はとみに完備した。『青丹よし奈良の都は咲く花の香ふがごと』き燦たる文明は、この中央主義の政治を背景として、はじめて榮えたのである。

しかし政治は元來制度ではない。それは人民の生活を通じて觀察されねばならぬ。したがつて大化改新の政治的意義は、これらの組織體制ではなくて、その中央主義の效果が、いかに人民生活に反映したかといふにあらねばならぬ。

いふまでもなく、大化改新は「部」解放のために行はれたものである。まさしく「部」は解放された。半自由民は自由民となつた。かれらは一定の土地をさへ班田された。土地は公田なるがゆえに、所有權を與へられたのではない。しかし耕作權・收益權・勞働權はたしかに與へられたのである。各人平等に與へられたのである。尤も宮廷を繞る貴族階級の間には、かれらの汗の所産によつて、歌舞淫樂が行はれつゝある。しかしこれは別世界の出來事として、必らずしもかれらの生活を脅威するものではない。また自由なき奴隷民もある。しかしこれもまだ自覺の程度には達してゐない。しからば少くとも平等に勞働權を與へられた人民は、この中央主義政治に感謝して、太平を謳歌しなければならぬ筈であつたのである。

しかしそこには、必らずしも然るあたはざる理があつた。

五

奈良大佛殿の壯麗はみるにおよばず。奈良や京都のごとき大都市が建設されたことだけでも、この中央主義の政治が、いかに「國力」を「發展」せしめたるかを觀るに足るであらう。しかし悲しい哉、「發展」はかならずしも「充實」を意味しない。却つて時に反對を意味する。およそ國力は一定の速度にしか進まないものである。それをあまりに急激に容積を大にせんとすれば、その密度はおのづから疎ならざるを得ない。王朝時代の國力の發展が、かへつて國力の疲弊となりし理はこゝにある。

世に王朝政治失敗の原因を、班田收授法のあまりに機械的なりしことや、國司郡司の腐敗やに歸するものが多い。たしかにそれもある。しかし私觀によれば、これ末葉にして、その根本原因は、中央主義の國力發展政策が、やうやく馬脚をあらはし來りし點にあると思ふ。

まへにも述べた如く、大化改新を起せる動力は、「部」の解放

であつて、必ずしも中央主義ではなかつた。しかも大化改新は、中央主義を敢行するために、「部」の解放を行つたのである。そこに主客顚倒の矛盾がある。むしろ地縁團體たる「部」は、中央所在の血縁團體たる「氏」を排斥する點において、地方主義を要請してゐた。しかるに計らざりき一旦「部」が解放さるゝや、中央主義の壓力が、鉛のごとくに蔽ひきたつたのである。しかもその壓力は、國力が發展するとともに重加する。かくして新自由民たちは、もし自己の社會的要求を達せんと欲するならば、自らこの中央主義の埒外に脱し去るよりほかない。實に王朝時代の政治史は、人民が中央主義より脱走するの歴史であつた。

普天の下率土の濱、ことごとく王土にあらざるなしといふ思想によれば、當時の人民が中央主義政治の埒外に遁走したといふことは、不合理にみえるであらう。しかしすべて例外なき原則はない。王朝時代中央主義にも、乘ずべき間隙はあつた。第一は寺院である。當時のハイカラ論者たる王朝政治家は、舶來思想たる佛教を尊崇するのあまり、寺院を班田法・租庸調の原則外においた。かくして中央主義の際に堪へざる人民は、まづ寺院庇護の下に走るにいたつたのである。第二は功田・職田である。國家に勳ある功臣に對しては、一定の土地の收益權が與へられ、國家經濟よりみれば、これも原則として不輸租地である。また人民の遁入を免れない。第三は墾田である。荒無の地にして新たに開拓せられたるものは、一定の年限田租を免ぜらるゝ原則なりしが、のちには永年の不輸租田となつた。この最後の墾田が、生産力の發展にしたがつて、最も勢力を振ふに至つたのはいふまでもない。

京都にある貴族階級が、中央主義の發展的餘焰に醉ふて、第樹を新築し大佛を造營し、詩歌管絃にうつゝを拔かしつゝある間に、地方には實にかくのごとき變化が起りつゝあつたのである。これら中央主義の埒外に遁走せるものどもの依城を、世に「莊園」と稱する。莊園は京都より下されたる國司・郡司の經營せるものもある。かれらは華の京都を去つて、實の田莊に土着し、地方に勢力を振ふに至つたのである。また地方より起れる豪族もある。かれらは自己の地位を堅むるために、或は音信を通じ或は血緣を結び、或は自ら降つて大豪族の下に庇護を求め、或は攻守同盟を結んで勢力をはり、かくして莊園組織はしだいに形成せられた。

王朝時代五百年の歴史は、實に、一方中央主義がしだいに爛熟しつつあるとともに、他方地方主義もまた「莊園」にたてこもつて、勢力を增進せしめつゝあつた歴史である。そして十一世紀の中葉における保元平治の亂は、實に中央主義と地方[illegible]

との正面衝突だつたのである。

六

かくのごとき次第なるゆゑ、何れの時に王朝の中央主義が滅び、何れの時に莊園の地方主義が起つたかは、これを決定することはできない。形式上、王朝的中央主義の政治は、保元平治の亂まで存續した。しかし事實上、その勢力範圍は莊園の地方主義のために、漸次に縮められつゝあつたのである。九三九年天慶二年平將門の叛が著大なる反響を京都に與へたることより見れば、莊園の地方主義はすでに意外なる遠まで進行せるを知る。將門の叛は間もなく平定されたけれども、これは地方主義と地方主義との爭で、將門の誅にも拘らず、地方主義はますます盛んであつた。十一世紀に入つては、一〇六九年延久元年後三條天皇が、その英邁の資をもつて、藤原氏の專政を制すると共に、その親政の第一步として、券契記錄所を設け、莊園停止の事業を推行し給はんとせしも、つひに失敗に終らざるをえざりしほど、莊園制度は地盤を固めてゐたのである。世に保元平治以來政權武門に歸すると稱するも、事實においては、人民の生活に則する政治の權力は、第十世紀の以前より、すでに莊園に歸してゐたのである。

それのみではない。莊園の地方主義は、はや數百年の發達を經て、そこに充分なる民力の「充實」を得、したがつてその組織もしだいに廣大に、十二世紀の初頭には、東國は源氏の麾下に、西國は平氏の勢力範圍に屬し、すでに或る程度の中央主義政治をすら、要請せし狀態であつた。王朝の中央主義はたゞその殘骸にすぎず、たゞ畿內の小範圍に行はるゝにすぎぬ。かるがゆゑに保元平治の亂は、中央主義と地方主義との衝突であるといふよりも、實質的中央主義が形骸的中央主義にかはるべき、一つの轉換期であつたといふ方が、より正確な史觀である。

こゝにわれらは奇異なる社會現象を發見する。それは當時の政情が、形式上の中央主義・實質上の地方主義なりしに對して、その政治理想が、實質上の中央主義・形式上の地方主義なりしことである。すなはち、當時の社會的要請は、實質的には中央主義を欲してゐたが、王朝政治には實質がない。ゆゑにこれを打破せねばならぬ。しかし事實としての地方主義は、數世紀の努力の結果なるをもつて、一朝にして轉覆し得べきでない。ゆゑに少くとも形式上は地方主義によらねばならぬのである。この社會的要請を、最もよく理解し、最もよく利用したものは、一代の英雄源賴朝であつて、かれの樹立せし鎌倉政治こそ、形式上の地方主義の上に實質上の中央主義を課したる、一種の妥協

政治であつた。

この點においてわれらは、頼朝の偉大なる政治家たりしを賞認せざるをえぬ。平清盛は、その剛腹にして果敢なる、決して頼朝に劣るものではない。白河法皇をして、鴨河の水と雙六の賽とともに、「意の如くならざるもの」と嘆ぜしめたる山法師、「寺院」の勢力がまづ立つて形式的中央主義の鼎の輕重を問ふや、直ちに應じて莊園政治の實力を、中央政界に主張したるものは清盛であつた。王朝の形骸的中央主義政治を、一撃の下に粉粹せしもかれであつた。たゞ清盛は時勢を解せず、從來の政治の表裏を轉覆するかはりに、自ら藤原氏に代つて中央主義の形骸を繼承するの愚を演じて王朝の舊勢力の恨をかふとともに、莊園の地方主義に脈迫を加ふるの擧に出でて、地方に散在する新勢力の反抗をかつた。これかれが鐵腕にもかゝわらず、四面楚歌の聲を聞くにいたりし所以である。

七

平氏を討滅せし源頼朝は、清盛と全然反對の政策に出でた。もとより清盛も頼朝も、期するところはたゞ一つ、同じく形式的中央主義の實質化である。しかしその道程においては、兩者の間に千里の逕庭があつた。

頼朝はまづ京都を去つて、源家の故地たる東國に歸つた。かれが鎌倉に幕府を開きしは、一方において在勢力に安心を與ふるとともに、他方において新なる實勢力の間に、自己の地盤を開拓せんとするものである。かれは榮譽ある位階を辭して、たゞ一征夷大將軍たるに甘んじた。これ京都の形式主義に對する嘲笑なるとともに、源家の嫡流として東國に威望を繋ぐ所以である。されど「威望」もまた畢竟は虛名である。かれの最も苦心したるは、いかにして地方主義を形式化し、實質上の中央主義を、その政治組織中に織りこまんかの點であつた。

當時地方には、國司・庄司なるものあつて、各々莊園を司配しつゝあつた。若し徹底的に中央主義を斷行せんとならば、國司・庄司を罷めて、郡縣的官吏をして代らしむること、かの大化改新のごとくならしむべきであらう。しかしかくのごとき制度の改革が、決して實質を變化せしむる所以でないのみならず、また頗る冒險に類することを、頼朝はすでに覩破してゐた。こゝにおいてかれは、大政治學者大江廣元の言に聽き、國司、莊司を廢することなく、これと並べて守護・地頭を設置し、自然に舊勢力を自家の掌中にあつむるの策に出た。守護の職は檢斷をもつてその本務とし、謀叛・殺人・盜賊の追捕を行ふ警察官にすぎず、地頭は田税・段役を徴收し、本所・領家に納む

る收稅吏にすぎないが、これは形式上のことで、實質上においては、鎌倉の命をうけて政治經濟の權を握る代官である。果して頼朝のこの政策は時勢に適合し、從來の國司・莊司はしだいに勢力を失つて、新に設けられたる守護・地頭にその權力を讓るにいたつたこと、あたかも中央大銀行の支店が、地方の小銀行を壓倒するの觀があつた。かくして頼朝の實質的中央主義は完成されたのである。

いはゆる「源氏」が政治の實質的頭目たりしは、頼朝の存命中にかぎり、かれ一たび死するや、實權は忽ちにして北條氏にうつり、將軍職すら三代實朝にて終り、以來北條氏が「執權」の名によつて天下に號令するにいたつた。史家これを觀て、頼朝の猜疑心血族を滅したるの罪なりと頼朝を責める。しかし政權が源氏を去つて北條氏に移つたことは、たまたま以て鎌倉政治の本質をあらはすもので、決して一頼朝の罪ではない。頼朝が將軍となつたのは、源家の嫡流としてゞあつて、いはゆる「源家」とは、東國に盤踞せる豪族の攻守同盟の名である。しかも頼朝は偶然京都より伊豆に流されたる名門の子にすぎずして、「源家」なる攻守同盟の實勢力は、北條氏がこれを代表してゐたのである。ゆえに頼朝死して政權の北條氏に移るは最も自然なる出來事であり、北條氏もまたよくその事業を繼承するの

器であつた。

八

一一八五年（壽永四）の秋、頼朝が壇の浦に平氏を滅ぼしてより、一二八四年（弘安七年）時宗が卒するまで、百年に亘る鎌倉幕府の政治は、まれに見る善政の連續であつた。時政にしろ義時にしろ、泰時にしろ時頼にしろ、長時にしろ時宗にしろ、いづれも政治家としての素質をもつてゐた。京都公家の政權恢復運動たる承久の亂が、空しく鎌倉の勢力を增長せしむるに終つたのは、鎌倉幕府の基礎が、地方の實勢力の上にあつたがゆえである。この時代において、いはゆる「武家」の制度と道德とは、漸くにして發達し來つた。かれらは競つて品性を磨き武を修め、體面を重んじ質素を尚び、勇敢にしてしかも禮節あり、俠義にして廉恥心に富む。この武家道德の中心をなすものは、かの『鉢の木』なる謡曲にあらはるゝ『いざ鎌倉』の士風であつて、武士たるの自尊心と、鎌倉を中心とする愛國心とは、その中央主義政治に精神をふきこんで、永く潑溂の氣を養つたものであつた。

當時の社會階級としては、公家・武家・凡下・賤民の四つがあつたが、公家なる貴族階級は政治的に振はず、政治の中心は

家であつた。第三階級は凡下または地下と稱せらるゝ庶民であつて、農業を主として産業に從事する。この凡下に對しても、鎌倉政治は大體において善政を施したるがごとく、鎌倉武士は土より起りたる種族なるをもつて、その勢力の根元がこれらの庶民の生産力にあるを知るがゆえに、つとめてこれを愛撫するをもつて武士の美徳となし、農民もまた武家の兵力が平和の基礎たるを知るがゆえに、大體において鎌倉政治に悦服してゐたらしい。かくして民力はしだいに發展し、中央集權政治の實はやうやく擧つて來た。一二八一年（弘安四年）元兵海を蔽ふて來寇せしとき、わが國を防衛せしものはもとより天祐なる神風のおかげもあるが、一二七四年（建治元年）北條時宗が、元使を斬りし大勇は、けだしこの發展せし國力と中央主義政治とに、滿腹の自信を有せし結果であらねばならぬ。

さりながら、元寇はこの中央主義の善政に、重大なる惡影響をのこして去つた。國難に際して國民的精神がますく旺盛になつたのは、中央主義政治のためには喜ぶべき現象であつたが、他方財政經濟的には、非常な難局に立たねばならなかつた。文永弘安の外寇で、多くの國富を蕩盡したのみならず、武士も凡下もこれに對する不斷の防備に、重き負擔を[illegible]ならなかつた。[illegible]これに中央政[illegible]後の論功行賞にはたとへ十分ならずとも、論功行賞すべき土地はあつたが、元寇の場合にはその土地さへなく、鎌倉の御家人たる武士は、ますく窮乏に陷つたために所領を質入して一時の窮迫を救ひ、つひにはその樞所領を失ふものさへ續出するにいたつた。武士の窮乏は結局において庶民の負擔とならざるをえない。善政をもつて聞えたる鎌倉幕府も、しだいに苛斂誅求の弊さへ生ずるにいたつた。かくして永く中央主義の政治を樂しみし武家政治も、國力衰ふるやまづ民力の休養を欲し、そのためには政治の地方主義を要請するにいたつたのである。元寇以來、北條氏の治政とみにあがらず、政權分散の傾向を生じたのは、この國力の「元寇」を欲する社會的要請が、支配階級たる鎌倉武士の威力の衰退と、その綱紀の頽廢とに、相呼應したる結果である。

九

この政治情勢を利用して立つたのが、一三三一年（元弘元年）以來の、後醍醐天皇のいはゆる建武中興の事業であつた。しかし建武中興は、これを政治史上よりみれば一つの矛盾であつた。北條氏綱紀の頽廢と武家勢力の衰退、これはたしかに乘ずべき機會であつたにちがひない。しかし當時の社會的要求は、却つて地方主義の政治にあつたのである。これは政治的に

觀れば、中興事業はその根底に無理を藏してゐた。後醍醐天皇の英明と、楠正成の忠勇義烈をもつてしても、なほその事業が未完成のうちに倒れざるをえざりしは、北條氏以上の中央主權主義をもつて立てることが、當時の社會的要請に反對なりしゆえである。逆賊尊氏の出所進退に對しては、義憤をもつて反對する志士なほ多かりしにかゝはらず、天下は滔々として地方出身の狡兒の方へと流れたる所以、もつて當時の時勢を觀るべきである。

足利氏二百五十年の治は、北條氏が「善政」を代表するに對して、むしろ概して「惡政」を代表するものであつた。最初の三十年はいはゆる南北朝戰爭の時代であつた。つぎの三十年、將軍義滿の治政は、制度の廣大と居家の莊麗によつて、いはゆる「室町時代」の浮誇虛榮に誇るといへども、かれが日夕金閣寺内に起臥して、猿樂、田樂、舞樂、茶湯、聞香に耽れるがごとく、ことごとくこれ平安朝末期の公卿政治の亞流である。こゝに至つて幕政はやうやく權威を失ひ、やがていはゆる「下剋上」の形勢を顯致し、つひに收拾しうべからざるにいたつた。諸國に諸侯出現し、諸侯互ひに攻討を事とする、いはゆる「戰國時代」はこれよりはじまる。すなはち中央主義政治史家が、「暗黑時代」として筆を投ずる時代はこれである。

しかし足利氏の室町政治が、形式的なる中央主義に陥つたのは、皮肉にも、却つて時代の社會的要請に適合したものであつた。なぜなら、上述せるごとく、元寇の亂を經、さらに建武中興より南北朝戰爭の永きに亘る戰亂のため、ますます國力の休養を要請しつゝありし社會は、實質的の地方主義政治を歡呼しなければならなかつたからである。

當時の世態を最もよくあらはすものは、「下剋上」といふ言葉であらう。封建社會は血統と家柄で峻嚴な階級制度を設けてゐたのであるが、實力を尚ぶ地方主義が起るとともに、家柄はもはや問題でなくなつた。上級者が無力になると、實力ある下級者がこれを凌ぐにいたるのは自然の傾向で、この精神は各方面にあらはれてきた。將軍は台職にありと雖も、統御の力なく、政權はまつたく管領に移り、さらに下巡して被官が政機を握るにいたる。この關係は地方において甚しく、守護の實權はしだいに守護代に移るにいたつた。當時本官のことを正員といひ、代理者のことを代官ととなへたが、かくして政治は代官の時代となり、或は代官の代理者たる「又代」「下代」が權力を振へるものもある。たゞに政權のみならず、本寺は末寺に、師匠は弟子に凌がるゝのが當時の風潮であつて、實力のあるところに權力が移るところの「下剋上」の形勢は、實に當時澎湃

りし「地方主義」の傾向をあらはすものであつた。

一〇

かくして形成されたのが、いはゆる群雄割據、戰國の時代である。世上この二百年をもつて、天下麻のごとく亂れ、人民塗炭のうちに呻吟する「暗黒時代」であるといはれてゐるが、これ中央主義的理想より律する不透徹なる見解であつて、實は地方主義による國力の充實、民力の涵養時代であつたのである。

第一に、中央權力の衰微とともに、人民は自由を樂むことができる。さらに綱紀の弛廢のために、人民は自己の地位を保存**するためには、自ら實力を養はねばならぬ**。たとへば一村が一村と爭ふにも、まづ民力を充實し、**隣保協同の實をあげねばならぬ**。かくして村々里々には自然的なる自治政が發達して、そこに平和なる民力充實を營むにいたつたのである。

第二に、爭鬪戰鬪は、いたるところに絕えなかつたが、これは武士階級のことであつて、庶民の關するところではない。かへつて武士は、戰爭に勝利を得んがためには、まづ民心を統一し、その生産力をあげなくてはならぬ理をよく了解せるがゆえに、つとめて人民の撫育政策をとつた。「下剋上」の世界においては、庶民こそ實力の所有者である。威勢は一時を糊塗しうるも、民心離叛しては覇業はなりがたい。かくして戰國時代は善政の競進會となつた。

第三に、かくして實力を基礎とする小組織ができ、ここに民力が充實すると、しだいにより大なる組織を要求するにいたり、豪家は小名に、小名は大名に併せられて、日本は十數の大大名に統一されることとなつた。奥羽の伊達、關東の北條、越後の上杉、甲斐の武田、東海道の今川、越前の朝倉、中國の大内、四國の長曾我部、北九州の大内、南九州の島津のごとき、その雄の雄なるものである。これらの大名は、各々その封疆を鎖して政治的に獨立せるがゆえに、自然と治民の術を考へ、その領内を治むるに必要なる法度を立つるにいたつた。たとへば武田信玄の百個條北條早雲の二十一個條、大内家の壁書、長曾我部元親の百個條、朝倉敏景の十七個條のごときがこれである。古の武將は半ば戰士にして半ば代官、誅求劫掠はその業であつたが、戰國時代にいたるや、國を有するものは單なる武將たるに止らず、また民政を重ずる政治家であらねばならぬ。かくして將軍の膝下かへつて私黨横行せるに、地方大名の治下には、整然たる地方政治がしかれつゝあつたのである。この小より漸大大に移らんとする統一的傾向、地方の實力を基礎とする政治組織、これをさらに助長して、一の大中央主義政治を現出する

のは、まつたく一擧手一投足の勞にすぎぬ。織田豐臣の覇業は、實にこの社會的要請に推進されたものである。

加ふるに民力の充實も、またより大なる組織を欲しつゝあつた。武田氏が甲斐の金鑛を採り、毛利氏の石見の銀山を開けるごとき、この時代のことであつて、貨幣はやうやく經濟界にあらはれんとす。農民の生活とその自治體制度の發達せしこととは、すでに述べたが、加ふるに諸大名の城下には、いはゆる城下町なるものが出現し、そこに若干の商工業が起るにいたつた。北條氏の小田原、大内氏の山口のごとき、すこぶる殷賑を極めた。これら大小の市邑に業を營む市民は、諸侯の保護寺院の保護の下に「座」なる制度をたて、平和なる生業を營むこと年あり、つひに「土倉」のごとき金融機關さへ發生して、その富力つひに王侯をしのぐにいたつた。いはんや大侯は寺院商民と聯合して自ら商業を營むあり、商業の發達とともに交通も發達し、「座」の發達にしたがつて、宿場宿場には「市」さへ生ずるの狀態である。なかにも堺、博多のごときは、すでに貿易の利によつて巨商の府となり、ことに堺が一の自由都市として、諸侯に獨立せる自治體の下に、富强を天下に謳はれたるごとき、天下一統、中央主義政治を要請するの、ます〳〵急なるを見るのである。

二

織田豐臣二氏の天下一統事業、およびその中央主義の政治は、その治世の短かゝりしにもかゝはらず、政治史上に特筆さるべき價値を有する。ことにその大部分が討征攻伐につひやされたるにかゝはらず、燦たる安土桃山の文化を發揮したのは、この中央主義を要請せる社會的時勢の反映であるといはねばならぬ。

信長が「天下布武」の印文を用ゐ、その子信孝には「弌劍平天下」の、信雄には「威加海内」の印文を用ゐせしめしごとく、かれは最初から天下の一統を理想とし、その目標に驀進したのである。不幸中道にして本能寺の變にたほれたが、その理想と事業は高弟秀吉によつて繼承された。この二英雄の中央主義は、その法制にも、その財政にも、その行政にもよくあらはれてゐる。

第一にそれは通貨政策にあらはれゐる。從來戰國割據の時代においては、區々の通貨が流通し、區々の法制的制約の下にあつたので、ために圓滑なる流通を妨ぐること多大であつた。信長こゝに觀るところあり、中央主義の理想を抱いて、上洛の志を遂ぐるや一五七〇（永祿十二年）ただちに「選錢令」を規定して、これを發布した。秀吉も一五八二年（天正十年）には天正通貨を、一五八八

年（天正十六年）には大判小判の金貨を、一五九二年（文祿元年）には文祿通寳を鑄造した。一五九九年（慶長四年）に一分半金を發行したのは、秀吉の遺命によるものといはれる。これ貨幣統一による中央主義の政治である。

第二は交通政策および關稅政策である。戰國時代にありては、軍事上險惡なる道路をかへつて便利とする風があつたが、中央主義の政治においては、平易なる交通と自由なる通商とが必要である。一五七〇年（永祿十二年）信長は、まづ幕府管內の關所を罷めて、關稅を廢した。伊勢を討伐したときも、同國の關稅をやめてゐる。一五七四年（天正二年）には、管內の道路の幅を三間と定めて、町村をしてこれを保護せしめ、道路の兩側に樹木を植えて、旅人の行通を便ならしめた。この道路修築、關稅廢止の政策は、ことごとく秀吉の襲用するところとなり、こゝに於て府行の良道路が開通して、日本の軍事的統一の事業を助くるとゝもに、産業の發展に資するところもまた少くなかつた。

第四は「檢地」すなはち地租の改正である。これは信長がすでに「指出」の名によつて、着手したる事業であるが、秀吉はこれを「太閤檢地」とゝなへ、一五八五年（天正十三年）いまだ四國征伐の多忙なる時期であつたにもかゝはらず、[illegible]の統一事業に着手した。[illegible]末代のために「御前帳」すなはち正確なる土地台帳を作るために檢地を行ふと稱して、これを勵行したものである。この檢地は、正確なる土地台帳の作製事業であるとゝもに、また田制の一大改革であつた。すなはち從來は、同じく一歩といつても、六尺なるあり六尺三寸なるあり六尺五寸なるあり、區々の制度が行はれてゐたのを、秀吉は一律に六尺三寸の竿を用ゐせしめた。また段の小制に大中小の區別あり、三百六十歩を一段としたのを、更めて三百歩を一段とした。枡もまた六合、八合、八合五勺、九合五勺、十合など、區々として一定しなかつたが、秀吉は十合の京枡を採用して、石盛を一定した。かくのごとく、田制と枡制を統一したのは、當時の財政收入の根元たる地租を統一して、その中央主義政治の基礎を堅めんとする志に出でたもので、租法は二公一民の法を採り、農民は收穫の三分の一を得ることにした。これは一面苛稅ではあるが、秀吉は同時に各種の雜稅を廢したので、事實においては土地の單稅主義によつて、財政的大改革をとげ、その中央主義を徹底したものであるともいへる。

第五にその政治組織としては、できるかぎり從來の諸侯制度を活用し、その上に嚴[illegible]なる中央政府を形成せんと企てた。すなはち、淺野長政、石田三成、増田長盛、長束正家、前田玄以

の五名を五奉行として、淺野・石田・增田の三人には立法・司法・行政を、長束には財政を、前田には京都市政および宗教事務を掌らせたのであるが、晩年秀頼を繼嗣と定むるや、その將來を慮つて、當時の五大雄侯たる徳川家康、宇喜田秀家、毛利輝元、前田利家、小早川隆景を五大老として、その最高顧問とした。思ふに雄侯の合議制によつて、中央主義を敢行せんとするにあつたらしい。秀吉が自ら、當時の經濟的政治的中心たる大阪にこの中央政府を開いたのは、その規模の雄大なるを賞すべきであるが、惜しいかなその合議制的中央主義は、秀吉の死とともに運轉を中止した。豐臣氏滅亡の原因は、この政治的欠陷に基くものといふことができやう。

二

豐臣秀吉を當時進步主義者の巨魁とすれば、徳川家康は保守主義者の頭目であつた。それは二人の性格にも基きまた境遇にもよる。秀吉は『草履を握りし手に天下を握る』ものにして、その本領は舊組織を破壞して新組織を立つるにある。しかるに家康は小なりと雖も一國の主にして、苦心經營の結果、その領土を擴大せりしものである。したがつて、前者が中央主義をもつて地方主義を撤ひ去らんと企てたりしに對し、後者は地方主義の土壌のうちより、中央主義的權力を培はんとしたのである。徳川家康が、中央主義の本場たる關西の地を去つて、地方主義の根據たる江戸に幕府を開いたのは、かれの深慮遠謀を示すとともに、その保守主義者たるの骨頂をあらはしたものである。

かくのごとくして、信長秀吉の手によつて、急速度の進展を試みたる中央主義は、天下徳川に歸するや、幾分の逆轉を示さざるをえなかつた。かれの保守主義、その地方主義的臭味は、第一に政治組織にあらはれ、第二に財政政策にあらはれ、第三にその產業政策にあらはれた。

家康の政治の根本方針は、徳川家自ら四百萬石の大諸侯として、その威力によつて他の諸侯を統御せんとするにある。かれは諸方に散在する大侯の存在を憎まざりしにあらず、これどこれに一大斧鉞を加ふるの英斷はなかつた。また大侯の勢力を無視せるにあらず、さりとてこれを中央政治の一機關として合議內閣制をとるほどの大度もない。一言にしていへば、「外樣」と稱する德川御內以外の諸侯を、敬して遠ざくるの策に出で、要地に「親藩」「譜代」の諸侯を配置して、大小の諸侯を牽制するに滿足した。そして內閣の當事者には、絕對に「外樣」を排斥し、德川一門の有能者をもつて形成せる內閣――すなはち大諸侯としての德川家の政治機關――をもつて、日本全國を支

配せしめたのである。これ後に發達して老中政治、大老政治となりしものにして地方主義の上に立つ徳川の勢力を永久に中央主義政治の當局者たらしめんとするものであつた。

この變態的なる政治組織は、したがつてまた變態的なる財政政策を生んだ。すなはち徳川は「將軍家」として日本全國の政治當局なるにもかゝはらず、その財政收入は大侯たる徳川四百萬石の收入にすぎない。尤も當時徳川家は日本一の大富豪にして、大阪落城の際に得たる豐臣氏の遺産は莫大たりしのみならず、全國の鑛山は殆んどその私有財産なりしがゆえに、當初は決して財政の窮乏を告ぐることはなかつた。しかしこの財政制度は**畢竟徳川家の私事業として**國家政治の公事業を營むの類、**決して永續すべきわけのものでない。久しからずして財政的困難が**、徳川政治の根本的欠陥となりしは、この變態的財政に基くものである。徳川氏の産業政策は、主として農業政策である。それも家康のいはゆる「百姓は生きず死なず」とするをもつて理想とせる、最も保守的なる政策であつた。これはよいとしても、かれは有名なる蓄財家たりしにもかゝはらず、當時勃興しつゝありし商工業に對しては確たる定見がなかつたらしい。しかも江戸幕府を開くや、盛んに關西の商工業者を招致して、この繁榮を求めたけれども、この商工業をば、いかにして中央主義政治に利用するかの點には、なんらの策を施すところはなかつた。

要するに家康は、四百萬石の大侯としては、理想的な政治家であつたが、天下の「將軍」としては、あまりに固陋なる保守主義において、あまりに執拗なる地方主義的臭味において、つひに天下一統中央主義の氣宇に欠乏する小政治家であつた。

一三

尤も徳川家康に、徹底的な中央主義政治を求めるのは、求むる方の無理である。かれは信長や秀吉のごとき革命児ではなく、むしろ漸進主義者の代表であつたからである。またその時代も、かれの政治を適當としたであらう。時勢はたゞ徹底的中央主義に熟してゐなかつた。かれが成功したのも、その地方主義的臭味にありともいへやう。

であるから、責むべきは家康にあらずして、むしろ後代徳川の政治家にある。かれらはあまりに「祖法」の政治を忠實に模したるため、つひに時勢の變に應ずるをえなかつた。これ徳川氏が、よく二百有餘年の治世を保てるにもかゝはらず、その國力は發展せず、あまりに[illegible]の結果として腐敗に陷り、ひいて[illegible]

文において、徳川時代に、いかに日本の生産力があがり、いかに社會は中央主義の政治を要請し、しかもいかに徳川政治がその要請に耳をかさゞりしか、これらの點を詳述することは、到底不可能である。これは別の機會に別の題目にて述ぶることとして、元祿のころ、すでに江戸に「吉原」なる遊廓が繁昌を極め、市中に「侠客」なる市民警察が發達して、庶民のために氣を吐ける一事のみにても、すでに民力は爛熟状態を呈し、しきりに中央主義を欲求しつゝあるにもかゝはらず、しかも地方主義的臭味を脱せざる幕政が、これに無關心なりし本質を想見するに難くないであらう。

徳川時代を概觀するならば、政治はなほ地方主義を脱せざるに、經濟はすでに中央主義を實行しすなはち政治と經濟との離叛時代であつたといふことができる。諸々の國には諸侯があり、かれらはその財源として、石高によつて計量さるゝ農業を擁するをもつて、泰然として自ら安んじてゐたのであるが、いづくんぞ知らん經濟の大權は久しからずして農業をはなれ、都市に居住する商工業に移つてゐたのである。されば政治者たる諸侯(したがつて幕府)は、經濟的實力の殘骸たる農民を抱いて、新經濟力の活躍を呆然と眺むるにすぎなかつた。

加ふるに政治上は、日本はなほ數十個國に分裂せるにかゝはらず、經濟上はすでに一個國に化してゐた。江戸を中心とする關東、大阪を中心とする關西の對立、これである。江戸にも大阪にも、「問屋」と稱する大商業、「組合」と稱する大會社、「株」と稱するトラストがあつて、經濟心臓をなしてゐた。「兩替」と稱する銀行が、その動脈であつた。全國の物資はこの二大都市を中心として集散し、金融の鍵もこの資本國が擁する。そして江戸は「金貨本位」にして、大阪は「銀貨本位」なるゆゑ、兩國の間に貿易關係さへ結ばれてゐた状態である。

この商工業の發達に對しては農業もつひに屈服せざるをえない。租米を財源とする諸侯は、まづその米の大半を大阪の「藏屋敷」に輸送し、大阪商人をして販賣せしむる。販賣といふのは名のみであつて、實は租税を抵當として融通をうけたる債務を、これによつて濟すのである。かくしては諸侯もまた經濟上は商人の指揮下に陥らざるを得ない。徳川時代大小諸侯中、商人より借金せざりしもの果してありや否や。租税を抵當として債務を興すにいたつては、財政權もまた商人の掌中にありといはねばならぬ。

諸侯すらかくの如し。そのほかに國家政治の重責を、私事業

として負へる徳川氏の財政が、忽ちにして窮乏に陥り、つひに四分五裂の醜態に陥りしは、いふまでもない。かれらはこの財政難を切り抜けんとして、まづ貨幣の改鑄を企て、悪貨をしてひとり跳躍せしめた。しかし其度毎に貨幣價値は下落して、物價は騰貴し、俸給生活者たる旗本を苦しむるのみならず、幕府自身をも苦しむる結果に陥りしはいふまでもない。或は幾度か「節儉令」を出して、町人の奢侈を禁じた。或は罪を構へて大富豪を闕所して、その財産を沒收するの暴さへ演じた。しかし漸々として隆盛なりつゝある商業の勢が、かゝる人爲によつて抑制さるゝ筈はない。或は足利時代の「徳政」を事實上に再演して、「舊債務の合法的踏み倒し」までやつた。しかしこの暴政は、商人のボイコットに遇つて、士人は悉く金の融通に逼迫し、もはや救ふべからざるに至つたのである。これらの愚策、暴舉は歴世の政治家の手を代へ品を代へて行ひしところであつたが、幕府は依然として財政難に苦しんだのであつた。

蓋し幕府の根本的疾患は、その地方主義を脱しえざりしにある。第一に財政政策として、窮乏せる幕府の財政を救ふの途は、ひとり諸侯をしてその幾分を分擔せしむるにあつた。にもかゝはらず幕府の政治家中には、一人としてこの英斷に出ずるものがなかつた。漸く後に至つて、當代の進歩主義者たる田沼意次が、一萬石につき百石の租税を諸侯に課したが・（悪政治家の標本たるごとくいはるゝ田沼が、この擧にいでたのは暴政に對する皮肉である！）時はや遅くして、諸侯もまたすでに財政難を訴へつゝある時であつたので、平易に實行さるゝをえなかつた。

第二には産業政策において謬つた。時代が商工業期に入りたらば、政策もまたこれに移らざるべからざるにかゝわらず、幕府は策すればたゞ商工業の脅迫のみで、この新興産業を政治力の中心となす政策は一つもとらなかつた。諸侯も幕府も、商工業者より借入れたる金を、踏み倒すことばかりに腐心して、平時これを政治的に利用することはしない。僅かに小額の「冥加金」や「運上」をこれより徴收するをもつて滿足し、積極的政策の如きは見るよしもなかつた。

第三には、地方主義の根元たる「武士」なる階級は、すでに無用の長物に化してゐた。しかも幕府はこの點にも無爲で、全く放任の態度をとつてゐた。元祿を過ぎて士道は益々廢り、兩刀はたゞ遊閑階級たるの表象として帶ぶるにすぎず、徒手して扶持米を待つのみなる状態に陥つたことは、この特權階級の致命的不要を證するものであつた。武士階級が經濟的に行詰り、或は浪人となつて一種の暴力團に化し、或は心あるものは兩刀をすてゝ商業をとれる時代に及んでも、幕府の政治家にはこの

根本問題に心を用ふるものはなかつた。元來武士階級は、その起原においても、その發達過程においても、農民の政治的代表者なのである。したがつて農民階級が經濟の大權を商工業者に奪はれた以上は、武士の廢止は社會的要請といはねばならぬ。

かるがゆゑに、若し幕府のうちに炯眼なる大政治家があつたならば、次の三政策を採るべきであつた。

第一に諸侯の自ら武士を養ふことを禁ずること。これは一方諸侯の財政的負擔を輕くするとゝもに、ひとり武人を有する幕府の威力を大にして、中央主義政治を施行し易からしむる所以である。第二に諸侯より租税を徴收すること。これは第一策によつて冗費を節したる諸侯にとつては、かならずしも不可能な負擔ではない。第三に商工業者を中心として、新なる中央主義政治をしくこと。これは經濟的にすでに中央主義を完成せるかれらにとつて、困難なる事業ではなかつた筈である。

一五

しかしながら、かくの如きも結局は机上の空論であつたかもしれない。若しできたら、最も良い政策であつたらうにもかゝはらず、それが事實上できなかつたところに、徳川幕府の運命の極まりし所以がある。而して徳川幕府にかはつて、これらの政策を實現したものが、明治の新政府である。そしてその間には、「明治維新」といふ大變動があつた。

明治維新は、「尊皇攘夷」の主張の下に行はれた。もとより一天萬乘の君に對する國民的信仰や、諸外國の強迫的な訪問やが、明治維新を斷行するの有力な動力・動機となつたことは爭はれないが、たとへ外國の壓迫なくとも地方主義的なる幕府の倒壞は、その必然の運命であり、中央主義的な明治維新の大業は、當時の社會的要請であつたのである。

明治政府が、徳川幕府に代つて、予の上に述べたる三政策を、さらに徹底的に斷行したことは、いふまでもない。明治五年の徴兵令の發布は、第一策の徹底したものであり、明治四年の廢藩置縣は、第二策をさらに突きつめたものである。最後に明治二十三年の國會開設こそ第三策、すなはち新興商工業を中心とする中央主義政治の具體化である。實に明治時代の政治史は、商工業の代表する資本主義を背景とするところの、中央主義政治の歴史であつた。

かるがゆゑに、この小史を完成するためには、明治時代における資本主義の發達と、これに伴ふ中央主義政治の發達とを、互に關聯せしめつゝ詳述しなければならぬ。しかしこれも、この小論文の企て及ばざるほどの大問題であつて、また他日機の會を待つほかないであらう。たゞこゝに附言したく思ふのは、最初にのべたるがごとく、近時やうやく「地方主義」の叫びが、諸方におこり來りしことである。これやがて「資本主義」凋落の事實をば、顧みて他を云ひつゝあるものではあるまいか。われらはこの疑問を念頭におきつゝ、靜に時勢の動くところを注視しなくてはならぬ。それが政治史家乃至は政治學者の任務であらう。

支那の動亂に就きて

法學博士　米田實

一

支那の動亂は愈々北京政府の根柢を搖かすまでに新發展を示して來た、顧みると、浙江督辦孫傳芳が大演習と稱して河舟を徴發し、軍用人夫の強制徴募をやり、續々兵を松江（江蘇省）方面に集め、又た湖州（浙江省）にも軍兵を動かし漸次北進の勢ひを示し來ると、新らしく江蘇督辦として赴任し、地盤堅からざる奉天系の楊宇霆は微力を顧みて十月十四日先づ上海よりの撤兵を宣明し十六日之を實現し、翌十七日孫傳芳の上海入りを見たのであつた、之が兎も角も南方直隸系の擧旗の端緒であつた、爾來日を重ぬる一箇月弱、此動亂は愈々本物となつたのである、本論を草する十一月中旬の形勢を言ふと、約五萬と稱せらるゝ孫傳芳軍は江蘇の北部に進出して已に徐州を占領し、之に對抗する山東督辦張宗昌（張作霖の部下で久しく奉天軍の頭目であつたもの）は約三萬の軍兵と共に步一步後退の姿である、その少し西北には同じく奉天系の李景林が五萬内外の兵を以て、一は最近急に洞ケ峠を下つて南軍に味方し始めたと云ふ河南督辦岳維峻が六萬餘の軍（ジョルヂ・ソコルスキー氏の數字では十四萬と言ふけれどもその半數は武器が無いので實勢力は六七萬と言はれて居る）に備へ、一は張宗昌の後部を保護して居る、顧つて新たに現はれ來た北方の張作霖、馮玉祥の對峙如何と見ると、直隸に於ては馮玉祥、約七萬の軍兵を動かし、北京を自已の勢力圏中に含めて、作戰の準備成れるに對し、奉天系は、張作霖の長男、本年僅かに二十五の青年將軍張學良、約七萬の兵を以て之に當り、同時に更らに少し東北方から闞朝璽を將とする約三萬の軍が若僧子の活躍を支持し若くは之と呼應す可く待ち受けて居る、斯くの如き大勢に對し、南方を見ると孫傳芳と相近き[illegible]三萬の兵を擁して漢口に[illegible]り、機を見て出動せんとし、其他江西の方本[illegible]、福建の周蔭人等も、[illegible]

苦しみつゝあるは本來奉天派と接近して居たけれども、周圍の事情「動く」の利害判明せぬ山西督辦閻錫山である、彼は日本の士官學校第六期歩兵科出身、第一革命以來山西を支配し、武人にも似合はぬ行政上の技能を發揮した人、但し今度丈けはその悩み實に同情を値ゐする、それは兎も角、形勢斯くの如く進展し、全國兵火の巷たらんとする今日に於て、段旗瑞執政の政府、果して繼續を期し得るであらう乎、段は支那人として珍らしく廉潔な人物、又た軍閥の故參として、信用厚からぬ譯では無いが、その張作霖に近かつた過去に累せらるゝ勢あるが故に、張馮の分裂はその地位を危殆にしたと言はねばならぬ、傳ふる所に依ると、彼は十一月十二日近畿の奉天、國民兩軍に歸還を命じ、最後の和平策を講じ「若しその命令聽かれざれば退位せん」と激烈に聲明した如くである、斯くの如き和平策が今更ら成功の望みがあるだらう乎。

予は刻々變轉する支那の局面、殊に表裏反覆常なく、甲に款を通じつゝある間に乙にも接近し、策動是れ喜ぶ彼等の活動の常態に照し、如何なる豫言も之を行ふの危險多きを感ぜねばならない、之は支那政治の實際を知る内外人の共に一致する所であらう、然かも予は唯だ刻下の支那の動亂が最早や昨秋以來一年を經過した段政府を危殆にしたことだけを指摘するの誤謬にあらざるを信ずるものである、而して之こそ實に十月二十六日以來協議を進行しつゝある列國關稅會議をしてその協議の相手を失はしめ、折角の會議を失敗に歸せしめんとするものではあるまい乎、否なそればかりでは無い、十二月十八日から開かる可き支那治外法權會議の開催、調査委員會の活動を中止せしめ以て、支那國民が久しく要望せる國權回復の機會を遷延遲滯せしむるの結果を生ずるのではあるまい乎。

是れ洵に容易なる事件では無い、依つて予は少しく此動亂につきて江湖諸賢と共に考へて見度いと思ふ。

二

然らば則ち今度の支那の動亂はドウして起つたのであらう乎。予はその直接原因として若くは最近的誘因として十月から開かれた北京の列國關稅會議を擧げねばならぬ。

蓋し一九二二年二月六日ワシントン會議中調印せられた英、米、佛、伊、日、白、葡、蘭、支の九國の關稅條約は、日英米以下諸國速かに批准したけれども、獨り佛蘭西のみは北清事件賠償金を爲替相場下落して居る今の佛フランの代りに金貨フラン勘定で支那から支拂つて貰はうと主張した爲め、支那との間に紛議があり、それで關稅條約批准をさへ遲延せしめたのであ

つた、ところが今次支那との間に在金フラン問題が解決したので、七月七日及十日に佛國下院、及び上院は之が批准を了し、八月五日漸くワシントンで各國の批准寄托を見、漸く條約實施とはなつたのである、而して同條約第二條には右關税實施の委員會を「條約實施後三箇月以内に開催」することに定めて居た、從つて誰か本年十月の關税會議が當然來られねばならぬ所であつたことを否認するものがあらう。然り、佛國の都合から久しく遲延したのをこそ寧ろ遺憾とせねばならぬ所であつた、故に今度の關税會議開催の正當なのは、言ふ迄も無いところである、同時に支那人としてはその國權回復の一歩として國家收入增加の一策として、歡迎せねばならぬのは、勿論であつた。

ところが支那各省に割據せる軍人即ち督軍連で、北京の段政府と利害を異にする面々殊に所謂直隸系の人々は、頗る之を快しとせず、所謂嵩略本位から之に反對するに至つたのである、何となれば彼等の所見に依ると、關税會議の結果、支那關税率これに[illegible]むしろ[illegible]關税收入が增加すると、それはそれ丈け中央政府の財力を強大にし、その強大となつた財力が中央政府の地方政府壓迫就中その反對派の地方勢力の討伐費に使はるゝのは見易い道理であつたからである、誰も知る通り今日の北京政府は財政難に惱んで居る、今日八千萬元位ゐと言はるゝ地租收入、三四千萬元と思はるゝ貨物税收入、三千萬元位ゐの雜税は、地方官憲から之が一部を中央政府に送らねばならぬ筈だが、實際では諸省督軍等恣まゝに之を占有し、以てその軍兵增加に費しつゝある現狀に在る、別に印花税、烟酒税等中央專款なるものがあるけれども之が中央財庫を霑す金額は微細に過ぎぬ。故に今日中央政府の重大の收入となり、新に中央政權の支持者たるものはドウしても目下九千萬元に達しつゝ關税收入に外ならぬのである。（此金額から英國借款の元利なども拂はれて居るが）ところが一九二二年二月ワシントン關税條約に依ると、現實五分以外に更らに附加税二分五厘を許さるゝ規定である、若し此規定が實行せられることになると、支那の關税收入は激增するのである、今支那財政部顧問パドゥ氏が一九二三年一月全國財政討議委員會に提出したものに依ると、右附加税二分五厘賦課の結果、税關收入は一箇年二千八百萬元の增加を見る可きである。之に自然關税增收三百萬元を加へて、合計第一年度に三千一百萬元の增收を計上し得可しと說いて居る、若しそれ新たに米國及び一部英國人側に說かるゝ「附加税五分」を許すの議でも出來ると、それは實に一箇年五千六百萬元の增收を齎さねば止まぬのである、此の附加税收入を重大ならしむるものには、此の收入無くして、附加税收入は中央財政にとつて[illegible]可き他の[illegible]

併存すること是れである、それは外でもない、現に税關收入から支拂つて居る英獨、露佛、外債元利關係の支出が年を逐ふて減小する形勢にある一點である、此一點があり、又た年々の關税自然增收三百萬元のあるのに、右の附加税收入が新たに起らんをして居るのである、(尤も日米側で新たに別の借款支拂の義務を支那に課する考があらうが、それも本來支那財政救濟を呼號した立場があるから、重い負擔を課す可きでは無い)、斯く考へて來ると附加税問題が將來如何ばかり中央政府を强力にするかは、言を俟たずして明瞭なる所であらう。

而して中央政府の强固繁榮は、抽象的に言ふと誰も欣ばねばならぬ所である、併し唯だ今日の如く段祺瑞、張作霖等の如く、南方の吳佩孚、孫傳芳と相好からぬ勢力が北京政府を支配する場合に於ては、南方派としては、北京政府の實力增加がやがて自己等を壓服する勢力の增加となることを、過去幾多の經驗に照して思はねばならなかつたのである、本來支那軍閥の爭ひは力の爭ひだが、それには武器彈藥の充實が主なる條件であり、之を支配するものは金力である、兵力の養成と之が服從的活動も給料の供給が第一條件である、殊に民國九年(一九二〇)の安直戰爭、民國十一年の奉直戰爭若くは昨秋の張作霖吳佩孚の戰鬪の如き、その勝敗が決定したのは正面の戰爭力よりも、裏面の金力活動を意味する買收と裏切りでは無かつた乎、茲に於て乎吳佩孚、孫傳芳等は下の如く考へた、曰く「關税會議の結果、段張の金力を强くするよりは、第一、關税會議を敗壞し、以てその財力を增加する機會を失はしむることこそ上策であらう、第二、關税會議敗壞が出來無いとすれば、少くとも段張等が未だ其附加税收入の恩惠で財力を增加せざる時機に於て速かに之を打破し、以て中央の權力を自己の手に收むるが賢策ではあるまい乎」と。

斯くの如くにして、吳孫等は猛然起ち、旗を長江に飜へしたのであつた。

三

併し關税會議は唯だ支那動亂の時期を決定したもの、換言すれば之を半年若くは一年早めたものであつた。決して之が根本的原因では無かつたのである。

根本的原因は何かと言ふと、それは矢張り十四年前、袁世凱が大總統に陞つた際、自己の勢力扶植策から自己が多年軍事教育に努力し、有力なる軍人を弟分、子分として有するのを利用し、之等を各省に分任せしめ、以て今日の督軍制の淵泉を造つたことを回顧せねばならぬ。殊に袁世凱死後になると漸く此等

を統御し得る人物無く、その麾下の直隷出身馮國璋、安徽出身段祺瑞及びその系統若くは親近者の競爭に依り、直隷派、安徽派の對峙を造り出したことを忘れてはならぬと思ふ、而して此直隷、安徽若くは反直派の爭ひは其後引き續き、兩派一盛一衰あり、民國九年安直戰爭、民國十一年奉直戰爭に依つて殆ど直隷派の天下となり、直隷派の曹錕遂に大總統となり、同派の花役者呉佩孚の統一策成功に近いが、昨秋の戰役は直隷派から見て如何にも不本意極まる戰敗で蹉跌したのである。それ丈け彼等としては復仇戰無くしては止むを得ざる狀態に立つのである。加ふるに所謂戰勝後の張作霖自身は如何と言ふと、自ら制することを知らず、各方面の疑惑と不平とを買ひ、次ぎに馮玉祥と張作霖との關係も過去一年に於て惡化し、直隷派の以て乘ず可き形勢を造り出したのである。斯くの如くにして天下の識者は、早晩動亂の發生を想像せずには居られ無かつた。多くはその時期を來年とし、來年春期となすもの多かつた。例を擧ぐると、露國代表カラハン氏など[illegible]モスコーに於て隨分淡泊無遠慮に支那形勢を論議し、張作霖、馮玉祥、呉佩孚の三軍が明春戰爭を開始せんと豫言せる如き、その顯著なるものゝ一つである。

斗は今之につき長く說明する餘裕は無い、併し之丈けでも簡單に過ぎるの嫌がある。故に今少し事情を述ぶると、昨年十月當時呉佩孚は資金の不足に苦しみ、交通組織の亂脈に惱んで居た、又たその軍隊は九門口、石門寨に於て奉天軍に破られた、又た山海關に於ける兵數も實數六萬を以て七萬餘の奉天軍に對せねばなら無かつた。然かも十月二十二日馮玉祥が張作霖に買收せられて豹變し、突如北京を占領し、クーデターを行ひ大總統曹錕を幽閉し、呉佩孚の免黜を聲明し無かつたならば、彼の如き悲運には陷る可くも無かつたのである、此失敗はドウしても自然の失敗として諦らめ得無い所たること言ふ迄も無い。

次ぎに南方の直隷派は如何と言ふと、九月反直派の浙江督軍（軍務善後督辦）盧永祥は直隷派の江蘇督軍齊燮元に破られ日本に逃亡し、直隷派の全盛狀態を現出したのであつた、それが十月北京の變あり、段祺瑞の出廬となると、段執政は十二月十一日齊燮元の江蘇督軍を免黜し、盧永祥を之に任命したのであつた。次で一月盧は張宗昌の軍隊に助けられて齊軍を打破し齊の日本逃亡となつた、併し之も南方直隷派軍隊の勢力集中を見た決戰では無かつた。言はゞ寧ろ北方の形勢が精神的に齊軍を不利にしたから起つたことであつた。而して其後の南方の形勢を見ると、直隷派の驍將孫傳芳（日本士官學校卒業、日本語に巧妙なる人）は浙江に據り、呉佩孚に近き蕭耀南は湖北督軍たり、直隷系の[illegible]人は依然[illegible]を支持し、其他江西の方本仁、湖南

岳州の呉佩孚等があり、依然毫も直隷系の優勢を失つて居らぬのである。左れば、別の事情と條件が加はらずとも、此等が就れ北方に反抗を策す可きは、勿論であつたと言はねばならぬ。然るに此間此直隷系の孫傳芳、呉佩孚の畫策を便とする新事情が加つたのである。之れ直隷派策士たを走せしめた[illegible]でも無い、北力で外形呉佩孚軍を破つた如き姿にあつた張作霖は成功の歡樂と榮譽に醉ひ、着々身分不相應の勢力發展策を講じ、以て反奉天熱を南方を始め各方面に起さしめたことである。是迄東三省に地盤を有した彼は先づ腕を直隷に伸ばし、その部下李景林（年四十、黑龍江警防隊にあり、民國七年奉軍第一支隊の團長として陝西に南征す、奉天戰後第一師長となつて居た）を直隷督辦とし更らに山東に亂暴の名ある張宗昌を督辦とし、同じく奉天系の姜登選（四十四、日本士官學校卒業）を安徽に、最後に楊宇霆（四十、日本士官學出身）を江蘇に送つた。斯くて各省の督辦其他軍人連をして徐々張作霖の大野心を疑ひ、各自の地位を憂慮せしむるに至つたのである。而して之が實に本年七月二十七日漢口會議及び三十一日雞公山軍事會議をして或は「武力詐術で侵略するものに對し正當の防衞の手段を講ず」或は「張作霖の勢力膨脹して長江一帶の均勢に動搖を生ずるを阻止する」を決議せしめたものなるに、世人の解知

し得るところであらう。

要するに此猪武者的奉天系の南下策が南方に於て直隷派同情者を増加し、否な支那全體に於て張を不人望にし、やがて所謂五省聯盟、九省聯盟等に反映して、直隷系の興廢の決意を刺戟した[illegible]誰か今に於て否認するの勇氣があらう。

四

但し亦た此の南方直隷系と奉天系の爭ひをして最近擴大、全支全國的動亂化せしめ、北京方面をさへ其渦中に入らしめつゝあるは、實に最近馮玉祥の態度なることも疑ひが無い。

顧みるに本來馮玉祥は安徽省の出身である、故に段祺瑞の系統であらねばならなかつた。然かも段氏能く之を用ゐず、却つて曹錕等之を擧用したので直隷派の歸化人たる姿があつた。而して彼が努力如何に一九一一年奉直戰等に於て曹錕、呉佩孚を助け北京政權を獲取せしむるに効あつたかは、天下熟知する所である、又た奉天戰後、彼れは河南督軍に擧げられ揚威將軍を授けられ、更らに陸軍檢閲使となり、榮達見る可きものがあつた。然かも彼の勢力増進するにつれて、彼と呉佩孚との間に溝渠が出來るのを如何ともすることが出來無かつた。蓋し呉佩孚は武人に珍らしい碩學深く、改革的手腕も持つて居り、而[illegible]

大總統時代の如き實に彼こそ實際的支配者となつて居た。又た潑溂たる活動振りは人を魅するものもあつたけれども、唯だ何分にも偏狹と嫉妬とに累せられた、たとへば勢力增進する馮玉祥に對しても、餘りに警戒を加ふるやうになつて來たのである、ソコデ呉佩孚の成功直隷系の天下統一の成就はやがて馮玉祥の沒落を來すやうに馮自身にも思はれて來た、此際なればこそ馮は更らに奉天系の黄金に依る買收策にも動かれて戈を逆にして、鄕里の先輩段氏の許に奔つたのに外ならなかつた。ところがその結果呉佩孚南方に逃亡し、邪魔物茲に除かれたと思つたのも、束の間で、今度は殘つた北方の二大勢力、即ち張作霖と彼自身との葛藤が始まつたのである、而して張作霖は呉佩孚軍に對する正面的戰勝者として意氣揚々、漸々勢力を直隷山東方面にまで伸ばし、その兵力の如きも實質は二十七八萬位ゐであるとしても、兎も角自ら四十萬を呼號するやうになつて來ると馮玉祥自身も兵力增加に腐心し實質は七八萬位ゐであるにもせよ、自ら二十萬位ゐに吹聽せらるゝやうになつた、即ち彼等は呉佩孚排斥にこそ協力したけれども、その事業が終ると、支那の軍人が常に辿る經路を繰り返し、遂行したものゝ間の爭ひを互ひに始むるに至つたのである、而して馮玉祥は支那將來の政治が軍閥ではいかぬことを觀取して、國民黨の所謂主義と

接近すると、それは國民黨と相近き勞農露國系との接近を促すやうになつた、此一事は馮をして露國側より武器供給を得せしむる一大便利を造つたけれども、同時に勞農露國と事毎に衝突し犬猿啻ならぬ張作霖と彼との關係をも一層惡化したのであつた、茲に於て乎露國側でも、米國側でも、否な或程度に於て我國の一部人士間にも張馮の衝突は必然であり、それは唯だ時の問題と目せられて來たのであつた。併し乍ら馮としては未だ自力のみを以て張に當る準備が完了して居らぬ、故に彼は第一歩として差當り張と呉孫との對抗狀態を利用し、直隷方面に於ける自己の地位を有利ならしむるの策に出でんとした、蓋し此策に成功すれば、戰はざるも、自己の地盤を堅うするの利あり、又た將來戰ふ場合に對しても彼をして今日以上有利の條件上に立たしむるものであるからである、最近張馮妥協條件と傳へられた「張の軍隊の後退と馮軍に對する資金供給」の條件が是れであつた、ところが張作霖は之を拒絕したのである、彼は之が承諾を以て奉天軍の中原放棄を意味するものと考へたからであつた、茲に於て乎馮軍動き、直隷の戰亂近きを思はしむることゝなつた、同時に山東、江蘇の奉天軍は背面に襲ひを生じて、奉軍の脅威急に衰ひ、今日迄河ケ岸に在つた河南の岳維峻（一方には敢て呉佩孚に通じ乍ら、中心呉佩孚の成功が二の舞

根據地河南を彼から奪はんことを恐れて居た男）等も、利害を打算して參戰の氣勢を示すに至つたのである。

支那の局面は簡單では無いが、先づ刻下の事情を概略すると、先づ以上の如きものだらうと思ふ、故に予は之位ゐで此項を終り度い、猶ほ人或は曰はう、孫傳芳、呉佩孚、馮玉祥、張作霖等は最初から秘密結託して居たでは無い乎、密使の往復と交渉を見て居たでは無い乎と、秘密交渉、密使往來は予も之を認むる、然かも同一の時機に於て異れる方面に正反對の交渉をなし若くは了解を遂るの危險なる藝當を演じ、その間で巧みに自己の安全と發展とを期せんとする支那現代軍人の常態は、世人の忘れてならぬ所である、彼等は最後の瞬時に於て如何やうにも自己の利益の爲めに自由に行動を選擇して憚らないのである、それ迄の行爲や現象や多く權略であり、或は外交的遊戯である、會議（自分では出ず、大抵代表者と言ふものが出て居る）と云ひ、盟約と言ふも此外に出でぬのである、是れ恐らくは世人が記憶せねばならぬ一要項であらう、同時に又た常に支那の局面が雨降らんとして、晴れ、晴れんとして雨降り、變轉常なきを示す所以であらう。

五

事情は之位にして、終りに起る問題は「此動亂は如何なる影響を支那に及ぼす可きかであらう」が之れである。内政方面は將來に委し予は差當りその對外方面につき一言して置きたい。

（一）此事件は外國人の支那國權回復論支持を減殺する虞がある、然し何れの邦國に在つても今度の如く國家の重大なる權利の回復、收入の増加を意味する關税會議其他國際會議が行はるゝ場合には、平素仇敵の如き朋黨も、その爭ひを中止し、國家の權利々益増進を期圖するのが常である、然るに支那の今度の事例こそは、その正反對に出でたものである、之は軍閥に對する外國の輕蔑と嫌惡をも増すだらうが、他面には同じく外人をして支那に於ける國權回復論の强さを實際以下に評價せしむる傾向あるを拒むことが出來無い。

（二）刻下の關税會議が動亂のため中止となるか否かは別とするも、今回の件は甚しく支那人の行政的能力に對する外人の信用を失はしめ、それは自然累を關税問題に及ぼさねばならぬであらう、例を擧ぐれば、英米は關税率増加につき釐金税撤廢問題を重視して居る、然かも今回の如き國家無視、私利萬能の軍閥の遣り口に徴し、彼等は果して「地方に於ける貨物税」たる釐金税撤廢を許すであらう乎は外人間の疑問とならう、此點は最初から疑はれたが、今回の擧でその疑惧は大に深めらるゝ

ものと言はねばならない、殊に目下米國も英國も支那の稅關收入增加を許し、或は進んで自主權を許すにつきては、稅關收入の使途を外國に於て管理せんことを主張して居る。此空氣は十月二十六日以來開催されて居る關稅會議たるものにも現はれて居る。之れ一は現在支那の租稅收入を含む財政の亂脈にも刺戟せられゝば歐洲で一九二二年國際聯盟の手で行つた墺地利國財政救濟に關聯して外人の手に依るその財政管理策を試みて大に成功したる事績、次で一九二三年之を洪牙利に及ぼして成功し最近例のドーズ案として獨逸に及ぼして成功しつゝある經驗にも動かされたものであらう。併し事情原因何くに在るにしても、今回の事件は支那人が反對しつゝある支那の財政交通等の國際管理論を英米以下外國人間に優勢ならしむる傾向あるものと言はねばならない。

(三) 次ぎに本年十二月十八日から支那で治外法權會議開催せられ、支那に外人關係の裁判權、警察權を回復するの問題が協議せらるゝ筈だが、今回の動亂は或は一九二二年の先例通りに又々同會議の延期を促すのではあるまい乎。假りにそれが開かれたとしても、今度の如き非國家的軍閥跳梁振りこそは、更に英米等外人をして司法權の獨立能力を疑はしめその生命財產を支那政府に託するを危惧せしむる原因となり、法權回復期を遷延せしむるのではあるまい乎。

之を要するに目下の動亂は予等の如く支那青年の國權回復に至深の同情を有するものをして、折角の希望實現に於ける歐米人の協力を衰へしむる惡果無き乎を憂へしむるものである。然り予は斯くの如き心理を以て目下發展中の支那動亂の形勢を見ねばならぬことを悲しむのである。

社會政策的見地より三黨の稅制案を評す

無產者負担加重の稅整案

高橋龜吉

一

來期議會に於ける中心問題は、今の所、何と云つても稅制整理であり、而して、その稅制整理は、普選後初めての政治的重大問題であるだけに、憲政本三派とも、流石に、その稅制整理案に於て民衆の意を如何にして迎へんかに少からず心を傷めてゐる。併しながら、いま、三派が發表したそれぐ\の稅制整理案について見るに、なる程、之れを部分的に見れば、社會政策的効果の少からぬものを含んでゐるに違ひないが、之れを綜體として見るときは、後述の如く、左で無產階級の頭をなでながら、右でその頰をなぐりつけ、結局、無產階級の犧牲によつて、資本家階級の利益を圖らんとする不公平極るものに終つてゐる。

之れを陰險なる謀と見るには、餘りにやり方が子供だましである。思ふに、この事實はたまぐ\、我國既成政黨の頭の働き方が、如何に資本家本位に化石し去つて、最早民衆の利益と云ふことを、識別する判斷能力無きに至れるかを實證するものと解すべきである。然り、斯樣に理解してのみ、既成政黨及びそれの背後にある資本家階級に尠くとも社會政策を行はんとする善意のあることだけは、之を認めると共に、併し乍ら、彼等には、

民衆の利益を圖る能力の全々色盲的に缺けてゐることを認めさるを得ないことが實證せられるのである。

斯く云へば、既成政黨の立場にある人々からは、恐らく、之れを理由なき罵詈、偏見だと抗議するに違ひないが、しかし、左様にイキリ立つ前に、先づ、次の出來事を味ふがよい。或る時、或る團體が慰勞旅行をやつた。費用は不景氣の此際、極めて切り詰めたものであつた。當日目的地に着くと、旅舍で直ぐと出たものは酒であつた。藝者であつた。下戸（全體の約三分の一以上）は空腹を耐えて、飯の出るのを待つたが中々出て來ない。しかも、會費が安い上に、藝者を呼んだり、酒に力を入れたりしたので肴は貧弱で、とても空腹を滿すに足らない。必然に不平が湧いた。しかも、その歸途、舟遊した所、舟の中へも、酒客に適するもののみで、下戸黨の口に適するものは何一つなかつた。斯様なわけであとで、下戸黨から幹事に抗議が出た。幹事曰ふ「慰勞旅行だ、酒と藝者は必然ではないか、舟遊に下戸黨の口に合ふものがないと云ふが、そのためにサイダーがあつたではないか」と。上戸黨は酒のやうに、下戸黨がサイダーを何本か呑みほすと思つてゐるらしい。慰安旅行と云へば、酒と藝者がなくてはならないものと確信してゐる [illegible]

つて、ウマイものを食つて勝地を漫歩したかつた。サイダーはコップ一パイ位ひはウマイが、そのあとはビールや酒のやうに呑めないものだ。兎に角、この事件の結果、下戸黨の自覺したことはこうであつた。上戸黨の幹事のやつたことに少しも悪意はない。しかし、彼等は頭から、さうした旅行が上戸黨本位でなくてはならないものと盲信してゐる上に、たま〳〵下戸黨のためにに「社會政策」をやつたつもりのサイダーが、結局、下戸黨は呑まずに、上戸黨の酔ざめの水代りの甘露となつたに過ぎなかつた。斯くて、會費は同一でありながら、下戸黨のために支出せられたものはその四分ノ一にも足らず、四分ノ三は上戸黨のために使用して、しかも、それであたり前だと思つてゐる。

下戸黨は下戸黨自分その利益を圖る幹事を出し、且つ、會費は尠くとも、上下戸兩黨の利益のため、等分に支出せられることを主張して、上戸黨の迷夢を破らなくては駄目であろ。とつ しかも尚ほ、注目を要することは下戸黨が右の決議を、上戸黨の首領株に呈出すると、その首領は日頃は極めてものゝ分つた人で、皆んなの尊敬してゐる人であるにも拘らず、「そんな我儘を云ひ出すやうなら、これからはもう、そんな旅行や會合は出來ないと云ふことを [illegible]

公平の待遇をすると旅行や會合が出來ないと云ふたら、旅行や會合は今後はやめる外はないと思ふ」それが下戸黨の答へであつた。

右の例に於ける上戸黨の考へ方、（そこには惡意が少しもあるわけではないが、）と資本家的既成政黨の考へ方との間に、私はいま同じ種類の階級的色盲を見出すものである。いかにも意識的に、惡意を持つて不公平極ることをやるものではないかも知れぬ。併し乍ら、實は、惡いと知つて惡いことをするものよりも、善いと確信して惡いことをする方が、仕末に困るものである。況んや、無意識に不公平なことをすると云ふことは、實は、それだけ、考へ方が横暴、我儘の結果であつて、若し、その横暴、我儘が阻害せられると云ふが如き場合には、先には無意識的に不公平をやつてゐたものを、今度は意識的に不公平をやらうとするが凡人の常であるに於てをや。

二

然らば、三派の税制整理案が、何故に、部分的に見れば社會政策的のものを認めるが、總體的に見れば、結局、無產階級を犧牲にして、資本家階級を利益せんとする、不公平極る、反社會政策的なものであると云ふか。先づ三派の案の指導的位地にある政府案について見ることにする。

いま政府の發表せる所によると、政府自ら社會政策的法案なりと高唱する税制整理案は次の五點である。

一、所得税の免税點八百圓を一千二百圓に引上げること。

二、地租の免税點を設ける（免税點は差向き田畑に限、一市町村内に於ける價格二百圓とす。）

三、營業税の免税點も營業純益四百圓とする。

四、相續税の免税點を引上げ、家督相續五千圓、遺產相續一千圓とす。

五、綿織物消費税を免除し、通行税、醬油税、自家用醬油税、賣藥印紙税を全廢する。

所が、政府案によると、右の結果による減收其他を塡補するため、新に、左の如き消費税を新設乃至增徴する筈である。

一、酒造税、ビール税、及び酒精含有飲料税を增徴すること

二、清涼飲料税を創設すること

三、關税を改正引上げること

四、煙草の値段を引上げること。

以上の結果、主として無產階級の負擔に歸する間接税は、如何なる差引計算になるかと云ふに、左の如く、

減廢税		創設乃至増税	
通行税	一一、三〇六千圓	酒造税	一九、八二八千圓
醬油税	七、一五一	ビール税	五、〇二九
賣藥税	一〇、四四六	酒精及酒精含有飲料税	四一七
綿織物税	二四、九九五	清涼飲料税	四、九四六
		小計	四〇、二二〇
		關税引上	二五、〇〇〇
		煙草引上	一五、〇〇〇
合計	五三、八九八	合計	八〇、二二〇
		第二合計	一〇五、二二〇

廢減税五千三百八十九萬八千圓に對し、新増税八千二十二萬圓に上り、差引二千六百三十二萬二千圓の増税となるのである。いかにも、醬油、綿織物、賣藥等の日常必需品の課税が減じて、酒類や煙草等の嗜好品に課税が移されたと云ふことはある。それはその限り良いことであること勿論だ。しかし乍ら、之れを無産階級全體としての負擔と云ふ點から見れば、輕減所か、却つて、加重されてゐるのだ。しかも倚ほ世の注意から逃れ勝ちであることは、右の増税の中に關税のあることだ。いかにも關税引上の結果政府の手に入る増收は二千五百萬圓に過ぎない。しかし乍ら、之を無産階級の負擔と云ふ點から見れば、輸入税が引上げられただけ、夫れ丈に、内地生産品の價格も引上げられ、[illegible]けであるから、假りに、内地生産高を輸入の五倍（實際はそれ以上であつても以下ではない）と見ると、右の増税の外、無産階級は新に一億二千五百萬圓の負擔を増し、それだけを資本家に貢ぐことになる。さうすると、前掲の表に第二合計とある如く、無産階級は約五千四百萬圓の間接税を輕減せられる代りに、新に二億五千餘萬圓の負擔を加重せられたことになる。しかも、關税引上げによる無産階級の負擔の加重は、日常必需品にも及ぶものである。斯樣な税整案を出しながら、如何に無産階級の利害に色盲であるとは雖、倚ほ之を社會政策的税制整理案だと云ふに至つては、最早、眞面目になつて批評する埒外にあるものと云はねばならぬ。

なる程、この外、政府案は、既述の如く、收益及所得税の免税點の引上げ乃至創設によつて、中産階級の利益を圖つてゐる。それの大部分は、國民の大多數を占むる純無産階級にとつては、利害關係の殆んどないものとは雖、倚に負擔の公平と云ふ點に於て、少からぬ社會政策的効果を持つてゐる。そこで、いま、その減税をも考慮することにすると、その總額は後述の如く僅か一千九百三十四萬一千圓であつて、之れに、間接税の[illegible]

れてゐることを少しも變更するものではない。

三

所で、いま有産階級より見た税制整理の結果を見るに、なる程、特に資本利子税が創設せられたこと、相續税の累進率が高くなつたと云ふことは、その限り、確かに税制の進歩であるが、しかし乍ら、資本利子税の税率は僅かに百分の二の比例税に過ぎず、相續税の累進率亦後述の如く尚ほ極めて低いものである。然るに、政府は他方に於て、地主階級の歡心を購はんがために、社會政策的立場から云へば、元來ならば増率すべきが筈の地租を大膽に百分の一だけ減税せんとしてゐる。これ等の結果、専ら有産階級の利益に關係する收益及所得税は如何なる差引狀態になるかと云ふに、左の如く、

減税		増及新税	
法人所得改正	六、五二三	資本利子税創設	一五、六〇四
地租減税	九、六九三	相續税率引上	六、八七三
營業税改正	三、八七九	……	……
小計	一九、〇九五	合計	二二、四七六
所得免税點引上	四、三二四	……	……
地價二百圓以下免税	一二、一六六	……	……
營業税免税點引上	二、二〇四	……	……

相續税率引上	三、四六七		
小計	一九、三四一		
合計	三八、四三六	合計	二二、四七六

減税三千八百四十三萬六千圓に對し、増税は二千二百四十七萬六千圓に過ぎず、差引一千五百九十六萬圓を利してゐる。その上に、關税引上げによる利益一億二千五百萬圓を加へると、合計約一億四千百萬圓を利益することとなり、それだけは主として無産階級から搾取せらるる筈である。

尤も、右の有産階級の減税の中には、主として中産階級即ち小資本家的階級の利益を目的とする、免税點引上げによる減税一千九百三十四萬一千圓を含んでゐる。そこで、いま、之れを差引くと、資本家階級の減税は一千九百九萬五千圓となり、之に對し増税は二千二百四十七萬六千圓を算するから、單にこの點から云へば、一見資本家階級の負擔は僅かながら約三百餘萬圓を加重せられたことになるが、しかし、この外に繰返し述べる如く、資本家階級は、尠くとも一億二千五百萬圓の關税引上げによる利益を、主として無産階級より利得する仕組みになつてゐるから、實質に於て、今度の税制整理は、何れから見るも、資本家階級にとつては大々的な福の神である。

四

以上は專ら政府案について見たのであるが、之れに對する政友、及び政友本黨案も、その實質に於ては、大體に右と大差はない。例へば、本黨案の政府案と異る主たる所は、政府案の地租百分の一減、及び地價二百圓以下免税に反對して、本黨は自作農土地の免税を主張してゐる一點であつて、この限り、確かに、本黨の主張がより社會政策的である。しかし、それは、彼れの税制整理案が、甚しく、資本家本位のもので、無産階級に多大の犧牲を强ふるものであると云ふ根幹に比すれば、極めて枝葉は云ふに足らぬ「社會政策」に過ぎない。

政友會案亦、その資本家本位で、無産階級の利益を無視する點に於て、大體に、政府案と大差なく、否、或る點から云へば、**政府案以上の資本家偏重のものである**。いま、政友會案の政府案と異る主なる點を見るに、政府の地租政策に反對する代りに、地租約七千數百萬圓を市町村に委讓し、その財源を四千萬圓の營業收入の增徵と、既成行政整理の一部から捻出せんとすること、及び、酒類の增税を從價三割税に改正することによつて達成せんとすることに在る。同じく酒税を引上げる理由ならば、今日の如く、一升二圓の酒も五十錢の酒も同一税金を徵[illegible]する從量税よりも、政友會案の如く從價税によるが、より公平であることに說明はいらない。問題は地租委讓である。之については、二つの觀點がある。一つは、地租委讓が良いか惡いか。一つは、地租委讓可なりとしてその財源は何によるを可とするか、である。

私は、地租の委讓の可否については、之れを市町村に委讓すべしと考へるものである。しかし、その理由は、政友會の如く、之れによつて、農家の負擔の減少を計らんとする意味に於てではなく、（その意味であるならば、政府や本黨の主張する如く、他に幾多の良法もないではない。）地方自治發達の先決問題としてである。思ふに、今日、租税負擔の不公平、及びその税金利用の無効率及び不公平なる點に於ては、中央財政も甚しいことさることながら、それにも增して地方財政に於ては甚しい。しかも、この主因は、地方自治體に獨立財源なく、必要の資金は乞食の如く頭を下げて、府縣乃至中央官憲に哀願する外なきことに淵源する。蓋し、斯樣な金は、一度び市町村の手に入れば、所謂貰つたもので、自然、其處に濫費に陷ること、恰かも、自ら働くことなくして親から貰つた金が濫費せられ易いと異る所にない。されはと云つて、その支出する[illegible]

[illegible]

税の公平を[illegible]し得る地方團體に於ては[illegible]せられず、茲に、課税の不公平と、それの濫費と、自治の不熱心が培はれるのである。然るに、いま之れを根治する方法は、地方自治體に、出來るだけ多くの獨立税源を與へる外に方法はない。斯樣のわけであるから、私の立場から見た地租其他の市町村委讓は、若し、適當の財源が無いならば、地租の決定權を市町村に與へて、中央財政が之れに附加税（今日市町村が地租に附加税を課するのを逆にして）を課し、以ていまのまゝの地租收入を維持してもよいのである。

所で、政友會が、一方に地租を市町村に委讓しながら、他方に、その財源として、四千萬圓の關税引上げを行はんとするは、一方に地租委讓によつて、農村就中地主階級の地方税負擔を輕減すると共に、他方に、この財源を關税の引上げに求めて、之によつて約二億四千萬圓（關税引上四千萬圓と、外にその五倍に相當する内地生産品の物價騰貴）を無産階級より搾取し、その中、二億圓を商工資本家に、四千萬圓を地主階級に與へ、一石を以て二鳥三鳥をも打たんとする、不都合極る考へからである。斯樣にして、三派の税制整理案は、それ〴〵、多少その形式と内容を異にするが、その實質に於て、甚しく、無産階級を剝し、資本家の利益を大に擁護するものであることに於て大差

[illegible]税引上四千萬圓を企圖せることで、次に惡いのが、政府案、最後が本黨案である。斯く云ふも、之れは、無産階級對資本家階級の負擔の立場から云ふことであつて、之れを、無産階級自體の中に於ける、負擔の公平化と云ふ立場から見れば、必需品に減税せられて、嗜好品に重課せられたこと、及び免税點の引上げられたこと等は、少からぬ社會政策的効果を有するものであることと云ふ迄もない。

五

元來、今日に於ける我國税制整理の目標は、我が限られたる資金を、社會の發達のため、最も有効に利用し得るやう、再分配すると云ふ點に、主力を置くべきである。それが最も有効な「社會政策」の方法であつて、これ以外に、税制の「社會政策」的効果の大小を計る方法はないのである。所で、資金は、現實に、社會のために働きつゝある人々の手にあることが最も社會的に有効に利用せられる筈のものであり、遊食奢侈するものゝ手にあることが最も社會的に濫費せられるものであると云ふことは、殆んど疑問のない所である。又、自ら額に汗して働いた收入は最も有効に利用せられ、苦勞せずして遊食しながら

還入つた收入が最もよく濫費せられ易いものであると云ふことも間違ひのないことだ。しかも、之れを租稅の負擔力から云ふも、その性質上、勤勞所得は負擔力最も小さく、財產所得は負擔力最も大なるものである。

斯樣のわけで、若し此際眞に「社會政策」的稅制整理を行はんとするならば、勤勞所得、現に働きつゝある無產階級の負擔を極力輕減して、財產收入、遊食奢侈階級の負擔を極力增加すべきである。例へば、消費稅は之を奢侈品のみに限るべく、しかも、一國の租稅の大部分は、收益稅及び財產所得稅、並に一定程度以上（國民として有能の働きをなし得るに必要な生活費を標準とする）の勤勞所得に對する、所謂直接稅に依賴すべく、就中、財產所得、遺產相續等には高率の累進稅を課すべきである。然るに、いま、我が國の租稅收入の內容を英米兩國に比するに、左の如く、

日英米租稅負擔內容の比較

日本（十三年度現計）	千圓	％	英國（一九二四－二五年實績）	千磅	％	米國（一九二四年度決算）	百萬弗	％
收益及所得稅	三〇九、九八七	三〇・八		四一六、二二八	六〇・五		二、〇三七	六一・三
地租	七三、一三四		地稅	一、四五〇		所得稅	一、八四一	
所得稅	一六五、八四五		所得稅	三三七、三二六		法人資本稅	八七	
營業稅	五六、〇二六		會社利得稅	一八、一〇〇				
鑛業稅	五、八八四		……			營業稅	七	
相續稅	一一、一四八		遺產稅	五九、四六五）		……		
消費稅	五七五、一〇三	五七・四		二〇〇、六三六	三六・三		一、一九四	三五・九
酒稅	二三一、三〇四		自働車稅	一六、一六四		酒稅	二七	
醤油稅	六、八五六		……			……		
織物消費稅	六四、七五四		……			……		
砂糖消費稅	六二、五八五		……			奢侈的消費稅	二二一	
石油消費稅	一三九		……			「其他」	八六	
關稅	八九、三〇九		關稅	九九、三一四		關稅	五四五	
專賣局益金	一三〇、一五七		其他	一六、一六四		煙草稅	三二九	
行爲稅	一二八、四〇八	一二・八		三三、八五〇	二・四		九二	二・八
通行稅	一一、一三八		……			電信電話稅	二四	
取引所稅	一三、七六三		……			……		
兌換券發行稅	六、八〇四		……			……		
噸稅	一、二七五		……			……		
印紙收入	八六、六八八		印紙稅	二三、八五〇		印紙稅	三八	
合計	一、〇〇三、四九七	一〇〇・〇		六八九、七二二	一〇〇・〇	（其他共）	三、三四一	一〇〇・〇

英米兩國が、その租稅收入全體の六割餘を、收益及所得稅に依賴し、消費稅に對しては僅かに三割六分內外を課するに止るに對し、日本は正反對に、その五七％以上、即ち約六割を消費稅に依賴し、收益及所得稅に對しては僅々三〇％八（三〇・八％）[illegible]にすぎない[illegible]

的で、如何に資本家本位で、如何に無産階級のみを苛斂誅求してゐるかが誰にも分るであらう。にも拘らず、今度の税制整理案は、例へば代表的に政府案に從ふと、既述の如く、消費税を更に增加して、收益及所得税を逆に減少せんとするものである。この結果、税制整理の結果は、我が租税收入全體の、五九%三一を消費税に重課し、收益及所得税は二九%〇三に輕減することゝなるのである。誰れか、斯の如き逆轉惡化の税制整理案に「社會政策」の名の冠せんとするぞ。

いま念のため、我が税制が、英米に比し、如何に資本家擁護のものであるかを例示するため、政府が、その唯一の社會政策的增税と誇りつゝある相續税累進率の增加を、現行英國のそれと對比して左に示すであらう。

日英相續税率比較表

日本	現行	改正
五千圓以下	〇・五	〇・五
五千圓以上	〇・六	〇・六
一萬圓以上	〇・七	〇・七
二萬圓以上	〇・八	〇・八
三萬圓以上	一・〇	一・〇
四萬圓以上	一・二	一・五
五萬圓以上	一・四	二・〇
七萬圓以上	一・七	二・五
十萬圓以上	二・〇	三・〇
十五萬圓以上	二・五	四・〇
二十萬圓以上	三・〇	五・〇
三十萬圓以上	三・五	六・〇
四十萬圓以上	四・〇	七・〇
五十萬圓以上	四・五	八・〇
百萬圓以上	六・五	一〇・〇
三百萬圓以上	六・五	一二・〇
五百萬圓以上	六・五	一三・〇
……		

英國(一九一九年實施)	%
五百磅以下	一
五百磅以上	二
一千磅以上——五千磅以下	三
……——一萬磅以下	五
一萬五千磅以上	六
二萬——二萬五千磅	七
二萬五——三萬磅	八
四萬磅以上	一〇
五萬——六萬磅	一一
九萬——十一萬磅	一四
三十萬——三十五萬磅	二二
五十萬——六十萬磅	二六
百五十萬——二百萬磅	三五
二百萬磅以上	四〇

即ち、之によると、十五萬圓以上二十萬圓以下に於ては、英國の六%に對し日本の四%であり、その差已に甚しと雖も、尙ほ之をそれ以上の相續高に比せば赦し得る。即ち、三百萬圓以上に於ては、英國の二二%に對し日本は僅かに一二%(しかも改正の結果さうであつて、現行は僅かに六%五と云ふ話にならない低率である)五百萬圓以上英國は二六%に對し日本は一三%(現行は六%五)である。以て、此際に於ける我國の税制整理が、更に〳〵、財産税の增徴、就中その累進率の引上げによるべきであることを伺ひ得るであらう。殊に、地代收入、家賃收入、利子、配當等、自ら、資本を利用することとなくして、之

を他人に利用せしめながら、遊んで、財產收入を得つゝある所得に重荷すべきである。

三黨の稅制案と其社會政策的立場

安部磯雄

社會政策の立場から現政府の稅制整理案を批評し、同時に政友會及び政友本黨のこれに就いて簡單に私見を述べて見たい。

社會政策的立場と云つたが、元來社會政策の意味は、之れを要略すれば、比較的貧い階級の負擔を輕くして、比較的富んだ階級の負擔を重くすることが其眼目であつて、此立場から此度の稅制整理案を見れば、政府は勿論、政友會及び政友本黨も出來る丈け社會政策的方針を執つて居るやうである。これは或意味に於て殆んど社會政策の競爭の觀を呈して居ると云つても差支ないやうである。過去の稅整案に比較して見ると、此度のそれは非常に進步的であり、改革的であるが、之れは畢竟普選の賜であるといふことが出來やう。普選の實施を前にして、大多數の民衆を相手にしなければならない政府及び政黨が、其稅制整理案に於て社會政策を加味することは[illegible]

扨て政府案に就いて見れば、大體に於て難點がないやうである。實は政府案が比較的よく出來て居るので、政友會も政友本黨も之れに對して多くの修正を加へることの出來ない狀態に在る。政友會案は地租移讓の一點に於て政府案に對して特色を持つて居るけれども、政友本黨は絕對的に地租移讓には反對して居るのであるから、政府案に對してはとりたてゝ反對意見を有して居ない。

そこで私共は、先づ政府案が如何なる點に於て社會政策的であるかを述べなければならない。第一に所得稅に就いて云へば、免稅點を從來の八百圓から千二百圓に引上げたといふことである。これは云ふまでもなく無產階級にとつては歡迎さるべき改制である。次に地租に就いて[illegible]

あつて、從來のそれは地價を標準としたものであつたが、此度は賃貸料を標準とした點である。云ふ迄もなく賃貸料は都會地に於ては地主が取つて居る地代、村落に於ては地主が徴集して居る小作料の如きものを意味するのであるが、併し此課税の標準を改めんには少くとも二年間を要するのであるから、それを實行するまでは當分地租一分減を行ひ、且つ地價二百圓以下に對しては免税するといふのである。更に營業税に就いては、それも從來の複雜な制度を改めて、純益を標準として課税することになつた。其税率は法人に對しては百分の四、個人に對しては百分の五である。且つ四百圓以下の純益に對しては免税することになつて居るのであるから茲にも社會政策的方針は加味されて居るといふことが出來る。殊に私共が最も贊成するのは從來惡税と云はれて居たものを廢止したことである。即ち通行税、綿織物税、賣藥税、醬油税等に對して、從來多くの反對があつたにも拘はらず、現政府が斷乎としてそれを廢止したことは確かに喜ぶべき事柄である。以上述べた處は中產階級以下の人々の負擔を輕くするといふことを示したものであるが、更に一方に於て富者の階級に對して多く負擔せしめる精神も其處に十分現れて居るやうに思ふ。それは主として二つの點に於て見ることが出來る。第一は相續税であり、第二は資本利子税である。相續税は從來千分の六五といふ率で課税して居たのであるが、此度は之れを百三十に引上げた。即ち二倍の增加である。併し之れは一見思ひ切つた遣り方のやうであるが、外國などの振合を見れば未だ十分なりとは云ふことが出來ない。即ち相續額に對して僅かに一割三分の税を課するといふのであるから、社會政策の上から見て猶十分に考へる餘地があると思ふ。第二の資本利子税は、之れは公債、社債、預金、信託預金、貸金利子、株式配當に對して課税するのであるが、其税率は百分の二である。それから此度の税制整理案の中には餘り社會政策の意味を含んで居ないものがある。譬へば酒造税、麥酒税の如きそれである。猶最近發表された煙草値上げの如きものもある。之れは勿論税として取扱ふべき性質のものではないが、併し國民の負擔を重くするといふ點に於ては何等相違がないと思ふ。酒造税は從來一石に對して三十三圓であつたものを四十圓に增加し、麥酒税は一石十八圓であつたものを二十五圓に增加することになつて居る。云ふ迄もなく酒や麥酒は貧富の區別なく用ひるものであるから、之れらの税を增加することは何等社會政策の意味を含んで居ないといふことが出來る。のみならず、強ひて云へば酒や麥酒は貧民階級に於ても之れを使用するのであるから、之等の税率の引上げは寧ろ貧民階級の負擔を重くするも

のと云はなければならない。

以上述べた處は政府案に就いてゞあつて、政友會も政友本黨も大體に於て之に贊成して居る。只前に述べたやうに政友會は地租移讓といふ點に於て政府案に大なる反對を試みて居る。其他些細の點に於ては政友會は政府案に反對をして居るけれどもそれは茲にとりたてゝ述べる必要はない。唯地租移讓は極めて重大な問題であり、且つ此點に於て政友會と憲政會は手を切ることになり、政友會を代表する大臣達は辭職をするまでに至つたのであるから私共は此問題に對して十分なる研究を試みる必要がある。政友會は地方に移讓するのは地租のみではなく、營業税も理論としては移讓すべきものであるといふことを主張して居る。併し後者はそれを實行するまでには猶研究の餘地があるといふことから現在では地租のみを地方に移讓することを主張して居るのである。現政府が如何なる理由の下に政友會案に反對であるかは知ることが出來ないが、地租そのものゝ性質から云へば當然之れは地方に移讓すべきものであると信ずる。地價は社會的進歩に伴つて騰貴するものであつて、其の騰貴は地方に依つて非常な相違がある。農村の地價は多數の增加をしないけれども、都市の地價は驚くべき速力を以て增加する。殊に大都會に於て然りである。[illegible]必然に地價の低い場所に於けるよりも、多くの設備を要するのであるから、それに對する最も便利なる財源を持つて居なければならない。即ち其設備に多額の費用を要する都會の如きは、限なき膨脹力を有する地租を其財源とすることは極めて便利である。更に他の點から考へねばならぬことは、國家としても絶えず地價修正を行はねばならぬ必要がある。併し全國的にそれを行ふには非常な手數と費用を要する。若し地租が地方税となれば、地價の修正は地方々々に於て手輕に之れを成し遂げることが出來る。斯くの如く考へる時に、私は政友會の意見が正しいものであることを信ずる。併しながら政友會の意見は決して社會政策的ではない。何故ならば地租を國税から地方税に移すことになれば、國庫の收入は約七千四百萬圓程減ずることになる。然るに政友會は此缺損を補ふために、一方に於て國税の增收で約四千萬圓を得、其他を行政財政の整理に依つて得やうとする案を持つて居る。之れは明かに社會政策の精神に反するものである。國税の引上げはとりもなほさず物價を引上げることであり、國民の負擔を增加せしめることである。社會政策の立場から云へば國税の如き間接税は出來る丈け之を避けなければならぬ。[illegible]

[illegible]ことになる。

更に政友本黨案に就いて簡單に云ひたい。前に述べたやうに政友本黨は大體に於て政府案に賛成して居る。其反對する點は極めて些末の點であつて政府は地租一分減といふことを云ひ、又地價二百圓以下に對しては免税するといふ案であるが、政友本黨は其孰れにも反對して居る。そして免税といふことは、自作農に對しては寧ろ地租を全免することを主張して居る。又税制整理の結果、本黨案に依れば三千萬圓位の餘裕を生ずることになるので、全國小學校を補助するために政府は四千萬圓を支出すべしと云つて居る。之れを見ると本黨の税制案は寔に貧弱なものである。一口に云へば、政府案をそのまゝまる呑みにするのは些か殘念であるので、少しばかり何かの點で反對しなければならぬといふ心理から、反對のための反對をして居るのではないかと思はれる。

以上私は政府案と二個の在野黨の税制整理案に對して大體意見を述べた。又同時に孰れの税制案にも社會政策の精神を少からず含んで居ることを認めた。乍併私共の立場からすれば其孰れも未だ極めて不徹底たるを免れぬ。一概に社會政策といつてもそれは申譯的のものであつて其處に何等徹底的の政策を見出すことは出來ない。今迄よりは確かに進歩的であるといふとは出來る。乍併それは單に吾人眼を滿足せしむるに足るものであつて、眞面目な社會政策的の立場から見れば甚だ拙劣であると評するの外はない。大體に於て政府案は地主に對して非常に遠慮をして居る。或人は現政府は資本家の後援に依る資本主義の政府であるかの如くに考へて居るが、私の見る處では資本家に對しては、資本利子税などを興して執るべきものは執つて居るが、地主に對しては取るべきものをすら取つて居ないやうに思はれる。寧ろ地主に對しては以前よりも多くのものを與へて居るといふかたちである。勿論今日では資本家と地主は一人で兩者を兼ねて居るものが多いから、明白に兩者を區別することは當を得てゐないが、便宜のためにさうすると、大體資本家に對するよりも地主に對してより多くの負擔を課する必要がある。何故ならば地主の大部分は不勞收入を得て居る。資本家も地主も共に搾取をするが、地主のそれは全く不勞收入に属する。此度の税制整理に依つて政府の收入が減ずるのは明白であり、之れを補塡することが當然である以上、地租は考究すべき重要なる其對象であるが、政府案は資本利子税の必要を認むるにも拘はらず、地租は反つて一分減となすことに依り、免税點の設定は小地主を惠むではゐるが、大地主は不勞收入の上に更に負擔を輕減されるといふ不合理な結果を生じて居る。又地租に課税する標準が從來は地價であつたのを、賃貸料に更めたのは、其

處に一つの誤魔化しがあるやうに思はれるのである。賃貸料が地租の課税標準となれば廣大な土地を所有して居る者がこれを賃貸することをなしに放任して置けば、田畑でない以上其處に收入もなく、又賃貸料も擧がらないから、地租を決定する標準がない。賃貸料に依るならば寧ろ何故に地價を修正しないのであるか、賃貸料は年々變るのであるから、五年に一度位は地價を修正しなければならぬ。然らば最初から地價修正を行へばいい。そこに誤魔化しがある。賃貸料を標準とすると地租は非常に増加することになる。都會地でも東京などに於ては五倍、七倍も地租は増加することになる。田舍に於ても、賃貸料を標準としたら地租は増加する。然るに政府は地租を引上げまいとするのである。七月三十日政府案が各新聞に發表されたが、其中地租に就いて種々項目を擧げて政府の意見を述べて居るが、其第五項に

「賃貸價格決定後ニ於ケル地租ノ標準ハ賃貸價格ノ決定ノ時ニ於ケル現在地租額ヲ超過セサル範圍内ニ於テ適當ニ定ムルコト」

とある。之れに依つて見れば、賃貸價格を標準として現在の税率を適用した場合には地租收入は非常に増加する。少くとも二三倍になるに相違ないが、其點に[illegible]税率を引下げ[illegible]ることになつて居る。何故ならば地租の標準は現在の地租額より超過しない範圍内に、於て定めるといふことになつて居るのであるから、地租課税の標準を賃貸料に更めても地主の納める地租は現在より高くならないといふ不都合な事實を生ずる。之れは或意味に於て不正である。地主擁護が餘りに露骨である。此點丈けを考へても私は政府の税制案は頗る不徹底であり、土地政策に對しては全然無方針であるといふより外はない。若し所得税、相續税に累進税を適用して居ることを思へば、當然地租にもそれが適用せられねばならない。個人が宅地にせよ、田畑にせよ、一人で廣大な土地を所有することは、社會政策的立場から見て不都合であつて、當然宅地ならば五百坪、田畑ならば五町歩以上を所有する者に對しては累進税を課すべきである。次に所得税に就いて云へば、免税點を千二百圓に引上げたことはいゝ。併し所得税は無論累進税にはなつて居るが、其率は少しも引上げては居ない。尤も累進税を五千圓、六千圓の收入に對して課することは考物であるが、それより上位の所得者に對する税率が甚だ少いやうに思ふ。例へば個人に就いてもあるが、現行法律に依ると十萬圓から二十萬圓までは二割七分の税が課せられて居るが[illegible]

[illegible]

の所得に對しては課税して居ないが、百萬弗の所得に對しては中央、及地方政府から課税せられて約七割、六十九萬弗まで取られる。此點から見ても我國の税率を定めるには猶考へなければならない餘地があると思ふのである。次に遺産相續税であるが、之れは二倍となつた。乍併今迄が少かつたことであるから此度の二倍は決して多過ぎはしない。殊に外國の例と比較すれば非常に少いといふことが出來るのである。十萬圓乃至十五萬圓の相續をなす場合には、家督相續であるならば一分、即ち百圓ならば一圓の割である。次男、三男が貰ふ分であるならば四分五厘である。二十萬圓以上になると家督相續は二分五厘、遺産相續は五分であり、而て二十萬圓以上には累進税がない。英國の場合を見ると、家督相續の場合で、内容が遺産である時、百萬磅以上（我國の千萬圓以上）二百萬磅（二千萬圓）までは二割、即ち千萬圓を相續するには二百萬圓、二千萬圓の場合は四百萬圓、又二千萬圓以上は年四割、即ち二千五百萬圓を相續するには千萬圓を課税せられる。尤も之れは戰時中の場合であつたが、併し千九百年に一個年に於ける、英國が相續税に依つて得たる收入額一億八千四百萬圓であつたことを思へば、如何に日本が貧乏國であつても、政府の收入增加を計るべき餘地は猶十分にあることが明かである。第一、地租に依り、第二、所得税により、第三、相續税に依つて、之れ等の税の上り如何に依つて、即ちそれらを社會政策的立場から徴税することにしたならば日本は如何に貧乏國であつても左程困らぬ筈である。政府は税制案を公にするに當つて劈頭先づ斯う云つて居る。即ち所得税を中心として、地租、營業税も以て之れを補ふといふのである。玆に於て私共の批評がある。政府は他に十分に取るだけの餘地あるものを取り得ぬから所得税を税制の中心として居るのである。公平に云へば、税制は地租を中心に、それに相續税、所得税を配するものでなければならない。此事は直ちに現政府に期待することは無理であるかも知れぬが、今後税制案の理想として此點に希望をかけたいと思ふのである。

三政黨の稅制整理案

法學博士　堀江歸一

政府の整理案

政府、政友會、政友本黨の三者はそれ〴〵稅制整理案を發表して、世間にその可否を問うの態度に出でた。思ふに今期の議會に政府の整理案が原案として提供された場合に、政友、政本二派亦各自の提案を根據として、之に修正を加へようと試み、其成立すると否とに依つて、政界に幾多の波瀾を生ずることゝ想像される。然し斯る政治上の問題は姑く純財政上の見地に於て、三派の政理案には如何なる得失優劣が存するであらうか。國民の一考す可き問題である。

三派の整理案を通じて、最も平凡であり、又從つて無難なる——或は非難される可き點の少ないものは、政府の原案である。即ち此原案に於て、(一)通行稅、醬油稅、賣藥稅、織物稅等の廢止され、(二)地租に免稅點を設け、所得稅並に營業稅に於ける免稅點を引上げ、(三)相續稅に[illegible]

なりとする所であるが、右の諸稅を廢止するからには、何故に鹽專賣法を廢止するの勇斷に出づるを得ないのであるか、所得稅の免稅點を引上げられるのは、國民に對する負擔を公平にし、殊に社會政策上の見地から、稅制を整理するに當つて、必要とする所であるが、其引上が僅々一千二百圓程度に止まるに至つては、標榜する所大にして、之に副うものゝ頗る小なるを認めざるを得ない。地租營業稅法に於ける免稅法の創設若しくは引上げに關する規定に就ても、亦不徹底の嫌を免かれざる一方に、相續稅法に關して、稅率を引上げたのは、可なりとするを得るも、其引上げの程度の頗る微々たるに至つては、政府として如何に社會政策を財政上に適用するに躊躇しつゝあるかを示すものに外ならない。若しも政府にして單に相續稅に對する稅率に依つて、若干の增收を豫期するに止まれば、此稅法の改正を以つて、滿足するの外はないが、[illegible]目的を達す[illegible]には、[illegible]

者、養子女に依る家督相續の如きを禁じなければならない道理であつて、之を爲さゞる政府案の不徹底なるとは論を俟たない。

斯く政府案は多くの點に於て、不徹底であるのみならず、第一、酒税麥酒税に增率を加へて、我國租税制度に於ける消費税偏重の弊を大ならしめること、第二資本利子税の創設に依つて、現行所得税法に於ける第二種所得に對する課税と重複する負擔を資本利子に加へること、第三清凉飲料税の如き輕微なる租税を起して、殊更に我國の税制を煩雜ならしめることの如き缺點をも藏するのである。

政府が其一個の事業として、成立せしめた税制整理案に斯る缺點のあるのは、要するに政府が消極政策の下に、財政を緊縮し、經費を節約する程度頗る少なく、眞實の減税に依つて、國民の負擔を輕減するだけの財源が見出されないと云ふことに歸着する。斯くて政府の税制整理と稱するものは、或る一方に於て減税に依つて生じた收入の減却を他方に於ける增税に依つて、償うと云ふが如き姑息のものに止まる。姑息である代りに、全體を通じて、何等の冒險もなく、小刀細工もない、比較的無難平凡であると云ふ特徴を生ずるのである。

地租委讓と税制整理

政友會の税制整理案は地租の地方委讓を以つて、骨子とするのであつて、他の點に就ては、殆ど之を顧みないし、又態度未定に付せられて居るものもある。即ち地租委讓に依る七千四百萬圓の塡補財源は關税增收幷に行政整理に依る恒久收入に仰がうとするものであつて、要するに政府の地租減率案を以つて、地方農村の困難を救濟するに手緩しとして、此擧に出でんとするもの丶如くに見へる。政友會は何故に斯くまでに地租委讓に固着し、之を以つて財政上の萬能膏とする次第であるか、私の何としても了解に苦む所である。元來我國の地租は一個の收入として、之を見れば、甚だ彈力性に乏しいものであつて、時勢が如何に進歩しても、地租の收入は容易に增加せず、加ふるに法定地價と實際の賣買地價との間には、大なる懸隔があつて、此懸隔のあるだけ、收益税として、地租の意義を成さないと云ふことは、一部の論者をして國税としての地租の地位に疑を挾むに至らしめた所以であるが、私は此理由や、地方に確實なる財源を與へなければならないと云ふやうな理由を以つて、直に地租の地方委讓に贊成するを得ない。

第一、我國租税制度の體系から考へれば、地租は營業税と相對立して、直接税法に於ける左右兩翼を成すものであつて、是等の二税目あることに依つて、農業者と商工業者とは各自の收

益に負擔を課せられ、稅法上の均衡を保つを得るのである。我國に於て明治初年から、地租が國稅としての地位を占めながら、營業稅が明治二十九年まで地方稅であつて、而して地方に依つて、商工業者に對する負擔の狀況に、大なる差別のあつたことは、租稅負擔の分配に於て、大なる缺點であるとしなければならなかつた。然るに今地租を地方に委讓して、獨り營業稅のみを國稅に止めると云ふことは、恰も從年の缺點を再び作り出すものであつて、求めて租稅の體系を畸形的のものたらしめる譏を免かれないであらう。

第二、斯る地租と營業稅とにして、租稅制度の體系に於て、不可分の關係に居るものである以上は、其一を地方に委讓する以上は、他の一にも亦同樣の處置に出でなければならない。假に政府が財源の關係上、地租だけを地方に委讓したとして、全國の商工業者は果して之に滿足して居るであらうか。國稅の地方委讓は必ずしも全體に亘つて國民の負擔を輕減する効果ありとするを得ないが、偶々或る地方に於て、國稅時代に於けるよりも、地方稅と爲つた場合に、負擔の輕い事實が地租の地方委讓に依つて、現はれたならば、營業稅の委讓に依つても、亦同樣の事實の生ずるものと考へ、商工業者の如きは、必ず團體的勢力を以つて、營業稅の地方委讓を政府に迫り、政府亦之を大[illegible]ぜざるを得ざるに至るであらう。政友會としては、當分地租委讓のみに依つて、地方農民の輿論に迎合するを便宜とし此方針に出でようとするものであらうが、地租と營業稅と其性質に於て、不可分の關係を持つ以上は、一方を地方稅目として、他方を何時までも國稅として置くことは、道理上許されざる所であつて、一方の委讓は早晚他方を委讓することの前提たらざれば已まない。

地租委讓の不可能

然らば是等の兩稅は我國現行の租稅制度に於て、如何なる地位に居るかと云ふに、兩者の收入は一億二三千萬圓の多きに上る。或は收入額は如何に大であつても、國稅として看過す可からざる缺點の著しきものがあり、其地方委讓は却つて斯る缺點を除却して、收稅の目的を達する手段たり得るが如き場合に於ては、地方委讓亦一理ありと云へるかも知れないが、私は其然るを考へるを得ない。

營業稅の場合は兎に角として、地租に就て考へるに、地租の收入は今日必ずしも豐富であると云ふを得ないが、其確實なる點に於て、殊に一千數十萬の國民を納稅者とし、[illegible]特に一般國民に普及する點に於て、他の租稅に[illegible]

る長所を持つものであつて、此事實は一方に其地方委議の容易に行はる可からざるものであるとを語ると共に、强ひて之を行つたならば、之に代る可き租税を見出すに就て、大なる困難を感ずる。殊に地租の地方委議の行はれた後に於て、課税の標準は何人が之を決定するかと云ふことを考へなければならない。今日の如く國家が課税の根本を握つて居ればこそ、徴收上の實際に何等の情弊の生ぜざるを得るのであるが、一度び地方團體の掌裡に移つたならば、税法其ものは國法の定める所に據つたとした所で、其運用は地方の黨弊に支配され、地方に於ける政爭を税法の實際にまで、及ぼすの危險を免かれざるに至るであらう。

政友會は突如税制整理案の一要目として、特に本來不可分の關係を有する地租營業税中の一たる地租のみを取つて、地方に委議するが如き何としても眞面目の議論とするを得ない、殊に地租委議に對する財源として、關税の增收と行政整理に依る經費の節約とが充てられて居るが、前者の如き動もすれば國民の生活費を增嵩せしめる恐れがあり、後者に至つては、全然不定のものである其上に、從來積極政策の下に、財政を膨脹せしめ、今日尙ほ此政策を棄てない政友會が今更の如く、行政整理を叫ぶのも、一奇なりとせざるを得ない。

地方財政の整理法

如何にも今日の地方財政は見方に依つては、窮迫して居ると云へるであらう。然も斯く窮迫したと稱される地方財政は第一、中央から一個獨立の財源を委讓されなければ、存立し得ざる狀況に居るものであるかどうか、第二、地方團體自ら財政行政に整理を施す餘地を見出し得ないものであるかどうか、第三國庫支辨地方負擔の分界若しくは國庫補助を改め、例へば國民教育費の一部分を國庫に負擔せしめるとか、教育費の國庫補助に增額を加へるとか、其れ〲の手段を講ずる道なきものであるかどうか、何れも攻究を要する問題であつて、是等に關する解決の如何は自ら地租委讓の當否を決定する指鍼と爲る可きものであるのに、其解決は全然之を不問に付し、一意地租の地方委讓を標榜する。其眞意の那邊に存するか、疑う可しとせざるを得ない。

政友本黨の税制案

政友本黨の税制案は多端に涉つて居るが、要するに左の數項に概括される。

一、所得税に就ては、第二種所得税を廢し、公社債の利子、貸付信託の利益は第三種個人所得に綜合課税し、別に資本利

子税を新設する

二、農村振興の應急策として、自作農の國税地租を全免する

三、營業税は純益主義に依つて、課税する。

四、所得税、營業税、相續税等に對し、其最低限に近き納税者の税率を遞下して、負擔の輕減を謀り、且つ通行税、醬油税、自家用醬油税、賣藥印紙税、綿織物税を廢止する。

五、整理財源として、酒税の增率と關税の改正とを爲す。

六、自作農全免税額に對し、從來の附加税額範圍内に於て、之を地方に徴收せしめる。

七、教育費國庫負擔金二千萬圓を增額する。

故に政府の原案と政友會案とは、殆ど氷炭相容れざるまでに、矛盾を極めてゐるが、前者と政友本黨案とを比較すれば、相違する所は些細の點であつて、根本的には何等の衝突あるを見ない。前者の地租免税點新設に對して、後者の自作農免税と云ふが如き、如何樣にも妥協の餘地ある問題であり、其他に於ても類似點や、共通點の多々あることが認められる。或は本黨は獨立の立案を爲さず、總て政府案と調和する餘地を保つ限度に於て、整理の方法を講じたものではなからうかとも思はれる。政府案の既に姑息である其上に本黨案の更に姑息であるのも、亦怪むに足らないのである。

未完成の税制整理

今期の議會は或る機會に於て、解散と爲るか、無事に議事を繼續するか、其れは一に政友本黨が政府と政友會との孰れに與するかに依つて、定まる問題であつて、今日に於ては、何とも豫想を下すを得ない。然し假に政友本黨が政府に好意を持ち、税制整理案に對して、妥協的態度を取つたならば、税制整理は曲りなりにも成立するであらう。斯くて局に當つた政治家は之を以つて自家の事業は即ち果されたとするであらうが、私共は斯る未完成の税制整理を以つて、滿足し了る譯には行かない。我國當今の税制に就て、何を以つて整理の要目とする可きやと云へば、

第一、租税全體の負擔を輕減し、所謂減税的整理を實行すること、

第二、直接間接税の間に於ける負擔の不權衡を矯正し、間接税に偏倚する我國税法の缺陷を除却すること、

第三、所得税、營業税等に於ける免税點を引上げるは勿論、地租にも免税點を設けて、中流以下の階級に對する負擔を輕減緩和し、又所得税法に於ける人的狀況に依る斟酌を大にすること、

第四、通行税、木綿織物税、賣藥税、醤油税の如きは、其細民に對して、負擔を及ぼす點に於て、徴税に値する收入を國庫に與へざる點に於て、共に廢止するを要すること、

第五、所得税中、高額の財産所得や、相續税中、高額の相續財産に對しては、增率の餘地を存するか、他の方面に對する増税は當分之を差控へ、廢減税の財源は之を經費の節約に求めること

の諸點でなければならない。（改版國民經濟ト國際經濟第十章の二、參照）之を政府の税制整理案に徴すると、前項の第三と第四に就ては、或る程度まで其實行が計劃されて居るが、他の諸點に就ては、殆ど等閑視されて、顧みられる所なきが如くである。政友本黨の整理案は私の要件とする所に對して、更に距離の甚だしきものがあり、政友會の案に至つては、一として取る可きもの〻あるを見ない。故に私は今期の議會に於て税制整理案が成立したとしても、近き將來に於て、再度の改正を加へざる限り、整理の實の擧がらざることを信ずるのである。

政府の社會政策蹂躙

政府が租税政策に社會政策を加味すると稱しながら、毫も之を實際に現はさず、酒税麥酒税其他の增徴に依つて、折角木綿織物税、通行税等を廢止する效果を打消しつ〻あるの矛盾は已に之を述べた所であるが、更に此矛盾を甚だしからしめたものは、十一月六日を以つて行はれた煙草拂下價格に對する引上である。煙草の如き一般的嗜好品に對して、專賣收益を加重する以上は、其負擔が中流以下の階級に重きに至るは論を俟たざる所である。或は經濟社會好景氣であつて、諸物價の昂騰しつ〻ある場合であれば、之と調和せしめる爲めに、煙草の拂下價格を引上げることも、亦寬恕されるが、今や不景氣の影響は社會到る所に漫潤し、殊に中流以下の階級は或は失業に依つて、或は所得の減少に依つて、生活上に苦痛を感ずることの少なからざる其際に、專賣收益の負擔の加へられるが如き、反社會政策の甚だしきものである。畢竟斯の如きは税制整理に依つて生ずる收入の減額を塡補する必要に驅られて、已むを得ず行はれるものと見る可きであるが、此事たる、財政上に廢減税に供す可き確乎たる餘裕を得ずして、濫に税制を改正する場合に、現はれざるを得ざる弊害とす可きであつて、政府の如き爾今社會政策を云々する資格を失つたものとす可きである。

社會政策的効果尠し

中澤辨次郎

一

來る可き五十一議會の中心的問題として、國民全般から多大の注目を惹いて居る税制整理案は、珍らしくも各政黨から、その代案が具體的に提出されて、それで國民に其の是非優劣乃至は信任を問ふとして居る。從つて今此の案に對し一言批判の筆を加へるのも決して無用ではないと信じる。由來税制整理の問題は我が國としては遠く日露戰爭直後から繼承して居た、可なり長い間の懸案であつた。其の後歷代の內閣が此の問題に對しては何時でも多少の考慮を拂つて居たが、今日に到る迄何等解決される所がなかつた。近くは彼の原內閣當時臨時財政經濟調査會が設立され、一と通りの税制整理案が成り立つたとがあつた。がそれも徒らに遷延されて何等實施の運びに到らなかつた。

所が時勢は進一步した。國民の負擔均衡に關する大問題に對して、何時までも在來の仕來りを踏襲することは許るされなくなつた。今度と云ふ今度こそは、眞面目に眞劍に此の問題を解決しなければならなくなつた。それは憲政會內閣の方針が「緊縮」と「整理」を旗印として居るからではない。亦在野の二政黨が與黨よりも立ち優つた具體案を提げて立つて居るからでもない。實に國內各所に漲る新社會事情從つて新興經濟活動分子の劃期的發動力の賜物である。社會の下層に於いて國家の繁榮を支持する無產階級の社會的擡頭、並に普通選擧をそれ等の社會群が實力に依つて實施せしめるに到つた著るしき政治的自覺、それ等一切の新社會事情に促がされて、いやでも今度と云ふ今度こそは、税制の整理を曲りなりにでも斷行しなければならない時機に際會した。

若し然らずして今迄の如く上層階級丈けの御氣嫌取り税制政策に終始して居つたのでは、治政上に多大なる困難を伴ふであらう所の空氣が次第に濃厚となつて、國家社會の全局を蔽はんとして居る。從つて政治を新社會事情に適應して行かうと

するには、いやでも此の方面に惡氣流を發生せしめない手段を取らねばならない。それには嘘にもせよ、表面高らかに社會政策を振り翳し、國民負擔の均衡を得さしめることに努力しなければならない。此處に於いてか各政黨が、何れも敗けず劣らざる政綱政策を提げて國民に信任を問ふと共に、以上の如き新興社會の新勢力に阿附するに到つた。斯う看て來るならば、稅制整理案は、政黨の新興社會の新勢力に對する降伏狀であり、之れを善意に名付けて新興社會的勢力に對する懷柔策の一端の現はれであることは否定出來ない。殊に此の見地から言ふ諸政黨の整理案の如きは、何れも團栗の脊比べ案である。否なその程度を一步も出では居ない。斯くの如き稅整案を提げて、我黨の案が何うの斯うのと言ふのは烏滸がましい到りだ。

二

一體今の我が國に於ける稅制整理は其の基本方針として國民の負擔輕減、少くともその均衡を得せしめることがその眼目であらねばならない。更らに一步進むで言へば稅制整理には必ず財政の整理が伴はねばならない。財政整理の伴はない稅制の整理は、畢竟租稅徵收の形式を變更するに過ぎない。然かるに此の點は憲政會案であると、政友會案であると、亦政友本黨案であるとに論なく、殆んど顧みられる所がない。殊に今度の政府案從つて憲政會案の如き、歲入に著しき增減を發生せしめないことを整理の方針とし、その範圍内に於いて行ふことを條件として居る整理案なる點に於いて、我々は此の案に餘り大なる期待を拂ふ譯には行かない。殊に此の案には多少の社會政策的意味を認めることは出來るが、それよりも過分なる黨略本位から出て居る點を見逃す譯には行かない。それかと言つて政友會案の如き杜撰なる大綱を、之れ亦黨略的見地から示した丈けの案にも勿論贊成することは出來ない。此の外政友本黨亦政友會案に依らず、何れかと言へば政府案に步み寄り得る可能性ある應急案を提げて、今後の政局に處し、變通自在な行動を取らうとして居る卑怯なる政略上の稅整案にも、勿論雷同する譯には行かない。

言ふ迄もなく今次の政府稅制整理案は、過ぐる五十議會閉會直後、大藏省に於ける稅制調査會に於いて、四月二十日より六月三十日に到る間に、幹事會案が決定され、次いで七月七日同調査會案の大綱が決定され、翌々九日之れが首相に報告され、與黨憲政會の諒解を求めて閣議に附されるに到り、終に七月三十日政憲決裂閣議の動機を爲した。最も當時の稅整案は主として國稅に於ける整理案であつた。政友會出身閣僚は此の案に依ると自黨宿年の主張たる地租移讓案が、餘りにも無殘に蹂躙さ

れて終ふ點に於いて到底相容れざることを悟り、職を賭して猛然此の案に反對し、内閣の總辭職を餘儀なくせしめた。政憲の提携は此處に於いてか完全に決裂し、終に憲政單獨内閣の成立を見るに到り、本案は豫定の如く八月四日更生内閣の閣議を通過し、次いで與黨憲政會の税制整理案として完成するに到つたものだ。

野黨に下つた政友會は其の後漠然たる「產業立國」策のみを以つて國民に臨むことの不利を悟り、政府案に對抗して十月四日申し譯の税制整理案を決定した。之れに次いで政界の洞ヶ峠に坐して居る政友本黨も同十月八日終に解散を毛嫌し乍ら、政府案に媚を呈する税整案を確定した。斯くて本黨の税整案決定を最後として、所謂三黨の税制整理案なるものが出揃ひ、今や國民の手に依つて試練さる可き地位に置かれてある。由來政黨は從來極めて長い間反對黨の揚足取りのみを能事とし、具體案を提げてその是非を國民に問ふことをしなかつたが、今度初めて政府與黨案に對し、在野黨が自黨の代案を曲りなりにも提出して相拮抗するに到つたことは、既述した新興社會事情、經濟事情に餘儀なくされた行動とは言へ、確しかに政界の一大進步である。斯くてここ初めて政黨が公明正大なる政綱政策を以つて相對峙することが出來、亦之れに依つてこそ初めて憲政の常道即ちその本スジを辿り初めたものであると言ひ得やう。此處に於いて初めて我々は多大の興味を以つて、此の三黨三様の税制整理案に對することが出來るのだ。特に各政黨共、來る可き五十一議會が解散に終ることを非常に恐怖し、なる可く解散を賭することなしに、自黨案を固守することに依つて、國民の信望を繋がうとする點、特に固守する政綱なるものが、その本旨に於いて各黨とも全然相反するものを提げて居るにも拘らず、解散は可及的に回避しやうとして居る點に、苦笑を禁じ得られないものがある。

三

果して然らば政府從つて憲政會の税制整理案なるものは、如何なる案であるか、先づ第一にその大要を記して他黨案と彼此論評して見度いと思ふ。政府並に憲政會の税制整理方針は、既述の如く、(一)歲入に著しき增減なからしむる範圍内に於いて、租税の體系をたゞし、負擔の均衡を計ると、(二)税務行政實行上の便否と現下の財政經濟上の實況に對應すると、(三)國民負擔の均衡を得さしめると、を期して立てられたものである。

政府及與黨の税整案大綱

第一、直接國税の體系は大體に於て現在の制度を是認し新に

税を中心とし、之れが補充税として地租税營業税に適當なる改善を加へて之を存置し、新に輕度の資本利子税を創設し、家屋税は國税として之を起さず、地方の財源たらしめんとす。

第二、事業の基礎を鞏固ならしめ、産業の發展を助長し、及び負擔の均衡を圖るが爲め左の改正を爲せり、

一、法人の留保所得に對する累進課税を撤廢し最低百分の五の比例税を課す之に依つて若干の減收を生ず。

二、營業税の外形標準に依る課税法を改め、營業純益に對して比例税を課することゝし、同時に現在の營業税收入に對して若干の輕減を爲す。

三、地租の課税標準を賃貸價格に改め、田畑地租に對し相當の減税を行ふ。(賃貸價格による課税は大正十七年度より施行の見込にして右施行迄の間に於ける經過法は別に之を定む)

第三、中流以下多數國民の負擔を輕減し社會政策的効果を擧ぐるが爲め左の改正を爲せり。

一、所得税の免税點八百圓を千二百圓に引上ぐ。

二、地租に免税點を設く(免税點は差向き田畑に限り、一市町村内に於ける地價二百圓とす。賃貸價格に依る課税法採用の後に賃貸價格に依つて免税點を設く可きも其限度未定)

三、營業税の免税點も前二者に比準して營業純益四百圓とす

四、相續税の免税點を引上げ家督相續五千圓、遺産相續千圓とす。

五、綿織物消費税を免除し、通行税、醬油税、自家用醬油税、賣藥印紙税を全廢す。

第四、新税はなる可く之を避くるの方針を採りたるも租税の體系を整へ、負擔の均衡を得しめ、又他の税源を擁護し、且つ廢減税に因る歳入の減少を補塡せんが爲め、左の二種の新税を起すことゝせり。

(甲)資本利子税、百分の二の比例税を課す(乙)清涼飲料税一石十圓とす

第五、第二項及第三項に依る歳入の減少を補塡する財源として前項新税の外左の增税を行ふことゝせり、

(甲)相續税、家督相續に於ける課税財産四萬圓を超ゆるものより、適當に增率し、五百萬圓を超ゆるものに到りて最高百分の十三を課す、其他之に準じて增率す、(乙)酒造税清酒一石三十三圓を四十圓とす、其他之に準じて增率す、(丙)酒精及酒精含有飲料税、清酒に準じて增率す、(丁)麥酒税一石十八圓を二十五圓とす。

第六、新に專賣事業を計畫せざることゝせり。第七、直接國

税の減免に依る歳入の減少はなる可く直接税の增收を以つて之を補塡する方針を採り、其不足額は關税の改正に依る自然の增收を以て之に充てんとす。

間接國税の整理に基く差引不足額の補塡方法に付ては尙ほ考究中に屬し、財政計畫立案の時を待つて之を決定せんとす。

四

之れに對し、決裂後の政友會が十月四日決定した税制整理案は、細目を黨略と熟議の必要から將來に留保したと云ふ理由付きで、左の如き大綱丈けに止めてある。

政友會の税制整理案大綱

一、地租は市町村に委讓す、營業税は原則としては委讓すべきであるが、財源の都合を見て斷行する。

二、地租委讓に依る七千四百萬圓の補塡財源は關税增收及び行政整理に依る恒久的財源六千八百萬圓を以て充當する。

三、中央地方を通ずる整理案は、引續き調査を進めて決定する。

四、地租委讓を受けた市町村が之れを戶數割亦は雜種税の輕減廢に用ふるか、或は事業財源として殘すかは劃一に流るるを避け、自治精神に副ふため市町村の任意に任す。

五、現在の政府案以上に新增税を爲さず。政府案の廢税にしては態度未決定。

要するに政友會案は地租委讓がその基本をなして、此の外には何等取り立てゝ見る可きものがない。資本利子税の新設と、酒税を從價税とすることの外には、各税に渡り新設改廢に對する何等の成案が（少くとも今日までに發表されて居ない）ないもの丶如くである。

之れに反し十月八日政友本黨が發表した案に依れば政友會案に比し、應急政策として掲げては居るが幾分具體的細目に及むで居る。即ち左の七項目はそれである。

政友本黨税制整理案大綱

一、所得税の改正（イ）第二種所得税（乙號は別に處理す）を廢し、公社債の利子、貸付信託の利益は、第三種個人所得に綜合課税す。（ロ）資本利子税を新設す

二、地租改正、地價修正の根本的改正は暫く措き、農村振興の應急策として、自作農の國税地租を全免す

三、營業税改正、現行の外形標準課税を避けて純益主義に依つて課税す

四、負擔輕減、所得税、營業税及び相續税につき何れもその最低限に近かき納税者の負擔を遞下して負擔の輕減を計

り、且つ通行税、醬油税、自家用醬油税、賣藥印紙税、綿織物税を廢止す

五、整理財源として酒税の増税と關税の改正をなす。

六、地方税制の根本整理は暫く措き、自作農全免税額に對して從來の附加税額の範圍内に於て之を地方に徴收せしむ可き便宜處置を講ず

七、教育費國庫負擔金二千萬圓を増額し、前期議會に政府の公約せしものと併せて四千萬圓を明十五年度より増加支給して地方財源に充つ。

此の案は本黨自身が言つて居る如く『應急策』であつて、然も内實的には一種の解散牽制策として大體に於いて政府案に準ずる案である。根本に於いて政府案と相容れない點は殆んど皆無である。此處に本黨としての妙味ある秘策が隱されてある。殊に本案を應急策であると特に斷つて居る所に、本黨としての黨略政略が二重にも三重にも秘められて居ることを見逃してはならない。

五

以上は憲政、政友、本黨の三大政黨が、普選後に於ける新政治舞臺に於いて、何れもより多く國民の信望を繼がんとする所存から、色氣タツプリに表面社會政策と、産業の振興若くは敎育とを標榜して立てた税制整理案である。此の點は憲政會案の第三項が明かに前者を代表し、「中流以下多數國民の負擔を輕減する」爲に、所得税の免税點を八百圓より千二百圓に引き上げ、地租に地價二百圓以下を免税點に認めるが如き、明かにそれである。本黨案が自作農に對して地租全免案を掲ぐるが如きも亦それである。更らに亦憲政會案本黨案が共に、通行税以下の間接税全廢を主張して居るのもそれである。又政友會は地租を市町村に委讓することに依つて國税としての地租を全免しやうとするのも、形式的論法から言へば、多少の社會政策味（之れは別に租税體系上から問題とすべき整理案ではあるが）が含まれて居ると曲論し得るであらう。

斯樣に現在の政黨は一方に社會政策的立場から無産階級的分子の迎合政策を立案する反面には、産業の振興に名を借りて、法人の留保所得に對する累進税の撤廢（憲政會案第二項）を期したり、地租に對して劃一的に一分減（北海道にありては地價の百分の〇・七）を斷行しやうとして、都市資本家乃至農村大地主階級の負擔輕減を目論見て居る。其の間に多大の自家撞着があり、矛盾が潜むで居ることには少しも考へ及むで居ない。本黨案の自作農に對する地租全免案甚だ結構であるが、之れが爲

に自作大地主階級の地租が全免されて社會政策の本旨に戻る（産業振興上の名目は立つかは知れないが）場合が生じる反面に、農民の三割を占めて居る純小作人階級に對しては、此の稅整案が何等の政策をも意味しない不都合を生じるであらう。

翻つて稅制體系そのものの見地から三黨の立案を批判するに、我が國で今日稅制上の通說となつて居るものは、所得稅を以つて中樞とし、之れに補完稅として財産稅を配するか、特別所得稅を配するか亦は特別財産稅として見做して宜しい收益稅（各種の）を配するかの三點に限られて居る。然かるに政友會は地租委讓に依つて崩れる國稅の體系特にその確實なる補完稅を配することを忘れて居るに反し、政府案に於いては所得稅を中樞とする現行稅制體系を踏襲し、之れに配するに收益稅たる地租營業稅に適當（？）の改正を加へ、更らに新たに資本利子稅を起し、之れ等を合せて補完稅として居るから、稅制それ自身の立場から言へば、よしその稅率並に稅種の組み合はせ方には多少の批難あるとしても、體系說から見て最も完璧に近かいものであると言へやう。此の點から觀察して政府案と政友會案とは根本的に相容れない體系上の相違が存して居る。之れに反し本黨案は體系上に於いては政府案と殆んど一致して居る。特に資本利子稅を新設して補完稅たらしむる點は兩者全く同一であつて、唯だ纔かに、政府案に於いては、地租に於いて既述の如く劃一的一分減をなして、大都會に於ける大貸地業者に對しても同様に一分の地租輕減を行ふて社會政策を裏切らんとするに反し、本黨案に於いては自作農の地租を全免すると云ふ相違がある丈けである。從つて政府案と本黨案なるものは、根本に於いて相容れないものは斷じてない。故に稅整案そのもののみから檢察し、各黨がその主張に忠實である限りに於いて、政府と本黨とは、來る可き五十一議會に於いて當然提携し、稅整案を中心として起る難局を打開しなければならない。然し乍ら本黨が該案を楯として應急策であると銘を打ち、今後に於ける政局、特に議會内に於ける策戰上、變通自在を利かして、漸く政府と政友會と爭はしめ、少しでも漁夫の利を得やうとする黨略上の要素が過分に盛られて居るものと見るならば、今期議會の前途は、或は解散か？解散は與黨と謂はず野黨と言はず、最も[illegible]門として居る所であるから、其の間に各政黨が如何なる面目を立て、如何なる程度に於いて折り合ふか？さうした一切の事情は、時の力のみがそれを知るに止まるであらう。

若しそれ今次の三黨稅整案に於ける社會政策的價値の多少に就いては、何れも五十步百步の案であつて、純無産階級の負擔輕減の上には差したる影響のないものであると言へやう。何んとなれば通行稅、絹織物稅、醬油稅が全廢される代りに、關稅が引き上げられて日常生活必需品の價格を釀成され、酒造稅、麥酒稅、清涼飲料稅並に煙草の値上等に依つて、得る所を殆んど失はねばならないからである。これにも拘らず資本階級に對しては第二種所得並に地租に於いて減免され得るやうな稅整案を立てゝ居るではないか。（一一〇、夕記）

見よ！見よ！「キング」

滿天下愈驚嘆！

果然！發行部數

「世界第二位」！

創刊一年ならずして此大盛況！本社の第一理想を實現し得たるは之れ偏に滿天下御同情の賜物です。謹んで感謝いたします。

是非！一家庭一キング！

今や讀書界の人氣を獨占せる本誌新年號は、更に素晴しい評判で前注文殺到の大盛況！一刻も早く本屋へお申込置き下さい。



新年號表紙(猛虎)

此大人氣を負へる新年號は來る◎◎◎◎◎

十二月四日

全國書店で一齊發賣！

天下一品の大畫報

◎表紙「猛虎」は、日本畫壇の重鎭帝展審査員竹内栖鳳畫伯筆。

◎口繪とグラフは折込口繪「國の華繪巻」の外數十葉、畫壇の巨匠の力作及泰西名畫の原色版印刷、世界の珍寫眞を集めたる優美精巧グラビヤ版等、何れも讀者本位に莫大な費用をかけた飽迄壯麗なもの、眞に天下一品の大畫報

大傑作小說講談

素敵！素敵！無類

◎新小說 題未定(菊池幽芳)
◎新小說 題未定(小杉天外)
◎長篇小說 人間味(村上浪六)
◎熱血小說 悲願千人斬(下村悅夫)
◎科學冒險 天空魔(本間華紅)
◎武勇講談 元和三勇士(坂東太郎)

新年號の新陣容！

◎大隈重信傳……法學博士 高田早苗
◎趣味の科學……理學博士 山內繁雄
◎眞勇と蠻勇……醫學博士 小酒井光次
◎古今東西大人物美談逸話……
◎名人達人決死の大試合……鳴絃樓主人
◎修養一口話……名士大家執筆
▲題未定……(菊池寛)……
▲題未定……(久米正雄)……
▲血……(里見弴)……
▲社會美談兄弟の誓……
▲珍妙無類話の種……
▲古今東西大笑ひ噺……

△洋行土產……
△泰西立志傳……
△笑の逸話……
△滑稽和歌……
△名人苦心談……
△成功美談……
△世界珍聞奇聞……
△漫畫漫文……
△名家玉什……
△笑科大學……

破天荒の三大附錄

(讀者本位の大計畫利益を度外視せる大提供全く素敵！)

(1) 萬人熱狂知惠くらべ

◇新しくて奇拔で一寸問題を見れば誰でも考へて見ずにはゐられない敎育的で興味深い考へものいろ〳〵。

(2) 立身の礎・幸福の鍵

◇各方面の名士大家が熱血を注いで執筆された悉く力强い大文字！　一字一句人の肺腑を衝く名句名文揃ひ！

(3) 世界一周競爭双六・家庭大運動會双六

◇遊び方が非常に面白くて爲になる二大双六！一家揃つて笑ひ興じて樂しめる奇拔で非常に面白い！美しい事天下無比

飛び切り面白い！

特別讀物 劍俠美譚の舞台

◎滑稽小說 親鳥子鳥(佐々木邦)
◎武俠小說 劍難女難(吉川英治)
◎創作 勝敗(加藤武雄)
◎童話 嫁さがし(宇野浩二)
◎新講談 雷電爲右衛門(大島伯鶴)
◎歷史小說 快俠不知火(前田曙山)

力作快作五篇

何れもキング獨特の快讀物で、忠孝貞節に勇と俠、戀と美を配して面白い事天下無比！息もつけぬ樣な大場面が續出する大作揃ひ！

此外讀物尙澤山あり

◎三大附錄付新年號 一册五十錢 送料三錢

發行所 東京市本鄕區駒込坂下町四八 大日本雄辯會講談社 (振替東京三九三〇)

(全國到處の書店で販賣)

◇長崎高等商業學校教授　伊東勇太郎氏新著◇

新刊發賣

最新英語獨習講義

（理想的の良書）

四六判最上製本　全壹冊五百餘頁

正價金貳圓五拾錢　送料十八錢

▼▼英語研究始まつて六拾年　初めて理想的入門書生る▲▲

英語は學び方一つである。英語を全然知らない人、學んで進歩の遲きを嘆つ者は本書に來れ英語がこんなにも解り易く覺え易く面白いものかと驚きの眼を見開いて俄かに英語が好きになります。それは最新の學理を經とし多年實地教授の經驗を緯とし初學者に最も入り易い方法を按出し巧妙明確に趣味に富む講述の筆を運び字々智慧に輝き句々情味に溢れてゐるからです。英語を學びたき人は速やかに本書によつて英語の基礎を据え實社會活動の資格を一日も早く高められよ。

伊東勇太郎著　●文檢受驗用　**英語科研究者の爲に**　正價金貳圓　送料十二錢

現代文學新選　石川誠編著　四圓八拾錢　送料十八錢

現代詩歌新選　石川誠編著　貳圓八拾錢　送料十八錢

現代田園文學新選　古屋利文編　正價金貳圓　送料十八錢

童謠詩傑作選集　福田正夫　井上康文著　壹圓八拾錢　送料十二錢

性慾教育の研究　羽太鋭治著　正價金參圓　送料十八錢

最新哲學辭典　渡部政盛著　五圓八拾錢　送料廿七錢

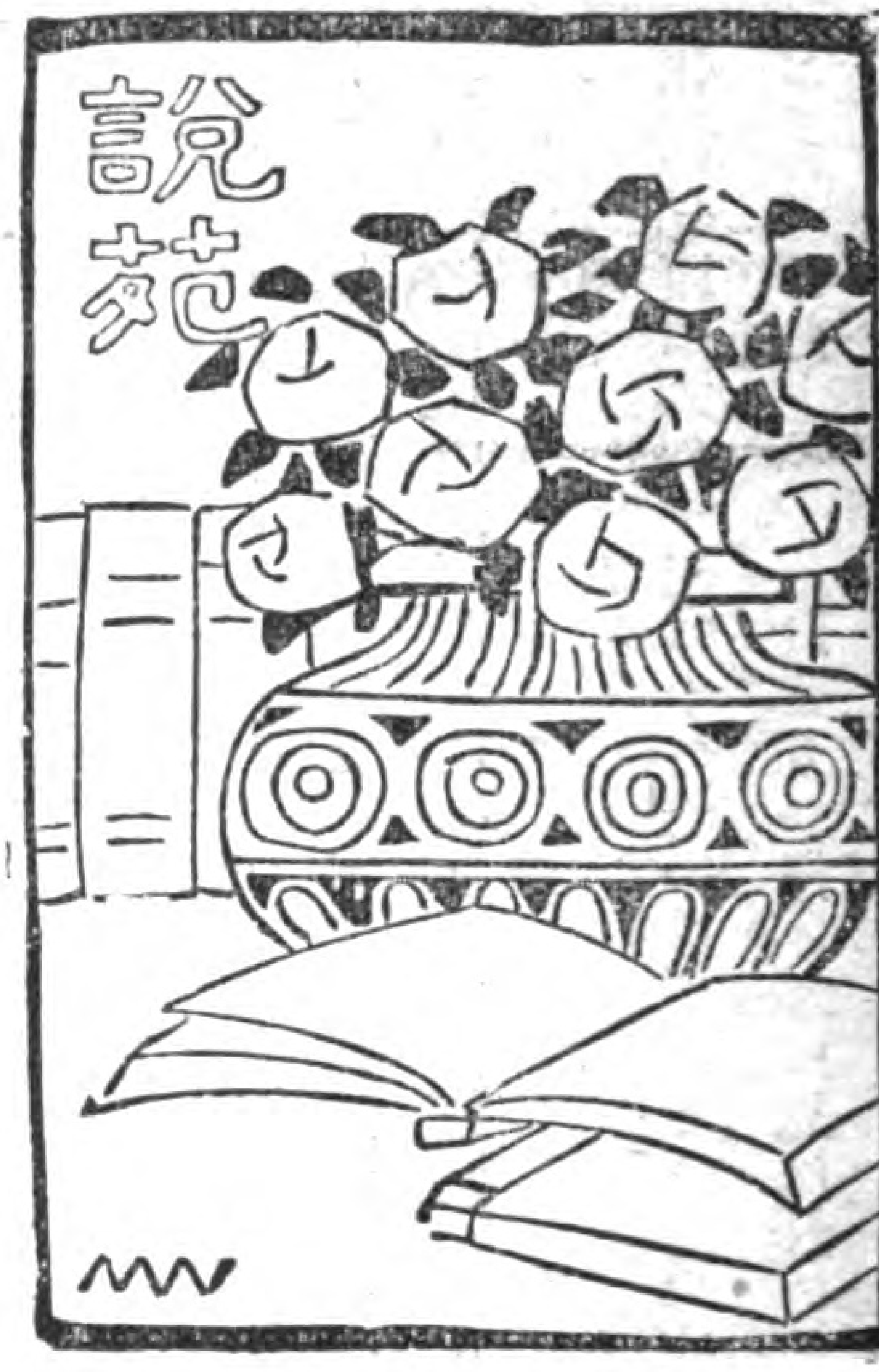
オイケンの哲學　稻毛詛風著　壹圓六拾錢　送料十二錢

カント研究　大關增次郎　七圓八拾錢　送料卅六錢

高橋敬視著　●**西洋哲學史講義**　簡潔平明に古代より現代まで叙述せる書　金參圓八拾錢　送料金十八錢

市川一郎著　●高尚なる理論を平易に講義せる　**哲學概論**　眞面目なる初學者を最も滿足せしむる書　金四圓八拾錢　送料金十八錢

東京市神田區表神保町七番地　**大同館發行**　振替貯金口座東京八七貳番



續々曲亭馬琴についての夜話

眞山青果

夜話その第一

昨日何ごゝろなく橫山健堂氏の「渡邊崋山」を讀むと、斯う言つてゐる。「崋山が自記の文章に、益友を列擧せる中に、屋代臨池、北靜廬、瀧澤馬琴の博覽多識と並べたり。實に予輩も亦た馬琴の學術、崋山の益友たるを得しと察する也。然るに之に對して森田思軒は、曲亭一僻才を以て名を此間に厠ふるを得るは幸と謂ふべしと罵倒し、近時渡邊修二郎氏崋山言行錄を著して、『其人格固より相比較すべきものにあらざるなり。』と雷同せり。予輩は敢て故らに馬琴を賞揚することを爲すの必要を認めず。然れども、如上、二人者の比較の如きは、寧ろ惡罵に類するものにして、若し假りに馬琴を以て、此の如き劣等なる人格者なりしとせば、此に親交せる崋山の人格も、又決して高尚なる人物とするを得ざる也。」と論じて、橫山氏は馬琴崋山の親交關係を親切に說明してゐる。その北靜廬とは獨創なき本箱學者として馬琴に輕視されてゐた一個の雜學者、屋代臨池も亦たその品性人格に於て必ずしも馬琴を敬服させてゐる人ではなかつた。馬琴自身に言はせても、この二人者の間に席を列することとは、さまで彼の榮譽とするには足りなかつたと思ふ。

然し、兎に角、わたしも崋山馬琴の交友關係は十分明かにしたいと思つて、從來諸書を詮索してゐるが、未だ恰好なる資料

を發見し得ざるを憾みとする。崋山の裁判前後或は自殺當時の馬琴日記を精査することが出來たら、或は其の心理動揺の間に馬琴の本心を推測し得るかも知れないけれど、今はその便宜さへ得て望まれない。僅に殘存する二三の自記によつて、その概略を親ふの外はない。天保十三年正月下旬の「著作堂雜記」には斯く記載されてある。

「崋山は渡邊登なり。三宅肥後守用人なり。先年蘭學の事にて罪を得て、入牢久しかりしに、竟に三宅殿お預けに成て、三州田原に送られて蟄居す。然るに猶其儘にてあらば、主君の爲めあしかるべしと言ひ聞かせし者あり。時に天保十二年十二月中旬、崋山意衷を書殘して自殺す。享年四十九歲ばかり成るべし。此故にや三宅殿いく程もなく御奏者番に成て勤め給へり。崋山の忠死其甲斐ありといふべし。此儀壬寅正月二十三日、御研御用達赤坂の竹屋平八殿事、狂名山川白酒、語次に是を告て、傳聞ながら慥なる說を得たり。」

崋山の切腹は天保十二年十月十一日である。馬琴は時日を誤記してゐるけれども、これより一層不審に思はれるのは、文意甚だ冷淡にして親友の窮死を慟哭するの情の見えないことである。崋山の自殺は主君の立身を妨げまいとしてその禍害を防いだといふ說は、當時も專ら評判があつたことで、道學先生の馬琴はそこに友人の死を意義あらしめやうとしたらしいが、それにしても親友としてはやゝ冷淡なるやうに思ふ。日記には天保十三年正月二十三日の條に、「三宅備後守殿蟄居用人渡邊登事崋山、舊冬十二月中旬、於三州田原自殺の由、慥なる風聞有之候。山川白酒咄にて初めて是を聞、忠臣の志也と云。尤憐むべし。此故に三宅殿を御奏者番になされしなるべし。崋山老母あり、妻あり、娘あり、何れも薄命の至り也。痛むべし。」と記し、雜記に比較して情意ともにやゝ切實なるを覺ゆるけれど、やはり何となく一膜をへだてゝ見聞する如き語氣を感じられる。馬琴は崋山自殺の源因を、その主君の榮達を圖る忠節にあつたと言ふ點にのみ重心を置いて、崋山それ自身に對する哀惜の情、又その奇禍に關する憤激のこゝろが見せてゐないやうに思ふ。崋山の知友舊故が相集りて、嘗て崋山のために熱心なる助命運動が開始された當時、馬琴は果して舊友のために如何なる態度方法をとつたものか、その點なども研究に値するものと思ふ。

ある歷史家は、馬琴が崋山と親交があつたといふ一事に加へて、彼に椿說弓張月の著があつたこと、未完ながら滿洲漂着地方を舞臺とする小說起稿の計畫のあつたこと、北海道旅行の志があつたこと、又馬琴は當時の翻譯書に依つて西洋科學の一

雅なりを知らうと努めた形迹あること、彼の藏書のうちに和蘭文字の手控帳のあつたこと、蘭人入京や外人の漂流奇譚に多大の興味を有してゐたらしい事實などを綜合して、馬琴は確かに當時勃興の開國思想に共鳴して、時代以上の進歩主義者であつたやうに結論してゐる。なるほど個々の事實を無造作に羅列して、强いて結論づけやうとすると或はそんな結果になるかも知れないが、これは馬琴が日本外史を熱愛した事實と蒲生君平と親友なりし點などから臆斷して彼を勤王家列傳中の人物たらしめんとする說と同樣、馬琴のために寧ろ有難迷惑なる臆說である。

馬琴は決して蘭學者の信仰者ではなかつた。寧ろ彼は水戸學派の影響をうけて、偏狹自尊なる日本主義者の一人であつたと思ふ。彼の蘭學者に對する感情及び對外國思想の大體は、彼の著書「獨考論」のうちにその趣旨を覗ふことが出來る。「獨考論」一部は世に馬琴の女弟子と稱せられる仙台の只野眞葛の經濟論「ひとりかんがへ」に關する批評の文であつて、馬琴の社會論策及び經濟主觀を研究するには最も恰好の著書である。ただ惜むべきことは眞葛原作「ひとりかんがへ」二卷（或は三卷とも云ふ）は散佚して世に傳はらず、わたしは只野家後裔や關係者子孫の家を搜索して、數年來心を苦しめてゐるけれど、未だその全文を知ることを得ないでゐる。隨て眞葛馬琴の經濟論社會論を稍々對立して研究することが出來ないのを遺憾なりとするが、然し馬琴の批評文だけを讀んでも、ほゞこの翁の意見の大略を察知されると思ふ。

只野眞葛の卓拔なる社會論議及びその數奇薄命の生涯については、いづれ題目を新にして世の視聽に訴へたいと思つてゐるが、兎に角彼の女は、當代稀有の海外研究家にして開國論者の唱首たる工藤球卿（俗稱平助、周庵とも云ふ。萬光と號す）を父として生れ、幼年より最も進歩せる開發的の家庭教育をうけた婦人であつた。程子學萬能の當時にあつて敢然として女權確立の叫聲をあげ、女子をして今日の卑屈鄙陋なる因襲に囚はれしめたる罪過は、源泉に遡つて孔孟の學說に由來する。漢學崇拜の惡風俗を脫却せざれば、婦人の解放、自立獨立は得て望まれないと主張してゐるのは、或は本居宣長などの學說に感染し、或はその父球卿などの持論を襲ふたのかも知れないけれど慥に尊敬すべき女學者の一人と思はれる。球卿は青木文藏、吉尾幸作等によりて疾くより蘭學を研究し、物產興利の學術に長け、田沼時代の殖產的施設には機微の間に劃策運動をなしてゐる傍には、大槻盤水を世に進めて蘭學を大成せしめ、粗頑不羈の林子平を誘掖奬勵して開國の急務を呼號せしめ、鎖國の惰眠

を覺醒せしめんと勉めたる先覺者であつた。その球鄕を父として生れ、父翁の家學を迷信的にまで崇拜してゐる眞葛の論策は、當時朱子學一三昧に凝り固つて、水戶學傾倒の馬琴にはもとより枘鑿相容れる筈はない。馬琴は聲をはげまし色を作して、眞葛の聖經を侮蔑して新奇の學說に惑ひ、紅毛に媚び妖邪に佞するの謬見を、ほとんど壓倒的なる態度をもつて辨駁せんとしてゐる。馬琴の見る紅毛諸蠻の國人は夷狄禽獸の境を出でざる野生人であつて、例へ技工智術の末端に於てはわれに勝れたる點があるとしても、彼は禮樂なく道德の敎なき卑土の賤族に過ぎぬ。彼がしきりに來つてわが國に交易を求めるは、わが美國の米粟銅鐵を奪つて、彼土生民の寒苦を救はんがために外ならない。わが皇國の臣民にして彼の詐術に惑はされて彼の流を趁ふ者あらば、そはわが二千年の歷史を敵に賣る者と言ひたいと云ふ固陋なる水戶學者流の見解であつた。この馬琴にむかつて、時流に卓越する開國思想などを要求するのは、後世學者の誣妄も甚しいものと云はねばならない。彼の日常生涯を見ても、彼の和蘭ぎらひは殆んど感情的になつてゐて、親戚の病人が滋養品に牛酪を用ゐたいと云つても、馬琴はその効能を否定してゐるばかりではなく、いつも機會あるごとに蘭法醫學の決して信じがたきことを宗張してゐる。彼の晩年の雜記異聞雜稿のうちには、「近世は蘭學さへひらけて、夷狄の療方を和譯せし書多く出、蘭學醫とて一家をなすも行はるゝに、いかなれば賊天朝古昔の藥方は地を拂て取用る者なきを本意ならぬ事と思ひ候ひしが。」とて、既にその頃は蘭方醫の流勢の世間に動かしがたき時代となれるにも拘らず、彼がなほ詩歌的懷古の情に既つて、千年往古の和氣丹波の古方醫學の復興を夢みてゐるところに、如何にも馬琴の馬琴らしさが見られる。

追記。十月三日、仙台鈴木雨香氏の搜索によりて、只野眞葛自著の「むかしばなし」六卷の完本を讀むを得た。それによりて工藤平助及び眞葛女の生涯經歷について多大の智識を得たことを感謝する。隨て、平助の開國說唱道の動機などについて、多少前節に訂正を加ふべきを知つたけれど、無論その大體に於ては差違なきを信ずるから、しばらく前文のまゝにこの原稿を進めることゝする。

崋山は宗伯の友人であつて、綸甞を同門に學んでゐる。少年時代から瀧澤家に出入して、馬琴もはやくからその偉異の才能を認めてゐた。階級觀念に囚はれ易い馬琴は、例へ小大名でも三宅侯の重役の子息をわが子の親友とする點に一種のほこりを感じてゐたらしいが、更に無、また二十歲前後の崋山を兩方に

紹介して、畫名を遠國に高からしめんとする親切は確にあつた。隨つて崋山は數々瀧澤家に往來して、博識なる馬琴の學說を聽き、支那小說の翻讀などには可也に馬琴の示教を請けてゐると思はれる。何か次第があつて中八九年は交通も疎遠になつたやうだが、文政の末年あたりからは又々往來が頻繁になつて、その頃はもう宗伯の友人としてゞはなく、馬琴の學友として交際を結んでゐたらしい。天保六年五月宗伯死亡の時などは、その翌日に侯家から勤仕姿のまゝ馳け付けて、既に入棺の蓋をあけて宗伯の枯相を二三時間もかゝつて精寫したといふ話は、馬琴の自記に詳しいからこゝには云はぬけれど、宗伯の死後も崋山は絕えず音づれて、この薄倖なる失明文人を慰めてゐるやうに見える。その頃はもう崋山の謂ゆる蘭學癖が次第に向上して、藝術愛玩の異國興味から進んで、その對外思想は段々と社會的政治的色彩を帶びて來て、やゝ實地運動にも移らんとする時であつた。性質濶達の崋山であるから、長崎漫遊の土產話やその他邊防の時事問題などについて、馬琴との間にそれ等の談話が交換されてゐることゝ思ふ。然るに馬琴の自記の多くを見るに、彼は最後まで崋山を一箇巨名の畫家として見やうとして、蘭學者開國論者としての渡邊登は極端に避けて、その近接をも厭ふてゐるらしい模樣が見える。日記にも雜記にも崋山を記すには必ず畫家渡邊登と書して、彼の政治思想や蘭學問題についてはなるべく目を掩ふて接觸すまいとしてゐる形跡がある。例へば天保二年頃の日記に、「渡邊登より使札、當春中松前アッケシ一件記錄有之候はゞ、借覽いたし度旨申來る。右記錄は無レ之、勿論さしたる事に無レ之、世上いろ〱風聞いたし候へ共、手前には承及候事無之旨、返翰に申遣す。」とあるのは、何となく語氣冷淡を極めて、他の日の日記に崋山との書翰往復の際に極めて溫情をつくしてゐるのと、甚だ似合はしからず思はれるばかりでなく、アッケシ事件の記錄は既に馬琴は松前藩の太田九吉を介して同藩より借入れ、淨書所藏してゐたやうに思はれる。また文政九年の和蘭人出府の時に、松前老公より使者が來て、宗伯を蘭人逗留の長崎屋に出張させて、紅毛人風俗などの珍事異聞でもあらば是非聞きたいとの下命に接しながら、「然る處一向知人無之に付、及レ承候儀も無之趣、予代筆にてうけぶみ遣レ之。」とあるなども、甚だ異樣に感ぜられる。單に和蘭ぎらひの性癖に出たる言とのみは思はれない。誰に貸したのかその記憶さへないが、わたしの所藏本の「戊子日記」の高橋作左衛門所刑前後の記事に、馬琴が屋代弘賢などとその記錄や風說書を貸借してゐる條下を讀んで、政府を恐る、有司を憚るゝ處の如しと欄外に朱書して置いた人がある。彼の性質をう

がつてゐる評だと思ふ。珍事異聞に餓へて絶えず尋捜につとめてゐる馬琴でありながら、その事苟も當代の政治に多少の交渉をもつ場合には、彼は極度に恐竦してその筆記や自分の言説に可笑しくなるほどの戒愼を加へてゐる。前に述べた「獨考論」などは原著が原著だけに、多少當代の時事問題に觸れてはゐるけれども、事毎に眞葛の新思想を反駁して、現在制度を讃美し因襲固守の意見を發表してゐるものなるが、それでも氣になると見えて、隨所に、「論者曰、余は忌諱に觸るゝことを云はず、まいて筆に載することなし、よに賤しくして貴きを犯すものは、枯たる木をもてもゆる火を打つが如し。事に益なきのみにはあらず。亦殃危を取るのはし立なり。しかれども今獨考をあげつらふに及びて、おぼえずして犯すことあり、只その作者の需に應じて、他見を許すものならねども、なほ群少の慍を惧る。祕よかし、作者の惑ひを解くことあらば、小補なしとすべからず。」とある文意を、煩さきまでに繰返したる上に、若し稿本の世に流布することもあらんかを憂へて、「是ノ書工藤氏ノ懇ニ依リ、聊カ愚衷ヲ注進ス。余嘗テ謹ヲ以テ無事ノ管鑰ト爲ス。是ノ故ニ窓友トイフト雖モ、時諱ノ忌諱ニ觸ル、ヲ說サザル也。但是ノ編ニ於テ、己ヲ獲ザル者アリ矣。余竊ニ之ヲ惲ル。宜シク祕藏シテ外人ニ披閲ヲ許ス勿レ。」と子孫に嚴戒して、遂に不出門の祕書として藏して置いたくらゐである。彼が崋山が當時豪放疎懶の高野長英その他の人々と結社して、自ら蠻社と稱して矯激の餘り時に不謹愼なる行動などもあつたのを見て必ず眉を顰めて視線を外にそらすに努めたらうと思ふ。蠻社の同人等の行動は、同じ蘭學者間にも物議をかもして、溫厚なる坪井信道ですら書を學友なる岡研介に送つて「江戸洋學家無數御座候得共、多分山師俗子而已にて、一も取るに足り不申候。在職有力者の中にも大に其說に心醉する者、往々御座候得共、何分學者に出群の者無之、唯々一時の虛名と小利を貪る鼠輩のみにて、道欲レ行而不レ行、有志の士は不堪忿候。（中略）昨夜玄朴宅にて高野長英に始而面會仕候。放蕩を絕し、書生を教授し、大都を一變可レ仕由申居候。何卒如レ言あれかしと竊に窺居申候。」と痛嘆してゐるほどだから、馬琴の同人等に對する嫌惡は更に一層を加へるものがあるだらうと思ふ。次に引照する彼の書翰は月日を缺くが天保十年、伊勢の篠齋に送つたものである。崋山入獄直後の彼の感想を見るためにこゝに抄記しやう。

一、八月十一日、畫工（崋山畫工也）佐藤理三郎來訪、この理三郎は生平和漢の學を嗜み、都て名家と號く交り、屢々走り使遊人に候處、野生は當惑、所親の紹介にて、はじめて對面、この人御故實にも相達のよし、當時の御時なども致

し候へば、御存に候哉。蘭學をも唱候間、花山（華山）の懇友に候間、彼件の實説を聞候に、世の風聞は虚實半分にて、たがへること多し。理三郎云。事の起りは、當今有名之蘭學者佐藤某（佐藤信淵なるべし）が、夢物語といふ書を綴りしによれば、この夢物語は、瓊浦の風聞書を探り得たる歟、アメリカ交易願の計較あるよしを述て、その得失を論じ、官府へ指圖がましき事を書たる也。花山は是を借謄せしのみにて、その作者にあらず。アメリカに某といふ蠻國第一の豪傑あり。我國の漂流人十七人を載せて、浦賀港へ推參すべしと云風聞ありしが、幸にしてそのアメリカの豪傑某は、近日船中にて病死せしとぞ。夢物語は、この事を論じたる者也と云。猶詳なる事は、聞候ても憚あれば、不誠□□候。この佐藤生は、凶變をはやく聞知りて逐電したるが、今にゆくへしれず。彼自訴せし欠落醫者（高野長英を云ふならん）は是と別人也。花山も蘭學者の有名にて、年來心を盡して奇書をとり出し、奇説を探り得ざることなし。且義侠の本性にて、御國の御爲と唱て、いひ過し口すべしたる事多ければ、その事かねて聞えしにや、頭立たるやうに思はれ候也。初は花山の懇友を御とりしらべ有之、良賤によらずその交名を書上られしよし聞えしに、理三郎もその内なれば、召出さるゝ事あらんと思ひて、その比近在へゆきしが引かへして在宿したるが、泛々の者は御沙汰に不レ被レ及。やう〱御吟味筋もかはり候様子にて、輕く濟むべしとぞ。その徒の推量に、花山は主君へ御預押込になるべしなどいふと也。且花山は、是迄主君へ忠勤の功多ければ、三宅殿も甚惜みて、夏中しば〱帷子を牢中へおくらせ、懇友も度々揚り屋へ牢見廻りをつかはしければ、花山は牢中涼しき處におかれて、少も艱苦なく恙あらず、御吟味の折も御答凛々として、滞ることあらずと云。初（召しとられしは、五月六日也。十五日といひしは予が覺ちがへ也）召出さるゝ時、藏書は皆御取上ケになりしかど、壁の腰張りにせし反故迄も剝して持參せられし事はなし。風聞に雜書を譯して、國政を誤り奉りしといひ候は、夢物語の事を、聞ひがめたる也といへり。某徒數人、このたびの件にもれたるあり、皆利をたづねて夷狄を景慕しぬる中に、花山は夷狄の防ぎを第一にして、御國のおん爲に精力をつくすと云。予が云それも入らぬ事也。人各その職分あり、陪臣は陪臣の職分あり。その君の爲に誠忠ならば事足るべし。その職にもあらぬ御國の大事を、己が位のごとくにこゝろ得たる誤にて、不測の罪を得たるなるべしと

いいしかば、理三郎閉口して去りぬ。この實話によれば、夷國の事書たる書を藏弃したりとて、さばかり恐るべきにあらねども、此節の事なれば、獨を愼てひめおくにしく事なかるべく候。この義御こゝろ得の爲再告、桂窓の君へ御廻し、兩君子口覽の上、速に御夏蟲可被成下候。但し御隣友はヶ樣の禁忌に□ることをいとはれ候間、君のみ被成御覽、直に御夏蟲の後、彼人江御口達にて御傳へ被成候ても可然候。是等平にのせがたき事なれども、知己の爲に交友の信を盡さんとて、ひそかにしるし申候。

四五年前大阪公會堂に於て某博士の講演を聞いた。曲亭馬琴の勤王思想といふ演題であつた。例の如く「蒲の花かたみ」や八犬傳の親兵衛京上り美少年錄などが引證されて、堂々たる講演ではあつたが、馬琴自身のために考へて些か氣の毒にも感じた。馬琴の勤王說は川田甕江依田學海の諸先生によりて早く傳へられて、可也廣く論じられてゐるが、賴山陽の討幕論以上にこれは危險なる立說であると思ふ。(水戶の櫻任藏にも馬琴の勤王說を稱へた雜誌があると聞いたが、それは未だ見ない。)元來馬琴は甚だ日本贔負の人で、忰宗伯の診察所にかける商書を京都の繪師山口素絢に托するのに神農の像は面白くないとて、大汝尊や少彥名尊の像を描かしめんとしてゐる如き、又彼の名文と稱せらるゝ八犬傳對牛樓の文章を或人が水滸傳鴛鴦樓の換骨なりと評せるに憤慨して「水滸の鴛鴦樓にて仇にもあらぬ奴婢迄五十餘人を殺し候事、甚だいはれなく、且豪傑の趣意にあらず候。こゝが盜人根性にも有之候。かけまくも

かしこき

天朝の勇士は縦仇人の餘類也とも女子供には目を掛け不申候

曾我五郎の五郎丸に抱留られ候も女子の姿にて白衣を被きたる故、女子也と思ふてかまはぬ故組留められたる故。」とて謂ゆる日本魂を讃美してゐる如き、又本居宣長を尊敬してその肖像を伊勢に求めてゐる如き、又しきりに吉野朝廷に關係する史書を蒐集して　南朝側の著書は僞書なりと雖もなつかしき心地すると云つてゐる如き、いづれも彼の一徹なる皇國贔負であつたことを說明してゐて、彼の勤王說を認證するには恰宜なる資料であらう。また彼は甚しき烈公崇拜家であつたらしく、晩年の雜記にも水戶公の和歌を吟味すると潸然として胸憶のひらくる思ひありと記してゐるほどで、烈公の著書文章などを辛苦して探し求めてゐる。けれどもこれ等の事實を以て直に彼を勤王說者たらしめんとする者あらば、それは甚だ早計に失してゐると

わたしは思ふ。それ等を斷定する前には先づ精密に時代思想の氣運好尚を考へねばならぬ。時代の輿論、時代の常識を稽へねばならぬ。わたしは水戸學者の主張する如く、果して水戸烈公はそれほど徹底したる勤王論者であつたか何うか、その點に於てさへ疑惑がある。

玄同放言は文化の中頃から文政の初年にわたる彼の蘊蓄を傾けたる苦心の著述で、彼のためには終生忘るべからざる記念の書である。煩さく云ふやうだが、彼が婦女子の玩弄たる戲作者の遊閑生活に倦怠して、われも實學者として文學壇上に一席を占め、天下有用の書を編んで後世に益せんと立志せるその當初當面の編著である。(尤もその以前にも燕石襍誌享雜記等の著作はあるが、世評も餘り思はしくなかつたし彼も亦その學術の到らざりしを愧ぢてゐる。)玄同放言の序文を讀めば、當時彼は如何なる書をもつて天下有用の書となしたかがほゞ窺はれる。即ち彼は心ひそかに新井白石貝原益軒の二大家に私淑すると共に、保健大記の如き著を推稱して、「栗山潜峰の保健大記は通鑑綱目と伯仲す。仰ぎて瞻、俯して思ひ、披きて坐右に置く時は、蘭の室に入るが如く、日月に閲すれども、猶新なることゝちぞする。」とまで云つてるのは、當時に於ける彼の思想學風をも窺ふべきであらう。

精しく修靜庵遺稿を讀む人は必ず心づくことであらうが、文化年間に於ける馬琴の學問見識が酷だ蒲生君平のそれに肖たるを覺えるだらう。時には馬琴の議論は君平の文章の翻譯ではないかと思ふほど類似してゐて、その影響の多大なるのに驚かされる。馬琴と君平の交際は「蒲の花かたみ」の外に見るところが多くないゆゑ輕率には斷定されないけれども、文化年度に於ける馬琴の學說は多く蒲生君平に啓發せられてゐるのではないかと思ふ。彼が切りに戲作生涯を耻ぢて水戸の學風に傾き烈公崇拜に陷つたのは、立原杏所その他水戸人士との交際が頻繁であつたゝめもあるが、主として君平を通じて水戸學の影響をうけたらしく思はれる。そして兩者の交情の最も親密なりし年代は君平の駒込居住時代から石町鐘撞新道へ移轉(文化七年二月)の後まで引續いて、馬琴は宗伯を遣りて君平の授業をうけしめ、君平はまた職官志の完成に馬琴の援助を受けてゐるかと思ふ。「蒲の花かたみ」は馬琴が後年君平の行狀を追記したものだが、情意とも哀切を極め文章もまた放膽慷慨にして、平常の馬琴が當路の忌諱を畏れて恂々乎たるに似ない。わたしは馬琴が文化七八年の頃から急に態度を變して、世の儒者學者と稱せらるゝの徒が、名利を趨ふて經世の心なく詩文の遊戲生活に墮するを慨いて、「今の俗儒は天朝の故實を知らず、夏夷の順逆の

理に暗くして、（中略）彼世に阿りて利を謨り、皐皮に坐する草鞋大王、みづから名敎の罪人たるを知らざる者と隣をなさじ。」とまで憤激を極め、遂に門戶を鎖して文壇交際を絕つた事實を、彼君平が講學約束その他の文章に當世學者文人の氣節氣概なきを痛罵してゐるのに比較して、兩者の交友關係に就いては一層深く研究して見たいと考へてゐる。

談話の多岐にわたるを恐れて、わたしは馬琴の勤王說にもどることにするが、例へ馬琴に水戶學尊崇の時代があり、また蒲生君平等深大なる感化があつたとしても、**それを直ちに彼の勤王主義と見ることは出來ないと考へる。否、言葉をすゝめて云ふと、わたしは當時の烈公當時の**君平に截然たる勤王意識があつたとは考へられない。君平の勤王意見については既に水戶の栗田寬博士も叙述してゐる如くであつて、寧ろ今日の學者間になほ「藪罪略」を彼の記述なりとする者があるのを怪しむ。蒲生君平の文集を検しても彼の一生は家康尊崇をもつて終始してゐる。「天子ノ官ヲ守リ、天子ノ命ヲ奉ジ、所在皆王政ニシテ海内虞無シ、一ニ是皆東照贈大政大臣ノ賜也。其功烈豈偉ナラズ乎。」と稱揚し、「東亂の書に功烈あるは實に我が周公也。」と讚嘆して、荻生徂徠や太宰春臺の學徒が家康を極端せりとて、春を後世に殘すの小人なりと罵つてゐるのは、以て彼の主張を徹

括すべきであらう。君平のこの議論は水戶學思想のほとんど全部を覆ふもので、ひとり烈公に限つてその範圍を出づるものではないと思ふ。若し眞に王覇名分の確立を期して論理を進むるならば、勢ひ國家大權の所在について正確なる考察があるべき筈で、また其の時をもつて勤王心の覺醒とすべきが當然であると思ふ。わたしは未だ不幸にして君平にも烈公にもその事實あるを見ない。市井の一小說家馬琴一人が極端なる神祖尊崇者であり且つ關東讚美者であつたとて、それは決して異とするに足りない。**要するに當時の尊王心は南山懷古の詩歌的詠嘆または**宗敎的憧憬の一種の時代感情であつて、實體の存在を認めての論說學說ではないやうに思はれる。水戶學說に確然たる勤王論の覺醒を見るのは遥かに後年のことで、寧ろ齊昭の沒後と認めるのが正當ではなからうか。然るに或る論者は馬琴が口に南朝義烈を讚美しながら、その黃表紙時代の作品には楠正成の行爲を揶揄する口吻ありとて、切りに彼の俗劣を責めてゐるけれど、これは寧ろ責める方が無理だらうと思ふ。

「此御代久しく治れるにしたがひ、よつの民ぐさやゝしげり來て、（中略）四の時やすらかにたのしめることは、いはまくもかしこき大君の御めぐみにこそあなれ。」と彼がその文章に書いてゐるのは、文飾でも舞文でもなく彼は衷心から家康の創業を讚

烈なりとなし幕府政治の恩惠を極度に認めやうとしてゐた。随つて彼は可也の江戸贔負で、都會風俗の頽廢を慨きながらも、やはり京坂人以上に關東人の美質特性を發揮せんと勉むるやうな傾向があつた。出版書肆の不德などでも若しそれが大坂人であつた場合には、彼は容赦なくその不都合を責め立てゝゐる。彼が毎月の日記に缺さず將軍家の上野參詣の記事を書き、式例滯りなく還御ありしを喜んでゐるのや、町役が當日の觸流しに煙止めの箇條を忘れたるは苦々しなど憤つてゐるのを見ても、彼の思想は窺はれるだらう。

夜話その第二

一、此節上野、山櫻ひとへさかりのよし也。（三月四日）

一、今日來客使札なし。草堂閑暇。茶餘客話三冊め抄錄、四冊め過半披閲、今夕四時就寢。（三月廿日）

一、隱元豆たね、あさがほたね、今日晝後少々蒔之。（三月廿九日）

一、ほとゝぎす初音今日晝前聞之。小滿節前六日也。（四月七日）

一、今日より家内蚊やり火を用ふ。此節追々蚊多きによつて也。（五月十七日）

一、宗伯今朝より取かゝり燈籠はり替畢。如ニ例年一夕方より燈籠をかけ候故也。（六月晦日）

一、過日淸右衞門かひ取持參の松蟲鈴蟲いづれも不鳴。（七月廿三日）

一、今日美日。快晴風なし、此節大に秋冷ニ成、今夕一天雲なし。明月鏡のごとし。宗伯と南緣頰にて賞レ月。冷氣に候間四時就寢。（八月十六日）

一、今日より市中略暦をうりあるく聲す。

右は馬琴日記一箇年の間から、家事業務の紛雜記事を避けて、彼の淸閑悠遊の時間を目につくまゝにほゞ摘記して見たに過ぎない。俗務煩瑣にして小事にこせつき、何時も屑々として人生所務に喘へぎ苦しんでゐる彼の日記のなかに、たゞこれだけの記事でも、ふと偶目し得ることは、われ等讀者にとつて何

れだけ慰藉になるか知れない。わたしは何時も彼の日記を讀み疲れて、偶ま這の一二行の記事に逢著する時、全くほつと太息を吐いて、炎熱の砂礫地に惱む旅人が、思はぬ綠陰に一脈の湧出清泉を發見した時のやうに、何時もこゝろを蘇らされる。そして同時に染々と思はせられることは、彼の生涯の餘りに長きに過ぎたことである。彼の歿年の八十二歳を十年はやめて、若し七十にして死ねば、馬琴はそれだけ彼自身のために幸福であつたと思ふ。六十にして死し、五十にして死し、一年でも早くこの世の終を告げ得たなら、彼は必ずそれだけ幸福であつたと思ふ。例へそのために八犬傳は完成されずとも、美少年錄、傾世水滸傳が世に出でずとも、それは要するに他人の問題である。わたしは這の翁自身のために考へて、その勞苦の一生が餘り長きに過ぎたを思ふ。恐らくこの感慨は私一人ではあるまい。この小文を讀む人々もまた、彼が餘りに營々として世間事に憊れ、形式に泥んで自己を殺し、自ら桎梏をつくつてその間にもがき苦むやうな、間斷なき彼の勞苦の記錄には、必ずや困憊を感じられるだらうと思ふ。依つてわたしは今、讀者の倦怠を醫すために、こゝに少しく趣向を替へて、暫く他の方面から馬琴の一面を觀察して見やうとする。

四谷信濃坂に移轉した翌年（天保八年）大晦日の日記に、馬琴入浴の日記がある。孫の太郎をつれて午前十時頃に家を出でた。錢湯にゆき、歸路は途中の茶店に一憩ひして、正午頃やつと家に歸り着いてゐるのは、腰痛のため歩行不自由であつたのだらうが、それにしても、「七月以來久しく不レ浴故也。錢湯は去十一月、轉宅後初めて罷越す。」とある記事が、わたしには些つと異樣に讀まれた。篁村氏は說明して、四谷の新居が湯屋に遠く、「田舍同樣邊鄙の地なれば、偖こそ湯の歸りに茶店に休むほどの勞れは覺えられしなり。」と言つてゐるけれど、半年近くも沐浴をせず、一年半ぶりに錢湯に趣くとあるのが何うもわたしの心に落着かないので、少し注意してゐると馬琴は無類の湯浴嫌ひであつた。馬琴一人ではない、瀧澤家は全家族擧つて入浴嫌ひなことが判つた。或年の四月十五日の日記に、馬琴は宗伯と孫の太郎をつれて下谷新地の錢湯に出掛けて、「當年宗伯は初湯、予は二度め也。」とあるのみならず、その年一年間の入浴は八月廿一日、十月十日、十一月十六日と日記には三度、若し他にあつたとしても一二回を越す模樣がない。馬琴一年間の入浴は多くて五六回を出なかつたと思はれる。その上、病身の宗伯は浴後はひどく疲勞して必ず一二日寢てゐるし、四歳の時初めて辻風呂を知つた太郎は六七歳に生長しても當年の柘榴口を怖

がつて、いつも泣き叫んで浴湯へ入らなかつた。同年十一月十六日の日記にも、「太郎は去年來久しく錢湯に入らざるより、風呂の內くらきを嫌ひ、おかゆのみにて風呂に不ㇾ入、寒風の節尤も不便といふ。」ともあつて、瀧澤家の入浴はいつも家中大騷をしてゐる。尤も、錢湯の代り自宅にて時々行水を使てゐるやうだがそれとて月に幾度と數へる程はなかつた。「お百行水づかれに付、早寢」など言ふ記事も折々見えるほどである。前の四谷の大晦日の日記に、七月以來久しく浴せずとあるは、この行水のことを言つたのだらうが、それにも拘らず一年半ぶりに入浴して、「一旦垢も多くなし。」など呟いてゐるのは、よく〱馬琴は湯浴嫌であつたものと見える。それ程入浴嫌ひの無性な馬琴が、然しそれとは反對に頭髮の伸びるのを非常に厭ふて、五日目七日目には必ず月代を剃り、手のない時には自剃りさへしてゐる潔癖のあつたは、寧ろ不思議なやうな氣がする。それは無論當時の習慣にて、人に對面するに頭髮亂髮を無禮としたゝめもあらうが、理由はそればかりではなさそうに見える、馬琴は全體、自分の頭髮の薄くて早く禿頭になつたのを、妙に小兒らしく氣にしてゐる。四十五六歲には附髮などしてやつと髷の形を縮んで、「十筋右衞門髷にもならず。」など自嘲してゐるほどゆゑ、若い時からの習慣で、頭髮の薄いのだけは妙に氣になつてゐたらしい。彼が町役を退いて隱居すると同時に剃髮したのは、附髮や鬢付油の世話が煩さいからだと云つて、剃りこぼつた坊主頭を然もせい〱したやうに悅んでゐる。

八犬傳の作者が犬を恐がるのは可笑しいと、誰かも戲れて書いてゐたやうだが、馬琴は事實動物が嫌であつたらしい。門內に犬猫が浸入すると、いつも家內中大騷をして、日記にも大業らしく書いてゐる。それが垣根を破られるとか、庭園を踏み荒すとかいふ、目に見える損害のためかと思ふに然うばかりではないらしく、寧ろ本能性に恐怖を感ずるかと思ふほど、宗伯も馬琴も極端に獸畜を忌嫌つてゐる。病中の宗伯が台所の羽目板に猫の爪音を聞いて、夜中睡らずに神經を亢奮させたり、野良犬が屋敷に紛れ込んだと聞いて、著作中の馬琴が六尺棒を持て飛び出し、門を閉めて汗になつて追ひ廻はしたりしてゐるさまが、餘りに眞劍過ぎて氣の毒にも見える。垣根をくぐつて野犬が屋敷內に入るたび每に、必ず橫町の何某が逐ひ入れたのだと誰某の惡戲に相違ないとか、親子とも目を光らせつゝ詳議して、その邪推を日記にまで麗々と記入してゐる。前揭の記事に隣家の無法者伊藤貞常が馬琴の家にあだをする場合には、いつも死狗を投込んだり、犬糞を投じたりするのは、思ふに馬琴の

この病癖を知つてする悪戯であつたらう。然し八犬傳作者が犬を恐れる滑稽さに較べては、怪鼠傳作者の馬琴が鼠を怖れたのは自然とすべきであらう。彼は亦ひどく鼠を憎むんで寢室近くの部屋に鼠がコトリと音しても、彼は夜中安眠されなかつたらしく、「昨夜小ねずみ南緣頰より紛れ入り候や、深夜に入、北三疊の方に居候間、曉七時過より余不レ睡、天明て追出させ、その後小睡、依レ之今朝は五時起出、例より尤おそし。」など云ふ記事が、日記に屢々繰返されてゐる。そして翌日は早速親子して鼠穴を檢査して、栗毬を詰めたり、祈禱札を壁に貼り付けたりして、**一生懸命驅除法を講じてゐる。**

犬猫は恐れても馬琴は、全然無害の小禽鳴蟲などは愛玩してゐたらしい。練馬の百姓に頼んで野生の鈴蟲や機織蟲を庭の草叢に放したり、婿の清右衛門に托してわざわざ松蟲鈴蟲を買はせ、それが鳴かぬと言つて代錢を取戻したりしてゐる日記もある。小池に緋鯉や金魚を飼つてるのを見ても、生物飼養の趣味はあつたらしい。現に、小禽もカナリヤだけは養つてゐた。四ツ谷に移つてからの日記には、その記事を見ないが、神田居住の頃までは確かに彼の書齋近い緣側に飼はれてゐたらしい。それを牧之に與へる書翰に、「野鳥をかひ候はちと不仁にちかく、快からぬ所あり。から鳥は庭籠にて生じ、籠にて終り候。これを放ち候へば、忽地鳥にとられ候故、ぜひ人の手につかねば、天年を保ち得ざるもの也。その上粒餌ゆゑ世話も薄く、年中囀り候へば餘鳥にまされたり。氣根をつくし候もの、勵物を常に見れば氣を養ひ候故、飼ひ置き申候。」と長々しく辯解してゐるのは、友人に聞かすよりは寧ろ玩弄を愧ぢる自己の良心に對する言譯にて、彼の小禽好きは天性の趣味であつたらう。元來瀧澤家は代々小禽ずきの家で、「吾佛の記」によれば馬琴の祖父左**仲は浪人後鶯など養つて娯んでゐるやうだし、父興繼の死亡の**際には鶉、駒鳥、畫眉鳥などの籠禽が六七羽もあり、外に鶏もあまた飼養してゐたといふから、それ等の趣味が馬琴に遺傳されたものと見える。八犬傳の第八輯か九輯かの奥附に、馬琴は諸鳥飼養法の廣告を出して薩摩老侯榮翁の諮問をうけてゐることや、彼の後年に「禽鏡」なる著作があつて、鳥類數百種の精密なる圖譜を編述てゐるのを考へても、彼の青年時代などに或は鳴禽飼養を試みた時期があつたかも知れない。——後、友人に注意されて市嶋春城氏の「藝苑一夕話」を讀み、甚だ有益なる資料を得たことを感謝する。同著によりてわたしは初めて、馬琴に「無益之記」なる小著のあることを知つた。それに據れば馬琴は曾て小禽の飼養に熱中せる時代があつて、その家に養

外に多數の禽息を集め、爲に費した金額も少なからぬものであつたと言ふ話である。然う云へばなる程、馬琴が薩摩老公の諮問に答へて、「ちぬも小鳥も、十七八ヶ年以前、よほどかひ候ども」云々とある言葉も判然するし、前記のカナリヤ鳥は多分當時の遺物にて、牧之に對して苦しげなる辯解を敢てした理由も明瞭になる。「無益の記」はあまり世間に流布されぬ著作だから、その序文をこゝに轉載して置きたい。

「甲戌の春、余に小恙あり。夏に至つて尤も留飲に苦しむ。しかれども市中、尺地の逍遙するに由なし。おもへらく、もし試に小禽を養はゞ、日々に運動して氣を養ひ、生を養ふべし。因て五月に至つて、はじめてこの戯をなせり。しかるに余が性、物に泥り、正に諸鳥を獲て、毛色啼音飼養の事、つばらにこれを極めんとする程に、覺えずその數百餘鳥に及べり。その事未だ盡さずして、心忽ちに倦き、病痾全く瘉ずして、養中既に空し。是俗翁兒戯の態、何ぞこゝらに小心して、徒に日を費すべき。則ちその鳥を放下して、復び養はず、錄して以て自ら警む。大約養鳥の樂みは、財を費し業を怠つて、亦絕えて益あることなし。譬へば登樓賭博に異ならず。故にわが非を飾ることなく、深く兒孫を箴むるもの也。

乙亥季秋　解

この甲戌の歲（文化十一年）は、彼の南總里見八犬傳第一輯、朝夷巡島記初輯、兩書の刊行された丁度その年にあたり、愛禽の過を悔んでこの序文を書いた時は、彼が後世有益の書を編むべしと立志して、潜心「玄同放言」の著作に從事したその歲か、その前年ぐらゐに相當する。彼が數々自記してゐるやうに、文化の末年頃より思想一變して他人の娛樂のために筆墨を弄する戯作者境涯を極端に恥ぢると共に、切りに隱逸を冀ふところ深く、世間の交友を絕つて獨愼獨學の書齋の人となり、五十の頃より自ら慾なきを知ると言つてゐる、丁度其歲に當つてゐる。彼が空虛なる文壇生活を遁れて、實用學に身を立てんとしたその轉期に際會して、愛玩の小禽を放下しつくしてこの序文を書いてゐると言ふのは甚だ面白いことゝ思ふ。彼の思想變化の研究には最も必要なる資料たるべきを失はない。

馬琴には可笑な癖がある。それは家族などに病人がある時、發病當時はひどくそれを輕く見る癖がある。宗伯が大病に臥しても最初は必ず、「これ當分之症也。」「大發にあらず、平病也。」など云つて、格別氣にも留めない。孫どもが疱瘡に感染しても初めは必ず落着いて、「順痘なり。」「これ一順の症也。」など輕々と

診斷して、少しも心配さうな模樣が見えない。然しその診斷が時に裏切られて、病狀が次第に難症に進むとき、彼は始めて狼狽して、氣の毒なほどうろ〳〵と氣を揉んでゐる。お百の病氣にも娘の病氣にも始終それを繰返してゐる。全體馬琴は青年時代に醫者奉公して、藥の調合ぐらゐには心得があつたので、晩年妙に醫者ぶつて見たい無邪氣な稚心があつたらしい。支那小說のなかゝら怪しげな處方を寫し取つて珍重したり、古方古傳の俗間療法を書物から探して悅んだり、實に小兒らしい自惚があつた。その爲め何うも醫者を信用し得ないやうであつた。文政十一年宗伯大病の時などには、**無論愛憐の餘りには相違ないけれど、來る醫者來る醫者に難癖をつけて、**誰一人信用しやうとしない。幾人も醫者を取換へた上、代診が來れば自身に出て病狀を說明して聞かせた上に、「一向之小兒輩也。」と蔭で立腹し、本人が來診すればその藥方調劑までに干涉して、自分の得心するまで種々の注文を出してゐる。終には來る醫者の方が立腹して、「藥迚も相應致すまじ。」とて療治を斷つて去る者もあれば、土岐村元立（娘お路の父）のやうに、「不遜之放言を申ちらして。」憤慨して歸り行く者もあるくらゐだが、馬琴は妙にそれが自慢でもあり得意でもあつたやうである。最後には親子相談の上に醫者を斷つて、馬琴醫案の服藥を用ゐると共に、やはりこれも唐土小說などから發見したのだらうが、薰臍藥とか言ふ通俗療法に凝り初めて、藥種を買ひ集めて先づ自分に試み、その成績がよいとて病人や娘おさきにも試みさせ、屋代臨池やその他の人々にも盛んに効能を吹聽してゐるやうだが、二三ケ月後からの日記には一向その名がないところを見ると、さしもの薰臍藥も然う長續きはしなかつたと見える。それに面白いことは、馬琴は家が醫者で賣藥なども賣つてゐるのに、可笑しなほど賣藥好きの人と見えて、評判の高い賣藥は諸方から買ひ集めて、**一々それを飮試してゐるのみならず、實地の療治にも應用**してゐる。わたしは妙に醫者ぶりして宗伯を引廻はしたり、患家の應對なども時には宗伯に代つて得意さうに捌じたてゝゐる馬琴の稚氣を思ふと、心が輕くされるやうに思ふ。

氣が輕くなると言へば、經學を標榜していつも難かしい顏をしてゐる筈の馬琴が、時々つまらぬ引札廣告などにそゝられて、孫と一緒に榮日菓子の買食ひなどしてゐる日記を讀むと、これは誰でも微笑まれずにゐられないだらうと思ふ。これは嘘ではなく、馬琴には奇妙に新規ずき、流行物ずきの一面があつた。芳町の何々茶漬が評判だと聞いては孫の太郎を連れ出さうとしたり、下谷新やしきの萬壽黃金水の賣出し引札を見ては急にそれを買はせたり、或は一門前脇菓子[illegible]橋岸、青[illegible]出來、今

日見せびらきのよし昨日引札、今朝小兒ども遺し落雁かひ取らせ候へば、廢末の團扇壹被」出」之。」などいふ記事が時々目に觸れるのに推測して、馬琴は案外新規評判に氣を浮かされて、その流行を趁ひたがるやうな小兒らしさがあつた。彼が幾多の隨筆漫錄を殘して、異說珍聞の熱心なる採集者であつたのは、文化文政の時代風潮の感染は言ふまでもないことだが、彼のこの流行物ずき新規物ずきの性質も大に源因をなしてゐると思ふ。彼が晩年に家相易學に惑溺したのは、彼自ら言つてゐる樣に、「方位宅相文事、近年迄老拙は一向着念不致候處、近頃追々流行に付き、ちと見たく存じ、三四年以來追々その筋の書を買取、熟讀玩味いたし候へ共、よみ易く解し難きものにて、一朝には自得いたしがたく候處、とかくものを極め申さねば濟さぬ癖故。」讀書するうちに深入りして、遂に彼の痼疾とまでなつたので、やはり時勢の流行に促された氣味があるらしい。世間に日本外史が流行すれば、それが見たくて堪らず、新規に罫紙の板木までつくらせてわざ〱それを伊勢の國で謄寫させたり、水戸齋昭の英名にそゝのかされては急に告志篇を探し求めたり、馬琴は不思議なほど世間の評判に動かされやすい人であつた。彼の著作がいつも時の流行と併行して、新しく〱とその境地を拓いて行つた源因も、大部分この流行物に無關心でゐられない、鋭敏なる感受性のためであつたかも知れぬ。

馬琴は極端に火事を恐れた人のやうに傳へられる。日記抄にも彼が「八人抄」を編みて家族を警めたと云ふ事實などから、やはり然う書かれてある。小心臆病な彼の性質から推測しても然うありさうなことだが、調べて見たところでは事實に相違してゐるらしい。彼自身も再々、江戸住居して一度の火事に遭はぬのを幸福の一つに數へてゐるし、飯田町にゐて町役人時代に、町内の失火のため度々奉行所に喚び出されて非常に迷惑した經驗などあつて、自家の粗相から火を近隣に及ぼすことは嚴重に警戒してゐたけれど、貰ひ火のために自家の財物を燒失することは、然うまで懼れてゐないらしい。案外、物惜しみのところはなかつたらしい。文政元年神田の家を造作する時、下町は火ばやき地なれば、それほど念入に普請するにも及ぶまいと云ふ人もあつたが、馬琴は笑つて、火事を恐れては一日も江戸住居はならぬと答へてゐる。宗伯は始終病的に火事をおそれて、遠火の際も夜を眠りかねてくよ〱心配してゐるのを見て、馬琴は日記の記載にもその小心を憫み、性質の鄙吝を厭ふてゐる。現に天保三年四月二日神田同朋町の出火には、馬琴の家と直徑十二三間のところまで延燒してゐるけれど、彼は友人

に與ふる書簡に、「老拙江戸に生れて是迄十度も類燒いたし候事無レ之故、火事には驚き不レ申方にて御座候。」と書いて、娘お路や宗伯の狼狽ぶりを苦々しげに嘲弄して、「たゞうろたへぬ者は癡生一人に御座候。燒け候はゞそれ迄の事と、かねて思ひ居候故に御座候。」と嘯いてゐるのは、强ち負惜みばかりではないらしい。彼は世間に云ふほど家物財產に執着する人でなかつた。物慾には案外に淡如たるものがあつた。

彼には又、存外ものに動ぜずあきらめ心の强いやうな一面もあつた。日記や雜記に喋々として愚痴の繰言をつらねてゐながら、書いた後はさつぱりとして、不思議に苦勞を忘れてゐるやうな點が見える。彼のために一生の重荷であつた宗伯の難病などでも、初めは諸方の友人にも病狀などを書き送つて、惻愴讀むに堪えぬ文章をなしてゐるが、諦めべき時が來れば存外さらりと諦めてゐる。「悴事去春中より去年一ケ年引籠罷在候。（中略）只廢人同樣に御座候。愚父存命の間はその身はさらなり妻子どもをやしない候得ども、ゆくすゑはいかゞ致し候哉、心もとなき事ながら苦勞にいたし候ても詮なき事故、天命に任せ候。」といふ意味の自記は種々のものに殘されてゐて、その後は餘り愚痴を洩してはゐない。天保六年正月、彼が右眼の明を失つた時の手記には、「眼病はとかく同樣にて、あしくもならずよくもならず、少々毒をたべ候てもふかくあたり候事もなし、又藥を用ゐ候てもきゝもいたし不申候。これは老病にてせんかたなく候。左眼此分に候へば用は辨じ候間、今は懸念不レ致候。」と書いて、さまで慨く模樣がなく、その後五六年の後に全く兩眼を盲した時には、最初は可也に動顚もしたらしいけれど、間もなく又、「是全く五十餘年日夜讀書と細字の著編のつかれにて、かく成行候へば、今さら後悔そのかひなく候。見ルコト久シケレバ必盲ルと呂氏春秋にいへる如し。皆我からなした事ながら、著編出來ずなりては、一家六七口の旦暮に給するに足らず、是のみ胸安からず候へば、それ將天命と思ひ候へば嘆くは愚也愆也。今よりして眼の用不用は天に任する外無レ之候。ハヽやくたいもない、新春早々、老のくり言御覽もいとはしかるべし。」と强いて寂しくあきらめやうとしてゐるのは、晩年易學などを研究して、諸事天命說に歸決して、無理にも安心の境地を覓めやうとした傾向はあるが、その幾分は彼の本性にもよることゝ思ふ。文化四年八月に永代橋が墜落して無數の溺死者を出した時、彼の妻お百は深川の知人に招かれて小兒等三人をつれて祭禮見物に出掛けてゐる。その午後永代橋椿事の報が市中につたはつて、江戸府内の大騷ぎとなつたので、瀧澤の家にも人人が馳け集つて、搜索者を出さうかとの相談があつた。馬琴

は落ち付きはらつて時刻を考へ、大概大丈夫だらうとて、捜人を出さなかつた。あの橋はかねて危險と感じてゐたから他の橋を渡るやうに言付けて置いたし、また橋の落ちた刻限にはいかに女の足でも疾くに先方に到着してゐる筈である。それに萬一家族等に間違があつたとて、今から駈け付けて間に合ふ筈もない、諦める外はないと云つてゐる。彼にはかゝる豪邁なる一面もあつたと思ふ。もしその氣象がなくては、八十二年にわたる勞苦の生涯に、彼は到底耐え得られなかつたかとも思ふ。

試に天保二年の馬琴日記に據つて、正月中瀧澤家に於ける神佛行事を列記して見やう。新年三箇日の嘉儀や諸神家廟の拜禮等は先づ別として、五日は宗伯お百など連れ立つて水天宮に初詣に出掛けてゐる。六日の日は實に年越の節祝ひをなし夜は庚申祭のために、獻供の膳をさゝげてゐる。七日は七種の祭にかねて先祖見了院の祥月を祭る。九日は正月の節がはりゆゑ未刻より星祭を行ふて、家族一同を禮拜させる。十日は甲子の日、大黑祭を家内に行ふた上に、夜は宗伯お百を代理として明神地内の大黑天に參詣してゐる。十二日は羅文忌とて、馬琴實兄羅右衛門の肖像を掛けて神酒菓子の獻供を行ふ。十四日は年越祭、削り掛けの祝儀があつて、家族一同一汁三菜の節料理を祝つてゐる。そしてその夜は宗伯が信仰する辨才天に供ふるために、家内を清掃して巳まちの祭事を營んでゐる。十五日はお飾おろしの式日にて赤豆粥を祝ふ。十八日は飯田町の鏡びらきに家族一同招かれてその饗應をうけ、越えて二十一日は自宅の鏡開とて近親の者を招いてゐる。床の正面には先祖墓碑の楷書を恭しく飾り、左右には馬琴の先考先妣兄羅文の肖像等を掲げ、神酒魚菜の供物をさゝげ、家族近親に實飯に汁粉餠を出し、續いて吸物酒肴三種（すの物さしみ煮肴）の膳部を出し、晩めしは猪口ひら香の物等の膳が出る。その他、十一日は家例の茶だち、十三日は年始の墓參。また新春中の外出には必ずその都度先づ近所の神社に祈念して、その上でなければ年賀にもまはらない。以上は日記卒讀の際、目につくまゝざつと拾ひ取つたのだが、毎月の神事佛事の頻繁なることは引例の煩瑣に耐へぬほどである。殊に方位家相學を研究後の彼は、或は井戸を祭り竈を祭り、厄を拂ひ穢を忌み、日月星辰ほとんど拜禮のいたらぬものがないと云つても好い。然しこれ等の事實を見て、わたしは單にそれを彼の迷信惑溺として、冷然一笑して去るに忍びないものがある。彼が斯かる蒙昧なる迷信に墮しゆく徑路には、甚だ憐むべき悲しむべき情實を見るからである。

一、四時前宗伯を以、大傳馬町大丸やへ遣し、お次（宗伯二女）縫の暮かひ取申候樣申付、代金をもたせ遣す。去春初節句に調可ㇾ遣所、疱瘡にて延引及ニ此春ニ、これらのもの無益の義に付、宗伯辭するといへ共、祝儀のかたはしにて又俗に從はざるを得ず。最きぬにて下直の品見斗申付畢。」

これは天保三年二月二十八日の日記だが、單に彼の家庭の儉素生活を說明するのみならず、一面には彼の生活の性格の弱々しさをも物語つてゐると思ふ。現存する彼の自記雜筆の壯年時と晩年のものを比較すれば明瞭であるが、四十歲前後までの馬琴には案外大氣なところがあつて、放浪時代にその母を慨かせたといふしぶとさもその性格に仄見してゐた。然るに宗伯の成長とゝもに聖學に傾倒し、獨愼屛居の生涯に入るやうになつてからの彼は、次第にその奔放自由の氣分を喪つて、遂に性格上の怯懦者になつてゐる。前にも引いたと思ふが、彼の牧之に與へて、「不佞は生得放蕩多慾のもの也。只學問の力をかりて無理にかたくなり候哉と存候。この故に事每に偏僻也。もしわれ聖賢の敎をしらずば、惡道へもすゝみかねまじく候。しかれば不佞は石灰にてかためたるが如し。足下は自然の石の如し。」と、友人の德性を羨んでゐるのは、彼は如何にこの期間に於て克己節制の修養に努力を致したかを語るとゝもに、學問修養のために彼の活潑なる人間性が如何にはげしく捩曲げられ、また畏縮せしめられたかと云ふ事實をも證明する。そして、彼が斯の如き性格的萎黃病者となつた根本的の源因を尋ねるのに、學問によりて得たる確乎たる思想や意力によつて自己を征服したと云ふよりは、寧ろ彼の終生の病患たる時の勢力に壓倒せられて時代常識に動かされやすく、常に大者に事へて身を預はんとする性格の弱々しさから導かれてゐると思ふ。雛の祭を無用として辭退する宗伯に向つて、「祝儀のかたはしにて、又俗に從はざるを得ず。」と云つてゐるのは、俗習と知りつゝもその俗習に反抗することが恐しく、好んでその俗習に追隨せんとする彼の眞面目なる聲であると思ふ。かゝる例證は他にも數多あつて彼が常に「愚痴の風俗も廢すべからず。」とて、時代の風尙に適ふなからんことをのみ冀ふてゐるのは、やはり彼の退嬰的な性格の弱さから來てゐる。彼の弱々しきこゝろはいつも冒險の運力性を失つてゐた。

彼が風水方位の學に凝り固つて、激しく迷信に促惑したのは文政十年前後、彼の六十歲頃からの後と思ふ。彼は他の場合にも屢々云つてゐるし、又文政六年の五月、三十年住みなれた飯田町の舊宅を去つて宗伯の家に同居するその日も途中、「昌平橋を

渡り果て金澤町まで來ぬる程に、持てる傘の柄忽然と折れて用にたゝず。打驚きてよく見れば、其柄蝕みたり。是笠翁と改名の時にして、其子と同居の移徙なれば、名詮自稱不祥に似たり。然れども去る事を心にかけざる本性なれば、是も亦自然のみと呟きて、祕して琴嶺にも老母にも告げざりければ、是を知るものなし。」と云つてゐる程だから、馬琴は元來さまでの迷信家とも思はれない。然るに同じ年の發病以來宗伯の健康がとかく勝れず、且つ家内にも大病人が多く、續いて文政十二年再發病後の宗伯は、殆んど廢人同樣の病者となつて病床に呻吟してゐる。馬琴の日記に幾らかづゝ迷信的の記事の加つたのはこの頃からであつて、彼が愛子の難病にはいかにその心を痛め苦しんだかゞ察しられる。それも最初の間は、諸方から加持祈禱や素人療治をすゝめられても、内心に蔑視して澁々とそれに應じてゐる。やはり搖ぎやすく弱いこゝろの馬琴は、この頃甚だ流行の山」とか「四方の評判高ければ。」など勸められると、その流行その評判を否定することに危さを感じて、次第にその話に引入られて行つたらしい。町家に育つて、迷信ぶかい大名屋敷に御殿奉公などした娘のおさきやお百は、どこの不動とかどこの閻魔とか云ふ噂を聞いて來て、始終馬琴にすゝめてゐる日記も見える。「去れば又興繼（宗伯）は年來良醫の療治を受くれども効なかりしかば、後には自療にして藥を服するに、小驗あるのみ。此故に人の薦むるまに／＼、灸治鍼治は更也。或は按摩導引はかなき呪などさへ、俗なるを厭はでゆきかよひつゝ、彼につき此に就きて治療を受たるも年來になりしかど、一つとして効驗なかりき。（所ゝ云高輪なる岩尾婆々が呪法の加持、新吉原なる甲斐屋が灸治、千住の齒神、鐵砲州湊町なる湊屋重次郎が栗波山人異人傳法の灸、麻布相模殿橋なる卜筮、醫師平野章二が傳法の湯藥、番町西郷殿家臣某甲が神授の湯藥、三田荒坂不動婆々の加持、深川なる町人某乙が按摩針、出張馬喰町江崎屋にて療治したり、此餘なほありけんを、今は忘れたり。）是等は都て予が意にあらず、興繼も亦好まねども、年來療治に手を盡したれば、已むことを得ず人の薦むるにまかしたれば、勞するのみにて功なかりき。」と彼が宗伯の死後「後の爲め記」のうちに書いて、いさゝかその愚痴を辯護してゐるのは、彼は習俗にならへやすき自分の弱さに慚愧してゐるらしくも見える。

宗伯の難病を見て、馬琴のこゝろに一箇の疑惑が生じた。この疑問は傷々しいほど彼のこゝろを苦しめて、宗伯の死後にかけて殆んど十年近くも彼を苦しめ苛んでゐる。宗伯は弱冠より聲色に耽らず、その性質も儉素にしてさせる愆がありとも見えぬ。常に人におくれて起ち、分際を守り、言行も甚だ愼んでゐ

た。然るにその宗伯に何んの咎めあつて、かゝる逃れがたき事をうけねばならないだらう。禍が若し彼人に來り、此人に來り、或は我に來り、妻に來りしならば、そを天命とも思ひ諦めることが出來やう。天は何故に咎戻なき宗伯を選んで罰を加ふるか。馬琴は不圖この大問題に逢着したであつた。この端的にして直截なる疑問は如何に彼を懊惱苦の吟させたか、それは「改過筆記」「後の爲の記」その他の自記によつて知るべきであらう。やゝもすれば因果律に思想を支配されやすき當時の馬琴には、死とは一箇偶然たる存在または偶然の或る事實として認めることが何うしても出來なかつた。何故に來りて何故に去るか。飽くまでその所緣を訂ねて計量的にその答案を得なければ、動搖しやすい彼の心が落着しなかつた。これを儒學に求めても教ふるところがない。神道に尋ねても得るところがない。丁度この頃馬琴は世の流行につれて、家相方位に關する書籍を讀んでゐたので、ふとその說くところによつて宗伯の病氣や家內に於ける諸種の不幸を解釋しやうとした。方位書に照してわが過を考ふれば、離山南向の居宅の前に小池を穿ち魚を養ふて、著作に疲るゝわが心を慰めやうとしたのが間違つてゐた。正南は天醫にて宗伯の本命に當つてゐる。孫の太郎が生れて遊戲に危險を慮ずるから池は埋めたが、その埋土を西方から貰つたのが惡く、またその日の時刻も惡い。いづれも宗伯のために司命の星を犯してゐる。また先祖の墓域を廣めるために他人の地域を買取つたが、これも暗建方を犯して宗伯の身に祟をなしてゐる。そのほか普請造作の間に、知らず識らず宗伯の年煞月煞を犯してゐることが數多かつた。で、試に陰陽師を招いで厭禁の法を行ふて見ると、一災をのぞけば一災だけ、宗伯の病狀に効驗が見える。埋めた池に栗樹大歲符を行へば秘結の宗伯がその宵に便通があり、禁厭を終ればその日から宗伯の當病が平癒する。「その報災の法驗速かなることかくの如くなれば、宗伯等はさら也。家の內のもの驚嘆して且歎ばざるはなし、予は是まで犯煞の事報災の說を信ぜざるにはあらざれども、かゝるべしとは思はざりしに、こたび有驗の事によりて方位の學の益あることを知覺しつ。いよいよそのみちの古書を博く覽て、みづから警め人を利せんと思ふこと頻也。」と書いてゐるのは文政十二年だから、この頃から彼の迷信癖は一層深甚を加へたのであらう。

前に述べた馬琴の疑惑は、斯くの如くして一時頓挫の姿であつた。「とかくものを極め申さねば濟まぬ癖」の彼は、その後六七年は方位宅相の學に夢中になつて、唐土の古書など買ひ集めて研究を重ねてゐるばかりではない、自分でも斯道權威の大著述を後に殘して、人道に益しやうと勉めてゐた。これは然し當

の爲め人を救ふと云ふよりは、適切に云へば、馬琴自身がこの迷信のために救はれてゐた方が遙に多かつたとわたしは思ふ。星辰循環の數學的說明によつて、人世百事が解釋せらるゝものと確信して動かなかつた間の馬琴は、寧ろ幸福であつた。彼の騷ぎやすいこゝろはこの迷信によつて動搖をふせぎ、自己を喪ふことなく彼をして彼たらしむることを得たのであつた。然るに斯くばかり心遣ひせる宗伯は、彼の信仰する術學に救はることなく、宿病のために遂にこの世を去り、不幸なる六十九歲の老翁は、「何故に罪ある者に咎なく、罪なき宗伯は死なねばならぬか。」生死歸命の疑問を與へられたまゝ、茫然として世路に取殘されてしまつた。「後の爲の記」の附錄一篇はその絕望喪神の間にもなほ思ひ諦めかねて、宗伯の死そのものゝ哀傷よりも寧ろこの端的直截なる惑疑の釋明を求むるべく、いかに悶えいかに苦しんだか、讀者をして思はずその酸鼻に目を掩はしむるまで、狼狽煩悶を極めてゐる。「人の性命は各天授にて定數あり。そを縮むるは易く延ばす事は難かり。」とも云ひ、「父子は天然なり。命の的殺ありといへども拘はるべきにはあらず。然れども父子の本命或は命破或は三殺なる者は始終全きを得ず。父早く死されば其子早く死す。」とも考へ、父子相尅の原理を易學性命學に求めんとするかと思へば、平賀鳩溪建部綾足本居宣長以下二十數名の友人知人の子孫關係を調査して、統計の上に於てみなその子女に緣うすきを見て、「世に高名なる人は多く嗣子に緣なし。高明の故に鬼神の憎む歟、或は天機を漏す故歟。」と疑いて、わが虛名の祟をうけて宗伯を早死せしめたやうにも考へ、或は羅貫中は水滸傳を作りし惡報にて三世瘂子と生れ、紫式部は源氏物語を書きし惡報にて地獄に墮ちたりとの故事など思ひ較べて、漫戲の筆墨に世を穢したる惡報ならずやとも考へ、或は又自分が一時の虛名に惑はされて儉素の本分を忘れ家屋園池の修造などに財貨を費したのを咎めて、天は宗伯の性命に禍したやうにも考へ、「譬へば小兒を愛するものゝ、多く甘食を食はして其子を病者になせしが如く、吾財用を費せしは興繼が爲めにして却つて害となりたるなり。されば彼が病痾の久しく癒ざるにより、漸くにして吾昨非を知りて、是よりの後毫も機變を行ふことなく、驕奢を省かんとのみ欲せしかども、禍根既に深かりければ竟に甲斐なし。」とまで嗟嘆して、一切の罪科をわが身に求めて、おのれを賤しみ、おのれを責め、血みどろになつておのれの身を鞭つてゐる。馬琴は晩年殊に甚しく儉約を貴び、女どもに炭團を丸めさせたり竹皮を拾集めて厨屋に賣つたりして、可也家族のものにも厭はれてゐるが、その源因を探ればそれは彼の吝の鄙性質のためではなく、こゝろの中にこの大なる

恐懼を抱いてゐたのである。「近年勝手向難多く、格別に物入多候間、其段お路へ申聞、向後萬事に心付、儉約いたし候様戒おく此義少々所存有之候故也」と天保三年の日記にあるのは、或人の説明する如くその年の凶作をおそれて、米價の騰貴にそなへたのではない。馬琴の心はたゞ一子宗伯のうへにあつた。然るに家族の者は馬琴の心を察せず、常に彼の吝嗇を本性の如く賤しんで、お百などは口穢く馬琴を罵ることもあつたらしく、彼はいつもそれを日記のうちに悲しんでゐる。

夜話その第三

文政十一年の秋、六樹園の宗匠披露とて當時文壇の笑話となつた滑稽事があつた。俳諧宗匠が花の本の稱號を無上の光榮とした如く、當時狂歌全盛の時代にあつては、點者等はかの特殊稱號を堂上家から得て、その邊幅を飾りたくなつたのだらう。特に世間氣の多い六樹園や眞顔などには、自然その希望もあつたらう。その弱點につけこんで或る詐僞師が、京都二條家よりの使者なりと僞つて、二條卿自詠自作の短册に宗匠免許の書狀を添へて、眞顔一派の派に屬する狂歌師數名にそれぞれの格式を與へるのみか、眞顔飯盛には藤色の装束、準宗匠には極薄藤色、宗匠格には何々と銘々等級があつて、水干烏帽子差貫などの下賜品まであつた。無論詐僞師の方ではそれによつて狂歌等の大刀馬代の獻上品を貪ぼる目的のことだらうが、眞顔一派の點者等の狂喜と得意さとは一通りでなかつた。早速その装束をつけて雅樂入りの大振舞をして、免許披露の祝宴を張つたことがあつた。その事は諸書に見えてゐて稀らしくもない話だけれど、その稚態を冷笑した馬琴の書簡が世に出てゝゐる。馬琴がこれを認めた時には、まだその狡計の發覺せぬ以前だけれど、馬琴は先づ斯う書いてゐる。「六樹園は九月中旬兩國大のしにて宗匠弘の會いたし候へども、装束は不二著用一、上下のよし、眞顔は龜井戸天神別當所にて弘メ會いたし、おのく装束にてねり候て坐敷入いたし、御書並に連中の歌披講の時、うしろにて樂を奏し候よし、前代未聞の珍説に候。あさくさの了阿法師（村田了阿）のわるくちに、『ア、ラようがましや宗匠なりの翁たち、めんばこありと思ふばかりに。』彼人々は徒弟を集め門戸を張候て、渡世にいたし候事故、さもあるべく候へども、隠逸の心より見れば風流はうせて、きのどくなる事に思ひ候。」この文面は馬琴が例の隠者ぶりの偏屈から、漫りに文壇人へ冷笑を加ふるものではないと思ふ。馬琴にして初めてこの言をなし得るところに、わたしは其價値があると思ふ。彼が文政元年前後之

に與へた手紙に、「これは十年あまりむかしの事也。伊勢の人何がし、拙者しる人なるが折々上京し、花山院家へ御出入被致候に付、右大將樣へ御願被申候て、曲亭の額字を御認め被下候との事にて、彼の御家令の諸太夫より添狀有之、則いせよりわれら方へおくられ候。その比京都しる人富左近將監と申仁より、先日花山院家へ罷出候處、右大將愛得(ナリエ)卿御染筆額字のことにつき、貴森の人となりをとはせられ候。こゝぞと存じ、いろ／＼くわしく演說いたし候との文通也。われ等その返事に申遣し候事は、おほけなくも御染筆の額字を下し給ることは、思ひがけぬことに候。それはわがこゝろにはあらぬ事をいせ人のひが事にてねがひ奉りしなるべし。忝く頂戴は仕候へ共、貴人の御書を匹夫の白屋に掲げて玩弄いたすべきにあらず、依つてそのまゝにしまひ置き、懇意のものにも見せ不申、子孫もむしぼしの外は、拜見仕ることある可からずと申遣し候、そののち、又富氏よりの文通に、亦復花山院家へ罷出候序に、先便被仰趣候趣披露に及候處、殊更に御感ふかく、只々御歎息のみに候と申來候。彼の卿は御手迹をよく遊ばし候に付、江戸にても名家は傳手をもとめ、額字を乞ひ奉り、これを書齋にかけおき、來客每に花山院樣御手迹也と風聽いたされ候仁も有之よし、かゝるわざは愚がせぬ事也、ひが事にや。」とあつて、後の日記によればば折角送つて來た花山院の書幅は表裝も加へずそのまゝ押入にしまひ込んで、遂に人にも示さなかつた。そしてその周旋者なる伊勢の國人には、「老拙壯年より貴人のお筆を弄賞いたし、自分をかざり候事嫌ひに御坐候。（中略）かやうのかけ物かけ置き候ては、その席にて胡坐もかゝれず、氣のつまり候もの也。」と云送つて、明かに不滿の情を洩らしてゐる。又後年或る人が、馬琴の愛玩する印章に「乾坤一草亭」の文字あるを見て、丁度同文の五字を日光宮公寛法親王の揮毫した一軸の某家に珍藏されるを知つて、無理から懇望して馬琴を悅ばせるために態々それを贈つて來た。その親切に對して馬琴も澁々受取つてはゐるけれど、やはり押入に投込んで書齋に掛けたことはない。

馬琴の生涯を通じて見られる一特質は、彼は極端に權貴に媚びなかつた點である。媚びないと云ふよりは寧ろ、彼は甚だしく貴人の接近を厭ふ人であつた。彼の讀本が次第に有名になるにつれて、諸家の大名大身の人々からさまざま手を廻はして彼を招き彼を見んことをつとめたけれど、彼はいつも素氣なく謝絕してその招待に應じなかつた。當時高名の松浦靜山侯や薩摩老侯など、事に托して屢々用人を使したけれど、彼は種々の口實のもとにそれを拒んでゐる。已を得ず松平冠山侯の如きは、近傍通行のついでと稱して、宗伯の病氣見舞ふわざ／＼飯田町

の茅屋に馬琴を訪問してゐる。又馬琴の舊主君某の如きは、瀧澤家の賣藥感應丸を需めるふりして、自身馬琴の家に駕を枉げてゐる。當時儒者學者の大家と稱せらるゝ人々でさへ、百方周旋して諸大名家に出入して、それを一身の顯榮とする時代にありて、市井戲作者の一馬琴が頑として權貴の門に媚びなかつたと云ふ一事は、むしろ特異とすべきであらうと思ふ。馬琴自身はその事實を說明して、玩弄のために招かるゝのはいやだ、貴人に伺候するのは窮屈だからいやだ、と云つてゐるが、何れにしても終生にその信條をまげなかつたところ彼の氣魄が窺はれるやうに思ふ。これ等の點が、彼が後世に傲岸自尊の惡名をなした原因ではないかと思ふ。因に云ふ。松平冠山、本姓は池田定常、因州侯の支藩にて幕府の顯職に居り、致仕の後は廣く文墨の士と交り、數種の著述がある。松浦靜山は有名なる甲子夜話の著者、肥前平戶の城主である。

馬琴が生涯のうち親しく伺候した貴人は、大名に松前老侯道廣、旗本寄合衆に石川左金吾、この二人ぐらゐなものである。外には友人大郷信斎の依賴やみがたくて、鯖江侯間部家に一度招待されたかと思ふけれど、それはまだ判然しないところがある。「默老人高松に發別後は江戶に一知音の友はなくなり候處、又一人是は貴人にて、和漢の小說を好まれ、殊に謬て老拙をとし來信仰のよし、舊冬懇意の一儒臣紹介にて自作の作文等度々被レ賴候故、無二是非一きぬ地二三幅ふくさ扇面等多く書ちらし進じ候處、是非面會致したいと被二申越一候。貴人に咫尺いたし候事甚いとはしく存候故、かたく斷り候へども何分きかれず、三月二十日乘物に迎られ、又乘物にて送られ、當夜四時歸宅いたし候。それ故又風を引、兩三日なやみ候。屋敷は麻布にて拙宅より二里許御座候。猶賴まれ候きぬ地杯多く參り居、著述に暇なき折から甚こまり候得ども、貴人の事故つれなくも申がたく、知己の事にも候へばよろしくあしらひ候事に御座候。此外三十五六萬石の大諸侯より御使を給はり、拙藏の卷物をかりて見たい、その代りには贈物多く所持被致候間、何にても可レ被レ貸よし被二仰越一候。是も大諸侯の事。つれなくもいなみがたく甚わづらわしく候。何分虛名の祟にて、今さらせんかたなく候。御一笑可レ被レ下候。」（天保六年三月二十八日附）わたくしは最初この貴人とあるを鯖江侯とばかり考へて讀んでゐたが、やはり藤井博士の解說の如く、石川疊翠を云ふものであつた。石川左金吾は三田古川町に住み、三千石を領したる讀書人にて、天保十二年三十八歲にて歿してゐるが、（名人忌辰錄）この人は殆んど弟子同樣の禮儀をつくして晩年衰頽の馬琴を崇めてゐる。姑

か八犬傳の第九輯には馬琴崇拜の序文なども書き、其後時々の瀧澤家訪問にも多少の金品など送つて悦ばせてゐるやうである。馬琴も最初はいや／＼ながら義理に詰つて訪問したのだが、後の書面には、「種々物がたりいたしこゝろみ候處、至極風流の御人にて、ことの外よみ本好に御座候。（中略）年中野生所藏の寫本奇書珍籍を借覽いたしがられ候故、尤熱心に感じ、月々に多く貸進いたし候を、みづからも寫し、近習にも多く寫させ、先づは同好と申しても憎からぬ才子に候。」とまで稱揚をなしてゐるのを見ると、馬琴も可也その學才に動かされたらしい。

馬琴が松前老公の眷顧をうけるやうになつたのは、文化十一年里見八犬傳を初めて世に出した頃で、宗伯が十七八歲の頃と思ふ。醫術を學ばせて宗伯に先祖の家名を揚げさせやうとして、馬琴は專念苦心してゐる頃であるから、賑はしい貴人拜跪も愛兒出世のために餘儀なくつとめたであらう。列傳體小說史に、「文化十一年八犬傳世に出づるや、直に著作堂をとひて（老公章廣なり）其のめでたき由をたゝへてやまず。世の覺の高きをばわが譽のやうにぞ喜び玉ひける。之れより殊にしばしば門を叩きて、和漢の故事をたづねとひ、雨の日、秋の夜長の徒然每に琴嶺（宗伯の畫名）を召しよせて、今昔のかたらひがたきとなし玉ひつ。なほ珍らしき者ある時は分ちて之を、翁にとらせ、むつかしき事ある時は特に使して翁にとはせ、めでたき事の折ふし每、歌文を翁に求めてことほがせ、とにつけかくにつけて只翁をいひ出づるなど、恩寵日を追うて深かりけり。」と書いてゐるのは、嘗て篁村氏に聞いた傳說などとも附合するばかりでなく、兎園小說に掲げられた諸雜編を倂せ考へても、必ずその事實のあつたことは認められる。後二三年にして宗伯が松前家のお抱醫者となり月俸を給せらるゝに至つたのは、勿論老候の意は馬琴その人を保護するこゝろであつたらう。然し馬琴は決してそのために自己の操持をまげるやうなことはなかつた。學術は凡庸ながら三人口の扶持米は悴宗伯の奉仕に對して給與さるゝものと認め、自分の本分は老公の偏愛によつて汚されまいと始終つとめてゐた。彼はその志を友人に言つてゐる。

「又三四年已前より、ある諸侯の御隱居、御近習をつかはされ候て、物を問はせられ候事有之、尤十年已前よりその御心ありながら、紹介なき故に默止たまひしが、ある準國守家の留守衆にしる人あるよし聞出し、やう／＼其仁の紹介をたのみ申つかはすとの事也。諸侯と申、紹介も歷々の役人故、相應にあしらひ、何事によらず被二仰下一候事いち／＼御答いたし、だん／＼なじみを重ね候へども、その問せたまふ事は、只浮世の事に

て、こゝろにもあらぬ事多し。これによつて下に五は辭退いたし、或は諷諫を以いさめまゐらせし事も折々有之、依ておもしろくなき奴と被思召賤、近ごろは二季のたまもの半減になされ、折々高味の菓子被下候事もなくなり、一ケ年に五六度ならでは御近習衆も來不被申候。よしやたまものはなくとも貪着不仕候。御疎々しくなりしは幸ひ也。すべて貴人はさら也、御旗本衆其他すべて官府へかゝはり候仁へは、決してつき合不申、先方より訪れ候ても、徹して遠ざけにげかく申候故、これも近頃は人も知りて、招たい或はあふてくれといふ人なし。是又一つの安心に御座候。」

當時馬琴は經學專攻の時であつたから、例へ及ばぬまでも天下有用の學をもつて老侯の諮問に應じやうとしたのだが、洒落灑達の老侯はたゞ一箇の浮世學問者として彼を眷顧したのに過ぎない。初めは美成や弘賢等の友人なども誘ふてその別墅に伺候して、讌飲の席などにも列してゐる馬琴が、次第に松前邸から足を遠くして後は招待にも應ぜず、時々近臣を使して種々の質問を寄せても、馬琴はいつもはかばかしき應答も致さず、日記にも老公の愚問俗說ずきを厭ふて、始終困惑の語氣を洩らしてゐる。この頃の馬琴は、身を、戯作者として待遇せられ、世間の玩弄となるを極端に恐れてゐた。傳說ではあるが、三馬が陰口に馬琴は松前老侯のお供でこの頃は吉原遊びもするさうだと云つたのを聞き、馬琴は逆上するほど怒つて、二三枚とかある袴の全部を簞笥から取出させて、その袴に酒の汚染なきことを書肆つる屋に證明させやうとしたなど云ふ笑話もある。

前の石川畳翠のことを書送る書簡のうちに、馬琴は近頃三十五六萬石の大諸侯から眷顧の使者を送られ、甚だ迷惑してゐる旨が記されてある。その大諸侯といふは長州の毛利侯であつた。同家の後室に貞操院宮樣（俗に長州宮樣とも申す）と申さるゝ方があつて、某宮家から長州に降嫁せられた方である。馬琴の著作を非常に愛讀されて、中にも美少年錄を稱揚せられたといふ。度々使者を送つて馬琴の所著を借り受け、またその都度過分の下賜品などもあつて、是非一度は長州屋敷へお目見得を願ひ出づるやうにとの內命であつた。然し貴人きらひの馬琴は、殊に先方が女性なるを憚つて、飽くまでその命に應じなかつた。已むを得ず後室は老女の藤浦に旨を含め、その兄の林卯太夫（毛利家奥家老）を介添として馬琴の棲居をさぐるべくその家を訪問させたけれど、馬琴は例の虚病をつかつて面會を謝絶した。中根香亭氏の遺話として、或日馬琴は齋藤の某人から

使者をうけると、家人が應對中納戸にかくれて兩手に耳を蔽ふてゐた。娘のお路に使者はもうお歸りなされたと注意されて手を耳から離し、さて／＼御殿女中と云ふものはよくもあゝ眞四ッ角に話をされたものだ。これから小說の對話に御殿女中をかく時には、その文字だけ篆書にでもしなければなるまいと戲れたと云ふ笑柄は、或はこの際のことでもあつたらう。その後も長州宮樣は藤浦を介して度々存問の消息など送られたが、馬琴はいつもその返書を兄の林卿太夫宛に書いてゐる。それでも後室は馬琴引見の希望を捨てず、遂には長州家抱繪師の長谷川雪旦（江戶名所圖繪の畫者雪旦の子）を案內者として、わざ／＼四谷信濃坂なる馬琴の茅屋に訪問せられやうとされたのだが、馬琴が周章して「貴人と申殊に御夫人に拜顏の事杯、甚いとはしく奉存候間、此義は何分御斷り被下候へ。」と辭退して、遂にその事には及ばなかつた。この頃の馬琴は盲目のために著作も多からず、家計も漸く不如意となり、多年愛藏の書籍を賣拂つて古家屋の修繕をしたり、四谷に移つては遠路のため出版書肆も年賀に來ず、そのため年玉の禮金をうけぬゆゑこの年は三步銀の損失なりなど呟いてゐるほどの狀態なのだが、權家の縉に媚びてその身を潤ほすことの出來なかつたのは、やはり馬琴の天性であつたらうと思ふ。その點で宗伯と時々爭論もあつたらしく、大坂の豪商何某が馬琴が書狀を送つてくれるならば、その都度金一兩の禮金を出さうと云つても、馬琴はその輕薄を憎んで書面を書かないために「當今の名家多しと雖も、はづかに一通の返事ほしきとて金壹圓おくられしといふ事をきかず。かゝる仁は狂て親しみ給はゞ衣食の資ともなるべし。願はくは御返事あれかし。」とて宗伯に諫められてゐる。

或人がわたしに書を寄せて、馬琴の著作が不思議に當時の婦人間に悅ばれて、その八犬傳の如きは男子よりも女性の間に多く愛讀されたのを疑問としてゐる。しかも其時代が化政三十年間の謂ゆる大御所樣時代にあたつて、江戶時代中にありても最も風紀頽廢の時期であるのに、當時の市井婦女子が三馬一九の徒を越えて、春水種彥の上に出て、彼の偏屈なる勸懲小說を好愛した理由が解せないと云つてゐる。その事は後に云ふべきだが、兎も角も馬琴の著作が可也廣く婦人の讀者を有してゐた事實はわたしも認める。八犬傳版行とゝもに八犬士織の金襴緞子が賣出され、伏姬形の蒔繪櫛が行はれ、謂ゆる犬の芝居は江戶大阪に大入をとり、淨瑠璃につくられ講釋に讀まれ、錦繪となり、繪本となり、帶に織られ更紗に染められ、深川の藝妓が七人のうち五人まで犬張子の下げ物をしてゐたと云はれてゐるのも、いかに當時の婦人の間に喧傳せられてゐたかゞ分かる。隨

で婦人間には作者馬琴の崇拜家も少くはなく、時に禮物を送つて訪問する者もあれば、或は馬琴を招待してその容貌に接せんとする者もあつた。御殿女中などは買藥に事よせて馬琴の居宅を覗きこみ、或はその釣歸りを待受けて指示して相囁くやうな場合もあつた。馬琴は何日もそれを極端に厭ふて「先月廿七日かねて淸右衛門より聞及候白須甲斐守殿家臣某内儀、今日堀の内妙法寺へ參詣の歸路の由にて淸右衛門方へ罷越、かねて番町邊何某内儀を以申込候、予に對面願ひ一義申送、肴代持參のよし。先達淸右衛門之申付置候趣を以、淸右衛門きびしく斷レ之、右の肴代も辭し以て不レ受よし。今日淸右衛門告レ之。則聞おく。」と云ふやうな日記も數多く見えて、甚しくその無禮を憤つてゐる。大名家の側室又は後室、名家歷々家の婦人から尊敬の書面を寄せる者も少くなつた。中には小說めけるものを編んで刪添を乞ふ者もあれば、また十年間志をかへずに馬琴の門弟たらんとを願ふた婦人もあつた。馬琴はそれ等の要求をばいつも悉く峻拒して、飽く迄儼然たる體容を彼等婦女子の前に表示せんと勉めてゐるが、たゞその中にひとり深く馬琴の心を動かして、終生彼の追憶のたねとなつた女性がある。それは前にも云つた工藤球卿女文子、後只野家に嫁して只野眞葛と呼ばれた婦人であつた。

わたしの郷里仙台には昔から一つの馬琴傳說があつて、可也廣く信じられてゐる。少年時代に叔父か誰かに聞いたまゝを云ふと、馬琴は何か事ありてその妻を離別し、後添を娶らんとしてふと女弟子眞葛の寡婦となつて仙台にあることを思ひ、それと結婚すべく遙々と仙台に下つた。然るに只野家は千石取の門閥にて、町人たる馬琴に卒爾の訪問をゆるさない。是非なく馬琴はなにがし町の旅宿に泊りて、わが切なさを訴へた狂歌を作りて眞葛に送つた。眞葛も馬琴の眞情に動かされて私かに情をゆるすの返歌を送り、二人は互に日を期して松島見物に事よせ、その地の宿屋に師弟初めての面會をとげたが、馬琴は眞葛の意外の醜婦なるに驚いて、這々の體で江戸へ逃げ歸つたといふ事になつてゐる。無論この傳說の虛構なるは馬琴が奥州に旅行した事實もなく眞葛が初めて馬琴に書を送つたのは五十七歲の時で、馬琴は五十三歲の老境であつた。然しその頃の馬琴は宗伯とお百を神田に別居させて獨住してゐた事實や、また眞葛の自著にもわが容貌の美しからぬを恥ぢてゐる事實などと併せ考へると、この傳說は後年馬琴が尾州の狂歌師田鶴丸の松島行脚に赴くに賴んで、それとなく眞葛の動靜を探らせた事があるから、それ等を誤り傳へたのであらう。（田鶴丸の松島遊覽の前年、眞葛は既に歿してゐる）眞葛馬琴の交際は六七回の書狀往復だけで、その期間も一年足らずに過ぎないけれど、然しこの眞葛の

存在が不思議にも馬琴のこころに或るゆらめきを與へ、何かしら淡々しい陰影を殘したことは事實と認めねばならぬ。

馬琴眞葛の甚だ小說的なる文通交涉は、馬琴自記の「眞葛の媼」(兎園小說)に詳細を極めてゐるから、こゝには省略する。たゞその概略を云へば、文政二年二月下旬の或日、眞葛は江戶にある妹の萩尼を使ひとして、その著「ひとりかんがへ」を馬琴に呈してその批評を求めて來た。紹介者もなく事が餘り唐突なる上に、依賴の文章にわが身分を明さず、文辭もやゝ尊大の體である、馬琴は最初それを見て、筆者は多分仙台侯の側室などいふ類であらうと思つた。柔媚生活の暇つぶしに草紙めけるものでも編んでわれに賞讃を强ゆるものであらうと、馬琴はやゝ心に憤りながら冊子を二三枚拾ひ讀みすると、意外にもそれは婦女子の手すさびとは思はれない物價財政のことなど說いた隨筆の文章であつた。その論旨はともかくとして、その憂ふるところは國家の經濟にあるらしい。而巳ならず言語もはなはだ放膽にして尋常婦女子の態ではない。馬琴の心にふと好奇心が起つた。この文章を草するは何種の女か、急にそれが知りたくなつた。彼は篤と心に思案して、さてその返書を書いた。他に書を送るにわが實名を明かさぬは無禮なる上に、われを呼ぶに馬琴樣と戲作の名を用ふるは輕侮であらうとて、馬琴は和漢の故事など引いて長々しき返書を認めそれを翌日も來た萩尼に渡した。すると二十日ほどして二通の文が馬琴の家へ屆けられた。一通は萩尼の添狀で、これは馬琴が事々しく言葉咎めなどして、わが姉の眞心を形式にのみ見やうとする馬琴の偏執を、明かに憤つてゐる文章であつた。然るに當の眞葛の書狀を開き見ると、これは妹尼とは反對に打萎れてわが過を謝し、男女のへだてを憚るところより先の狀にはわざと餘所々々しく女の禮をつくさゞりしなりとて、淚ふかく顏うなだれて、ひたすら馬琴の恕しを願ふてゐる。そして身の素性、先祖の系圖、父のこと同胞のこと他人に褒むべきことまで打明けて、師匠の怒を釋かうとしてゐる。馬琴はそれによつて眞葛とは田沼時代のきけ者工藤球卿の長女にて、二十九の時まで仙台家の奥につとめ、三十六歲にして今の只野に嫁ぎ、五六年前良人に訣れて、今は雪ふかき奥州の地に都の昔を思ひわびつゝ世を寂しく送る寡婦なることを知つた。この時馬琴の送つた書面には、或はその事は書かなかつたかも知れないが、田沼の引退とゝもに球卿の雄略(蝦夷地開拓は球卿一生の目的であつた)は樂翁公の鎖國政策のために蹉跌し、山師者詐僞師と世の譏笑をうけて淪落のうちに球卿は世を去つた。男子は二人あるが、これも間もなく死沒して、工藤家は絕家同前の有樣になつてゐる。眞葛にはそれが辛く悲しか

つた。女ながらも何とぞ球卿の名を世に顯はし、家の滅亡をも救ひたかつた。寡婦となつたを幸ひに今一度名ある大名家に奥づとめして、それに縋つて工藤家再興をはからんとしてゐた。彼女が「獨考」一部の著作に志したのは、同書によりて才能を認められ、大名家奉公の便宜を得たいためであつた。

馬琴はこの文面に可也こゝろを動かされたらしい。それは眞葛の學識才能に感ずるよりも、女が弱しくもわが恥をすてゝ、名を聞くばかりのわれを頼みてわりなくも縋り寄る、そのしほらしさ弱々しさに心を和らげれたのでもあらう。馬琴はこの時に限つてふと氣輕く、眞葛へ手紙を書く氣になつた。「海なす御心の廣からずば、木の枝に鼻をすらるといひけん如き、予が言ぐさをうべなれ容れて、しか〲とは聞え給はじ。」など書出し、先の返書の頑さを自らも慚ぢつゝ、そのうち生業の餘暇をみて「ひとりかんがへ」の筆削を試みやうなどゝ約束してゐる。眞葛も萩尼も大喜びしてその後一二度手紙を寄せ、また二人の詠草なども送つて來る。(二女とも淸水濱臣について和歌を學んだ)それ等にも馬琴の結んだ脣が稀らしく綻ばされて、ふと返しの歌など送つて見たくなつたのだらう。「ことぐさを花としも見ればとゞめあへず、きのふをしみし春は物かは。」と眞葛の文才を稱へたりしてみる。又、隣筆を包んで來た紙紗をあやま

つて火鉢に落し、それを萩尼に返すとて「こがれつゝわたしかねたる川舟の、風のふくさにいとゞくるしき」と、妙に誘ひかけるやうなざれ歌を送れば、尼もまた抜からず「よの人のたぐひにあらずまめなりや、けふくさの戸にかへす心は。」などゝ竹箆を返してゐる。また四月の頃、眞葛のかたより消息して、度度の文通にてさだめて著述の煩ひなるべしと心遣ひすれば、馬琴は輕く笑つて「我宿の花さくころもみちのくの、風の便りはいとはざりけり。」と心に悦んで、やはり萩尼との間に和歌の贈答などしてゐる。それから程經て秋の頃、その歌の返しが來た。それを見ると「あやまたず君につげなん歸る雁、霞がくれにことづてしふみ。」とあつた。わたしどもはこの歌を讀みて、眞葛は自著の添削のおくるゝをかこちて、**春の頃送りし書の安否を秋の雁のおとづれに托して馬琴に催促した**、たゞそれだけの歌であらうと思つてゐる。然るに何故か知らず、馬琴はこの時はつとしたやうに顏色を變いてゐる。只野家は家法きびしき家と聞くゆゑ、度々のわが文通を見て寡婦生活の眞葛は迷惑を感じたのであらう。晩春に送りし歌にこの頃になつて返し來るのを見ても然う思はれる。馬琴は顎のあたりなど少し蒼褪めるやうな心持になつて、何んとなき悔み心に「歌の心も知られたり。」など呟いて、寂しさうに俯向いてゐる。わたしはこの学

合、立入つて臆測を逞しくしたくない。事實を馬琴自記のまゝに斯う書いて來たゞけでも、何んとなくわれ〳〵の心に響くものがあるやうな氣がするけれど、たゞ一つこゝに書加へ置きたいのはこの時の馬琴の境遇であつた。馬琴は多年の宿願をはたしてこの前年をもつて宗伯を神田に開業せしめてゐる。老妻お百は宗伯の家を監督し、馬琴は御殿さがりの長女おさきとゝもに、飯田町の舊宅にわび住居してゐる時であつた。前の引例に馬琴が越後の友人に書送つて、家族が別居して不自由は不自由で寂しくもあるが、然しまた妻と別れて住めば心やすいこともある。家內に爭論の聲を聞かず、小言いふこともなく、しみじみと孤獨生活の安易さを覺える。妻子もわれをめづらしく、われもまた妻子めづらしく、たまに尋ねて行つても尋ねて來ても、家內が奔走してわれをもてなし、何んとなく昔日に感じられなかつた情合を夫婦親子の間に味はゝれると云つてゐる。丁度その同じ時であつた。お百死後の追憶にも馬琴は一生の間に、その妻お百に女らしさと優しさとを初めて一度見たやうに云つてゐるその同じ時が、丁度眞葛とこの文通の時にあたつた時である。わたしはいつも彼の「眞葛の媼」一篇を讀んで、馬琴と眞葛姉妹の間に秋雲の地をかすめるやうに、ふと微かに三人のこゝろに陰影をかすめ去つた次第などをいろ〳〵に考へ、それがまた同時に馬琴がその妻に對する愛情の目ざめ時であつたことなど考へ合せて、何んとなく人間のこゝろの妻を思はせられ、同時に人間のこゝろそのものゝ親しみも感ぜしめられる。――しかしこれは、わたしが書き過ぎたのかも知れない。

秋の雁の歌を見て馬琴はまた常の自分にかへつたやうに思はれる。顏の皺をふかめて、ともすればぢつと冬枯の小庭の土など見詰めるやうな日が續いたかとも思ふ。やがて思返して、「ひとりかんがへ」を机上に取り出したのは、その年も暮に近き頃であつた。馬琴は最初その著書に多少の雌黄を加へて、文章の整はぬところなど訂正するつもりであつたらしいが、また取出してその文を讀むうちに圖らずもその心が變つた。なまなかに文章の末節を訂正などするより、別に獨考論一部を編んで女の思想を正面から壓倒して見たいやうな殘忍な欲望がこの時馬琴のこゝろを領めてゐたかと思ふ。それは女に對する馬琴の憎みであつたか、それとも自分に恥かしい彼の弱さであつたかはわたしには分らないが、兎に角、馬琴にはこの時、女の存在をそのまゝに棄て置けないやうな見遁して置けないやうな、或る苛立しさと興奮とを感じてゐたらしい。斯くて彼は短い冬の日の机に坐り直して、或はおのれのこゝろのうちにある何者かを征服せずにゐられないやうな憤激をもつて、眞葛の著書の批評文

を書いた。彼は後年にその事を思出して、「原本は假名づかへのたがへると、眞名の寫しあやまれるに、いさゝか雌黄を施して、別に獨考論二卷を綴りたり。その言つゆばかりも諂ひかされる筆をもてせず、その是非をあげつらふに、教訓を旨として、高慢の鼻をひしぎしにぞ、いとおとなげなきわざに似たれど、かくいはでかたほめせば、いよ〳〵さとるよしなくて、にぶしといふとも、予が斧をうけたる甲斐はあらざるべし。人に信をもてするに、いかりを怕れて、諫めざらんは、交遊の義にあらずと、かねておもふによりてなり。」とみずから言譯してゐるやうに、彼は大人氣なきまでに眞劍になつて、壓倒的に眞葛の意見を紛碎せんとして、課業をも忘れて二十日ほどの日數を獨考論のために費してゐる。そしてその兩書を奧州に送り返す際にはわざ〳〵別に一篇の絶交狀を添へて、「いづくまでもまじらひし事うけ給はり度思ひ侍れど、をとこをみなの交りは、かしらの雪を冬の□と見あやまりつゝ、人もや咎めん。(中略)かかれば御交りも是を限りとおぼしめされよ。」と嚴重に書いて、馬琴は何者かの追跡から遁れやうとでもするやうに、苦しげに眞葛と別れてゐる。その後二人からの返書がとゞきて、萩尼は馬琴の胸せまき偏狹なる所作を怒りて明かに怨言をも述べてゐるが、眞葛は悄然と打萎れて、批評の禮狀に添へて越前紙十五帳、鋏、仙臺の埋木、萩の箸などを送りて馬琴の親切を感謝しながら、絶交の文については遂に一言も言葉が及んでゐなかつた。追掛けて馬琴は贈物の禮狀を出したけれど、その返事も來なかつた。その後三年ほどの間は、萩尼の下男が瀧澤の奇應丸を求めるふりして、折々馬琴の起居のさまをうかゞふさまであつたが、いつかそれも途絶えてしまつた。わたしは彼の自記によりて、その事實のまゝに書記してゐるつもりだが、知らず識らずの間に筆が推測の分内に進み過ぎてゐないとも限らない。その後の兩女に對する彼の感情は彼自身の言葉のまゝに傳へたく思ふ。

「彼同胞は才女なり。齡はかれも小勵のいそぢを過ぐる程なりとも、迭に面を知らずして親み、としを重ねなば、李の下に冠を正し、瓜の田に履をいるゝ、人の疑ならずやは。且彼家のぬしにはしらさで、みそかにするといはるゝをしりつゝ、交るべくもあらず。いと捨てがたき思ひありて、捨てずしてかなはぬすくせありての事ならんと、かねてより思ひしなり。これより後、まどろまぬ曉毎に思ひ出で、そのあけの朝、せうそこさへとり出しつゝ見る毎に、なみだは胸にみちしほの、ふかき歎きとなりにたり。」

その隨筆など讀むと馬琴は極端に婦人を蔑視して、女は教なきもの愚痴なるものとして、その箇性をさへ認めまいとしてゐる。然しこれは馬琴が女性を厭ひ憎んだためとは受けられない。寧ろそれと反對に、彼は彼自身のために婦人の存在を恐れたのではないかと思ふ。彼がいつも初對面の婦人に對する時の狼狽ぶりや小兒らしい羞恥心、男女關係についての過度の思ひ煩らひ、甚しい狐疑心などを見ても、彼は決して女性に對して無關心でゐられる人ではなかつた。彼はその動きやすい、搖らぎやすい自分のこゝろに喘ぎ苦しんで、强いて婦人蔑視の間に自分を憩はせやうとしたのではないかと思はれる。彼が五十九歳の眞葛女に「女」を見出して、ひとり驚き慌てゝゐる態度なども、餘りに女性そのものを廓大視してゐたゝめではないかと思ふ。それと最う一つ、彼は女といふものを可也に穢なく、頬が赤くなるやうな光景よりほか思ひ出されない、體だけの、そんな風にばかり記憶してゐたのではないかと思ふ。彼の過去の經歴は女性の弱さ、しをらしさ、美しさなどを通して、その底に秘められたる奥ぶかい眞純さを見るに馴れずに過されて來た人のやうにも見える。彼が勸善懲惡を標榜しながらその著作に例へば船蟲が淫を賣る條の如き、時に極端なる穢なき描寫があるを見て、隨分種々の批評を加へる人もあるやうだが、馬琴の見てゐる女性觀が斯くの如き上に、更らに彼はこゝに或る淫婦として描かんと意識的に企てゝ筆をとれば、彼の描寫が彼點に墮ちたのも、蓋し餘儀のないことであらう。

夜話　その第四

馬琴の全盛時代には讀本一輯について大抵二三十兩の潤筆料を出版者から送られてゐることは前にも述べた。合卷類一篇の報酬もほゞそれにつぐなふものであつた。そしてその原稿の分量を云へば、上の一輯一篇は今日の新聞小説八十回前後の分量で、馬琴は大抵それを一二ケ月の間に書き終つた。更に金貨の價格から云へば、玄米一石一兩の相場として、一篇の著作料は現在の千圓ちかひ價格がある。(馬琴が宗伯のために買求めた家屋は、十四五坪の建家で二十兩ほどであつた)決して當時として割の惡い職業ではない。その上馬琴は一年に平均二挺づつ古梅園の墨を使ふと云ふほどの精力家で、今試に彼の五十一歳より七十歳まで二十年間の著作數を計算して見ると、讀本類が二十四五輯(篇とも云ふ)合卷類が六十篇ちかくあり、外に隨筆、雜著が二十種ほどある。雜著の中には出版せぬものもあるが、兎に角一年に平均四五篇の著述をなして、百兩から百三四十兩

ぐらゐの收入はあつたやうに思はれる。外に宗伯の扶持米、賣薬、上屋賃などを加へると、先づ中流生活者として相當の體面は持ち得たかと思はれる。それに質素儉約を第一とする馬琴だから、然う生活に窮迫をする筈もなく、多少の餘裕はありさうに見える。或書にも馬琴は著作によりて相當の資産を殘したやうに書いてゐるけれど、事實を調べると馬琴はいつも貯蓄といふほどのものがなかつた。先づその事實から云ふと、馬琴が不時の金の必要に迫られたのは、宗伯を開業させるために家屋を求めた時、宗伯お百大病の時、文政十年馬琴が霍亂にかゝつた時、天保七年に四谷に組屋敷を買つて孫に御家人の株を買ひ與へた時、その翌年その古家に修繕を加へた時、これ等が重なるものであつたらしい。家族の病氣には馬琴が著作の數を増すだけだから格別苦勢はないわけだが、その他の失費には馬琴はいつも何等の用意なきため、氣の毒なほど打萎れて金策に心を勞してゐる。宗伯の開業は馬琴宿年の念願なのだから、豫て多少の覺悟があるべき筈なのに、家だけは何うやら買求めても、修繕造作に要する二三十兩の金が工夫つかずに途方に暮れてゐるのを、書肆泉市つる屋が見かねて五兩づゝ送り、その他多少づゝの助力金を得て漸く工事を終つてゐる。この時馬琴のよろこびは、まだ釧染もうすき牧之に向つて、「どうやらかうやらくり廻し、足らざる處の借財は、はづかにて事すみ候事（中略）先祖の遺徳、父母の大恩、亡兄の遺志を身ひとつに引うけ、われらこそ生涯市隱清貧にてをはれ、何とぞ忰をば人がましく、先祖の祀りもその靈の快くうけさせ給ふやうにしてとらせんと存候赤心を、家廟の諸靈位たすけたまひて、かく大金のやすらかに追々整ひ候事と、感涙にむせび候まで忝く、只この神わざの一方ならぬ一家の大幸を歡び入申候。」と書送つてゐるのにも知れる。その大金と云ふは總計全部にて五十兩に足らぬ金子にて、馬琴にすれば二三ヶ月の著作にて償ひ得る金なのだが、その用意がなかつたのである。四谷移轉の際の費用はそれよりは大金でもあつたらうが、馬琴は過去幾十年間かの操持を捨てゝ、心に疚しき書畫會まで催して、惡金同様の恥しい金にて急場を凌いだことは前にも書いた通りである。そしてその翌年住居の修繕に要する金は僅か二三十兩ほどの金なのだが、やはりその金の出所がないため、百方思案の末にこれまで年々に賣りつくして最早や幾何も殘つてゐない愛玩の藏書や五十年間文壇生活に據にその勞苦の記念として家に殘された自作の舊著全部を出し、それを友人間に轉賣して、やつとその事を終つてゐる。

兎園小説は吾身與鬘と同居の後、文政七年耽奇漫録高尾

したる次の年（文政八年）の春、解發起して關東陽と相謀り、社友七八人毎月輪會して、多く奇聞を書き集めたる者也、本編十二卷續編別錄共に六册は解が獨撰にて、社友の寫せるは稀也、この書琴嶺の書畫もあり世に多からぬ珍書なれば、兒孫に貽さまく思ひしに、今より五六年以前の多の頃、興邦が十匁筒の鐵砲を買はまくほしとて、しきりにものせしかども、當時財用足らざれば、いかにせましと思ふ時、伊勢松坂なる友人小津桂窓が江戸深川なるかけ店に來つるとて、折より來訪せられたり、この桂窓も歌書を愛る癖あれば、解意衷を示して、兎園全部十八卷を、代金五兩に賣與へて、興邦の爲に彼鐵砲を購ひ得させにき、はじめ賣書の事を桂窓に談ずる時、質に入れんと云ひしかど、物にては望ましからず、一旦買取るとも金子調達せられなば、幾日にても其折返しまいらすべしいはれしかば、最も賴もしくて遣したり、其後兎園小說の事心に掛りて、いかで購ひ取らばやと思ひながら、予が著述の潤色昔に比れば半分にも足ずなりし故に、纔に五金すら調ひがたくて默止しに、今年（弘化四年）秋七月の頃、讃州高松なる友人木默老、予が藏弄の禽鏡を賣らば買はまくほしといひおこしたり、其禽鏡は、吾壻渥美赫州に畫せたる諸鳥の寫眞にて、全部六卷箱入にしたる卷物也、开が中には愚說なれども、今は夏毎に取出して紙魚を拂ふのみ、是を見るものもなく人に見することもなし、さらば禽鏡を賣て兎園小說を取返さばやとおもへども、それすら衣食住の爲に巳を得ざる散財の事あれば、思ひの儘になるべきや否いまだ是を知らず、つら〲思ふに、得失は天也、彼二書長く架藏すとも、吾身失明の今に至りては、みづから見ることを得ず、興邦等も吾書を愛する如く秘藏すべきや否を知らず、さるを愛惜して思慮を失すは、得失の理を知らざるに似たり、彼の默老の嚢に寫得たる禽鏡は、その上席なる大家老の所望により、讓與たりといへり、吾若禽鏡を賣らずもあらば、彼人も亦愛書を失へる也、然るを愛惜せば恥べき事也、書籍は好む者に益あれども、不食の常用にしかず、鄙語に寶は身のさしがへといへり、一旦其失ふ時に至りて、惜むといふとも甲斐やはある、皆是天之時也と知るべし。（追て云、禽鏡の事默老金子未整はずとて其後は沙汰なくなりぬ。）

この雜記は諸書に引用されて、稀らしからぬ記文ではあるが、馬琴晩年の生計のさまが知らるゝと共に、僅五兩の金に窮して終生愛惜の著書まで手放さなければならなかつた彼の感慨を思ふと、愴然として背らに寒さを覺えずにはゐられない。大

體わたしは馬琴が平常口癖のやうに宗伯の病弱無能を慨いて、わがなき後は如何にして暮すだらうと、それのみ打案じてゐるのを見て、細心愼密な馬琴のことだから、宗伯のため又自身老後のはからひとして、豫て何等かの方法は講じられてゐるものとわたしは安心してゐた。然るに如上の諸事實が相次いで顯はるので、わたしは段々馬琴の性格に疑ひを持ちそれから調査して行つて見ると、彼には殆んど貯蓄心といふものがなかつたやうに思はれて來た。それは彼一流の主義見解のために金錢の私藏を卑しんだのか、それとも彼自身が生來貯蓄に適應しない性格の所有者なのか、そこは輕々しく云はれないが、わたしには何うもその本來の性質ではなかつたかと思ふ。何故なれば、彼が眞に貯蓄のために收入以上の金錢を必要とするならば、まだまだ潤筆料を値上げする餘地があつて知人からそれを勸めるものもあつたのに、彼はそは貪るなりとて應じなかつた事實も見え、諸大名の助力なども受けまいとしたところに、彼はさまで明日の生活に不安を感じてゐなかつたらしい。馬琴は常に宗伯の身の上ばかりを憂へて、わが身に迫りゐる老衰病氣などに注意を置かなかつたところは、やはり馬琴のやうな渡世第一の人にも、底のぬけた藝術家らしい缺陷があつたのではないかと思ふ。これ等の事實は、京傳三馬が口に洒落をよそほひながら、しかも心は理財に聰く、文藝の名聲を看板に隨分いかゞはしい商業をなして、二人とも身後に相當の資産を殘してゐるのに比較して、甚だ興味あることゝ思ふ。それに就いて初めて頷首かれるのは、馬琴は三馬の商事に拔目なく自己を愚弄してまで江戶の水を世に賣弘めやうするのを絶えず嘲笑し、又京傳が利口にして、錢勘定に甚だ細かなのを暗に譏つてゐることである。

伊波傳毛之記によれば馬琴京傳絶交の主要なる原因の一つは、やはり貯蓄論についての意見の衝突であつた。京傳は自身沒後の生計として理髪店の株式を買ひ求め置き、その利金を妻に與へやうと考へて、事の是非を友人馬琴に相談した。その時馬琴は居丈高に開き直つて、顏子家訓や孔孟の言を引照して正面から京傳を攻撃し、蓄財の不義なるを說き、「財を遺すは後の患を遺すに庶幾し、吾は男女の子あれども財を遺すの餘力なし、まして、妻のために後を思ふの暇あらんや。」と强際して京傳を沈默せしめ、遂に兩家疎隔の一因となつたのである。後京傳は人に語つて、「余馬琴と交ること二十年。近來渠が氣驕ます〱卓し、渠もし返ることを忘れなば、必ず世人に捨られん。」と嗟嘆してゐたが、馬琴はそれを聞いて、「人各志あり。」とて悔ゆる心がなかつた。そしてその時馬琴の蓄財不義の旨意を見ると、論理甚だ曖昧にて何等の根據なく、たゞ感情的に財蓄その

ものを惡んでゐるとしか思はれない。わたしはこの條章を讀んで、蓄財觀念の缺乏は彼自身も私かに苦しんでゐる弱點であつて、それに觸れる痛みに耐へずしてこの異常の興奮をなしたのではないかとも考へられる。尤も、この京傳との爭論は馬琴四十四五歳（文化六七年）の事にて、前にも述べたるごとく蒲生君平との親交時代にて、極端に水戸學信仰時代であつたことも忘れてはならない。

文政十年の霍亂は馬琴生涯の大病と云つても好い。馬琴は生來岩乘なる體質にて、骨組のがつしりした、固肥りに肥つて、體量なども血氣時代は十六貫ぐらゐあつたと思ふ。それに可也養生にも注意し、元日より大晦日まで健康時にも毎日二貼づゝの煎藥を服し、毎月八日づつ三里に灸治してゐる程にて、病患の苦痛は然う知らなかつた。たゞ長年の書齋生活のため極度の運動不足にて、五十歳頃からそろ〳〵腰痛を訴へ初め、次第に歩行困難になつて六十一歳から杖にすがつて歩いたのと、寒中には疝癪にて多少苦勞を覺えたほか、身體の病氣はまづなかつた。それでゐて生涯三度の大病を經驗してゐる。最初は五十一歳の時傷寒を患へて可也に苦しみ、次に六十一歳にて霍亂に罹り、最後は天保五年六十八歳の夏痳痢に感染して二月ほど病床にあつた。そのなかでも丁亥の夏の霍亂は殆んど必死の大病にて、馬琴も不起を覺悟したらしく、後の自記にも「依レ之臨終程遠からじと存候故、少々遺言などいたし置候へ共、盆前より少々づゝ順快。」と書き「元甲子わが結局と思ひしに、壽あり下回の痊快を聞け。」「今はとて手まはしすぎし遺言の、やくにもたゝずなりにけるかな。」と詠みて、その狼狽ぶりを自嘲してゐるけれど、この病中の感慨は馬琴にとつて必ず痛切なるものがあつたらう。遺言の內容は素より知るべくもないが、瀕死の馬琴の最も心を痛めた事實は、彼が出版書肆より手付金を受けて未だその責任を果さゝる負債と、最う一つはやはり自分が蓄財心に乏しく、子孫のために何等の用意のなかつた點であるらしい。そしてその悔恨のいかに痛切であつたかは、彼が盆過ぎよりやつと粥食を攝るやうになり、また床上げの祝ひも濟まぬうちから無理に病牀に小机を取寄せて見たが腰も立たず手も顫えて筆が執れないにも拘らず、先づ四五日は机に起上がる體の練習に日を送り、つゞいて十四五日ほどは校合物の校正に手をならし、漸くの事に半枚一枚づゝと傾城水滸傳石魂錄の著作にかゝり、病後六十日間に二部十四卷を完成した事實にも察しられやう。これは彼が次にも云ふ如く、非常に負債を恐るゝ性質であつて、如何なる困窮の場合でも、友人間の好意ある貸與金

でも、彼は決して借金をなさなかつたと云ふ性癖にもよるけれども、病中切實に自身の不覺悟を悔んだ結果に外ならないらしい。然しそれでもやはり天性は如何ともなし難く、馬琴は最後まで何等の貯畜なくして世を去つた。

「全快ヲまたずして晝夜著述に取かゝり候事、甚だ保養の爲にならず、長壽の謀を失ひ候事に申候仁も有之候へども、病中板元の世話に成候事も多く、その上石魂錄八犬傳共潤筆の內過半請取置候。石魂錄板元は此度拙作ヲはじめてほり出候事故、是迄一文も實得無之事勿論也。然る處六ケ年以前より三度に金十五兩さしこし候ニ付、無據うけ取置候間、病中甚だ心配いたし萬一の事候はゞ石魂錄前入の潤筆は追々にも板元へ返し候樣、悴へ申談じ置候事も有之、これらにこり候故、勉て借財を拂ひ候つもりにて、石魂錄八犬傳とも如此に綴り候事に御座候。これは御存之氣質故已ことを得ざるわざにて、只今精出し候ても、から無藷同樣の事ゆゑ、衆人には可捨置候へども、かやうの義理合は別して等閑にいたしがたく、晝夜のさかひなく六十日あまり二部十四卷綴りをはり申候。御一笑可被下候。」

わたしはこの事において、餘りに長々しく彼の無錢問題についての論じたのを恥ぢるけれども、馬琴に關する世間の誤解の第一は彼の金錢に吝嗇なる點、第二に彼の處世の誇慢なること、第三に京傳その他の舊恩に報ずる心が薄かつたこと、繫つてこの三點に起因してゐると思ふから、煩雜を厭はずこゝまで書きつづけて來たのである。殊に彼の金錢の如きは、論者少しく心を虛恬にして彼の生涯を觀察するならば、從來の批評の多くが如何に馬琴を誤まつてゐたかを知るべきであらう。當時の文人墨士の間にあつて、馬琴ほど金錢慾に淡白であつた人は、寧ろ稀らしいと云はなければならない。

わたしの夜話も可也の長篇になつた。この上は彼の生涯の輪廓(特に彼の武家生活時の境遇)を概觀して、當時の文壇人の生活及びその狀態、文壇と當時の社會との交涉等にも及んで編を綴づるのが當然と思ふけれど、それは何づれ後の機會にゆづることゝして、こゝには先づ多少なりとも人間としての馬琴について觀察をなし得たことを幸福として、この稿本を總結して置きたい。なほ著者の貧弱なるこの小研究は意外にも諸方の反響をうけて、或は批評讚辭をよせられ或は貴重なる資料など送られたる厚意に對しては、深くこゝに感謝の意を致して置きたい。

(大正十四年十一月六日)

むだ話

石川欣一

校正

校正をする人が、時々とんでもない間違をやるので「校正恐るべし」といふ駄洒落があるのは、天下周知のことであらうが、いや全く校正は恐ろしいと感じたのは今度が初めてである。而もこれは、全然異つた立場から恐ろしくなつたのである。

この秋私のづとめてゐる社で、大きな本を出した。しかも急いで出した。その製版は社から一丁ばかりの所にある、Tといふ製版所でやつたが、何しろ急ぐので、一々校正刷を社まで持つて來てゐては、時間がかゝつて仕方がない。そこで校正係の人が五六人、毎日その製版所に詰め切ることにした。

私は校正係ではないが、製版上に色々な疑問が起つた際、これも一々社へ聞きに來てゐては時間をとるといふので、矢張りT製版所へ出張ることとなり、毎日校正係の人々と同じ部屋で暮すことにした。

だが製版組版に際して起る問題は、さう多くはない。と云つて校正を手傳ふ丈の勇氣も無い。といふのは、私は當世の多くの靑年のやうに、至つて字を知らず、殊に假名づかひ、送り假名等に至つては、まるで無學文盲なのである。仕方がないから初の間は、パイプを吸つたり、ゴロ／＼して本を讀んだりしてゐたが、その内に段々忙しくなつて來て、どうしても乃公出でずんばと云ふやうな事と相成つた。

それで乃公は出たが、出たと云つても本當の校正係の人が校正刷を讀み上るのを、私は只原稿を見てゐて、若し間違があると、注意する丈であつた。

かくすること三ケ月、やつと仕事を終つた時には、私どもは皆づかれ切つてゐた。先づ二三日は休み、と云ふことになつたが、旅行はしたくても金が無し、やむを得ずこの機會に、依賴

された原稿を書いて了ふこととした。

この依賴は非常に呑氣で、何でもかまはないから、何枚でもと云ふのである。至つて氣やすく書けさうな氣がして引受けたが、さて書かうとなると、何も書けない。勿論恐ろしく忙しい三ケ月の後で、頭がボケてゐたのは事實である。がボケた頭は心機一轉さへすれば、もと通りになる。私はドン・Qを見に行つたり、庭にクローカスを植え込んだり、變な田舍で下顎のとび出した女の都々一を聞いたりしたが、やはり書けない。書けるには書けるが、二三行書くと、何だか假名づかひが違つてゐさうな氣がして、恐ろしいのである。また漢字を書くと、その劃が違つてゐさうで恐ろしくなる。何度も何度も書いて見ると、お仕舞には非常に簡單な、例へば「犬」といふやうな字が、何故大の字の右の肩に點があると、イヌになるんだか、分らなくなる。大きくなつてゐる奴に石をぶつけた樣な字だから、小を意味する方が正當ではあるまいかと思つたりする。

勿論私の假名づかひの浮雲乘いことも、漢字の知識の足りないことも、私は前から知つてゐた。知つてゐながら、私はドシドシ何か書いてゐた。別につまらぬ負惜みではなくても、假名づかひなんざ、すこし間違つてゐても、書く物それ自身がよければいゝと思つてゐた。これは例へばスタイルの如きもので、スティヴンソンはスタイル丈は當に手に入つたものだが、內容が下らないので、惡文だらけのスコットにかなはない。それ程內容は大切なんだから、假名づかひ位はどうでもいゝと思つて、（大して內容の無い物を）勢よく書いてゐた。

所が三ケ月、校正の專門家のそばにゐて、術還の還はくわんだとか、櫛拂はクシバライと讀むがくしはらひが本當で、拂ひと送るとか云ふことばかり耳にしてゐたお影で、手も足も出ない。これから一生懸命に勉强すると決心はしたが、勉强してゐると一方依賴を受けた原稿が、いつ出來上るか分らない。若し間違があつたら、優秀なる校正者が正しくして吳れるものと考へて、とにもかくにも書きは書いたが、心細いこと夥しい。

私の云ふ「校正恐るべし」はこれである。なまじつか校正の手傳なんかしたもんだから、一週間ばかりは、すつかり筆をおじられた。この話を、一緒に働いた私の同僚にしたら、その人も、矢張り、端書一枚書くにも一々辭書を引かねばならないので、時間がかゝつて困ると云つた。この人は文學士である。文學士でもこの調子なんだから、私が校正を恐れたのは、單に私の無學からばかりでは無いとも思はれる。

あらう。

クローカス

クローカスの球根を埋めた。いづれ春になつたら芽が出るであらう。

だが一體球根は「植ゑる」のか、「蒔く」のか？　辭林によると「蒔く」は「散らし植う」だから、種子みたいに小さい物をバラマクのであらう。球根はさうバラマク譯には行かぬが、クローカスのは至つて小さい。體積に於ては、大型の蠶豆と大差あるまい。蒔くと云つてもよさゝうである。

「植ゑる」は普通、根もあり、葉も出てゐる植物を、土を掘つて入れることを云ふ。球根を植ゑては變であるが、然し私のクローカスは、買つて來てから三週間近くも、あたゝかい戸棚に投り込んで置いたので、取り出して見たら、根も芽もちやんと出てゐた。すると「クローカスを植ゑた」と云つてもよささうである。

どう云つてもいゝものは、默つてゐれば一番いゝ。だが、書く時に困る。クローカスを○○○。」とすると、クローカスを食つたんだか、切つたんだか、分らなくなる。やむを得ず「埋めた」と云ふ文句を使用して見た。

いろ〳〵な球根もあるのに、何故クローカスを選んだかが問題になる。私としては、何でもいゝのである。花ならばいゝのである。何でもいゝの程度だから、勿論花を育てやうと云つた風な風流心は無い。只、不意にクローカスの花が見度くなつたから、球根を買つたのである。三十錢ばかり買つたのである。これを春秋の筆法とかで云ふと「メレデイス、石川欣一に三十錢ばかり損をさす。」である。

メレデイスは私の好きな詩人の一人である。メレデイスを讀むと、太陽と風と泉とを思ふ。自分自身が強くなる。變な修身よりも、餘程效能がある。松葉なんぞを喰ふよりもいゝ。

勿論メレデイスには閉口するやうな詩もある。薄田泣菫氏は、私がメレデイスを云々する度ごとに「俺は汽車の中であいつのモダーン・ラヴを讀んだが、京都から岡山までかゝつて、とうとう何が書いてあるんだか分らなかつた。」と云はれる。私はメレデイスの分らない詩は讀まない。分る詩と、何度も讀む内に分つて來さうな詩とを讀む。

この、私に分る詩で、私の好きな詩の一つに、「フキーブスとアドメタス」がある。これは父の神ヂユースに追放されたフキーブス・アポロが、この地に下つてテツサリイ王のアドメタス

あるが、その第五節に

優しい小羊は、安全を感じて母の乳房にすがり、かくて冬は年の新しい黃金、クローカスに追はれて急いだ

なる句がある。

私はこの

Safe the tender lambs tugged the teats, and winter sped
Whirled before the crocus, the year's new gold.

が好きで、時々口ずさむ程である。クローカスの球根を買つたのも、實は往來を歩いてゐて、今度休む日には、朝からメレデイスを讀まうと思つてゐた時、ふと種子屋の店先にクローカスを發見したからなのであつた。

話は違ふが、私の持つてゐる「ロゼツテイと彼の仲間」——ビヤボーム描く——には、極めて愉快な繪がある。題して曰く「ロゼツテイ、メレデイスによつて榮光に充ちたる太陽と風とに出で、ヘンドン及びその向へ迄歩くことを頑固に說法するの圖。」圖の右中央には白つぽい服を着て、赤いネクタイをしたメレデイスが、兩足をふんばり、兩手を上にあげて——その左手に山高帽子を振り廻してゐる——盛に太陽と風とを說いてゐる。左の方には、書架にかくれて、黑い上つぱりを着たロゼツテイが、迷惑さうにキャンヴアスに向つてゐる。二人の間の遠くには、ロゼツテイ型(タイプ)の女が、しめぢの軸みたいな頸をして坐つてゐる、人も知る通りロゼツテイは、夜の神秘を好む男であつた。

陽氣な秋

勿論これは主觀の問題である。だから私が秋は陽氣だと云つても、いや俺にとつては、秋は大いに悲しいと云ふ人があるかも知れぬ。あつても一向不思議ではない。ある方が當然なのかも知れぬ。

それにしても、主觀ばかりでなく、我々は一體、いくらか聯想的に秋を哀しいものと思はせられてゐるものらしい。現に小學校の敎科書にさへ「滿目秋蕭條」といふ風な文句が入つてゐる。それから「物のあはれは秋こそまされ」を讀み、「この路や行く人無しに秋の暮」を聞くのだから、我々はどうしても秋は悲しいもの、淋しいものと思ひ込んで了ふ。

強いて異說を說へるのではないが、秋は決して淋しいものではないと思ふ。却つて陽氣な所が多い。春の浮蕩、夏の情熱に

の羊を飼つた神話を取扱つた、如何にも力強い、男性的な詩で

對して――勿論これも私一人の考で、他の人には異論もあらう――秋は實に、氣のいゝ陽氣さを持つてゐるやうに思はれる。

「秋」と聞いて、いつも思ひ出すのは The squirrel's granary is full 即ち「栗鼠の倉は充ちた」といふキーツの文句である。これは、云ふ迄もないが、ラ・ベル・ダーム・サン・メルシの第二節にあるので、詩全體としては湖畔から菅草が枯れて失せ、鳥も啼かず、空は鉛色の淋しい秋の終を出してゐるのだが、どうも私にはこの「栗鼠の倉庫も一杯になつた」が、樂しい秋の一面をあらはしてゐるやうな氣がしてならぬ。

恐らく木葉が落ちつくして、木々の梢が白く輝く疎林の中であらう。木の枝か、落葉の下かは知らず、とにかく、あの怜悧な栗鼠が我が倉庫、貯藏庫とするものがあつて、そこには胡桃や栗や榛の堅果が一杯になつてゐる。これで冬中雪が降らうが、霙が落ちやうが、栗鼠は枯葉をかぶつて、あたゝかくしてゐることが出來る。何といふいゝ秋なのだらう！私には自分の庫の前に、前肢をあげてさかしげに坐る栗鼠の顔が見える。

同じキーツの「秋の歌」もまた、いゝ二行で始つてゐる。「霧と、やはらかいフルートフルネスの季節！　成熟しつゝある太陽の極めて近い心友！」――この fruitfulness なる言葉は、私には和譯出來ない。すべて物事がよく出來上り、みのり、熟することを云ふのである。

何もこんな風に先人の句を引いて來る必要はないのだが、不思議にキーツの栗鼠を思ふことが、とう〳〵私をこゝ迄ひつぱつて來た。十九世紀の英文學を離れて、すこしくあたりを見まはして見やうか。

日本の秋は何と云つても稲である。あのゆたかな、黄色を一面に敷きつめたやうな田面を見て、こいつは淋しいと思ふ人があるだらうか。殊に刈入れ後のしばらくを、農家では何と云ふか田の邊に、低い塀のやうに立てならべた處に、午後の日が日溜りをなしてゐるに至つては、たとへその反對側に淋しい路が白く横つてゐるにせよ、どうしても人の心を陽氣にする。

麥秋もよい。が、あの頃の濕氣を帶びた空氣と、妙にためらふ黄昏とは、精神的よりも、肉體的に私の頭を重くする。

いろ〳〵な樹の紅葉も、私の心を樂しませる。柿が殊にいゝ。思ひかけぬ所に、小さな白膠木が大きな紅葉をつけてゐるの

も、面白いものである。

私は落葉を焚くのが好きである。すべて乾いてゐるから氣持よく箒に當り、氣持よく燃える。落花にくらべて、何と思ひ切りよく掃かれて集まり、また勢よく燃えるではないか。

焚くばかりではない。木の葉の散るのは見てゐても氣持がよい。木によつて異るが、飛行機が滑走するやうに斜にスーッと下りて、また方向を變ずるのもあるし、最初からペラ〳〵と回轉するのもある。

元來落葉は凋落それ自身である。凋落を哀しまぬのは不人情であるが、私とすれば散る物は早く散つた方がいゝやうな氣がする。そのあとには、もう新しい葉が出來てゐるのだから。そしてその新しい葉は、厚い、丈夫な、鱗のやうに重り合つた外套を着て、大人しく、小さく、來年を待つてゐるのだから。秋の日は弱くとも暖かい。私には、落葉のあとの來年の葉が、皆よろこんでゐるかのやうに思はれる。

淋しいものとされてゐる秋の風も、私には大して淋しくない。しめつぽい春の風や、熱病やみのやうな夏の風より、餘程有難い。朝起きて、やつ、今朝は少し寒い位の風が吹いてゐるぞ、と感じることは、私にとつては體内を血がかけめぐることである。寒い風に刺戟されて、チリンチリンと音を立てて血が走り廻ることである。私は無性にうれしくなる。鬚を剃つたあとで、兩手で頬をたゝいて、赤い顔になる。勢よく靴をはいて大泊へ行く。殊に、いよ〳〵冬になつて、鼻と耳だけを寒氣にさらし、身體は大きな外套にくるまる氣持は、たしかに惡くない。が、然し「日はあか〳〵と秋の風」の句に現はされてゐる、あのうつろな感だけは、どう考へてもよろしくない。裏切られた氣持がする。

最後に時雨。あれも淋しいものとして扱はれてゐるが、私は大いに好きである。もつともこれは時雨その物が好きなのではなくて、時雨の時に飲む酒が好きなのである。朝もよい、晝もよい、夜はことによい。障紙をしめ切つた部屋でサラ〳〵と軒を過ぎて行く音を聴きながら、飲む酒は、何とも云へぬものである。

庭

今住んでゐる家へは、今年の二月に引越して來た。

大していゝ家でもなく、家賃もまた私の月給に比較すると、いさゝか高いが、庭の廣いのが氣に入つて、借りることにし

た。

勿論大阪の郊外に、會社員相手に建てた貸家である。庭が廣いと云つたからとて、築山があつたり、池があつたりする程ではない。何百坪はおろか、何十坪も無いであらう。それでも、家の周圍をぐるりと廻れる丈の廣さは持つてゐる。「廣さ」も滑稽かも知れぬが。

二月に引越して來た時には、只松の木や竹や、二三本の坊主ポプラがあつたばかりで、その他には何の花も、何の草も無かつた。然し前に住んでゐた人が、花を作つてゐたとかで、所々に藥壇のやうな物が出來てゐた。私はこゝに種子を蒔かうと思つた。

三月の中頃のある暖い日に、近所から鍬を借りて來て、黒い、やはらかい土を掘り起した。掘つてゐる中に、あちらこちらから小さな球根みたいな物が出て來たが、おかまひ無しに掘り續けた。そして種子を蒔いた。スウヰートピー、忘れな草、三色菫、パセリ、コスモス、菜種、赤大根、雁來紅、その他は忘れて了つた。これ丈あると秋までは、食ふ物もあるし、美しい花も充分ある——といふのが私の腹だつた。

四月になると、急に色々な芽が、庭一面に出初めた。白くて槍のやうに細いのや、薄緑で貝のやうに丸いのや、重さうな双葉をもち上げたのや、とにかく皆勢よく頭を出した。あまり澤山芽が出たので、果してどれが私の蒔いた物なのか、前からある物なのか、雑草なのか、花なのか、見當がつかない。勿論私には、どの花の芽がどんな形をしてゐるか、どんな色をしてゐるか、それ等の知識が無いのである。まあいゝ、出た物は生長するだらう。皆——雑草でも花でも野菜でも——自分勝手に大きくなつて、それ相應の花を咲かせればいゝんだ。と、私の心は穏かであつた。

一方、前から植えてあつた木が、花を咲かせた。薔薇が二株、桃が二株、無花果が二株あるその下の一尺の紅梅（もつともこれは早く咲いたが）櫻（これは塀の向ふの道路にある）ゆすら梅、海棠、そして楓には赤い葉が出、ポプラは急に細い枝をスイ〳〵と延した。

五月のある朝、苗賣りの聲を聞いて、へちま、胡瓜、南瓜、茄子、トマト等の苗を買つた。どこへ植えていゝのか分らない。うつかり地面をほぢくると、何の若芽がひそんでゐるか知れない。と云つて、いくら安い借家でも玄關の横に南瓜を植ゑ

る譯にも行かないから、やはり庭の一隅の華壇に、出刃庖丁で穴をあけて植ゑこんだ。へちま丈は台所の横の塀にからませるつもりで、特に固い地をほじくつて植えた。

夏の朝、パイプを啣へて庭を見廻る。すると胡瓜が目につく、露のまゝの奴をちぎつて朝の食卓にのせる。秋の朝、番茶を飲みながら庭を見やると、コスモスに赤蜻蛉がとまつてゐる。そこで筆を執つて、スラ〳〵と一句やる。どうも大した物だ、と私は一人でよろこんだ。

よろこんでゐる間に夏が來た。考へて見ると、もう菜の花は盛を過ぎてゐる筈なのに、ウンともスンとも云はない。庭へ出て、たしかこの邊に種を蒔いたと思ふところを、一生懸命になつて探した。すると何の草だか分らぬ奴が、こんがらかつてゐる下に、二寸位に延びて、小さな花を一つつけてゐた。もつと澤山あるべきだが恐らく芋蟲が食つて了つたのであらう。

それから氣になつて、三色菫やスウヰートピーや忘れな草をさがしたが、それらしいものは一向見當らぬ。種子の蒔き方が下手なので、地球の中心へ向つて生長したのかも知れない。恐ろしくクラシカルな種子で、地上に出て新聞記者の目を樂しませるより、地獄へ行つてヘーズの妻なるパーセフオーヌの心を慰る方がいゝど思つたのかも知れぬ。私は苦笑して、今度はパセリを蒔いた所へ歩を轉じた。

パセリを蒔いた邊には、その頃盛に蕗のとうが出たが、その後細い、しなやかな葉が一面に出て、あつさりした物の好きな私を大いによろこばせた。その上また三葉が出て來て、これは固かつたが、それでも香が高かつた。で、この朝、蕗と三葉とを杖で分けて見たが、パセリらしい物は見えない。最後に地面にかがんでさがしたら、約二寸の距離を置いて、行儀よく小さい奴がならんでゐた。

私は狂喜して、その近くの蕗や三葉をすつかりむしり取つた。家内にも下女にも、これ等のパセリを大切にすべき事を厳令した。若し踏みでもしやうものなら、追ひ出して了ふと申し渡した。

今迄、大きな蕗の葉や、しげつた三葉の葉にかくれてゐたパセリは、急に初夏の太陽と向きあはされて、しばらくはまぶしさうにしてゐたが、間も無く、メキ〳〵と大きくなつた。大きくなりはしたものゝ、さて、パセリをどうして食はうかとなるとどうにも仕方が無い。かゝあ左衛門お手製の、身と皮とが離れ

たトンカツの傍につけるのは惜しい。と云つて菜飯にする譯にも行かぬ。結果鹽をつけて、生で噛ることにした。

私がこれ程苦心をして、大切にした花や野菜が、パセりを除いて全部どこかへ行つて了つたのに反して、はじめから丸で何の關係も無く立つてゐた木々は、大いに忠義を盡した。先づ水蜜桃が、吃驚するやうな果を十あまりつけた。一尺の紅梅は一合ばかりの實を提供したから、アルコール漬けにした。妙な所で茗荷が盛に子を出した。更に無花果に至つては、梅雨の最中に、去年から持ち起したらしい大きな果を三つ、何とも云へぬ味にして我々に與へた。

八、九、十と三ケ月、私は目の廻る程忙しい日を送つた。朝は早く家を出、夜はどうしても十一時、十二時に歸宅した。日曜もない。休もない。病氣になる時間も無い。

こんな有様だつたので、庭の方は丸で顧みなかつた。勿論小さな庭だから、便所の窓から見ると、南瓜の蔓が莫迦げて擴つてゐるのも、いつの間にかゴールデンロツドが咲いたのも見えるが、前のやうに、本式に、蕗の葉を分けてまでパセリを探し求める氣持は無くなつてゐた。時々、これが家の胡瓜だといふのを食つたり、茶碗の底の小さな青白い物が臺所の横のへちまであると敎へられたりしたが、只、それ丈の話にとどまつた。

涼しい風が吹くやうになつてから、私は毎晩必ず酒を飲んだ——もつともこれは一年中飮むが——。たとへ十二時に歸つても、一時に歸つても、必ず一本か二本を飮んだ。

一杯の酒によつて、仕事の機械でない、本當の自分になると、私はしきりに庭を氣にした。あゝ南瓜ばかり大きくなつて、無闇に花が咲くが、茄子なんぞ一體どうしたのだらう。雁來紅も、電車の庭から見た奴はもう三尺位になつてゐた。コスモスも盛なのに、家の奴は姿を現はさない。あしたの朝は一つ庭を見てやらう。——私は朝の電車の窓から見た、いろ〳〵な秋の景色を思ひ出しては、庭を考へる。秋である、秋である。我が家の庭ばかりではなく、いたる所の秋である。信州の山には、もう雪が降つたか知ら。朝の霜はひどいであらう。木曾路は、落葉がから〳〵と路を埋めてゐるであらう。スコツトランドの高原にはヘザアの花が紫で、こんな宵はホア・フロストがカサリン湖の畔に立ちさまよつてゐるであらう。テイロールでは牛や

羊の群が、もうそろ〳〵山を下り、人々は多の仕事の木彫道具を取り出してゐるであらう……私の心は酒を通じて、先づ我が庭を思ひ、次に天地の秋を思ふ。一杯が二杯に、三杯にと、盃の數が增すと共に、感情が妙に純一になつて來て、私は必ず筆を採つた。紙ならば半紙でもかまはぬ。句をつくるのだと云つて、さて書く。いつでも「秋や秋や」しか書けない。あまりにこちらの態度が眞劍なのである。名人は危きに遊ぶその遊びの一分が出て來ないのである。

翌朝、ある時は晴れ、ある時は曇り、またある時は雨であるが、どうも氣ぜはしなくて、庭に下り立つ氣がしない。便所の窓から見る丈である。

それで結局、私の庭で、私の手によつて出來た物は、南瓜が一つに胡瓜が五六本。種を蒔いた物ではパセリだけ。南瓜の蔓をむしつたら、あとからヘナ〳〵した雁來紅が二三本頭を出したが、これは鷄が食つて了つた。

埋火の歌

埋火のほかに心は無けれども
むかへば見ゆる白鳥の山

私には、この「むかへば見ゆる」の氣持が、中々有難いものに思はれる。これから草鞋をはいて、登らう、と云ふのでもなければ、あの山さへなければ向が見えるのにと思ふのでもない。只山がある。白鳥の山がある。それも態々立ち上つて見るのでもなし、我家の眺望を樂しむのでもない。ひよつと頭を擧げると山が見えるのである。

私だちは、どうも山を見ると登り度くなる。登山は人の本能なのかも知れぬ。畏友北尾鐐之助氏は、その著「山岳夜話」に於て「高きに登るといふことは、人類に與へられた先天的の向上心、乃至憧憬であります」と云つてゐる。なる程さうかも知れぬ。ハンス・トーマの「憧憬（ゼーンズフト）」は、幻の鳥を追つた若者が、ついに山の巓に達して、それでも足りず、兩手を高く天に向けてつまさきで立つてゐる處を描いてゐる。

私自身としては、高きに登るそれ自身が目的ではなくて、高い所からその向ふ側を見度いのが目的である。目の前に、壁のやうにそゝり立つて眼界をさへぎる山は、それを取りのぞく可き方法も無い。やむを得ずこちらから出かけて行つて、山に登るのである。

よく考へるのが鹿島槍、あの山は信州側には切り立つて、越中側にはなだらかである。その切り立つた信州側から、あるひは水を渉り、唐檜の下を匐ひ、急な雪渓を鳶口をたよりに登つて行く人は、一刻も早くスカイラインに着き度いと思ふ、麓の幕營地を朝早く立つて、尾根に着くのは午後三時か四時にならう。ひよつと顔を出すと、恐らくそこは午後の日があたゝかく照る傾斜面で、綠の草、白樺の若木が生々とのびてゐやう。目の下はるかに黒部の流。白い泡沫を見せ、濃藍の淵を見せる。それから立山の連峯。

人は滿足する。しばらくは草に橫はつて、滿足の情に眼を閉ぢる。來てよかつたと思ふ。信州側より越中側がいゝと思ふ。

だがいつ迄も滿足してゐる譯には行くまい。もう一つ向ふの山、即ち立山に登つて見度くなる。立山の向ふの方が、こゝよりはいゝやうな氣がする。そこで黒部の谷を下り、——若しそれが可能であれば——また險しい絕壁にとつつく。

實際の山でいふと、立山より向ふに山は無い。然し人生の旅には、どこ迄行つても山がある。登つて下りて、登つて下りてしてゐる內に、山の中で迷つて死んで了ふ。そんな事をするよりも、初めから埋火をかゝへて、只白鳥の山を見る方が、心がやすらかである。だが、我々にはこれが出來ない。常に新しいものを欲し、新しい所を欲する。

もつと一本調子に出來てゐれば、ハンス・トーマの若者のやうに、只一つの夢に憧憬れて、上へ上へと只一つの山を登りつめ、これ以上行けぬ所では飛び上つて、何百尺か下の岩に頭をぶつけて死ぬことが出來る。この方が山の中で、充たされざる滿足に失望しながら、迷つて死ぬよりは樂であらう。たしかに樂である。然し樂と知つても、我々はそれをやらぬ。餘にソフイステイケートされてゐるからである。我々は、心の中ではトーマの若者をうらやみながら、口では「あいつは莫迦だからあんな莫迦な眞似をしたんだ」といふ。

若いゲーテは、キッケルハーンの山巓で、Uber allen Gipfeln ist Ruh の歌をつくつた。「待てしばし、爾もまた休ふを」と、その時彼は、どんな氣持でこの歌をよんだか知らぬ。

その後數十年、老ひたゲーテがこゝに來て、偶然壁に書いた自分の歌を見出し、「待てしばし、待てしばし」と、淚を流して

くりかへしたといふ。ゲーテはその數十年間に、幾多の山を登つた。彼にとつては、山は常に「その向側」を意味したのである。ギプフエルは、平穩の氣を漂はす所でなくして、未知の國をさへぎる物であつた。彼は猛然と、一つの峯に登り、更にその向の峯を攀ぢ、かくて八十年を送つた。そしてその結果は？「待てしばし、爾もまた休ふを」の、「休み」こそは彼が願ふ唯一のものであつた。

同じやうな氣持が――すくなくとも私にとつては――スティヴンソンのレクヰエムにあらはれてゐる。

廣くまた星滿ちし大空の下
墓掘りて、我を横はらしめよ。
歡びて我は生きたり、
歡びて我は死ぬなり。
そして、自分の爲に刻む句は
彼は横たはる、望みの地に。
舟人は海より家に
獵人は丘より家に。
であらしめよ。といふ。

（ゲーテとスティヴンソンとを一緒にして、ろくな知識も持合はせずに論ずる無謀は、これを許され度い。私の今の場合には、「埋火の歌」と、「さすらひ人の夜の歌」と、「レクヰエム」とさへあればいゝので、作者の人格や生涯は必要ないのであるが、僅ばかり彼等に關して知つてゐることが禍をなして、こんな事になつたのである。）

人間としてはスティヴンソンも、面白い一生を送つた。彼は文字通り、海を行き丘を歩んで、世界中を廻つたのである。それは健康を求めてであつた。それ程の病身でありながら、彼はたしかに歡んで生きてゐた。

（序ながら一年ばかり前に出版された、チョン・エー・スチユワートの「スティヴンソン論」は、最も面白い本の一つであることを附記して置き度い。）

さてこゝに五人、即ち埋火の歌の作者と、トーマが描いた「憧憬（ゼーンズフト）」の若者と、ゲーテと、スティヴンソンと、「我等」を以て代表する、常に人生の峯から峯を歩まねばならぬ人間とを並べて見やう。

埋火の歌の作者は、白鳥の山の向ふに何があらうとあるまいと、埋火のほかに心は無かつたのであるから、只山と相對して坐つてゐた。トーマの若者は、前にも云つたやうに、畫面では永久に、山嶺の岩角に、兩手を天にのばして立つてゐるが、あの次の瞬間には、もう一寸か二寸夢の鳥に近づかうとして、足を踏み外して岩からころがり落ちたに相違ない。ゲーテとステイヴンソンとは、共に、只山と相對して坐ることもなさなかつたし、また、たつた一つの夢の鳥（トーマの繪には同じやうな鳥が數羽ゐるが）に憧れて、たつた一つの山を、無限の垂直に登ることもなさず、ありとあらゆる人生の山に登り、海を越した。こゝ迄は我等と同體であるが、我等がこのまゝでは必ず懐疑の谷底深く、目の前に聳へ立つ山に登らうとあせりながら而も登り得ず、遂に求むるものを求め得ずして死ぬのに反して、ゲーテは「爾もまた休はん。待てしばし。」の約束を得て、秋の太陽のやうに、やはらかい、輝いた微笑を、涙に濡れた頬に浮べ、ステイヴンソンは「望んでゐた場所」に、「水夫は海から家に歸り、佐都夫は丘から家に歸る」と云つて横はるのである。二人とも安住の地を得たのである。

さうすると、外見は同じでも、我等は徒に現狀に不滿を感じて、盲めつぽうに歩き廻つてゐるが、ステイヴンソンやゲーテは安息を求めて人生をさまよつてゐたやうに思はれる。はじめから安息を求むとならば、骨を折つて歩いたり、苦んだりするより、埋火の歌の作者のやうに、大人しくしてゐた方がいゝらしい。もつとも苦んだり、歩いたりした結果が、「トリロギー・デヤ・ライデンシャフト」や「ハーミストン」になつたのに、ひつこんでばかりゐた結果は歌が一つでは……とも云へるが、埋火の歌とトリロギーとを秤にかけて、どちらが重いと斷言し得る人はあるまい。

人は人として、我等は一體どうなるのであらう。勿論なるやうにしか成らぬから、たとへ谷底で迷ひ死することが我等の最後であるらしく思はれるからとて、今更急に埋火の歌の作者の心境に入れもせず、またトーマの若者のやうに、憧憬を持つ譯にも行かぬ。どうにかなる迄は歩き廻つて、我等だけのトリロギーや、ハーミストンを作つてゐる内に、あるひは飛んでも無い夢の鳥に夢中になるかも知れず、または「さすらひ人の夜の歌」の氣持になれるかも知れぬ。無理さへしなければいゝ。

飯田町時代

廣津柳浪

私は明治三十二年九月麹町區飯田町五丁目の土手下に住むことになつた。其家は土手下の角にあつた二軒立の平家で、隨分粗末なものであつた。四疊半の書齋兼客室、三疊の茶の間、二疊の玄關に臺所とだけの狹い家で、妻と子供、妻の祖母と私の四人暮には、些と狹過ぎたが、家賃の廉いのや、一軒隔いた隣家に尾崎紅葉君が居たのや、同じ町の三丁目に石橋思案君が居たのや、そんな事などが私を惹着けて、紅葉君が見付けてくれた其家を見に行つた時、私は多少の不滿を感じながらも、直ぐ借入れることに取極めた。そして、池の端七軒町から越して來て、まだ一週間とは經たなかつた神田小川町から、此飯田町へ轉居したのであつた。飯田町は硯友社發祥の地で、私は此時その飯田町へ住むことになつて、硯友社へ一層近い關係を有つやうになつたのであつた。

私は紅葉君とは其前年、高橋太華山人編輯の『少年園』の說宴が、不忍辨天社境内の長酡亭に催された時、其席上で相知り、思案君と巖谷漣山人――小波君――とは、紅葉君が兩君を伴つて、谷中初音町の私の家を訪うた時知つたので、他の硯友社の人々とはまだ相見る機會がなくて過ぎたのであつた。私は飯田町に住むことになつた時、既に硯友社同人に加はつて居たかと云ふと、さうではない、其後何時となく硯友社同人となつたので、紅葉君が同人になつてほしいと云つたわけでもなければ、私から其れにしてほしいと賴んだのでもなかつた。同じ土地に住むことになり、ます／＼親しくなつて、自然にさう云ふことになつたのであつた。私と同じ時代に同人になつた人達は、私と同じやうな成行からではなからうかと思ふのである。さう云つたところで、その間に正准などの相違があるわけではないのだ。江見水蔭君武內桂舟君なども私と同時代、私と同じやうな關係からではなかつたかと思ふが、併しこれは私の想像

に止まるので、或ひはさうでなかつたかも知れない。

私が移つて行つた頃の飯田町五丁目の土手下は、隨分淋しいところであつた。今でも其淋しさは昔に異るまいが、土手の上をうるさい汽車や電車が走らないだけでも、私の居た頃の方がまだしも好かつたかも知れない。私の家の前を、枝振の面白くくねつた松の樹などの植られた土手に沿うて東へ行くと、今は飯田町驛になつて居るが、小石川橋から西小川町へ通じた路へ出られたのであつた。その跡が今は運河になつて居る。其路の東には、殆んど四角な形の練兵場が廣く開けて居た。此處では、その頃一錢で買へた手遊物の、土燒の馬に乘つた兵隊さん見たいな恰好をした新兵が、危なツかしい腰付をしながら馬を走らせて居たものであつた。此練兵場で、或夜小僧殺があつてからは、殆んど魔所のやうに恐れられて、夕方からは近くへ立寄る者もないやうになつて居た。其後三菱が之を拂下げて市街地にしたのが、今の三崎町二丁目の一部である。私は谷中に居た頃、紅葉君を訪ふ時いつも此練兵場の傍を往來したもので、今思出してさへ何となく懷しいやうな氣がする。それが飯田町驛が出來てからは、五丁目の土手下は宛然袋町のやうに行詰つた、そして陰氣な淋しい所になつて了つたらしい。私が居た家も、三十七年前の當時でさへ、黒ずんで見えた古い家だツたから、今でもそのまゝ殘つて居るかどうか、私は震災後一層病弱になつた體を、市外代々木の陋屋に持扱つて居るので、一度行つて見たいと思はないではないが、未だ其折を得ないのである。

私の家と間に井上と云ふ人の家を隔てた南隣に紅葉君の家があつた。紅葉君は親戚の荒木と云ふ家に同居して、それから大學へ通學して居るのだつた。荒木家は老人夫婦で、召使らしい者もなく、紅葉君と三人暮のやうであつた。老人夫婦は下町出の人らしく、婦人の人柄が別してそんな感じであつた。家はとにかく一軒立と云ふだけでも、私の家よりは上品で、格子戸窓などの見付も、また好いのであつた。しかし、間數はやつと四間ぐらゐで、紅葉君の書齋にして居た三疊の室だけが、南向で日當りがよかつた。その紅葉君の書齋へは、隣家の門からは入つて、右手の建仁寺垣に沿うて廻ると、其處に木戸があつて、其内が書齋の庭であつた。紅葉君は其狹い三疊の書齋で、物を書いたり讀んだりして居たのだ。其時は吉岡書店發行の『新著百種』に、『二人比丘尼色懺悔』を書いて、世評が非常に好く、其出世作と云つても可いくらゐで、紅葉君も得意だつたし、大分創作熱が昂つて居るやうであつた。『南無阿彌陀佛』だの、『岡

東五郎』だのは『色懺悔』に續いでの作だつたやうに記憶して居る。

私は紅葉君と始めて相知るに至つた頃は、谷中の初音町に住んで居たが、谷中から飯田町まで大分の道程を、何時も私は歩いて往復して、其都度よく長座して、夜の十二時迄も話して居たものだが、其頃も紅葉君の書齋で、他の人達とは殆んど逢つたことがないと云つても可い。近所に居た思案君にさへ紅葉君の書齋で逢つた事がなかつた。その他では、香夢樓みどり――法學博士の松野貞一郎君の弟で、病弱の人であつた――が一度か二度來合せて、私は紹介されたことを記憶して居る。私が飯田町に移つて來てからは、一層近く紅葉君の書齋を訪れさうなものであるのに、近くて何時でも逢へると云ふところからか、以前のやうに出掛けて行かなかつたやうに思ふ。察するに、書齋が狹い上に、老人夫婦の人達への遠慮もあつたらうし、かた〳〵社の同人が其處に集らなかつたと云ふやうな事ではなかつたらうか。谷中に居た時分の私は、そんな事とは知らないから、何の頓着もなく坐り込んで、夜更まで邪魔をしたのだつた。此老人夫婦は、紅葉君が牛込の北町へ移り、また横寺町へ轉じた時も一緒で、紅葉君が死後なほ殘つて居たのではなからうかと思ふのである。

石橋思案君の家は飯田町三丁目の、富士見小學校から少し坂を上つた左側に在つて、今は曉星學校の構内に取入れられて、其跡も止めなくなつて了つた。庭内に稻荷の祠があつて、初午には地口行燈なぞが出來て、紅葉君始め太鼓をたゝいたりして興がつたものだ。そんな時など、飯時になると、飯だけは石橋家から寄附してもらつて、鷄肉なり牛肉なりを買ふには、一同平等に醵金したものであつた。硯友社同人間では、たとへば蕎麥屋へ行つたとしても、いざ勘定となると、A君は何を食べたから幾許、B君は何が二杯だから若干と、多くの場合其場ですぐ取立てたものだ。紅葉君などよく其斡旋をしたものだが、これは英國の何大學とやらの學生が斯うださうで、至極良法だと云ふので、硯友社でもそれに倣ふことにしたのだと聞いて居た。此法に從ふと、何某におごられて居るからと云ふやうな、そんなこだはりが殘らないで可いのである。私なぞ最初はちよいと變な氣がしたが、馴れて見ると、後がさば〳〵と快い心地だつた。紅葉君は師弟の間にも、特別の場合でない以上、のちのちまでも此法に依つて居たのではなかつたらうか。

硯友社は會員組織で、『我樂多文庫』を發刊して居たらしい

が、私が飯田町へ移つて行つた頃は、會員も大分減じて居たやうで、雜誌の賣行など餘り面白くなかつたらしかつた。『我樂多文庫』を『文庫』と改題してからも、雜誌は別して振はないで、何時とはなしに廢刊して了つたやうである。その代りと云ふ譯ではないが、紅葉君の監輯とも云ふべき『新著百種』が大分景氣が好かつた。『新著百種』は當時神田の今川橋に在つた吉岡書店の發行で、此時既に第六編の『殘菊』まで世に出て居た。『殘菊』は私の作だが、今の人達の參考の爲めに、第一編以下五編までの作者名と標題とを、此に擧げておきたい。第一編は饗庭篁村作『掘出しもの』第二編尾崎紅葉作『二人比丘尼色懺悔』第三編石橋思案作『乙女心』第四編は巖谷漣山人作だと思ふが、私は其標題が思ひ出せない、或は漣山人の作が第三編で、思案外史のが第四編だつかも知れないのである。第五編が幸田露伴作『風流佛』で、中にも『色懺悔』『風流佛』など世評が高かつた。併し、百種までは遠い希望で、十種に及ばずして廢刊するに到つたのは殘念であつた。

此吉岡書店は理學士の吉岡哲太郎君の經營で、さすがに尋常の書肆とは違つて、文學の爲めに貢献するところが尠くなかつた。吉岡君は其後農商務省の水産局に入り、水産界の爲めにも大なる効蹟を擧げたやうに聞いて居たが、先年物故したのは誠に惜むべしである。

吉岡君は私の爲めにも『小文學』なる小雜誌を發刊する事にした。當時尚ほ文名高からず、居ながらにして作物の賣れんことを待つなどとは、夢にさへ見ることの出來なかつた私は、小人數ながらも一家を支へて行かなければならず、それがなかなかの苦痛であつた。吉岡君は私の其苦境に同情して、此『小文學』の編輯を私に托したのだつた。此事に就いては、紅葉君が間に居て大いに斡旋してくれたことを、こゝに書添へなければならない。『小文學』は十頁に足らざる小雜誌で、文學に關する何物をも掲載するのだつたが、原稿がなか〳〵集らなかつた。露伴君からも原稿を貰つたやうに記憶して居るが、豫定の發展も出來ないで、八號か九號かで廢刊の止むなきに到つた。

私が始めて露伴君に逢つたのも、此飯田町の家であつた。或日突然訪ねてくれた二人の青年達があつた。それが露伴君と淡島寒月君であつた。私は露伴君の名は『都の花』に掲げられた『露團々』や、『新著百種』の『風流佛』なぞで知つて居た。尤も、此時より前々の年、私が東京繪入新聞に處女作を發表した頃、日本銀行の行員だつた谷津某君が、何かの話の度に、僕の友人にカウダと云ふ男があります、まだ著作を公にはして居

いが、なか／＼本も澤山讀んでるし、文章も亦上手ですよと云つたのを、私は忘れないで居たので、始めて幸田露伴と云ふ名を見た時、日外谷津君が話したカウダと云ふのは、此露伴君の事であらうと思つた。併し、其事を露伴君にも谷津君にも質す機がなくて、今日まで打過ぎて了つた。私も來訪の答禮と云ふ意味でもなく、或は『小文學』の原稿を賴むためにであつたか、神田五軒町――或は末廣町かも知れぬが――の家に露伴君を訪うた事があつた。御成街道に面した店は紙店だつたが、私が尋ねて行つたのは、妻戀阪から御成街道へ行く通りから、右へ狹い横町をは入つて、それからまた家と家との間をは入つて、そこをまた曲つてと云ふやうな込入つた路を通つて、其通用口の格子戸前に達したのであつた。私が露伴君と話して居たところへ、中學――高等學校のだつたか――の學生服を着た少年がは入つて來て、唯今と云つて辭儀をしたのが、令弟の成友君だつた。間もなく、十四五の少女らしい、それも一人ではない笑聲が突然起つて、格子戸の入口を爭ひでもしてるやうな、けた〻ましい物音をさせたが、直ぐひつそり鎭まつて了つた。私は其時は氣がつかなかつたが、後に誰からか露伴君には、音樂に堪能な令妹達があることを聞いた。それだと、あの笑聲の主である少女達が、延子、幸子の兩女史だつたのであらう。

これも其頃聞いた話だが、或時露伴君が紙店の店番をして居ると、そこに歌人か何か、さう云ふ風の客が來て、短尺だの色紙だの、いろ／＼出さしたりして、小面倒臭い註文を云ふで、露伴君も終に其煩に勝てなくなり、莫迦ッと一喝を喰はせたので、其客は驚いて立去つたさうである。露伴君にありさうな話だが、眞僞は知らない。

寒月君には其時以來面會したことがないやうである。後年私は後藤宙外君と二人、白髮祠後に在つた鳥料理の松壽園に、創作執筆の爲め滯在して居たことがあつた。其頃向島に住む作家――依田學海翁だの、露伴君だのを訪ねた時、學海翁を訪ねた歸途、秋葉のほとりの寒月君の寺を訪うたが、生憎不在で面會を得なかつたのは遺憾であつた。

大矢鐵箏將軍と云ふ素張しい名の靑年が訪ねて來た事があつた。鐵箏將軍と云ふ名は、新聞か雜誌かで見たことがあるので、此素張らしい名の主は、どんな男かと思ひながら逢つて見た。二十四五歲の色の白い靑年で、體軀の瘦高く、髮の毛も濃くてつや／＼して居た。將軍の云ふ所に依ると、武州所澤の出生で、機業で高名だつた所澤の藤吉の子だとか云ふことであつた。所澤の藤吉と云ふ高名な機業者があつたことは、私も曾つ

て聞いて居たので、そこに多少の好奇心が起らないでもなかつた。將軍尙ほ云ふ、自分も所澤の藤吉の家に生れたものだから、藤吉同樣天下に名を揚げたい。しかし、殘念なことには、自分の胸部には難治の病が巢喰つて居るので、餘命いくばくもないことを思ふと、どうも心が苛立つて凝乎として居られない。鐵筆將軍と名を撰んだのも、一つは他の注意を惹く爲めであつたのだと。そんなに名を揚げたいものなのかな。何もそんなにやきもきしないでもよさゝうなものだと、私は多少反感を有たないでもなかつたが、併し此若さで難治の病患に惱んで居るのを思ふと、そゞろ同情の念を發さないでもなかつた。將軍は何の爲めに私を訪ねて來たのか、唯これだけのことを訴へたゞけで辭し去つた。その後三十何年、たへて鐵筆將軍の名を聞かないが、或は其後幾許もなく病の爲めに斃れたやうな事ではなからうか。

渡部乙羽君も其頃始めて逢つた青年である。思案君の處へ乙羽と云ふ青年が來たさうだ。それは思案君の門下生であつたんださうだと云ふやうな事を誰からか聞いたやうだつたが、まだ其人に逢つたことがなかつた。乙羽君が私の處へ尋ねて來たので逢つて見ると、色の白い好青年で、柔和ではあるがはき〱して居て、しかも質朴らしく見受られた。乙羽君は百枚或はそれ以上もありさうな原稿を二た綴持つて來て、どうか見てもらひたいと云ふことであつた。私はそれを預つておいて讀んで見ると、慷慨激越の調で佳人才子の事を述べた小說で、東海散士の『佳人の奇遇』に倣つたものであつた。此乙羽君の原稿は何と云ふ標題であつたか、其後その原稿は如何なつたか、私は聞くところがなかつたが、私と乙羽君は爾來隨分親しく交つたものであつた。其頃乙羽君は東陽堂の編輯所に居た。私は當時日本橋の葺屋町に在つた東陽堂に、兩三度乙羽君を訪ねたことがあつた。乙羽君は自分の客を迎へる專有の室もないといふ境遇だつた。乙羽君の打明話に依ると、東陽堂に來た客の履物をも直さねばならないと云ふことであつた。私が或日訪ねると、風邪で寢て居ると云ふので、其室へ行つて見ると、乙羽君は三疊敷の室に薄い布團にくるまつて居た。私はこれは酷いと思つたので、其時私は既に中央新聞社に入つて居たので、大岡社長に請うて、乙羽君を社會部の一員として迎へることにした。これで僕も世の中へ出られましたと云つて、乙羽君も大いに喜んで居た。其後乙羽君は大橋家の人となつて、大橋乙羽となつたのである。東陽堂には微々たる時の寺崎廣業君も居た。私は乙羽君の紹介で、廣業君とも相知つたのであつた。

或時紅葉君が私へ、野口一太郎と云ふ人を知つて居るかどうかねと問うた。その人は知つて居る。私が番町小學校の生徒だつたころ、野口君も同じ生徒だつた。それに住んで居た町も、同じ中六番町だつたので、よく一緒に遊んだことがあつた。其野口君を君も知つてるのかと聞返すと、時々遊びに來る。先日來た時、君の事を話して、久振で逢ひたいものだと云つて居たと、紅葉君が云つた。野口君は今何をしてるのかと私が聞くと、君は知らないのか、寧齋と號して、青年詩人として大分名を出してるやうだと云ふ紅葉君の答だ。野口君に逢はざること十數年である。青年詩人として名を馳せ居るとは、とにかく祝すべきことだ。私も好い機會があつたら訪ねたいと思つてゐると、私が飯田町に移つて行つて、まだ幾日も經たないころ、突然野口君が訪ねてくれた。逢つて見ると、少年の時の野口君が、唯そのまゝ大きくなつたゞけで、容姿なり談話の調子なり大して變つて居なかつた。話が小學校時代の事から、當時の友人の事に移ると、野口君はよく友人の消息に通じて居て、誰は何をして居るとか、何處に住んで居るとか、または病死したとか、そんな事を宛ら指すやうに話してくれた。文學談になると、隨分鋭い批評なぞをした。尤も、野口君は謫天情仙の名で、よく創作の批評を公けにしたものだつた。

野口君は其頃本郷元町の下宿屋に居た。其室は十疊だつたか八疊だつたか確と覺えないが、とにかくがらんとした感じだつた。落合東郭と云ふ青年詩人らしい人が來合せて居た。令弟の島君にも其處で逢つた。島君は寄宿舍から用があつて來たと云つた樣子だつた。令妹の素英子さんも其室に居て、專ら長兄寧齋君の給仕に任じて居たやうに見受けられた。島君も素英子さんも兄さんとは異つて、美しい少年少女だつた。大きい素英子さんの眼は、いかにも無邪氣で、夢でも見てるやうな明眸は人を魅するに充分であつた。私が訪ねたのは夜だつたが、私は其歸途砲兵工廠の前にさし掛つた時、不圖野口君兄弟の事が胸に浮んだ。番町に居た頃、野口君の父君が長く病に苦しんで居たことを知つて居たので、兄さん達はとにかく、あの大きくて無邪氣な眼を有つた素英子さんが、今後の長い生先に、いかなる徑路を以つて進むであらうかと云ふことを考へると、私は覺えず胸の迫るのを感じた。家に歸つて、亡妻に其事を話すと、まアそんな可愛い娘さんがと、同情の涙を睫毛に宿して居るのだつた。私は野口君が紀尾井町に居た頃まで訪ねた事があつたが、其後はどうと云ふこととなしに何時か疎遠になつて了つたのであつた。

内田不知庵君も其頃は『女學雜誌』などで、よく創作其他の批評をしたものだつた。不知庵君もまだ二十一二の青年だつたが、何時も着流しで、雜誌なぞ包んであるらしい風呂敷包を、多くの場合挾んで居た。色の白い、どちらかと云へば小作りで、其頃はまだ肥えて居る方ではなかつた。多辯と云ふではないが、よく談ずる方で、其顔を見て居ると、何か斯う一杯塞つて居さうな感じがするのだつた。内田君の外に、石橋忍月君もよく創作の批評をしたものだが、今は長崎あたりで新聞を經營してると云ふことである。

今日では新進作家と云はれてる人達でも、服裝には大いに心を用ひて、大島お召なぞを體に纏うてるさうだが、其頃の私達の服裝は質素なものであつた。大島は金持の道樂者が着るもの、お召は女か役者の着るものぐらゐに思つて居たので、平生は双子か木綿絣のやうなものを用ゐたものだ。私は飯田町に移つた頃、眞岡木綿を染めて黒紋付にして着て居たのを、紅葉君も思案君もこれは妙だと云つて、二人とも直ぐ新調した。思案君はそれを著物にも拵へたものだ。或日私の家の窓の外から、おい廣津君と呼び掛けたものがあつた。その音聲で思案君とは知つたが、窓からさし覗くと、今更ながら驚かないでは居られなかつた。例の眞岡の黒紋付の著物に、白博多の挾帶、態と羽織なしの、頭は黒縮緬の宗十郎頭巾で包んで居た。傍には、死んだ觀世清廉が、まだ歸參がかなはなかつた頃で、赤い襦袢の袖をちらつかせながら、踊出しでもしさうな恰好だ。思案君に朱鞘の大小を挿させて、清廉を俏形にして立廻でもさせたら、二人とも極めて得意だつたに違ひなかつた。

紅葉君も思案君も服裝は質素の方だつた。水蔭君は寧ろ蕃からに近い方で、そんな事には些も頓着しないやうだつた。小波君は何時でも自分に似合つた服裝をして居た。自分の好みか家の人の見立が好いのか、とにかくぴたりと其人に合つてるやうに見受けられた。川上眉山人も何時でもきちんとした服裝をして居たが、此人のは好みがけば／＼しいと云ふほどではないが、色は銀鼠系統の上光のするものを、後々までも好んで居たやうだつた。

硯友社同人に新體詩人の丸岡九華君が居た。新體詩人としては最も古い方で、今日まで詩作を續けて居たら、相應の位地を占めて居たことだらうと思ふ。當時高等商業學校の學生で、卒業と共に神戸の商業學校に教鞭を取ることゝなつたりして、漸

次に文壇から離れて行つたのは遺憾であつた。其頃九華君が結婚することになつた。惡戯好きの惡太郎共が集つてるのだ、どうして見逃がさう、さア大いに祝すべしとあつて、誰の提案だつたか、比翼枕と云ふ物を贈ることになつた。當時の我々だ、材料を錦の縮緬のと奢るわけにはいかない、友禪染のメリンスと云ふことにして、枕に仕上げたのは私の家であつたが、中に入れる蕎麥殼を、まア二斗もあつたらばと、その積で用意しておいたのが、さて入れて見ると、は入るは〳〵、また一斗、また五升と買足して、結局四斗入の大枕が出來上つたのだ。それを奉書で包み、大水引を掛け、紅葉君が達筆に『比翼御枕』と書いたのを、武内桂舟君の門下生二人に擔がせ、其の二人にチヨン髷の大森鬘を被らせ、紅葉君と桂舟君――或は思案君?――が上下をつけ、弓張提灯を持つて、其左右に附添つたものだ。他の一同は其後に從いて、富坂下の川勝前にあつた九華君の宅へ繰込み、其大枕を玄關へ押上げ、萬歳を三唱して、九華君が呆氣にとられてる間に、さツと一同引上げて來て了つたことがあつた。

飯田町へ移つてから何程過ぎたころだつたか、私は何かの用で土手下を小石川の方へ行くと、私の家から四軒目の、家は古いが見付の好い格子戸の上に、二宮と云ふ標札の出て居るのを見た。私ははてなと思つた。二宮と云ふ姓は世間にいくらもあるが、二宮と書いた其筆蹟に見覺があつたからだ。間違つたら詫びるまでだと、格子戸に立寄つて案內を乞ふと、玄關の障子を開けて婦人が顏を出した。私は婦人の顏を見ると、やはりさうだつたと思つた時、婦人も私の顏を見ると、まア山本さんと吃驚したやうな顏をした。『あなた山本さんが……。』奧の方から『山本さんだと……はアてな。』『ほら、あの山本さんですよ。』『はアてな。』と、二宮君が私が君と一緒に遊んだ頃、さう云ふ場所で用ひた山本と云ふ姓を忘れたのだ。婦人はまた私を山本だと覺えて居て、私の本姓を知らなかつたかも知れなかつた。

私は大きな聲で云つた、『僕だよ、廣津だよ。』『おゝ廣津君か。これは珍らしい。さア上りたまへ。』と、何時も持扱つてるやうな肥滿した體を運んで二宮君が出て來た。私は自分も近所に移つて來て居ることを話して、一別以來のお互の動靜などに付いて話したりした。

此二宮君夫婦は、私の『今戸心中』の中の人物のモデルで、情人西宮と其相方の娼妓小萬がそれだ。今は其年季が明けて、情人と同棲の快樂に醉うて居ると云ふ譯なのだ。二宮君は醫師の家に生れ、[illegible]と云ふ書肆の養子となつて居た頃、飯田[illegible]

井小舟の二翁に關して、『一の谷嫩軍記』の石屋と熊谷陣屋、『忠臣講釋』の喜内住家などの評釋を乞ひ、それを『新評戯曲十種』の第一卷第二卷として出版したことがあつた。その後、小野梓君が經營して居た東洋館書店の支配人になつて居たこともあつた。近年は餘り振はないで、横濱の兄の下に燻つて居るやうに聞いて居たのに、私の新居と目と鼻の間に、其愛人と同棲して居やうとは實に思掛けない奇遇であつた。そして、頃日來讀賣新聞社に入り、其事務の方にたづさはつて居ると云ふ事だつた。

『どうだらう、紅葉君が讀賣新聞社に入社してくれなからうかね、高田――早苗氏――がひどく惚込んでるんだが……君から話して貰へなからうか。』と、二宮君から私に相談があつた。私は直ぐ紅葉君に取次いだ。紅葉君は入社しても可いと云ふ。そこで、俸給の事に話を進めると、双方の希望がうまく折合はないのだ。紅葉君は三十圓ほしいと云ふ、讀賣では二十五圓でと云ふ。其差僅か五圓の事だが、それがなか／＼折合はない。さうかうしてゐる中に、紅葉君と二宮君と直接談判が開かれたものか、いつの間にか紅葉君が入社して了つて居た。彼語らず我問はずで、その事に就いては、二宮君からも後々まで聞いたことがなかつた。

硯友社同人が芝居をしたことがあつた。今日なら何でもないのだが、國會が始めて開けやうと云ふ年だ、文人が役者の眞似をするなぞとの非難がないでもなかつた。併し、そんな事に頓着して居る連中ではないのだ。脚本は水蔭君が既に脱稿して居た大塔宮の十津川落と、私の亡妻の生家の祖先筑後柳川の城主蒲池左衛門尉鎭漣が、姉婿龍造寺隆信の爲めに誘殺され、其子宗虎丸が復讐すると云ふ譚を、其頃から既に戯曲の才の譽が高かつた水蔭君が新に脚色して、此二つを上演することにした。同人總掛りとは云ふものゝ、中にも畫家の桂舟君は勿論、紅葉君漣君水蔭君など繪心のある人達は、背景や衣裳の製作に多忙を極めたものだ。稽古場は石橋家の根岸の別莊に置かれ、御師匠番の役者を迎へて、夜遲くまで稽古に熱中し、熱中の餘り、宗虎丸復讐の場に登場する、猿廻の踊子の一人某君は、稽古場を出てからも、さす手ひく手の練修に、足の踏所（ふみど）を誤り、庭前の池に陥り悲鳴をあげたと云ふ騷ぎもあつた。

舞臺は小石川水道町の佐藤家の庭前に設けられた。同家の令息の黄鶴樓君が硯友社同人だつた縁故からだ。いよ／＼當日になると、社中の知己家族親族等で見物席は割れるやうな大入だつた。來賓の中には、依田學海翁内田不知庵君森槐南君の顏も見えた。重なる役割をあげると、大塔宮が川上眉山、宮の従士片岡

八郎が石橋思案、他の二從士が岡田虛心と高階某、蒲池鎭漣が江見水蔭、其子宗虎丸が巖谷漣山人、龍造寺隆信が多田漁山人、丸岡九華君が謠曲に堪能なところから、能の場で舞ひながら鎭漣に切掛けると云ふ役、紅葉君は村の莊屋の役を買つて出た。其外に五人男のつらねがあつた。つらねは水蔭君の作で、其顏觸は思案、眉山、漣山、水蔭、紅葉の五君だツた。同人中舞臺に上らなかつたのは、桂舟君と私の二人だけだつた。

登場者は何れも大出來だつたと云つて可からう。勇士であるところの思案君の片岡八郎が、二度目の亡靈になつての出に、花道に躊躇して、先代左團次の假聲で、宮に復命の臺辭を述べて居る時、お尻の所でパツと焰硝火が燃上ると、あツつツつと悲鳴を擧げて、手で火の粉を拂ひ除けたなどは、たとへ亡靈であり役者であらうとも、火が熱いから熱いと云つたところで、それが藝の縮尻とは云へないはずだ。虛心君の宮の從士が、敵を防いで殺陣の際、刀の身が拔けたか折れたかして、舞臺の外へ飛んだので、虛心君きまり惡るがつて、樂屋へ逃込んで了つた。刀の身が飛んだのは小道具の責任であるべきだが、其不注意を咎めないで、自ら羞ぢて樂屋へ逃げ込むとは、謙讓の美德を具へたりとも申すべきか。水蔭君の蒲池鎭漣が丸華君の龍造寺の侍に一と太刀をびせられ、刀の柄に手を掛けながら落入る仕種、背羽屋張で眞に迫り、苦しみながら頭でのの字を書き書き、つい鬘が半拔になる、そこが丁度幕切で、チヨン〳〵と幕を引いて了つた。これなぞも演出熱中の顯現だと、見物一同異常の感に打たれた次第であツた。多田漁山君の龍造寺隆信、復讐の場で、漣君の宗虎丸と立廻つて、大太刀を肩に擔いで、兩足をうんと踏張り、大見得を切つた時、なぜか見物が笑つたと云ふことが、打出後の詮議となつた。いろ〳〵研究の末、漁山君がいや俺は確かに猿股を穿いて居たよと云ふ辯明で、はゝアさうであつたかと解つたわけだが、これなぞは村芝居に有勝ちの餘興とでも云ふべきであらう。さて最後にひけへ、しはと、ちよいと五人男のつらねの臺辭を借用する。その五人男の最後に控へた紅葉君が、五人男がづらりと舞臺に竝んだ時、不圖自分の足を見ると、脫いで來るはずの紺足袋を穿いて居た。はツと思つたが、さすがに一座の統領、周章てず騷がず、徐ろに足袋を脫いで、ぽんと背後へ拋つたものだ。いよ太きいぞと、これにさへ見物が湧くと云ふ人氣だつた。これ等は數の感服話でもなかつたら、それこそ本物の役者はだしだと云ふ評判だと云ふことを聞いた。尤もこれは、登場者の家族から家族へ傳はつた評判だと云ふことを斷つておきたい。

其頃江戸新聞を大岡育造氏が引受け、東京中新聞――今の中央新聞――と改題して發行することになつた。其新聞社には入つて小説を擔當して見てはどうかと云ふことを、紅葉君から私に話があつた。私は雇人となつて働くことは、自分に不適任だと云ふことは、既に博文館や讀賣新聞社で經驗して居る。其廉で斷らうとすると、毎日出勤するのではない、小説だけ書けばよいのだと紅葉君が云ふ。それならばと、私が入社を承諾したので、紅葉君から先方へ返事をして遣つた。そこで、大岡社長と會見することになり、上野の松源だッたか辨天境内の長酡亭だッたかへ、私は紅葉君に伴はれて行くと、大岡社長と令弟力君、外に當時尙ほ大學生だッた岡崎正也君と森田某君とが列席した。私は人々の談話の様子で、力君から先づ岡崎君等へ依賴し、岡崎君等から紅葉君へ相談し、紅葉君が私を推薦したことを知つた。會見は無事に濟んで、私は東京中新聞附の作家となつたのであつた。

私が最初に東京中新聞に掲げたのは、『落椿』と題する創作だつた。『落椿』は私が處女作『女子參政蜃中樓』を發表してから三回目に書いた小説である。『蜃中樓』の次が『殘菊』、其次が『落椿』と云ふ順である。『大和錦』に載せた『二た面』だの、『文庫』に書いたのだの、吉岡書店から出版した『花の命』だのは、いづれも數枚又は數回の半端物だ。『落椿』は私には記念すべき作だが、其切拔を見失つて、今は讀返す由もないのを殘惜しいと思ふ。

私は毎日出社する約束でないから、一週に一回か二回出掛けて行くことにして居た。然るに、大岡社長が殆んど毎日のやうに私の家に來訪して、何かと新聞の紙面に就いての相談である。大岡社長は辯護事務所を三十間堀に、自宅を駒込の千駄木林町に置いて居た。駒込から銀座四丁目の新聞社へ行くのを、態々迂回して飯田町に私を訪ふのであつた。私は社長が多忙な人であるだけに、それが氣の毒だつたので、駒込近くに家を探すことにした。幸ひ根津權現社の前に家を見付けたので、直ぐ其處へ移ることにした。私は、斯うして明治二十二年九月から二十三年の二月か三月まで六七ケ月間住馴れた飯田町を去つたのであつた。

私は紅葉君とは此飯田町に居たころが、最も親しみを感じて居たやうに思ふ。紅葉君はずん〳〵成長して行つたが、私達も多少は成長して行つた。そして、感情が複雑になつて行くと云ふことは、どうも避けがたいことではないだらうか。私は時々そんな事を思つて、飯田町時代が懷しくなるのである。

（完）

リッキ・チッキ・テビー

小島政二郎

一

堺利彦氏の譯で、ジャック・ロンドンの「野性の呼聲」を讀んだら、急に犬が飼ひたくなつた。御承知でもあらうが、この小説はバックと云ふ犬が主人公で、手に汗を握るやうな場面や、闘犬の物凄さに頬の肉の引き吊るやうな場面や、人間の愛と犬の愛とがピツタリ一つに抱き合ふ涙ぐましい場面や、別れの悲しい場面やを經て、家犬が遂に遠い何千年も昔の祖先の呼び聲に誘はれて、大原野を走る狼の群れに入る徑路が語られてゐる。眼前に展開される景色は、アラスカの大雪原である。事件は飢ゑと寒さとの北極的な地方に於る原始的生死の闘爭である。それを縦に貫くものは、バックの勇猛な生活力と正義慾と慈愛に答へる愛とである。この小説を讀めば、誰だつて犬位愛すべき動物はゐまいと考へずにはゐられないだらう。

私は無上に犬が飼ひたくなつた。「流行」とか「虚榮市」とか云ふ種類の繪雜誌を見ると、淑女が長い鎖の尖に愛犬を繋いでふくよかにスラリと立つた好もしい姿に出逢ふことが屢々ある。女房のことを云つて恐れ入るが、彼女は大の臆病者で、そこを上下すれば近路の御院殿も（鏡花小史の小説に出づ。それだけで説明は入るまい）その名に恐れて、晝間でも一人歩きが出來ない。犬——それも大きな犬が一緒なら、夕方でも通つて見せると云ふので、さうなれば、用事が捗つて便利この上ない。殊には、身の何倍もある大犬を、衣にも堪へぬ婦女子が擒縦自在にしてゐる圖は、倘武可憐の趣があつて又捨て難い。さう云ふ聯想もあつて、いよ／＼犬が欲しくなつた。

が、正直の話、欲しいからと云つて、買ひ求めるだけの餘裕がない。さう云ふ時には、無闇に人の犬が目に附くものだ。水上瀧太郎氏のところへ遊びに行くと、ウイスキーと云ふ名のコマ犬が、美しい奥さんの云ひなりになつて、食事をいたゞいてゐた。南部修太郎氏のところへ行つたら、庭で眞黒な土佐ブルが暴

れてゐるのを、主人公が懐手をして眺めてゐた。さう云ふ景色に接する度に、羨ましくつてたまらなかつた。

ところで、父の友人に小野さんと云ふのがあつた。或時使ひに行つて、何の氣もなく門をあけると、いきなり吠えつかれた。見ると、いゝ犬だ。スタッグハウンドと云つて、鹿狩の犬だと云ふ。大きさも、後足で立つと、伸ばした前足が私の乳のあたりまで來る。立つた姿が毅然としてゐて、歩くと悠然たる趣を呈する。顏は小さく、怜悧に引き締まつてゐて、背中の線はいゝ灣曲を見せてゐる。而も、私を狂喜させたことは、牝であつた。

「かう云ふ獵犬は、子を生ませないんですか。」私は遠廻しに聞いて見た。

「いゝえ、そんなことはありません。去年も五匹生まれて、方方で呉れ〳〵と云ふもんですから、みんな上げてしまひました。」早稻田大學へ行つてゐる息子が答へた。

私は内心喜びながら

「今度はいつが産期です。」

「今遊牝が來てゐますから、まあ夏ですね。二三日うちに、横濱からカケ犬が來る筈になつてゐるんですけど。」

「もう生れる子はみんな約束済みですか。」

「いゝえ、三匹だけは申込みがありますけど。お欲しいんですか。」

私は少し赤くなつた。

「えゝ、飼つて見たいと思つて。若し三匹以上生まれたら一匹下さいませんか、大事にしますから。」

「牡ですか、牝ですか。」

「我儘を云つてよければ、牝が欲しいんですが。」

「これは獵犬ですから、牝の貰ひ手の方が多いんですよ。――よござんす、承知しました。」

息子の最後の返事を聞いた時、私はどんなに喜んだらう。

それから私達夫婦は、五日に一遍六日に一遍位の割合で、よくジョリーの様子を見に行つた。その度に、

「確に腹へはひりました。」とか、「犬は三月胎みですから、遲くも八月十日前後でせう。」とか聞いては、樂しみにして歸つて來た。

が、八月へはひつてからは、原稿やら講演やらで忙しかつたので、紛れるともなく犬のことを忘れてゐた。すると、或朝、「お早うございます。」と馴れた訪ひの聲が聞えて、小野さんが懐から玩具のやうな白犬の首を覗かせて玄關に立つてゐた。兩方の耳が斑のある黄色で、後は眞白だ。

「思つたよりよくセッターに抜けました。」父親がセッターだつ

たことを私は初めて知つた。成程、さう云へば、見馴れたジョリーと違つて、こんな五寸に滿たぬ小犬の癖に、先づ毛が房々と長く縮れてゐる。疊の上に小野さんが置くと、爪を立ててカサカサと歩いた。

教へられた通りに箱を買つて、酒屋から藁を貰つて敷いてやつて、先づ當分の住みかとしたが、生まれてから一週間しかたたぬと聞くと、夜、中庭に出して置くに忍びないで、二階の廊下へ入れてやつた。見てゐると、箱を芋蟲のやうに這ひ上つて、コロリと外側へ轉り落ちる。と、ヨチ〳〵と歩き出して、廊下中を嗅ぎ廻る。牛乳をやると、音を立てて一度に五勺位づつ飲む。糞は箱から一々出て、外にするやうに仕付けなければイケないと云はれたので、廊下半分へ油紙を敷くのを忘れなかつた。

クン〴〵云ふ聲に目がさめた。見ると、油紙が二三ヶ所濡れて、曉の緣側に鈍く光つてゐた。

「よし〳〵お行儀がいゝな。」

障子をあけてやると、モグ〳〵蒲團の上へ這ひ上つて來た。可愛くなつて、私はその儘起きて、懷に入れて夜明けの町へ牛乳を買ひに出た。が、餘程早いと見えて、牧場の方で牛の啼き聲は聞えても、まだ門は締まつてゐた。私は懷で動き廻る小犬を[illegible]打しながら、小一時間も待つてゐた。よくてんな根氣があると我ながら感心した。私には人間の赤坊よりも可愛く思はれた。妻は私よりももつと可愛がつた。しかし、私は誰からも手を出して貰ひたくなかつた。

「ね、なんて名を附けるおつもり?」

佐藤春夫氏の愛犬が、フラテと云ふ名であること、さうしてそれが「わが同胞(はらから)」と云ふ意味を持つた言葉であること、などを知つて、私は佐藤氏が實にいゝ命名をされたことに感心してゐた。ところでその時、ふとキップリングの動物小說を集めた「叢林物語(ジャングル・ブック)」を思ひ出した。あの中にモーグリと云ふ、狼に育てられた少年のジャングルに於る生活を描いた小說がある。狼族の首領は確かアケラと云ふ名だつた。私はこの老いた狼が好きだつた。で、その名を附けようと思つたが、口の中で呼んで見ると、呼びにくい。と、同じ本の中に、鼬(いたち)を主人公にした「リッキ・チッキ・テビー」と云ふ小說があつた。リッキチッキテビーと云ふのは、鼬の啼き聲なのである。この鼬がまた非常に愛すべき英雄なのだ。第一、音の調子がいゝ。呼びよくもある。

「リツキにしようと思ふよ。」

すると、妻は忽ち贊成して

「リツキや。お前本物のリツキのやうに、家(うち)のペビちやんを守つておくれよ。」と、小犬の頭を撫でながら云つた。リツキチツ

キテビーは、毒蛇(コブラ)の害からテッディーと云ふ少年の命を完全に守りおほすのである。

やがて小犬はお粥を食べるやうになり、こま切れを喜ぶやうになるにつれて、メキ／＼大きくなつて行つた。小野さんからの注意に從つて、一日置きに、ソップを取つた後の鷄の骨を金槌で細かに叩いて食べさせた。見る／＼うちに成長して行つた。耳は垂れさがり、毛は長く伸び、尻尾は水平に房々として來た。毎朝必ず散歩に連れて出る度に、芝生の上で巫山戯廻つた。

ところが、三月ばかり成長した時、リツキに食慾が全くなくなつた。何をやつても振り向きもしない。いや、何か前に置いてやると、鼻を背向けて行つてしまふ。それもトボ／＼と肩をすぼめるやうにして……。それが二三日續くと、體はゲツソリ瘦せて骨が數へられる位になつたばかりでなく、目脂(めやに)が出て、鼻はカサ／＼に乾き、毛に艶と云ふものがなくなつてしまつた。その上、どうしたのか、後足の自由を失つたと見えて、一足歩いてはヒヨロ／＼、二足歩いてはヒヨロ／＼した。

私達は驚いて小野さんに來て貰つた。すると、一目見るより「あ、これはディステンパーです。困つたな。」と暗い顔をして、犬小屋の前に跪んでしまつた。ディステンパーと聞くと、私は狼狽した。ディステンパーでは、澤木四方吉氏の家のゴスも死んだし、水上瀧太郎氏のところの先代ウイスキーもヂンも命を殞した。

「せめて半年たつてからだと。病氣と戰ふ體力が出來てゐますけどね、こんな小さいうちぢや、危險ですね。」

「病院へ入れても駄目でせうか。」

「この病氣には療法がないんですから、無駄ですよ。第一、病院の冷たい檻の中が一番毒でせう。」

翌日また見舞に來てくれた時には、更に憔悴してゐた。

「こりやとても十中の八九まで駄目でせうよ。――しかし、若し死んでも、ポインターでよければ貰つて來る心當りがありますから。」

歸る時には、墓場の所在地まで云つて行つてくれた。

一人殘されて見てゐると、リツキはそれ程までに衰へ切つてゐるにも拘はらず、大小便の時には必ずフラ／＼と立ち上つて犬小屋から出て來た。その健氣な振舞を見ると、いぢらしさで胸が一杯になつた。

私は何から考へついたのか、妻に炬燵に火を入れるやうに云ひつけた。さうして炬燵蒲團の上に油紙を一杯に敷き詰めて、その上へリツキを抱いて來て載せた。夜は二階の廊下へ連て上つて、瓦斯ストーヴで暖めてやつた。一方砂糖を舐めさせたり、盥

節をかいてやつたりして、少しづつでも養ひを送ることに努めた。からして一週間病氣と爭つた。その結果、或日、リツキは俄然として食慾を催した。この時與へた鷄の骨位營養價値を發揮したものはあるまい。

リツキは命を取り留めた。

この時以來、私達はリツキに對する愛情の頓に加はるのを覺えた。

が、この時の關節炎が素因となつて、リツキは今一歳三ケ月を數へる一人前弱の犬になつてゐながらも二尺の垣を飛び越えるのが自由でない。見てゐて歯痒い位だ。

二

飼主が人並みよりもチヨツピリ利口かも知れない程度に、リツキもそこ等の犬よりはチヨツピリ怜悧かもしれない。が、食物を以つて誘へば、誰の後へでも附いて行きさうな位馬鹿である。後に說くホワイト・ファングが、自分を盗みに來た狆の主人に復讐を敢へてする程とても頼みにはならぬ。バツクが、慈愛に富んだソートンのために、「何か知らんが今一大事をなさねばならぬのだ」と感じた、雪に凍り附いた橇を懸命に引き出す感激に滿ちた場景の如きは、これをリツキに求め得ない。

默つてゐれば、硝子戸を前足であけて座敷へ上り込んで、ノソノソと歩き廻ることをよくする。幾ら叱つて懲らしても、利き目がない。これをホワイト・ファングが——ここで、「ホワイト・ファング」の說明をしよう。これもジヤツク・ロンドンの作を、堺利彦氏が譯してゐるから、大方の諸君は御承知のことと思ふが、「野性の呼聲」とは反對に、これは狼が人に捉へられて、人間の愛によつてその猛惡なる野性を捨てて歸伏する小說で、出來映から云へば、「野性の呼聲」には及ばないが、しかし、心の昂騰するのを覺える作たることは否み得まい。主人公は狼である。北地では、犬が唯一の家畜であつた。すべての外の動物は山野に生活し、それが甚だしく抵抗し難き奴でない限り、皆當然に犬の獲物であつた。都會へ連れて來られた後も、ホワイト・ファングはこの法則を忘れなかつた。で、彼は鷄を喰つた。しかし、主人に叱られて鼻を土にこすられると、一度で「なす勿れ」の意味を悟つた。その後試みに、彼を鷄小舍の中に閉ぢこめて見たところが、彼はすぐに寢轉んで眠つてしまつた。

記述に從ふと、「主人に價値あるものは、ホワイト・ファングもまた尊敬した。主人に親愛なるものは、彼も亦それに懷き、それを大切に保護した」とあつて、前半生の苦い經驗によつて、彼は生涯を通じて子供を憎んだ。しかし、主人の愛によつ

て呼び醒された誠實の精神から、彼は主人の二人の子供達に讓歩し、暫くたつて後には、子供達を好むまでになつた。ところが、リツキは漸く靴を穿いて歩けるやうになつた幼兒を尾の一ツ叩きで顚倒させて顧みないのだつた。

最後にホワイト・フアングは、主人の父なる判事が、五十年刑の宣告を下した囚人によつて復讐的殺害を蒙らうとした時、身を挺してこれに當り逆に嚙み殺した。ところが、リツキは私の留守に暴漢が來た時にすら、哮噬しなかつた。

最近「猛犬は審く、」と云ふ活動を見たら、飼主の戀を成就させるために粉骨碎身の苦楚を舐めてゐる。その忠實と不退轉の勇氣とは、大甘な筋を忘却させる程快かつた。

この間丸善へ行つたら、「北極星」と云ふ題の犬の出て來る小說があつた。口繪に耳の尖つた「審いた猛犬」と同じ種類の犬が描かれてゐる。さうして下に、「羊番の犬」と註が加へられてゐるが、コリーとも違ふらしい。兎に角、動物小說は面白い。キツプリングの「白あざらし」コチツクは、毛もなくユリシスだ。「カーの狩」では、大蛇が廢墟の丘で「空腹のダンス」を踊つて、何千匹と云ふ猿を魅し去つてしまふ。燐光のやうな魅力を冷たく發散する作品だ。加藤高明の風手に似たこのイギリスの作者は、また象の大群中に生活する少年の物語をも草してゐる。バルザツクは「砂漠の情熱」で、豹の洞穴に逃げ込んだ人間に對する、牝豹の不思議に美しい天鵞絨のやうな媚態を官能的に描寫してゐる。また「イギリス猫の憂目」では、猫を借りてイギリス人に對する諷刺を企ててゐる。しかし、動物小說の好きな私も、猫ばかりは御免蒙る。マーク・トウエーンは、野狼が獵犬を瞞しにかけて、さんざん追跡の無駄骨を折らした擧句、うしろを振り返りさまにニヤツと愚弄の笑ひを殘して、繁みの奥に隱れる狡猾敏捷な姿を詳細に寫してゐる。

話は逸れたが、「北極星」も面白いに違ひないと思つて買つて來た。今まで讀んだところまででは、北地から紐育へ犬を賣りに出て來た老漢が、北極星と名づける犬を手放し兼ねてゐる。目次の終りに近く、「復讐」の一章がある。この復讐に、北極星が絡まるのであらう。

かう云ふいろいろの愛すべき犬に接した後で我リツキを顧みると、至つて凡犬で、これ等の小說によつてインスパイヤされた浪漫的感情を現實に於て再現味到させてくれさうもない。

かう云ふと、或はそれは名だたる名犬とばかり比較するから惡いのだと云ふかも知れない。そんなら、地下鐵道專門の掏摸「地下鐵サム」を窮地から救拔した犬を見るがいゝ。通りがかりの野良犬ではないか。

更に南ミネソタで、十六になる少年チャーリーが狩獵の目的で森にはいつて、落葉に埋めてあつた鐵罠にかゝり、振り解かうにも解けず、罠の鎖(クサリ)は大木の幹に錠附けにされてゐることを知つて、大膽にも片足を罠に噛まれた儘落葉の床で一夜を明かさうと決心したが、眞夜中に狼の群れに襲はれた時、忽然チャーリーのうしろに現れた犬を見よ。名をリングと云ふ隣農の一番犬(ばんけん)に過ぎないではないか。

さうなると、正直なもので、何の勳功も樹てず、喧嘩をすればいつも負けるし、獵に連れて行けば水にはいることを嫌ふ犬に對して、一つには畜犬にも馴れて珍らしさの感情も稍薄らいだ頃でもあり、素程毎朝極まつた散歩にも連れて出なくなつた。さう云ふ主人の感情や態度がいつか奥へも響くと見えて、前よりはこま切れの註文の度數が減つた樣子だつた。今まで月二回づつ忘れずに自分で呑ましてゐた蟲くだしも、いつか「明日(あした)十五日だぜ。セメン圓を呑ましてやつておくれ。」と人任せになつて行つた。

おまけに、警察の呼出しもうるさかつた。出頭しろと云ふから行つて見ると、「出頭しろ」と云ふリーフレットの代りに、ぢかに其方を配つてくれたらよささうな謄寫版刷を一葉くれるだけだ。

それやこれやで、リッキは段々臺所犬に左遷されさうな形勢になつて行つた。

三

ところが、或晩、私は徹夜の用意に宵から二階でゴロ寢をしてゐた。すると、突然リッキが激しく吠え立てる聲に意識づいて來た。同時に、「田村さん、田村さん、田村さん。」と恐怖に上ずつた女の連呼(れんこ)が耳朶を打つた。

私はてつきり誰かの不注意で、リッキが中庭から外へ出てゐて、買ひ物歸りの近所の犬嫌ひの奥さんにでも吠えかゝつてゐるのだらうと、寢恍けた頭で考へた。が、起き上つて見ると、聞き覺えのある望月さんのお嬢さんの聲だ。お嬢さんなら犬好きで、リッキも知り合の間柄であつた。

私は判斷が附かないまゝに、急いで大硝窓をガラリ引き明けて下を見卸した。が、地面の上は瀝青(チャン)のやうに眞黒で、咄嗟には何も見えなかつた。しかし、下から悲鳴の聞えて來るのは間違のない事實だつた。

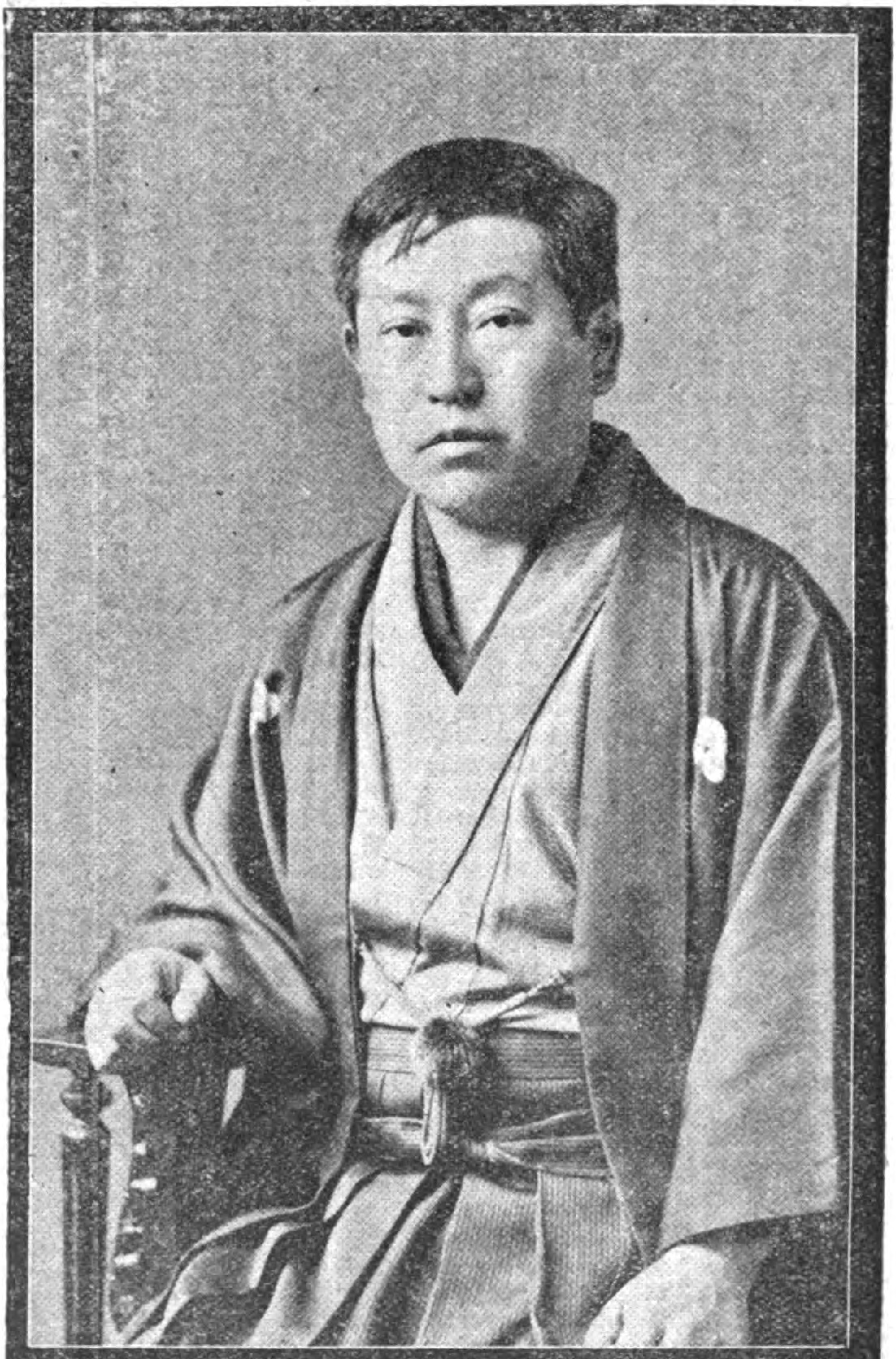
「どうしたんです。今、行きますよ。」

私が聲をかけたのと同時だつた。洋服姿が闇の中へ飛び出して表の方へ逃げて行くのが見えた。私は初めて事の急を知つた。

しかし、もう間に合はなかつた。お嬢さんの傍へ飛び出して行つた時には、お嬢さんの兩親や兄さん達が出て來てゐた。お嬢さんのふつくらとした頬には、爪の跡が血をにじませてゐた。お、間もなく

この事件以來、リッキは近所の寵物になつた。首輪でも拵へ

病氣を出して、今入院してゐる。返つて來たら、てやらう。もう少しいろんなことを仕込んで見よう。



瀧田樗陰追懷記

更に南ミネソタで、十六になる少年チヤーリーが狩獵の目的で森にはいつて、落葉に埋めてあつた鐵畏にかゝり、振り解かうにも解けず、畏の鎖は大木の幹に錠附けにされてゐることを知つて、大膽にも片足を畏に嚙まれた儘落葉の床で一夜を明かさうと決心したが、眞夜中に狼の群れに襲はれた時、忽然チヤーリーのうしろに現れた犬を見よ。名をリングと云ふ隣農の一番犬に過ぎないではないか。

さうなると、正直なもので、何の勳功も樹てず、喧嘩をすればいつも負けるし、獵に連れて行けば水にはいることを嫌ふ犬に對して、一つには番犬にも馴れて珍らしさの感情も稍薄らいだ頃でもあり、案程毎朝極まつた散歩にも連れて出なくなつた。さう云ふ主人の感情や態度がいつか奥へも響くと見えて、前よりはこま切れの註文の度數が減つた様子だつた。今まで月二回づつ忘れずに自分で呑ましてゐた蟲くだしも、いつか「明日十五日だぜ。セメン圓を呑ましてやつておくれ。」と人任せになつて行つた。

おまけに、警察の呼出もうるさかつた。出頭しろと云ふから行つて見ると、「出頭しろ」と云ふリーフレツトの代りに、ぢかに共方を配つてくれたらよささうな謄寫版刷を一葉くれるだけだ。

それやこれやで、リツキは段々臺所犬に左遷されさうな形勢になつて行つた。

三

ところが、或晩、私は徹夜の用意に宵から二階でゴロ寢をしてゐた。すると、突然リツキが激しく吠え立てる聲に意識づいて來た。同時に、「田村さん、田村さん、田村さん。」と恐怖に上ずつた女の連呼が耳朶を打つた。

私はてつきり誰かの不注意で、リツキが中庭から外へ出てゐて、買ひ物歸りの近所の犬嫌ひの奥さんにでも吠えかゝつてゐるのだらうと、寢恍けた頭で考へた。が、起き上つて見ると、聞き覺えのある望月さんのお孃さんの聲だ。お孃さんなら犬好きで、リツキも知り合の間柄であつた。

私は判斷が附かないまゝに、急いで夫婦窓をガラリ引き明けて下を見卸した。が、地面の上は瀝青のやうに眞黒で、咽喉には何も見えなかつた。しかし、下から悲鳴の聞えて來るのは間違のない事實だつた。

「どうしたんです。今、行きますよ。」

私が聲をかけたのと同時だつた。洋服姿が闇の中へ飛び出して表の方へ逃げて行くのが見えた。私は初めて事の急を知つた。しかし、もう間に合はなかつた。お孃さんの傍へ飛び出し行つた時には、お孃さんの兩親や兄さん達が出て來てゐた。孃さんのふつくらとした頰には、爪の跡が血をにじませてゐた。

この事件以來、リツキは近所の寵兒になつた。が、間もなく病氣を出して、今入院してゐる。歸つて來たら、首輪でも替てやらう。もう少しいろんなことを仕込んで見よう。



瀧田樗陰追懐記

追憶集を公にするに際して

中央公論社長　麻田駒之助

本誌主幹故瀧田哲太郎君の追憶のため、斯くも多數の諸名士を煩はし斯くも多數の頁を割くに至たことは、私情に於て私の大に喜ぶ所であり又最も光榮とする所である。併し乍ら天下の公器を以て任ずる我が中央公論の立場から考へると、斯くすることの或は僭越に失せずやを恐れて心中ひそかに不安を感ぜずにも居られない。斯うした計劃は實は一度編輯部から申出でを受けたことはある。特別の形を以てするは格別、わが公論紙上を以てすることだけは遠慮した方が然るべしといふわけで、差控えることにしたのであつた。然るに故人の交りを辱うした諸先輩は固より、我が中央公論に眷顧を傾けらるる多くの諸名士は、ひとり故人に對する追懷の情誼からばかりでなく、故人の事蹟を傳ふる亦一つの公けの義務なりとの立場から、切に公論紙上の重なる部分を割いてあらためて故人を世上に紹介するの必要を說かれて熄まない。好誼拒むべからず敎示亦一理なきに非ずと考へて、遂に玆に追憶集を編輯することに同意した。心中依然として多少安ぜざる所あるが、此點は切に大方の諒恕を乞ふ次第である。

故人の中央公論を通じての業蹟が社會的に何を意味するやは、一に諸名士の敎ふる所に委せる。多年事を共にせる私として是非とも大方の諸君に告げねばならぬ一事は、故人が天賦の絶倫なる精力をば二十餘年一日の如く終始一貫我が中央公論の爲に傾けたことである。私は之まで多くの人に接し所謂精力絶倫の稱ある士にも澤山遇つた。併し乍ら瀧田君の如く朝から晚までたるみなく精力絶倫の緊張し切つた姿で押通した人を外に見たことはない。而かも彼の趣味は可なり廣い。其の趣向のはしる凡ゆる方面に於て彼は常に全力を注いだのである。就中故人が最も深く我が中央公論の編輯にその命に絶する精力を傾投したことは言ふまでもない。一年は一年より熱を加へ、遂に止る所を知らずして彼は實に二十餘年を力一杯に働いて來た。是れ私の故人に感謝して措かざる所であると同時に亦驚歎已む能はざる所である。

重き病の床に就て後も彼の精神的活動はなか〳〵旺盛であつた。瞑目後一晝夜を過ぎても尚ほ胸の兩脇に多少の温かみを感じたことを主治醫は不思議がつて居た。沒後三晝夜にして愈々最後の訣れを告げた時も、彼の相恰はいさゝかも崩れなかつた。例に譬て見るに、斯かる場合必ず感ずべき苦の多異といふものがつゝしなかつた。能く識者などに說かるゝ名僧智識の死床に於ける奇蹟といふやうなものを私は故人の最後の床にも見た樣な感がした。是れ皆彼の精力絶倫の天賦が然らしめたものではあるまいか。

この天賦の絶倫の精力が實に大部分わが中央公論の編輯に現れたのである。その業蹟の功罪は夫々に諸家の論評に讓らんとして、若しそれが少しでも社會文運の進歩に貢獻したとせば、彼亦以て瞑するを得べきである。

玆に故人の追憶集を世上に送るに當り、私は今更ながら故人薫育の數を偲ぶと共に、また故人の爲に金玉の文字を寄せられたる諸家に深厚なる感謝の意を表する次第である。

□

瀧田君に就いて

蘇峰學人

瀧田君の永眠は久しき間の友人として如何にも殘念に思ふ。

實は私が、死んだならば、何か一と言位は君に「中央公論」で書いて貰ひたいと思ふて居たが、それが逆樣に私が君に就いて「中央公論」に追憶記を掲ぐるといふ事は、全く意外千萬の事である。然し世の中は意外から意外に轉じて行くもので、諦めるより仕方はあるまい。

私が瀧田君を知つたのは何時の頃かはつきり覺えて居ないが、まだ君が帝大の帽子を被つて青山草堂に往來した頃であつた。其時分から君は如何にも臆面なく我が云ひたい事を無遠慮に云ふ人であつた。君の云ふ事にはさほど感心もしなかつたが、其率直にして坦易なる態度に感心して、私も心置きなく交際を續けて居た。其處で及ばずながら君の在學中は何かにつけて後援をしたのであつた。私は「中央公論」に匿名で種々の寄稿をしたが、それは悉く皆瀧田君の筆記して呉れたものであつた。私は「國民新聞」以外には自ら筆を執つた事は殆どなく、又力を入れた意見を他の雜誌に寄せた事も殆どないが、それでも「中央公論」は除外例であつた。それは社主の麻田君と友人であり、且つ瀧田君が筆記して呉れたからである。瀧田君の筆記は私に取つては安心であり、且つ滿足であつた。

或る機會には瀧田君も新聞記者に成つて見たいと云ふ考もあり、それで麻田君との諒解をも得て、私は竊かに君を「國民新聞」の社會部長に推して居た。然し君は國民新聞社に凡そ幾週間か勤務したやうであるが、如何にも其腰が落着かぬ樣子であつて、私も君は寧ろ雜誌記者を以つて成功すべき人と思ひ、其方に全心全身を投ぜられん事を冀ふた。「中央公論」が今日の地位を占むるに至つたのは、社主麻田君の經營宜しきを得たの

は勿論、又隨分難物である瀧田君をして自由の手腕を振はしめた爲めとは申しながら、瀧田君の功と勞とは十分識認すべき價値があると思ふ。

其時分私の青山草堂に水曜會を設け、水曜の夜相會して互ひに研究したる問題に就いて意見を交換した事があつた。其會員の一人は今京都大學に在る法學博士河田嗣郎君、一人は前文部參與官代議士河上哲太君、今一人は昨年まで國民新聞社の編輯局長であつた石川六郎君、それと瀧田君であつた。此會は當時私が新聞以外政治上に若干の關係があつて、多忙の爲め永續しなかつたが、今から思ふと面白き集りであつた。唯不思議に其夜は雨が降つたから、私の妻は日が水曜であり、會員が孰れも水に緣ある方々であるから雨の降るのも致方はあるまいと申して居た。

大正八年私は大病後逗子に閑居して專ら修史に從事して居たが、瀧田君が私の爲めに新聞記者の六十年間とか何とか云ふ可也長文を筆記して呉れました。それは大正十一年の冬であつた。瀧田君は此れが爲に鎌倉に泊り込み、毎日逗子に通ふて來られた。其時君が鉛筆削りに用ひたる小さいナイフを遺して歸つたが、それが如何にも珍貴であつたから、私がそれを其儘使用して居る。後に瀧田君に逢ふて、あれは君が忘れて遺して置いたのであるが、其儘僕が頂戴すると云ふて置いた。それは唯今も私の座右にあります。圖らずそれが瀧田君を偲ぶ一つの形見となつた。又十二年の暮には毛禮卿の事に就き君の筆記を煩はした。此時大森草堂は未だ出來上らず、毎朝成簣堂の樓上にて君と相對してかれこれ五六日も掛つた。其時君は大森の海岸に泊り込んで毎朝出掛けて來たが、其時分から君の身體は何となく平常でなかつたやうに思はれた。梯子を上るさへも何となく苦痛であつたやうに思はれた。

私が最後に瀧田君と面會したのは大正十四年七月十七日であつた。當日平福君と共に國民新聞社新築地鎭祭に臨んだが、平福君の語る所に據れば瀧田君は重症である、然るに一切醫者の云ふ事は聞き容れない。周圍の人も困り拔いて居るとのことで私は取敢えず平福君と共に、其場から直ちに瀧田君の病床を見舞ふたが、君は私共の顏を見るや、重病の患者とは思へぬ元氣にて種々の談話をなし、其愛藏の幅やら帖やらを取出し私共に示し、且つ私に題字とか畫賛とか種々注文をした。私は君の乞ふ儘君の面前にて、汗をかきつつ之れに應じた。而して飽かぬ別れを惜しみつつ、尙ほ今一度位は面會の機會がある事を思ひ別れを告げた。其時瀧田君は玄關迄見送つたが、私の櫻の皮で捲きたるステツキを見て、それは秋田産でしようと云ふた。私は

此は多分君の贈つて呉れたものであらうと答へた。後から聞けば瀧川君は此訪問を非常に喜んださうだが、然し其時私の忠告した事を聞き容れたか否かは不明である。それから十月二十六日帝國ホテルで大谷光瑞師を中心に麻田君や其他と會食したが、其時瀧田君の話が出て、今年一杯は難しからうと醫者の云ふたなどと云ふ事を聞いて、是非其内に今一度見舞ひたいと思ふたが、其翌日大谷師と星ケ岡茶寮で午餐に招かれた時に、師から瀧川君の訃を聞き、歸つて國民新聞社に至れば麻田君から同樣の通知を承り、それから取敢えず君を見舞ふたが、其時は最早君が安らかに往生したる顏を見て、一炷の香を其前に焚くに止まつたのは、如何にも殘り多き事であつた。

瀧田君が「中央公論」に功勞があり、又「中央公論」を通して明治大正の文壇に貢獻した事は、私が今此處に呶々するまでもあるまい。然し私個人に取つては瀧田君は益友であつた。それは私の如き世間と交際せず、殊に文藝界などとは殆ど沒交涉である者には、瀧田君を通して種々の話を聞いたのである。私が瀧田君を見れば先づ第一に、近頃文界の消息は如何、新人物の發見は無きやなどと種々の質問をした。斷つて置くが私は恐く瀧田君の答ゆる所を鵜呑にした譯ではない。然しそれによつて得る所が多かつたのであつた。

瀧田君が人に物を書かせる事の巧妙であつた事は、君を知る者の通論であらう。私なども君には種々書かせられた。其内には平福寳伯などの帖もあつて、それに惡筆を振ふのは佛頭着糞の恐ありと辭退したが、それも聞き容れず其儘塗抹した事がある。此巧妙の手段は凡ゆる方面に行き、職務としては「中央公論」の爲めに働き、餘業としては君の書畫收藏を富饒ならしめたものであらう。

尙ほ終りに臨んで一言加へて置きたい。君が弘前の兵營に在つた際、種々の苦痛を訴へ余に無心を申込んだ事がある。其時余は情なくも金一圓を送り、それに之れは輕少であるが鹽煎餅を買へば百枚はある、それでも喫して兵營内の鬱を散じ給へと云うてやつた事を記憶して居る。これは聊か君に向つて諷する所があつたのであつた。然し後に聞けば君は例の巧妙なる手段を以つて軍醫などを籠絡し、思ふ所欲する所を恣にしたやうだ。君の一生は四十四歲、如何にも殘り多いが、君としては殆ど此間思ふ所欲する所を恣にして、何等他に拘束せらるゝ所はなかつた。君は已れ自ら已れを拘束せず、況んや他人からをやだ。恐らくは心身二つながら君ほど自由の生活をした者は少いであらう。然し之れが又恐らくは君をして五十以内で此世を去らしむるに至つた所以であらう。何れにしても友人としての私には

殘り多き極みである。

瀧田君と私

吉野作造

瀧田君と始めて相識つたのは大正二年の晩秋であつた。此夏私は歐洲の留學から歸て大學の教壇に立たのであるが、新しい歸朝者の誰しも經驗するやうに、直に雜誌經營者諸君の襲ふ所となつた。その中で瀧田君は一番遲くやつて來た方で、初めて訪問を受けたのは十一月の初め頃であつたと記憶する。

初對面の挨拶が終つて瀧田君は、自分も私と同じ東北の出身で且仙臺二高を出たといふこと、私の親しい誰彼とは高等學校以來同窓の誼があり之等を通じて私の噂も聞いて居たといふことなどを述べ、續いて中央公論との關係やら又雜誌經營上の抱負などを吹聽されたが、それから先の言分が振て居る。今でも鮮かに記憶して居るが斯うだ。自分が貴君を訪ねたのを多くの雜誌經營者が新歸朝者といふと直ぐかけつけるといふ樣な月並の來訪と思はれては困る。さう思はれたくないから夏以來わざと今まで差控へ、そうして其間ひそかに貴君を研究して居たのです。貴君には寄稿家としては固よりだが、其上種々の點に於て先輩としての格別な御交際が願ひたくて上りましたといふのである。人を煽てるやうな所もあり又人を馬鹿にしたやうな氣味もあり、初對面の際だけに一寸失敬な奴だと腹では思つたが、まア〳〵と此點はいゝ加減にあしらつて、寄稿だけを引受けた。そして日米問題に關する考察を寄せて其年の十二月號に載せたのが中央公論に於ける私の初陣である。

それから後は瀧田君は隨分まめにやつて來た。私は一つには教師としての最初の年なのと又一つにはさう手慣れても居なかつたので、一々其要求には應じ得なかつた。それ程暇がないなら私が筆記しませうといふので、迂つかり乘て書いたのが大正三年四月號の民衆運動論である。此頃まで實はあまり雜誌に書

くことに興味を有たなかつた。口授を筆記して呉れるといふ彼の熱心にほだされてちよい／＼やつて居る中に、段々本當の興味は湧いて來る。やがて歐洲大戰が始つた。近く歐洲の形勢を見て來た私として自ら心の躍るを覺えざるを得ない。加之戰爭の發展と共にデモクラシーの思潮が澎然として勃興する。そこへ瀧田君は再々やつて來ては私をそゝのかす。到頭私は瀧田君の誘導に應じて我から進んで半分雜誌記者見た樣な人間になつて仕舞つたわけだ。之を德としていゝのか惡いのか、兎に角瀧田君は無理に私を論壇に引つ張り出した伯樂である。

歐洲戰爭勃發後私は殆んど每號中央公論に筆を執るやうになつた。去年大學をやめて朝日新聞社に入るまで、一二度病氣か何かで休んだ外は、我ながら能くも每月まめに書いたと思ふ。併し之には瀧田君の力が大に加つて居ることを隱すことは出來ぬ。第一には瀧田君が自ら筆寫の勞を取て呉れたことである。一兩年前から私は思ふ仔細ありて一切口授をやめ、最近は自分で筆を取て居るが、大正三年以後約八九年間の論文は、僅々數篇を除くの外は、概して瀧田君の筆記に成たものである。而して瀧田君は元來頭が出來て居るので、筆記中私の議論に不滿があると無遠慮に之を指摘する。之に依て言ひ足らぬのが補はれ、不注意の缺陷がどれ丈け訂されたか分らない。一寸思ひ出せぬ字句が君に依て巧にうづめられたことなどに至ては數限りもない。第二には瀧田君がよく問題を持て來られたことである。外の用事に忙殺されて今月は何も書くことはないなどとぼんやりして居ると、同君がやつて來て斯う云ふ問題はどうの此の點は斯う考へられぬかのと、何や彼や言ひ合つて居る中に、私の頭には何時の間にか一つの意見が纏まつて居る。それを書いて見やうといふ氣になり、乃ち改めてまた同君の筆寫を煩すことになる。瀧田君は十分書ける頭をもつて居りながら出來る丈け自分は書かず何とかして人に書かせるといふ方針を執て居たらしく見える。此方針を彼は容易に破らなかつた樣だ。是れが雜誌經營に於て彼の大に成功した所以であると思ふ。第三には永くやつて居るうちに瀧田君は私の氣持や言ひ表し方を十分に呑み込み、筆記したものを自分で仕上げ大に私の勞を省いて呉れた。初めは淸書したものを私は丁寧に訂正したものであつたが、最後の二年ばかりは、口授し放しで後の仕上げは萬事同君にまかしたのであつた。爲に時に飛んでもない間違が印刷されたこともないではないが、大體に於ては能く私の言はんと欲する所を現はして呉れた。之等の點に於て私は大に瀧田君に感謝すべき理由を有つて居る。

斯んなことを永々と書いたわけは、瀧田君が中央公論主幹としての社會的地位も高まり公私兩面に於て段々多忙を極むる樣になつても、口授の筆記などいふ機械的のつまらぬ仕事を自分でやられたといふ點を力說したい爲である。部下には高野君や木佐木・伊藤の諸君もある。口授の筆記位なら之等の諸君でも勿體ない位なのに、萬已むを得ざる場合の外、御大將自ら出馬して容易に他人にまかせないのは、穿て言へば寄稿家の自尊心に阿ねる巧妙な操縱法とも觀られるが、そんな無用の遠慮なしに深く交るやうになつた私から見れば、どうしても中央公論に全心全力を注いだ同君の熱情の然らしめた所と云はなければならない。瀧田君は中央公論のためならどんなことでも厭はなかつたのである。

私と段々親しくなり始めた頃、瀧田君はよく斯んなことを云つた。今まで政治問題といへば政黨領袖の誰れ新聞界の誰れに賴んで書いて貰つたが、どうも淺薄で意にみたぬ。之からは思想家に賴んで見やうと思ふ。さうすると始めて心ある青年をも納得させる樣な實のある議論を紹介することが出來るに違ないと。彼が此の考をどれだけ實現したかは玆に詳しく說くの要はなからう。兎に角社會上政治上の實際問題と思想家とを連絡せしめた點に於て彼は慥に草創の功を收むるに値し、從つて中央公論も此點に於ては先驅者たるの名譽を擔ふことが出來るのである。

所が去年の春頃遇た時、また斯んな事を云つて居た。流行評論家としての思想家の中には、徒らに空理空論を弄びその實行的價値を頓と顧みない人がある。世の中が斯う進んでは、あゝした輕佻な議論を橫行させては困ると。年のせいで穩健になつた氣味もあらうが、所謂思想家の間に好惡の色分けをし、時流に抗しても嫌だと思ふ側の議論には紙面を割かぬといふいささか頑な意氣込を示して居た。之も雜誌の上に多少その俤を留めぬでない。

私は私の立場で瀧田君と話し合て居つたのであるから、私の知らざる方面で同君にどれ丈けの伎能あつたかは私に能く分らない。が、私の專門の關する限り、同君は實に聰明なる理智の持主であつた。自分に共氣があつたら彼は立派な評論家になれたらう。少くとも彼は六つかしい論文を讀んで立派に之を判斷するの能力を備えて居つた。聞く所によると、同君は文藝の作品に付ても優れたる批判力があつたとやら。それかあらぬか、大家の寄稿を持つて來ては玆處がいけない彼處が弱いなどと無遠

處に批評するのを度々聞いたこともある。

彼の趣味がいろ／＼の方面に亙つて居たことに付ては別に語る人があらう。深く習はずして事物の眞髓を直觀する天才的能力の持主であつた一例として、私は次のことを憶ひ出す。六七年前のことであるが、社用で毎日腕車で飛び廻る道すがら、ちよい／＼骨董店を覗く癖ある彼は、本郷の場末の古道具屋で二枚折の小屏風を眼に留めた。誰の筆か分らぬが餘程出來がよさゝうだといふもので欲しくなつた。代金十五圓の持合せがないからとで突然私の處へ飛び込んで來たので今でも能く私は之を記憶して居る。それから數月の後私は食事に呼ばれて同君の宅に往つた。何といふ人であつたか書畫の鑑定に長けた老人も同席して居られたが、其處へ例の屏風が持ち出されると、其老人は之は素敵だ、之は狩野なにがし（此の方面に不案内な私は今其名を覺へてゐぬ）の筆でなくてはならぬ、それにしてはこの印が違うがなどと云て居られた。やがて印譜を調べることになる。するとそれが右なにがしの若い時に使つた印だといふことが明になり、結局十五圓の屏風が時價何百圓もする名家の筆だといふことになつたのであつた。その時その老人は、斯んな道樂を始めてから一年にもならないのに斯うした掘出し物をする眼識には恐れ入つたと賞めて居られたのであつた。

畫のことはどうでもいゝ。つまり斯うした獨特の眼識を各方面に亙つて有つて居たといふことが、雜誌經營者としても彼をしてあれ丈けに成功せしめた基となるのだ。彼は名に依つて物を判じない。雜誌も商品だから名を全然無視するわけに行かないと云はれて居た。けれども彼は名を離れて先づ實を見た。故に彼は實に依て無名の士をどん／＼世間に紹介した。其の代り實が名に伴はないと誰の前でも無遠慮に之を指摘する。是は彼の性格にも依らうが、一つは少しでも雜誌をよくしたいといふ熱心からも來る。その上多少の自信もあるから、相手の名を氣兼するやうのことは決してない。之が爲に神經質な文士論客の自負心を傷けて無用の誤解と反感とを買つたことも屢々ある樣に思ふが、其代り情實や行掛りに捉へられて下らぬ原稿を負ひ込むといふやうなことは決して無かつたと思ふ。

彼はよく斯んなことを云つて居た。雜誌小說は概して終末が拙いものです、つまり雜誌社から居催促をされつゝ書き終るからでせうと。又大家の創作について斯んなことをいふのも屢々聞いたこともある。どうもこのとこが氣が拔けてしまつた、斯んな風に書き改めたらどんなものでせうと。さう云ては能く自分の納得のゆくまで書き改めて貰つたものらしい。私の論文に付ても同じ樣なことは再々あつた。而して彼の進言は多くは肯綮

に中つて居た。斯うした改訂の要求は可なり無遠慮であつたが、併し只の一度も彼が私に無斷で訂正したことはない。外の人に對しても多分同じことであつたらうと思ふ。要するに斯うした態度は親しみの淺い人には無禮と思はれたかも知れぬが、段段人柄が分つて見ると、今度は何とも云つて來ないから書き誤りや感違ひもなかつたと見へると寧ろ私かに安心する樣になつたのであつた。

ある有名な閨秀作家が處女作を發表するとき、瀧田君が思ひ切て澤山の改訂と注文とを提出し作家がまた一々之に承服して其要求を容れたといふ話を私は知つて居る。その結果作物がよくなつたかどうかは私には分らぬが、其時の瀧田君の肩の入れ樣は大變なものであつた。それから暫らく後のこと、第二か第三の作物發表のとき同じ樣な無遠慮な注文をしてゐると、偶然居合した家人が雜誌記者の辭に作家を侮辱してゐると認めたものか大變に怒られ、其結果暫らく出入を止められたことがある。斯んな內輪話を書いたら、中央公論の寄稿家諸君のうちには思ひ當る方もあるだらうと想像さるゝが、瀧田君の一面を明にする爲にはどうしても語らずに置けぬ逸話だと信ずるのである。

もひとつ斯んな話しもある。或る有名な大家に或る問題につき特別の寄稿を貰うたことがある。出來て來たものを見ると實外に拙い。斯んなものを出してはこの先生の爲にもよくないでせうねと私にも相談を掛けられた。それでも正直に云つて返せば必ずその逆鱗に觸れるといふが明白であつたので、彼は遂に之を沒書にして仕舞つた。そうしてその先生には社員の疎忽で原稿を紛失したとか何とか言ひ繕つて特に鄭重な御禮だけはしたやうであつた。

瀧田君と私とは親しく交つたばかりでなく雜誌のことに付いても色々と相談を受けたのであつた。一部の人からは私が單なる一寄稿家としての外何等かの特別關係を社中に有つて居るかに誤解された程であつた。之れ程立ち入つた相談をし合つたに拘らず、彼は決して私の推薦する原稿なり寄稿家なりを私の推薦なるの故を以て嘗て聊でも好意を以て迎へたといふことはない。斯の方面に於て彼の冷酷は氷の如きものであつた。而して私は寧ろ此點に彼の天成の雜誌經營者たる所以を認めたのであつた。雜誌のためとなれば彼は常に獨自の判斷を貫く。容易に他の言を聽かない。故に彼の心神の健全である間は、彼の編輯には每に潑溂たる生氣と陸離たる光彩とが橫溢して居つたのである。

彼が雜誌編輯に獨特の方針を定めると、社長麻田君をして之

へも一言も容喙せしめない。編輯に付ては絶對的專制君主でなければ滿足しなかつた。その反面に於て、社長麻田君が陰忍自遜絶對に瀧田君を信賴して一切を委せ切つたその寬容をも認めなければならぬ。麻田君と瀧田君との關係に付てモ一つ言て置かなければならぬことは、麻田君は社長として自ら營業方面を主裁し、瀧田君の英雄的放漫なる活動にも拘らず、よく經濟方面を整頓し編輯部をして後顧の憂なからしめたことである。瀧田君はよく社長が消極的でこまるなど丶こぼしてゐた。併し麻田君までが瀧田式放膽主義者では中央公論は疾うの昔に潰れて居たらう。是に於て私は麻田瀧田の兩君に於て天の配劑亦妙なる哉と歎賞せざるを得ない。

こゝで麻田君のことを說くのは適當でないかも知れぬが、瀧田君を傳へる爲には之も必要だから已むを得ない。瀧田君は麻田君の堅實一點張りの經營方針には生前決して滿足してゐなかつた。又あの氣性で滿足する道理もない。併し彼が一旦重き病に罹り心氣漸く靜穩に息ふ樣になると麻田君が斯くまで絶對に自分を信認して呉れたこと、又長年の間あれまでの自分の我儘を通して呉れたことに、大なる感謝の念を抱くやうになつた。死なれる前私は故あつて屢々遇つたが、彼はこの事を再々繰り返し、達者になつたらこの事を是非書いておきたいなど丶云つてゐた。愈々病の篤きを知り、よし命を取り止め得ても容易に元通り活動し難かるべきを觀念して、主幹辭任の旨を麻田君に申出づることになつたとき、彼は家人の諫止をもきかず、病を押して無理に自ら筆を取て可なり長い書面を綴つた。それに遺の感慨がよく書き現されて居る。偶然のことから私がそれを取次ぐことになつた。事情已を得ずとして其の申出が受け容れられ、社からは巨額の見舞金を贈られたが、そのいきさつにも亦面白い話がある。辭任の申出をするとき、瀧田君は自分で麻田君の必ずや厚く自分を劳ふべきを私に語られた。轉じて麻田君にこの事を圖ると、氏は固より其意ある旨を打明けられ、且瀧田君は元來金のことは隨分無遠慮にいふ方だが曾て無鐵砲なことを申出でたことはない。彼に若し何等かの期待あらば全部無條件で之を容れ彼に出來る丈の滿足を與へたいといふことであつた。更に之を瀧田君に傳へると、平氣で幾何額と云ふ。而して麻田君は一言の異存もなく之を快諾して翌日直に萬事を解決せられたのである。瀧田君の滿足は言ふまでもなく、之に關連する雜事を悉く解決せられて後兩三日にして溘焉として逝かれた。麻田君が中央公論を以て天下の公器とするの外、その經營を以て之を一人に私せず、事實に於て之に關係する諸君の共同の事業とするの高義が、亦實に瀧田君をしてあれ迄に縱橫無

盡に活躍せしめたことを思ふ時、この兩者の眞實の關係は瀧田君を知る上に於て亦一緊要事たりと謂はねばならぬ。而して私がこゝに之を説くは、或る意味に於て瀧田君の歿後の遺囑をはたす所以でもある。（十一・九）

樗陰君を偲ぶ

平福百穂

我が樗陰君が死んだ、とう〳〵病氣には打ち勝てずに死んでしまつた。君には生温いといふ事はなかつた。自分の主幹する爲事の上には、元より畢生の力を注がれた事はいふまでもない。書畫や陶器の蒐集や、嗜好する多方面な趣味の上にも、行くところとしてすべてのものに、徹底的であり、一家見を持つてゐられた。

一年中の五六ケ月を、陰鬱な天候の下に鎖る秋田に生ひ立ち、無欲恬淡、佛そのままの以久治大人を父として、あの陽性な熾烈な、活動家であり精力家であり、また可なり物欲もふかかつたことは、寧ろ不思議に思はれる。子供の頃家裏に實る杏子を、樹に上つて獨占せねば承知しなかつたと、よく笑草にいつてゐられた。欲ふかのやうに見えても、無邪氣である、天眞である。

樗陰君が書畫の方面に、趣味を持たれ初めたのは、大正三四年頃からと思ふ。君が高等學校時代に、茶をガブ〳〵呑みながら、茶菓子のお代りとして、文學談を聽かされた三昔の當時の事は、父君も記憶に存せらるることと思ふ。その後國民新聞社で僅かの間机を共にした事、絶えてゐた交際は、その頃復活された。君はその天來の熱腕を以て、文壇の諸士を攻め落し、漱石先生をとう〳〵書家までにした鋭鋒を、僕らに向けられた。不精な僕も君に遇つては、遂に叶はない。勢ひ紙を展べて錬筆を耐せさるを得なかつた。時には描き惱んでゐると、君は比較的容易に僕に出來さうなものを求められる。或は僕の長所といつたやうなものを、ずん〳〵引き出さうといふやうにも解される。しかしさうして描いたものは、皆詰らないものばかりであつて、今でも甚だ相濟まぬことに思つてゐる。偏狹無名の僕を、只管激勵し呉れた、知己の恩が殊にふかい。

君の熾烈な性格から推しても、多年の經驗から見ても、[illegible]

に對する趣味は、豪華濃厚なものを好きさうに思はれるが、それと反對な蕭洒淡々たるものに多大の趣味を持つてゐられた。經營惨澹たる苦心の作よりも、文人風の雅趣を好かれた。これも君の一面を談るものである。

十二年の大震災のあつた四五日は、燒け出された友人や知己の、消息を知るに由なく、その方に許り氣を取られて、燒けない方面へは、見舞もせずに閑却してゐた。すると、未だ殘炎も收まらぬ五日の朝、樗陰君から使が見へて、八日までに中央公論の口繪を描いてくれといふ。僕は實際突飛なことと思つた。まづ安否を問ふと、震災の前日に、急病で母堂を亡はれたといふに、再び吃驚した。當時は誰れの頭にも、雜誌の發行などは、夢にも思ひ寄らぬことに思つてゐたことであらう。新な悲しみと、彼の未聞の混亂の中にあつて、亡母の棺前の通夜に、編輯會議をして公論の發行を急がれた。機を誤らぬ毅然たる君の卓識に感嘆せずにゐられない。いよ〳〵大事の際に當つて、その眞骨頂を發揮したものといへる。

ある年の一と夏を千葉縣の富津海岸に過ごした。樗陰君から父君と打ち連れて行くといつて來たが、その日は生憎夜前からの大時化で、嵐はいよ〳〵募る許り、濱邊は大荒れに荒れて、曳き揚げた小船が打ち壞されるやら、砂丘の並木の松が倒れるやら騷ぎであつた。この天候ではまづ東京も大差はなからうし、如何に精悍な樗陰君でも、無論見合すことと思つた。しかしどうも君の氣象では來さうにも思はれた、驛まで迎への人力車を交渉したが、この嵐ではと、てんで取り合はない。仕方がないから、來ぬものと決めてしまつた。軈て程經てから、嵐の中に人聲がして、誰れか來た氣配がする。まさかと思つて出て見ると、あの肥つた君は父君と三浦君の三人、連れ立つてやつて來たのであつた。態々四谷の三河屋からとつて來たといふ、十斤の牛肉と瓶詰の煮汁、それに鮎若干を、提げて來られた。お互に口もきき得ぬ嵐に向つて、一里餘徒歩で來られたのは恐縮であつた。而して僕の甚だ至らなかつた事を、ひそかに愧ぢた。土産の肉と鮎は、海のものをくひ飽きた僕への、親切な心盡しであつた。東京市中を日常人力車で乘り廻して、少しの歩行にも息切れさうな彼の體質には、隨分並大抵のことでないと察せられるに、兵役の苦勢が今日始めて役に立つた、いまでも歩行し得るといふ自信を得たといつて打笑はれた。愚痴らしいことは一言もいはれない。隨所に樂むといふ、達人の風格を具備してゐられた。

樗陰を語つて、勢ひ食物のことに及ばざるを得ぬ、人一倍大きいのではないかと思はれる胃の腑は、幾本かの酒と數多き料理を平げた後、更に二三本のビールを倒して平然としてゐた。

猶氣に入つた美味しいもの屋に、梯子食ひする餘裕を示してゐる。食ふことに於ては人並に落ちない僕も、君の健啖に會つては降參してしまう。嘗つて或る旗亭で食つた鶉が美味いといつて三皿もお替りをして、四度目に斷はれたこともあつた。斯樣に食ものについての欲求も人一倍强かつたが、如何なる珍味佳肴も、結局は生ひ立頃から食ひつけたものが、一番美味いことになるといつて居られた。いつか國許から鰰といふ彼地方特産の生魚を贈られた。これは一寸生臭ひので都人の口に合はぬ、所分に困つて過半を君に分けてあげた。實は君も少し持餘しはせぬかと思つた程であつた。あとで會つたとき、ヤ久し振りで鰰を食つた、お父さんへは二尾あげて、お母さんや家族のものは一尾づつ、自分は一度に二十尾位は食つた。殘つた分はまた晩から次ぎの朝と一人で食つてしまつたといはれた。その年から毎年漁場へ爲替を送つて、直接鰰を取り寄せてゐられたやうであつた。



數年前から君は、冬期に入ると喘息を病づらはれた。どうも單に喘息許りでない、何か他に病因があるのではないか、或は過飮過食の爲のやうにも思はれてならない。不惑を過ぎて大患を經來つた僕は、保健上については尠からず考へさせられる。或る時隨分思ひ切つて君に苦言を呈した。吾々は單に酒食の友でありたくない、お互に健康のことも考へなくてはならない、爲すべきこともこれからである、といつたやうなことを書いて、切に君の猛省を求めた。無駄と思つても、野暮と思はれても仕方がない。すると早速返事を呉れた、自分にも兩親もあれば子供もある、いつも勢に乘じて過ごすが、今後は力めて自省するとあつた。僕はこの手紙を手にして、あのきかぬ氣の君が素直に幾分なりとも讓られたことを、涙ぐましくも思つた、そしてちといひ過ぎだつたと後悔した。その後君に

會ひ見るに、相變らず飲み且つ食ふ。僕も遂過ごすと思ひつつ、君が勸むるまゝに、矢張り相當につき合ふ。

國技館の場所毎に、吾が樗陰君の聲援振りは恐らく世間周知の事で今更いふまでもないことであるが、洋盃を片手に取り上げ、一と息を吸ひ込んで置いて、いまやるなと思ふと、耳元がぐわんとする。全く彼のはち切れさうな健康體の、腹のドン底から出る多少の錆音を帶んだ叫號は、大鐵傘を震撼さした。そしてこの叫號するにもちやんと潮時を捉へてゐた。君が一と聲に續いて起る群衆の動搖めきは實際愉快なものであつた、こんなことにも君が豪快にして鋭敏なる、機鋒の閃めきを窺ひ知られる。僕をふり顧みて頻りに油をかけて怒鳴らさうとしたが、これ許りは出來なかつた。それでも僕の子供や、甥共は、とう〳〵どら聲を絞つたといふことである。君と僕と棧敷に並んでゐると、眞赤な顏が二つ揃つてゐるから、群衆の中にあつても一と目で判るとよく他がいつてゐた。

昨冬病床に就かれてからは、正直なことをいへば、今度は迚も六づかしいと思はれた。隨分無理をし通されるし、またひそかに自覺されてゐるらしかつた。時に令嬢達の繪の具をとつて、繪を試みたり歌をものされたりしてゐた。（八六頁寫眞參照）その歌を見ても實に暗いしづんだものが潜んでゐるやうに思はれた。この五六月頃から旅行や不在勝ちであつた僕は心ならずも、しみじみと病床も見舞ずにしまつた。臨終の計報も旅先きで知つた、匆忙歸京して君が柩前に訣れの涙を灑いだ。

（十一月十二日記）

□

天眞朗徹の人

高島米峰

『中央公論』の瀧田か、瀧田の『中央公論』かとは、世人もこれを言ひ、君もしかく任じて居たらしかつた。その『中央公

論』も、實は、他人の産み落したもので、君の實子ではなかつた。即ち、君は、『中央公論』の生みの親ではなくて、育ての親であつた。可なり營養不良に苦しんで居たあの貧弱な子供を、能くも、今見るやうな偉丈夫に、育て上げたものだと、今更驚嘆に堪へないものがある。それには、勿論、社長麻田君の、經營上の手腕の、卓越したものがあることも、與つて大に力があつたのであるが。

ずつと昔、京都の西本願寺が、普通教校と稱する、その時代に於ては、實に思ひきつた、極めて急進的な教育方針で僧俗の子弟を教育した學校があつた。その學生であつた澤井詢（今の高楠順次郎博士）、櫻井義肇（今のヤングイースト主幹）等の諸君が、反省會といふ、佛教主義の禁酒團體を組織し、その機關雜誌として、『反省會雜誌』といふを發行し、それが、最新知識の提供者として、當時の青年を、啓發し指導したものである。後に至つて、東京に發行所を移すことゝなつてから、『反省雜誌』と改め、更に『中央公論』と改題し、大谷光瑞君の補助を受けて、雜誌の少かつた當時の思想界に、濶歩して居たのであつたが、櫻井君と大谷君との間に、意志の疎隔を來すに及んで、大谷君は、當時、『中央公論』社の、會計を擔當して居た麻田駒之助君（今の中央公論社長）に、『中央公論』の經營を、一任したのである。

これよりさき、櫻井君が、歐米漫遊中、亡友、梅原龍北君が、櫻井君に代つて、『中央公論』を主宰して居た頃から、僕は、その時評欄を擔當して居たのであつたが、いよ〱『中央公論』が、麻田君の手に歸するやうになつた時、櫻井君は、別に『新公論』と題する月刊雜誌を發行して、大に『中央公論』と競爭することゝなり、僕は、當時、同志と共に、新佛教運動を起して、『新佛教』の編輯を引受けて居たのではあつたが、しかも、『新公論』の評論を擔當して、櫻井君を助けることゝなつたのである。正直に白狀するが、その時の僕等の鼻息の荒かつたことゝいふものは、大したもので、『麻田君は、雜誌の編輯には經驗が無いのだから、どうせ誰かにやらせるのだらうが、凡そ、雜誌の編輯に巧なことゝ言つては、櫻井君の右に出るものはないのだから、半歳經つか經たないうちに、確に『中央公論』を征服して見せる。』と言つたやうな工合であつた。それは、たしか、上野新橋間に、始めて電車を通すといふことが、市で決定された年であつたかと思ふ。瀧田君が、麻田君に發見せられ、外國の新聞雜誌から、面白い記事を抄譯し、『海外新潮』とか何とか題して、それが『中央公論』に掲載せられることゝなつたのは、これから間もないことであつたらう。

その頃、文壇に擡頭して來た自然主義的傾向は、いよ〳〵ます〳〵旺盛となつて、露骨な描寫は、官憲の神經を鋭くし、『風俗壞亂』の名の下に、發賣禁止せられたものが、甚だ少くなかつた。然るに、風俗壞亂の發賣禁止といへば、近頃でこそ、一向問題にするものも無くなつてしまつたが、その當時に於ては、官憲へ沒收されたものが、斷截されて、屑屋へ拂ひ下げとなると、それを克明につぎ合せて、一冊を、定價の何倍といふ高價に、賣つたとか買つたとかいふ評判さへあつた程、一般讀書子の興味を、そゝつたものである。瀧田君が、『中央公論』の編輯をするやうになつてからであらうと思ふが、矢つぎ早に、二三回の發賣禁止に見舞はれて、その度毎に、『中央公論』の讀者が、非常な勢で增加し、遂に、文壇の中心勢力となるに至つたのである。然るに、本願寺の御法主樣が、補助して出して居る雜誌が、風俗壞亂で罰せられるなどゝいふことは、怪しからぬことだといふやうな非難が、當時、一部の頑固連の間にあつたことも、今では、一場のお笑ひ草である。

勿論、『新公論』の方も、櫻井君の奮鬪は、一時二萬以上の讀者を有するまでに發展したのであつたが、到底『中央公論』の發展とは、比べものにならなかつた上に、經營上の過誤から、次第に衰運に向つて、遂に、その發行權が、上野岩太郎君（昧堂）の手に歸し、轉々して、幾年か前に、既に全く死滅して仕舞つたのである。その上野君が、不思議にも、瀧田君と同日に死去して、その訃が、瀧田君の訃と並んで、新聞に出て居たなども、奇緣と言へば言へないことはない。

かくて、『改造』や『解放』が出るまでの『中央公論』は、全く、天下獨步の觀があつて、思想界文藝界に、寄與貢獻したことの多大であつたことは、誰でも知つて居る通りである。縱令、思想界文藝界に、種々な雜誌が出て來たとは言へ、それ等の雜誌の編輯の體裁が、瀧田君の創造した、謂はゆる『中央公論』型を出づることが困難であるばかりでなく、殆ど、横綱を稽古臺として、ぶツつかつてゆく新進力士と言つた工合で、到底『中央公論』を、土俵の砂に埋めるなどゝいふことは、思ひもよらない狀態であつた。即ち、瀧田君は、我が思想界及び文藝界に、何人も追隨し得ない獨自の才と力とを揮つて、新しい機關を創造して吳れたのである。啻に、それだけはでない、この檜舞臺で踊らせて貰つたゝめに、文壇に認められ、遂に、名聲を馳せて、大家の列に入つたものも、少くなからうと想像される程、それ程文藝家を、世に紹介してやつたらしくも思はれる。

かうした事情で、僕は、『新公論』が、櫻井君の懷で育つて居た間は、『中央公論』とは、全く交渉がなかつたが、婦人運動の

先覺者、謂はゆる新しい女の群の言動が、世人の視聽を惹くやうになつて來た時、それは恰も、僕等同志の機關雜誌、『新佛敎』を廢刊した頃のことである、一日、瀧田君がやつて來て、新しい女に關する、批評を書けといふので、何か書いて、約を果たしたのが、瀧田君の『中央公論』に、筆を執つた最初だと記憶して居る。その翌月、更に、瀧田君から、その頃、文壇で、問題の婦人であつた某に對する、批判を書くやうにいふ依賴があつたので『某女に引導を渡す』といふ一文を書いたが、それが餘りに痛烈であつたので、僕は、その女から、名擧毀損かなんかの告訴を受け、それが又大に評判になつて、『中央公論』が再版を發行したといふ景氣。爾來、瀧田君とは、次第に心安くなり、『中央公論』とも、關係が深くなつて來たのである。

言はむと欲することを言ひ、爲さむと欲するところを爲す、男子の本懷、これに過ぎたるはあるまい。而して、我が瀧田樗陰君の如き、この點に於て、實に羨ましい人であつた。人と論じて人に譲つたことなく、人に求めて人をして容れしめないといふこともなく、言へば行はれ、求むれば與へられ、詐らず、飾らず、衒はず、諂はず、赤裸々、露堂々、四十四年の生涯は、人間の定命五十歳にも達せず、而しと言へば夭に近いものではあるが、その充實した生活は、一般人が、七十八十の長生涯にも、比すべきものがある。

嗚呼、天眞朗徹の一句、能く、瀧田君の性格の、全豹を言ひ現し得て盡くして居る。而して、君今や亡し。想ひ起せば、君が四十二歳になつた年の春、俗に習つて、厄落しの宴を、上野に開いたことがあつた。その時、色紙短冊半折と、例に依つて、いろ／＼のものを書かされたが、僕は四十二といふ壽字を詠み込んで、戯に、

四二天の五と割りきれる世の中に
わりきれざるを君に見るかな

といふ、狂歌めいたものを書いて、君の壽の長からむことを祝福したのであつたが、爾來僅に二星霜、早くも既に、割りきれて仕舞つたのを見て、今更ながら、無常迅速の感を深くするのである。(大正十四、一一、四)

「中央公論」と瀧田君

三宅雪嶺

『中央公論』は種々の變遷を經、編輯の仕方が幾度か變つた。編輯の擔任が何となつて居たか、櫻井義肇君とか相馬由也君とか徳田秋江君とか、全部若くは一部に特殊の編輯振りを發揮した。櫻井君は自ら任じて事に膺り、切り盛りも巧みで、成功しさうであり、いくらか成功したのであつて、外見程に成功せず、寧ろ失敗した。編輯で失敗せず會計で失敗したとも云ふが、失敗しさうもなくて失敗と云はねばならなくなつた。編輯振りはステッドの『評論の評論』によつたかと思はれる。相馬君は編輯を擔任したか何うか。眞面目で實直で場當りを心懸けず、雜誌の編輯よりも或る趣つた編輯に長ずるらしく、自づと共の方に向つて行く事になつたらう。徳田君は編輯でやゝ當惑した趣きがあり、恐らく當時自ら方向を決せられず、先づやつて見ようと云ふ位の事であつたと察せられる。自ら案を立つるに至らず、立てても行はれたか何うか、近松として創作に從事してから、頓に長所を露はし、人が待ち設けた以上に出でた。人を相手の編輯よりも、獨りで氣儘にするのが得手であらう。然し今尙ほ創作又は隨筆よりも、歴史に適すると考へもし、それ程の熱が出て來ないやうな跡もある。何れにしても瀧田哲太郎君の一手で編輯を擔任した號より見、前世に屬するのであつて、現に世間で認むる所の『中央公論』は全く瀧田君の編輯振りになつて居る。

何時から其編輯振りが鮮かになつたか、斷然改革といふのでもなく、帝大に在學中からで、雜誌の關係が二十二年と云へば、次第に力を伸ばし得た所もあらう。政治社會と文藝とを兩天秤にかけて進むのは珍らしい事でなく、英國で一八〇二年『エヂンバラ評論』の出た時、之れを目當てにし、次いで他も多く似寄つた事をしたが、日本で文藝に重きを置く事、普通に推察するよりも急激の進歩を以てした。前に政治は政治、文藝は

文藝、殆ど判然區別し、一方に關係するものは他を措いて問はなかつたが、後に政治と文藝と車の兩輪鳥の兩翼で喩ふべきなのがある。文藝が動力となるのもあるけれど、政治社會と並んでするのもある。議會政治の盛んになつた割合に、世間で政治に對する興味の高まらなんだのは、舊幕時代の遺習もあり、政府で諸學校を成べく政治より遠けた所もある。教育界に箝口條令といふものさへあつた。憲法發布議會開設とまで漕ぎつけた政治熱が、義務教育の普及と共に漸次冷却し、天下國家と云ふよりも、文藝の類に親しむ方に傾き、政治は政治屋の道楽仕事で、他人の與り關すべき所でないかに思はれ、前に天下分け目の合戰と騷いだ所も後に一向取り合はれなくなつた。瀧田君は其邊に着眼しての事か何うか、着眼したらうが、文藝熱は着眼したよりも盛んになり、愈々益々力を用ひしめた所あるでないか。曾つて法科に籍を置いただけあつて政治より離れず、常に政治に興味を覺え、舊政治に慊らず、社會政策又は人類の根本問題に基く政治を念とし、之を高調するを欲しつつ、文藝で新たな蕀を開くのを望んで止まない。新進文藝家に更に一層新作に努力するを翼ひ、併せて新進文藝家の未開墾地に突進するを獎勵し助成しようとした。人が何程文藝に寄與し得るかを見るに興味を感じ、何處にか天才が潜んで居らぬか、鵜の目鷹の目で之れを見出さうとした。瀧田君自ら創作の志あつたかが判らず、無かつたでなからうけれど、人を見出すの興味を増し、自ら作るの興味を減じ、或ひは遂に之を失つたらう。容易に先進作家を見捨てず、力の續く間之れに傑作を望みながら、未だ表はれない作家の大いに才能を伸ばすを望み、其邊で更に熱心になる所がある。新に發見しようとするの餘り、未知數なるものを引き出した事もないではない。未知數も引き出して既知數となるべきにせよ、柿が熟せずに落ちる事もある。煽り立てるとなしに自身の力を知り得ないやうにし、輕々しく振舞すやうな事もある。新進作家を求めるに急なる所から、時として問題の作家を出すが、其處は仕方がない。人間一生の先の先までも見通しやうがなく、熟せずに落ちるのもあり、立派に、成熟するのもある。成熟した方で瀧田の紹介を煩はすを要せぬと云ふのは、餘り聞え好い事でない。瀧田君に紹介されなかつたならば逆つた方向へ奔つたらうと考へられるのがある。

瀧田君は文藝の見別けに一種鋭い所があり、凡作と見ても何くも之を掲載するのは必ず何か普通に氣付かぬ所を掴まへて居る。唯單に情實で凡作を掲げるといふ事は斷じてなく、何處ぞに目先の變つた點を見出して居る。其處が「中央公論」の文藝を面白くするに力があつた。後には何にならうとも掲載された

分は何處ぞに取柄があるに違ひなく、漱石に瀧田といふ丈けの處があつた。併し文藝の詮索は論理的の標準なく、專ら趣味の問題に屬する丈け、他人が見て相應の作とする所も、瀧田君が頭から取合はぬのもあつたと聞く。そこで依怙の沙汰があると云ふ者があり、或ひは怨んだりする。が之れを斟酌する程では『中央公論』の文藝を重くするに難かつたらう。趣味の問題はいくら議論しても決せず、其處は瀧田君の文藝趣味の秀でて居つたのを認めねばならぬ。秀でるといふのが語弊あるならば、一種鋭い所があつたとして置く。只近來稱新作家が多く、百年の後、何と判斷されるか、其處に疑問がある。それは何人も判斷し難い所であつて、今は瀧田君が四十四歲で歿するまで同年齡で爲し遂げ得ない所を爲し遂げたのを認める。短命を惜しみ、同時に學校の成績が實際生活に關係薄きを示した一例とする。

▼社　告

今般中央公論主幹樗陰瀧田哲太郎死去致候に付き多年首席記者たりし高野敬錄を編輯長として專ら編輯事務を擔當致さす事と相定め候　右廣告致候也

十一月十五日

中央公論社

□本誌入社當時の瀧田君

近松秋江

雜誌界――從つて文壇に於ける一代の名物男であつた瀧田樗陰君も、たうどう去る十月廿七日を以て易簀してしまつた。まだ前途ある四十四歲の壯齡であつたことを思へば、實に惜みても尙ほ餘りある次第だ。

私の、瀧田君と知つたのは、可なり古いことだ。今から約二十二三年前、明治三十七年の一月であつたか、私が、故の都新聞美術記者林田春潮氏の紹介で中央公論の編輯に携はることゝなつた時からであつた。林田氏からの話は實に突如として起つたのであつた。その頃中央公論社内に何かある事情があつて、社主麻田氏は、その編輯者を求めて居られた。林田春潮氏とは、かねて知合であつたものと見えて、林田氏にその相談があると、林田氏は私を推薦したものと見える。私は、その頃にしては、相當に厚い待遇で麻田氏に雇はれることになつたのであつた。

「中央公論」は以前、反省雜誌といつて、その頃既に氣品の高い、立派な雜誌であつたことを、私は學生時代に記憶してゐた。たしか英文欄もあつたやうに思ふ。今は純然たる獨立雜誌であるが、もと〳〵西本願寺の大谷光瑞師が背景になつて創刊せられたものといふから、今日の營利一天張りの俗惡な雜誌とは比べものにならぬのも當然であつた。その反省雜誌に載つた文章の一例についていへば、高山樗牛の「吾が袖の記」などがあつたことを思へば、その雜誌の種類も大凡そ見當がつく次第であつた。

ところが後に「中央公論」と改題し、そして私達が編輯に從事する一寸以前の頃は、やゝ餘りに通俗になり過ぎてゐたと思ふ。

で、瀧田氏と相知つたことであるが、その頃、雜誌の内容に、海外思潮といふ六號活字の欄があつて、外國の新聞雜誌の

切拔きを飜譯して載せてゐた。その切拔きは、當時歐羅巴に滯在してゐた大谷光瑞師の手許から送つて越されるのだとか、聞いてゐた。

社主の麻田氏は、私が編輯に從事することになつて、一回めか二回めに會つた時、畔柳都太郎氏（故の第一高校英語教授芥舟氏）の紹介で、海外思潮欄の飜譯をやらすことになつてゐる、大學の學生が一人ある。それを近日一度伺はすから、それに編輯の方の手傳ひをもさせて下さいといふ話であつた。

その學生は、その翌日かに直ぐ訪ねて來た。それが、中央公論の主幹として、後に雜誌界の大立物となつた瀧田哲太郎君であつた。大學生（帝國大學生）とか、若い文學士などと云へば、その頃はまだ、えて、厭にぎすぎすしたり、高慢チキであつたりしたものだが、初めて訪ねて來た瀧田哲太郎氏は、看板の角帽も冠らず、鳥打ち帽を冠つて、木綿の袴を穿いてゐた。素樸な、修飾のない、卒直で淡白で、腰の低い、厭味にならぬ程度に一ととほりの禮儀に富んだ青年であつた。私は、初對面から、もう、瀧田君に、まあ、いはば惚れてしまつた譯であつた。

この時、編輯の都合で、便宜上暫らく私の、小石川小日向台町の陋宅で編輯をしてゐたりしたので、麻田氏も度々私の陋宅に駕を枉げられ、瀧田君は、それから殆ど毎日私の家に來てゐた。そして私の陋宅といふのは、わづかに四疊半一た間と二疊に二疊とかいつたやうな、文字通りの陋宅であつて、その頃は、私の舊作「別れたる妻に送る手紙」に書いてゐるところの所謂「別れたる妻」と同棲してゐる時分で、貧しい粗飯を呈して瀧田君とよく食膳を共にした。すると、瀧田君は、私の家の不味い御飯をも、實に心持よく、惡遠慮などせずに、甘味さうに食つてくれた。それで、別れたる妻は、瀧田君の歸つていつた後で、よく私に向つていつてゐた。

「瀧田さんといふ人は、さつぱりした、厭味のない、好い人ですねえ。何を出しても、何時もおいしさうによく食つてくれる。あんな人は、今に乾度出世するでせう。」

「うむ、あの人間は今にきつと偉くなる。」

と、私も至極同感してゐた。それで瀧田君とは、一度二度と會見の度が重なるに從つて、倍々優れた部分を、私は發見した。海外思潮に飜譯してゐた外字新聞の切拔きは、相當英文を讀みこなす語學の力を要するばかりでなく、ロンドンタイムスとか、イブニングポストとか、デーリイメールとか、フオートナイトレビユウだとか、クオーターリイレビユウだとか、いろんな新聞雜誌に渉る、主として政治、外交、時事問題に關する論說であつて、殊に語學の力を要するばかりでなく、これ等の問題に

に關する一ととほりの常識をも具へてゐなければならぬのであるが、瀧田君は聰明穎悟にして、いとも平明流暢に海外新聞の社說や政治外交探險記事の飜譯文を書いて來た。何でも今日の原稿用紙にして二十枚以上はあつたと思ふ。それで月々五圓を貰ひ學資の補足にしてゐた。

瀧田君は、その前年の九月に仙臺の第二高から帝大の英文科に入つて來たので、一年だけ英文科に居つて後に政治科に轉じたのであつた。學生のことで、學校に行かなければならぬから、五圓づつもらつて、外字新聞の切拔を飜譯するくらゐの仕事に留めて置かなければならぬのだが、その外字新聞の飜譯の滯停なき暢達振りといひ、小說及び文學評論に關する趣味といひ、更にそれよりも範圍の廣い、例へば、明治初年の、日本が嘗て有した、最も偉大なる文明批評家たりし福澤諭吉氏に對する理解ある見識といひ、又民友社系の德富蘇峯氏をはじめ、山路愛山竹越三叉氏等に對して有してゐる興味といひ、頗る私自身の興味と一致するものがあつた。

そんな譯で、私は、この人を段々編輯に習熟さしたならば必ず好結果が得られるだらうと思つてゐた。が、何しろまだ學生で、學課の勉强を怠つてはならぬ境涯であり、從つて手當ての方も少い。それに反して私は專任の編輯者で、社主から給せられる金は瀧田君の八倍であつた。原稿の依賴などに出掛けるのも專ら私が俥に乘つて奔走してゐた。その頃は私も年がまだ若く、二十九歲、瀧田君は二十三歲で、六つ違つてゐた。中央公論に關係してゐるといつても、瀧田君は、ほんの、內輪の手傳といふに過ぎなかつたのであつた。

ところが前からいふとほり、何斯と瀧田君に手傳つてもらつてゐると、文章を書くことも巧いし、そして颯々と書き上げる。他の原稿を讀んでも、さつと一應眼を通して、すぐ善惡の批評をするだけの、とにかく見識があつて、氣持のいゝほど要領を得てゐる。

編輯記事といつたやうな文章を書くことの早さとか、巧さとかには、とても私は瀧田君には叶はないと思つた。その頃は、私の雜文すら、思ふやうに書けなかつた。——瀧田君は後に、卒業論文を出さないだけで、法學士といふことにはならなかつたが、あの人はもう仙臺の第二高校を卒業して來たゞけで、すつと「中央公論」記者として自己を完成したのであつた。換言すれば、仙臺の高校を濟ましたゞけで立派に雜誌記者たる資格が整つて居り、又本鄉の帝大法科に學ぶよりも中央公論記者として、ジャーナリストの大學を卒業し、その道の學士は愚ろか、大博士になつて、年を享くることは僅かに四十四年であつ

たが、通常人が七十歳くらゐまで生存して働いたほどの仕事を成したのであつた。

又話前に戻つて、私は專ら原稿の依頼に出掛けたり、編輯の事務をやつてゐたりしたが、編輯締切り期日前後に四五日やつて來る瀧田君に向つて、君も少しく、名士を訪問しかた／＼原稿の依頼に行つてくれませんかといふと、瀧田君は、「えゝ、行きます。自分も行つて見たいのです。」といつてゐた。瀧田君は前年の九月に始めて上京したばかりで、音に聞いてゐる東京の無數の名士を、その頃私よりもまだ知らなかつた。その頃は、私も中央公論社から仕拂つてもらふ俸に乘つて、可なり諸方を驅け廻はつて居り、又元氣の好い、若い興味を、そんな事に持つて居つたが、後年瀧田君の盛にやり出した活動振りには、とても／＼叶はないと思つた。

その頃雜誌としては、博文館の「太陽」が覇を唱へてゐた時分で「中央公論」は先づその種類の雜誌であつたが、先の反省雜誌の時代に比して、私の前に編輯を司つてゐた人がずつと調子を引下げて通俗なものにしてゐたので、その點を何とかしなければ「太陽」などの群に割込んで行くことは容易でないと思つてゐた。併し通俗といつても、例へば講談社の雜誌などの如く娛樂趣味の調子の低いものではなく、營利主義的な無趣味な雜ぱくな雜誌に落ちてゐた。

私は、それに先づ文學趣味を加へやうとした。反省雜誌の高雅な氣品を思ひ起した。その事を瀧田君に語ると君も贊成した。社主の麻田氏は、私の意見を心元ながつて、なりたけ從來の編輯の遣り方の型を崩さないで行かうとする大事取りの意見であつた。その事で私と麻田氏と常に意見の衝突を來たした。短氣な私は、屢々社主たる麻田氏に對して激越な調子で無禮なことを云つた。それでも飽くまで穩和な麻田氏は曾て一度も色を變じて怒を表はすといふやうなことはなかつた。そして麻田氏が私の隣宅から歸つていつた後で、私の「別れたる妻」は、私に向つて「あなた、幾ら何でも、麻田さんに向つて、あんまり非道いことをいふのは可けませんよ。わたし、麻田さんに對して氣の毒で爲方がない。」と、本當に當惑したやうな顏をして私に苦言を呈すると屢々であつた。私も後では、惡かつたと思つた。

その年一月の末から編輯に當り、やがて冬去り春を過ぎて、夏半ばになつた。それより三四年前、はじめて博文館に入り、わづか半歲で退社したやうな私であるから、中央公論でも次第に怠けた。私は、麻田氏に向つて、折々瀧田君の才幹を稱揚して此の人を重用せられんことを勸めてゐた。果して麻田氏は私を越して、瀧田君を對手に相談することになつた。そし、こ

の翌月から、雜誌の内容も大分調子が變つて、小說欄も設けられたし、體裁も、以前のごみ〳〵してゐたのが、俄にすつきりしたものになつて來た。そして、その年の暮に出た新年號は、もう雜誌屋の店頭にあつて、注目を惹くほどのものとなつた。

要之、瀧田君と麻田氏との仲は、假ひ、長い月日の間には度度氣まづひことがあつたにしても、結局古の賢君名相が水魚の交りで一國を興隆したやうなものである。

中央公論の主幹である間は本當に會心の談話もしにくいやうな氣持ちが、私にあつたが、社を退いて、今度病氣が回復したら、隔心なく、快談が出來ると思つて期待してゐた。文學について共に語る人は乏しくないが、文學以外の評論については、瀧田君逝いて、興味を同じうずる人が殆んどない。（十一月九日）

思ひ出すがまゝに

——中央公論の非境時代——

大山覺威

○

ツイ此の間のことのやうに思はれるのに、數へて見るとモウ二十年を突破して居るのだ。あの頃の事を考へると、西片町の小さい門構へに、「反省社」とあつた小形の表札がまざ〳〵と眼の前に浮んで來る。なつかしい思ひ出だ。瀧田君は大學の制帽を冠つて、よれ〳〵の木綿袴を穿いて、冬でも額に汗をかいて、いつも慌てたやうな格好でアノ門をガタコトいはせて入つて來たものだ。

麻田さんもあの頃は若かつた。私と瀧田君は、若いといふよりも、少年から青年にやつと一と足踏み入れたばかりといつてよかつた。瀧田君に至つては私より年下でもあつたが、少年らしい腕白氣をまだ多分に持つて居た。イヤこの腕白氣は死ぬまで君から脫けなかつた。そしてこれが君の身上であつたかも知れない

反省雜誌が中央公論と改題して初代の編輯長が德田(今の近松)秋江君で、(嚴格に云へば初代は櫻井義肇氏だが櫻井氏は反省雜誌當時の人であつた)私は秋江君の後をうけて二代目をつとめたのであつた。瀧田君は秋江君時代に入つた人で、私は麻田さんに引合はされて初めて瀧田君を知つた、初對面から人なつこく私に近づいて來て、仕事以外の世間話を聞かされた、聞かされたといふのは、私は大抵の場合受身で瀧田君の話を聞いて居たからだ、君は私より年少でありながら世間學に於て造詣が深かつた、私の知らない色々な世界を知つて居た、私は田舍のポツト出のやうに、まだ見ぬ世界が神樂坂にあり池の端にあるのを、瀧田君の話によつて、やゝ明瞭に想像し得たものだ、たゞ不思議なことにはさうした世界へは一度も私に同行を求めなかつたことだ、併し二人は凡そ隔日位には散歩に出かけた、それも上野から團子坂、日暮里方面に限られて居た、そして團子坂のそばやで一杯飲むのがおきまりであつた。

そのそばやに一寸美しい娘があつた、「あそこに奇麗な娘が居るから行つて見ませんか」と云つて瀧田君が私を引張り出したのが初めだつた、往きかへり途々口を極めてその娘を讃嘆したものだ、君と娘とはいくらか懇意のやうでもあつた、君に從へば娘は天女の如く美しく、女神の如く氣高く、永くそばやのやうな場所に置いてざるや山かけを運ばせるに忍びない逸品で、彼女をそばやから救ひ出すのは、彼女を發見した瀧田君の義務である、砂の中にダイヤモンドを發見しつゝ、それを見捨てゝ行過ぎるのは、大馬鹿者か世を衒ふ僞善者だ、と云ふのだ、斯くて君は三日に一度は團子坂へ通ふた、そのうちの半分は私と一緒だ。

或日團子坂へ行く途で、突然君は私に眞顏で恁う云つて聞いた。

「君はあの娘と結婚する氣はありませんか、君さへよければ、今日僕から娘の心持を聞いて見やう、どうです君、」

と恐ろしく話が短兵急になつて來た、私は實に意外に思つた、砂の中からダイヤモンドを發見しながら、無償で他人に讓らうといふのは大馬鹿者か僞善者だと云つてやらうかと思つたが、そんなことを云つて話をおぢやんにするのも惜しく考へられた。

「だつて君が發見者ぢやないか、君自身結婚したらどうだ」

と云つて見た、「イヤ僕はいけないのだ、君の方がよさゝうに思はれるから、是非結婚したまへ、そばやに生れたつて貴族に生れたつて同じぢやないか、あれ程の女は貴族の中にも」

と云つて、それから例の如く、雲の暗景が描いて、熱烈な口吻

で勸說したものだ、結局私は「それでは萬事君に任せる」ことに說き伏せられた。

其日瀧田君はそばを運んで來た娘を座敷の片隅へ呼んで、熱烈な調子で二三十分間も談じて居た、私は何だか氣耻しくもあり、家の人が變に思ひはしないかとハラ／＼した、娘は逃げるやうにして引込んだきり、モウ出なかつた、瀧田君はまだ談じ足りないと云つた顏で、

「明日又來やう、今度は君から手紙を一つ書いて見ませんか、其手紙を渡して話せば屹度成功する」

成功させないで置かないと云つた。

此の話は此邊で省略するが、瀧田君の性格が丸出しの所があり、君も地下で苦笑するだらうと思ふから、筆の序に書いて見た。

(○)

私の入社した時は、中央公論の極度の非境時代と云つてよかつた。今だからさらけ出してもよからうと思ふが、雜誌の刷高が一千部で、その中三百が寄贈、三百が年極讀者と雜誌屋の店頭で賣れるもの、殘り四百部は空しく玄關へ積み上げられ、やがて屑屋の手に渡るのであつた、

「その三百の有代誌さへ月々に五部なり十部なり減つて行くばかりだ。何とか新機軸を出して賣れるやうにして見て下さい」

麻田さんは瀕死の病人を病院へ擔ぎ込んだ時のやうな心持であつたらうと思はれる。名醫にかけても藪醫に診せても同じ事だと、半ばあきらめても居られただらう。それでなくて當時二十三歲の名もない一青年に任せ切りにするといふ筈はない譯である。

「君の思ひ通りやつて下さい、私は決して干渉しませんから、併し雜誌の品位は落さないやうに、それだけの條件です」

と云はれた。「よろしい、やります」と引受けた私は、血氣のみあつて成算があるわけではなかつた。實を云ふと、雜誌の編輯には經驗もなければ智識もなかつた。今から考へると、其無謀と大膽さにあきれざるを得ぬが、當時の私は無經驗無智識を苦にしなかつた。

瀧田君に「君は編輯の方法を知つて居るでせうね」と問いて見た。

「僕は人の談話筆記と海外新潮の翻譯を手傳つて居たばかりで、その方は些つとも知りませんよ、これから編輯もやりますから敎へて下さい」

幸ひなことには秀英舍の職工の方が馴れて居るから、原稿の順序さへつけて廻せば、それでちやんと組まれて來た。私はそ

れに素人らしい技巧を加へて、一つぱし黒人のやうな顔をして居たものだつた、瀧田君は私を編輯上の黒人で而も天才があるやうに信じ切つて居た、それに例の感心癖を出して、私のやる事を傍から「これは旨いですなア實にいいですなア」と一々合の手を入れて呉れた、この合の手の爲めに私はどんなに張合づけられたか知れない、悪くいへば感心癖だが、よく云へば合の手の名人である、瀧田君が賞出しの作家を捉へて「實にいゝですなア」と連發すれば、其夜二十枚書くところを、ツイ五十枚位筆が走つて了ふ、雑誌記者としての君の天品の一つに必ず數へて置くべき合の手癖一名感心癖である。

○

どうした風の吹き廻しであつたか、中央公論はその頃からメキ／＼と賣れて來た。三四ケ月目には一千部では足りなくなつた、正月號は千五百部たしか刷つた筈であつたが、年内に賣切れて方々の雑誌屋から再版を要求して來る有様であつた、私と瀧田君の鼻息の荒かつたには麻田さんもお絹さん（麻田氏令妹）も大分避易の様子であつた。宵も晩も社で御飯をたべた。お絹さんにこれとなく御馳走の要求をし、だん／＼増長して晩酌に一本つけて貰つたりしたのは、無論私ではなく、死んだ人に罪を塗るやうだが、瀧田君でなくては出來ない藝である。

「どうです、麻田さん平野屋へは僕等はまだ初めてなのですが」

こんな動議を出すのも瀧田君であつた。

○

瀧田君は海外新潮を書いて居たが、餘り氣乘りがしなかつた、それでも原稿は丁寧に達筆で書いてあつたのを記憶する。私は海外新潮をレヴュ、オヴ、レヴュあたりから苦心して譯出する君の努力を氣の毒に思つて、モツト興味のある記事を取る工風を相談したりした、私は瀧田君を通して其頃の大學生氣質、學生の風潮といつたものを知らうとした、即ち海外新潮よりも内國新潮編輯の方針を向けやうではないかと相談した、私が文學趣味を提唱し、從つて小説を載せる事を建議したに對し、之に合の手以上に双手を擧げて賛成したのは瀧田君であつた。

ところで瀧田君が小聲で云ふには、

「小説を載せると、乾度賣れるのだが、麻田さんが承知しませんよ、以前にもその案が出たが、麻田さんが怒つてね」

つまり小説のやうな反道徳的な、下品なものを載せては、中央公論の權威に關する。といふのが麻田氏の主張だから到底行はれないといふ話、それから二人して麻田さんを説得する方法を相談した、説得する方法がだん／＼轉化して、麻田さん攻撃になり、終に麻田さんいぢめの方法になつて行つた、麻田さんが

小說を嫌ふのは戀を嫌ふのだ。戀は罪惡なりとするのが麻田さんの道德だ、彼れは戀を知らないのだ、何でも戀を知らしめなければならぬ、戀を知らしめるにはどうしたら可いか。

「麻田さんを待合へ連れ出して、美しい藝者に前以て計略をさづけて置いて、麻田さんに惚れたふりをさせるのだ。」



（學生時代）

瀧田案だつたか、私の案だつたか、兎も角これ以上の名案はないと云ふ事になつて、其日は陰謀を胸に秘めて別れた。

ところで此の陰謀は空想であつたことが醉のさめると共に分つて來た、麻田さんを待合へ連れ出すにはどうしたら可いか、其の方の研究を怠つて居たのだ。

○

兎に角一晩麻田さんと私と小說について議論した、一晩ではない二晩も三晩も激論が續いた、そのうち麻田さんも大分折れて來て、風俗を亂さぬ上品な小說ならよろしいとなつた、モウ麻田さんを待合へ連れ込む必要がなくなつた、だが、小說家の小說ではどうせ男女間の話が出て來るに決つて居る、ものは最初が大事だ、一つ素人に美文でも書かして之れが小說だ「どうです上品でせう」と云つて誤魔化すことにした、戸張竹風氏は文學者でもあり教育家でもある、此人ならばと云つて書いて貰つたものが大變なものであつた、冒頭から「妾は貴君に惚れました」と云ふ會話で始まつて居る、麻田さんが「これだから小說はいけない、上品なものと云つてこれだから、普通の小說家だつたら、どんな事を書き出すか知れない」此原稿はお返へししようと云ひだした。

書き出しはさうであつたが、中は讀んで行くと何でもなかつたので、先づ無事に載せる事になつて、瀧田君と二人で、團子坂へ祝杯を擧げに行つたことであつた、之れが中央公論に小說を載せたそも／＼のいきさつであつた。

案の如く小說掲載は當つた、第三百號記念增大號は五千部が市中へ出るが早いか直ぐ賣切れた。

○

瀧田君の第一の收穫は夏目漱石を捉へ得た事であつた、夏目さんが小說らしい小說を書いたのは中央公論が最初であつたと思ふ、「二百十日」の如は中央公論を文藝雜誌の首位に昇格さした名作であつた、瀧田君は夏目さんに喰ひ付いて離れなかつた。

その頃君は長谷川二葉亭にも喰ひ込んで居た、其他流行兒は、小說家以外の學者雜文家にも取入つた、君は雜誌の爲めに**出入したのではない、君はよく人に惚れた、好きだとなると、**初戀の如く熱情を傾けて其人に近づいて行つた、其時は雜誌に書いて貰ふといふ職業を離れて、或は崇拜し、或は愛慕し、惚れて／＼惚れぬいた、或者には淫し過ぎ、溺れ過ぎたのもあつた、これは職業關係の方面ばかりではなかつた、役者にも力士にも、瀧田君の惚れ込んだ者は澤山にあつた、學生時代には竹本素行の崇拜者で、其弟子であつた、私は瀧田君から太閤記のさわりを敎つたが、秋田訛のズー／＼は義太夫の節全體を支配し、私は大分惱まされて願ひ下げにしたのを覺えて居る。

東北訛りで思ひ出したが、瀧田君は新しい本を見つけると、よく私に報告して呉れた、或時「君モウパッサンを讀みましたか、英譯の短篇集が來てゐるから買ひませんか、短篇のうちでアイズンといふのを讀んで感心した」といふ話、私は早速買つてアイズンといふ見出しを探したが見當らない、之は本が違つたかなと思つて瀧田君に示すと、「これだ／＼、このうちにアイズンといふのがおりますよ、そらこれだ」と云つて指で押へた標題はゼ、シグナルとある、私は膝を打つて、アイズンぢやない和譯して「合圖」だつたのかと獨り可笑しかつた。私はそれを譯して「太陽」に載せた、其當時モウパッサンは我文壇では初物扱ひであつた。

○

あの頃の思ひ出を話せばまだいくらもある、却つて下らない事ばかり書いて重要な事を逸して居るかとも思ふ、私が操觚社界に入つたのが中央公論が振り出しで、初めて一緒に仕事をしたのが瀧田樗陰君だから、印象は一番深い、あけすけに物を云つて可愛らしい人であつたと思ふ、最近交遊の機會がなかつたが、恁う早く死ぬのであつたら一度ゆつくり話して見たかつた。君は中央公論で二十年間に相當紀念すべき功績を貽して行つた、私はまだ恁うして碌々として無駄な迹を歩いて居る、何一つ今死んでいゝやうなものを殘し得ない、私は今君と昔語りをするやうな心持でこれを書いて居た、「高山クン」「私の[illegible]」と東北訛りのあの發音がまだ耳にある。

（十一月十日夜半記）

瀧田樗陰君に就ての思ひ出

相馬由也

一

前には波多野女史を弔して涙痕尙ほ新たなるに、今又重ねて瀧田樗陰君を哭するとは、私は死者に對して痛惜の情に堪へぬと共に、特に中央公論社に對して誠に御氣の毒の感に堪へぬ。冀北に馬多しと雖も、良馬は常に非ず。人に俟むべきは個性であり、而して個性は絕對的のものである。即ち掛け替への無い者である。君の如き雜誌の天才的手腕者に對しては、其候補者を獲る事は容易であるまい。それも老壽を以て去るならば諦めもし易い。然るに君に於ては左樣ではない。波多野女史は非命に自ら縊れて居るから勿論だが、君の死は自然であるとしても、まだ四十を纔に越えたばかりの身ぞらである。將來に大に働くべき能力を餘し持つての死である。是は決して定命とは思へぬ。玆に無限の愛惜がある。けれども其處にはまだ見樣によつて大なる慰めがある。四時の序先づ功を成すものは去る。寒來暑往だ。惜まれて散る花の一期の果敢なさも、其下に結ばれて次第に膨み來る果實の在るからだと知らば致方あるまい。如何に美はしければとて、其儘永劫に枝に在り經る花は無い。波多野女史固より然りだが、特に瀧田君に至つては其留めた功績の顯著にして大なる、最早や君が氣短かに此世を棄て去つても、中央公論社隆々の社運は、既に磐石の如き不可動の基礎に立つて居るのである。其根を幾萬尺の地軸に接して居るのである。玆に聊か宿命觀が許されるならば、生は寄なり死は歸なり。詳には歸休なりだ。此世の掟に於ても、早く割り與へられた仕事を仕舞つたものから順に休ませられるを知らば、君のまだ春秋に富める身を以て此世を去る事には、是と同樣の天意を秘めた一種微妙の約束が在るのではなからうか。之を牽强附會のワザとらしい諦め主義と謗らば謗れ。如何に謗られても、尙ほ其處

に斯かる宿命觀の語り得らるべき程の社運の隆昌を見るは幸なる哉。而して此社運こそは實に君の功績の一大紀念塔であるのだ。又君の靈の限り無き慰藉でもあるのだ。

二

「君の一生は實に中央公論を以て終始した」。私は此平凡な文章を簡略に切り詰める爲に、唯斯うした斷定的一語を着くるに止めて、其説明的詳細な内容の敍述は省くことにする。君は天性雜誌に熱烈な趣味を持つた人だ。君は仙臺の第二高等學校を出て東京帝大の生徒となるや、初めて奇緣を中央公論に結び、外から此雜誌の編輯を助ける事となつた事が、抑も此雜誌に對する君の初戀であつたと聞くが、君は終に此初戀を棄て得ずに了つた。此初戀の甘さに帝大の學業をソッチ除けにした。到頭落第の辛き目を見て法學士を棒に振つた。君は私から斷る迄も無く聰敏な才質の持主であつた。そして相應勉强もした樣に見受けた。否。左樣までハッキリ言ふ事が恐いとしても、君が決して勉强を厭ふ性分で無かつたといふだけは斷言し得る。君が棉衣短袴黑帽子の書物風呂敷に麻裏草履を持ち添へて、朝夕社に立寄つた頃の角帽姿は今尙ほ私の眸底に歷々と髣髴して來る。併し一足の草鞋は遂に穿けなかつた。而して左、法學士、右雜誌記者といふ追分道に突き詰められた時、君は終に、法學士道を選ばずして、雜誌記者道へと邁進した。

是は勿論當時の君に取つて大なる犧牲であつたに相違ない。法學士として自己の運命を開拓する君が多幸であつたか、雜誌記者として今日の運命を開拓して來た君が多幸であつたか。それは神ならぬ我等の知り得る所ではない。けれども當時の君の一家の希望は恐らくは前者に集つて後者には無かつた事と想像する。然るに其希望を空しうせなければならぬ運命に直面した時、君の内心の苦悶は必ずやそれを大なる犧牲と感知したに相違無い。併し其結果は却て一大決心を以て、一大勇猛心を以て、渾身の努力を雜誌へと集注した。是が抑も麻田社主の天禀と相待つて君の努力が能く其中央公論を現代の我國に於ける一流の大雜誌の域へと推し進めた所以である。夏雲の奇變だ人間の運命などは固より知れる者でないが、併し雜誌記者として此處迄成功した事は、君自ら大に滿足して居たに相違無く、又滿足して勿論然るべき事と信ずる。

三

明治三十九年の初から四十五年の秋迄足掛七年、正味六年有餘私は中央公論社の編輯の椅子に坐つたもので、其間君とは一

つ机を圍んで眞面目な相談もして見れば諧謔も闘はして見た。社內で一つ食卓の鍋を啄き合つても見れば、外を遊び廻つて多少は旗亭の酒を呷つも見た。一所に旅行をしても見た。宿屋で肌襦袢を間違つて着て還つてから後も御互に四五日は知らずに過ぎ、家人に氣附かれて漸く取換へたといふ滑稽談もあつた。二人の接觸は時間的には頗る長く、其間には此種以上の奇談珍談も相應少くは無い樣に思ふ。すれば當然君と私とは互に相知らぬといへない。併し乍ら誰でもが嚴密に考へて見るならば直に分る事、眞に知るは甚だ難い。御互に皮膜一枚に掩はれて別別に個體を形くつて居るものだ。如何に親しい仲でも皮膜一枚が鐵の門だ。銘々の心事は銘々の自ら知る以外に何人にも覬覦を許さぬ。例せば我家の喪ひ事に來て共に泣いて吳れる人の情は誠に身に沁みて難有い者だが、其涙が實は死んだ親爺を追憶の道具に使つて無理に誘ひ出した努力の結果の涙であるかも知れない。といつて凡ての涙を皆此流に疑の眼で解釋しては眞實の涙に對して誠に相濟まぬ。併し乍ら誰か又此涙の眞僞を神ならずして判斷し得る者があらう。知り難きは人の心であり、從つて人の眞骨頂である。面白いから人物評を勝手にして見るものの、凡ては主觀的の價値判斷であつて其裡に幾何の確實性が能るかは判る筈がない。親しい仲には諛評が出る。疎ましい仲には酷評が出るに定まつて居る。而して諛評も酷評も共に故人を誤り傳へ、兼ねて世人を誤り信ぜしむる事になつて甚だ喜ばしからぬ結果を齎す事は言ふ迄もない　此意味に於て私は此際君に對する批評は內輪の人達の一部に加へて絕對に遠慮する側に立てて欲しかつたのだが、それは許され相にもない。成る程私が中央公論社を去つてからは早や春秋十四回轉。して見れば、最早や强いて內輪の人達に仲間入りさせて頂く權利を喪失した者の樣にも想はれる。で、成るべく決定的の推し附けがましい批評を避けて、事實の回想の方に些筆を試みる事としやうか。

四

君は私と同じく日本海の寒潮に岸を洗はれる北國生れの者ではあるが、得て北國人に通有だといはれる陰濕の氣分は藥にしたくも無く、極めて陽性の人だとは、私の君と相知る當初に於ける第一印象であつた。顏のしゝむらに波を打つ樣な近年の肥り方とは違ひ、二十五六代の頃の君は豐殺中を得たとでもいはうか、どちらかといへば丸顏ではあるが、そして滑かなカーヴを持つた小ぢんまりした中脊の君は、眼に無限の愛嬌を湛へて輕快に明るい氣分で語り續けたものだ、秋田訛りの拭はれぬ外

晋の交るのも多くの場合寧ろチヤームフルにも聞かれた。其話術は人を外らさぬ愛嬌に富んでは居たが、さりとて態とらしくは無く、情を包まず明けすけに語るといふ趣を見せた。初對面の後幾ばくも無い頃の事だが、已に今の夫人に餘所乍ら熱烈な戀を捧げ、遂ひにそれに成功したまでの、二高時代の初戀物語をまで長々と聞かされた一夜もあつた。勿論其中に含まれた幾多の苦心談、分けても月明に照し出された廣瀨川の淵に臨んでの物思ひといふ如き、頗る人の心を引き締める詩的なシーンも在るにはあつたが、併し君の口から得た感情は、常にホロリと涙を誘ふものではなくて、アハーと笑に導く陽性のものであつた。斯うした氣分が君の一生を通じて最後迄あつた樣に思ふ。

見樣に依つては頗る我儘な所もあつた。我儘を通り越して寧ちヤンチヤな所もあつた。中央公論社の昨今は知らぬが、私達の在社時代は、社員全體が麻田社主に依つて全く家族的生活をさせられたものだ、晝でも晩でも御飯時になれば勝手に其食卓に坐つたものだ。そこで自ら心安だてに銘々が何時しか麻田家の一員にでもなつた心地がした爲でもあらう。無遠慮な瀧田君は隨分御ヤツキ食卓の御惣菜の末にも勝手な批評を試み、是を以て其等にも一種の惡宣傳をするといふ風もあつた。性來左樣いふ方面には無頓着な、否寧ろ鈍感の私には、教へられて初めて成程と思ふ事もあつたといふ程の譯で、時には眉を顰めて心潜かに迷惑を感ずる事も少くなかつた。併し君は大眞面目なもので、終には堪り兼ねて麻田さんに強要し、大盤振舞をさせて恐悅がるといふ事もあつた。

五

君は又頗る暢氣な性分をも見せた。是も私が初めて中央公論社に就職した年の春先、桃日和の暖さに尻の落着き兼ぬる麗かな或る日の事であつたが、一月の勤勞の結果で得た少許の俸給を麻田社主の手から貰つた私は、折柄君に誘はれる儘に、一圓ばかりの切符を銘々に買ひ求めて池ノ端の競馬場に入つた事がある。暫くは逸足に快鞭を當てて競馳する乘手におのが好き好きに應援し、ハシヤいでも見たが、間もなく退屈して仕舞ひ、此處を好い加減に見限り、フラ〱と双蝴蝶の如く長閑な大氣の中を廣小路邊迄流れて、「如何だ。此儘歸るも變だ。此處らで一杯」といふ樣な事で、旗亭開政樓へと押し上り、杯盤を命じ藝妓を招いて又一仕切りハシヤいだ事もある。實は斯う書き續けて來ると、私も五分々々にハシヤいだ樣な事に見へ樣が、其當時頃の君は酒を飲んで醉ざめるといふ極めて淡泊な氣分の方

主。醉う事を知らぬから自ら氣がさして馬鹿々々しく、ハシヤぎ役は全然瀧田君の受け持ちであつた事を斷つて置く。要するに酒客としての瀧田君には私は到頭面白い相手とは成り能はずして終つた。歌妓其名を牡丹と呼んだ。君はそこでピオニーピオニーと連呼して戯れて居つたが、私は終に堪り兼ねて坐を立つた。そこで君も不精無精に私に連れ立つたが、其筈と思へば據もあるまい。驚く勿れいざ勘定となつたら、君は洒然として「僕は今日持ち合せが無いから君立て替へて置いて呉れ給へ」と來た。そしてそれは立て替へ仕舞に了つた事を記憶して居る。私はそれに困つて費途を定めて置いた胸算用がガラリと外れ、苦笑を人には押し包んで又新たな一月の勤勞の結果を待たねばならぬ事となつた。

君には頗る小供染みた所もあつた。私が麻田社長の好意に招かれて初めて京都見物をした頃の事であつた。麻田さんの東道の主人で東山を見物して歸つた翌日の夕刻近く、折柄大阪に行つて居た瀧田君がヒョッと私の旅館に顔を見せて同宿した。此時も頗るヤンチヤ振を發揮し、麻田さんに迫つて是非一晩京都一流の旗亭に案内せよと迫つた。麻田さんも據無い。背い二人の小僧を引具して四條大橋のあたりから八阪神社あたりを逍遙し、歸路を所謂る祇園新地の方に迂回したが、是は言ふ迄も無く瀧田君の希望に因る者で、君は此處に絲竹管絃の歡樂郷を夢想し、如何に多くの粉黛妖の歌舞菩薩に接し得る事かとの一大期待に心を躍らして居たのであつた。意外々々何の事だ。其廓らしく綺麗に構へなした一廓ではあるが、偶ま廓妓二三の出頭沒頭を見掛る位が關の山で、一向絃歌も無い、森として水を打つた樣な靜けさである。君はスツカリ落膽して仕舞つた「何だ結らん、も少し面白い處へ案内して下さいな」と麻田さんにせがんだが、麻田さんは獨り得意の笑壺に入つて默して私達を率ゐた。そして今は無いが、當時四條大橋の北に接してドンドン橋といふのがあつた。それを渡つて直ぐ橋の袂の左角の鳥居に入つた。鴨川に臨んで開かれた小ヂンマリした一室へと案内されたが、其處から今渡つて來たドンドン橋が近く見渡され、車馬の通はぬ其橋上には夕化粧の美はしい京美人が引切無しに往返し、往々にして足を駐めて、嬌影を鴨川の清流に投げて見せる。それも其筈其邊一帶は先斗町といふ狭斜の巷で、火燈し頃から嬌歌が湧くが如く起つて賑ひ出すのである。是にはスツカリ君の御機嫌も直り、欄に凭つて飽かぬ眺めに耽つて居たが、軈て其處には赤前垂のネーさんが東京には聞き馴れぬ優にして艶なる舌を動かし、鳥料理を手提げの器物に入れて持ち運んで來る。君は大に滿足して頻に杯を擧げる。麻田さんは極めて鷹揚

に大盡振を發揮して、「サアもつとやり給へ。存外いけんじやないか」といふ様に酒を强い鳥を侑める。鳥肉は幾回も御代りを要求された。君はスツカリ恐縮して仕舞ひ、「麻田さんは今日は本當に肌を脫いだね。ドレ程遣つたらう。大分取られやうね」といふ様な事を、麻田さんの便所に立つた隙に、私に囁いて喜んで居たものだが、何くんぞ知らん。麻田さんが「最う宜いか」と私等に駄目を押し、「それぢや還らう」とて仕譯を取つて、一寸身體を右に捩つて隱す様にして支拂ふ所を、及び腰に透し見た瀧田君は、俄に佛頂面して僕に囁いた。「何だ、詰らん。たつた二圓何十錢か。ヘン禮を言つただけ損だつた。もつと奢らせやう」。それから此鳥屋を出る匆々、又々奢れの話を麻田さんに持ち掛けたが、麻田さんは到頭奢らなかつた。財布の口を守る事衞士の城門を守るが如くであつた。此運動の無効に君は到頭諦めを着けて、私の京を去るの日君もそれならといふ譯で、私と一所に東京に戻つた。其頃の君には何か金談の事で大阪に叔父君町田さんの留守宅を訪ひ、持てど暮せど町田さんが歸宅せぬばかりに、到頭希望を果さず業を煮やして歸つて來たものな相だ。其不平が大分君を自暴自棄に陥れて居た様に心迹もあるが、如何やら見てにツハ〳〵しく而してヤンチヤ氣分を無遠慮に發揮して居た。汽車の御殿場驛を過ぎたあたりの事だ。君は汽車道に沿うて戯れて居る小兒群を目覚けて、ホラ〳〵やると斯に一錢銅貨を投げ與へ、狂顚して奪ひ合ふ彼等を見て呵々大笑し、自分の財布を倒まして尚ほ足らず、終には私に迫請うて銅貨の限りを貰ひ受け、盡く小兒群に投げ與へた。最後に銅貨盡きて茶瓶を取り上げ、「宜いか」と小兒群に擬勢を示し、手を擧げ競ふ彼等を目覚けて投り出す。茶瓶は地に墜ちてガラリ杯微塵。飽氣に取られて見呆けて居る彼等を腹を抱へて君は得堪へぬ氣に笑ひ顚け乍ら通つたものだ。

六

君は又無邪氣な好奇心に富んだ人であつた。明治何年頃にあるか、讀賣新聞社に初めて自動車を購して來り、それに試乘して横濱迄往つた徳田秋江君が、「初めて自動車に乘るの記」を讀賣新聞の日曜附録に載せた頃の事であつたと思ふ。西本願寺の大谷家の自動車の麻田邸に來たのを幸ひ、强いてそれに載せて貰つて、乘心地の如何を經驗したが、不幸にも社を出づる僅に三四分、自動車は一高前の大通にも出ぬ處で、パンクして仕舞つた。其處でタイヤを取り換へるといふ騒になつたが、此頃の様に簡單には行かず、可なり少からぬ時間を要したのだが、すると君と私とは其附近の東片町の西洋料理店に上り、手持ぶ沙

理で一杯やりつゝ悠々其修繕を待つたのだ、斯う迄して待つた自動車は私達を如何扱ふのかといへば、別段用件の無い私達を唯四谷見附側の大谷邸迄送り込んで、それなり自分は車庫に隠れて仕舞ふだけの事。それからは御苦勞様にも銘々本郷西片町迄電車と膝栗毛で戻つて來なければならぬのであつた。

是は自動車の話なのだが、斯うした好奇心は凡てに附いて廻つた。或る夕方君と連れ立つて壹岐殿坂を上らうとする時「君一つ右の横丁を廻つて行かう」と誘ふから宜しいといつて素直に其迹に跟随いて往つたが、小さな九尺二間の薄暗い黄昏の破れ窓の中を頻に遠くから覗き廻して居る。そして「チエツ忌々しい、今日は居やがらぬ」と云ふから、「何か」と問ふと、「いや、此邊で評判な小町娘を君に見せやうと思つて廻つたのだが、如何したらう」といふ事であつた。物好きにも程があると僕は思つた。

今一つ、是は麻田さんも御存知の事なのだが、麻田さんと瀧田君、それに私と三人で日比谷の松本亭に晝食を認めた時、隣室に一人の中年紳士が母らしい切下げ髪の御隠居と、細君らしいおで姿の佳人とを伴ひて來たけはひがした。「誰か」と好奇心を先づ鋭くしたものは此場合にも先づ君であつたが、軈て明け放たれた廊下の彼方、二つの室の中間に當る所の大姿見に、當時絶世の佳人の評判高い、日向きん子女史の中年増姿が映れた。言ふ迄も無く其紳士は之に依つて其良人日向輝武君と讀めた。君は此きん子女史にはまだ日向家に嫁がぬ以前に顔馴染があるとやらで、忽ち奇遇に驚く眼を圓かにして、其鏡中の影を私達に紹介し、それから私語又私語、私達が去らんとするにも拘らず、今少し〳〵とばかり杯を舉げて坐を長うした。鏡面の美影を好下物として坐を長うし杯を重ぬるなど、頗る珍とすべき事柄であらうと私には感ぜられた。斯うした罪の無い、且つ他愛の無い話なら、君に於ては左様まで珍しくも何ともなく、從つて數限りもあるまいと推定する。

七

斯うばかり書くと、何だか一個の無檢束な、放縦な、見様によつては飄逸な、脱俗な人間となつてのみ君の姿が現はれるのを怖れる。それは一寸見ただけの場合には其様な人柄に見られもしたかも知れぬ、が君は決して唯それだけの人ではなかつた。「生醉ゐ本性違はず」といふ俚諺があるが、若し君を目して假に生醉と見べき場合があつたとしても、即ち決して本性を違はぬ生醉であつた事を知らねばならぬ。日常の例が盡く之を證するのだから、敢て故らに引例の必要もないのだが、之を知るに

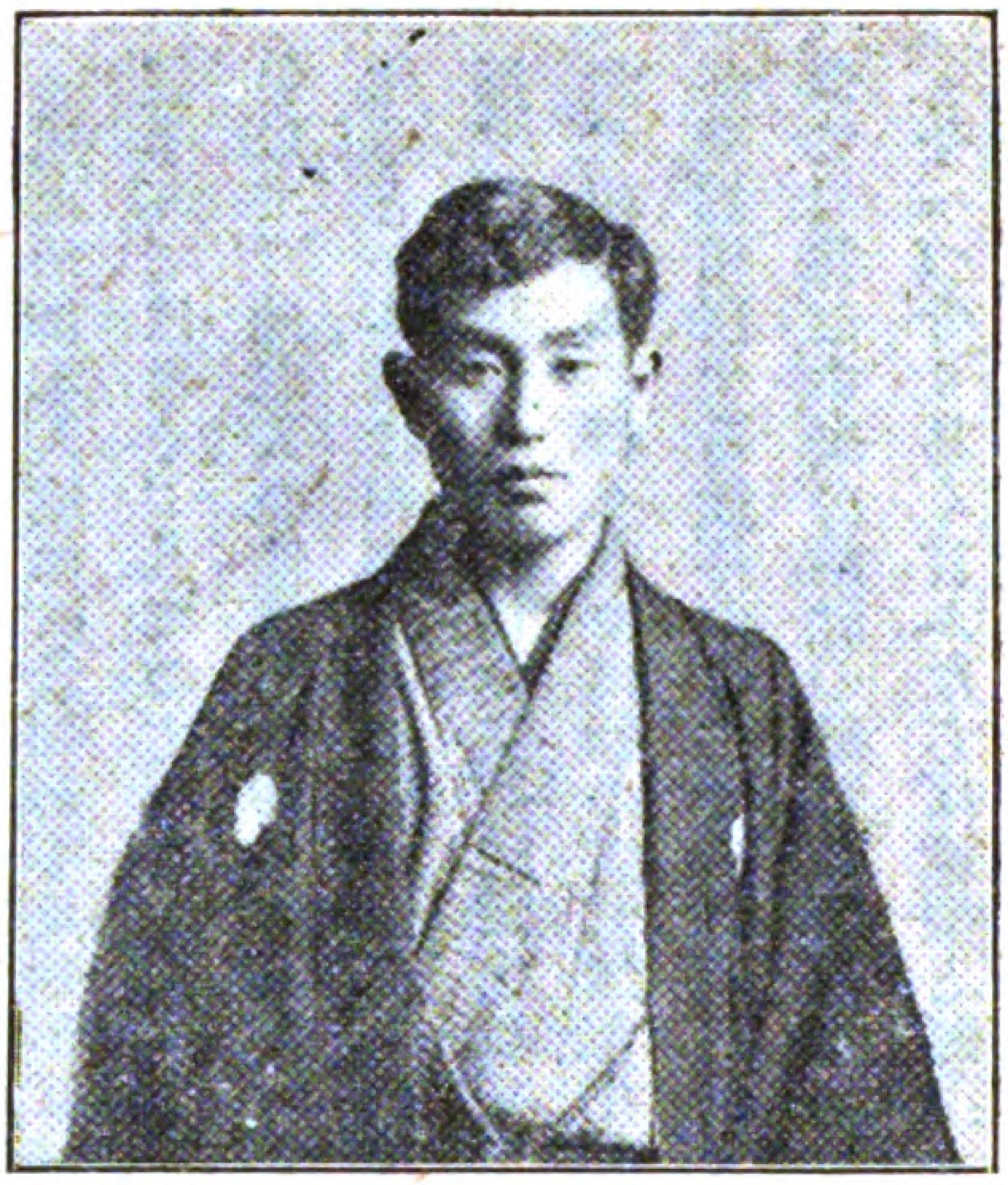
最も適切なものとして語り得る一話が茲にある。

小栗風葉全盛時代には君は頻に風葉君の門に出入して其小說を中央公論誌上に買ひ取る事を怠らなかつたが、此風葉君が當時最も編輯泣かせの難物であつた。期日を約して仲々期日通りに書き上げず、或る月の如き、瀧田君は殆ど足が棒になるばかり其門に往返して督促又督促を續けたのだが、すると最後のギリ〳〵といふ日に近く、風葉君は忽然其姿を晦まして仕舞つた。斯ういふ折の君の苦心といつたら並大抵でない。大抵の記者なら、**自己の睾丸の存在の疑はれる樣に思つて憤慨し、出逢が**しらに最後の啖呵を切つて痛快な引上げ方でもしやうと掛るのだが、左樣やつては實は雜誌商賣はならぬのである。瀧田君氣膽無きに非ず、それ故氣膽を出して宜い方面には相應無遠慮に氣膽を示しもする。啖呵も切りもする、けれどもそれは相手に寄りけりで、斯う切り出して不利な相手と見たら、君は決して癇癪を見せぬ。此活殺自在、硬軟兩用の手腕を君は持つて居る。つまり風葉の如きは斯うした癇癪を見せてはならぬ相手と見られて居たのである。そこで君は飽迄辛抱する。但し血眼になつて其行衞の捜索には掛る。其結果遂に其居所を突き留めたが、實は風葉君は君の追究を五月蠅がつて、眞山青果、岡本靈華の左右の矢大臣を引連うてさる所に潜伏し、流連して居るのであつた。何でも聞く所に依ると、君は其附近を、軒並に探し廻つたのだといふ。そこで如何したかといふに、君は直に其隱れ家に尋ね行き酒席に割入つて風葉君に會つたが、醉人に對して野暮な事は言はず、直に座興を助けて、其夜は自分も其處に一泊した。其翌曉の事である。君は件の所から直に電話を麻田さんに掛けて遊興費の即調を要求し、謹嚴な麻田さんを顰蹙させた。併し仕方がないから君を救ふべく麻田さんは所要の金を漸々作ら使に持たせて君の所迄やつた。其夜も君は泊つて仕舞つたが、如何する事かと私達は心配して居ると、翌朝になるや、君は**揚々として風葉の原稿を手にして引揚げて來た。即ち君は如何なる風葉君の飮んだくれでも、初中終醉ふてばかりは居られぬ**間には酒氣を離れた正氣に戾る時間を推し測つて居た。其處に傍去らず泊り込んで、其酒氣を離れた翌曉の、眞面目な時間に乘じて執筆を迫るべく策し、其通りに試みて成功したもので、御陰で其月の雜誌も危い處で豫定を狂はさずに濟んだ。是などが正に生醉ゑ本性違はずの好適例であらう。君自身に取つては自ら一個の風流趣味が手傳ひ、苦中自ら至樂あり、存外平常事の樣に解して居たか知らぬが、此處らが到底他の多くの雜誌記者諸君の追隨し能はざる離れ業。君の獨壇場といふべき者であつたらうと信ずる。人はいさ、兎に角斯く中央公論の如き者に貢

鉢立をしても追ひ着けぬ所であつたのだ。

八

如上の話一つでも知れる如く、君の無檢束は決して單純な無檢束では無かつた。君の放縱は決して單純な放縱ではなかつた。乃至飄逸も脫俗も、決して漫然たる飄逸でも脫俗でもなかつた。「ブラ〳〵とし居る樣でも、飄箪は頸のあたりに締め括りあり」で、君にはチヤンと締め括りがあつた。それで



（二十八歲）

無くて如何して人に對する彼の殺活自在の妙腕が揮へるものか。例せばまだ地盤の固まらぬ若い軌道を走る汽車の樣なものだ。乘り試みると左傾右仄、今にも脫線して、あらぬ方に走るかと危ましめるが、而かも車體は決して軌條を外れはせぬのである。瀧田君の車體には眼に見えぬ裝置があつて、それが如何なる場合にもシツクリと軌條に嵌つて走るのである。

併し脫線はせぬ迄も脫線し相に見られる程の危險相を示して居たとすれば、之を驅使する人に其人を得なければ、或は勢の激する所、動もすると脫線し、其車體を覆す事なしとせぬかも知れぬ、私は之を想ふ時に、直に麻田社主の人格に想到し、少くも君の成功の大部分は、此麻田社主の天稟と相待つて得られたものであることを斷言して憚らざらんと欲する。換言すれば瀧田君操縱の手綱を握るものが麻田さんといふ老練な人物でなければ駄目であつたと信ぜざるを得ぬ。斯う露骨に語つたら或は麻田さんの氣色を害するか知らぬが、實は麻田さんの性格は瀧田君に比すれば堅實味を以て優るだけ、何れかといへば陰性である。といつて麻田さんが陰氣な暗い氣分の持主だといふのではない。陰中自ら陽あり、相應明る味に富んだ人ではある。が物は比較を以て言ふのだから、其積で寛恕して頂きたい。私は長い間麻田さんの御厄介になつて居ただけに、時には御機嫌麗はしい宴會の席で「去年の今頃は半七さん……」なぞ位は伺つた事もあります。が、麻田さんの「半七さん」は如何にも陰な人の強いて陽ならんとする努力の跡が、左樣ばかりでもないか知らぬが、ある樣に思はれ、髮を染めて壯者に伍する齊藤別當實盛の樣な感じがして御氣の毒にも感ずる次第である。是に

戾して瀧田君となると、毎々十八番の義太夫を聽かされる時には、時々脫線的な奇聲、能く杜鵑の聲の形容に慣用される樣な裂帛一聲が、感電した蛙ソックリに私の五體を引き縮めんとするが、それさへ我慢すれば、其他は自然に聞こえる。陽な人の陽な聲である。

兎に角御本人達には承知か不承知かは知らぬが、獨り義太夫觀のみではなく、凡ての方面に現はれて、相反せる陰陽兩極觀を以て、此二人の性格を批評して誤ないと思ふ。けれども相反するといふ事は相調和せぬといふ事とはならぬ。易にも天地絪縕、萬物化醇し男女精を構せて萬物化成すといふ、陰陽の二氣が、相調和し行く處に萬物の遺憾無き化成がある。私は此二人が全然相反する性格の持主である所が偶ま互に其缺陷を補ひ合つて、共に中央公論社の社運の隆昌を來した所以と信ずる。之を今一つ分り易く言ふならば雄型と雌型との關係である。

支那では我國の鳴蟲の籠の代りに美はしい彫刻の跡ある苦瓢製の容器があるといふ事だが、何くんぞ知らんそれは印刀を勞して彫刻したものでなく、五枚組み合はせて一つの籠になる雌型を、菜圃に培養されつゝある苦瓢の苦い實の上に組み並べて、糸を以て緊縛し、其儘其實の發育老熟するのを待つ。と其處に印刀を勞せずして而かも印刀を用ひた以上に美はしい、精巧無比の雄型が其實の面に浮き上るのだといふ。之を以て譬ふれば麻田さんは丁度此雌型であり、而して瀧田君は此雌型に因つて養はれて發育老熟した雄型なのである。麻田さんの成り足らざる雌型の缺陷の處に、瀧田君の我儘な苦瓢の實が自由に膨れ出ることを許されて、其處に成り餘れる美はしい雄型の模樣が浮き出たのである。と如是我觀するのである。間違つたら御免なさいだ。得て人物評は兎角氣を附け乍らも何時しか主觀的に流れ易いがそれに確實味の無い事は先刻チヤント御斷りして申譯してある筈だから、申開きは出來て居る譯だ。

以上は自分の氣附いた丈の一面觀をチヨツピリの積りだ。其他の多角形の君の才質の流露に就いてはそれぞれ各方面に渉つて評者があると思ふから是で失禮する。

□

「國民新聞」記者時代の瀧田君

千葉龜雄

瀧田君が「國民」に席を置いたのは、極めて短かい間では無かつたか。が、記者としての瀧田君を、私のぼんやりした記憶に結び付ける燒點は、何と云つても、公伊藤博文が、ハルビンで狙撃されたあの事件である。それは恐らく、瀧田君が、短かい記者の生活で書いた中の、一番得意な記事であつたらしかつた。いや、君が記者の意識で働いた中の、一番働らき甲斐がある事件のやうに思はれたものだつた。

公伊藤がハルビンで、安重根に狙撃された。公に扈從して居た室田義文氏が、滿洲から馬關へ着いて、直ぐ急行列車で上京する。公の腰巾着であり、殊にその日の事情をより知り拔いたその室田氏の實見談を、明日の新聞へ、どこが一番華かに、如實に發表するか、その記事を、誰が、いかに聞き、記述するか。今日などとはもつと變つた、そうした興味がもつと濃厚であつた當時の新聞社會だ。若い新聞記者達の胸が躍らさるを得まい。それの役目を瀧田君が元氣能く貰つて出たのらしかつた。そして、君は、そゝくさと仕度して汽車に乘つた。

翌日の夕方、氏は出た時のやうに元氣能く社へ躍り込んだ。直ぐペンを採つて書き始めた。何でも四段ぐらゐを、可なり念入りに書き續けた。出來映えには、充分な自信を持つものらしく、室田氏に逢つた前後の事情や、ハルビン遭難談などを、例の熱烈な調子で自分等にも話して聞かした。

殊に書き出しの十行ばかりが、君のひどい御自慢らしかつた。よくは覺えて居ないが、何でもハルビンの雪の停車場の光景を、主觀味の勝つた見方で美くしく、力强くぐんぐん現はして居た。が、記事とするとどうも長過ぎるやうな氣がした。もちろん、君の文章だ。始めての卒業論文とも云ふほどに、念

を入れた記事だ。新聞としては、多少、彩色すぎるのが氣になるが、それとて別に無駄がある譯が無い。たゞ、全體の記事の配合から云つてどうも長過ぎる。個人よりも、より多く、紙面全體の排列を重く見る自分の主張からは、何だかその儘に入れられぬ氣がする。そこで編輯任務に服してゐた自分は、思ひきつて、君の原稿に筆を入れた。と、云つても、字一字でも直すのでは無い。文章の點では、僕などは、君に對して一言でも言へるものでは無いからだ。たゞ、こつちの注文するだけの行數に縮める上から、君の折角自信のある記事を、遠慮なく削つて行つたのだ。云うまでもなく、それは當日の社會面をかざる頭の記事で、滿艦飾で裝飾されたのであつた。そして出來映は各紙に比べて完全に勝つた。

しかし翌日、社へ出て、これを見た君は苦い顔をして居た。そして、削らない中の君の記事、ことに讀み始めの數行は、自分でも自信のあるものだと、よく記憶して居たもので、朗朗と讀み出した。自分はたゞ、行數の都合でなどと、御詫する外は無かつた。

それから間も無く、君は社を去つた。度し難い、盲目な人間だと思はれた事であらう。

今でも瀧田君を想ひ出すと、あの形容的なヘルビン停車場の激動の描寫が目に浮ぶ。

いや、も一つ、君は其頃は已に「中央公論」記者を兼ねて、角帽をかぶつて國民社へ通つて來た。いつも和服だつた。その中に新聞記者は和服では困ると、何でも德富先生におねだりして、洋服が出來る事になつたと云ふ話であつた。それだらう。君は或る日、りうとした仕立上りの洋服を着て、血色のよい顔に、滿面の笑ひを浮べて階段を上つて來た。處が、その翌日か、翌々日からは、もう、ばつたり君の影が編輯局から見えなくなつた。そして、永久に編輯局から見えなくなつた。瀧田君と洋服、その關係がどんなものであつたのか誰も分らぬ。どんな譯かなどと云ふことが、ストオブを圍つてゴシツプの材料になつて居たが、それも一時だつた。氏の、大砲を打ち放したやうなあの哄笑の反響だけが、あの古い狹い編輯室の、どこかの隅にまだ陰れて居るやうな淋しい印象だけが殘つて居た。

が、君は新聞にも非常に熱心だつた。少しもジツとして居ずに、その日の各新聞を通讀したり、材料を工夫したり、君の活動性はどこでも潑溂として躍つて居た。君がもしあのまゝに記者生活を續けたら、恐らく偉大な記者としての存在を示すばかりでなく、東都の新聞界に、必らず大きな風雲を捲き起す創造を示したに疑ひない。

が、瀧田君の短かい記者生涯は、たとへ一着の洋服と共に姿を消したとしても、それは德富先生との斷絕を語るものでは無い。しかし、それは別の話として、一體、自分が瀧田君と知つたのは「中央公論」記者としてよりも、むしろ「よみうり新聞」に樗陰生と署名して書いて居た、文藝批評においてである。君は度々日曜附錄にもペンを採つたらしい。それが能く自分の心を捉へた。君の文章は、むしろ輕快とは反對に、油ッ濃く厚味のある正面から押して行くものであつた。その代り、鼠を捉へるにも全力を傾けると云ふ、あの獅子のやうな膂力を持つて居た。論斷が大膽であり、一方に、針のやうに細かい鋭どい觀察があつた。それでも、君はその頃、法科の學生であつたのだ。が、どうしても文藝專門の靑年批評家としか思へなかつた。その調子の太い割合に、全體にわたつて神經が細かく顫動する論脈も、君に逢つてからなるほどと思つた。君が逝いてからも、文藝批評家時代の君のことについては餘り云はれて無いやうだが、私は何よりも、この點で君に敬服して居たものだ。或は新聞記者としての以上にさへも、買つて居た。「中央公論」が、創作で文壇の一驚異となつた。それも君ほどのこの批評力があつてこそ、むしろ始めて當然の結果とも云へる。君の熱意ばかりで、あの仕事が出來たやうに考へられることは、君としても聊さか心外であらう。で、この事を、私はことに强調したい。

が、君が「國民新聞」記者となつた事も、君には少しも不思議が無いのだらう。何でもその頃の德富先生は、その頃やはり「國民」の記者であつた。今の京大の河田嗣郎博士や、かつての文部省參事官で、その頃經濟部に居た河上哲太君や、今は「朝日」に居て、長く「國民」の編輯長であつた石川六郎君、或は吉野博士も加はつたか。それに君と、每週何曜日かに先生の宅へ集まつて、先生を圍んで時事評論をする會があると云ふ事を、編輯局内でぽつぽつ聞いて居た。そればかりで無い、德富先生は、時々瀧田君が、筆記のうまい事と、頭のよい事を編輯局内で話された。先生の議論が外の雜誌に出ずに、「中央公論」だけに出たのは其の爲だつた。そんな譯で、瀧田君は、だゞつ子のやうに、德富先生に愛されて居たのだから、入つて直ぐ洋服を拵らへて貰つて、またフイと止したからとて、愛嬌でこそあれ、誰も怪しからぬと思ふ同僚もない。また德富先生にはもちろん、わたりが充分について居たのであらう。

それからの君は、專ら「中央公論」記者として活動したが、殆んど人を訪ふ事の無い自分は、其の後、君には一度も逢はない。たゞ社の役目で、國技館に二三度行つた時、一方の棧敷に

陣取つて居る、赭顔、童顔の君の姿を見たばかりだ。が、氏の活動力や、精力については絶えず聞いて居た。何でも、編輯局で、直接に君の御自慢を聞いたと思ふが、君は、文章筆記のコツをこんな風に說いた。單に、第二者の持說を其儘に記するだけでは何にもならぬ。その人の言葉の癖、用語の癖、文章のリズムまでも精確に描いて、それを讀めば、そのまゝその人を見る實感を起させねばならぬ。自分は、それには聊さか自信があると云ひ、澤山の名士の持ち癖を、一々細かに說明して聞かせられた。そして自分は驚嘆した。自分などは、談話筆記は第一の不得手で、人の議論と自分の意見を直ぐ交ぜて了ふので、いつも話者から叱られてゐた。然るに君は一日或は一晩ぶつ通しに談話を筆記しても、少しも疲れず書いたものは理路整然として、少しも話者の本意を誤まらない。吉野博士の長論文を、深夜から聞き出して翌日に續けた精力と、明晰な頭惱の實話などもその一例であつた。

が、その人も今は亡い。精力で成功した。しかもその爲に精力を酷使した事が、偶然君の死因となつたとすれば、自分は大自然が、人間の上にかけて置く、艮の皮肉と殘酷さを呪はざるを得ない。

弔辭

小說家協會は瀧田哲太郎氏の長逝に對し深く哀悼の意を表す氏は長く「中央公論」主幹として小說家の發見育成に努め明治末年大正初頭の傑作絕品は悉く「中央公論」に蒐るの偉觀を呈したり日本小說の發達を援けし功蓋し少からざらん

その長逝に際し本協會の深く哀悼の情を表する所以也

大正十四年十月三十日

小說家協會

□等分に全力的な人

徳田秋聲

若し新潮社の佐藤橘香君が、明治末期から大正にわたる文藝書類の出版業者として、大なる成功者であり功勞者であるとすれば、中央公論の編輯者としての瀧田樗陰君は、それに對比すべき成功者であり功勞者あると謂つても、必ずしも過褒ではあるまいかと思ふ——仕事の難易、大小、廣狹はしばらく別問題として。勿論世のなかには完全無缺なものの在りやうもないし、雜誌が博文館以來營利的になつたのだから、瀧田君の仕事にしたところで、昔しの蘇峰先生の「國民之友」や雪嶺先生の「日本人」や、又三叉先生の「世界の日本」と言つた風に、理想的な自己の論壇としての雜誌でないのは勿論で、それは昔しの新聞紙が時代の第一流に位する政論家や名士、たとへば櫻痴居士、朝比奈知泉、藤田茂吉、島田沼南と云ふやうな人達によつて、理想的な言論機關であつたのが、近年は全く資本主義的な營利事業となつたと同じで、瀧田君其人は必ずしも一代の論客でもなければ、批評家として立つてゐた譯ではないけれど、しかし又博文館の雜誌のやうに、たゞ單純に部數を澤山賣るといふことばかりが全部の目的でもなかつたやうである。瀧田君は雜誌の經營者麻田氏の傭人ではあつたけれど、編輯振には餘程君の主觀が出てゐたやうである。麻田氏も或點では控制を怠らなかつたにしても、大體に於ては瀧田君の計畫を容れてゐたもので、仕事は隨分自由であつたのである。この二人の關係なども、橘香氏と「新潮」編輯者としての中村武羅夫君とやゝ似たもので、經營者と働く人と、兎角折合がわるかつたり、衝突して別れたりするものが多いなかに、二十年の餘も協調して終始したといふことも、ちよつと珍らしいことである。勿論他にも一二さう云ふ類例がないこともないが、經營者と編輯者とは兎

角關係が持續しないのである。雜誌編輯が一生の事業として、相當働き效のあるものだと云ふことは、瀧田君によつて明かに示されたやうである。これは或程度まで利害の配分などが、都合よく行つてゐた點もあるので、この點は瀧田君の業績と共に、社主の溫情によるところが多い。瀧田君は安心して働くことができた譯で、十二分に其の才能を揮ふことができたと共に、社主も亦その事業を完成することができたのであらう。

何人にも毀譽褒貶は免れない。瀧田君も熱情的の人であつたゞけに、ずゐぶん遠慮會釋のない點もあつて、ちよつと露骨な云爲もなかつたとは言へないけれど、一度は怒つても誰もそれを不快に思ふものはなかつた。編輯者としての特徵は、見解が政治經濟其他思想問題社會問題についての大體に通じてゐたと共に、文藝は勿論、其他有らゆる趣味にも通じてゐたことで、何につけても自身の鑑識をもつてゐた。中にも藝術を基調としてゐたことは言ふまでもなく、如何なる雜誌でも藝術を除外しては殆んど成立たないことを信じてゐた。君の編輯ぶりが綜合的有機的であつたのも其のためで、同時に時流の上に高く標榜するといふやうな迂遠なものでもなく、俗衆相手の低級趣味に墮しもしなかつた。

君の大いに人にかはつてゐることを言へば、色々あらうが、本業に對しても、道樂や餘技に對しても、等分な熱心と耽溺とをもつてゐたことで、編輯が全力的仕事であつたと共に、書畫骨董、相撲、芝居、音曲、飮食などの享樂も亦均しく全力的であつた。やゝブルヂョア氣分の放恣に溺れすぎた迹もあつて、どこ／＼までも動的であつたのが體を壞したのである。あの病氣を癒しさへすれば、脂がぬけて、いくらか靜的になることができたかとも思ふが、それは或は瀧田君に望めない事かも知れない。

瀧田君を惜む

田山花袋

△

瀧田君は惜しいことをした。あゝいふ強い、張り詰めた人は、何うしても無理をすると見えて、その他にも二三私は出合つて知つてゐるけれど――例の岩野などもその一人であらうと思ふが、矢張何處かに不自然なところがあつたのであらうと思ふ。もうあのあから顔の、肥つた、元氣の好い瀧田君がゐないと思ふとさびしい。

△

明治三十九年頃から起つたあの新らしい運動に對しては、君はなくてはならぬ人だつた。尠くとも君はその運動を大きくするために熱心に働いた。惜しげもなくその編輯してゐた『中央公論』をさうした新らしい作家の舞臺に提供した。それは『中央公論』もそのため大きくなつたとは言へやうが、實際はそれ以上だつた。瀧田君でなくては、とてもあれだけのことは出來さうにも思へなかつた。

私などもいろいろな意味で、瀧田君のために刺戟された。躊躇逡巡してゐる時ではないといふ風に引張られた。後にはそのあまりに強い慫慂に、また理が非でもその思ふやうに引張り出して行かうとする一本氣な意志にいくらか困つたこともないではないけれども、概してさつぱりした、氣持の好いやり方だつた。わる氣などは少しもなかつた。

△

それは人に由つては、そのあまりに我武者羅なのに辟易したであらう。もう少し靜かにしてゐたら好ささうなものだなどと思つたものもあつたらう。しかし所謂自分のことばかりを言つて、此方のことを丸で耳に入れない人ではなかつた。その先方のことにもかなりに深く入つて行つてゐた。同情深いところもないではなかつた。相撲が好きであつたのなぞも、さういふ活躍的な心持から來たらしかつた。それに、その相撲から得た機微な心持が、絶えずその『中央公論』の編輯に影響してゐるやうに私には思はれた。『何うも、君、あまりに作者に相撲を取らせすぎるぢやないか。『中央公論』に載せて貰ふのは難有いけども、あそこがイヤだよ。何うかならないもんかね。』ある時かう私が言ふと、『でも、あゝしなければ何うしたつて駄目ですよ』つまり君はそれでなければ世間を動かすことが出來ず、雑誌を問題にさせることが出來ず、また更に進んで、作者に一生懸命にならせることが出來ないのをよく知つてゐたのであつた。だから、『中央公論』は一生懸命になつたやうな作者を一番歡迎した。否、作者に一生懸命にならせることに骨を折つた。雑誌の編輯者としては、瀧田君に若くものはあるまいと私は思つて

ゐる。そしてその努力が文壇に幾多のすぐれた作品を送らせることとなつたのである。さういふ點で、作者は一面何か不滿を感じながらも、しかもその出產についての助力を、後には君に感謝しなければならないといふことになつたのである。

△

作の方でもさうだが、字を書く方でも矢張それと同じ感謝の念を私は瀧田君に對して持つてゐる。私に字などが書けるやうになつたのは、殆ど全く瀧田君の慫慂のためだと私は思つてゐる。あんな拙劣な字を書かせるために、瀧田君はいろいろのものを持つて來て勵まして呉れた。筆や墨は勿論、短冊や色紙などをも澤山持つて來て呉れた。おまけに酒の肴になるやうなものなども持つて來て呉れた。そして、年の暮には桂月を始め、百穗、未醒、恒友、米峰などといふ人と一緒に、後には、與謝野夫妻、芥川君などとも一緒に、いつもあの二階で御馳走になつた。それにしてもあの肥つた、あから顏の、にこにこした顏が、もうこの世にはないとは何うしても思はれない。

△

あの日二階で絕えず啼いてゐたその山鳩の啼聲は、丸で嗚咽か何かのやうであつた。私はあの納棺の時のさまをはつきりと覺えてゐる。あの觀魚亭のしめつた空氣を。親しき人のかぎりをあつめた一室のさまを。あの悲しい歔欷を。あの池の中に靜かに動いてゐた小さな緋鯉を。

瀧田樗蔭君

小川未明

明治四十四年頃であつたらうと思ふ。私が「白痴」といふ作品を書いた時に、瀧田君から、原稿を受取ると、すぐにはがきかなにかで、大へんに面白かつたといふてよこされた。この時のうれしかつたことを、いまだに覺えてゐます。「あなたは、約束を間違へられないから、何日までもよろしいから、ちやんと力をいれて書いて下さい」と、よく私にたのまれて

あつた。

私は、またさう言はれると、つとめて努力する氣が起つたのであります。

いつも、生活に追はれがちであつた私は、原稿を書いて送ると、すぐに、稿料を請求したことを、なんでもないといへばいへるであらうが、長い間のことであつた丈けに、君に對しても、内心深く恐縮してゐた次第である。

瀧田君が、自から俥に乘つて原稿のことについて來られたのは、その頃から、大正七八年の頃までゞあつたらうと思ふ。そして、二回程、いつしよに散歩したこともあつた。一度は、私が、小石川老松町に住んでゐたころで、大正一、二年の時分であつたらうと思ひます。ちやうど秋の日のことで、郊外の木々の葉が色づいて、空は、よく晴れてゐました。二人は、鬼子母神の境内で雀燒を食べて、板橋の方まで歩るいて行つた。柿の木に、どこであつたか、實が、夕燒に美しく映へてゐたのを覺えてゐる。

もう一度は、それから少し後で、春雨のしと〳〵と降つてゐる時分だつたと思ひます。虎の門の方から、骨董屋のある街へさしかゝつて、いろ〳〵の店を覗いたことがあつた。

いつしよに散歩したのは、この二回だけのやうに記憶してゐるが、私が、天神町に移つてから、神樂坂へ毎日のやうに晩方散歩するやうになつて、よくヤマニバーへはいつたのであつたが、そこで、一二度、瀧田君に遇つたことがある。瀧田君は、この酒場の入口に俥を待たして、はいつてゐたと思はれます。こゝでは、私は、さきに死んだ泡鳴氏とも、たび〳〵酒を飲んだことがあります。

ある日、晩方、瀧田君は、いつしよに夕飯を食べようから、川鐵まで來てくれと使をよこされたので、私は、行つて、瀧田君及び同社の方々といつしよに話をしながら、食べたり飲んだりしました。その時、氏は、二幅の掛物を示されて、いづれをいいと思ふかといふやうなことを問ひかけられた。いまは、その繪がどういふ繪だつたかといふことも忘れて、はつきり思ひ出せないが、それに對して、

「こちらの繪は、ちよつと見て、すぐに銳く頭に感ずるものがあるから、私は、やはりこの方を取ります」と、私は、言つた。

すると、氏は、うなづいて、

「さうですね。原稿でも、いゝものは、ちよつと二三枚見ると、これは、いゝものだといふことが分りますね。ものを見るには、すべて、その直覺がなくてはなりませんね」

かならずしも、その言葉は、かうでなかつたかも知れないが、かういふやうに、言はれたのであります。

君が、名編輯者であつたことは、決して偶然にあらずと、その時も、私は、内心深くさう感じたのであるが、いま、さらにさう思はれるのであります。

思ふに、骨董に趣味を持たなかつた時分の氏は、急進的な思想の持主の如くであつた。しかし、まだ、この時分の氏は、何んといつても活々として、若々しいといふ感じがされたのでした。

大正五六年の頃でもあらうか、もう寒い時分、小雨のする晩方。私は、水道橋の停留場に立つてゐると、ふと氏に出遇つたのであります。

「いろ／＼支那の陶器を集めてゐますから、是非一度見に來て下さい」と、言はれたのでした。

私は、そのうちに上るからと約して、少時で別れたのでした。

これより少し前のこと、瀧田君は、盃に箸立の類を蒐集されたことがある。その時分、一度お宅へ伺つたことがあります。名工の造つた陶器に藝術的の興味を覺えたのは、實に、その時でした。或る時、送りながら家を出られた氏は、團子坂の一軒の骨董店に私を伴はれた。私は、藍色の極めて鮮かに、美しい一個の湯呑をその店で求めたのであつたが、まだそれは手許から離さずに持つてゐる。しかし、それが、その時の長い記念となつたのであります。

最近に、氏に遇つたのは、すでに去年の春、本間久雄氏が湯坪の幅を見に行く約束を瀧田氏にしてあるから、いつしよに行かないかと誘はれたので、いつしよに行つた時が、ついに最後とはなつてしまつたのであります。

何事に對しても、徹底を期しなければ止まなかつた氏は、また一面に、思ひ切りのいゝ恬淡味を有してゐたやうであります。それに、鋭い直感と、そして、眞實であつたといふことが、矛盾あるが如くにして、決して矛盾ならず、魅力ある、一種偉大な人格を自ら作つてゐたと考へられます。その性格が、氏の殆んど獨裁であつた當時の「中央公論」に、全格の個性を反映さしたことを何人も不思議とは思はないでありませう。

氏が最近、中央公論の卷頭言を書いたのを讀むのに、政治的に、經濟的に、大衆運動の趨勢に對して敏感であり、批判を過たざるを知れる時に、心私に、君が、やがては、その骨董趣味から、超然として離れ、所謂新人として、次の時代のために、堅實にして、常に公平な其の態度で、戰ふべき眞の人一である

と、私は、信じてゐたのでした。

しかるに、君は、いま、そのすべてを捨て逝つてしまつた。

けれど、我國の文化に遺した功績は長へに沒すべくもない。

私は、こゝに、ペンを採りながら、なつかしき君の容貌を偲び、長かりし間の篤き君が交誼に對して、深く靈前に感謝して、筆を擱かうとします。

――十一月五日――

瀧田君と私

正宗白鳥

今年は春に東儀鐵笛君が死んで、秋に瀧田哲太郎君が死んだ。逝くものこの如きかの感じが私の胸に迫つて來る。二人とも強健なる肉體を有つてゐて世を樂んで過したのだが、肉體があまりに強かつたのが、却つて死を早める原因になつたやうなものだ。私は東儀君とは屢々食事を共にしたのであつたが、大地震のあつた年の初夏、大阪の道頓堀のある料理店で一しよに酒氣のない晩餐を食べた時に、氏はさも物がうまくてたまらぬらしい態度で料理を食ひ盡した。

「醫者は多量に食べちやいけないと云ふんだが、慾しくつてたまらないんだ。まづい物を少し食へ、飯も一日に二杯くらゐにして置けと云ふんだが、そんなことで辛抱は出來ない」と、氏は例の快活な調子で云つてゐた。そして、私が少食な上に、肉食を好まない話をすると、

「それがいゝんだ。長生をするにはそれがいゝんだ。大隈さんだつて、いろ〳〵な凝つた料理を拵へさせても、自分の口へ入れる分量は極く少かつたよ」と云つて、氏は少年時代から大食家であつた話をして、石黑家で祝ひ事か何かゞあつた時、料理が餘つて困ると「東儀の息子を呼んで食べさせろ」と、そこの主人が云つてゐたことを一例として面白さうに話した。

私は瀧田君とは酒食を共にしたことはないのだが、氏が大酒

家であり且つ美食家であつたことは、社長麻田氏やその他の人から屢々聞かされた。「ナポレオンやカイゼルは美食したから强かつたと、自分で極めてしまつて、私などの忠告は耳にも入れませんよ」と、麻田氏は笑ひ〳〵云つて私に向つて「あなたはうまい者を召上らんからお體にいゝんですよ」と云つた。しかし、私は粗食主義でも少食主義でもないのだが、肉體の構造が、その主義に服從すべくつくられてゐるので、止むを得ないのだ。

痩せ細つた現世の瀧田君が私の目に映つたのは、今年七月の**初旬中央公論社で會つた時**一度きりであつた。噂には聞いてゐたが、會つて見て驚いた。

その時社長に誘はれて、島中君など四人で、九階へ茶を飲みに行つたのだが、エレベーターの中で、瀧田君は例の早口で「今度の大地震（私の脚本）は非常にいゝですな。今朝×新聞でも悪く云つてゐたが、私はいゝと思ひますな。………九月にはうんと長いものを書いて下さい」と云つた。寄稿者と編輯者との關係だけで二十年交はつて來た私は、氏の口からかういふ言葉は、聽されつゞけて來たので、その時も、健康時代の瀧田君そのまゝだと思はれたが、しかし、聲には以前のやうな熱意は籠つてゐなかつた。

その時、私だちはアイスクリームとかソーダ水とかを飲んだが、瀧田君は他と同じものを飲んだあとで、更に、冷たいコーヒーを注文した。大きなコップが氏の前に置かれて、氏がそれに口をつけると、麻田氏は、

「君がそれを半分だけにして置くといゝんだがなあ」と云つた。しかし、瀧田君は、

「エ、エ、エ、」と、空返事して飲干した。

日常の食事について私が訊くと、醫者の云ふ通りにしてゐると、腹が減つて困ると答へた。

肥つてゐた東儀君、肥つてゐた瀧田君、二人とも私とは違つて、强健なる胃の腑を有つてゐながら、晩年には食べたいものが食べられなかつたのである。かういふ人々の來世に渡つてまでの苦しみは、ダンテの地獄篇の中にも手きびしく描かれてゐる。瀧田君の死期に近い時分の容體は、私は噂に聞くだけであつたが、重患に打ちのめされたあとの東儀君の様子は、私はよく知つてゐる。二十餘年來の知友であつたゝめに、その凄惨なる光景は、私の胸に深く刻まれてゐる。快活な笑つてゐた東儀君、美食に舌を打つてゐた東儀君は、死に捕つてゐたあの東儀君に比べると、私の心にその印象が極めて薄いのである。瀧田君に死ぬ前に會つてゐたなら、同じやうであつたかも知れたな

い。生きてゐる我々よ。自からほこる勿れ。

私がはじめて瀧田君に會つたのは、多分小石川臺町の德田秋江氏の宅に於てゞあらう。明治三十八九年の頃で、氏が入社當時であつた。その時氏は德田君に勸められて義太夫を一くさり語つた。素行を崇拜し、その門弟の美光などを愛してゐたらしかつた。私が新進作家として認められかけてゐた時分であつたが、氏はまだ私の作には興味をもつてゐないらしかつた。當時一年足らず讀賣の主筆であつた竹越三叉氏の手を經て、瀧田君は、私の編輯してゐた日曜附錄の文學欄へ小說月評を寄せてゐたことがあつたが、私はその月評を好まなかつた。足立北鷗氏主筆時代には、略々自分の好むまゝに編輯してゐられたのに、竹越氏になつて、天下り原稿を私も取扱はねばならぬので、私は甚だ不快であつた。幸はひに竹越氏は半年あまりで止めて、また寛大な足立氏の世になつたので、私は助かつた。(薄給で酷使されないで、ゆつくり創作に耽り得られる暇を與へて呉れた足立氏は、後年の瀧田君と同樣に、私に取つては恩人であつたと云つてもいゝ)竹越氏が去ると、瀧田君の文學批評も讀賣へ來なくなつた。

私が瀧田君と二十年來の原稿關係を續けた端緒は、二度目に中央公論へ寄稿した「五月幟」によつて開かれたのであつた。熱烈なる文學愛好者であつた氏は、私の面前で推賞するのみならず、諸方へ行つてその傑作たる所以を宣傳した。そして文壇諸氏の批評をも私の所へ報告しに來た。他の雜誌なら、新進作家のを、たとへ世評がよかつたにしろ、續けて出すことを躊躇するのであるが、瀧田君は、直ぐ翌月のにも書けと强いた。原稿料も直ぐに二十錢增して呉れた。今でこそ何でもない金だが、その頃は一枚二三十錢の差違は、作家の心に重く響いてゐたのであつた。

その後二十年間、私は四季の附錄號には殆んど絕えず寄稿を續けた。五六回脫けてゐるに留まるであらうと思はれる。一つは私が約束を嚴守するためでもあらうが、瀧田君でない人が編輯してゐたなら、かういふことは決してなかつた筈だ。私が傑作を書いてゐた譯でもなければ、世評が何時も私に甘かつた譯でもなかつた。しかし瀧田君は私の原稿に對して、一度もいやな顏をしたことがなかつた。以前は惡評に對しても、私自身よりも瀧田君の方が憤慨することがあつた。

近年の氏は、文學に對しては以前ほどの熱意は有たなくなつたらしく、雜誌界の風潮も變つて來たらしいが、それでも、私の寄稿に對しては時々手紙や端書で感想を送つてくれた。「今回のお作は非常の御傑作にて……」と書出すのが、最近の瀧田君

の推讃の型であつた。他の作家も屹度こんな手紙を貰つてゐるに違ひない。

氏は肉體が强健で、精神も快活で、享樂主義の實行家であつたのに關はらず、私がかつて不眠の苦しみを訴へて、よく眠れる人を羨んだ時に「しかし、不眠の經驗のないやうな人は詰らない人ぢやありませんか」と云つて、氏自身も、物を思つて眠れない夜があると話してゐた。果してさうであつたのだらうか。

活氣旺盛であつた往年の瀧田君が、私の作品を愛讀してゐたといふのは、今考へると少し不思議なやうでもあるが、二十年の間私に對して空お世辭を云續けてゐたとも思はれない。

數年前、私は氏に向つて、「時勢が大部變つて來たから、僕は、少し中央公論に遠慮しようか。附錄號に出さなくてもいゝよ」と云ふと、氏は、

「そんなことはありませんよ。新作家にいゝのがありますか」

と答へた。

「君も年を取つたから、次第に時勢に遲れて來るだらう」

「なあに。世が變つて、自分の氣に入らない原稿で雜誌をつくらなくちやならんやうになつたら、わたしは社をやめますよ」

と、氏は斷言した。

瀧田君は病氣に罹らなくつても編輯稼業をやめるべき時期が近づいてゐたことが、私にも察せられる。何までも衰運に向はないで、生通す譯には行くまい。

私と氏とは、原稿に關しては、終りまで互ひに不快な思ひをしないですんだのだが、たゞ一度私は氏に對していやな氣持に襲はれたことがあつた。それは私の書を一度氏にまき上げられたことである。私は幸ひに字が極めて下手であるために、書畫蒐集家として本職以上に名高い氏も、私にだけは色紙や短册を書かせようとする好奇心は起さなかつたらしいが、中央公論四百號（?）の紀念號に、小生の小說中の文句を瀧田君指定のまゝに、唐紙に二三枚書かされた。私は多分、紀念號に掲載するためだらうと察したので、職業上の義理として、電報の催促に應じて揮毫して送つたのであつたが、あとで聞くと、それは瀧田君の私有に歸したのであつた。私は不快に感ずるのみならず不都合だと思つた。麻田氏は、「瀧田が大變喜んでゐました。書風が面白いと云つてゐました」と云つたが、私はそれがお世辭でないとしても、少しもうれしくなかつた。

時によると、瀧田君は作家の原稿の使ひ滓をも保存してゐるさうだが、果してさうであるならば、私のだけは破るか燒すかして貰ひたいものである。保存されるだけならばまだしも、他日若しも賣買の市場に上されるやうなことがあつたら、私が恐

人瀧田君に對する懐しい追憶に一つの汚點を付するやうなものである。かつて大阪の柳屋の目録に、私の拙劣至極のある原稿が出てゐたのを見て、それを賣つた雜誌社に對して憤りを感じたことがある。

私は、瀧田君から送られたハガキや手紙は、他の知人のそれ等と同樣に、一切灰にしてゐる。私の書いたものも願はくはかくありたし。

黒紋付の羽織

眞山青果

讀賣新聞に出てゐた秋聲氏の話には、大學時代の瀧田君が黒木綿の紋付羽織を着てゐるやうにあつたが、あれは慥か黒の手織紬ではなかつたかと思ふ。木綿でも紬でも同じやうなものだが、わたしは同君を想ひ出すと、必ずあの羽織が目に浮んで來る。その頃からやゝ胸高に帶をしめる癖があつて、袴は初め茶縞の小倉袴であつたが、間もなく同じ縞の米澤か何かにかはつたやうに記憶する。袴も羽織もキチンと身に着ける方なのだが、袴の後裾がこゝろもちずり下つて、胸が開いて、羽織の衿が少し拔衣紋になる癖があつた。誰かゞ揶揄つて按摩さんと呼んだら瀧田君は眞面目にそれを氣にして、女中の鏡など借りてしきりに衿つきなど眺めてから、プンと上唇の人中を齒から離して、「それ程でもありませんよ。」と實に苦く笑つたことがある。然う、あの唇も思ひ出される。その頃の瀧田君は何か議論になつて先輩などに壓しられると、初めの間は「然うかしら。」「然うだらうか。」と苦笑ひしながら自說を支持してゐるけれど、最後にはいつも上唇の人中をプンと膨らませて、明かに不愉快さうな沈默に入る人であつた。氣をつけて見ると、その時には必ず尖つたゞけの上唇が少し蒼褪めてゐた。大學の制帽を少し阿彌陀にかぶる癖があつた。下駄の踵をズル〳〵引擦るのも癖で、これは自分でも氣がついてゐたから、後には然うでな

くなつたかも知れない。學生時代からかなり穿物は吟味してゐた。

瀧田君を想ひ浮かめると、あの黒紬の羽織だけが目に殘つてゐるのだから、わたしが同君と親しくした時期は、多分瀧田君の大學時代を主としてゐるのだらう。明治四十一二年から三四の間に過ぎない。然しわたしは獨歩氏の死後出入二年間ほど飯田町の飯田館に下宿してゐて、瀧田君の家とは一二町とも離れてゐなかつたのと、且つその頃はわたしの中央公論に創作發表時代であつたので、朝夕往來して相互のために酒食の惡友となつてゐた。瀧田君にすると丁度それが、同君が大學をやめるやめないの煩悶時代で、わたしが知つてゐる限りでは同君の颱風時代ともいふべき時であつた。親思ひの瀧田君は總ゆる悔恨よりもたゞ尊大人に憂慮をかけることが苦しかつたらしく、朝から教科書を懐にしてはわたしの宿に來て、終日蒲團のなかに潛り込んでゐるやうな日が多かつた。そして酒を飲んではよく泣き、懐にナイフなど持つてゐた。その頃からわたしは酒以外の遊蕩味を解さない男であつたし、また瀧田君はなるべく弱點を他に示したがらぬ人であつたから、神樂坂や富士見樓で毎晩酒は一緒に飲むけれど、何がそれほど瀧田君の煩悶になつたのか、それは今でもわたしには分らないが、兎に角醉ひさへすれば必ずお父さんのことを云ひ出して、酒亂のやうに暴ばれ廻つた。路順だから歸りには大抵わたしが瀧田君を送つて六丁目の育英舍（?）の門前まで來るのだが、同君はまたそこでわたしの手を握つて、「おやぢには濟まない。おやぢは聖人だ。」と云つて泣く。何日かなどは別れて町の曲角に來て振り返つて見ると、瀧田君はまだ門柱に縋つて大聲に慟哭してゐた。

蘇峯先生を訪問して初めてその苦悶を訴へて、或る援助と慰藉を得て歸つて來た日の光景は今でも宛然として目に見える。竹越三叉氏を訪問したのは僅かその數日後であつたらう。わたしはあの前後一月ほどの瀧田君の懊惱煩悶を思ふと、今でも涙が催されて來る。瀧田君は後にそれを百枚ほどの小說に書いて來て、その中の四五枚を飛び〳〵にわたしに讀ませて批評を徵んだことがあるから、多分その原稿は同家の筐底に藏されてゐるだらう。終夜箱根の山中を彷徨して、ゲツソリと痩せて歸つて來た時の姿などは、見るも傷々しく思はれた。その時もやはり尊大人の話をして泣いてゐた。わたしは今この小文を稿しながら、當時の學友か友人の間にあの時の瀧川氏の苦悶の內容を知つてゐる人があつたら、その人等と話し合つて見て、なるべく明かに書殘して置きたいとさへ思ふ。なるほど誘惑には弱かつたとの非難に受けるかも知れないが、同時に瀧川君がいかに

正直に善良に純潔にこの人生を眺めてゐたかといふことが證明されるだらうと思ふ。わたしは瀧田君を辱しむるために、この小文を書くのではない。

瀧田君を憶ふ

小山内薫

「たうとう仲直りをせずにしまつた。」

瀧田君が亡くなつたと聞いて、私が直ぐ思つたことはこれだつた。

中澤臨川が生きゐる時分に、一度口を利かなければと始終さう言つてゐた。その臨川が死んでしまつたので、間に立つ人もなくなつてしまつたところへ、今度はまた當の相手の瀧田君が他界してしまつた。

私は永久に瀧田君と和解する機會を失つてしまつた。

瀧田君も强情だつた。私も强情だつた――それにまだ兩方とも若かつた。

喧嘩といふ程の喧嘩をしたのでもなかつた。今になつて考へて見ると、私の方にも隨分落度はあつた。

「高師直」といふ小說を二回續きで中央公論へ出して貰つた時だつた。第二回目の原稿――それも實は第一回分と一緒に出す筈だつたが遲れたのだ――が、ひどく遲れて、締切間際になつても、日に五枚七枚とぽつりぽつりしか出せなかつた。瀧田君はたうとう癇癪玉を破裂させてしまつた。もう少しで原稿を渡し切るといふ間際に、今度の作はだめだといふやうな猛烈な惡評を書いた手紙に、渡しただけの原稿を添へて送り返して來た。

始めてそんな目に會つたので、こつちもすつかり癇癪を起してしまつた。原稿が遲れたのは如何にも惡いが、何もおれの作を罵倒する必要はない。おれが中央公論へ寄稿をするのは、おれの作を瀧田樗陰に見て貰つて、その批判を仰がうとするが爲

ではない。原稿が遅れたので腹が立つなら、飽くまでもその罪を責めるが好い。おれの作の悪口を言ふ必要はない。とばかりで、すつかり眞赤になつてしまつた。それから、瀧田君のその手紙を三田文學に公表して、これに對する自分の憤慨を披瀝し、同時に「高師直」の續稿を同じ雜誌で發表した。

それつきり瀧田君と私との交通は絶えてしまつたのだ。赤坂田町にゐた時分だから、もう八九年にもなるだらう。

その癖、瀧田君と私とは隨分古くからの馴染だつた。私が角帽をかぶつて始めて帝大の門を潜つた時、丁度瀧田君も一緒にはひつて來たのだ。しかも、瀧田君は初め文科にゐたのだから、同じ教室で毎日のやうに顏も合せた。エック先生のラテン語で苦しめられたことも同樣だつた。

その後、いつの間にか瀧田君は法科へ移つてしまつた――なんでもラテン語に閉口したのだと云ふ噂だつた――その內、法科にもゐなくなつてしまつた。

餘程たつてから中央公論の名編輯者として瀧田樗陰の名が喧傳されるやうになつた。會つて見ると、それが當年の絣の和服に角帽の瀧田君だつたので驚いた。

はじめて何を寄稿したかは、今ちよつと思ひ出せないが、私は瀧田君のお蔭で可なり多くの作を中央公論に載せて貰ふことが出來た。中でも「江島生島」と「英一蝶」とでは隨分、多くのペエジを割いてくれた。それは今でも感謝してゐる。

田町時代には、雜誌の用事以外でも時々訪ねてくれた。もうそろそろ書畫に凝り始めた時分で、私の家に死んだ親父の遺した賴山陽の幅やら手紙やらがあるといふ話をすると、是非見せろといふので、熱心にやつて來た。親父の形見だといふので、眞僞も究めずに納つてあつたものだが、瀧田君にも鑑定がしつかりつかないので、それを機會に或專門家に見て貰つた。ところが全部が僞筆だといふので、瀧田君も私もがつかりしたやうな滑稽もあつた……

それが「高師直」の一件で、全く交通が杜絕してしまつたのだ。

貧弱な一作家にとつて、一流の雜誌編輯者と隔絶するといふことは可なりな打擊だ。私はそれ以來まじめな作を發表する公の機關を全く失つてしまつた。だんだん考へて見ると、自分の書くものはどれもこれも實際くだらないものかも知れないと思ふやうになつた。一時は氣色ばんだが、自分の才能では瀧田君に兜を脫がせるやうな作は、到底今後書けさうもないと悲觀するやうになつた。

それ以來、私は文壇に小說家としての自分の存在を消してしまつたのだ……—

甚だ意氣地のない告白だが、事實だから爲方がない。

だが、私はそれつきり瀧田君と顏を合せないわけではない。會などでは時々會つた。會へば必ず笑つて挨拶をし合つた。殊に或婦人が洋行をする時の送別會などでは、可なり親しく話した。その席上で、いろいろな怪談が出た。すると、直ぐその明くる日、瀧田君は使をよこして、何か實驗した怪談を中央公論へ書けと言つて來た。私は斷り切れずに、それを書いた。

すると、君は瀧田とあれ程の喧嘩をして置きながら、中央公論へ書くのは怪しからんと言つて詰問して來た友達があつた。私は「あれは雜文だ。作ではないから、構はないではないか。」と辯解したが、本當の私の氣持にして見ると、もうその時分は、作を書けと言はれたにしても、或は書いたかも知れなかつたのだ……

なぜと言へば、私は個人としての瀧田君にはどうしても惡い感情が持てなかつたからだ。何しろ古い馴染で、會へばあの通りの快活な人間だ。暗いところの少しもない人間だから、離れてゐれば格別、會へば決して怒つた顏は出來なかつた。

私との喧嘩だつて、冷靜に考へて見れば、兩方の肝癪の衝突で、それが双方の强情で持ち續けられたといふだけの代物で、決して不俱戴天の仇同志でも何でもないのだ——中人さへあれば、直ぐにも和睦は出來たのだ。

さういふわけだから、私が中央公論へ書く書かないの問題は別として、喧嘩をしたなり死なれてしまつたといふことが如何にも心殘りなのだ。

だから、お葬ひの時には、よつぽど出かけて行つて、一抹の香を薫じやうと思つたのだが、通知もないのにそれも差出がましいと思つて、たうとうやめてしまつたのだ。

甚だ粗雜極まる文章だが、せめてこれを故人の靈前に捧げたいと思ふ。

最後に、これは瀧田君のしたことか、麻田社長の好意か知らないが、さういふ事件があつたにも關らず、その當時から今日まで凡そ十年近く一月も缺かさずに中央公論が私の手許へ送られたといふことは驚くべきことだ。少しでも緣が遠くなれば雜誌の發送を中止するのが當節なのに、これは又何といふ寛大な處置だらう。

私はこの一事に對しても、この際自ら進んで故人の靈に宥免を乞はなければならない。(十月十二日)

瀧田君の思ひ出

谷崎潤一郎

僕が瀧田君を初めて知つたのは、明治四十三年のことで、その時分僕は神田南神保町の兩親の許にゐた。瀧田君は誰の紹介もなく、その神保町の家に訪れて來たので、會つてみると、三田文學へ出した僕の「飈風」と云ふ小說が面白かつたから、「中央公論」へ何か書いてくれと云ふ話であつた。その時僕の書いたのが「秘密」と云ふ短篇で、それが僕の小說の「中央公論」に載つた最初のものであつた。その次に書いたのが「惡魔」前篇で、その時分僕があまりづべらをしたものだから、ちよつと仲違ひの樣になつたが、それから一年位の間は、瀧田君の方からも賴みに來なければ僕の方からも行かなかつた。そのうちに長田幹彥君か誰かを介して、「もう何とも思つてゐないから何か書け」と云ふ話で、「惡魔」後篇の筆を執つた。その頃の瀧田君は、ちやうど今の改造社長山本君の如く精力旺盛で、原稿の催促なら京大阪まで追つかけて來る勢であつた。それで「惡魔」の後篇を書いた時には、築地の下宿屋に附きッきりで、僕が鉛筆でどんどん書く、それを傍から受け取つて瀧田君が淸書すると云ふ熱心さ、遲筆の僕も最後は夕方から夜までかゝつて、一氣に二十七枚近くも書いた。「あなたがこんな勢で毎日原稿を書いたら倉が建ちますね」と瀧田君は笑つてゐた。その下宿には木村莊太君もゐて、その晚三人で葡萄酒を飮んだ。その時のことは瀧田君も何かに書いてゐたやうだが、今になると一番思ひ出が深い。その後、瀧田君は始終やつて來て、雜誌「改造」が生れるまでの僕の創作は、殆んど「中央公論」に載つたと云つてもよい。瀧田君の催促は非常に巧妙で、別にくどくどしやべるのでなく、門口に俥を待たしたまま「御免」と云つて玄關に現はれる、そして、土間に立ちながら忙しさうに二言三言云ふだけで、五分か十分で歸るのだが、それが一種の氣合とでも云ふのか、實にききめがあつた。いやだと思つても、あの靑ら顏の

はち切れさうな樣子を見ると、どうしても斷り切れなかつた。「僕は君の顏を見ると、まるで試驗が來た樣な氣がする。」といつたことがあつた。

瀧川君の創作を見る眼は、鋭くはあつたが偏つてゐた。殊に晩年は一層偏つて來たと思ふが、しかし自分のいゝと思ふものは商賣氣を離れて賞讚し、必ずしも流行を趁はず、一定の自信と方針とを持つて編輯の任にあたつてゐたのには敬服する。

最後に瀧川君は、死を覺悟して太く短かく生きようとするやうに見えたが、それなら君は徹底的に自分の主義を貫いた譯だ。しかし此の間聞くところによると、晩年には何處かへ轉地をして、物欲を絕ち、靜かに餘生を樂みたい氣もあつたと云ふ。それならもう少し早く氣がついてくれればよかつた。なかなか聰明な人だつたから、さう云ふ閑寂な境地に還入つたなら、又別な風格を出したと思ふ。それとも人間はどんなに覺悟をしてゐても、死際になると、さう云ふ弱い氣になるものだらうか。

とにかく今死んでも當人は口惜しくないかも知れぬが、もつと生かして、又別の瀧川君を見たかつたと思ふ。文壇の名物男がゐなくなつたのは、矢張りわれわれに取つては寂しい。

瀧田哲太郎年譜

明治十五年　六月二十八日秋田市手形新町に生る。瀧田以久治の長男、母はよし。

明治二十一年（七　歲）保戶野小學校に入る。

明治二十八年（十四歲）秋田中學校に入る。

明治三十三年（十九歲）仙臺第二高等學校に入る。

明治三十六年（二十二歲）九月東京に出で籍を東京帝國大學文科に置く。十月「中央公論」海外新潮欄に外國新聞雜誌切拔の飜譯を擔當す。

明治三十七年（二十三歲）九月志を變じて法科に轉じ、十月初めて「中央公論」記者となる。

明治三十八年（二十四歲）六月阿部氏千代子を納れて妻とす。

明治四十二年（二十八歲）十月「國民新聞」記者を兼ねしも數週間にして罷む。廢學せしも此頃ならむ。

明治四十四年（三十　歲）三月より五月まで輜重輸卒として弘前聯隊に勤務す。

大正元年（三十一歲）秋「中央公論」主幹となる。

大正七年（三十七歲）五月肺炎を患ひしも月餘にして癒ゆ。

大正十年（四十　歲）十二月喘息を病み翌十一年三月まで病褥に橫はる。

大正十二年（四十二歲）八月母を喪ふ。

大正十三年（四十三歲）十一月喘息再發し併せて腎臟を害ひ二十四日より臥床す。年を越えて癒えず。

大正十四年（四十四歲）病聊か怠るを以つて五月一日より七月六日まで出社す。七月十三日遽かに昏睡狀態に陷り朝より暮に至るまで人事を省せず。八月十九日再び昏睡狀態に陷る。十月二十一日主幹の職を辭す。十月二十七日午前十時逝く。法號は天眞院樗陰朗徹居士。

飯田町の倶樂部

長田秀雄

瀧田君が亡なられたのは、私どもの年輩の者にとつては、實に寂しい氣持がする。四十二三と云ふ年輩は敢へて御幣を擔ぐ譯ではないが、一面人間の成熟期であるとともに、確かに厄年と云ふ氣がする――この年齢を持ちこたへると、生理的にも心理的にも、また、新らしい生活が始まつてくるやうだ。

だが、然し瀧田君の死は寂しいけれども、いかにも瀧田君らしい一味の明るさを感ぜしめるところに面白味がある――私はそれを考へると自づから微笑まれるのである。元來、東北人であるのに、瀧田君には、暗鬱な氣分が少なかつた。素朴なところはまさに東北の味だが、明るい血性的なところは、どうも南國の人らしかつた。晩年になつてからは、餘程、氣むづかしくなつてゐたやうであつたが、若い時分には直截な實に明るい人だつた。

瀧田君は病氣がすこしよくなると、すぐ、好きな芝居に出かけた――私が最後に新橋演舞場の廊下で形容枯槁した瀧田君を見かけたのは、つひ、この夏の事であつた。既に幾度か重態を傳へられた後の事であつた。瀧田君の沒後、木佐木君からきくと、角力の來年の場所を、死ぬ少し前に買つたさうであるが、かういふ點もいかにも瀧田君らしい事である。

「五年や十年生命をのばしたつて、自分の好きな事が出來なきやつまらない」と平生云つてゐたが、恐らくこれが瀧田君の本當の心持であつたであらう。

晩年はお互に忙がしいので、さう始終會ひもしなかつたが、まだ、瀧田君も私も二十七八の時分には、よく一緒になつたものであつた。その頃瀧田君は父君が飯田町に秋田縣人の塾を開いて居られた關係上、飯田町に住んで居た。

私も丁度、父親が醫者をしてゐたので、飯田町の父の家の二階に弟の幹彦と一緒に居候をきめてゐた。

出端がよかつたのと、氣兼がいらないので、私の家には、つ

ねに客が絶へなかつた。交友間では私の家は飯田町倶樂部で通つてゐた。瀧田君も、よく校正の歸りや、作家を訪問した歸りに私の家へ立寄つた。

晩年は恐ろしく肥滿してゐたが、まだ、その頃までの瀧田君は、どちらかと云へばやせた方であつた。始め知合になつたのは、何でも瀧田君の一家が、私の父の診察をうけて居られた關係であつたかと記憶する。まだ、その時分、瀧田君は、大學の法科に通つてゐた。そして、片手間に中央公論の記者をしてゐたのであつた。いや、中央公論の記者をして片手間に大學へ通つてゐたと云ふ方が至當のやうであつた。

その頃の瀧田君の雜誌に對する熱情は、それこそ我々仲間の驚歎する處であつた。始終瀧田君の懷中には、當時の流行兒であつた永井荷風氏や、眞山青果氏の原稿が入つてゐた。瀧田君は自分がその席につらなつてゐる間は、きつと自分一人でしやべつてゐなければ、氣がすまないやうであつた。思ふだけしやべつてしまふと、他人の言葉には耳も傾けないで、さつさと歸つてゆくと云ふ風であつた。で、來ると、すぐ、文學の話をしだして、懷中から永井氏や、眞山氏、或は小栗風葉氏の原稿を出して自分の愛誦する文句を我々に示し、こつちの同感すると否とにかゝはらず、歎賞これを久しうして、歸つて行つた。

まだ、その頃は、中央公論が今のやうに大雜誌にはなつてゐなかつたが、雜誌が出ると、よく瀧田君は東京堂の店頭に長い間立つてゐて、中央公論の賣れる樣子を見て來ては、我々に話したものであつた。

お互に酒が好きであつた關係から、よくその頃は會飲したが、酒席に於ける同君が、また、頗る振つてゐた。

當時、有名な美人の女義太夫に美光と稱する者がゐたが、瀧田君は、この美光と一緒に義太夫を習つたと云ふので、宴席では、きまつて、義太夫を語つたが、直情徑行、敢て他人に氣兼ねもせず、興の湧くまゝに數段を語りぬく……と云つた風であつた。

とも角も、すべての行動が將來の名物男たる事を裏書してゐた。元來短氣であつたから、よく人と喧嘩もしたが、それを長く根にもつと云ふ風ではなかつた。瀧田君は大學をよすとすぐ國民新聞に入つたが、國民新聞には、二三ケ月しきや居なかつた。それまで木綿の袴にインキの痕のあるのをはいて、[illegible]をかぶつて歩いてゐた瀧田君が、ある時、リウとした姿（なり）をして、私の飯田町倶樂部にあらはれたので、坐にある者は、皆驚いて同君の姿をじろじろ見た。我々は、まだ親がかりであつたので、紺ガスリが關の山だつただけ我々の驚きは一層大きかつ

た。さすがの瀧田君も、大てれにてれて、國民に入つた理由を說明したりしてゐたが、それから、瀧田君の美服趣味が始まつたやうだつた。

飯田町の倶樂部は、大正五年の始めまでつゞいた。あの倶樂部に始終きてゐた人の内で老紅速洞は病み、瀧田君は死んでしまつた。

瀧田君との交渉

里見弴

大正四年十二月頃、大阪にゐて、金に困つてゐる最中、突然瀧田君から手紙で、中央公論に小說を書けと云つてよこした。その封筒に「有」といふ字を書きかけ、それを上から太くなぞつて、私の本名山内英夫に直してあつたのを見て、これはきつと、次兄の生馬がどこかで瀧田君に會つて、私が金の必要に迫られてゐることを話し、よかつたら何か書かしてやつてくれ、と賴んだのではないかな、と思つた。長兄武郎は、無論その時分まだ文壇人とは緣がなかつたから、どうも生馬の推挽によるものらしく思はれる。變な性分で、そんなことを、今もつて生馬にも、また瀧田君の生存中にも、ちやんと確めてみたことはないが、多分それに間違ひないと思ひ、その點、心私かに生馬に感謝してゐる。——これが瀧田君との交渉の初り。

翌五年正月麴町五丁目の裏通りに、始て世帶のもちたて、手俥で乘りつけて來て、二月號の小說を賴まれた時が初對面。

爾來十二年の正月號まで、年にいくら少くても三つや四つは、賴まれて書いてゐた。ところが、その年の四月號の原稿が、どうしても書けないで、大テコズリにテコズラせたため、ぱつたり交渉が絕えて了つた。その後「隨筆」で各誌の編輯者の苦心談といふやうなものを集めてゐたなかに、瀧田君が、こつちの名前に出さずに、大分ひどくあたつてゐるのを見た。腹は立たなかつたが、年中變のない、安ッぽいまねをするな、とは思ひ、私かに君のために惜んだ。

去年の歳尾だつたか、諏訪三郎君が、婦人公論の用でこられた時、こつちではなんとも思つてゐないが、瀧田君はまだ根にもつてゐるのかしら。前借も殘つてゐることだし、僕の方では、書けと云へばいつでも書くんだがな、と話したところそれを諏訪君が通じてくれたので、またこの四月號から書くことになつた。

以上が瀧田君と私との交渉の大體で、知り合つてから可なり久しくなるが、私交はほとんどなかつた。十一年の歳尾に、鎌倉の香風園で仕事をしてゐた私を尋ねて來た時に、晩飯くらゐは一緒に食べたこともあり、澤山字を書かされたりして、多分一晩泊つて行つたかと思ふが、ゆつくり話しこんだのは、あとにもさきにもまづその時一遍くらゐのものだ。その時分には、鯉を飼ふことにこつてゐて、頻りに鯉の美を説いてゐた。

また田山先生におこられた時の話も面白かつた。だが、早口の上に秋田辯で、時々私には話の聞きとれないところがあつた。

二度目にまた中央公論に書くやうになつてから、二度ほど手紙で用を辨じてやつたことがあつたが、遂に返事をくれなかつた。尤も、その時分にはもう自分では筆が執れなくなつてゐたらしかつたが、それにしても心から釋然としてゐたものなら、代筆でもなんとか云つてよこしさうなものと思ひ、少し病が怠つたら、一度こつちから尋ねて行つて、またもとの天空快活な笑ひ聲を聞かうと思つてゐるうち、たうとう今度のやうなことになつて了つた。

詳しく書けば、まだ多少話になるやうな話もあるが、あまり私事に亘るからこれで擱筆する。

狹い一側面

中條百合子

私が、初めて瀧田哲太郎氏に會つたのは、西片町に在つた元の中央公論社でゝあつた。大正五年の五月下旬であつたらう

か、私は坪内先生からの紹介で二百枚ばかりの小說を持ち、瀧田氏に面會を求めて行つたのです。

留守かと思つたら、幸ひ社に居られた。小さい木造洋館の石段から入つた直ぐのところに在る應接室で待つてゐると、程なく二階から狹い階子を降りて一人の男の人が出て來た。體ぢゆうの線が丸く、頰つぺたがまるで赧い。着流しであつた。紺足袋に草履ばきで近づき、少し改つた表情で挨拶された。

「私が瀧田です」

言葉の響の中に、つよい北方の訛があつた。その訛が、顏や體に現れる微細な動き、調子とひどく調和して居て、一種性格的なものを感じさせる。——私は、この特徵に富んだ人をどう理解してよいのか分らなかつた。赧い赧い頰、それと極めて鮮やかな對照をなしつつぽや〳〵つと情熱的にほやついて居る漆黑な髮、特色ある早口、時々私を視る眼光の鋭さ。生活力の横溢が到るところに感じられた。同時に、單純でない何ものか——謂はゞ狷介といふやうなものをも一面感じられる。——

私は、自分からは、どう出てよいか分らず、瀧田氏から訊かれる事だけを答へた。忘れたが、きつと、いつからものを書いて居るか、と云ふやうなことであつたらう。原稿は置いて歸ることになつた。どういふきつかけからだつたか、瀧田氏はその時

「あなたは、一生本當に文學をやつて行く氣ですか」

と訊いた。私は、其質問を寧ろ意外に感じた。勿論その積りなこと、さうでなかつたら始めから來はしなかつたらうと云ふ意味を答へたのを覺えて居る。

——初對面の時の、この一口で云へない瀧田氏の印象は、今も猶そのまゝに遺つて居る。然し、氏がどんなに中央公論を愛して居るか、ジアーナリストとしての仕事を愛して居るか、其ばかりは當時の私にでもはつきりと分つた。氏が雜誌につき、計畫について話す調子には、いつも見えざる焔があつた。知らず識らずの間にその熱が聽手にも移つた。瀧田氏は瀧田氏で雜誌について喋つて居るのだが、聞いて居るうちに聽手は聽手で、又、聽手自身の仕事に一種の張合や熱中を感じて來る——其那傾向があるのであつた。論文でも、文學的作品でも、よいのが集まると、氏は、實に悅んでそのことを話した。瀧田氏のそのよろこびは、單に、雜誌の編輯者といふ立場からばかりでは決してなかつた。氏自身、藝術鑑賞上一見識を持つて居、藝術愛好者としての純粹な亢奮が伴ふのであつたらしい。氏が、ジアーナリストとして他と違つて居た大きな點は此處にもあつた。よい藝術品を得たい熱情が、編輯者としての利害と結びついた

形であつた。

瀧田氏に會ふのは、一年に僅か數度であつたが、其時分、氏はいつも、奥ゆきのたつぷりした俥に來つて來られた。羽織、袴であつた。そして、早いうちから、まだ夏になりきらないうちから、勢よく扇を使ひ〳〵話す。田中王堂氏の原稿は、書き入れ、書きなほしで御本人さへ一寸困るやうだとか、多分藤村氏であつた、有名な遅筆だが、（鵠沼の東屋でゝもあつたのだらう。）おくれて困るので出先まで追つかけて、庭越しに向ひ合はせの座敷をとつて待つことにした。さて藤村氏の方はどんな工合に行つて居るかと硝子障子のところから見ると、一字書いては煙草を吹かし、考へ、考へ、やつと一字書いたが、消す。煙草、煙草、又一字、といふ風で、自分まで實に辛かつたとか。其那斷片的な話をよくされた。二十前の小娘を相手では瀧田氏もその位の話題しか見出せなかつたのだらう。丁度、田村俊子氏の生活が動揺し始めた頃であつたと見え、非常に疲勞の現れた作品を送つてよこしたといふことも聞いた。素木しづ氏も存生で、一人お子さんが生れた當時であつた。生活が樂でなく、困り抜いた揚句であつたらう。深夜、一臺の俥に脚の不自由なしづ氏と赤ちゃんが乘り、良人であつたU氏が傍について西片町の瀧田氏を訪ねて來られたのださうだ。金策の相談があつた。けれども、瀧田氏は、誰でも知るあの言葉つきで

「斷りました」

と云つた。

「なぜ？」

「私は一さい情實に捕はれないことにして居ます……書いたものを買ふなら別だが」

一つの挿話にすぎないが、私は、氏の編輯者道とでも云ふべきものゝ一端を見るやうに思つた。

大正九年の初夏に一度西片町の家を訪ねたことがあつた。二階の部屋に通された。そこには、氏の特に愛藏する夏目漱石氏の書、平福百穂氏の繪などが豐富に飾られてあつた。別に、鴨居から一幅、南畫の山水のちやんと表裝したのがかかつて居た。瀧田氏は、ぐる〳〵兵兒帶を卷きつけた風で、その前に立ち

「どうです、これはいゝでせう」

と云つた。筆の細かい、氣品のある、穩雅な畫面であつた。

「誰のです」

「それが、私は（確な名を忘れた）××だと思ふんですが、落款がないんです、手に入れた時、夏目さんに見せたら、こりやあいゝと云つて居た」

書齋の方に座つて、陶器の話などした。私の父がこの頃少し凝りかけて居たので、自然其那方面に向つたものと見える。其那時も、氏は元氣よい話手であつた。そして、日本畫壇の、所謂大家といふものに對して、率直な不滿を洩した。平福氏の畫が好きなのは、その人格がすきだといふ話も聞いた。畫壇に於てばかりでなく、各方面に、さう云ふ、或見識に立脚した批判と選擇を持つた人であつた。

考へて見るのに、私は瀧田氏の極小部分しか知らない。而も、その小部分に餘程、弱音器がかけられて居ると思ふ。大人は子供に水を割つた葡萄酒を飲ませる。——其那意味で、ひとりでに、極自由な、溌溂と全幅の眞面目を發揮する氏の風貌に接する機會のなかつたのは殘念であつた。

瀧田君と僕と

芥川龍之介

瀧田君はいつも肥つてゐた。のみならずいつも赤い顏をしてゐた。夏目先生の瀧田君を金太郎と呼ばれたのも當らぬことはない。しかしあの目の細い所などは寧ろ菊慈童にそつくりだつた。

僕は大學に在學中、瀧田君に初對面の挨拶をしてから、さつと十年ばかりの間可也親密につき合つてゐた。瀧田君に鮭鮓の御馳走になり、烈しい胃痙攣を起したこともある。又雲坪を論じ合つた後、蘭竹を一幅貰つたこともある。實際あらゆる編輯者中、僕の最も懇意にしたのは正に瀧田君に違ひなかつた。しかし僕はどういふ譯か、未だ嘗て瀧田君とお茶屋へ行つたことは一度もなかつた。瀧田君は恐らくは僕などは話せぬ人間と思つてゐたのであらう。

瀧田君は熱心な編輯者だつた。殊に作家を煽動して小說や戲曲を書かせることには獨特の妙を具へてゐた。僕なども始終瀧田君に僕の作品を褒められたり、或は又苦心の餘になつた先輩の作品を見せられたり、いろいろ鞭撻を受けた爲にいつの間に

かさつと百ばかりの短篇小說を書いてしまつた。これは僕の瀧田君に何よりも感謝したいと思ふことである。

僕は又中央公論社から原稿料を前借する爲に時々瀧田君を煩はした。何でも始めに前借したのは十圓前後の金だつたであらう。僕はその金にも困つた揚句、確か夜の八時頃に瀧田君の舊宅を尋ねて行つた。瀧田君の舊居は西片町から菊坂へ下りる橫町にあつた。僕はこの家を尋ねたことは前後にたつた一度しかない。が、未だに門内か庭かに何か白い草花の澤山咲いてゐたのを覺えてゐる。

瀧田君は本職の文藝の外にも書畫や骨董を愛してゐた。僕は今人の作品の外にも、椿岳や雲坪の出來の善いものを幾つか瀧田君に見せて貰つた。勿論僕の見なかつたものにもまだ逸品は多いであらう。が、僕の見た限りでは瀧田コレクションは何と言つても今人の作品に優れてゐた。尤も僕の鑑賞眼は頗る瀧田君には不評判だつた。「どうも芥川さんの美術論は文學論ほど信用出來ないからなあ。」――瀧田君はいつもかう言つて僕のあき盲を嗤つてゐた。

瀧田君が日本の文藝に貢獻する所の多かつたことは僕の贅するのを待たないであらう。しかし當代の文士を擧げて瀧田君の世話になつたと言ふならば、それは故人に佞するとも、故人に信なる言葉ではあるまい。成程僕等年少の徒は度たび瀧田君に厄介をかけた。けれども瀧田君自身も亦恐らくは德田秋聲氏の如き、或は田山花袋氏の如き、僕等の先輩に負ふ所の少しもない譯ではなかつたであらう。

僕は瀧田君の訃を聞いた夜、室生君と一しよに悔みに行つた。瀧田君は所謂觀魚亭に北を枕に橫はつてゐた。僕はその顏を見た時に何とも言はれぬ落寞を感じた。それは僕に親切だつた友人の死んだ爲と言ふよりも、況や僕に寛大だつた編輯者の死んだ爲と言ふよりも、寧ろ唯あの瀧田君と言ふ、大きい情熱家の死んだ爲だつた。僕は中陰を過ごした今でも瀧田君のことを思ひ出す度にまだこの落寞を感じてゐる。瀧田君ほど熱烈に生活した人は日本には滅多にゐないのかも知れない。

電報合戦

廣津和郎

自分が瀧田氏に始めて會つたのは、今から足掛九年前の夏だつた。自分はその夏始めて小説を書いて、(その前、學生時分に同人雜誌に二篇程書いたが)それを日頃尊敬してゐる正宗白鳥氏に見せた。そして正宗氏から中央公論に紹介して頂いたのである。

併しそれを中央公論に載せてくれるかどうかといふ確答がなかなか來なかつた。そこで自分は瀧田氏に直接會つて、その返事を聞き、載せて貰へないなら、原稿を取返して來ようと考へた。自分は瀧田氏を訪ねる前に、その頃文章世界の主幹だつた加能作次郎君をたづねて、その話をし、若し中央公論で載せてくれなければ、文章世界で載せてくれないかと頼んだ。加能君は快諾してくれた。

それだから、瀧田氏を訪ねるにも心強かつた。兎に角、原稿のはけ口が極つたといふ事に、無名作家に取つて、これ程氣強い事はないからだ。

瀧田氏の家は同じ西片町でも、その時分には今の家ではなかつた。自分が玄關口で來意を告げると、瀧田氏が現れて來た。

『若し載せて頂けないなら、原稿を貰つて歸りたいのですが』

と自分は云つた。

『さうですか。原稿は社の方にありますから、それでは私と一緒に社の方へ來て下さい』

そこで夏の眞晝の蔭のないやうな往來を、瀧田氏と並んで、自分は同じ西片町の中央公論社(瀧川駒之助氏宅)まで歩いて行つた。瀧田氏と一緒に往來を並んで歩いた事は、この時が始めてで、又この時が終りだつた。

その時の二人の會話――

『あなたのお書きになる評論は、いつでも面白く讀んでゐます。今度のお作は少し文章お粗末ですが、もう少しさういふ點もお

氣をつけになつた方がいいですな。――處女作として世の中にお出しになるのには』と瀧田氏。

『あの作はあれを書いてゐる主人公が中學を出たての男なのですから、僕は文章はあれでいいと思ふのです。寧ろ、もう少し下手でもいいと思ふのです』と自分。

その小說は全部が、主人公の手紙になつてゐるので、自分はそんな風に云つたのだが、併し今考へると、自分の方が負惜みで、瀧田氏の方が、ほんたうで深切な事を云つてくれたのである。

それから、中央公論社の應接室で待つてゐると、二階に行つた瀧田氏が原稿を持つて下りて來た。

『これは何處かの雜誌で發表されるつもりですか？』

『文章世界に載せて貰ふやうに、加能君に頼んで來ました』

『それでは、もう一つお書きになつて見る氣はありませんか。これはまあ點數で云つて見れば七十點位です』と瀧田氏は圓々と肥えた赤い顔の上に、くしやくしやと延ばしてある髮の毛を、物を云ひつつ右の手の指で、ごしごしと掻きながら、『こつちからお頼みした原稿だと六十點以上はまあ及第點ですが、併しあなたの場合は、七十點では處女作としては凡作ですから、八十點、つまり傑作ですな、その八十點以上のものを一つ書いてくれませんか』

これは無遠慮な事を云ふ人間だと自分は考へた。この編輯者は、いろいろな小說家の作に點をつけてゐると見える。自分は苦笑しながら云つた。

『僕は傑作を書かうつたつて、どうなるんだか解らないんですから、あなたの所謂八十點ものが書けるかどうか解りやあしませんよ』

『いや、兎に角、さういふ風に御奮發を願ふ事にして、それでは、この原稿はそれの出來るまで、お預りして置く事にしませう。文章世界に載せるのは、中央公論より一ケ月後にして下さい。それで、今これだけの原稿料は上げて置きます。原稿料は中央公論の方が、文章世界より好い筈です。――それぢやさういふ事に』

瀧田氏は再び奥に引つ込んで行つたが、封筒に原稿料を入れたのを持つて出て來て、それを自分の前のテエブルに置いた。――自分は案外の話になつたのに煙に卷かれながら、併しその時貰つた原稿料で、隨分助かると考へて、外に出て來た。一枚一圓の割だから、八十何枚で八十何圓。今から考へると隔世の思ひがするが、併しその次に文章世界から貰つたのが六十錢だつた事を思ふと、當時の無名作家としては望外の高い原稿料だ

つたわけである。

さうして次に書いたのが『神經病時代』といふ小説で、これが自分の文壇的處女作として中央公論に載つたわけだが、これを書いてゐる中、或日瀧田氏から電話がかかつて來た。そして打合せたい事があるから、中央公論社まで來て貰へまいかといふ事だつた。自分は呼び寄せられるのは不見識だと考へた。それで用があるならそつちから來て欲しいと答へた。(今考へると、そんな事はどつちでもいい事で、その時肩をいからかしてゐた子供らしい自分の生意氣振りに頰笑まれるが——と云つて、別に後悔も何もしないで、無邪氣さを我ながら愉快に思ふが) さうしたら瀧田氏は腕車で自分の下宿にやつて來た。そして『どうも先程はお呼び立てしてすみませんでした』と云つた。

自分よりは瀧田氏の方が餘程大人だつたわけである。

その次に中央公論に書いたのは、『死兒を抱いて』といふ作だつた。この作を書いた時には、自分の原稿が出來ないので、瀧田氏をすつかり憤慨させてしまつた。隨分作が書けないで瀧田氏を手こずらした人も澤山あるが、この時位甚だしかつた例は、他にはないと、先日瀧田氏後任の高野氏が來てさう云つてゐた。——この事は今でも瀧田氏に濟まないと思ふ。

何でも最初それは二月號に載る筈だつた。それで一月十五日までに書く約束で、自分は書いてゐたのだが、どうしても書けないので、一月十四日の夜汽車で三保の松原に逃出したわけである。無論書きに行つたのだが、結果は逃出した事になつてしまつた。そして惡い事には三保に著くと同時に、流感に罹つてしまつた。瀧田氏から電報が日に何本も來る。併し自分は四十度以上の熱に呻吟してゐる。書かうにも書けない。と云つて、十五日過ぎてゐるのに、今更書けないとも云へない氣がする。返信つきの電報が一週間程の間に、二十五六來たかと思ふ。それは重ねるとかなりの厚さに達してゐた。後で聞くと、瀧田氏はその自分からの返電の電報紙を何枚も重ねて、『こんなに電報が來ても』云々と云つて、それで卓を叩きながら憤慨したといふ。

自分はたうとう一緒に三保にゐた宇野浩二に頼んで、中央公論社まで、三保から斷りに行つて貰つた事を覺えてゐる。宇野は東京に行くと江口渙の家に一泊した。さうしたら、それから間もなく江口が流感に罹つた。江口の流感は自分のよりもひどかつた。江口はそれを『宇野が三保から興津の流感を俺のところまで持つて來たんだ』と云つて恨んだといふやうな話もある。(その年は例の流感の烈しかつた年で、文士が澤山かか

た。久米正雄などもえらい目に遭つた。)

その時瀧田氏から長い手紙が來た。一丈に餘る手紙だつた。言々句々、憤慨の迸りの手紙だ。自分は始終居所が一定しないので、轉々してゐる間に、人の手紙はみんな何處かに失つてしまつてゐるので、これもないが、瀧田氏もあんな手紙を書いた事はないだらうから、若しそれがあつたら、此處に發表したいのだが、ないから殘念だ。

『小生雜誌編輯に携りてより十有七年、未だ此くの如く困却仕りたる事無之候』と云ふ書き出しで、非常な名文だつた。何でも他に豫備の原稿が一つもないので、どうとも仕方のないところに、岩野泡鳴氏の三月號に豫定の二百枚の長篇が出來て來たので、それを載せた。併しそのために、雜誌のページ數が三十ページ殖えた。頁が殖えても、普通號故定價を上げるわけには行かない。そのために、紙の損害約二千圓。それから自分の原稿を待つたために、發行日が四日遲れた。發行日が一日遲れる毎に實行が千部違ふといふ。それが四日遲れたのだから、その損害が千何百圓。——そんな事が列擧してあつて、それを寄越された自分の方では、どうしていいのか、唯はらはらして、困つてしまつて、濟まないと思つて、詫びるより外仕方がない手紙だつた。——自分は恐縮して詫手紙を書いた。さうしたら續いて『それでは三月に間に合ふか』といふ電報だ。『間に合ふ』といふ返電を打つと、『間に合ふだけでは安心ならぬ。もつと安心の行く返事をよこせ』といふ續いて電報の追撃。これには返事のしようもない。自分は郵便脚夫が、淸水の方からやつて來て、自分のゐた三保の羽衣亭の門口に這入つて來るのを見る度に冷々した。それからも日に何本來たか解らぬ。

自分は毎日三枚でも四枚でも、出來ただけの原稿を、最終列車に間に合ふやうに、夜江尻の停車場まで持つて行つた。往復八十丁だ。歸りには俥があるが、行きにはない。夜は渡し船もない。それで自分の力で及ぶ限りは一生懸命やつたのだが、たうとう又三月號に間に合はなかつた。——自分が如何に恐縮したかは說明するまでもないだらう。

併しそれを書き上げて、自分は上京して、瀧田氏に會つて詫をしようと思つて、中央公論社にたづねると、氏は非常に上機嫌な顏をして迎へてくれた。

『兎に角、書いて頂けたのですから、感謝します。さぞ大變でしたらう』氏はさう云つた風で、自分の心を明るくしてくれた。

が、その後も、自分はやつぱり原稿の事で度々氏を困らせた。氏が何かに書いてゐた文章の中で、さういふ點では、葛西、廣

津は定評があるといふやうな事を云つてゐた。——氏が如何に職務に熱心であり、如何に全心全身を打込んで戰つてゐたかを思ふと、氏に迷惑をかけた事が、ほんとうに濟まなかつたと思ふ。而も氏を手ずらせながら、自分の方から我儘な相談を持ちかけたりすると、氏はいつでもそれを深切に取計つてくれてゐた。自分はそれを思ふと、氏に感謝したい氣がする。自分は原稿取引以外、氏と私交はなかつた。それだからさういふ方面では、氏について語る事が何もない。

終りに臨んで、謹んで哀悼の意を表す。

（十一月十二日）

瀧田君に關する私記

佐藤春夫

僕二十二才(?)の首夏。君は與謝野晶子先生の紹介狀を持參して、當時牛込矢來町なる僕の假寓を訪はる。「人物評論」の欄に數名の人によつて試みらるゝ「平塚明子論」を僕にも書けと言はるゝ也。この稿、五枚弱、稿料四圓を拜受せるやに記憶す。僕に最初の稿料を與へたる人は實に君なりき。僕が短文は幸に君が認むるところとなりしものの如し。他の知名の士を排して、君は敢て僕が小論を第一位に組まれたり。且つ曰く、今後、もし自信ある製作を得る日あらば先づ來りて予に計るべしと。また、當時僕が、起草中なりしオスカア・ワイルド論の序論約二十枚を、君は僕の辭退をも聞かずして持ち歸られたり。社中同人に計つて、これを發表せしめんとの意を洩されたり。しかも、僕は力及ばずしてこの稿を中絕し、終に君を滿足せしむることを得ざりき。（後年、君は當時を回想し、「かの斷片は今もまだ保存せり、完成を見ざりしを惜しむ。次の機會にはこれを還さむ」と言はれしも、僕は毅然として破り捨てられむことを求めしに、君は重ねて言はれたり、「否とよ、試みに今日再讀し給へ、一種の閃光ありて必ずしも捨つべきにあらじ」と。）同想す。第一の舞臺に於て君は既に僕が知己なりき。

翌年正月某日（？）夜十時半ごろ、本郷赤門前の街頭に於て、ゆくりなくも君と邂ひぬ。君は既に酒氣を帶びたり。辭退する僕を拉して附近の某牛肉店に到りて更に酒を呼びぬ。君、談論風發して時の更くるを知らず。亭婢の注意によりて座を立ちしは十二時過ぎなりき。君と別れて後、僕、俄然として爛醉を發して困却せるを記憶す。

後三四年、僕、終に爲す有るなく君が知遇の言を空しくせり。この間に、僕、偶、谷崎潤一郎と相知り、彼が熱情ある鞭韃によりて、僕は將に破却せんとせる僕のペンを敢て捨てざるを得たり。

僕二十六才の四月、拙作「李太白」成る。これを谷崎に示すに、彼ほぼこれを好しとし發表に就て君に謀らんとす。谷崎の曰く「予、先日、瀧田に面會せるに、夏期增刊の創作に探偵小說集を編まんとす。知られざる才能の士なきやと。予が心當りある旨を告ぐるや、未だその名を明示せざるに、瀧田は即座に佐藤にあらずやと言へり。之をもつて見るに、彼の腦裡、既に君在るが如くなりき。安んぜよ、予、この稿を推さば彼は必ず君が健在を喜びて、紙面を君に貸すならん」と。谷崎自ら立つて、自働電話に到る。當時、君は高熱を病みて病床にあり。（今にして思へば、當年の君が病は君が健康の衰微の第一步に非ざりしか）即座に拙稿を閱讀することを得ざりしにもかかはらず、僕が當時の窮狀の一日も早く稿料を得ざるべからざるを察して、君は病床より人をして谷崎に答へしめて言ふ「佐藤君これを書き、谷崎君これを好しといふ。改めて予が見ることを須ゐざるに似たり。好し、使をして即刻、稿料を贈らしめむ」と。僕、これを谷崎より傳聞し、君が知己の深きに感佩せり。爾來、頻々として君は僕に命じて作を書かしめたり。君は僕の窮狀を救ひ、加之、僕に名を與へたり。僕、不才なりと雖も君が誌上に文字を列べんと企てる每に恒に君が知遇に背かざらむことを期したり。君も亦これを諒とせられたり。

某年十二月、君が誌上に揭げたる某氏の作品は、僕が鑑賞をもつてすれば稍々劣作なりき。當時の一夕、偶、某會場に於て君と會し談餘、僕この事を語りて「どうして彼の作を採用せられたるか」と。忘らず、その時色を成して「どうしてでもいいです」と君は甚だしく、僕の言葉を憤られたり。しかもしばらく無言にして、會場の別隅に立ち去られたり。蓋し、僕の言葉たる今にして思へば甚だ越權なるを知る。君が編輯者としての矜持を傷けたるもの也。君が憤は當然と言ふべきなり。然るに、君は一たびは席を蹴って立ちしも、二十分ばかりの後には再び僕が椅子の傍らに來りて、再び彼の作に就て溫和なる面持にて

論じ初めたり。君は一面に於て僕の直言癖を宥すものの如くなりき。この夜の君は今日も永く、しかも頻々と僕が念頭に浮ぶ。然も、常にこの一些事は無限の好感を僕に與へて、その印象はいよ／＼新なり。その故は、即ち、君の直情徑行を喜ぶ也。また君の自らの鑑識を守ること深きを敬する也。また一夕の後、君がよく僕に試問して、屢々僕の直言を喜び、君も亦僕の爲に直言を惜まざりしに非らずや。僕が君と相談りたるは、その機會に於て頗多なりきといふを得ざるを悲しむと雖、互に巧言と令色とを用ゐざりしを思へば、君と僕との交、必ずしも淺かりしにあらず。但、最も遺憾とするところのものは、僕筆硯を新にして一たび會心の作を君が誌上に寄せて、君が年來の知遇に酬ひんことを約しながら、君が存命中にこの約を果し得ざりし事なり。また枕頭に君を訪ふて談ることを得ざりし一事なり。先年冬日、君が風邪の病床を訪ひて思ひがけなくも君に拙作「都會の憂鬱」を激賞せられたる一日を想起して、病室に於ける君の風貌を纔に推知して自ら慰むる也。

吁、君は名もなき僕を認めたり。この點に於ては僕にとりて君は、唯一の編輯者なりき。今日、君亡きことによりて、僕は一知己を失へり。最も古き一知己を失へり。

瀧田氏について

菊池寛

自分は、瀧田氏とはあまり交渉のなかつた方だ。中央公論に執筆する作家にも瀧田氏係りと然らざるものとがあつた。即ち瀧田氏直接依頼催促するものと、他の記者がやるものとの二つだ。むろん、これは待遇上の區別でなく便宜上さうなつてゐたのであらう。自分は、瀧田氏係りでなく、新進作家の昔より、ずつと高野敬錄氏係りである。今から、七八年前牛込榎町の陋巷に住んでゐたとき、外出先から歸つて來ると、二三尺位な狹い路次の入口に自用車が止つてゐる。おや、自分の家へ來てゐるの

かな、さうだとすると噂にきく瀧田氏の自用車かな（その頃の自用車は現在の自動車に比敵した）と、胸を躍らせて、家賃九圓五十錢の家には入つて見ると、中央公論から來てゐたことは來てゐたが、それは瀧田氏ではなくて高野氏であつた。瀧田氏に初て會つたのはそのとき頼まれた原稿が、中央公論に載つてからである。そのときは、中富坂にゐたが、瀧田氏が高野氏と同行して來られて、夕飯に自分を誘つて燕樂軒を御馳走して呉れた。

その後、瀧田氏の鑑識に叶つて、「忠直卿行狀記」以下の出世作を中央公論で發表することになつたから、自分も瀧田氏のおかげを蒙つた作家の一人であらう。瀧田氏は、自分が發見した作家乃至は自分が世に出したと思ふ作家には、ひゐき强い方で、自分などもその一人として、近來は間に合せな物ばかり書いてゐても、中央公論からは優遇されてゐたのである。

その後、集會の席上とか、三四度催促に來られた外は、殆ど會つたことはない。だが、集會の席上で會つたりすると、非常になつかしさうに例のせき込んだ調子で話しかけられた。

最後に會つたのは、今年の六月新橋演舞場で廊下で「菊池さん、しばらく」と呼びかけられたので振り返つて見たが、あまりに痩せてゐるので、一寸見忘れる位だつた。突嗟には、芝居關係の藝人か何かのやうに、きやしやに見えたほどであつた。令孃を二人同伴して居られたが、氏としては最後のもつとも樂しい一夕であつたゞらう。かうして、死なれて見ると、その時の思出は、長く殘るだらう。とにかく、自分の作品なども、十二分に高く買つて（稿料のことでない）くれた人として、長く感謝の心が殘るだらう。

爽快な氏の生涯

宮地嘉六

もう三年ほど前のことになつてしまつた。或る日の午前に高野さんが突然見えて「瀧田氏があなたに今日社まで來ていたゞ

きたいとのことですが、さしつかへがなかつたら……』とのことで、此の日は私のきらひな佛滅と云ふ日であつたから、何ごとだらうと少々氣がかりではあつたが、その場で直に、まゐりますと返辭した。そして約束の時刻に私は中央公論社に行つたのであるが、意外であつた。瀧田氏は應接間につか〱入つて來て、いきなり、笑顔で私を見て『わざ〱お呼びたてして失禮でした。實は正宗白鳥さんが、あなたの今月の中央公論の作を大へん好いとほめてゐられましたので、社長の麻田さんが喜んで、今日晩餐にあなたをお呼びしてはどうかと云ふことで、おさしつかへがなかつたら、下谷の大金へ來ませんか……』と云ふのであつた。

『ありがたうございます。』と私は始めてかうした言葉に出逢つた人間のやうに感謝した。それから、その日は午後四時頃から八時過ぎまで大金で御馳走になつたが、酒席に於ける愉快な瀧田氏を知つたのはその時が始めてであつた――。夕方から少し小雨が降り出して、あの邊の藝者屋町に一入の情趣をそへてゐたが、酒や料理の物が運ばれる間を裏二階の欄干に寄りかゝつて瀧田氏といろ〱のお話しをしたりした。ほんとに自分はこんな一流の料理屋などに瀧田氏からつれられて來る資格があるのか知ら、何かの間違ではないだらうか、これと云ふのも正宗さんがほめて下さつたおかげであらう……私はその時、心では歡喜に顫えてゐたやうである。

『宮地さん、ほら、あれが此の下谷での××と云ふ名妓ですよ、好いでせう』と瀧田氏は直ぐ目の下の狹い通りを蛇の目をさして、地味な爪かけのついた黒塗の高足駄をはいて歩いて來るやさ型のすんなりした女を指して『ねえお金さん、××もひどく痩せましたね、どうしたんだらう、以前よりはずつと見劣りがしますね。』

『ええ、此の節はどうしたのかひどく痩せましたわ、まるで病氣あがり見たいですわね。』などと女中も云ふ。私はその××と云ふ名妓については何も知るところがないので二人の話しを聞きながら眺めた。今からして故人の瀧田氏と自分とのことを考へてゐると、何故かその時のことが先づ一番はつきり目さきに浮ぶのである。

間もなく藝者が六七人も來た。どれも瀧田氏とは顔馴染の妓らしく、タアさん〱と瀧田氏を呼びかけるのであつたが、その七人の藝者の中に、私の小說の愛讀者と云ふ美妓があつて、瀧田氏は彼の女を私に紹介したりした。

『あなたの肉筆の原稿をほしいと此の人が云ひましたから、[illegible]やりましたよ。此の人はそれを大事にしてゐます。』瀧田氏は私

がそう云はれてすつかり幸福に醉つてゐるのを面白がつてゐるやうでもあつた。何ぞ知らう、その私の小說の愛讀者である美妓こそは瀧田氏と淺からぬ仲のそれであつたのである。

それより以前から瀧田氏とは二三度會見もし氏が好酒家であることや、その他の人となりについてもそれとなく聞いて知つてはゐたが、これほどの粹人とは全く知らなかつたのである。私はやがて氏の都々逸を聞いて感心し、成駒屋の治兵衞の聲色を聞いて更に感心してしまつた。愉快な人だと思つた。多趣味の人だとつくづく思つた。私は十數年間遊びの方面を全く忘却し、むしろ前非を悔いた心で花柳の巷を嫌忌さへしてゐたが、どうやらこの時から下地がうづき出して來るやうで、一種の不安な豫感を覺えると共に、うつかり好い氣になつてはならぬと自分をたしなめた。がいつの間にか醉つてはめをはづしてしまつたやうである。

翌日早速お禮の手紙を出したところ、直ぐ折り返しに瀧田氏からも手紙が來た。先夜の遊びは少しもの足りなかつたから二三日內にもう一度おさそひしたい……とあるので私はいよいよ恐縮してしまつて、どう云つて辭退したものかと心配した。『貴下は都々逸であれ、えんかいな節であれなかなかお上手なのに驚きました。貴下はあまりに用心深くて謙遜すぎる。今度は裸踊りでもやるつもりになつて、さつくばらんに本音を出して如何、それからあの夜の藝者の中で貴下はどれが一番好きですか、それをはつきり伺ひたし』などと書いてあつた。

私は遠慮や謙遜どころではない、自分では少々ボロを出し過ぎたやうで翌朝になつて恥ぢ入つてゐたのであつた。長い間の陰氣な貧乏臭い生活に馴れて創作上の煩悶以外に知らうとしなかつた私には、下谷あたりの一流どころの遊び場は少々華やか過ぎて氣おくれがした。それに仕事に油が乘つてゐたので二度目は辭退した。唯、どの藝者が好きかとの問に對して、私は冗談半分に『矢張私の小說の愛讀者である彼女が好きです…』と返事をした。瀧田氏の好きな妓であることをその時は、うすうす知つてはゐたが白ばくれてさう答へたのである。それから日ならず瀧田氏に逢つた。彼女の方でも貴下に逢ひたがつてゐるから、是非そのうちに貴下の都合のよい時に行かうと云ふ手紙であつた——私はこんなことを書きすぎてはならぬのであるが、然しなまなかなことを此所に書くよりも故人の瀧田氏に對して好いやうにも思ふ——氏はいろいろの人、文士、新聞記者等、氣の合つた人と料理屋へ行つては歡をつくす人であつた。それにしても、私のやうな人間のどこに面白味があつたのか、その時以來、病氣に罹る少し前まで氏は私をよく下谷へひつぱつて

行つてくれた。私のやうな變人でも瀧田氏のやうなさばけた人から見れば、また一種異樣な面白みやおかしみがあつたのかも知れぬ。かやうに下谷へつれられて行つたことばかり書くと、いかにも私は瀧田氏から遊びの味ばかり敎はつたやうになるが、決してそれだけではなかつた。その間にいろ〳〵のよい指導を受けたと私は信じてゐる。瀧田氏はめつたに藝術についての話しや思想問題についてのことなどをする人ではなかつたが、簡單に暗示的にはかなりよいことを云つて私を啓發してくれた。**文壇歷代の大作家とこれまで接して來て、作家については何どとも見透しのつく人であつた**から私の方でもこまちやくれた藝術談などを持ちかけないことにしてゐた。何と云つても私にとつては先人であり、何ごとについても私共の及ばぬ程度のもの知りであつたから氏の片言をも私はあだには聞きもらさぬやうにした。不用意らしく一氣にものを云ふくせの人であつたが、それが皆、立派な犀利な批評であるのに常に私は敬服した。文壇の人、政界の人について、時々寸評をすることがあつたが、それが極めて適確に感じられるのであつた。ゴルキーも好いですが、フロオベルのものなど少し讀んで見てはどうですと云はれて、やつと私はフロオーベルの作を讀みその偉大さを知つたくらゐである。赤いシャツの仲間と云ふ作を見せた時は、もう少し題材に對して高等批評がほしいですなと氏は云つた。生活の沼の原稿を見せた時は非常にほめてくれた。そして一作毎に稿料を增してくれるので物質的にもどれほど私は救はれたか知れない。急いで書かされた時などは少々全體のまとまりに氣がひけてゐる場合でも、いや味がない、とか、きざなところがないとか云つて好意ある批評で私を激勵してくれる人であつた。もう少し政策的になつてはどうです。とか、あまり消極的でありすぎるとか、云つてくれたこともあつた。**私はまだ一個の文學青年であつた時分から瀧田氏をよそながら知つてもゐたが、**何となく恐れを感じてゐたので原稿を持ち込む勇氣などは出なかつた。俥で街を飛び步いてゐる氏の元氣さうな、まる〳〵と赤く肥えた風貌を時々私は見ては、その景氣のよさにおびえてゐたくらゐである。それが後年になつて私の恩人であつたのである。いろ〳〵の雜誌に作を發表するやうになつてからも、自分のやうなプロ派の作家のものなどは取りあつては貰へないものと思つてゐたので、中央公論社だけは遠くから眺めてゐた。ところが、或る年の夏期臨時號に書くことになり、可成な原稿料を贈られたりしたのもまことに私には意外なことゝであつた。私はもう少し瀧田氏のお世話になりたかつた。人間の元氣と云ふものもたよりにならぬものであると私は瀧田氏の死についてつく〴〵

づく思はねばならぬ。さうでなくとも他人の死は最早人ごととしては感じられない年齢にある私にとつて、僅に二つ年上の瀧田氏の死は正に近火である。然し氏は六十七十まで生きても普通人の爲し能はぬだけの仕事をして逝つた。その意味で氏の生涯は爽快で徹底的な感じを與へると同時に他人に悲哀愁傷の感を强ひない死である。私は普通の哀悼と云ふ氣持とは一種異つた妙に棄て去られた悲哀の涙を以て氏に對する追憶をなつかしく辿るのである。

悼望獄樓主人

室生犀星

今日私が一人前の小說家として立つてゐるのは、元より自分の力でなければならぬ、しかし私を見つけ作を鞭韃したものは瀧田哲太郎氏である。或意味で私を砂利の内に見つけた人であるかも知れぬ。瀧田氏無ければ私は貧しい陋屋の一詩人としていまも破垣を結んでゐたかも知れない。人は生長してしまへばどうとも云へるものであるが私は一沫の憂欝なしにはその生長を考へることが出來ない——しかも今は亡き豬顏大軀の瀧田氏が私の今日に結びつけられるのが、私に取つては重大なことでなければならぬ。

大正七年七月の何日かに初めて瀧田氏は田端に居る私を訪ねた。そしてその一と月ほど前に投じた小說「幼年時代」を中央公論の八月に頁戴することにしたから、若し他に作があるならば次次へと揭せるから見せてくれるやうにとのことであつた。それが一角の作家に對するやうに慇懃で禮節に厚い挨拶であつた。自分は何に分よろしくといふより外には言葉がなかつた。それからあと作を求められるままに今日に至つたのである。そして妙なことは何時でも瀧田氏に會ふごとに最初に會つた時の昻奮に似たものを感じ、それが永い間つづいたのは、我ながら不思議に思つてゐる。つまり私にとつては只ならぬ壓迫をしかも私は好意をもつて感じてゐたのである。原稿以外の用件であふこ

とは尠しもなかつたが、二三度酒の座を同じうしたことがあつた。いつでも年少の私には君と言はずにあなたと言つて室生君とは言はずに室生さんと言つて居られ、蔭で他の作家のことも何々さんと言つてゐたことは、何か美しいことでなければならぬと思つてゐる。仲々ああは言へないものである。

瀧田氏は雅人たる願ひをもつてゐたことは實際である。平常の暮しも又た雅人の道にあつた。ああいふ多忙(いそが)しい人が泉水をうがち跳鯉の音に目ざめてゐたのは稀らしいことである。しかし惜らくは我が望嶽樓主人の風流韻事は派手ごのみで、枯寂の域にまで至らなかつた。こんどの病氣が若し假りに癒つたとしたら、これからあとは必と枯淡の味を味はられたであらうと思つた。これが私に取つてかなり惜しいことに思はれるのである。

今年の二月芥川君と見舞ひに行つたときは元氣潑剌としてゐて、秋に空しくなる人とは思へなかつた。七月新橋演舞場で偶然に會つたときは、肉落ち骨聳えて見えたが元氣は元氣であつた。

「けふは色々な人が見えてゐるが何の連中ですか。」

「雜誌のドラマリーグですよ、しかし隨分やせましたね。」

といふと、そこへ家族の方が見えられ、一緒に食堂の方へ行かれた。私はいまから思ふと肩はばを聳やかした瀧田氏をその日きりで見納めだつたのである。別に影がうすかつたとも思はなかつた。むしろ汪然と濃かつたくらゐであつた。

十月二十七日も芥川君と午后瀧田氏の病狀について話を交へてゐたが、別れて數刻の後、芥川君から使が來て瀧田氏逝去の報を聞いて、特異な驚きを感じながら夜二人で行つたが、口綿をふくんだ望嶽樓主人はもう佛になつて、剃つて二日程の髯のあとも靜かに布の中に覆はれてゐた。

▼創作家各位の順序は初めて「中央公論」に創作を寄せられたる次第に從ひたり。

□

瀧田樗陰を祭る辭

黒頭巾

其一

●樗陰逝く。病むこと一年、此の秋、遂に起たず。直情、獨創にして、邁往、精悍、譬へば、野を行く虎の如くなる彼、化して北邙、一片の烟となる。蓬頭犀目にして紅顏、豐幹。氣焔を吐くとき、口角、霧を生じ、會心の境に入るや、體を搖すぶつて前に乘出し、肩、腹、みな波瀾の如く、忽然一笑、顏、花の如くなる彼。また見る可らず、今、唯だ白骨のみ。享年僅に四十四。豈、惜しからずや。

●逝くものは水の如し、流は元の儘にして、行く水は、すでに遠く去る。彼の魂、今、何處にかある。角力棧敷に頑張り、北音を滿場に響かせしように、幽界より、遙に現世の文壇を望んで、快心の鐵聲を振り絞ぼりつゝ、聲援を與ふるならん。

●朝に紅顏ありて、夕に白骨となる、斯生、眞に短夢のみ。夢ならば、吉夢を見よ。彼は、則ち見たいままの夢を見たる者なり。その夢の長からざる、彼に於ては、何んぞ必ずしも、悔ゆるに足らん。

●彼には佛の相なし。彼の一生は、あらゆる、戒律を無視したる者なり。若し彼に戒律ありしとすれば、そは唯一の趣味戒ありしのみ。彼は趣味に殉ず。彼は趣味を逞しくしたる者なり。奔放、自在、彼が趣味の慾の前には、何者もなかりし。彼は無敵の趣味王なりし。趣味王の一語、以て彼の傳贊に換ふべし。

●趣味の研究には、彼は、つねに擴大鏡をポケットに藏する探偵に似たるものあり。その細心、洞察、一の名探偵たるを失はず。その才能、その膽力、彼の獨壇場たらずんばあらず。

●彼の天眞は、則ち此に在り。彼は、これを以て獨得の地位を

造り出だせり。日本の文壇に、始めて見たる、彼が特殊の境地は、則ちこれなり。彼以前に、此の境地なし、彼と同時に、此の境地を得たる者なし。彼は死すといへども、朽ちざるなり。

●彼の獨斷は、彼の性命なり。彼の自信は山の如し、獨斷は、その自信より來る。獨斷、胸中に定まるや、一箭、弦を離る。何者も、これを回す能はず。

●彼をして、稍、禁慾、節制ならしめば、その精力の旺盛なるを以てして、壽を保つこと、必ずしも難しとせざるべし。**然れども、彼をして、かくあらしめんとするは、譬へば、渾沌に彫るが如し。**彫り成るのとき、則ち渾沌なし。

●彼は、重患を推して、公論社に往來し、また能く角力、劇場に出沒す。病の威力を以てしても、なほ彼を拘束する能はず、氣息奄々として、趣味場に濶歩す。彼に非ずして、誰か、能く、かくの如くなるを得べき。

●客觀的には、彼の病者たる態度は、餘りに傍若無人なり。然れども、彼、豈、これを以て自から壯とする者ならん。彼は、自から識らずして、此に至る。彼の心頭、獨自の別世界ありしなり。

●若し彼の趣味性に、山を焼く偉大の如し。近づく可らず、褻す可らず。勢焔、大空に騰して奇觀を極む。林木、燃え盡き、青山、悉く焼けて、山火事は滅し、彼は乃ち逝けり。逝くといへども、赫々たる彼の面目、長へに他の眼中に在り。

其二

●彼が西片町の書樓を望岳樓といふ。窓に西嶺、千秋の雪を含み、樓中、到るところに書畫を雜陳し、宮島の繪馬堂に似たるあり。各室、悉く床の間あり、床の間のあるところ懸物をかけ**ざるはなく、楣のあるところ、扁額を掲げざるはなく、書畫を**鑒賞するといふよりも、書畫のうちに埋められて活きたるは彼なり。

●一室のうち、蕭然として物なく、一幅、會心の書畫を懸け、一瓶の花を活け、香一炷、寂然として樂しむは、隱君子の事なり。彼の趣味に於けるは、かくの如く閑寂ならず、陽氣に、雜博にして、幽の一字は求むれどもなし。

●晩年、彼の客室、石を集めて小池を築き、竹を栽う、風趣の掬すべきあり。然れども、彼は、此に止まるものにあらず、水道の水を引き、懸泉を作つて、池に瀉がしむ。池中には大鯉・小鯉、群游し、夕陽、輝いて水面を射る。

●池傍、高く石室を設くる、その飽くなき貪婪の書畫骨董を藏するなり。石室、開くことなければ、虚しきが如くなるに似し。

然れども彼は、かくの如く靜虛なるを得ず。客室の中、四面、大額を掲げ、仁齋の雄古なると、蘇峯、漱石、未醒の、新らしきと、相對せしめ、床には百穗の茶がけを懸け、その前に香爐と、花瓶と、喇嘛敎の祕佛とを置く。室中の書棚、火鉢、茶碗に至るまで、一々、各別の趣味を凝らさざるはなし。

◉樓上、樓下、到るところ皆、かくの如し。渾べて、是れ趣味の陳列ならずんばあらず。或は小禽を愛し、鸚鵡あり、鳩あり、カナリヤあり。草木は則ち喬木よりして花草に到り、盆栽にも及び、數種の古木と、蘭とあり、鷄頭花あり、西洋の草花を雜栽す。畫は新を主として舊を兼ね、近來、古書畫と古珍器と、年々、漸く多し。

◉一片の紙、一箇の器も、彼の趣味の片影ならざるはなく、しかも、すべてを通じて流通する一大趣味あることとなし。唯だ、かくの如く、博く、矛盾したる、或は連絡なき、各樣の趣味を、併せ好むことが、則ち彼の趣味なり。

◉彼の居るところ、殆んど空地なし。倉に納めて餘り、棚に置く。棚、塞がるを以て床の間に置く。床の間、塡まるを以て、疊の上に置く。一室の中、趣味を避けては、足の踏むべきなし。また是れ、一の小博物館の如くにして、此には頗る活趣あり。

◉彼の望岳樓は、彼が人物の反映なり。彼の人物、その居に現はるゝものは望岳樓となり、事業に現はるゝもの、則ち中央公論となる。その一部分をとつて、仔細に見れば、或は嶄新あり、雄奇あり、奇奥なるあり、幽蒼なるあり。全體を通じては、則ち、それ等のもの、すべて主となるものなし、唯だ精采の陸離たるあるのみ。

◉彼の趣味を統一するものは、彼の人物なり。彼あれば、乃ち、その廣汎ある趣味、悉く收めて、一の燦爛たる雰圍氣のうちに入る。多々、ますく辨じて、そのいよく多きを厭はず。

◉彼に、珍とすべきは、烟草癖なきにあり。彼は、嘗て、舊知の落魄者の爲に、酒を呼び、妓を招く。客が僅に敷島の一袋を懇請するに及んで、彼は乃ち、心中に生意氣なりと謂ふ。他日、此の事を吾輩に語つて、自から笑ふ。曰く、烟草の一袋は酒と妓との百分一にも値せざるをと。

其三

◉樗陰の、趣味の博くして、蒐集の到れる、或は木村蒹葭堂に似たるあり。その好奇は蒹葭堂に讓るものにあらず。然れども蒹葭堂は、考古を以て貫ぬく。彼には新古、幷行し、考古に耽

りしことなし。

◉彼が多才にして客を好みその趣味に於て、爲さんと欲するところ、遺憾なく、これを爲したるは、稍、柳里恭に似たるなきにあらず。然れども、武術は全く柳里恭に及ばず。武術を排斥したるにはあらず、嘗て、自分から修練したることなく、遂に、武術の趣味に沒入するに至らず。

◉彼が、今春、病中の自畫を見れば、遺韻、掬すべきものあり。彼をして、病餘、閑地に就くを得しめしならば、たとへ柳里恭に及ばずとするも、その造詣は見るべきありしを疑はず。

◉彼の趣味は、會得にあり。鑒賞にあり。鑒賞は、必ずしも自から創造するを要せず。鑒賞は批判の藝術なり。彼は、古人の創造を愛し、今人には、創造せしむるを以て、樂となせるものなり。

◉彼には批判の使命あり、實行の責任なし。批判と實行と、ともに徹底的に耽溺したるは即ち編輯と酒とあり。編輯の趣味、その骨肓に入る。而して酒氣、つねに彼を離れず。彼は編輯を以て骨骼となし、酒氣を以て筋肉となせるものなるべし。

◉空所後に、大町桂月の題額あり。桂月の一傑作といふべし、その劈頭に、斷酒は易く、節酒は難しといへり。彼は、日夕、これを見るに馴れ、また此の文を愛す。然れども彼は、斷酒、節酒ともに難易を試みしことなく、生涯、酒を友としたるは、桂月と同じ。

◉彼は烟草を嫌ふといへども、烟草記を嫌はず。角力を好み、野球を好み、殆んどすべてのゲームを好むといへども、その一だも、これを體驗せず。碁を打たず、將棋をさゝず、カルタを手にせず、唯だ、その趣味を會得するにとゞむ。

◉體驗より見れば、彼には音曲あり、淨瑠璃より始まり、多少の俗曲と、假聲（コハイロ）とに終はる。謠曲を聽くとも、その實習は煩に堪へず。彼は極めて短氣にして、簡明、直截、故に、彼には迂餘曲折なし。面倒くさきことは、一切、彼には禁物なり。

其　四

◉彼の直情、獨斷、性急は彼の異彩にして、彼が名を爲したる所以なり。彼の目は、鷹の如く、つねに文壇に注ぐ。鷹が[illegible]を狙ふが如きあり。意決するの刹那、電馳して、これに向ふ。その勢、颯然として鷹が、空中より下り搏つが如きあり。

◉鳥の巣を見れば、何の鳥なるを知るべし。彼の望岳樓は則ち彼の巣なり。其特異にして雜博なる、何の鳥にも類せず。然れども、この雜駁たるを知るに足るは論なし。

◉彼が寄稿を要求するは、懇望にあらずして、命令。訪問たるも

らずして突賊ならずんばあらず。その言辭、禮を失はずといへども、その勢敵を避易せしむ。如何なる先輩といへども、彼の強襲に對して逡巡せざるはあらず。

●彼の交友、知人、實に江湖に遍ねし。その歿するや、巡業中の角力行司より弔電を寄するあり。以て、その一班を推知するに難からず。その趣味家に反映し、書畫に反映し、人物に反映し、集めて大成して、編輯の態度となる。

●彼の逸事、知人を驚倒するに足るもの少からず。彼の生涯、變遷あり、盛衰ありといへども、近年、漸く世味を解し、圓熟に近づく。不幸にして早世すといへども、天意、或は彼を完成せしめたるものあり。

●彼、逝いて、また、かくの如く、趣味の耽溺と獨創、敢行とを以て、文壇に往來する者を得易からざるべし。哀哉。

●彼の葬送に、各種の會葬者に由つて、生前、廣汎の趣味を象徴すること、譬へば涅槃像に似たるあり。すべてのもの來會して、但だ一つの猫を缺くと同じく、彼の靈前に唯だ一つ烟草を捧ぐるものなきのみ。

●吾輩、始めて頭黒巾の名を稱せし時以來、彼と文字の交を結ふこと二十年、彼が大學生たりしより望岳樓主人として雄飛するに至るを觀る、略ぼ彼の生涯を知り、交情淺からず。彼を葬むるの前夜、彼の柩前に、徹宵、冥想して彼を偲ぶ。脈々たる香烟、莊麗なる花環、彼と對晤したるところに充ち、光景、すべて夢の如く、幻の如し。偶、秋雨、庭上の竹樹に來り、雨聲、涙を誘ふて、ともに柩前に灑ぐ。

●彼、年々、大晦日の前夜、望岳樓に文酒詩畫の會を催ほし、以て、年を送る。酒、泉の如く、興、酣にして紙を展べ、毫を揮ふ。宛然、古の文人の雅會なり。翌日、吾輩、書柬にその實況を記して、彼に送る。彼、喜びて吾輩に囑し、恒例となさしむ。彼の長逝に當り、乃ち彼の生涯を論じて、英靈に告ぐ。尙享。

大正十四年十一月九夕、駒込の太白樓に於て。

黒頭巾記

「淪落の女」時代

松崎天民

×

瀧田樗蔭と、坂本紅蓮洞と、何れが先に死ぬるか、どちらの葬式に、先へ列席せねばならぬかと、私は心配して居た。とうに死ぬべかりし六十餘の紅蓮さんは、まだ築地の聖路加病院で、氣焰を吐いて居るのに、たうとう瀧田氏の方が、一足先に逝かれた。まだ四十四やそこらで、死ぬるにしては餘りに若い樗蔭が亡くなつたことは、十五年の親交あつた一人として、心淋しいことである。

私は、泣くに泣かれぬ思ひがした。

×

明治四十四年の晩秋、十月末か十一月上旬であつた。日吉町の國民新聞社前に出來たカフエープランタンに、私は毎日のやうに出入しては、いろんな人達に逢ふことを、日課の一つにして居た。勤めて居た東京朝日社の前には、朝日倶楽部と云ふ物があつて、そこでは社員達が、撞球に興じ合つて居た。社の池邊三山や、杉村楚人冠や、松山忠次郎等と云ふ人々を訪ねるために、瀧田氏は彼の金時のやうな顔を、よく倶楽部に現して居た。

×

初めて言葉を交したのは、その朝日倶楽部では無くて、プランタンの一隅であつた。恰も來合せて居た正宗白鳥氏が、『まだ知らぬのか、さうか、』と云つて、二人を引合せてくれたのだつた。『やあ、あなたが松崎さんですか、私、瀧田です。中央公論の說苑欄に、何か面白い物を書いてくれませんか』と、瀧田氏は忙しさうな口調で、つけ〳〵云つた。私は何んな挨拶をしたか、兎に角、喜んで何か書き送ると、引受けたのであつた。

×

その日を機緣として、瀧田氏と私とは親しく往來する仲になつた。西片町の宅へ行つて、國から來られた母堂などと一緒に、晩餐の御馳走になつた事もあつた。青山南町五丁目の私の宅に來られて、ビールを飲むこともあると云ふ風で、二人はよく

一緒に方々を飲み歩いた。赤坂や神樂坂や下谷や銀座や日本橋や、瀧田氏は日本酒とビールを飲では、よく文壇の噂や文士の取沙汰などをした。

瀧田氏も若かつたが、私も若かつた。

×

『新年號から書く積りですが、黑縮緬の女と言ふ題では如何でせう。東京市内や地方の小料理屋などへ巣つて居る女中、酌婦、淫賣婦などを主題として、いろんな人々へ宛た手紙風の通信文にしたいのです。人生探訪の一報告書として、實感を主とした記錄は何うでせう』と、私は瀧田氏に相談した。

『宜いでせう、それで宜いですよ。關にずに思つた通り、ドシ〳〵書いてみて下さい』と、瀧田氏は飲みながら、激勵してくれた。

×

四十五年の新年號に出る原稿は、水天宮裏の私娼窟から歸る途中、何處かへ遺失してしまつた。それがため『淪落の女』の第一篇『黑縮緬の羽織』が、中央公論に出たのは、二月號からであつた。原稿を送つてしまうと、先づ瀧田氏へ電話をかけて『何うでした、あんな風で宜いでせうか』と訊くのが、私の癖であつたが、瀧田氏も讀でしまうと『結構です、あの文句が振つてますね』などと、よく嬉しがらせを言つてくれたものである。

×

『淪落の女』の原稿料は、一枚僅に六十錢であつたが、翌年の『女八人』は、默つて居たのに一圓にしてくれた。『女八人』は八ケ月連載して『十五年振りの歸省記』を書く豫定で居たが、國から歸ると間もなく、妹や妻子が腸チブスで、入院するやうな騷ぎとなつた。妹と妻が死で、社を休んで屈托して居るところへ、瀧田氏はわざ〳〵訪ねてくれて、『松崎さん、何うです、亡き妻の骨を抱いてといふ記錄を書きませんか』と云つてくれた。

×

私の書く惡文が、中央公論へ掲載されるやうになつたのは、實に瀧田樗陰を中心として、斯うした經緯を經てからであつた。その前から杉村楚人冠は『おい、何か書けよ、中央公論へ載せるやうにしてやる』と言つて居たが、杉村君を煩はさずに、瀧田氏と相知ることになつた。それからは一圓五十錢、二圓、二圓五十錢、三圓、三圓五十錢、四圓と言ふ風に、次々に原稿料も高くなつたが、米代や暮し向は、それ以上に高い世の中となつた。

×

婦人公論主幹の嶋中雄作氏と、初めて盃を交したのは、四十

五年の初夏、神樂坂の一旗亭で、瀧田氏と朝から飮で居る時であつた。その頃、酒席の文士として、よく瀧田氏から噂さを聽いたのは、小栗風葉、眞山靑果の二家で、次では長田幹彥、谷崎潤一郎の二家が、よく取沙汰に上つた。醉へば義太夫を唸る位のもので、晚年甚だ得意で上つた成駒屋の聲色などは、まだ手に入らなかつた時代らしく、その義太夫も滅多には出なかつた。

×

先の妻が死でからは、靑山南町四丁目の宅に、たつた一度來られたのみで、何でも暑い夏の日盛りであつた。ビールと氷を出して、『松崎さん、簡易冷藏法を敎しへませう』と云つて、氷塊を銅の藥罐の中に入れ、水を切つた中にビールを注ぎ、急速に動かしてコツプに注ぎ、美まさうに飮で見せてくれた。その頃は冷藏庫も無いやうな、貧乏暮しであつたが、瀧田氏も冷藏庫よりは、こうして飮む方が美味いと、得意さうに言つて居た。

×

朝日社の方へ辭表を出して、愈々退社と決した大正三年の秋、その日は恰も瀧田氏が社に來られて、とり屋の喜仙で私を待つて居た。退社手當金若干を貰つて、喜仙へ行つて見ると、瀧田氏は『何うでしたか、ウンと貰へましたか』と、好奇の眼を睜つて居た。『自分から退社したり、他社へ行くやうに誤解された者には、手當が極度に少いのです』と言ふと、瀧田氏はビツクリしたやうに、『さうですか、たつたそれ位では詰らない』と笑つて居た。

×

私の方から、あれが書きたい、これが書きたいと云つた事はなく、何時も瀧田氏の方から、注文を受けて居た。『新聞記者懺悔錄』だけは、此方から申し出て一回分だけ載せて貰ふ筈であつたが、『面白いから次々に書いては何うです』と云はれ、四五回分を執筆した。面白いとか駄目だとか云ふのは、多くの場合に於て、瀧田氏の批判を聽きさへすれば、間違ひは無いやうであつた。

其の瀧田樗陰氏が死だのである。

×

中央公論に依つて世に出た作家は、五人や六人では無いが、說苑欄の方にも瀧田氏に依つて、初めて其の才分を認められ、中央公論に發表したことに依つて、有名になつた人々が少くない。村松梢風にしても、田中貢太郎にしても、大泉黒石にしても、山中峰太郎にしても、瀧田氏に負ふ所が多いやうである。今日は『改造』も生れて居るが、一時は中央公論が唯一の

舞臺であると共に、唯一の出世藝を演つて見せる登龍門なのであつた。

×

妻に死別し、東京朝日を退社し、修善寺の温泉へ行つて、新しい戀に熱中して居た頃、瀧田氏から手痛い手紙を貰つたことがある。『大兄は近頃、生活が非常に荒むと共に、述作の方面に於ても、何だか行詰まられたるやの觀あり、此際緊褌一番して、捲土重來さるゝこそ、望ましき限りに候』と、文情大に激して、私に腹立たしい氣持を起させたりした。眞情流露の野人的風格の人で、何處かに親切な人間味のある懷しい樗陰氏であつた。

×

『松崎さん、今日はあなた十圓お出しなさい。あとは私が全部引受けよう』などと云つて、よく飲みに往たものである。藝妓や女中が傍に居ても、そんな事にはお構ひなく、『姐さん、これだけ持つて居るのだが、まだ飲でも大丈夫だらうか』などと、明ら樣に云つたりした。『松崎さん、あの藝妓は駄目ですよ。一寸、膝に手が障つても、プリ／＼怒つたりして、赤坂や新橋の奴は、氣位ばかりが高くて、我々には駄目ですなア』と笑つたりした。

×

晩年には僅に二度、下谷で御馳走になつたが、『淪落の女』時代と違つて、瀧田氏は有福な紳士として、遊びの氣分も十餘年前とは、非常に違つて居た。けれども野武士は何處までも野武士で、藝妓達との應對振りや、一寸、唄ふにしても、四邊を構はぬと言ふ勇邁さが溢れて見えた。『田舍の旦那』と言つた風があつても、何も彼も心得て居る田舍の旦那には、藝妓達も推服して居るやうに見えた。

その瀧田さんのターさんが死んだのである。

×

中央公論に依つて、樗陰瀧田哲太郎氏が、日本の文化に寄與貢獻した業蹟は、別に論ずる人があらう。割合に愛憎心が強くし或る場合には極端な迄に、黨派心と敵愾心を發揮して見せた位に、瀧田氏は直情徑行の人であつた。『そんなに酒を飲むと、危險ぢや無いですか』と云つても、『酒をやめて長命するよりは、若死にしても飲む方が宜い』と云つた瀧田氏である。四十四やそこらで死でも、瀧田氏にとつては、本懷であるかも知れぬ。

×

早く死ぬべかりし紅蓮さんは、まだ病床に寢そべつて、重態ながら氣焰を吐いて居るのに、長命すべかりし樗陰氏の方が、

先に逝てしまつたのである。淸水谷の偕樂園で、泊鷗會の例會を開いた夜、村松梢風君から、『たうたういけなかつた』と聞いた時、私は『たうとう其の時が來たのか』と、別に驚きはしなかつた。告別式の時、德富蘇峰先生に肩を叩かれて、『おい、大きくなるなよ』と云はれて、初めて、人事では無いやうな氣持がした。

十一月九日午後四時、淺草倶樂部の樓上にて記す

猿面記者瀧田君

生方敏郎

私が初めて瀧田君と知つたのは、明治四十一年頃であるが、それは夏の初めと記憶する。なんでも自然主義勃興時代のことであつた。

私は早稻田文學社の用務を帶びて故山路愛山氏を中澁谷宇田川のお宅に訪問した時である。刺を通じて座敷へ通されると、そこには山の樣に古い和綴の書物を積み重ね、又書物の散亂してゐる中に、私と同年輩くらゐの紅顏猿面の學生が袴を穿いて坐つてゐた。彼は當家の主人愛山氏ではなくして、主人に會はんがために待つてゐる客であることは、私にも直ぐ分つた。二人は互に輕い會釋を交はし、私は彼の側に坐つた。

暫くすると、主人公愛山氏がのそり〳〵出て來た。私は初對面なので固く成つて挨拶した。山路氏は老書生と云つた樣に質朴に無造作に答禮して、それからすぐ私をその學生に紹介した。

それが中央公論記者瀧田哲太郎君だつたのである。

用談はすぐにすんだが、二人でしばらく無駄話して、そして歸る時二人の客は山路家を一緒に出た。

その時分でも、瀧田君は矢張和服でセルか何かの袴を穿いてゐた。そして角帽を冠つてゐた。法科大學の學生だといふことだつた。

澁谷はまだその頃わづかに開け初めた時分で、まだ町と云ふよりも村落といふ可き姿だつた。山路氏の家を出てからも田圃の中の道や小川に添ふた靜かな道を歩き、それから青山學院傍の坂を登つて青山七丁目まで歩くとはじめて電車があつた。歩き乍ら、二人は當時の文壇について語り合つた。私も初めて會つた人にでも舊知の友に對すると同樣に開けつぴろげにメートルを上げるたちだが、瀧田君は無論私以上によく語つた。しまひには殆んど一人でばかり喋つてゐた。

そして瀧田君は私に向ひ「今の作家で誰が一番好きです」など訊いた。私が「島崎さんの「春」と田山さんの「生」が最近に讀んだ中では面白かつた。」と語ると、瀧田君は小栗風葉の小說がよいと荐りに風葉を讀めと私にすゝめた。そしてその月の中央公論に載つた風葉の小說の文章を激賞し、可也長い文句――一頁に餘る位――を私に暗誦して聞かせ、今日もこれから風葉氏の原稿を取りに行く道だ、と語つた。

私は此時瀧田君は「美文の好きな人だな」と思つた。又同時に「あんなに自分の文章を暗誦してまでくれる編輯者に會つたら、作家も感激して筆を執るだらう。單にそれが原稿を取るポリシーと考へてさへも惡い氣持すまい。之が編輯者のコツかな」などと私は考へた。

その翌日、私のところへ中央公論が寄贈された。無論瀧田君の送つてくれたことと、その中の風葉の小說が讀ませたい彼の意志とは明かだつた。それから每號――當時私はまだ全然文壇の人ではなかつたけれども――寄贈してくれた。それから兩三年間は年始狀のやりとりする位で、一度も瀧田君に會はなかつた。私が第二回に彼に會つたのは、明治四十五年の正月、讀賣新聞社の主催で紅葉館にあつた新年會の席上に於いてである。その時、彼は私にオスカァ・ワイルドに就いて長い物を中央公論に寄稿するやうにとすゝめた。と云ふのは、私は最初彼に會つた年の冬頃から、讀賣の日曜附錄と全盛時代の早稻田文學とへ盛んに書き出し、外國文學の紹介やら文壇批評やらを以て、何うやら景氣のいい文士の仲間入をしてゐたからで、殊にその年の早稻田文學新年號にワイルド警句集（後新潮社から單行本として出版したもの）を發表してゐたからであつたらう。

併し、當時私はやまと新聞に籍を置き、仲々多忙だつたのと懶け者だつたとの故に、その約束はすつぽかしてしまつた。

それからまた五年ばかり會はなかつた。

大正二年の春、私は新聞社を退き、專ら文筆に親しむ運命となり、私の書く警句といふものが頗る世間の歡迎を受け、諸方の雜誌社から依賴されたが獨り中央公論のみ何とも申込んで

ないので、若かつた私は頗る物足りない心地し、幸ひ去年の春の紅葉館に於ける約束もあること故、注文外れではあるが好い物なら宜らうと一人ぎめにきめて、まづ會心の出來だと思ふところ警句百句ばかりを突然瀧田君に送り付けてみた。

併し、それが何時までしても中央公論にのらない。それでも催促に出かけて行くだけの智慧もなく、ただ徒に待ちこがれた後、半歳ばかりしてから、當分載らないやうな都合なら一旦返してくれないか、とハガキを出したが、返しても來ず返事もなかつた。

すると、寄稿した時から滿三年と五ケ月たつて、大正五年の初夏に、飄然として私の警句が中央公論にのつた。私はもはや全く忘れてゐたので、拾ひ物をした様に悅んだ。それは仲々自分でも氣に入つた警句ばかり、つまり粒選みの物だつたのだから、嬉しかつた。

それから、又滿一年と一ケ月たつた大正六年の夏の或日の朝つぱら、瀧田君が俥で突然飄然としてやつて來て、去年の警句を激賞してくれ、對話執筆を依賴された。それから後は三ケ月目くらゐには朝つぱら俥でやつて來て、執筆を命令し、忙し相に茶も飲まずに、いつも「これからヨスノさんのところへ訪問するのです」と、自分の云ひたいことだけは喋つて、[illegible]引き

の私を一人後に取りのこして神明町の吉野作造さんのところへ行くのが例であつた。

私と瀧田君の私交は大正九年から始つた。その五月の國技館の夏場所の棧敷へ一日相撲見物に招かれたのである。これより先きにもさうだ。私は國技館でだけでは何度も瀧田君に一寸會つて一寸挨拶して別れたことはあつた。で、私もシモウが好きだと考へて招いてくれたのであらう。

去年の春、西條八十君が洋行するので其送別會が上野精養軒に催された時、私のすぐ隣に食卓についたのが瀧田君だつた。私の短かいテーブルスピーチが終ると、すぐ、瀧田君は小聲で「今夜の料理はうまくありませんね。あなたの御都合が惡くなかつたら、これから他所で食べ直しませう」

と云つて、會の途中から私を引つぱり出した瀧田君は、池の端の或鳥屋へ連れて行き、藝者を五人呼び、ビールを壯んに飲み料理も亦た大分食べた。前にも私の著書の祝ひの會や其他の會で彼と一座したことはあつたが、二人差向ひで飲んだのは之が初めであつた。彼はこの時「思ひ出すまいとは思へども、思ひ出すよなことばかり」と云ふ都々逸を唄つて[illegible]彼を一本[illegible]とのみ思つてゐた私を驚かせたばかりか、更に[illegible]次郎の声色を使ひ、いよ[illegible]私を驚かせた。この[illegible]

ゐた。

鳥屋を出てから、また藝者どもをも引連れ、れんぎよくへ行つて蕎麥を食べた。そして一人の女だけは我々が電車にのるまで送つて來た。

「あの女を、あなたは何う思ひます」

なんてトボケて聞いてゐた。

だが、何にでもあの人の性格は著しく現はれてゐた。藝者もいつも同じ藝者、都々逸も聲色も必ず同じもの、料理にも仲々好みはあつたが、一旦よいと成れば何處迄もよいので、上るといきなり同じ味噌汁を五杯一度に注文したことなぞ、いかにも瀧田式だと思つたことがあつた。

あの人の書畫蒐集に關する考へ方や逸話なぞ澤山あるが、長く成るから止める。私の長女の葬式と瀧田君の葬式とが恰も同日だつたので、私は告別する機會を失つたのを殘念に思つてゐたが、今此文を以て弔文に代へる。

（見出しを特に猿面記者としたのは、國技館見物の時の彼を、新聞に猿のやうな顏の彼として相撲雜觀に書いたのを、彼はむしろ得意としてゐたので、之を用ひたのである）

病床の樗陰先生

田中貢太郎

病ひ癒えて病ひの床のすさびをば追憶に語る日は何時の日ぞ

これは雛の節句の比、樗陰先生が病床で寫生した棕櫚竹の繪の上に書いた自詠の一つであるが、悲しいかな樗陰先生には、その病床のすさびを追憶に語る日は永遠に來なかつた。

私が樗陰先生に初めて接したのは大正三年八月十五日、田岡嶺雲、奥宮健次、幸德秋水三人の追憶錄を書いて中央公論社に持つて往つた時であつた。その時中央公論は本郷西片町の瀧田氏の許で編輯してゐた。

樗陰先生は明治十五年生れで四十四歳、私より三つの弟であつたが、識見人格に於て長者であつたから、私は甘んじてその

教を受けた。私が中央公論に掲載した作物は、編輯者と云ふよりは先輩としてその助言を受けた。嘗て私が中央公論に掲載した禪談と云ふ八十枚の創作は、十枚二十枚と書いて往つてその批評を請ふたものだ。又私の伯夷叔齊は說苑欄の讀物として書いたものであつたが、楞陰先生によつて創作欄にまはされたものであつた。

楞陰先生が明治二十六年から今日に至るまで二十三年間、中央公論と終始して、微微たる一小雜誌を東洋第一の雜誌にすると共に、一方文壇の所謂產婆役であつたことは、普く人の知る所であり、又書畫骨董品の蒐集家としても人の知る所であり、及び相撲の好愛者で酒客であつたことも亦人の知る所であるが、讀書家としてはあまり知られてゐないやうである。楞陰先生は朝夕のはかられない病床にゐても書籍を山積して讀書してゐた讀書家であつた。『ほんとに本を讀まふとするには、鉛筆を持つて、圈點をつけて、ゆつくり讀まんといけないです、ね、』『こんどは、この大物にかからうと思ひます、』などと云つて、それから讀まふとする大部の書籍に指をやることもあつた。もう八月頃、腦にも故障が生じ、視力も亂れてゐて、筆を執つても文字をなさない際でも、高野敬錄氏に依賴して諸家の全集を集めてゐた。漱石全集、鷗外全集、花袋全集、荷風全集、武者小路全集、潤一郎全集、默阿彌全集。中でも子規全集は非常に精讀してゐて、私が病床を訪問すると、色鉛筆で圈點を打つてある和歌の部を見せて、『子規は俳句より、和歌の方が旨いです、ね、』などとも云つた。萬葉集は自分でも萬葉調の和歌を作るだけあつて昔から愛讀してゐたが、病床の人となつてからも傍を放さなかつた。土佐の鹿持雅澄の萬葉古義に感心して、鹿持翁のことを書いたものはないかと云ふので、私は寺石杜山氏の南國遺事を持つて往つたことがあつた。

私は楞陰先生に接するごとに先づ第一に自分の無學を感じた。楞陰先生と私との間を接近したのは、私と桂月先生との關係も一因をなしてゐる。楞陰先生は夏目漱石氏に揮毫を慫慂して書道に遊ばしめたやうに、桂月先生にも揮毫を慫慂して、晩年を臨池の技に精進さした人であつたが、楞陰先生がさうして桂月先生を訪問する時には、何時も私が同行した。ある日、鰺の乾物と酒とを持つて訪問した時には、楞陰先生階に乘じて義太夫を語り、勘平切腹の所作を演じたが、それを見てゐた桂月先生も既に故人になり、これを演じた楞陰先生も終に幽明境を異にするやうになつて、私をして馳き易き雅上の跡をしのばしめることゝなつた。

楞陰先生は昏迷の病床のあるうへに、數年前から[illegible]に異な

が生じてゐて、冬が來ると健康がすぐれなかつた。そして一昨年は九月から春にかけて病床に就き、昨年は十一月二十四日から病床の人となつた。昨年樗陰先生が病床の人となつた前日私は樗陰先生と下谷方面で酒杯を共にしてゐた。酒の席では樗陰先生は平生のやうにこはいろをやり、秋田訛の多い聲でどどいつを唄つた。彼の桃太郎のやうな顏をした額に右の掌をあてて『わるい酒でもたべたやうな、オツ、アツ、アツ、アツ』とやるこはいろは如何なる酒の席にも聞かされるものであつた。私の眼の前には樗陰先生の額に右の掌をあててこはいろをやつてゐる容が髣髴として浮んで來る。

昨年の十一月、樗陰先生が病床の人となつた際、私は人にも聞いてをり、自分でも飲んだことのある楤の木の服用を勸めたが最初は耳を傾けなかつた。しかし疾が酷く小水がすくなくて苦痛が增すに及んで私の言に從つた。私は手許にある楤の木の皮を樗陰先生の許へ送ると共に、後がきれないやうにと土佐の山崎と云ふ若い友人に電報を打つて、その控山の楤の木の皮を剝いで送つてもらつたが、それでもすぐ無くなりかけたので、伊豆方面へ旅行する途中、長岡溫泉の先の三津の海岸へ往つて、楤の木の皮を剝いだ。私は昨年の十二月から五月にかけて時時靜岡縣下を歩いてゐたので、そのつどゞを見つけてはそれを樗陰先生の許へ送つた。楤に就いては昨年の十二月六日附になつた樗陰先生の手簡がある。

拜啓先日は失禮仕候其節御送り下されし楤の木の煎藥非常なる靈効をあらはし、當日より急に尿量を增加し、又尿の色も非常によろしく相成り、從つて足の腫れも大いに減少いたし候、是れ全く大兄のお蔭と深く喜び居り候。あれはどこの生藥屋にもあるべしとは存じ候も飲み方等についても一寸伺ひたき節あり、又御禮の心持にて一杯やつて頂きたく候へば此手紙著次第御足勞願上候。

利尿には幾等かの効はあつても草根木皮位では大患を如何ともすることはできなかつた。病勢が昂進して主治醫の某博士によつてヂキタリスの注射を受けた時には、樗陰先生は悟つてゐる雜記帳の端に遺言狀を書き、辭世の歌まで添へたほどであつた。樗陰先生は心臟に異狀があるので、多くは椅子に腰をかけてゐて、睡くなるとそのまゝ睡つた。そして病勢が緩まつて來ると僅に寢床の上に坐つて脇息に倚りかゝつてゐた。夫人と三人の令孃は、夜となく、晝となく、樗陰先生の手をさすり、足を揉み、胸を撫で、背を撫でたことは、樗陰先生が中央公論の六月號の卷頭に掲げた世事人事紛紛擾擾錄に記したとほりである。正月になつて病勢が輕くなつたので、樗陰先生は枕頭に紅梅

と白梅とを一緒に植えた鉢を置いて寫生をした。二月には馬の上繪のある鉢に植えた棕櫚竹の寫生をした。棕櫚竹の繪は表裝したのを私も一枚もらつたが、それがとう〳〵形見となつたのである。私は今その棕櫚竹の軸をかけて追憶錄の筆を執つてゐる。

三月になつて楞陰先生は雛の繪を畫いてゐた。四月になつて楞陰先生は主治醫から外出の許可の出るのを待つやうになつた。そして五月一日になつて、朝、私が本鄕西片町の楞陰先生の許へ往つてみると、玄關へ嚴父が出られて、『今日は氣持ちが良いと云つて、社へ往つたのですよ、』と云つた。私は自分の病氣が癒つたやうにうれしかつたので、急いで丸ビルにある中央公論社へ往つた。その時楞陰先生は夫人同伴で編輯局にゐた。

午になつて私達は地下室にあつた花月の食堂へ入つた。食堂ではその時筍飯を出してゐた。楞陰先生は非常に珍らしがつて私達にもそれを取らした。そして食事の後で、五六人前の筍飯ををりに詰めさして家族への土産にし、それを夫人に持たして先に歸した後で、私と二人で下谷の知人の家へ出かけて往つたが、私は用事があつたので途中で別れ、湯島天神の男坂をあがつて歸つて來た。

楞陰先生はその日から病をおして外出しはじめた。中央公論に往き、好きな相撲に往き、芝居に往き、料理店に往つた。料理店へは私も一緒に往つたことがあつたが、さすがに酒は口にしなかつた。しかし肴は平生のやうに箸をつけ、こはいろもやつたが、如何にも苦しさうであつた。そして歸ると宵から朝まで夫人や令孃に胸から手足にかけてさすらした。六月十七日の桂月先生の告別式に臨んだ時には、自動車をおりて僅に數十間の間を往復するにさへ荒い呼吸をしてゐたので、告別式に臨んでゐた知人を驚かした。圓圓と肥つて苹（りんご）のやうであつた頬の肉もげつそりとそげてゐた。

七月六日になつて、私はじめ、村松梢風、松崎天民、宮地嘉六、婦人公論の島中雄作氏などで、至快觀ひと云ふ名で楞陰先生を不忍池畔の笑福と云ふ家へ招待した。その招待の席上へ村松梢風が支那の少年俳優綠牡丹の一行二三人を伴れて來た。楞陰先生は喜んでそれに揮毫をさせやうとしたが、綠牡丹の方では即席ができないと云ふので中止した。不忍池には蓮の錢葉と卷葉が蒲萍の水の上に綺麗に見えてゐた。楞陰先生は[illegible]つたと見えて、夫人に迎へられてすぐ歸つて往つた。そして、その月の[illegible]楞陰先生はその翌日から倒れてしまつた。[illegible]

十二月の[illegible]になつて楞陰先生が危篤[illegible]

陰先生を訪問してゆくりなくその席に連つた。その朝になつて樗陰先生は胸のあたりが異樣に苦しいので、醫師を呼んで注射しようとしてゐた。注射してもらひながら醫師と話す樗陰先生の聲が隣の室にも聞えてゐたが、間もなく人事不省に陷つた。それは十時頃であつた。私も驚いて病室に往き、夫人に力をかして床の上に坐つたなりに氣を閉ぢてゐる樗陰先生の大きな體を背後から抱いてゐた。そして、手に餘裕ができて來ると背をさすつた。

六時頃になつて樗陰先生は意識がでて來たが全然回復するには至らなかつた。その翌日は翌年の大相撲の棧敷を買ふ金を相撲茶屋のみのか久に收める約束があつた。樗陰先生は朝になつてそのことを云ひだした。私は樗陰先生が相撲を好むと云ふことよりも、その毅然たる氣力のあるのに驚かされた。

私は復た病床を問うて時にはその私用をたしてやることがあつた。樗陰先生の病勢は緩んだり昂進したりした。緩んで珍らしく横になつて睡れたと云ふやうな翌日は、きつと體に變調を來たしたので、そのつど臨時に醫師を呼んで注射した。八月になつてであつたか、ある日の夕暮、非常に頭腦が明晰になつて、心のうちが歡喜に輝き、天啓とでも云ふやうな章句が浮んで來たので、それを筆にしようとしてゐて卒倒したと云つたことがあつたが、その時から樗陰先生は左の後腦に故障があつて、視力が亂れて物象が二つに見え、言語に明瞭を缺き、筆を手にしても文字をなさないやうになつた。

その頃から樗陰先生の體は酷くむくれだして、九月に入つてから小水も出ない時が多かつたので、兩足から水を取つてゐた。十月の十五日になつて夫人が私の宅へ見えて、樗陰先生の某依頼を傳へたので、翌日往つてみると體に小變調を起してゐた。やはり前日氣持ちが良くて室の中を步いてゐたらしかつた。

その日私は夫人と同道して樗陰先生の所要を果した。その時樗陰先生は、清水市の方面へ轉地したいと云ひだした。平生でさへも氣の早かつた樗陰先生は、病氣以來一層氣が早くなつてゐるので、私から村松梢風に電報を打つて、十八日に村松を樗陰先生の許へ來てもらひ、落ちあつて三人で話してゐる所へ二人の女の客があつた。私は聞きなれた女の聲を聞いて玄關に往き、夫人に通知した後に客を上にあげた。その日病室には平福百穗氏の小品ばかり貼つた八枚折の屏風を二枚建ててあつたが、女客があると共に取り拂つたので室の內が明るくなつた。もう午になつてゐた。女客の前には菓子が出、村松と私の前には鰻飯とビールが出た。樗陰先生は牛乳と鷄卵を食事にしてゐ

たが、私達の鰻飯を喫ふのを見ると食慾をそそられたと見えて、ここへも鰻飯をくれと云つて、强いて夫人に鰻飯を持つて來さし、體をずらして傍の椅子へ腰をかけながら、それを夫人に喫はしてもらひもらひ、かすれた聲で話した。そして、最後には自分で箸を持つた。樗陰先生はその頃醫師にゆるされてゐると云つて菓子を喫つてゐた。七月頃までは醫師が如何に制止しても聞き入れずに肉食を攝つてゐた樗陰先生も、醫師の言を守るやうになつてゐたので氣の毒であつた。

その日樗陰先生は村松に、『これから靜岡へ往つたら、雜誌記者の三十年と云ふものを喋りますから、あなたが潤色してください、』とも云つた。私達は女客と一緒に間もなく辭去した。それが私と樗陰先生との最後であつた。

二十日になつて樗陰先生は中央公論社を退社して、いよいよ靜岡に轉地すると云ひだした。私達は大患のある體を動かしてよいか惡いかと云ふことを心配したが、醫師は病氣以來、寢床に横にならずに椅子にゐた人であるから、案外かまはないだらうと云つたと云ふことを夫人から聞かされた。樗陰先生は時折出す馬のいばえるやうな一種異様な呻吟の聲が隣家の人々を驚かすやうになつてゐたが、中央公論社を退き、上の令嬢はその月の六日に結婚するし、家庭の慶事も實現されて、精神に餘裕を容れる境遇になつたので、精神に餘裕が出來たと見えて元氣があつた。夫人はさうした家のよろこびを二十三四日頃、私の家へも齎して來た。私は非常にうれしいので、靜岡轉地の際には同行しようと思つてゐたところで、二十七日の朝になつて萬事休す。この前夜樗陰先生は、體のぐあいが良いので、手足をさすらす必要もなく、看病してゐた夫人も安心して睡つて朝になつたところで、復た胸のあたりに異狀を覺えて來た。これは朝の六時頃であつた。夫人は例によつて小變調が起つたと思つたので、醫師を招いて注射をさすと共に、二人の令嬢を學校へ行かした。

そのうちに注射した醫師が歸つて往つたが、樗陰先生の胸の苦痛は依然として收まらなかつた。樗陰先生はもう一回注射をすると云ひ出したので、再び醫師を迎へに往つたが、その醫師の未だ來ないうちに容態が劇變してしまつた。それが午前十時であつた。私はその朝、外出してゐて三時頃になつて駈けつけ、夫人に導かれて玄關の見つけになつた室に移してある樗陰先生の遺骸に相對した。

夜になつて私は、各新聞社に電話を以て樗陰先生の死を通知し、二十八日の朝、その遺骸を寢棺に移す時には、自分も手をかした[illegible]らのその枕頭を起きかへた。そして、二十日の[illegible]

は、喜福寺から火葬場にと送られて往く靈柩を見送つて石のやうに立つてゐた。

最後の十日間

村松梢風

十月十六日、清水の留守宅から東中野の假寓へ「一八ヒヒルタキタセンセイノウチヘキテクレ、タナカ」といふ電報が届いた。田中貢太郎が私が清水に居ると思つて打つた電報を其の儘家から打ち返して來たのだ。私は其の月の十二日から東京へ來てゐたが、樗陰先生の玄關は一度も見舞はなかつた。

九月の廿日頃或日幾月か振りで見舞ひに往つて見ると、玄關の格子戸へ主人自筆の面會謝絕狀が美濃紙か何かの大版の紙へ書いて貼つてあつた。七月十二日危篤に陷つたが幸ひ注射に依つて蘇生した事や、近來病氣全快の報が傳へられて頻繁に訪問客を受けるが實は病勢一進一退を繰り返し衰弱甚だしく醫師からも面會を嚴禁されてゐるから誰にも面會出來ないといふ事などが、細字で達筆に書いてある、たしか八月十一日の日附で、もう大分紙も古びて黃ばんだ色になつてゐるのが、一層寂しい氣分を唆つて見えた。私は手紙だけは出してゐたが病狀を聞きに來もしなかつた事を考へて濟まないやうな氣持がした。殊に七月十三日の事件については私に責任の一半があるやうな氣持がしてゐるので餘計心苦しく感じられた。其の十日ばかり前、不忍の笑福亭で催された樗陰先生の全快祝――全體此の全快祝は誰が主唱したのか知らないが或ひは樗陰先生自身の主唱だつたのかも知れない。冬中に比ぶれば病氣は些か輕快に向つた位には見られたが、決して全快したのでないことは誰の眼にも明らかだつた。けれども、半歲に亙る病臥でつく〴〵骨まで腐るやうに倦き果てゝしまつた樗陰先生は初夏が訪れ來ると矢も楯も溜らなくなつて醫師の許可も無いのに外出して外の空氣を吸ひ廻つて步いた。そして友達に全快祝までさせて無理に自分から全快したやうな氣持になりたかつたのに違ひない――へ私は

支那の伶人綠牡丹を伴れて出席した。是れも實は樗陰先生と相談の上で、綠牡丹が列席することになつた爲めに樗陰先生は自腹で藝者のお約束を四五名殖やし就中踊りの上手なのを取り揃へる用意なども怠らなかつた。十一日に私は友人廿名ばかりへ切符を贈つて綠牡丹の芝居を看に來て貰ふことにした。おもに泊鷗會同人の人々だつたが勿論樗陰先生の處へも切符を贈つた。すると觀劇日の前々日頃中央公論社の高野君か木佐木君かから私へ電話で、樗陰先生からの傳言を傳へて來た。瀧田氏は當日是非看劇する積りだが此頃また體の具合が善くない。だから萬一劇場内で倒れるやうな事があると困るから其の用心に奥さんを同伴して行き度い。で、二つ續いた席の切符をもう一枚送つて貰ひ度いといふ註文だつた。私は心配になるので「切符は易い事だが病氣を押して芝居を觀に來るのは宜しくない。芝居は月末迄あるのだから其のうち加減の宜い頃まで延ばすようにしては如何」と云つたが「瀧田氏は是非行くと云つてゐる」といふので兎に角切符だけは送つて置いた。果して其の晩樗陰先生は帝劇へ姿を見せたが大分苦しさうだつた。

「時々ハツと呼吸が止りさうになつて非常に苦しい」と云ふ。

「大丈夫ですか」と私が云ふと

「何、大丈夫です。昨日は歌舞伎へ行きましたよ。だが、一日續くんで、少し無理かも知れない」

それでも元氣はいつもの通りで、並んで腰掛けてゐる私に向つて、二列ほど前の席にゐる派手な着物を着た若い女の方へ顎をしやくつて見せ乍ら

「知つてますかあれを。あれが此の頃問題になつてるH――の女だつてね」

など丶小聲でセカ〳〵と話し掛ける。Hは矢張り私の友人で其の時も三つ四つ離れた席へ來てゐた。私はそれまでHの其の問題については何にも知つてゐなかつたが、HはHでお喋りなので直ぐに私の處へ遣つて來て「自分は此頃或る問題の爲めに煩悶してゐる」と前置きして一人の女優見習生と戀に陷ちたので十年つれ添つてゐる細君を離緣しようと思つてゐるといふ事を深刻な人生問題にぶつかつた時の悲痛な口調を用ゐて私でこれで何十人目かに當るだらう重大な告白をベラ〳〵と喋り立てた。Hは活動寫眞撮影所へ勤めてゐる文士だ。幕間に其の問題の女性をしみ〴〵拜見したが年は十七八で、野暮に大柄な縦縞の着物に紅い繻子の太い帶を締めてお尻の處に着物の皺が大きく二寸程目立つてゐる。

「女はなつてないぢやありませんか」と樗陰先生は憎まれ口を叩いた。

幕合に樗陰先生の姿が見えなくなつて夫人が獨りで淋しさうに座席に腰掛けて居られたが芝居が始まつても樗陰先生は容易に戻つて來なかつた。餘程經つて漸う顏を見せたから

「何處へ行つてたんです」と尋ねると、樗陰先生はグッと私の側へ口を寄せて

「××の奴が來てやがるんですよ、今日僕が來る事を話したもんだから」と云つた。

綠牡丹の劇は十一時半頃まで掛つたが樗陰先生は最後まで居て歸つた。

此の二日の觀劇が樗陰先生の致命傷になつた觀がある。歸宅されると間も無く發作が起つて翌十三日には意識を失ひ醫師も最期の時間を斷言した。それが面會謝絕狀にも書いてある通り注射に依つて不思議に持ち返してしまつたのだつた。十三日の騷ぎの時は私の處へは別に報せがなかつたので、全然知らずに過して、二三日經つて其の事を耳にした時にはもう全く恢復して以前よりも健康體に近付いてゐるといふ社の人の話なので先づ安心して、それから引き續いて自分の仕事にかまけたのと一つは以前から談話が最も病體に害のあることを知つてゐるので東京へ來てゐる時でも態と訪問を避けてゐたのだ。が、眼の邊りかうして七月十三日の事が主人の自筆で書いてあるのを見ると、あの時私が芝居の案內さへしなかつたなら或ひは是れ程の重態にもならずに濟んだかも知れないやうな氣持がして、誰に責められるともなく心の咎めを感ずるのだつた。私は夫人から精しく容態を聽いた。夫人は絕望的な暗い表情の下にそれらの狀態をこま〳〵と話した。つい四五日前にも發作があつたこと、それ以來一日三回宛注射を行ふことになつたこと、尿の排出が無くて全身へ水氣が廻つて、其の水氣を取る爲めに肩や足部を切り破つたりして僅かに手當をしてゐる事、腦を犯されて精神が明確を缺いて來た事、言語が明晰でない事、視力が衰へた事、食慾が乏しくて全體に非常に衰弱してゐる事……あゝ何たる悲慘事だらう、其の中の唯の一つだつて平常の樗陰先生からは聯想することが許されないやうな事柄ばかりだ。私は只惘然としたやうな氣持で其の玄關を辭したが、古びた延仁寺垣の續いてゐる其の橫丁を歩いてゐながら「瀧田さんはもう死ぬわい」と確信した。それ迄の樗陰先生


（三十歲）

餘程重態だとは云つても何時だつて死に想到するべく餘りに不似合なる靈力の持主だつたが、今間接に聽いた病狀は却つて面接するよりもハツキリと危險な狀態を說明してゐるやうに思はれる。私は始めて樗陰先生の死を腦裏に描いた。同時に私は樗陰先生の壽命は十月の中頃迄、いくらもつても十一月迄はもたないことを直覺した。それを中央公論の麻田社長にも語つた、其の頃私は自分の人生が暗黒になりかけたやうな氣持がしてゐた。十月一日に見舞つた時も同じやうな狀態だと聞いたばかりで歸つた。二日頃私は淸水に行き、十二日に上京した。翌日中央公論社へ行つて麻田さんに會つて聞くと變化はないといふ話だつた。併し此の間に瀧田家には家長の病氣とは反對の目出度い事件があつた。それは長女の結婚だつた。麻田社長も此の結婚式に列席するために秋田まで行つて來たのだつた。社の人達の話によると樗陰先生の病氣は最近少しく快い方に見えるといふことだつた。「令嬢の結婚問題の爲めに久しい間氣をつかつてイラ／＼してゐたのが、無事に濟んだので安心して從つて病氣も快くなつたのだらう」と人々は[illegible]してゐた[illegible]けれども快いと云つた處で比較的といふのみで、其の將來に微か乍らも光明を認めるとか一縷の望みの綱を掛けるとか云ふ迄には到底距離のある話だと私は思つた。私は生前にもう一度樗陰先生に會ひ度いと思つた。談話は出來なくても一分間でも二分間でも對面して見度いとそれも痛切に希つてゐた。が、重態の病人に對してさういふ希望を提出する前には家族の人達の同意も得なければならないから殘念乍ら差し控へてゐた。そこへ田中貢太郎からの電報に接した次第だつた。

十八日の正午に瀧田家を訪問すると田中は先きに來てゐた。直ぐにいつもの病間へ通された。一番奥まつた南向きの八疊で、床にも壁にもベタ一面に掛物だの額だのが掛つてゐる其の室で、樗陰先生は例に依つて木製の嚴丈な大きな椅子に腰掛けて兩方の手を肱掛の外へだらりと下げた儘大儀さうに首を傾げて「やあ」と云つた、兩方の足の先は繃帶で包まれてゐた。併し、水氣の爲めだとは云ふが顏が肥つてゐるから見た處は强さうに見える。

「何だか大變よさゝうぢやありませんか」

と私が滿更氣休めの積りでもなく云ふと

「いや、矢つ張り不可ないんです」と云つて樗陰先生は折り折り[illegible]思つたより明瞭りした言葉で病氣の經過を話した後「今日あなたをお呼立てしたのは外でもない[illegible]が、僕の此の病氣は御承知の通り[illegible]に一番[illegible]い、家族の[illegible]我儘に[illegible]

もないから、今後は病氣を直す事を第一義にして生きて行くことに方針を極めて、此の際社を退くことにして、それはそれで今話し中なんですが、話が付いたらあなたの家の清水は大變暖かい土地だつてはなしだから僕も清水へ轉地したいと思ふんです、それに就いてどんな具合の土地だか、別莊や貸家があるかどうかいろんな事を御相談したいと思つたんです」と云つた。

私は尠なからず驚いた。轉地療養はいゝ事にした處で、此の一歩も動かれぬ程の重病人に、五六時間もかゝる汽車旅行が出來るかしらとそれが第一疑問だつた。幸ひ向う迄は無事に行けたとした處で田舍には碌な醫師が無い。一日に三回宛も注射を要する體でそれをどうする積りだらう。

「其の問題は醫者と相談した結果なんですか」と私は尋ねた。

「醫者にはまだ話さないんです。あなたと相談して見て、氣候も良し家もいゝ所があるやうだつたから醫者に話さうと思つてるんです」と樗陰先生は云つた。

「それは醫者に相談する方が先決問題ですよ、一人で汽車に乘つて行けるやうな病人なら問題はないが、あなたの體ぢや動かしていいかどうかそれが問題でせう」

「ほんとにさうで御座います」と附き添ふてゐる夫人が私の意見に贊成した。

樗陰先生は一寸忌ま〳〵しさうな表情をして

「ぢや、一應醫者に相談して見るが、醫者が行つてもいゝと云つたら家はありますか」

「ありますとも、其の方は僕がどうでもしませう、實は今直ぐにも心當りがあるんです」

と云つたのは、それは今年の夏迄大岡硯海先生が病を養つてゐた鐵舟寺境内の別莊が、大岡氏が近くへ別莊を新築して引き移つたので先頃迄空屋でゐたのを思ひ出したのだつた。そこは町から遠くて一寸不便な代りに清水港と富士山とを眞正面に見る無類の形勝の地域だ。其の家の事を話すと樗陰先生は眼を輝やかして

「それで庭もありますか、そして流れも引けますか」と云つて、それから「僕はネ、田舍へ行つたら是非泉水へ天然の流れを引いて鯉や金魚を飼つて樂み度いと思つてるんです、これは八年前に僕が社の連中と箱根へ行つた時からの願望なんです。其の眞似して家であんな事して見たんだが、水道稅ばかり取られてそれで魚は段々弱つて來るんだから矢つ張り天然の流れでなけりや面白くありませんや」

樗陰先生が數千金を投じて築いた自慢の庭園にはコンクリートで固めた可成り大きな泉水がある。それへ澤山の鯉や金魚を

放つて樂しんでゐた。何事に依らず道樂と云へば心底溺れる迄徹底する性の樗陰先生は鯉を飼つても其の通りで暫らくの間に百圓だの百五十圓だのといふ高價な鯉を幾尾も池に放つて喜んでゐた。

「どうです？あれが百圓の鯉で、こつちを泳いでるのが五拾圓です。上等の鯉は矢張り異ふでせう？何處か堂々としてゐますな。あ、一寸、此の斑のある奴が百五十圓です」

樗陰先生は來客があると冬でも何でも障子を明け拂つて鯉の自慢をして、それから自身で庭下駄を履いて下りて向うの水道栓を十分にひねつて來るのだ。流れの水は本物の山水を引いてあるやうに、ザアザアと流れ込む。寒中朝つぱらから浴衣一枚で好い心持さうに流れの水と鯉を眺め乍らコップで熱燗を引つかけてゐることもあつた。處が、水道の税金を取りに來られると半期で三百六十圓に上つてゐた。これには流石の樗陰先生も驚いて其の後は餘り多く水道栓をひねらなくなつた。田舍へ往つたら水道税の要らぬ流れの水を思ふ存分に引いて鯉を放つて見度いと考へたのも無理はなかつた。併し、[illegible]流れは引けさうもなかつた。海を見ることは自由だけれ共山水を引くには不便な雨水港の土地には果して樗陰先生の渇望をいやすやうな適當な場所があるかどうかも疑問だつた。併し兎に角其の問題は醫師と相談した上で決めるといふことにした。

そこへ婦人の見舞客が二人來た。丁度私達は鰻丼を御馳走にならうとしかけてゐるところだつたので、新來の婦人客を前に置いて箸を取り始めた。田中はビールを飲み、樗陰先生と私はアメリカの葡萄液を飲んだ。樗陰先生は好きな酒が飲めないので近來は其の葡萄液を飲んでゐるのだつた。

「アルコールはちつとも入つてゐないさうだが、矢つ張り醉ひますよ、變なもんですね」と樗陰先生は云つた。

樗陰先生は鰻飯を茶碗に分けて、自分は手が利かないのでそれを奧さんの手から食べさせて貰つた。平常重湯と牛乳で居るといふのに鰻など食べても構はないかしらと私は心配になるので云つて見ると、

「無論良かあないだらうが食べるんです。月に一度位鰻をやつてます」

と樗陰先生は答へるのだつた。一體そんな事には極度に無頓着で、其の前にも蒸菓子を三つもペロリと食べてゐた。

何しろ樗陰先生は其の日は餘程昂奮してゐた。いつもの通り際限もなく書畫などを取り出して私に見せようとした。病氣になつてからは面會時間を三分とか五分とか限つて貰ふのだが、[illegible]へば一時間でも二時間でも人を引つ張つて離さなかつたのだ

だつた。今日も二時間近く居てしまつた。私が歸ると云ふと田中も歸ると云つた。すると彼女達も歸ると云つた。みんな一度に歸つてしまふので樗陰先生は淋しさうな樣子をしてゐるのが氣の毒に思はれた。何んとなくこれが最後の場面でありさうなやうな不吉な想ひに襲はれた。

　外へ出た時は、曇つてゐた空はばら〳〵と雨を降らし始めてゐた。私達は人通りの無い西片町を大學前の方へ歩いた。

　女達は正門前で電車に乘つた。私と田中は三丁目の方へ歩いて燕樂軒へ這入つて又話しをした。

「俺の役目は今日で了つたよ。これで後は追悼文を書けば愈々お終ひだ」田中はウヰスキーを飲み乍ら云つた。

　樗陰先生はあゝ云つてゐるけれ共、あの狀態では醫師が眞逆轉地旅行を許すやうなことはあるまいと私は思つたが、それでも約束なので中一日置いて廿日の正午に再び樗陰先生を訪問すると、意外にも醫師が「宜からう」と云つたとのことでもうすつかり行くことに極めてゐた。途中は醫師が附き添つて行くので危險はないといふはなしだつた。で私は、別莊を探す事と、冬期の濕度の統計を調べて來る事の二つを依頼された。其の日は寧ろ先日よりも容態は良くないやうに見受けられたにも係はらず、さう事が決ると私も急に樗陰先生の前途に一道の光明が輝き出したやうに思はれて來た。樗陰先生は種々考へてゐる事を私に話した。例の流れを引く事から始まつて、いゝ地所があれば別莊を新築して靜かに其の地で餘生を送り度いと思つてゐるとも云つた。最近麻田社長と吉野博士とで心配して呉れてゐる退社の問題が具合よく解決したならばそれに依つて今後の生活方針を立て直さなければならないと云つて種々其の計劃に就て話した。

「それから、僕の退隱後の第一番の仕事として、明治大正に亘る雜誌記者卅年の印象と人物評を書いて見ようと思つてるんです。無論是れは速記でやるんですから、あなたに其の文飾をして貰つて發表したいと思ふんですがどうでせう」と樗陰先生は云つた。

「それはきつと面白いでせう」

「ぢや、やることに決めませう。僕は廿三年間中央公論を編輯して來たけれ共、ことに依ると今度書かうといふ物の方が社會に貢獻する處が多いのかも知れない」

　と樗陰先生は云つた。樗陰先生が果してどれ程の物を書かうと志してゐるのかは知らないが、其の意見にはにはかに私は贊成することは出來なかつた。中央公論を編輯して來たことよりも大きな文化的貢獻が一篇の作品や一冊の著述に依つて擧げられようとは考へられない事だ。併しそれは別として、樗陰先生が餘生を著述に依つて送らうといふ抱負に對しては私も無條件に贊成だつた。

「何時あなた淸水へ行つて下さるんです」

「明日行きませう」

「ぢや斯うして呉れませんか、明後日──廿三日の正午に東京へ

歸つて來て結果を報告して呉れませんか」と樗陰先生は云ふ。

樗陰先生の性急は今に始まつた事ではないけれども、病を獲て後は一倍それが劇しくなつて、考へることと實行することとの間に少しでも時間を置くことが出來なくなつてゐた。私は廿四日の正午を約束して歸つた。

廿一日に私は清水へ歸つた。そして鐵舟寺へ行つて見ると其の家は依然として空屋でゐるのを見たから、直ぐ其の足で龍華寺前の大岡氏の別莊を訪れ大岡龍男氏に會つて種々話しをすると、其の別莊は寺の所有ではなく齊藤某氏といふ東京の辯護士の持家だが平常大概明けてある。其の齊藤氏は秋田の人で硯海先生の古い門下生だつた關係から大岡家では無條件で其の別莊を借りてゐたのだが、自分から手紙を遣つて頼めば大概借して呉れるだらうといふ龍男氏の話しだつた。で其の通り頼むことにして、私は度々行つた家ではあるがもう一度見直して置かうと思つて龍男氏と一緒に鐵舟寺へ行つて家を檢分した上に留守居の住持にも會つて頼んで置いた。八疊一間に六疊二間に三疊の玄關があつて、それへ六疊一間の二階が附いてゐる。景色は前にも云つた通り申し分ない。が、樗陰先生の憬れてゐる流れの一件は背後の山がさまで深くないから得られるかどうか疑問だつた。兎に角此處を第一候補地にして、萬一此處が借りられなかつた場合にだけ他を探すことにして、私は早速端書へ家の圖などを書いて樗陰先生の許へ知らせた。約束の廿四日に上京して正午に樗陰先生の家を訪問すると先生は首を長くして待つてゐた、齊藤といふ辯護士は同鄕のことで樗陰先生も父君と兩方知つてる人だといふので、それなら必ず間違ひなく借りられるだらうと云つて喜んでゐた。それに樗陰先生は二三日少しも眠られなかつたのが昨夜は十分に睡眠をとることが出來て今日は大變氣持が良いと云つてゐた。此頃中の懸案だつた退社の問題も瀧田社長が快くすべての條件を承諾して呉れて昨日の晝一切が解決したので纏つた金が手に入つた。それで病中に出來た一萬何千圓の借財も、昨夜債權者を呼んで全部支拂つてしまつて、不要の金は銀行へ定期預金に積み込んだ。其の利息だけでは暮しても行けまいが、田舍へ隱退すれば此の家も結局は不用になるから賣り拂つてもいゝ、さうすれば二萬圓位の金は別に出來る。そして二三年やつてゐるうちには世間の景氣も恢復するだらうから其の時期を待つて書畫を手放せば半分賣つても五六萬圓にはなる見込だ。それらの金を併せて生活の基礎にあてゝ自分は富士を眺め乍ら悠々と著述に從事する考へである——などと細々と話して樗陰先生は大變安心してゐる樣子だつた。で、引つ越しの日頃は、廿八日に秋田から令嬢と新郎が相携へて來て翌月の四日頃迄居る予定だから、其の客が歸つた後、十一月の五日から十日迄の間に實行する考へだから私にも其の積りでゐて貰ひ度いと云つた。私は其の前から止むを得ない用務が出來して支那へ行かなければならなくなり、月末の郵船の切符まで買つてあつたが、樗陰先生の轉地問題が持ち上つたので二三日前郵船會社へ船切符を返却してあつた。先生が今々

清水へ移れば私も當分其の土地から動くことは出來まいと考へてゐた、樗陰先生は清水へ持ち運んで行く書籍類も纏めてあり、本箱ももう註文してあると云つて、何遍も前に話した雜誌記者三十年の著述の事や、流れを引いて鯉を飼ふ事を其の日も繰り返して話した。樗陰先生の意識力は可成り衰へてゐると見えて、永く話してゐるとそれに限らず一つ事を何遍も云ふことがあつた。そして元氣も十八日の日が頂點で其の後は下り坂になつてゐるやうに見受けられた。

私は東中野の假寓へ戻つて大岡氏からの通知を待つてゐた。すると廿六日の夕景に大岡氏から「ウチツゴウデキヌザンネン」といふ電報が屆いた。すつかり安心してゐた矢先きなので私は大いに面食つた。が併し、もと〳〵貸別莊ではなし他人の持家のことだから、持主の都合で貸せられないと云はれゝば仕方がない。私は明日又清水へ戻つて興津邊で恰好な家を探して見ようと思つた。が、廿七日の朝樗陰先生の處へ相談に出かける前、つい近所に居られる近松秋江氏の所へ一寸立寄つて、秋江氏が今年の夏興津の水口屋の別莊を借りて暮して居られた緣故があるから、氏から水口屋へ照會して見て貰ふのも宜からうと思つて其の事を賴んで置いて、樗陰先生の家へ行つた。

いつもと別に變つた事はなかつたが、玄關へ出て來た下婢に向つて何心なく「どうですか」と尋ねると下婢は「もういけないんで御座います」と云つてわつと泣き出した。

胸をどやし付けられたやうな氣持で急いで靴を脫いで病室へ行つて見ると、いつも椅子の上にゐる樗陰先生は、椅子の前にのべてある敷蒲團の上へ斜かひに仰向けになつて寢轉んでゐた。其の側に夫人と麻田社長とが居た。

今朝から發作が起つたが、醫師が注射をして歸つた後、いつものやうに恢復することゝ思つてゐると段々不可なくなつて、到頭十時に息を引取つたと夫人は涙に咽び乍ら私に話した。私は自分の時計を出して見ると十一時少し前だつた。

樗陰先生の體は水氣の爲めに四斗樽のやうにふくれてゐたが、其の太鼓腹は高く盛り上つたまゝ少しも動かなかつた、糊帶を卷いた二本の足を揃へて突き出してゐる。顏の半面に紫色の斑點が滲み出してゐるが、皮膚の色にはまだ色の氣が殘つてゐて、眼を閉ぢ、口を少し開けて樂々と仰向いてゐる顏付きには別に苦痛の名殘りもなく、何か考へ乍ら睡つてゐるやうな風情だつた。

平福百穗畫伯の繪ばかり一面に掛け散らしてある病室はまだ其の儘の體で、書物が積み上げてあつたり、抛り出した儘になつたりしてゐる。樗陰先生が何か讀みかけたり、考へかけたりした其の儘の連續を保つてゐた。

脈を取つて見ると、脈搏は止つてゐるけれども、其の手は手首までまだ溫かくて死んだ者の冷たさや固さはなかつた、私は樗陰先生が死んだといふ實感を得る迄にはまだ相當時間を要しさうな氣持がした。

（十一月六日上海丸船室にて）

□瀧田君と鑑畫

森田恒友

自分のように平素病氣勝ちのものが、存外にしんねり強くて、瀧田君のやうな活動家が早逝するといふことは、誠に人間の壽命といふものは分らないものだ。

今年はどうもよくない歳であつた。春には父を喪ひ、夏には妹を喪ひ、外にも春から夏にかけて二三の知人の卒去に遇ひ、自分も二ケ月餘りを病臥し、之れでもう悪いことは無かろうと思つて居たら瀧田君の長逝に會してしまつた。

私の古い畫友、百穂氏を始め、未醒、鼎、白羊の諸子と共に自分も四十二の所謂危年を二三年前に過ぎ、もう當分凶年は無い筈であつた。四といふ數は何か昔から面白くない數とされ、此の面白くない數を反對に考へるような意味もあつて、畫友仲間で四十の齢に入つた者と、四十を越した者が迎ひ、三十歳の者が送るといふ一會を、たしか未醒君の發起で面白がつて二三年續けて催した。こんな會は世間の人には陰氣に感ずる會であろうが、吾々にはそれが何か一つの活氣をもつ面白い一夕の會となつたのだつた。それで誰れでも知人は此の會に引き入れようといふことになつて、瀧田君が不惑の齢に入つた時も、一つ上の未醒君や私が歡迎會をしたことだつた。こんなことを憶ふだけでも瀧田君の長逝したことは淋しい。

文壇と瀧田君との交渉は私共にはよく分らなかつた。唯間接に感ずるのみだつた。それは文壇諸氏の追憶につくされるだろうから、私は趣味家としての瀧田君の鑑畫の一端を、私の感じたまゝに語つて見よう。

瀧田君といふ人は、實に多趣味な人でもあつたが、又鑑賞家として君一流の點を有した人でもあつた。私は畫家中で瀧田君と知己になつたのは、或は一番古かつたかも知れないが、例の[illegible]

樓の年末の會に始めて招ばれて行つた時には、旣に百穗氏は勿論、止水、素明、末醒、芋錢等の諸氏は皆瀧田君の知己であつた。百穗氏は同鄕のことでもあり、畫家中では最も古い知己であつたろう。それ等自分の先輩や友人の作が瀧田家の部屋々々に掛けられてゐたので私は嬉ばしく思つた。中でも百穗氏のものは君の最も多く有したものだつた。恐らく君と私とが知り合ふ間には、百穗氏が最も多くの仲立ちとなられたことかと思ふ。

瀧田君の鑑畫眼は、割合に一直線であつた。一と度ほれゝば少々の拙作でも意に介せずといふところがあつた。其處にあの人の熱と愛とがあり、世の理智的の鑑畫家や、盲目的の愛畫家に比して遙かに勝れた鑑畫家であつた。

瀧田君はよく言つた。「自分の好きな繪が、自分の後の代になつて、萬一人手に渡つた際に、粗末にされることは心外だ。それ故表裝は出來るだけ氣に入つたようにして置く」と、全くその通りして居たようであつた。私は特に自分の拙作に「こんなによい表裝の必要はないのに」と思ふこともあつた。よい表裝と言つても、世間の所謂ぴか／＼の表裝ではなく君の好みは可成り澁いものでもあり、又畫に合はせるといふことを樂しんで表具屋と相談しては仕立てさせて居たようだつた。其點誠によい好みであつた。現に死の前日にも表具屋を呼んで、病床で何かと表裝のことを言ひ附けて居たといふことを、弔問に行つた際に夫人が言はれて居た。一昨年であつたか、大雅堂の六曲屛風を手に入れて、その表裝が惡いといふことで、いろ／＼苦心をし、それをうまく張り合せることを考へて、笹川臨風氏にその所以を書いて貰つたと言つて、私にも見て呉れといふことだつた。成る程よく張り更へたと感服したことだつた。

せつかちな瀧田君の性分は、時には待つて居る間に描いて呉れといふようなこともあり、一年前厄拂ひの祝宴に招かれた時なども、金屛に寄せがきをしたが、私は兎角遲筆だものだから諸氏の間に混じて金屛を汚すことを恐れて尻込みしたに係らず、「何んでもよい、墨を附けさへすればよい。記念だから」と言はれてとう／＼落城したことだつた。君はそういふせつかちな感情家だつた。

だが、瀧田君のせつかちな感情には少しの惡感を持ち得なかつた。瀧田君にせつつかれゝば每も落城してしまつた。瀧田君は平素遲作である私を承知の上で落城させる人であつた。

何時であつたか、「雲坪を見て呉れ」と言つて招かれたことがあつた。「森田さんならきつと雲坪をほめて呉れるに違ひないと父も言つて居るのです。」と言つて二十幅ばかりの雲坪の作を見せてくれた。信州の雲坪は不遇な畫家であり、死後未だに市

價を持ち得ない作であるが、私の知人には他にも雲坪を愛藏する人があつて、私もその畫品の軟かさと親しさとを愛するのだが、瀧田君は何んでも何處かの古道具屋で始めて雲坪の半折か何かを見出して、言ひ値で買ひ、「若し雲坪が出たら何時でも買ふから」と言つたといふことだつた。道具屋はよい客と見て雲坪を探し出しては段々と値段を上げては持ち込んだらしい。が結局「自分の好きなものには價を問ふべきでない」といふ君の情では、氣に入りさへすれば道具屋の言ふがまゝに手に入れて集めたものらしかつた。

　瀧田君の鑑畫趣味は、大體に於いて文人畫趣味であつたが、而し世の所謂文人畫好きとは大分違つて居た。「畫には詩が織り込まれて無ければ面白くないから」といふ意味をよく口にした。その言ふ意味が分つて居たから、私も多くの場合同じて居た。

　晩年三四回角力に誘はれて行つたが、君の好きな角力、體は小さいが手取りな角力で、時々大物を喰ふ兩國は、そろ／＼下り坂であつたし、瀧田君も病氣が起りかけた時であつたから、聲援もあまりしなかつた。何となし瀧田君の見物顔には淋しさがあつた。恐らく大きい聲を出すことが病氣にさわる淋しさではなく、自分の好きな角力取が下り坂になつたことが第一の淋しさであつたことと思ふ。

　そんなことを思ふと、畫家として幾分でも見分けられた知己の前には、生涯上り坂でありたいものだと思ふ。

瀧田さんと壺と

佐藤功一

　おもむろに靈前に進んで線香を手向け、掌を合せて默想す[illegible]る。位牌を中心にヂツト見つめ、そして位牌の[illegible]の上半身が[illegible]

としてゐる。
　であるから知人の家族の死を弔ふ折など、生前の其人の貌を知らぬおりは誠にたよりがない。こういふ場合には何々と其戒名を誦する事にしてゐる。
　あとからあとからと押し合ひへし合ひする葬場などでは、心靜かに是等の時を得ないので當感する。たゞたゞあはたゞしく燒香をすましてしまう。
　十月三十日に行はれた瀧田さんの、喜福寺に於ける告別式は非常に盛大なものであつた。私の伺つたのはたしか二時二十分位の時分であつた、表門から、式壇まで堵をなして、歸りの人の間をくゞツつて行くのに中々骨が折れた。その時すれちがつた人々の中に、笹川臨風さん、長谷川如是閑さん、芥川龍之介さん、齋藤隆三さんなどを見かけた。こういふ方面に知人の少い私ですら、チョツトの間にこれだけの人を見掛けたのであるから、告別式の時間であつた二時から三時にわたる一時間の間には、文筆に携はる知名の士の頗る多かつたものであるといふことは想像するに難くない。靈前に進んで左手に居られた瀧田さんの父君に短かい挨拶をする事さへ辛うじて出來たやうな事であるから、此の場に於ける燒香は極めてあはたゞしいものであつた。が併し私は、既に二十八日の夜に西片町のお宅で、しかも生前屢々そこで語つたあの玄關の突き當りの池に面した部屋で、そこに安置せられた棺前に、心のまゝに例の默想も燒香もして居つたので、その點に思殘りはなかつた。
　私が瀧田さんと識つたのは、大正十年のたしか五月であつた。中條精一郎さんの紹介であつたと記憶するが、突然訪ねて來られた。取つがれた名刺を見て私は、脊のすらりとした寧ろ脊せ形の姿を想像してお遇ひして見ると、それは意外にも赤ら顏の丸々と太つた腹を大きく突き出した人であつた。丁寧な初對面の挨拶がすむと、あの丸々と肉厚の脊をぐつと反らしてぐんぐんと突込んで來るやうな話ぶりをせられた。
　訪問の趣意は、都市住宅の耐火構造の事に就て何か書くやうにとの事であつた。當時都市問題が大分やかましくなつて來、たしか内務省の耐火建築の宣傳などのあつた直後だつたと記憶する、これを主題として帝大の建築學教室の佐野教授と内田教授と自分とに論文をかゝせやうといふのである。承諾の旨を答へると、その話して居つた耐火建築の引き續きに、當時私が顧問をして居つた或るコンクリート會社に緘を依頼して建築中であるから、時々見廻てくれぬかとの事であつた。これはあとで瀧田さんの中央公論編輯上に於ける材題の選定に對する慣習をはるやうになつてから氣の付いた事であるが、此の際の問題な

ども直接には其藏を建て乍ら思付いた事に相違なかつた。其後私の螢の蒐集を見るとすぐに螢の話をかけといふ。私の科學博物館に關する談片がほんの二三行新聞に出ると、それを見てすぐに其の記事をかけといふ。こういふ事が屢々あつたが、何か話をしてゐるとすぐその話をとらへて編輯上のものにならぬかといふやうに頭の極めて敏活に働くことがよくわかつた。そしてどういふものか瀧田さんに依賴されるとどうしても斷り切れなくなるのであつた。これは其編輯に對する熱心さが所謂神に入るといふのであらう、全くそれに魅せられてしまつてどうしても承諾をしなければならぬやうになるのであつた。或る人が、どうも瀧田君に遇つては叶はない、まるで强盜みたいなのだから、といつて笑つた事があるのを承知してゐる。此の言葉は決して批難の意味での惡口ではないので、其熱心さにまゐつてしまつて、結局書かせられてしまうのだといふ意味を述べたのである。科學博物館の記事のをりなどは、締切近くなつて私はあの大隈さんの葬式で日比谷で倒れて入院して居るのであるのに、何とか日限に間に合ふやうに[illegible]き方であつた。仕事に對する熱誠は既に定評のある事である。

いつであつたか何か笑談の折に、中澤臨川君はあなたに殺されもたのかも知れない、あの日比谷の病院に於ける私に對するやうな流義では、中澤君は轉地してゐても、あなたの熱烈な依囑には斷りきれず、靜養は出來なかつたらう、といつたら、例の身をそらして腮を上にギツと口を結んだ事であつた。私の此の言葉は當を得てゐなかつたかも知れぬが、瀧川さんを殺したものこそ確かに、瀧川さん自身の此の性質であつたに相違ない。まだ四十四歳だといふに何としても惜しい事をしたものである。如何なる方面にもあのやうなリーダー（リーダーといつても範を示すとか師表となるとかいふのではなく、人をしてぐんぐんと進んでよい作物をつくらせるといふリーダー）があつたならばそれの進歩は驚く可きものに相違あるまいと思ふ。

私はその頃までは自分の專門の事以外に筆を執つた事のなかつたものであるが、その私に螢の話を書かせるときは、吉村冬彦さんの丸善と三越やあの自我像を書くところの文章の載つてゐる古い中央公論などを送つて、吉村さんが科學者でありながらさういふ方面に才能を持たれこんな良いものを書いた、とこんなことを語り乍らだん／＼私をヒプノタイズしてしまつたものである。また「死に面して」といふ記事をかゝせるときは[illegible]れは私が大患で日比谷で倒れた事があるもので云ふなら此の[illegible]事をむけて來たのであるが、それほど私の大患を知り乍ら前のやうに病院にまで原稿の話を持ち込んで來たといふのが瀧川さ

んの瀧田さんらしいところなのであらう。）有島武郎さんのたしか婦人の死を書いた原稿、それは瀧田さんの秘藏のものであつたらしく、死體を描寫した場所の上部にペン畫で其死體の畫いてあつたもの、恐らくは有島さんは先づ其繪をかいて後、その繪に依て文を綴つたものであらう。その原稿を私に見せたり、また子規さんの臨終に近い頃の日記などをかしてよこして、私の心をその方へ向けさせるやうにしたものであつた。此行動が一寸した思付きから殊更にしむけるといふやうな事ではなく。如何にも自然に心に浮び出づるまゝにして行く事とよりは見えなかつた。これ等は私に對してした例の二三に過ぎないが、總ての人にキツト斯ういふやうにして行つたのに相違あるまい。

何にしても強いきびしい性格の持主であつた。秋田縣の人には二つの型があつて、南羽後の人は概しておとなしいが北羽後の人には強い性格の人が多いといふ事を聞いた事がある。瀧田さんと話しをしてゐると、こちらのいふ事はさうですか〳〵と簡單に押へて自分のいふ事をぐん〳〵運んで行く。笑つたかと思ふとすぐ顏を上げ腮をぐつと突出して固く唇を結ぶのである。

二十八日の夜にお宅の棺前で燒香した折、私の眼の前に表はれた瀧田さんの笑ひ方がまたいつもの通りであつた。笑ひ乍らそうですか〳〵といつてぐつと腮を上げて固く唇を結ばれた。私は大患になられてからの瀧田さんを知らないものであるから、その時私に顯はれた瀧田さんは、依然として其あだ名の示す通りの金太郎そのまゝにクリ〳〵と太つた眞赤な貌をしてゐた。

私の瀧田さんとよく話したのは大正十年から十一年へかけてゞあつた。地震後丸ビルで二度ほど遇つたのが最後のものであつた。最も交渉の多かつたのは家の建築中であつて、最も多く棺の置かれた室で話した。家が落成して其前の庭に池をほつた頃もそこで池や鯉などに付ても話したやうに思ふ。大きく深い赤繪陶器のコツプにビールをなみ〳〵とついでグン〳〵呑み乾し乍ら、私にとつては珍らしい文壇の人々の逸話や繪の事などを話された。百穗さんや恒友さんの繪が多くあつた。漱石さんの書や繪などもよく見せてくれたものだ。そしてその繪や書などには瀧田さんと是等の作者との間に於ける交渉の話がきつとついて居るので、よくその話をされたものであつた。誰れであつたか故人で、あの蘭をよくする南畫家の繪を蒐集して居つて、それを最初偶然にも麻布？の道具屋で見出して、その繪が如何にもよいので持ち歸つて其道の人に見せたら、それが相當な人であつたさうだ。たぶんそのやうに話された事と記憶する

が、書畫の鑑識にかけては中々御自慢なものであつた。たしかにその鑑識眼に於ては一見識を備へられたものらしかつた。が併し道具類にかけてはそれ程でもなかつた。いつであつたか蒐集の陶器を見よとの事で藏の中へ案内された事があつたが、そこに陳列されたものの數は相當あつたがこれといふものも見當らなかつた。相識てから三ケ月目の夏の事、京都で見付けた李朝陶器の瓢形の染付の壺に酒をつめて送つた事があつたが、よほど歡んでくれたものらしかつた。それから程すぎて訪ねた所、此棺をおかれた部屋の少さい置床の上に其壺が飾られてあつた。斯ういふやうに飾られて見ると其ほそい口の少し傾いてゐるのが氣になつて少し恥かしい氣がした。今年の七月に病氣の御見舞として、父君に御手渡しゝて來た唐三彩の德利形をした壺を何と見られた事であらう。今はもうそれを聞くよしもない。私が磁州窯の黒壺を集めて居た時分、それの口の小さいよい形のものを購入されたのを記憶する。いつぞや本郷の通りで貰はれたといふ碧瓦の旁吻であつた彫刻を見せられた事があつたがあれはよいものであつた。二つあつて一つは人物で一つは動物であつたが、私は人物の方がよいといつたが芥川さんは動物の方がよいといはれたといつてゐた。そして瀧田さんもその方を好んで居られるらしかつた。こういふやうな點では芥川さんを信じられて居るやうに見受けられた。私が錫銅で瑞魚の文鎭を作つたのを見せたが所望されて御送りした。それに箱を作られて箱書きをせよといはれたのは甚だ困つた事であつた。こういふものを丹念に所理される點は瀧田さんの特性であつたらう。あの細い文字で、少し長目に整然と書きつけて行かれる書態には、スツキリとした几帳面の人である事がよく顯はれてゐる。こういふ點に於ては瀧田さんに面接して得た印象とはよほど異つたところがあるやうに思ふ。

書畫を好まれる事にくらべてまた、住宅もあまりかまはれなかつたやうである。藏が落成して後、二階の階段の突當りの室を支那風にしたいと相談を受けた事があつたが、それは遂に實行されなかつた。美術受好家の多くは小藝術品の蒐集から始まつて次第に大きいものに移り、遂に住宅に及ぶものであるが、瀧田さんもあれだけの愛好家であつて、あんなにも熱のあつた人であるから、も少し年よられたらきつと住宅へ進んだに相違なからう。だんだんに趣味も研究もその方へ流れて行つたら、キツト凝つた住宅を作るやうになつた事であらう。併しそれに携はつた建築家をなかすか怒らした事ではなからうかと一寸誰れしも思ふ事であるが、信じたらまかせつきりにするといふやうた調子が強く一面にあつたから、或は此人ならときめたらぞ

んぷんに腕をふるはせたことであらう。確かにそうであると信ずるものである。

瀧田さんと生前交りの深かつた文筆專門の方々がいろ〳〵の同顧をかゝれる中に、限られた方面だけの、そしてその交りの期間もさほどに長くなかつた自分には、追悼の記事をかくやうな事は不適任と思はれるのであるが、木佐木さんからのたつての御頼みのまゝに憶面もなくこれをかきつけるのである。

思ひ出すまゝに

山本實彥

□いつも同じ秀英舍校正堂で左翼と右翼とにわかれて校正に從つていた瀧田さんの死は私にとりて尤も思ひ出での多い一つである。殊にそれが世間から競爭雜誌として目せられて對立していた關係があるだけに私にとりては、すべての人と異つた感情の浮ぶのはやむを得ぬことである。私はいま氏と共に校正していた同じ部屋で追懷の一文をかかねばならぬ因緣を不思議に思ふ。

□瀧田さんと私とは性格の似通つた所が極めて多いやうに思ふ。短氣で癇癪で思ふことをズンズン平押しで行く、從つて雜誌の上にもその性格がよく現れていた。ただ私は藝術の鑑賞力に至つては到底氏の如く自信がないので小說、說苑等の採擇も合議制を實行していた、尤も私も「改造」を始めてから早や七年になるので多少の自信も出てこないでもないが、この點は將來とても自分一人で決めないつもりだ。一二年前であつたが雜誌「隨筆」で、瀧田さんは私の編輯方針に對して無定見だと非議されたことがあつた。私は或點ではムツトしたが、しかし大體に於て その見方が妥當であると思つた。尤もその雜誌が出る前に瀧田さんは私の校正室に來られて「實は雜誌「隨筆」である作

家のことを難じてつひあなたにまで非議の筆が及んだことを御詫びします、どうか惡しからず」と鄭重に釋明せられてお互に笑ひ合つたこともあつた。

□第一に氏の功蹟の認むべきは「中央公論」を綜合雜誌として成功せしめたことである、こうした類型は世界にまだ一つもないのである。論說、說苑、創作と殆んど我民衆に必須な智識と趣味とを等分に供給する文化普及の第一義を達成されたことは、立派な一個の大學のなし得るだけの偉きい事業をなされた。私どもはいまの學校教育なるものが沙漠のやうに乾燥なもので人生の情的方面に何等觸るるところなく、またその時代の背景を有する教育家の少ないのを遺憾に思つている。瀧田さんは學校教育に缺陷せる藝術、思想の方面に驚くべき功獻をつまれたのだ。

□維新以來我國の政治を我物顏に振舞ふた藩閥や軍閥と永い間力作をつゞけられてデモクラシーの徹底につとめられたことは我が國民の忘れてはならぬものの一つである。尤も華かな立役者として吉野大山兩氏の存在は誰しも知つていた所であつたろうが、その蔭武者たる瀧田さんの功勞も決して兩氏に讓るべきものではないと思ふ。大正八年の初頭マルキシズムの昂揚さるるまでの論壇は「中央公論」の獨舞臺であつたのであつた。

□第二の功勞は我文壇の開眼者としての努力である。この點は私が喋々せないまでも誰しも知り切つておるところである。

□瀧田さんが、校正室にあつて一章一文を校正しておるさまを傍から見ておると、或は首をかしげたり、輕く舌皷を打つたりなぞして何でも茶をたてる名人が一滴又一滴を舌の先きで味ふがやうに味はつていた。その藝術上に於ける私との立場、趣味は違つているにしても雜誌編輯に沒頭三昧に入つたあの姿は羨ましいかぎりであつた。

□瀧田さんの强味は「中央公論」の編輯に專念する事が出來ることと、豐富なる經驗を有することと、多趣味の生活を有することにあつた。私の場合は俗務が多端で「改造」の編輯に專念の出來ぬところ、經驗の不足と趣味に徹底せざる所にあつた。從つて粗笨と罵られ、一貫した藝術上の見方がないとの私への罵辱は甘んじて受けねばならぬときが多かつた。

□瀧田さんは雜誌記者を志して、そして雜誌記者で終始した、藝術鑑賞家乃至は批評家として終始した、生活も、趣味も自己の欲する雰圍氣で成長し、爛熟し、往生を遂げた。齡は短かつたが眞に悔ゐのない一生であつたろう。

□私は「改造」を創刊してからいつも瀧田さんの存在を誰よりも強く意識せなければならぬ立場にあつたが、いかに物判りお

切迫しやうが、悠々迫らずしてコツコツ校正しておらるる狀態を見ては名狀しがたい感に打たれることが多かつた、こうしたことは半ば經營のことを考量せねばならぬ私の立場では出來ないことであつた。私は新聞記者や雜誌記者に隨分數多い知己もあるがこういふ「名人肌」の人を見たことはない。

□思想問題に對する造詣がどれほどあつたかは私は知らないところであるが、綜合雜誌の編輯者として性格、趣味、經驗等より考へて氏以上の適任者はなかつた、少くとも過去に於てはなかつた。

□梅ヶ谷や大蛇潟に一點似たやうな性格を有つ瀧田さんの赭ら顏を回向院で見ることが出來なくなつたのもさびしい一つだが、それよりはそう云ふドツシリした性格を我雜誌界に失ふたことが文壇にどれほどの損失であるか。

□ 社内での瀧田さん

島中雄作

瀧田さんが車夫をひき殺した話。——これは誰もあんまり知らない話だらうと思ふ。

話は僕の入社當時のことである。

僕の入社したのは今から足かけ十四年以前、僕が學校を出たての二十六だつたから、瀧田さんが三十一。活躍時代、發展時代の最中だつた。その當時已に隆々たる聲名を馳せてゐた中央公論社も、實はまだ麻田社長の私宅の、二階の八疊の疊の上に茣座を敷いて、その上に二三脚の椅子と卓子とを並べただけの極めて簡素なものだつた。

僕が初めて瀧田さんにお目にかゝつたのも其處でだし、編輯室の建つまで何年かそこで僕は瀧田さんの下に働いてゐたものだ。仙台平の袴の裾をシューツ／＼と云はせて、いつでも何か

小聲に節をつけて梯子段を上つて來る瀧田さんの容子は、今でも眼に見えるやうだ。

瀧田さんは常に車を離さなかつた。朝、出社した瀧田さんの背後には、もう空車を挽いた車夫がついて來てゐた。そこで瀧田さんは、まるで喧嘩でもしてゐるやうな句調で麻田さんと話をして、ピタツと喋舌り止んだかと思ふとスートと車で何處かへ引上げて行つたものだつた。

後には、瀧田さんは自分で車を買つて、定紋付の自用車を乘廻すやうになつたが、なんでもその自用車を備へつける前後のことだつたと覺えてゐる。——

善さんといつて、小柄ではあつたが均齊のとれた、筋肉の逞しい、それはよく走る男があつた。

今のやうに自働車がブウブウと後ろから遠慮なく拔いて行く時代では、人間がいくら能く走つたとても及ばないことだし、車屋の衆は段々減れて行くほかはないが、その頃では自働車の數もまだ數へるほどしか見られなかつた時代だつたから、「ハイ、ハイ、」とか何とか云つて「ゴム輪の車」が可なり威張つてゐたものだつた。從つてスツキリした健脚の車夫にいなせな風をさせて、前の車を追拔かせては好い心持に納つてゐる人もあつた。東京中で一番好く走るのは神田錦藏の若い衆と車屋仲間で評判が決つてゐた。その神田錦藏の若い衆と競爭したことがあるといふのが善さんの自慢だつた。

「……ナアニ、下り坂になつて拔く奴なざ、何でもありませんさ。これで上り坂をグングン拔いてく奴と來ると、油斷がなりませんがね。」などと、車を挽き〱言譯して聞かせる善さんだつた。

活動家で、性急で、寸分の間もじつとしてゐられない瀧田さんに、この善さんが氣に入らない筈はなかつた。「善さん、善さん」と言つて乘廻してゐた。——斷るまでもないと思ふが、こんな抱車夫同然の善さんに對しても、瀧田さんは決して「善」とか「オイ」とか云つて呼捨てにはしなかつた。先方で帽子を脫つてお辭儀をしたら、自分も帽子を脫いで禮を返したものだ。

その善さんが、ふと一月ばかり、その姿を見せなくなつた。或時、私は私の車を挽いてゐる藤さんといふのに訊ねた。

「善さんは此頃どうかしたのかい？」

「たうとう瀧田さんにひき殺されてしまひましたよ。」

藤さんは沈んだ顏に眞顏で、車を挽きながら答へるのだつた。

「どうして？」私は變な事を云ふと思つて、訊いて[illegible]

にゐられなかつた。相手は不相變おちついてゐる。
「ナアニ、あれぢや、誰でも殺されッちまいまさ。」
その當時瀧田さんは、なんでも十九貫餘りあつたやうだ。十九貫からの大兵を載せて、朝から晩まで、それも時によると、夜の十一時、十二時過ぎまで乘廻されるのだから大抵の者はまゐつてしまふといふのである。それに瀧田さんは人一倍危ッかり屋で、車の上で始終はら〳〵してるのだら、挽いてゐる者も大抵氣骨が折れるといふのだが、その上に、
「瀧田さんは、なんしろ、きれますからね。」と言つて、藤さんはその話を打切つた。
瀧田さんは金遣ひの荒い人ではあつたが、無駄な金を使ふ人ではなかつた。普通に觀て無駄遣ひのやうに見える場合でも、瀧田さんにとつて意味のない金は一文も使つてゐなかつた。その代り、効果のある處へなら、幾らでも注ぎ込むことを吝まなかつた。自分の飲む酒なら、幾らでも飲ませることを辭さなかつたが、自分の喫まない煙草代を拂ふことは厭がつた。その調子で、よく驅けたと言つては五十錢、えらかつたらうといつては五十錢、飯を喰へと言つては一圓、それに一本二本のお銚子まで添へて、一日に何回といふことなしに、馬車馬に飼葉を遣るやうにチップで善さんを犒つたものだ。健脚自慢の善さんはお調子に乘つて走つたものらしい。
効果が上り過ぎて、到頭、病氣になつて善さんは死んでしまつたといふのである。
「『車上の人』といふ小説を書きたいなア」瀧田さんが言つたのは、その時分のことである。
瀧田さんと僕とでは、何から何まで違つてゐた。でつぷりと—といふよりは丸まつちく肥つた赧ら顏の瀧田さんと、痩せて蒼い顏をした僕とでは、見ただけでも已に隨分好い對照をなしてゐただらうと思ふが、違つてゐたのはそれッばかりではなかつた。遣り場に困つてゐるらしく思はれるほど充實した精力、それも少しは頒けて欲しかつた。熱中すると脇目もふらないで押して行く熱、それも羨しいものだつた。酒を飲み過ぎた翌朝だけは、「こんな日に訪問しても駄目だから」と言つて稍倦怠の色を見せてゐたが、それも晩方お湯にでも入つて來るとケロリと忘れたやうになつて、また飲り出すあの健康さには、ほと〳〵羨しかつた。健啖な瀧田さんと胃弱の僕とでは比較にならなかつた。それに生れつき私は酒が飲めなかつた。美人を見る眼が正反對で、お互に鑑賞の分野を侵さなかつたことだけは、時にとつて都合のよい事もあつたが、大抵の場合はおつきあひが出

來なかつた。努めてゐても永くは續かなかつた。

入社當時二人ッきりの時代には、なんでも瀧田さんの言ふことを諾かなければならなかつたのだが、さうくは身體が續かなかつた。何しろ自分の面白いものは誰にでも面白いものと定めてしまつて、體質や性格の相違といふやうなものは少しも考へてくれない。それでゐて、熱が上つたり下つたりする度に興味の對象が間歇的に變つて來て、そのたんびにその興味を強いられるのには弱つた。讀書熱が昇つて來ると、部厚い洋書を十五六冊も秀英社の校正室へ抱へ込んだものだ。僕には難解な原書も無理に我慢して讀まねばならなかつた。書畫骨董熱が昂つて來ると、校正はそつちのけで鑑賞を強いられたりした。そんな事はまだよい。自分が美味いと思ふと厭でも應でも喰べさせられるのには閉口した。市ケ谷の秀英舍、今でもあの邊は場末の感があるが、十年以前は尙更酷かつたもので、そこへ每月一回一週間ほど必ず校正に出掛けたものだが、その度に僕は胃を惡くした。カツだのテキだの、コロッケだのと大抵は有り來りの、安洋食屋の油臭い奴を四五皿づゝ平らげるのだから胃も損す筈だつた。多くの胃病持ちがさうであるやうに喰ひしん坊の僕は、勸められるをいい事にして平らげた。或時などはその上に酒を飮んできた鰻丼――到頭ヘドを吐いたことがあつたのを覺えてゐる。

鰻丼――といへば、その頃神樂坂の二葉から電話で取寄せたものだが、秀英舍の女の人に註文して貰ふのに瀧田さんは、決つて判で捺したやうに「四十五錢のを」と附足すことを忘れなかつた。或日、もう每日の事だからと思つて、「四十五錢のを」と附足すのを儉約して叱られちやつたことがあつた。さうしてもう一度言ひ直しにやらされたものだつた。

いかに喰ひしんぼでも識切れなくつて「もう澤山！」と言つたりなんかすると御機嫌を損じることもあつた。

「君、それ位のもの、やり給へ、やり給へ、大いにカロリーを攝る必要があるよ、下宿屋の飯では――カロリー、カロリー君、これ、カロリーがどれ位あるだらうね、カロリーか？」といふ風だつた。さうしては、脂ぎつた奴をフォークに突差して、さも好もし相に見せびらかしたりした。さうして瀧田さんは益々肥つて行く、僕は下痢して益々瘦せて行く……。この調子で今日まで十四年間瀧田さんの下に働いてゐたら、僕のやうな胃腸の弱い人間は、善さんの筆法を以てすれば、喰らひ殺されてゐたかも知れない。その點において今の中公編輯の諸君は、揃ひも揃つて健啖家だつたから助かつてゐたといふものである。

鰻丼を「四十五錢のを」と念を押さねば氣が濟まなかつた瀧田さんの性格は、何處にでも表れてゐた。今でこそ鰻丼は一圓以上でなければ美味いのは喰へないやうだが、その頃はまだ二十錢で普通の鰻丼は喰へたものだ。四十錢以上となれば上どんだつた。だから四十錢でも五十錢でも、そこはいくらでもさう大した相違もなさ相だつたが、瀧田さんにとつてはさうでなかつた。偶々、四十五錢のがバカに美味かつた經驗は、その後何年經つても、例ての四十五錢のでなければならなかつたのである。

――それと同じ事が瀧田さんの旅行についても言はれる。

瀧田さんは、あれほどの活動家であつたに拘らず、旅行は餘り好かれなかつた。好かれなかつたのでなくて、未見の地を探るといふやうなことは瀧田さんの性に合はなかつたやうである。あの車の上ではら〳〵してゐたといふ性質が、そこでも瀧田さんの出足を非常に澁らせたものらしい。先人未踏の地を跋渉するなど、思ひも寄らなかつたが、餘程開けた勝地でも、行つたことのない土地は、不安が先立つて邪魔をしたらしい。誰にしても好奇と同時に不安を伴ふものだらうが、瀧田さんにはそれが人一倍甚だしかつた。第一汽車、第二宿屋、土地不案内の旅行は、瀧田さんの遊山氣分とは似ても似つかぬ焦燥を以てその旅情を壓迫したらしかつた。悠然と胡坐をかいて坐り込まねば旅行の味が出なかつた。淋しい懐中では已に業に問題ではなかつた。茶代が不足で虐待されるなど、夢にも瀧田さんの堪へるところではなかつた。

だから瀧田さんの旅行は、箱根か鹽原か、日光かに限られてゐた。「少し變つた處へ」などと言つてはゐても、いざとなれば矢張り例遊の地を訪ねた。

麻田さんと瀧田さんと僕とで、鹽原へ行つたことがあつた。編輯室での瀧田さんが吾々の足許へも寄れぬ精力家であつたことは言ふまでもないが、宿屋に於ける瀧田さんにも休息といふものが寸分もなかつた。活動か？睡眠か？だつた。十二時過ぎに床に就いても、五時か六時にはもう起出してゐるのだから、時間にしても僅だが、寢てゐる間でも、眠つてゐるかと思ふと起きてゐたりして、いつの間にどれだけ寢たのか解らなかつた。――これまでは瀧田氏の精力を物語る話題として、よく麻田さんの一つ話にも引出される話しであるが、その先きに、まだその頃瀧田さんと馴染の淺かつた僕に一寸面白く感ぜしめたエピソートが殘つてゐる。

――吾々三人が寢ついたか寢つかないかといふ時分のことだつた。番頭がスーツと襖を明けて、何をしに來たのか、中へ入

りもしないで、閾の外から又ピーツと閉めて行つてしまつた。何かの見廻りに來たものと思つて僕はそのまゝ寢てゐたが、その物音に眼を醒ました瀧田さんは、ムクムクと起上つて泥棒が入つたのではないかと騷ぎ出した。「あなたの金時計はありますか？……」と言つた調子で……。

豪放不羈の瀧田さん――まだそんな風に思つてゐたその時分の僕には、ちよつと異樣に感じたことであつた。恐らく今でも、瀧田さんのさういふ一面を知らない人には、不思議に思はれるであらうと思ふ。

尤も、その時、盗られてわるいやうな何一つも持つてゐなかつたことが、餘計に僕をしてさう感じさせたのかも知れないけれど。

何にしても瀧田さんはえらい人であつた。吾々の及びもつかぬ處のあつた人であつた。千人に一人、百年に一人の人であるかも知れない。僕は、今にして思ふのだが、雜誌編輯者にとつて最も必要なものは熱である。聰明も見識も必要には必要だが、熱の前には殆ど無力である。その熱を、瀧田さんは生れながらにして十二分に有つてゐた。僕は三年間瀧田さんの下に働いてゐたが、今から思ふと瀧田さんには[illegible]かつたことと思ふ。僕など、時々瀧田さんの熱を借りて元氣を附けて原稿催促にも出掛けたものだが、根が附燒刄だけに駄目だつた。子供が病氣にならうが何だらうが、その當時の瀧田さんにとつては、そんな事は原稿遲延の申譯にならなかつたものだが、僕にはさうは行かなかつた。これは、當面の責任者とさうでないのとでも別れることで、自分が瀧田さんの立場に立つて見て初めて解つたことだが、瀧田さんの熱心と性急とを以てしては、いやもう察せられることばかりである。

――取殘された私の寂しい今の氣持、それは婦人公論の方に少しく書いておいた。誰も知らない樣な話と思つて愚にもつかないことを書いてしまつた。瀧田さんに叱られねばよいが…………。

時論

野古川生

單一無産政黨の前途

單一無産政黨成立の事情　新聞の報ずる所に依れば、多少の曲折のあつた準備行動も首尾よく終り、全國的單一無産政黨は近く結黨式の擧行を見るべしとのことである。然るにこの目出度かるべき報道と前後して、日本勞働總同盟は會長鈴木文治君の名を以て「政治行動に關して一般組合員に告ぐ」なる聲明書を發表し、中に『第一回綱領規約整理委員會に於て衝突したる根本的に相容れざる二個の政治的意見が、第二回の委員會に於て一方の讓歩によつて兎も角表面上は一致したと云へども、評議會側の眞意に對する我等の疑心と警戒とは容易に取り去ることは出來ない、……蓋し危機は根本的に除かれたるにあらずして一時彌縫的に蔽はれたるに過ぎないのである』と云つて居る。結婚はせにやなるまいが相手の眞意は依然として疑はしいといつたやうな態度である。斯くして出來た世帯の前途は果して吾人の祝福に値するだらうか。

鈴木會長の聲明書にもある通り、來るべき無産政黨の構成分子たる諸勞働團體の間には、『根本的に相容れざる二個の政治的意見』がある。もつと突き詰めて云へば「根本的に相容れざる二個の人生觀」があると云つた方が適當かも知れない。この相違なり對立なりは思想の上にも現はるれば行動の上にも現はれ果ては感情の阻隔にもなつて來る。其の代表的なものは總同盟側と評議會側との反目暗鬪であるが、直接勞働運動に關與して居ない人々の間にも、各その牽引する所に從つて自ら二分派をなして居ることは疑のない事實だ。而して無産政黨もいよ〳〵出來るといふ今日の間際に斯かる反目暗鬪の露骨になるのは階級運動の前途に取つて由々しき大事なりとして、非常に心配する人もあつたのだが、さりとて今更之をどうすることも出來ない。もと〳〵人生其ものに對する態度が根本的に違ふのだから、何かにつけて二つの意見二つの感情が截然と對立するのは到底之を避け難いのである。それも無産階級の自覺のまだ幼稚な時代、金權官權に對する反抗に熱して居る丈の時代なら兎も

角、今や進んで社會改造の積極的活働にも目醒めて來た時代となつては、各自その理想に反省し深く根を人生觀におろさうとするのは當然だ。從て無產階級が斯く根本的に相容れざる二派の對立に惱むのは、階級運動の熱情を冷却せるの證左ではなくて、實は寧ろその進步の當然の階段に向上したものと謂ふことも出來るのである。

何れにしても二派の對立は今や事實として之を避け難い。之を如何に切り拔けて全國的單一無產政黨の成立を實現すべきやは、昨今大小策士の頻りに煩悶する所の問題のやうである。如上の形勢に鑑み更に政黨創立の政略論や政治的民衆教育の根本義やから考へて、單一無產政黨案に對して吾人が可なり强い反對の意見を抱持せることは、また從來の所論に依て讀者の既に承知せらるゝ所であらう。併し吾人の議論は顧みられなかつた。當事者は一所懸命單一政黨の實現に努力して居る。斯くていよ／＼近く結黨式を見得るまでに漕ぎ付けたといふが、ひそかに其裏面をうかゞふに、其のこゝに到るまでには實に幾多苦肉の計策も行はれたと云ふ。果して然らば其前途に就て吾人は安心して十分の樂觀を寄せ難くも思はるゝ。

評議會側の狡智と總同盟側の低柔。　相容れざる二派をこれこれは評議會派と總同盟派とに代表させておく。或は共產派と組合派、或は極左派と右傾派など、も云へぬことはあるまいが、若干語弊ある樣にも思ふから、表題の通りにしておく。さて單一政黨準備運動に於て、評議會派のやり方は頗る巧妙であつた。之に較べると總同盟側の態度は如何にも意氣地が無さ過ぎるやうに見へる。單なる小手先の爭としてあれではてんで相撲にならない。但しこの爭に十全の勝利を得たからとて直に大局の死命を制し得ないことは言ふまでもない。

評議會側は普選の實施を利用して無產階級者の宜しく全國的單一政黨を作るべきの輿論を作興するに成功した。無產政黨は全國に唯一つあるべく、而して之を防げ少くとも其分立を許するが如きは正に之を階級運動の裏切者と目すべしとさへ信ぜしむるに成功した。斯く大衆の輿論を指導しつゝ、此一派は巧に既成諸團體の幹部の地位を占領した。其の爲に如何なる手段を取つたかは今詮索するの限りでない。若し彼等の計劃が思ふ儘に十二分の成功を見たなら、各團體を糾合してやがて單一無產政黨の成立を見るは寔まことに容易であつたらう。が、世事固より意の如くならず、既成團體の中には漸く彼等の幹部乘取り策に反感を催すものを生じ、之に警戒する者に至ては昨今頗る多きを加ふる樣になつた。是れ前述の如く第一回の準備會に於て所謂根本的に相容れざる二派の正面衝突を見た所以である。

斯くして無產政黨構成分子間に於ける二派對立の形勢は、此時に於て既に明白なる事實となつたのである。そこで評議會側は考へた。第一此際二派の對立を見るは不得策だ（大衆の大部分は或は反對派の方に附いて行くかも知れぬからである）。第二にどうせ一緒になれぬものなら決裂の責任を反對派に負はさうと。於是彼等は第二回の準備會に於て意外の大讓步を示し、反對派をして分袂獨立するに口實なからしめた。それでも一所にやられぬとなれば、その責任は一に總同盟側にある。此策戰は見事に圖星にあたり、相手方を大に困らした。鈴木會長の前述の聲明の如きも、實はこの窮境に押し詰められての一悲鳴に外ならぬものである。

總同盟側に評議會派と一緒にやる氣のないことは知れ切つて居る。またその方が賢明でもある。そんなら何故飽くまで堂々と獨立を宣明しないのか。識者を納得せしめ大衆を滿足せしめ得る理由は幾らもあらうのに、計こゝに出でず、斷然嫌と言ひ切れずして不平を云ひつゝ引き摺られて行くその優柔さ加減は、寧ろ醜陋の譏に値しないだらうか。尤も此派も曾ては單一政黨主義を力說したことはある。其手前俄に旗幟の塗替を難んずるといふ事情もあらう。併し決裂の責任を反對派に嫁して巧に獨立の功を完うしやうといふ小策の上の爭なら、評議會派の方が遙に上は手のやうだ。小手先の爭に躍起することを私は總同盟側の爲に取らぬ。彼等の爲に此際一番いゝ方法は、事情を正視し、理義に徹底し、對策の出直しを斷行して改めて勇敢に正々堂々の陣を張ることである。

單一無產政黨の前途　無產階級の爲の政治運動は二つも三つもに分れべきものでないといふ思想は、一寸考へると尤もに聞へる。之は國家の爲めなら擧國一致すべきだとする專制政治家に有り勝の共通謬想と同じく、頗るおめでたい說として昔から嘲笑の種となつて居るものである。日本の政治家は、憲法を布いた當初から、此の意義に於て、政府に反抗する政黨の存在を罪惡視した。その熱心な信奉者に山縣公あつたことは人の知る所、寺內伯などは在世當時頻りに此說の宣傳につとめたが、近くは山本伯の如く各政黨の首領を普ねく集めて所謂擧國一致內閣の可能なるべきを夢想した人もある。英國あたりの政治史を讀むと、國家の爲なら各派異色の人を同じ政府に集め得ないこともあるまいといふ考の馬鹿〳〵しい妄想なることは、一六九九年以來明白になつたと書いて居る。蓋し人生に對する態度の根本的相違は、どうしても實際政策上の對立を來さずんばやまず、又斯く對立牽制することに相當の倫理的基礎もあるのである。無產階級の政治運動だつて此道理にかはりはない。根

的人生觀の異同に依て分派の起るのは當然である。之を强て一緒にするのが寧ろ不自然なのだ。無産階級の解放運動だから單一政黨でなくてはならぬといふのは、山縣寺内邊の妄想程度のもので、我々政治史家から觀れば二百餘年前から分り切つた笑ふべき謬想の蒸し返しに外ならぬものである。

尤も目前卑近の便宜から云ふと、呉越同舟、出來るだけ多くの有象無象をかり集めた方が都合はいゝ。その爲めか彼等の中の誰れ彼れは、從來何かの機會をねらつては多數糾合を目論で居た。目的をかくしては人を集める。やがて覆面をかなぐりすてるに遇うて驚いて逃げ歸つたといふ人の話も一度ならず聞いた。逃げるのも臆病な話だが、いゝ加減な餌で人を釣るのも罪な話だ。が、之れ程までに苦心する所を以て見ても、一部の人が、その動機の如何は姑く別として、多年同志の糾合結束並に其外形的膨脹にいかに苦心したかを想像することは出來る。即ち觀る、單一結集の希望は彼等に於て決して一朝一夕の思ひ付ではないことを。故に無産政黨問題に於て彼等が單一主義の信條を今また强く振り廻すのを獨り特に怪む理由はないのである。

併しこの單一結集は彼等多年の宿望であつたに拘らず、實際の形勢は常に彼等の豫期に反したことも亦歷史の明示する所である。明治三十年代の末季安部磯雄氏は何故に社會主義團體を脱したか。四十年代の初期木下尚江氏等は何故に幸徳堺等の諸氏と分れたか。表面の口實は何であれ、之等の事實の眞相は皆根本的人生觀を異にするもの丶到底永く積極的事業を與にし得ないことを語るものと私は信ずる。歐洲大戰後社會思潮の沸騰を極め、所謂同志の士の非常に多くなつたに拘らず、此派の人人の間に兎角歩調の揃はぬ所あるのも、皆一つにならぬものを强て一つにしやうと無駄骨を折るからではないか。斯う考へて來ると、之等の運動は少くとも二つにわかれるのが當然の道筋で、所謂單一無産政黨なるものは、よし一時出來ても、それは明治三十年當時の大同團結程度のものに過ぎまいかと思ふのである。

之も新聞の報道に依ると、來るべき單一無産政黨は安部磯雄氏を頭首に戴かうとして居るといふ。各派異色の人々も安部氏の傘下には喜んで集るだらう。安部氏を頭首に戴くことは、今のところ、本來不自然なる單一無産政黨の生命を少しでも永からしめ得る唯一の條件に相違ない。が、明治三十年代以來苦き經驗を嘗めて居り而も道徳的感情の特別に鋭い安部氏は、果して無條件に其の推戴を受けるだらうか。安部氏は木偶ではない。評議會派の少しでも優勢なところへは斷じて行くまいし、

又安部氏が一諸の下に勇進する時は、必ずや評議會派が無理押に押し出さるゝ時でなければならぬと考へる。孰れにしても近所開かるべき結黨式に於て黨首問題がどう解決さるゝかは、無産政黨の前途を豫測する重要なる一標識になる。但し之が一時圓滿な解決を見たからとて、單一無産政黨がいつまでも分裂せずに行けるものでないことは明白である。

●●●●●●
合理的共同戰線論　以上の如く論ずると、人或は吾人を目して、無産階級の統一的活動を呪ひ陰にブルジョア階級の爲にはかり、其の便とする形勢の實現に骨折る者と爲すかも知れぬ。若しさう考へる人があつたなら、それは飛んでもない誤解だ。成る程無産階級政黨は單一なる可らずと主張するは、即ちその政治的活動力の分裂を説くものだから、外觀上無産階級の勢力集中を妨ぐる主張の樣にも見へやう。若し分れたものが、單に一緒にならないといふだけの理由で、一から十までの敵味方とならねばならぬものとするなら、右の説の結果は洵にブルジョア階級に乘ずべき恰好の間隙を與ふるものに相違ない。併し一緒になれぬ當然の理由ありて堂々と分れたものが、時々の必要に應じて、また堂々と提携協働することが何故出來ぬだらう。私共の考では、所謂共同戰線は、目的の範圍をさへ限定するなら、兩派の協議に基いて立派に且つ有効に張て行けるものと思ふのである。

一體我國の政界は、各派の共同策戰といふ方策には出來極めて拙い。其の方面には丸で訓練が出來て居ないともいへる（尤もかうした訓練のないことにも政黨發達史上相當の理由はあるが）。だから稀に共同の事實があつても永續きがせぬ。のみならず下らぬ理由ですぐ分れてしまう。護憲三派の末路が其の適證を示して居る。之に反し少し立ち入つた提携が出來さうに見へると、合同といふ所まで行かないと承知せぬ。合同まで行かねば本當の一致行動が出來ぬと考へるものらしい。かの政本合同の動機の如きも畢竟はこんな處に在るのではなからうか。各々個性の獨立を維持しつゝ特定の目的の爲に暫く事を共同にするといふことに止まり兼ねる。此等は丁度教育のない男女の交際のやうな有樣で、少し交りが進めば直ぐ醜關係に墮落する。此處まで行かず、各々個性の獨立を傷けずに純潔に交つて行くことが出來ぬのである。斯の如きはもと政界一般の通弊だから、獨り新無産政黨にのみ全きを期待するわけには行かないが、併しどうせ早晩分立は免れぬものとしたら、この部分的協定に共同戰線の活路を見出すことの外に、無産階級の統一的活動を纏めて有力にブルジョア階級に對抗する方法はないではないか。

根本的に相容れないものを無理に一つにしやうとする結果は、永遠の混亂である。無産階級の政治運動を永遠の混亂より救ふ唯一の方法は、實に共同戰線を一つの取引と觀るに安ずることである。社會改造の建設的方面に在ては、相容れざる意見の對立は免れない。そは人生に關する根本的態度の異る結果として已むを得ない。けれどもブルジョア的壓迫に對抗して自家階級の解放を主張するといふ段になると、彼等は等しく同一の利害關係を持つ。此の限られたる目的の爲に共同することは一向差支はない。但しこの共同の必要は如何に緊急であつても、本來の積極的理想に對する責任をまで無視せしむる權利はない。が又他の一面に於ては、此點に讓るを得ずとしても、限られたる目的の範圍内に於ける必要なる共同策戰を拒避するのは餘りに偏狹である。斯くして彼等は各々その獨立の個性を維持しつゝ、一種の取引に依て鞏固なる共同戰線を張り得る筈なのである。此點に十分の成績を舉げ得るか否かゞ、實は無産階級の統一的活動の前途に一番重大の關係を持つのである。單一無産政黨論の空想的謬妄を說いたからとて直ぐ之を、統一的活動の妨害者だと思ふのは、飛んでもない見當違である。

獨逸あたりでは、社會黨は強右の保守黨とさへ一種の取引關係に入ることがある。殊に選擧の場合に甚しい。例へば甲區に於て中間黨の候補者を排し社會黨候補者の選出を助くるの報償として、乙區に於て保守黨は社會黨の支持を受くるといふが如き是である。表面上不倶戴天の敵ともいふべき之等兩黨の間柄にてさへ、限られたる目的の範圍内に於ける取引は盛んに行はるゝ。凡そ完全なる無條件の共同は根本理想を同うする者の間に於てのみ存し得べく、然らざる者の間に於ける協同は必ず目的を限定するものでなければならぬ。而して根本に於て相容れざる者が、其の當然の結果として大局に於て爭ひつゝ、而も特定の事項に就き緊密に協同するのは、實は特殊のすぐれたる訓練を必要とする。反對派をば徹頭徹尾仇敵視し、其の說を聽かずして先づ相手方に惡罵を放つといふ樣な軍國主義的訓練のみに依て養はれた我國の政界に於ては、此事特に困難であらう。それ丈けまた此點に成功するならそれこそ無産階級の大なる誇りにもなる。要するに無産政黨の單一主義に反對するのは必しも其の政治的活動の統一を呪ふことにはならない。統一的活動の效果を本當に舉げる方法は寧ろ外にある。而して無産政黨の多元主義と共同戰線の取引觀とは、實に眞に無産階級の政治的活動を統一あらしむる所以であり、又同時に我國一般政界の通弊を救ふ所以でもある。

諺に　鹿を追ふ者は山を見ず、[illegible]

の言說に盲目なるは當然だ。己れの外に眞理は無い天下の人は悉く己れに同意すべきだといふのは、外から觀て頑迷だが、其人としては熱情のほとばしる所寧ろさうなくてはならぬ筋合だ。併し傍觀者に取ては、如何に其人が熱心でも、自分を枉げてまで彼に就くの必要はない。要は一に其の立つ所に聰明であり忠實であるを緊要とする。

天主教會では、人の罪を救ふ能（ちから）のある本當の教會はおれの教會のみだと主張する。わが教會に從はぬものは神に對する反逆だと罵る。けれども世界には宗教の數一にして足らぬ。而して識者は天主教會のみが神の光りではないと教へる。新教も希臘教も果ては佛教も回教も、各々厚薄の差はあれ、ひとしく皆神の光の顯現であると說く。此の達觀と寬容とが實に近代の世界を平和に連絡する紐帶となつて居るのだが、天主教會のみは傳統的主張にこだわつて兎角この協同に離れ勝である。今や無產政黨結成問題に就ても、天主教的理論が世上に横行し、敢然として其の誤りをたゞす者甚だ少い。誰か起てルーテルの跡をおふものはないか。差し詰め總同盟側などはモ少しはツきりした態度を執て然るべきに、事玆に出でないのは吾人の甚だ怪訝に堪へぬ所である。

終りに一言する。總同盟側とか評議會側とかいふものゝ、之等が勞働組合として其儘政黨組織に加入するの是非は別論として留保しておく。此點は本誌前々號にも說いたから參照を乞ふ。吾人の切なる希望としては、政黨組織はどこまでも之等組合の幹部の人々の問題として貰ひたい。國內無數の無產者を政治運動に興味を有する少數者の踏臺にすることは、吾人の憤慨に堪へぬ所であり、且大衆の本當の政治教育は、彼等を政黨組織外に超然たらしむることに依てのみ可能であると確信する。不幸にして此點未だ無產階級先達の承認を得ないのは、吾人の甚だ遺憾とする所である。

地方長官公選論

公選論主張の理由　最近政界の一角に知事公選論が唱へられて居るといふ。その利害得失は愼重なる攻究に値することゝ勿論だが、當の主張者のあぐる所の理由に至ては甚だ淺薄を極めて居る、曰く民意尊重の今日の時代最も人民に接近せる府縣知事の公選は當然だと。民意の尊重すべき所以には一毫の疑もない。併し之と地方長官の公選とは何の拘はりもない。公選でなくツたツて民意尊重の趣旨は貫き得る。

公選反對論の愚蒙　公選論に對して去る官界大官の反對

なるものも新聞に報道された。公選の主張は官吏任免に關する君主の大權を犯すものだと。例に依て舊式固陋の憲法論である。此說の愚昧は今更之を評說するまでもあるまい。只こゝには選擧に依て任命せらるゝ官吏の現に外にもあることを一言して置くにとゞめる。

公選是非の判斷の標準

元來公選論の是非は**全然實際の結果に依て判斷せらるべきものである。實際の結果如何に拘らず初めより公選を可とす**といふ樣な理窟は絕對にない。此點に關しては世上に相當誤解が多いやうだ。一言之を辯明するも無駄ではあるまい。

誤解の根本は民衆自ら直接政治に與るのが民主々義の本領だと考ふる點にある。民衆自ら政治に與るべきだから**現實の執行者を仲間中から公選する、即ち府縣知事の如き**最も公選たらざる可らずといふのだ。併し之は十八世紀から十九世紀にかけての民主々義に外ならぬ。當時は前代の貴族主義に抗し一切の權力を自家の掌裡に收めんとに急ぎ、一應萬事は自分で出來ると考へた。けれども實際の經驗を積むに從て、善良なる政治は矢張り特別の專門家に託するに依てのみ可能だといふことが明になつた。更に之を進めて彼等は遂に斯う云ふ結論にまで到達した。政治に特別の專門家を要するのは今も昔も變りはない。昔は一部特權階級と專門家と結託して作れる組織のうちより善良なる政治は行はれ得ると考へたが、今は民衆と專門家との協同に成る組織より最良の政治の行はれることを知るに至つた。何れにしても民衆の要求や利害を離れて善良なる政治は絕對にあり得ない。が、**また民衆自身は如何にしてその要求その利害を善良なる政治に具現すべきやを知らない。そこで政治は何**處までも特別の專門家に托するを要するのだ。たゞその專門家は全然民衆を離れてしまつてはいけない。彼は常に民衆的組織の中に生育するのでなければならぬ。何となれば彼は斯くして民衆の要求利害をよく善良なる政治に具現する**ことが出來るから。斯う云ふ組織がうまく行はれるのを我々は民主々義の政治**といふのである。即ち民衆自ら政治に與るのではない、民衆の要求利害が十分に政治に現はれるといふのが眼目なのだ。斯く論ずれば、府縣會なども設けられある今日、知事の公選まで行かなければ民主々義が通らぬとする理窟のないことは明であらう。

斯くいへばとて公選はわるいときまつた訣ではない。公選であらうが公選でなからうが、そは要するに民意尊重の近代的大勢には毫も關係にないのである。然らば公選の是非得失は如上の根本論から判斷せらるべきものではなくして、全然實際的見

地より解決せらるべき問題であるといふことになる。

公選の實際の結果　然らば公選にしたら實際の結果はどうだらう。此點になると私は一言以て直截なる答辯を與ふるに苦まない。曰く極めてわるいと。其理由は頗る簡單だ。第一は地方行政に就いて民衆は、國政に於けると同じく、施政監督の實を握て居ぬ。彼等は依然府縣會議員等の操縦に甘んじて居る。故に所謂府縣知事の公選は、民意を重からしむる結果とはならずして其實縣會議員の專恣横暴を甚しからしむるに止まるだらう。第二に今日でも府縣知事は議員の我儘に苦しめられて居る。從つて府縣知事としての仕事の大部分は今や民衆の福利の増進よりも議員との空疎煩瑣な折衝の方に費されて居る。若し公選となつたら此弊更に一層甚しくなるだらう。斯くて今日の狀況を基礎として論ずるに、公選論は百害ありて一利なしと私は信ずるものである。

公選論に伴ふ地方行政組織の改正　前述の如く私は知事公選論には反對だ。併し假りに若し强て公選を實行するとなら、地方行政組織の上に次の様な改正を加へて貰ひたいと思ふ。此希望は現に公選長官を戴くの組織になつて居る市町制に對する吾人の改革意見とも觀られ得る。地方制度攷究に志ある諸君の特別なる考量を煩したい。

第一は地方行政機關をして國家の委任事務より大に解放せしむることである。公選任官の方法は特殊の才能の要求せらるゝ場所には不適當だ。府縣廳は地方自治機關たると共に又中央政府の出張所見たやうなものであるから、それ丈け其長官の公選を不適當とする理由に富むが、町村役場の如き基礎的自治機關に向て今日の制度は餘りに中央よりの委任事務が多過ぎる。だから役場は村の寄合相談所ではなくなつて、矢張り嚴めしい公けの役所といつた様なものになつてしまつた。是れ自治制の根本をみだるのみならず、首長を公選に採る制度とは絶對に兩立せぬものである。

第二に人を公選に採る以上その權限は極度に擴張せらるべきである。官選の長官なら議員をして常時監督せしむるに相當の理由もあるが、公選である以上は、一定の任期が即ち唯一の監督であつて、任期中は其の施設に絶對の自由を有せしむること亞米利加の如くすべきである。亞米利加は民衆的監督と專門智識とを最も巧に調和せる組織に富む國であるが、最近は市政を擧げて一定の期間之を一人の Manager に托した處さへあると聞く。こゝまで行かなくとも、責任ある首長に相當自由手腕を振ふ餘地を與へなくては業蹟の擧るものではない。公選論の實行に依て議員の專恣横行の甚しかるべきを憂ふる我國に於て此

點最も參考として聽くの必要はあらう。

所謂地方分權論に就て

地方尊重論の抬頭　地方長官公選論の如き、一制度論としては固より愚劣取るに足らぬが、地租委讓論その他と共に、最近勃興せる地方尊重論の一面の代表と觀るとき、其處に我々は大なる意義を認めることは出來る。今日の日本の制度文物は何も彼も東京中心だ。中心ばかり太つて地方の肢體は疲弊し切て居る。日本將來の健全なる發達の爲にはこの傾向に一大斧鉞を加ふるの必要があるとて、最近廣く地方にも文化の恩澤をわかつべしとの議論が起つて居る。之等を汎稱して操觚界は地方分權論と云つて居るが正確な用語でないことは申すまでもない。が、其の指示する標目は決して之を察知するに難くない。

中央集權の由來　日本は昔から所謂中央集權制であつたのではない。德川時代に於ても江戸は日本の中心として第一の繁昌を示しては居つたが、文化の中心は併し乍ら各藩の城下に散在して居つたのだ。所が今日では富も人才も目ぼしいものは悉く東京に集り、何事も東京へ出なくては仕事が出來ぬといふ樣になつた。最近交通機關の發達に伴て都市が異常の發達を示して居るが、之を外にして何一つ東京以外で用の辨ずることはあるか。而して是れ實は維新以來の新しい現象なのである。且つ斯くなるには當時の政治家を非常に苦心せしめたといふ歷史もあることなのである。

維新の當時明治新政府の基礎は甚だ鞏固でなかつた。中央統一の力至て微弱で謂はゞ尾大振はずの概があつた。加ふるに諸大名は幕末江戸在住を免ぜられてより各々其郷國に蟠居し、德川幕府倒れても封建割據の形勢は依然として存續して居つた。是れ新政府當路者の非常に危惧せし所。此儘に放任しては統一國家の實を遂にあがる可らずとして、彼等は一方に廢藩置縣を斷行し、他面に嚴命を發して諸大名に東京在住を迫つたのである。當時諸大名は人質にでもなるやうの心持で嫌々ながら東京に移住したのであつたが、斯くして兎も角も當時に於ける最大の富と最高の才能とはみな東京に集ることになつたのである。此外にも細かい理由は澤山あらうが、之がまづ一番重要な原因を爲すものと謂つてよい。

斯く考へれば、今日の中央集權の勢はつまり維新當時の要路者の政策の成功に外ならない。由て來る所一朝一夕に非ることが〔判る〕に、今其弊を認めて、俄かに形勢の轉回を期するも亦なか〳〵に困難なわけだ。それだけ吾人に[illegible]

刻なる研究の今後大に進められんことを希望してやまない。

大名の郷國歸住の提唱　右の如き重大なる問題が僅に地方長官公選論や地租委讓論などの皮想論に依て代表されて居るのを私は甚だ心細く思ふ。此事に就てはもつと色々の施設があつて然るべきものと思ふ。既に實行せられて居るものゝ中に就きては、僅に高等教育設備の各地方に立てられつゝあるを喜ぶべき現象と數ふることが出來る。其外に於て差當り最も卑近にして且最も實際的效果の多きものとして私は舊大名の郷國歸住を提唱したい。今日もはや彼等の地方蟠居を憂ふる理由なきは言ふまでもなく、東京に居つては畢竟彼等は無用の長物である。彼等の爲にはかつても未だ全く消滅に歸せざる舊領地に對する威望を利用し、歸つて其地の文化の開導につくす外、社會に奉仕する使命として今日彼等に殘されたるものは無いやうである。强て東京に居ればこそ無用の金も使へば餘計な政治道樂などにも手を出す。斯くして彼等が昨今漸く心ある一部民衆の怨府となつて居ることにも多少は氣付いて居らう。彼等をして身を全うせしむる爲にも又彼等を社會の有用に奉仕せしむる爲にも、其の郷國歸住は必要である。地方の疲弊を憂ふる者に取り此事一實際策として强ち空想視すべきではあるまい。

議會於ける三黨の懸引

現内閣の立場としてどうすればいゝか　單純な政治理論よりすれば、現内閣は議會開會の劈頭施行方針の大綱を掲げて議會の信任を問ふべきだ。陛下の御信任を辱うして居る以上いつまでも其職に留るは形式上差支ないやうなものゝ、議會に過半數を制せずしては少くとも合せて半數を超過する丈の他の一黨の友誼的後援を得るの見込なしに、大政料理の任に當るは僭越である。況んや憲政會單獨内閣となりてよりの最初の議會なるに於てをや。

信任投票に於て勝利を占むればよし、然らざる場合に於ては直に總辭職を決行すべきは論を待たぬ。後繼内閣の詮議に就ては、憲政會内閣を倒した議會内諸勢力の結束に密固なものあれば大命は其の連合に降るであらう。然らざる場合は辭表を却下して依然其職に留るべきの恩命降下を見るかも知れぬ。其場合には内閣は直に議會に解散を命じて信を國民に求むるの策に出でねばならぬ。

併し之は單純なる理論の要求に過ぎぬ。我國の如き變態政界の下に於ては、純理を貫くこと必しも得策に非ず。實際に於て

政府の斯かる措置に出でざるべきも亦明である。今までのところ、政府は巧に貴族院を操り政友本黨と連絡して以て其地歩をかためんとして居るやうだ。政友本黨は今更政府の與黨と名乘り得ざる事情にあるも、さりとて政府と正面衝突するは何としても避けんと希望して居る所らしい。蓋し陽に反對黨たるを標榜して陰に政府を助けんとする者ではあるまいか。從て政府としては政友本黨の斯く曖昧なる態度を執るを妨げざるの必要がある。此點から云へば、信任投票などいふ馬鹿正直な案を出して不本意ながら政友本黨をして反對黨の旗幟を鮮明ならしめる樣な愚策は、斷じて現政府の取る所ではあるまい。

反對黨の難境　本當の意味に於ける反對黨は今のところ政友會のみである。政友會としては開會の劈頭不信任案を出すこと亦一策たるを失はない。吾人は昔の政友會全盛時代憲政會が每會不信任案を出した樣に、之が反對黨としての當然の一義務なるかに考ふるを謬とし、殊に其爲に無用の討議に時間を空費することに大なる反感をさへ有つて居る。併し現時の場合は之とは違ふ。即ち三派鼎立して何れも議會に多數を制して居ないから、少くとも他の一黨の支持を受くる黨派でなければ政府に立てず、而して何れの黨派が他の一黨の支持をうくるやは諾に一定して居ないからである。故に政友會が不信任案を出すといふのは理に於て當然のことゝ思ふが、現在の政情の下に於て事果實して此措置に出づるや否やは疑しい。

政友會の立場からいふと、此際不信任案を出すを可とするや否やは一に繫りて本黨の態度如何にある。本黨内には政友會合同して憲政會の地位を粉粹すべしとの論と、合同を思ひ切り政府に秋波を寄せて他日の地歩に備ふべしとの論とあるは人の知る所である。故にいま不信任案を提出せん乎、爲に本黨の分裂瓦解を見ば格別、然らざる以上、或は全部を其の贊成に餘儀なくさせて漸次合同提携に進むの機運を促すを僥倖し得るかも知れないが、まかり間違ふと全部を反對の態度に出でしめて無理に政府と野合せしむるの結果とならぬとも限らない。若し夫れ本黨にして分裂を見ん乎、野黨たる政友會に多數の入來を期待し得るや甚だ心元ない。して見れば政友會の戰略としても、不信任案を提出することは決して安全の道ではない。

今後の政局　さうすれば、今後の政局は依然現内閣の支配の下に陰氣な少康を保ち續けて行くのであらう。政友會などに取て代らるゝと孰れか得策なりやは議論の餘地あるが、併し現内閣存續の基礎が、一つには貴族院の鼻息を伺ひ一つには政友本黨の保守主義に秋波を送るに存するを思ふとき、時代に適應する凱切な施設の之に期待し難きは論をまたぬ。是に於てどうしても局面打開の必要があるのだが、たゞ之は反對黨たる政友會が優勢になつたからとて期待し得ることでも勿論ない。して見ると、結局はやはり普選の實施と共に起らんとする所の新興勢力の生長に待つの外はない。此點に於て昨今民間における[illegible]の興起は少からず吾人の關心をそゝるものである。

今度創刊された理想的幼年雜誌!!



幼年倶樂部

定價金五拾錢（送料三錢）

發行所 東京本郷駒込坂下町 大日本雄辯會（振替東京三九三〇）

◇體裁と内容

◇◇菊判型 色刷口繪、寫眞二十頁、讀物本文はほとんど各頁繪入で何れも面白く教育的な内容であります。特に最上等の洋紙を用ゐ印刷の鮮麗無比なのは本誌の利益を度外視した奉仕的精神に依るものであります。

父兄諸君にお願ひ!

都會の子供と田舍の子供を較べて見ますと、同じ年輩の子供でも、その學力にその常識に大變な隔りがございます。其原因は他にもありませうが都會の子供達が課外に子供雜誌を讀むことが最大原因と認められます。此の幼年倶樂部は都會と田舍たるを問はず如何なる幼年にも理想的な雜誌であります。何卒安心して愛する坊ちやん孃さん方の爲めにお求め下さるやうお願ひ致します。

百餘名の名士教育家贊助! 莫大の損失を覺悟で數ケ年の研究を積んで生れた理想の幼年雜誌!

附錄 **英雄双六**



◇表紙 武田比佐畫伯筆

新年創刊號は…十二月六日全國書店にて一齊に發賣

▲今から非常な評判ですから前以て御近所の書店にお申込置き下さるのが御便宜と存じます。



トロジャリヤ
照明器具
新時代の新品
乳白色の美しき硝子洗練せ
られたるその形マツダ瓦斯
入電球を點けた珠玉の如き
その光は新時代の照明器具
として誠に申分ないもので
御座います。
マツダランプ製造元
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市



ドウナツ

室生犀星

秋本は永い間肌ぬぎにさせられてゐたので、玄關へ出ると霙まじりの冷たい雨風に二つ三つ咳をした。入れかはりに人力車が着いて中から病人らしい中年の女が下りた。頬の上に結核性の斑點が薄赤く浮き出、曇つた色の藥瓶を提げてゐた。秋本は自分もあゝいふ病院通ひをするのかと心脅えながら、霙まじりの冷たい空氣を空恐ろしげに呼吸した。

翌朝秋本は何氣なく枕元の卷煙草入の箱を見ると、煙草の紙の色が痰筒のやうな氣がして、指にはさむのも躊躇ふたくらゐだつた。秋本はすつかり肺病と決めてしまひ、醫者がともかく一週間の檢温表をつくることなど言つたので、單に左の肺尖が不良いことを簡單に考へられなかつた。不攝生な酒色に身を委かした放浪暮らしの秋本の過去が、忌々しくかれのからだを蟲食ひにしたのだと思つた。秋本は病院へその日出掛けることを止めた。肺の惡い奴が藥服なぞしても効果がないからだ。かれはこの病氣の發熱のある午后三時ころに檢温したが六度五分しかなかつた。

「おれは二階でねるよ。」

秋本は晩は二階で寢ることにし、娘の小枝にはなるべく机だのその他自身の觸れるものには手を觸らせなかつた。心づらい神經をつかひながら客さへあれば何となく自分の病氣を感づかれない前に、それとなく言ひ出しやすいやうになつた。自分の食器も別に洗はせ、できるだけの營養分を攝つた。氣のせいか妻も何となく自分を遠退いてゐるやうで、二階で日南へ脊中をあたためながら、自分だけ世間から隔れてゐるやうな氣がしてならなかつた。何も手頼りになるものがなくなり、じりじりと自分のからだの模樣を監視するやうな氣もちの疲れが、毎日つゞいて物憂く不愉快だつた。

「國ちやん最つと靜かにしてくれんか。」

秋本は遊びに來てゐる國太に難かしい顏をして見せた。悧巧な國太はすぐ秋本の顏色を讀んで、妻や小枝とさわぐことを止めた。國太はせんに亡くした子供とよく肖てゐるので、秋本の家では自分だちの子供のやうに可愛がり、國太自身でもその事情を呑み込んで秋本夫妻を慕つてゐたが、小枝が生れて大きくなると、秋本は何となく國太にいままでのやうな可愛がり方をしないで、氣のない風で日夜あそびにくるこの國太を眺めてゐた。

國太は秋本が故里にゐたときにも呼んで一緒に暮した。秋本は國太にも自分の病氣がうつつてゐなかつたらうかと、氣もちの疲れが煩はしく古いことをさらけ出して、なほ頭腦をつからせた。國太ばかりではない、國太の家族とも親類同樣になり、國太の姉のお信乃も秋本の家へよく來た。じみ粧りのなりの高い美しい娘だつた。

「おちさんが家の前をよくお通りになつたことを覺えてゐますの。」

「ずつと前のことですね。」

「わたくしまだこんな小さいころなんですもの。」

信乃の家の前は垣根つゞきだつたが、まだ下宿にゐたころの秋本はさういへば信乃のはつきりした輪廓を覺えてゐるやうな氣がして、道路の立木や垣根のそばに小さな女の子を思ひ描いて見た。

「何か覺えがあるやうな氣がしますね。」

と、秋本は國太一家とのつながりをふしぎに思ひ出した。信乃のお父さんは畫家であつたが何處か狷介な、つむじ曲りの氣難しやであつた。畫かきにありがちの團體のちからで押進むことを嫌つて、いつも不利な一本立ちの中につッ立つてゐる人だつた。國太の氣質は父親の血を繼いで氣短かいところなど能く肖てゐた。

「父がこのごろになつてよくおぢさんにお湯やで會つたことがあると言つてゐました。おあひになつたことがおありになりまして。」

「ええ、何か一寸くらゐ話したことがありますよ。」

秋本はよく覺えてゐなかつたが、四五年前に湯やで話したことがあつた。それよりも秋本に取つて印象の鮮やかなのは、信乃さんを連れて時折ガードの土手の上の草を踏んで歩いてゐる國臣さんの姿であつた。殆、娘とすれすれに肩を並べた父親らしい姿と、信じ切つてゐるやうな信乃とが、薄ら日のさす木立の下を散歩してゐる背後姿を見て、秋本は何とも言へぬ快よい溫かさを人間の中に搔き當てたやうな氣がして、あんな風になつたら人生は樂しからうと思つたものであつた。どうにもならないで不圖思ひついた散歩のやうな氣もして、卿々として迫る秋夜のごときものを感じたのであつた。

「このごろはまゐりませんがあの頃はよく教會へ行つたものでございますから、きつとそんなときにお目にかかつたのでございませう。」

「僕は非常にいい氣もちで見てゐたものですよ。なるほど日曜らしい日が多かつたやうですね。」

「ええ。」

信乃は何のために秋本があんな散歩をほめてゐるのか、不明らないやうな顔貌をしてゐた。さう言へば今では聞えないが二三年前には國太の家で、よく夜の集りなどもあつたらしく、オルガンの音や歌ごゑがきこえたものであつた。

國太は一度言はれて靜かにしたがまた何か騷ぎ出して、二階にゐる秋本をいらいらさせた。男の子供といふものはその聲音が生木を短かくぽきぽき折るやうに、強くひびいてくる、……それもこれまではそんなに思はなかつたが、このごろになつて急に煩さく感じ出したのは、ただ聲音ばかりではなく、何か愛情の失はれてゐるものに秋本には感じられた。小枝が大きくなつた。そして自然に國太は秋本にとつてよその子だつた。秋本はそこを考へると妙な居苦しさを感じた。亡くなつた子供に似てゐるゆえに愛してゐたが、次ぎの子供が大きくなり國太への愛がさめかけて了つた。これは自然なことだが、しかしまるで秋本は何も知らない子供をまんまと欺したやうなものだと思つた。

「おちさんはこのごろおつかないよ、怒つてばかりゐる。」

國太は明らさまに秋本の前でさう言つたが、秋本はなるほど怒つてばかりゐると自分でも思つた。

「以前は怒らなかつたかね。」

「前とはちがつてゐるよ、[illegible]、それは知つてゐる。」

「どんなことで……。」

「知つてゐる、――。」

國太はあとは言はずにおとなしい眼付で秋本を見たが、秋本は烈しく冷笑された以上のものを感じた。それにもかかはらず

國太はにこにこ微笑つてゐた。何ものがこの冷笑を秋本にこたへさせたか？――。秋本はまたこんな根もないことをくよくよ考へなければならぬ苦勞性を厭ふた。

「ちあおばさんの方が好きだね。」

「おちさんはきらひさ。」

遠慮もなく國太は言つた。秋本は心で益々何ものかゞ萎縮することを感じた。これを女と男の關係について考へ見たらどうだらう、それは簡單にはゆかないと思ふと、分別のない無邪氣なものを過つやうな氣がして後悔された。やはり欺したやうなものだとしか思へなかつた。それに國太は遊びに來るごとに顏色を注意して見てゐることに、秋本は氣がついてゐた。これまで散步に行くといふと一緒にゆくと言つた國太は、妻と出掛けることを樂しんだが、もはや秋本のあとを慕ふやうなことがなかつた。日に深くなる愛情の疎遠に氣づくごとに、秋本自身の性質に不愉快な溜息が吐かれた。

も一つ秋本が集會や散步に出掛けると、きつとその留守の間に國太が來てゐるのが、恰度留守を待ちかまへてゐるやうでもあつた。秋本の妻は妻で、

「おちさんが留守になるからその間においで。」

さう言つて呼ぶらしかつた。秋本は煙たがられてゐるなと思ふよりも、國太に嫌はれてゐることが濁つた氣もちにならせた。同時にこの子は以前のやうに自分を慕ふことがなくなつたなと考へると、秋本は自分自身の頑な飽きやすい性質を厭ふやうになつた。以前はあまえてゐたものであつた。現に故里へ一家が引き上げてくらしてゐたときに、冬の、雪の中へ國太を呼んで、わざわざ大學生の菊也の歸省するのに送つて來て貰つたものだ。東京にばかり育つたこの子を

田舍の停車場へ迎えに出たときの秋本は、やはり死んだわが子に肖てゐる顏をみると、譯なく感じることが多くなり烏渡まともに顏を見られぬ傷みやすい氣になつた。からだの大きい菊也は汽車が混んだと言つて、國太を一と晩ぢう膝の上に抱いてゐたと言つてゐた。

「抱いてゐるとどうも此麼子供でも頭が一番重いやうですね。」

菊也は右の手がしびれたとも言つた。

その年の夏も菊也が休暇を利用して、國太を川べりの家へ送りとゞけてくれ、或るときは我が子が生きかへつて來たやうに喜んで暮したものであつた。子供の病氣に過敏な秋本は少しでも顏色が平生と異つてゐると、どこか惡いのではないかと一人で騷いでゐたが、國太はまたおぢさんが始め出したと言つてゐたくらゐであつた。菊也は夏や冬の休暇が終つてしまふと、また國太を東京へ送りとゞける役目をしてくれた。お互ひの家族が菊也を中に置いて季節のおみやげの送り届けや、また國太の父母の言づけなどをするやうになり、菊也は親切にそんな面倒を見て、自分の母親と弟のところへ一年に二度はきつとかへつて來てゐた。默つて托まれたことはきつちりと仕て終ふ菊也であつた。

國太は軍人の多い田舍町ではよく將校が馬に乘つてゆく姿を見て、美しい肩章や帶劍を珍らしがつた。

「みんな乃木大將みたいだなあ。」

國太は間もなく風邪をひいた[illegible]日焼け[illegible]たりして、荒磯のやうな冬の空氣や夏はとりわけ烈しい日光に皮膚をいためたが、すぐ回復してめきめき肥つて、菊也でさへ一週間もすると逆つて來て大きくなつたと言つて驚いてゐた。秋本は菊也が折々國太の父親に招ばれて夕食を一しよにしたりしてゐることを國太から聞いて、惡い氣もしなかつた。品行のよい菊也は夏休みのうちに秋本の書齋から一册づつ持つて歸つては、チツテン・ゲチンテ[illegible]をす

つかり讀んでしまつたりした。

「そんな夕食に姉さんも一しよに食べるのかね。」

秋本は微笑ひながら國太にさうたづねて見た。

「一緒のときもあるし左うでないときもあるよ、しかしあとでみんなでトランプをするときは何時でも一緒です。」

秋本は冬ざれの垣根の奥にある國太一家に、悠然と手持無沙汰に坐つてゐる菊也の姿を思ひ出して、何となくをかしかつた。

「菊也君を君はすきかね。」

「いろ〳〵なところへ連れて行つてくれるからいゝよ。」

國太は思ひ出して、「それから菊也さんはオルガンがうまくなつた、ひとりでひいてあんなに彈けるやうになるもんかなあ。」

「オルガンといふと……」

「姉さんのさ。」

秋本はそばにゐる妻の方を向いて、「こりやことだぜ。」と言つた。けれどいゝぢあゝりませんか、菊也さんのお母さんだつていゝのがあつたらと言つてゐらしつたんだし、どうせあんないゝお母さんだからそんなことに干渉なさりはしないだらうしと言つた。秋本はまだそんな點では經驗のない菊也のことを、今時の青年には珍らしく思ふた。秋本は因緣盡きがたきを熟々おもしろく感じた。

「毎日來るのかい。」

「毎日ぢあないよ、とき〴〵、――それに兄さんが英語をならつてゐるせいもあるんだ。」

「姉さんと話してゐることがあるかね。」

國太は鳥渡考へて見て、

「どうかな、そんなことは！　そんなことはないやうだよ。」

秋本は瞳の大きい、じみ作りではあるが、キリスト教風の憂鬱をもつた美しい信乃を、笑ひながら目にうかべた。そしてこれは天の配劑かなとも思ふた。菊也はむだ言は日はぬ心の固い男だつた。學校へゆくのにも怠けないで行つた。

「ひとつ童貞を驟破か、――」

秋本は戯談にビールを飲んだあとでいふと、菊也は落着拂つて對手次第ですよと言つてをかしさうに笑つてゐた。何か菊也は鐵扇のやうなものを手に握つてゐるやうなところがあつた。

或る粉雪のふる夕方だつた。國太と菊也のお母さんのゐる家の前を通つたことがあつた。お母さんはひるまは學校に勤め、夜は近隣の娘や子どもに寺小屋をひらいて、菊也の學科の代を送つてゐた。その夕方もどこの家の玄關にも雪が白くとつもつてゐたが、菊也の家の玄關には小さい下駄の跡で雪路がついて、白さが汚れて見えた。中から讀本のこゑが靜かに規律正しくきこえ、お母さんが火桶を抱いて机にもたれてゐるのが、秋本には當然に想像された。

「菊也君の家だよ。」

國太は古い梅の木にある粉雪の霏々たるを眺め、漏れる讀本のこゑを聞いてゐた。いつか菊也と話したときに、君の家くらゐ故郷の家らしい感じのする家はないね、いつでも通るときにさう思ふんだと、秋本は菊也の古い家の庭にある梅や櫻の木までをかぞへ立てて言つた。

或る休日に前をあるいてゐると、お母さんが小屋根の裏から旗竿をぬき取らうとしてゐられる……背丈が足りなくて旗竿が抜けられないでゐたところであつた。

「その竿僕が取つてあげますよ。」

秋本は「お早うございます。」といふ朝の挨拶を言ふ暇もあたへないで、其處に積んであつた瓦の山の上へほいと乘つて、がらがらと旗竿を檐から引き出した。お母さんは叮嚀に折目のついた日旭旗を、すぐ竿の先に結びつけた。

「どうもありがたうございます。も、ちよつとでとゞかないものですから。」

「瓦の上へお乘りになればとどきさうぢやないんですか。」

秋本は朝露で濡れた瓦の積んだ四角な山を眺めた。

「この瓦はよその家のでございますから、何ぼ何でも乘れはしません。」

「は、さうですか。」

古風な束髮に結ひ、天長節の綿服の似合うやうな折に老ひたお母さんと別れて、なほ散歩をつづけてゐるうちに秋本はなるほど人の家の瓦には乘らぬ心を仲々ああはならぬものだと思ふた。振りかへると古い門の枯枝に透いて朝日をあびた日の丸の旗が上り、朝のうら町に人氣は途絶えたまま新しい靜かさが澄んでゐた。秋本はこのやうに靜かな景色のなかにゐることを仕合に思ふたくらゐであつた。

菊也のお母さんはたびたび秋本のところへ來たが、おせつかいに信乃のことを話して、なろ話ならして見てもいいといふと、わたくしもあれからさういふ娘さんのあることは聞いてゐるんです。若しうまく二人で話をきめてくれればわたくしなどが何を不服を言ふものですかと言つて、

「菊也は菊也の好きにしてくれれば結構でございます、それにわたくしはあれに手頼らないでも暮してゆけさうですから、こちらのことは氣にかけないでゐてくれと言つてゐるんです。」

お母さんは菊也が學校を卒ても手頼らない氣もちを持つてゐた。秋本は初めからさういふ氣のない菊也の母親になみなみならず敬服してゐた。

「わたくしは働きつづけたからだでございますから、結局働いてゐた方が藥でございます。」

母親は晩に來る二十人に近い娘や男の子の間にまじつて暮してゐた方がよいと言ひ、長い間ひとりで世帶を押し續けた人に見る固い決心を仄めかしてゐた。秋本はれいの霏々たる門前の梅の木を眼にうかべ、これは梅花だなと思ふた。

秋本は有合せの信乃の寫眞を取り出して見せたりしたが、瞳の大きい信乃は中々よく撮れてゐたので、母親の氣にも入りこのひとなら誠に結構だと言つたが、

「菊也はああいふ子ですから、これがものになるまで中々手間が取れさうでございますね。」

寫眞を見て考へ込んだお母さんが心配さうに言つて、もつとはきはきしてゐるといいんですけれどと言つた。

「しかしこんなことといふものは、しんねりむつつりした方がいいかも知れませんよ。」

「さうでせうか、わたくし心配になります。」

こんなきつかけでも取逃したらといふ懸念が露骨に顔のいろに見え、母親らしい心づかひだと思つた。

「あの子はこんなことは下手な方でせうからね。」

「さう少々下手の方でせうね。」

母親はをかしさうに笑つた。が、わたしどもの考へるほどのろのろしたものでなく、もつと進んでゐるかも知れませ

んと秋本は笑ひの中に、この話のきりをつけやうとしたが、話は何時の間にか舞ひもどつたりした。
「このお寫眞はお借りして置いてようございますか知ら。」
母親はちよつと話をしては寫眞を覗き見て手離しかねるやうな風情だつたが、さういふ風情の中に大方の母親らしい空想の溫かさが、やさしく秋本の眼に映じた。きつと半分心で決めてゐるらしいと思つたが、氣のせいか五十を越えたこの老ひた母親の中に、ものに羞かむけはひがありありと窺ひ知ることができた。
「お持ちになつてもいいんですが、何になさるんです。」
「無人な家でございますし、せいぜいものになるやうに飾つておきたいと思ひましてね。」
「ではどうぞ持つてゐらつしやい。」
母親は寫眞を懷中にしまひ込んで、すつかり話が落着いてしまつたやうにいそいそと歸つて行つたが、苫と老梅との家族のひとりとして寫眞の中のひとを、けふから考へるにちがひないと秋本はふしぎな母と子の愛情を手に取り、且つ自ら撫でて眺めるやうな自分を經驗し、秋本自身には曾てそんな境地のなかつたことを思ひ出したりした。

秋本が日南に出ては冬の日にあぶられてゐるうち、性交や過度の仕事や、また決して疲勞するやうな機會をつくらないやうに決めてゐた。病院へ行つてから一週間毎日檢溫して見たが、毎日六度五六分以外にはならなかつた。肺病の徵候であるべきものが見えなくて却つて物足らぬやうな氣がした。菊也は時々來てはレントゲンにかけて見たらすぐ分ると言つた。

「レントゲンはいやだな。」

何日か結核病展覽會に行つたとき、レントゲンで撮つた肺結核の寫眞を見たが、肺の一端に曜變天目のやうな斑りがあらはれて、何だか一天擾きくもつたやうな景色で物恐ろしかつた。肺ならば肺でもかまはないが、あんな寫眞にまで撮つて氣もちを暗鬱にする必要がないやうに思はれた。どちらにしてもレントゲンは恐ろしかつた。

「ちよつと氣の利いた醫者は一打診で指の腹の感覺でわかるさうだ、しかしあなたが肺病なら大がいの人は同程度のものを持ち合してゐるにちがひない。」

菊也のその言葉も慰さめのやうに聞かれて仕方がなかつた。病院へはあれきり行く氣がしなかつた。

「とにかく肺病患者の注意を惹くやうな新聞廣告を見ると、腹が立つね、弱いものをいぢめてゐる奴を見ると憤然として腹が立つな。」

市中にある賣藥や廣告文の中にわざとらしい病人の弱點をならべ、それによつて藥を賣らうとする商人が憎々しかつた。あゝいふものに操つられる奴も莫迦だと思つた。何も彼も仕方がない、自分で養生をして天命を俟つより外のことは、もう人間にはできぬことに思はれた。さういふ必然の心の縺れ方から不思議に人々の顏色や眼の色、どの程度の疲勞の表はれ方までを細々と動かして、秋本は人の顏を見ることに注意した。かれは蒼白い頬よりも何となく皮膚の張り工合、光澤のあんばい、なんとなく元氣のない顏色に眼を据えて見た。さういふとき秋本は蛇の道はへびといふ言葉を心にうかべた。肺患者が人の飲みものに口を好んでつけることなども、心に思ひ當てた。

「僕はよく客の前で肺が悪いといふと、人はみな厭な顏をするがそれはこちらから言つた方がらくな氣がするからだ。未來永劫にまでも行き届いた氣もちは中々たしかなものだよ。」

「本氣に肺病になつてゐるんですね。」
菊也は薄笑ひを泛べながら戯談のやうに聞いてゐた。
「だから此頃では肺のわるい人だけは區別できるやうになつた。何か此の病氣には氣脈の通じるものがあつて、お互ひに判るんぢやないかね。さういふ人には言葉や態度の中に實に異常な元氣がこもつてゐて、とうてい病人だとおもへない人があるんだ。これはこの種の病氣が持つ天性ともいふべきものかな。」
秋本は精神的といへばこれほど精神的の病氣はなく、絶えず掻き上りたい氣もちをもつてゐるのは、どうしたものであらう。手は冷たい泉にひたされてゐるやうに、常に何ものかに觸れてゐる、――そのくせざらざらしたもの、刻々に宿命を感じさせるもの、秋本は病氣といふものは人間の最上級の良心ではないかとも思つた。
「しかし肺病といふ奴はすくなくとも清淨だね、磁器に水を盛つて奴らは立つてゐるやうなものさ。」
「また一番で不淨なやうな氣もしますね、人にうつるから。」
菊也はすこし言ひ過ぎたやうな顏をしたが、秋本はどこまでも清淨なやうな氣がした。このごろ氣の廻しやうか娘の小枝には一切箸で物をやらぬことにしてゐたが、妻もその氣でゐて、秋本の箸のついた皿のものへ手を出さうとする小枝をささへて、
「それはお父さまのですよ、ババちです。」
と言つて手にふれさせぬやうにした。秋本がそれを命じて置いものの、心ではそのババちが氣に入らなかつた。父親の手にふれたものはペン軸や湯呑や煙草の箱までがやはりババちであつた。秋本は自分の坐つてゐる座ぶとんも机の手にふれるところも同様にババちでなければならなかつた。庭へ出て唾を吐いてゐるのを見てゐた女は、眉をきたなささう

にしがめ

「きたないからおよしなさい。」

と言つた。小便をしてもやはり何といふ人だらうと叱られた。

「おれのすることはみんなババちになつたのかい。」

「あなたからさうお仰つたぢあございませんか、此間パイプを小枝子が持つて遊んでゐたら、あなたは顔色を變えていけないと言つておとんなすつた……」

「顔いろを變えて……」

「わたくし吃驚してしまつたくらゐあなたは慌ててゐらしつた。」

「うつるからだ。」

「あなたは誰も肺病だともいはないのに一人でさわいでゐらつしやるのですもの。」

「それでもおれの手にふれたものをおまへだちは、何でもババちにしてゐるぢやないか、おれの氣のまがるのは當りまへさ。おれは一人でゐると氣はまがらないが、他の人とゐると氣がまがるよ。ことにお前とゐるとよけいに氣がまがるよ。」

「さうですか。」

女は對手になつても仕方がないと思つたのか默つて坐つてゐた。

「おれはいまの内に保險に一つ入つておかうと思ふがどうだ。若し肺病だとすれば入れてくれまいし、さうでなければ入れてくれる……」

秋本はふと云ひ出したことにこれは妙策だと思ひ、運試しのやうな氣もした。なるべく嚴格な會社がよいと思つた。しかし體格檢査をしてハネられたら不愉快だらうと思ふと、この一策の微妙さも立ちどころに消えうせるやうな念ひがした。

「しかしそれは駄目でせう。」

女はぷつつりと答へた。秋本にはそれがまた手强くひゞいてまともに心を脅やかされてしまつた。

「なぜ？」

「これでせう。」

「だから運ためしにやるのさ。こちらに考へがあつてのことだ。」

「あとでいやな思ひをなさいますより止めた方が無事ですわ。」

「まんマと一杯くはしてやりたい氣がするのさ。」

「そんなうまいわけに行くもんですか。」

秋本は此の間勸誘に來たときに肺のわるい人と、血壓の高い人は採らぬといふことを思ひ當てたが、手を代へ品を代えるといふふうに健康診斷をしてもらふやうなものだ、それならばいゝぢやないかといふ氣がして、その手がたい會社に電話をかけて醫者に來てくれるやうに言つて遣つたが、そのあとでつまらないことをしたものだと、心悔みがして不愉快だつた。

保險醫が午后過ぎに尋ねて來たときにも、秋本はああは言つたものの何故お前が止めてくれないのかと、階下に醫者を待たして置いて知らせに來た妻を一應なじつて見たものの、もう逃れることができなかつた。

「どうなさるんです。」

「會はずばなるまい、詰らないことをしたものだ。」

妻は階下へおりて醫者をあんないして來たが、名刺には醫長といふ肩書がついてゐて、體軀偉大な男であつた。すぐ脈をとるために手首を取られたが、この大男につかまつては最早逃げられぬと思つた。

「へいぜいからお惡いやうなところがどこかおありですか。」

「ええ、胃がすこしと若しかすると肺もすこしわるくはないかと思ふんです。」

「風邪をひきますか。」

「いいえ。」

「冬に入つてから何度くらゐおひきになりました。」

醫長は檢溫器をはさませ、血壓を計つた。秋本は對手を欺すやうな氣がして震えるやうな氣もちだつた。

「まだ一度もひいたことがありません。」

醫長は眼と舌とを見て、これに尿をすこしいただきますと玻璃の管を鞄の中から取り出した。秋本はその管を持つて厠へ行つた。出ると女がまだ分りませんかと言つた。これからだよ、秋本はさう言つて二階へ上つた。

「いかがですか。」

「ちよいと肌をおぬぎ下さい、え、それでよござんす。」

醫長は前とうしろとの背の上をしらべ、腹へもさわつた。秋本は一尺抜き出つた胸の上から覗き込んでゐる醫長の顎下に、手足も出せぬやうな嚴格さを感じた。

「いかがですか。」

「どこも異常のあるところはありません。小ぢんまりと手強いからだです。」

「呼吸器は？」

「大丈夫です。」

秋本は呼吸器のことなど殆問題にしてゐないらしい醫長を、このひとは分るのか知らと思つた。それともレントゲンでさへも或ひは分らないことのあるこの病氣が、一度や二度の診察で分るものではないと思ふと、醫長の大丈夫ですといふ言葉をきいたときからの歡びもすぐ消え失せ、あてにならぬ底深い氣味わるさが感じられた。

「呼吸の弱いことは實際ですね、しかしそれくらいなら何でもありはしませんよ、いや大變お邪魔をしました。午后事務員があがります。」

偉大な醫長の體軀は秋本の眼の前から消えた。あなたのやうに突然に會社へ電話をかけてくる方は少いものですから、わたくしが參つたやうな始末ですと、醫長は靴をはきながらいくらか勿體振つた口調で言つた。

秋本は醫長が歸つてから包みきれず嬉しいやうな氣がして、未來永劫にまで浮ばれぬ業病から放たれたやうな思ひがした。しかし永い間かかつて胸を調べてゐた醫長は、できるだけ深く診てゐたやうだつたから秋本も全くほつとしたやうな氣がした。

「呼吸は弱いと言つてゐたことは實際だよ。」

「とにかくよござんした。わたくしもそんなことはないと思つてゐたんです。」

秋本は女のこの言葉には耳を藉さないで、埃は深いが晴れた空の色を熟々眺め込んで、白日の思ひが沁々と身に感じ

られた。垣根のへりをとぼとぼと衰へ切つて歩く自分の姿を毎日描いたかはりに、こんどは力んで歩く元氣な姿を思ひ描いて心樂しかつた。秋本は毒筒のやうな氣のした卷煙草を濃くうまうまとくすべた。自分の子供を抱くのにも呼吸のかからぬやうな心づかひをしてゐた秋本は、この子も血を引いてゆくことを考へると、何のためにあくせくと育ててゆくのかと心苦しかつた。さきに亡くして今やつと娘らしくなつたことを考へると、人に話しても解りかねる厭な氣もちの續きであつた。

菊也が來たのでこの話をすると、少し考へてゐたが眞面目の顔つきになつて、どうだかと言つた。

「保險會社なんてものは的にならないものですよ、いい加減に採つてしまふんだ、職業的に言つても信じられない――。」

「でも血壓も取つた。」

「やはりレントゲンまで行かなければ何と言つても駄目です。保險會社なんてあなたらしくもない話だ。」

「醫長がやつて來たんだよ、かなり叮嚀に診てゐたんだ。」

秋本のその言葉にはもういい加減にしてゐてくれといふ哀訴がこもつてゐたくらゐ、空想とぬか喜びが菊也の前に一蹴にされた。何んでも底からしらべねば氣のすまぬしんねりやさんが、始めから醫長のことなど問題にしなかつた。

「醫長でも唯の醫者でもその場合同じですよ、かれは採りたい氣でゐる、病氣を見るのではなくて捜してゐるのだもの、そんなに幾分やそこらで捜せるものではなからうと思ふんです。」

「君はおれを臆病にする氣か。」

「いや、飛んでもない話さ、あなたがああいふものを信じるからですよ。」

晴天白日の身ももう疑ぎくもつて、先刻の醫長がかへりしなに何氣なく、空想に微笑つた顔付が、わけもなく[illegible]

の頭にひびきを持つて思ひ出され、自分に何か關係のあることのやうで、それも一つ考へて置かねばならぬやうな氣がした。あるひは醫長は何も彼も知つてゐたかも知れないと、賴みにならぬ空恐ろしさを操り返して思ひ出した。櫸の立木の竝んだ大龍寺墓畔の眺めも、先刻とは事變り一段深くごみごみした日ざしの中に、いたずらに冬枯れの侘しさを思はせるばかりであつた。

「近ごろ信乃さんに會ふかね。」

「きのふ一寸遊びに來ましたがね、すぐ歸りましたよ。」

菊也はこころもち顏をあかめ、つとめて平氣でさう言つた「去年國にゐるころに君のお母さんと信乃さんのことをよく話して置いたが、お母さんはもう決つたやうに喜んでゐられた。」秋本は自分のからだの話にきりをつけて、にこにこしながら菊也に話しかけた。

「君のお母さんくらゐ人の母親といふ感じの深い人はないね。」

と、身に沁みて言つた。

「こまるのは獨りで決めてゐることですよ、僕もまだ腹はきまらないんです。」

「ほんたう。」

「うん。」

菊也らしい返辭をしたが、言ひにくひのだなと思つた。菊也の下宿は秋本の古い知り合ひの梨本のおばさんの家だつたが、おばさんは來るごとに菊也が學校にゆくときは此ごろ廻り道をして信乃さんの前を通るやうにしてゐることや、國太が遊びに來て我ままをしても默つて叱らぬことや、信乃さんが英語を時々ならひに來ることなどを言つた。朝起き

るときでもこのごろは元氣だと言つて、この間も床の中にゐて、三年のうちに唯の一度もさういふことを言つたことのない人が
「おばさん、おばさん。」
と、暗い雨戸の閉つた部屋へわたしを呼びこんだので、何んです、珍らしいといふと、
「一寸煙草を一本。」
さういふので、火を點けてあげると、
「おばさん、新聞は來てゐるでせう。」
「來てゐますよ。」
「此處へ持つて來て下さい。」
新聞は朝飯と一しよに讀むのが三年の間一度も床の中でおよみになることがなかつたので、すこしどうかしてゐると思ひ雨戸をすかして明りを入れてあげると、こんどは、
「おばさん、灰皿。」
と言ふんです。灰皿を枕元へ置くと長々とあんな大きいひとが伸びをして、
「學校を卒てしまうとおばさんに何を買つてあげやうかな。」
「いゝものをどつさり買つてください。」
さういふと菊也さんは新聞を投げ出して、そのときは御馳走をしてあげますよと言つて起きたのだつたが、
「こんな朝は一日もこれまでになかつたのです。」

おばさんはさういふと、菊也の人となりを賞めそやした。そしてやはり若い人といふものは何かあると、ずつと人がらが變つてくるものですねといひ、菊也さんなどもすつかり變つた。どこと言へないが變化つたところが目立つて來たと言つた。あんな無性な人が毎日のやうに髯をあたつたりしますからねとお可笑しさうに言つた。

「おばさん少しやきもちの方ぢやないんですか。」

「滅相な。」

おばさんは又た例のうちにゐるめん鷄が大きくなつたくせに、をすを怖がつて止り木に上つたきり碌々餌も食べなくてこまる。あんな大きくなつてをすを嫌つてはこまる、いつも出る鷄のくどき節が出た。

「よその鷄はみんなあれくらゐになれば卵を生むのに、わたし餌をやるごとに憎らしくなりましてね。」

「をん鷄がきらいなんでしせう。」

「いくら嫌ひだつて一つの金網の中にゐて何時まであゝではこまつてしまひますわ。からだもちやんとできてゐるくせにをん鷄がそばへ近づくごとに逃げてしまふんです。齒がゆくて見てゐられないんですよ。」

おばさんは眼の前に憎らしい鷄が見えでもするやうに沸々口のうちで呟いて、せめて一日にひとつくらゐづつ生んで與れゝばいゝんですけれどと言つた。

「何かいゝ工夫はないもんでございますかね。」

「さあ鷄のことはかいもく知らんが、嫌つてゐるなら仕方がありませんね。」

そのくせ箱から出ると大切な芽を食つたりして困ると、短か日のかげうすれるまでおばさんは鷄のことを憎んで、それでも潰すのには惜しいとも言つた。

「それでも貞次さんの仕事があつたさうですね。」

「えゝおかげでどうやらございました。永い間でしたからね。」

貞次はおばさんの子息で、まる一年ばかり仕事がなくて遊んでゐたが、おばさんが夜の一時二時までくどき立てるので、貞次は降參降參と言つて夜具の中にからだを辯らせるのだつた。菊也はそれを笑つてあんなに遣らなくともいゝのに、翌日目がさめると昨夜のつゞきを口說くらしいと、一こくなおばさんだからなと言つた。

「君はよく信乃さんの家の前を通つて學校へ行くといふぢやないか。」

「誰がそんなことを言つた。」

「おばさんが言つたのさ。」

「おばさんには全くこまる。友人が留守に遊びにくると僕の部屋へ勝手に上げて、菊也さんにもいゝ人ができましてねといふ調子で、みんなに告口をしてしまふんです。あれには弱つた。」

「おばさんは閑暇だから鳥渡やりさうなことだな。しかし君もそろそろおばさんが邪魔になつて來たらしいね。」

「そんなことはないが……」

菊也は干渉さへして吳れなきやいいんだがと言つた。これまでおばさんのことを餘り言はなかつた菊也が、折々不快げにおばさんが煩ささうな口調だつた。

「とにかく君は信乃さんと一緒になる氣かね。それなら僕から正式に申込んであげてもいいのだが。」

貞次は鎌をかけて見たが、菊也は考へて置いたことのやうに樂々と、「是非あなたから話して貰ひたいと思つてゐたんです。」と眞摯な顔付で言つた。

「ぢや僕からから言ひ出すのを待つてゐた譯だね。」
「でもおばさんやあなたまでが決めてゐるんだもの。母までがその氣でゐるし……。」
「では信乃さんはどんな氣なんだ。」
「あの人の腹も定つてゐるんです。」
秋本は默つてゐる菊也が既う信乃にわたりをつけてゐるのに驚いた。いつの間に本人同士が話をつけてゐたのかと鳥渡意外の氣がした。
「いつころから――。」
「だいぶ先きに築地へ行つたときに、信乃も二階へ來てゐたでせう。あのときに話をつけたんです。」
「飯をくひに僕が階下へおりてゐたときですか。」
「ええ。」
秋本の部屋で小劇場へゆくために信乃と菊也とが二階に居合したときに、父親の國臣さんへ申込みをするがいいかといふと、信乃もそれを望んでゐた。手紙のやりとりは秋本の妻がしてゐたが、本人同士の打合せは嚴格な家庭だつたので中々めんどうだつた。それゆゑ僅か二十分くらゐ秋本が階下へおりてゐる間に話をつけたものらしく、油斷のならぬその道にかけて働く氣もちの迅さに秋本は驚いた。
「僕はすこしも氣がつかなかつた。」
秋本は重大な話を取交した二人と一と晩ぢう小劇場にゐても、氣ぶりにも異つたところを感じられなかつた。ただ、信乃は考へごとに耽つてゐること、熱い、熱いと言つて冬の人込みの中でも頰をいきらしてゐたことなどが、いまにな

ると變つたくらゐに想ひ起された。

「しかし素早くやつたものだナ。」

「あのくらゐのことは遣れますよ。」

菊也はをかしさうに笑つた。母親の「あの子は下手な方でございませうね。」と言つたことも、母の子を見ること既に遂しの感があり、秋本はまた自ら省みて年齢のちがひが眞面目に感じられた。

「家のひとはどうだらう。」

「みんな腹には決めてゐるらしいが口には出さないさうですよ、信乃の話によると、お母さんが信乃の寢靜まつたころによく机の曳出しなどを調べるし、日記帳も見るさうだが……」

菊也は笑つて、「それだから僕に關したことは一切かかないさうです。」

「それは思ひつきだ。」

「だからこちらからは申込みさへすればいいんです。」

「ぢや愈々出掛けるとするかな。」

「ところが國太はかんづいてゐるらしいんです。」

「まさか。」

「あの子は一寸隅に置けないくらゐ鋭敏ですからね。ちよつとしたことにもぴりつと耳を立てますから。」

さういへば菊也から頼まれた手紙を信乃に渡さうとしてゐる妻は、折々國太に狙ひつかれ渡すひまがなくて弱ることがあつた。さういふときに少しの用事を頼んでも中々應じないで、じつと聽きこむとみえて離れなかつた。いつか信乃と對

也とが町へ買ひものにゆくことを珍らしく兩親から許され、國太をつれて出掛けることがあつた。その時、菊也と信乃との前と後とをぐるぐる廻つては歩き、まるで二人が歩けないほど眼まぐるしかつた。

「そのとき國太は僕らの手の方を見てゐたやうな氣がして、子供でもゆだんがならないと思ひましたよ。」

「子供はよく大人を廻つて歩くものだが、それは偶然だが怖いな。」

「しかたがないから眞中へ入れて歩いてやつた。そしたら温良しくなつた。」

菊也と秋本は腹の底から笑つた。國太がぐるぐる廻りをやつてゐる間に苦笑しながら歩いてゐる二人が、秋本には眼に見えるやうで面白かつた。それにこのごろになつて我儘が烈しくなつたことも、菊也には何となくこだわりなく考へられなかつた。

「此間も秋本のおぢさんはばかだよ、茶をのみに這入つて女に金をそつとあとでやつてゐたよ、と言つてゐましたがね、カフエのことだらうがああいふことが物珍らしく見えるらしいんだね。」

「僕らの何氣なくやることでも、感じ方が新鮮だから不思議に見えるんだ。」

菊也は國太の父親が末つ子であるためか、國太を一等可愛がつてゐるが、あれは知らず識らず自分の子供の中でも一番自分に近い性質のものを愛してゐるのではないかとも言つた。

「僕はいまでも國太に可憫な氣のすることが一つあるんだよ、國にゐたときのことだがね、れいのほら、一件のことなんだがね。」

一件とは國太が折々晝間の飲みものの過ぎたときに、夜不調法をすることだつた。自分でもそれには神經をつかつてゐると見え、朝床をあげたときに女中がお湯をこぼしたのか、敷の上が飴色に沁み濡れてゐて、それを國太がしきりに雜巾

で取慌てて拭いてゐたのだつた。自分が不浄をこぼしたものと思ひ込んでゐるんだなと、秋本は可憫な氣もちになつて、

「それはねえやが今朝お湯をこぼしたんだからいいよ。どうして自分で拭いたりなんかするの。」

「さうねえやが零したの。」

國太は手を引込めてひどく安堵した樣な顔つきをして、心からにこにこ微笑つて不圖辷り出たやうな言葉づかひをした。

「何んだ僕、れいのあれかと思つたんだ。」

「あれぢやないよ。」

秋本は寂しい心づかひをいとしく思ひ、そんなに氣にするものぢやないと言つた。そのときの國太の顔の上に誠に明らかな快心の喜びがあつた。いつも不浄のことで叱られもし心配もしてゐる國太は、あのとき不浄にしても信じて佗びたらうと思ふと、何ものぞ、人の心をなみするものはといふ氣になつたりした。

「だから僕のうちにゐた貳木があの子にれいのあれを一寸やじつたことがあつてから、國太は貳木を徹頭徹尾背にしみて嫌ひになつたらしいよ、急所だからね。」

「いやあれには惱んでゐますね。」

時々國太は朝起きるときに少し危ないと思つたときは、中々床を離れやうとしなかつた。さういふ朝はかならず不浄をもらした。そして苦蟲を噛み潰したやうな顔貌をして、世に佛もないやうな荒涼な心ぐるしさを心幽かになめてゐるらしかつた。

「やつたか？」

「やつた。」

眼に拜むやうな色があつた。秋本も妻も笑ふことをしないで默つてそのもんだいには觸れなかつた。それゆゑに神を失つた國太は僕うかうかとやつてしまつたと言つて、にがにがしく笑つた。秋本らもそれに引かされながら笑つた。

「子供が少し大きくなつてからも小便をたれる、それに心をつかふといふことは何か神聖なこつた。」

「そんな氣もしますね。」

「あの苦々しい顔つきが唯ならぬ風雲をかんじてゐるやうで、何ともいへない可憫な氣がする。」

秋本は信乃からきいたのであるが、寢衣など自分で干しに庭へ出ることがあると言つた。

「ではそのうち君の方の申込みをしやう。」

「どうぞよろしく。」

菊也はつとめて眞面目な顔付でさういふと、ずしりずしりと二階から下りて歸つて行つた。あとに殘つた秋本は火桶にもたれながら、國の町にゐる菊也の母親の家の床の間にある寫眞のことを思ひ出して、何がなしひとりで微笑まれてならなかつた。母親の想像のとどかない深みへまで伸びた子息の思想に、べつに追ひつかうともしないで獨り定めに子息はまだ子供だと思つてゐるのが、仲々人の母として拔けたいいところだと思つた。

「國太と遊んでゐると小枝子はまるで男のやうな言葉づかひになりはしないか？どつちにしても僞ることが荒々しくなるやうな氣がする。」

秋本は妻を前に置いて、國太と遊んでゐる小枝子の癇高い聲をききながら、どうかすると女の子らしくもない荼れやうに、薄眼をあけながら氣疎く眺めた。

「まだそんな小さいことなんかどうでもいいんぢやないですか。」

秋本の考へは女のやうに單純ではなかつた。

「いや恰度いまが仕つけに一番肝心なときで、その時分に覺え込んだことは中々拔けきらないものぢやないかね、女の子は女の子同士で遊ばせるやうにした方が一等いいんだよ、小さいときには男の子と遊ばせることは、何かによくないことがありはせんか。」

女の姉妹ばかりに挿まれて育つた子供の風致には、何時ころとなく女々しい素振りが慣はされ、心もちまで弱々しいものになることはよくあるものだ、秋本は殆國太とばかり遊ばせてをく妻の了見には、讃成できぬ氣もちだつた。

「ではどうしたらいいんでせう。」

「よその女の子の中へ入れて遊ばした方がいいだらう。小枝子の眼界もひろくなるからね。」

「ではさうしませう。しかし國ちやんには慕つてゐるんです。」

「だから國ちやんとも遊ばせるさ、またよその子とも遊ばせるのさ。」

妻は何か考へ貯へてゐることを言へないやうな顏付でゐたが、自說があるのだと秋本は思ふたが問ふまでもなかつた。秋本自身こんなことを考へるやうになつたのは、國太を愛するよりも一層自分の子が可愛いからだとも思ふより外に考へやうはなかつた。子どものない時分によその子を貰ふことを考へたりして見たが、そんなことをしてゐたら今頃自分らはどうなつてゐるだらう、継子をいぢめる女の浅ましい残忍さを世上で屢々聞くが、しかしあれにも[illegible]

言へなかつた。已れの子を愛してよその腹の子を厭ふは、性質のしぶとい生れつきの女に取つては當り前のことに想はれた。人間などといふものは何處まで行つても愛憎に際限もないもので、それ故に人間は面白いのだとも思へるのだつた。

それに國太は明らかに秋本には好意をもたないで、鋭い嗅覺と眼の色とで、かれの心まで讀み盡してゐるやうだつた。菊也の話が出ると、

「菊也さんは文學士だよ、おぢさんは何んでもないんぢやないか。」

さう言つて秋本をへこました。

「おぢさんもこれで中々えらいんだよ。」

秋本は笑ひながら言ふと、國太は負けてゐなかつた。

「おぢさんは書生をして書くことを覺えたんだらう、菊也さんは書生なんぞしたことがないよ。」

「おぢさんが書生をしてゐた……」

「さうなんだよ。」

「どこで――」

「どこだか知らないがしてゐたんだ。さうでなきや書けない。」

國太は書家の生れだけあつて、書生からでないと書く仕事が出來ないものと決めてゐるらしかつた。秋本は唯の一度も書生をした覺えはないが、菊也が大學を出、秋本は學校を卒てないので何かさういふ理屈が成り立たないではなかつた。子供にも子供の理屈があるものだと思つた。

「そんなことを言ふとおぢさんはもう君を可愛がらないよ。」

「それはもう知つてゐる、おぢさんはとうに僕にあきてゐるんだもの。」

秋本は冷やりとした。

「どうしてそんなことが解るかね。」

「ちやんとわかるよ、さういふ約束ぢやなかつたんだ。」

秋本は剝られたまま、蟬のやうな羽根を擴げた魂を見とれた。大したことを言ふものだ。何もかも洗ひさらしに丸呑みにしてゐたなと思つた。雪のふる鄕里でこの子を迎へに出た傷みやすい氣もちで見透かされてゐたらう、秋本は烏渡叶はない氣もちで笑ひ出して見たが、

「あばよ。」

と、機敏に玄關へ出て歸つて行つた。

「とても叶はん。」

秋本は女にさう言ひ、「負けてしまつた。」と苦笑して、新しい鋭どさに齒のあとを殘したまま、秋本はねころんで果敢ない氣もちであつた。

「あの子はなかなか利口ですからね、ああ見えても判るところはちやんと解つてゐるんですから。」

「ああいふ鋭どさは子供の時分だけで亡びてしまふ鋭どさだよ。」

秋本はふと此女は繼子を可愛がるだらうかと考へて見たが、繼子があれば繼子をいぢめるだらうと、どうにでも女は境遇次第で變るものだと肯かれた。この女が鬼や蛇のやうになり繼子をいびることを考へると、そんなことをしないで濟むことがどれだけ仕合せだか分らないと思つた。

「誰れ？」

茶の間のそとは通りで人の氣はひがして、秋本は耳聰く身を起した。「國ちやんか知ら？」と二人は目を見合した。

「まさか。」

二人は暫らく默つてゐたが、秋本は苦いポリタミンを飲んだ。ちよつとした面倒くさいことがあると死んでもいいと思ふよ、そのくせ、それは一寸の間だがね、こんな考へをもつやうになつたのはみんなこいつのせゐかなと、厭味たらしく秋本は師のところに手をやつて見せた。

「僕が死んだらお前はきらひな赤飯をくはなくともいいだらう。」

「ええ、そんなものは焚きませんとも。きらひなものは仕方がありませんからね。」

「赤飯はおれ一代かな。」

秋本は赤飯が好きだが女はそれを焚く日にも白いのを食べ、ほんの申譯に一杯だけ食べてゐた。赤飯を朔日に焚くことは郷里の習ひで秋本の家でもそれを守つてゐたが、それは秋本一代のことだと思ふと、變なところに物佗しさを感じた。

夕方、信乃が來たが秋本はちよつと座を外した間に、手早く妻の手から菊也への手紙を受取つたらしく思はれた。この話が出てから信乃は今までおさへてゐたやうな若さがめきめき發してゐるやうに美しくなつた。秋本は心と肉體とが一しよに働くものであることを當然に思ふた。

「昨日お宅の前庭の丁字の枝を一本默つて頂戴して來ましたよ。いい匂ひがしますね。」

「どうぞ折つてください、あれがあんなに大きくなりましたが、わたくしの女學校の一年のときに挿木したんですのよ。」

「大きくなるものですね。」

「毎年花が咲くころ思ひ出すんですが、あとはいつでも忘れてゐるやうな木なんです。」

「けれども丁字ばかりでなくあなたも一緒に大きくなつたわけですね。」

「まあ、おぢさん。」

信乃はちよつと睨んで見せて、ああいふ古い家なんですけれど、木なんかみんな小さい時からあつたのだと言つた。この女と丁字との挿木、それがいかにも淸々して見くらべられた。秋本は國にゐたころあなたの寫眞を一枚菊也のお母さんにあげておいたと言つたが、信乃は顔を赧らめて、それはちやんとこのごろになつて分りましたの、おぢさんにはゆだんができませんのねと言つた。

「どうして分つたのです。」

「お母さんから手紙がまゐりましたの、それで……。」

「手紙が來たんですか。」

秋本はそのお母さんの手紙の文章を讀むやうな氣もちがした。綿々たる雪のごとき文章だつたらうと思つた。

「菊也はいいお母さんをもつたものですね。あんなお母さんなんて鳥渡見當らないものですよ。」

秋本は微笑ひながら一體どんなことが書いてあつたんですと言ふと、わたくしそんなこと言へませんわと答へた。

「ただわたくしに入らつしやいといふことが主ですよ。」

信乃はきまり惡げに又た赧らんだ。それで何も彼もが含まれてゐる。秋本はさういふ手紙を書いて裏町の[illegible]れてゐるポストに入れる母親を、心で感じて見た。お返事には何も書くことがございませんでしたから、わたくし[illegible]

ろしくおねがひしますと書いて置きましたのそれでようございましたか知ら？

「いゝですとも。それにあなたのお父さんも正式に申込まなくとも承諾してゐるやうなところがありますね。」

「そりやもう喜んでゐる方なんですの。」

「此間の晩何となく仄めかしたんですが、女の子はあれ一人だからできるだけ仕合せにしてやりたいと思ひましてねと、もう心では決めてゐるらしいんです。お父さんにしても今あなたを離すのは、何だか寂しさうに見えますね。」

父親自身でもおまへが行つてしまふと、まア一段落はするが女氣がなくなるわけだからと、信乃を對手に話したりすることがあつた。信乃をつれて散歩に出かけた父親にはなほ信乃を手離すことは淋しからうと思へた。人によつては娘がよそへゆく時には何か憎らしい氣のするものだといふが、信乃の場合さうでないらしかつた。

「氣難しいことを言つてゐると思ふと急に優しかつたりして、あれで淋しいのでせうね。」

「そりやそうですよ、僕にしてもあいつが大きくなつて……」

信乃はくすくす笑ひ出した。小枝子は寄木で家を建てながら秋本の顔を見た。「よそへ呉れてやるにしても仲々平氣な氣ではなからう。掻つ拂はれるやうな氣もちになるだらうと思つた。どちらにしても嫁にやる當座は父親といふものはぽかんとしてゐるほど、氣づかれがするものらしかつた。わたくし、父にはなにか濟まないやうな氣がしますとも信乃は言つた。

「此間あなたのお母さんといろいろ話したら、たゞ娘を泣かさないで下されば、外に申しあげることがございませんと言つてゐらしつたが、母親といふものはうまいことを言ふものですね、急所をちやんと知つてゐる。」

信乃はそんなことを母が言つてゐましたかと、驚いた顔つきで言つた。全く泣かさないでゐてくれといふ外には、何

もいふ事があらう筈がない、人に異れる娘の夫への注文はこれだけで足りると思へた。わたくしなども色々のことで泣かされて來ましたが、娘にはさういふ自分のつらいと思つたことを、なるべくすくなくしてやりたいと考へましてね、さう言つて秋本の妻とも轡をならべ、秋本はその晩へこ垂れたのであつたが、事理の銳い言葉であつた。妻は妻でわたしどもの經驗した氣もちを何にも知らない娘さんが、また繰り返してゆくかと思ふと空恐ろしくも、また小氣味のよいことのやうにも思はれるが、自分の娘の場合には全くやはり泣かしたくございませんと言つた。

秋本はしばらく考へてから、「それは自然に泣くやうな氣もちのときも、あつてもいいぢやありませんか、泣いたり泣かされたりするうちに一生が固まる、その固めにはやはり泣かされたりすることがあつてもいいと思ひますね、しまひに此方が泣き出しますよ、泣かした奴がいつの間にか人知れず泣いてしまふ、そんな工合になつてゆくのが一生のやうでもありませんか。」

「男が泣いてしまふ、そんなことがございませうか。」

「大有りですよ奥さん、ひとりでこつそりとどうにも手も足も出なくてないてしまふんです。」

「さうでせうか。」

これは女の人には解り兼ねると思つたが、子供がよく對手を泣かしてをいて、しまひに泣いてしまふぢやありませんか、あれに似てあれとは念入りな奴ですよ、さういつて三人とも笑ひ出して了つたが、秋本は自分の言つたことが滿更うそでないと思つた。つまり自分が泣くかはりに對手を泣かす、そんな風な氣もちも交つてゐるのだと思つた。

「何んにも知らないでよめにゆくといふことがやはり一番いいやうですね、すこしでも知つてゐたらそれこそ過ちが大きくなるだけですな。」

「さうですね、やはり知らないでゐて、あとで知ることはよござんすね。」

信乃の母親はかへりしなに、同じことを繰り返して、可愛がつてやつてさへ下さればわたくしどもは何も言ふことがございませんと言つた。

秋本は信乃に、「あなた一人にみんなが頭をつかつてゐるのが、あなたから見るとどんな氣がしますかね。」

「氣の毒のやうですね。父なんぞ仕事と首つぴきしてゐるやうでございますし……」

「しかしそれもあなたへ何んでも仕納めでせうから。」

「ええ、自分でもさう言つてゐるんですけれど。」

信乃はあとでもう家ではおぢさんが入らつしやるのを待つてゐるだけですわと言つた。妻も横合から、

「早く行つて申込んでゐらつしやい、菊也さんもじれつたがつてゐらつしやるやうですよ。」

秋本の愚図々々してゐるのをもどかしさうに言つた。秋本はけふこそ出掛けて正式に申込みに行かうと思つてゐるものの、分り切つて承諾し合つてるくせに形式だけを厳格にしやうといふのが可笑しくなつて、つい出遅れてしまふのだつた。あとはどうでも一度だけは出掛けなければならぬと、妻はいまにも押し出しさうにしたりした。

「出かけるよ、明日こそ！」

「先生、ひとつからだを見ていただけませんか。」

「どこかわるいんですか。」

「どうも不安で肺がわるいんでないかと思ふんです。熱はずつと取つて見てゐるんですが無いやうです。どうも厭な氣もちで……」

霜島先生はれいの神經を起したのだらう、ひとつ診てやると言つて秋本の前と後とをしらべたが、以前とはすこし肥りましたねと言つて暫らく默つてゐた。保險會社の話もして見た。秋本は平常心服してゐる人だけに何を言はれるかゞ不安であつた。

「別に變つたところがありませんね、これなら大丈夫引受けますよ。」

「さうですか、大丈夫ですか。」

秋本は溜飲の下るやうな念ひで、安堵に似たものを感じた。いつか流行性感冒をやつたことがありましたねと言ひ、

「古戰場は殘つてゐますよ。」

「古戰場ですか。」

秋本はすこし驚いて目をまるくした。

「そのくらゐの程度のものは誰にでもありますよ。」

やはり知らない間に肺に蟲食ひができて、それが何時の間にか癒つてゐたのか？　さう思ふと平常何も知らない間に這入り込んでゐた病氣を、秋本は手の出しやうもなく知らずに過してゐたことを恐ろしく思ふた。自分の健康などに少しも氣をつかはないでゐる間に、遣られる人はやられるのだと思つた。古戰場といふ言葉が秋本には元氣を百倍させてくれた。

「いつの間にか癒つてゐる人が多いんですね。」

「僕の奴は爆發することはないでせうか。」

「大丈夫です。」

霜島先生は言葉短かにさう言つて歸つたあとで、秋本は再び晴天白日の思ひが深く、心樂しかつた。額にあぶらのにじむやうな陰氣くさい病氣から放なたれて、いま更らしく世の中の光彩を感じ出した。

菊也が訪ねて來たときに秋本はこの話をして、だいぶ樂しく生き甲斐が出て來たよといふと、あの話のさい中はあなたは苛々して全く病氣を作つてゐるやうに見えたと言ひ、僕はもんだいにしてゐなかつたがねと言つた。

「けれども古戰場があるさうだよ。僕なんぞ夢にも知らない間に恐ろしいものに取憑かれてゐたものだね。」

秋本は放浪暮しをしてゐたころの話をして、何百年といふ祖先から受けてゐる血に何が交つてゐるか分るものではない、それゆゑ秋本だけでも人並に健康をいたはる暮しをして見たいと思つた。何かいまは古戰場に月がさしてゐるやうな明るい氣もちになつた。――菊也は改めた口調で、

「昨日はどうもいろいろありがたう。」

と言つてさすがに赤い顔をした。

「いや、話がうまくまとまつていい鹽梅だつた。すぐ承諾してくれたんだ。」

「僕は信乃のお父さんが剛情だからと思つて心配してゐたんです。」

「僕が行つたら向ふからお話しのことはといふ調子でうまく行つたのさ。」

秋本は信乃の父親と會つたとき向ふで與れる決心をしてゐるのを、すぐ見透したので話しよかつた。國臣さんの言分では親といふものの考へは極く平凡で、なるべく仕合せさうなところを選つてゐるものです。つまり、けふまで見張り

通して來たものをいきなり人手に渡す、――この氣もちは入り組んだ複雑な氣もちですよと言つて、
「あれさへ片づいてしまへばわたしも重荷をおろすやうな氣ですよ。」
秋本は世の虚名の外にゐる國臣さんの菊也を選んだこともいいことだと思ふた。眞面目な菊也は例令父親が承諾しなくとも、うんといふまで戰ふつもりだと言つたが、國臣と對つてゐる秋本はさういふ菊也を思ひ合せて、お可笑しかつた。
「信乃は殆わたしの考へ通りに育てて來ましたが、國太には自我を通させてゐるやうな育て方をしてゐますよ、あれは一番骨のある奴のやうですから。」
秋本は併しと言つて、「信乃さんも今は自分だけの考へをもつて獨立した氣もちでおられますよ、あれだけになればちやんと手固く自分を作つて居られるわけです。」
「いや、わたしはそれをさせないつもりです。あれはわたしを離れて立てない。わたしの考へとほりに育てゝ來たのです、その點では保守主義ですよ。」
秋本は默つて自分の考へをこつそりと胸に持ち、怜悧にそれを外側へ漏らさないでゐる信乃を、五年も前にはこんな娘がゐなかつたものだと思つた。父親はなぜ自分を頑なに信じなければならぬか？――秋本は他の色々の打合せを済した。その次ぎに會つたとき信乃は一人前の、はにかみなどを抜いてしまつた口調で、
「先日はどうも色々ありがたうございました。」
と、眞率にあいさつをした。その落着きがよかつた。あなたは隣りの部屋で聞いてゐたんぢやありませんかと、隣室にけはひをさせてゐた信乃が感じて秋本はさう言つて見たが、

「よくきこえませんでしたの。」

信乃はさう言つたゞけだつた。

その晩、菊也と信乃とに連れ立つて築地小劇場へ行つたが、春寒の椅子の下に風が吹き通して、秋本は膝皿が氷るやうな氣がした。菊也は信乃にそつと、寒くはないかと言つたりしてゐるのを秋本は耳に入れて、ものをいたはる氣もちを久しぶりで眺めた。おれにもあゝいふ仄かな氣もちがあつたかなと遠雲漠々たる彼方を眺めるやうな念ひがした。

「けふは國太に隱れてまゐつたんですわ。見つけられたらそりや大變です。」

信乃はさう言つて一寸外へ出るにも何處へ行くと嚴しく責め立てると言つた。菊也は此間こゝへ來たかへりにドウナツを買つてかへつたでせう、それを朝食べて夕方お宅へ行つたら、また同じドウナツが出たので、すつかり前の晩のことが分つて、

「をかしいと思つたら何んだい、一緒のドウナツなんぞ買つて來て、——。」

さう言はれたのには、一言もなくまゐつてしまつて、くすくす笑ふより外はなかつたと菊也がをかしがつた。では今夜またドウナツを買つたらそれこそ又たばれるわけだね、道理で此の間の晩、ドウナツを見たつきり、僕いまほしかないよと手をつけやうとしなかつたことを秋本は思ひ出した。さういふ三人はドウナツの包を一つづつ持つて、カフエへ寄るのはいやだから途中車の中で食はふといふのだつた。

下足は菊也が取つてくれたので、信乃はあはてて自分が取ると焦つたが、人込みで女手では取れさうもなかつた。わづかな事だが秋本はそれもよいと思つた。かへりの車を家近くで降りたときに、誰もドウナツの袋を破らずにそのまま袂や懷中にもつてゐた。

「こまるわ、これを持つて行つちや國太にわかつてしまふんですもの。」
信乃はドウナツの袋を出したまま、暗い郊外の垣根にそふて立ち悚んだ。
「困つたな、ぢや、梨木のおばさんにあげたらどうか。」
「それがいい。」
と、菊也の宿の梨木のおばさんに上げることにした。僕の分も見つけられると困るし、つい家へ來たときに出さないとも限らないからと、菊也にあづけることにした。菊也は兩手に三つの袋を持つたまま、
「このごろ僕にはおばさんが苦手なんだがな。」
「なぜ?」
「なぜでも苦手ですよ。」
菊也は笑つて自はなかつた。
おばさんは此頃菊也さんはすこしも落着かなくて、信乃のところへばかり行つてゐる。銀行へゆくことを賴んでもこれまでのやうにおいそれとして與れないと、秋本のとこへ來て口説くことがあつた。
「汚れものなぞ洗濯やへやつて下さればいいのに、押入れへ投げ込んで置くんですもの。」
さういふ梨木のおばさんは、どこか尖りをふくんで菊也にむかふてゐるらしいどころがあつた。秋本は年老つても女は女だといふ意味で、おばさんの氣もちが解るやうな氣がした。
「いまにおばさんにご馳走すると言つてゐましたよ。」
「どうですか、ほんとにあんな人と思はなかつた。」

おばさんは不機嫌にさう言つてこれから親しい人でも世話をするのは眞平だと言つたが、菊也は菊也でまるであのおばさんは學校まで出してくれたやうなことを言ふんだ。「やはり何かかう考へるのかね。」
「さうさ、少々やけるのさ。」
秋本は間もなくそれも笑ひ草になつてしまふときがあるとも言つた。秋本は今晩は一つドウナツで機嫌を取つて置くんだと笑ひながら別れた。
「ドウナツくらゐで利くか知ら？」
菊也はさう言つて大男らしい足音を立てて、狹い垣根と垣根との間に姿を消した。
翌日の午后に國太が來て遊んでゐたので、秋本は何となく優しく振舞つたが、國太は言葉の隙を見て、
「ゆうべおぢさんは何處へ行つたの。」
と尋ねた。何氣ない風をよそふてゐるのが一曲あるぞと思つた。
「おぢさんは昨夜は散歩して早くかへつたよ。」
「さう――」
「なぜそんなことを尋ねるの。」
「姉さんが夕方から居なかつたから菊也さんのところへ行つて見たら、菊也さんもゐないんだもの、それで僕は大がい分つたのさ。」
「おばさんが何か言つたか？」
少し澁つて、「いや何にも言ひはしなかつたよ、ただ僕、おぢさんも一しよかと思つたの。」

おばさんが何か言ひはしなかつたらうか、秋本は謎をかけるやうにして話してゐるおばさんの顔を思ひ出して、これは危ないと思つた。

「このごろは僕はいつでもノケモノにされるんだ。」

「そんなことはないさ。」

「でも昨夜なんぞ左うなんだもの。僕はちやんと知つてゐる、何處へ行つたかくらゐは?」

「あててごらん。」

「お芝居だらう。」

秋本は直覺の鋭い國太の前では、片ッ端から出し抜かれる氣がした。いつでも遊びにくると直ぐ「けふはおぢさんの機嫌はよくないんだらうおばさん……」と、妻にさういふ聲が隣室で聞かれた。氣難かしい父親のそばにゐる國太には、しぜんに左ういふ洞察ができてゐるのかも知れないと思つた。

「それに僕ちやんと證據をおさへてゐるんだからいいよ。」

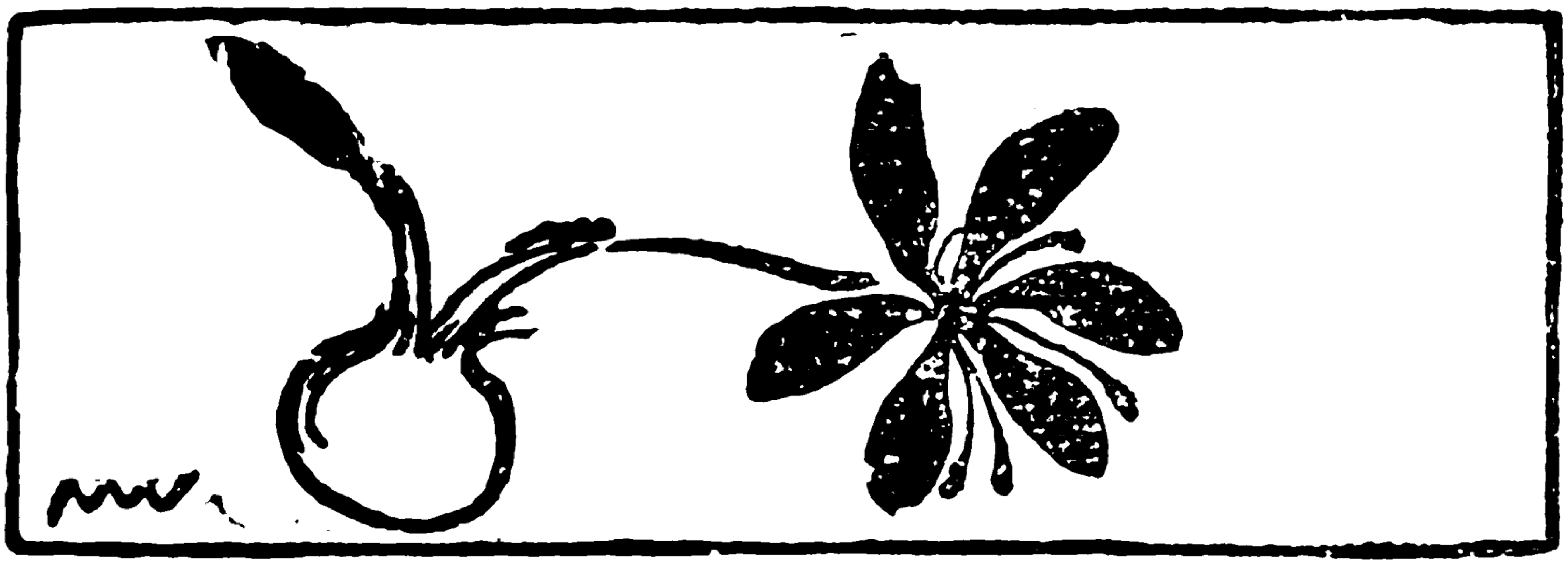
「どんな證據、――」

それには答へないで、にが笑ひを漏らし「おぢさんも昨夜行つたんだらう。」と言つた。おぢさんはちやんと散歩からかへると家にゐたんだ。うそだと思つたらねえやにきいてごらんと言ふと、ねえやなんかあてになるもんかと、突然一さうにがにがしく笑ひ出して、

「ドウナツもんだよ。」

と言つた。

秋本はおばさんのところでけふドウナツを食べたのだなと思つた。
「うそをついたつて皆わかるんだもの。」
「おばさんのところでドウナツを食べたんだね。」
國太は、あ食べたよ、けれども固くてうまくなかつたと言つた。秋本は爲方なしにくすくす笑ひながら、昨夜の苦心も水の泡かと思つた。「ドウナツくらいで利くか知ら？」と菊也の言つたことを思ひ出した。おぢさんたちのすることは鈍間だからなあと言はれそうな氣がした。
「これからドウナツなんかぢやおぢさん駄目だよ。」
秋本は仕方なしに、「あ、せいぜい、もつとおいしいものにするよ。」
そう言つておばさんもいい年をして詰らないことを告口したものだと思つたが、菊也が來ての話では、やはりおばさんが言つたものらしいと言ひ、これまで晩くとも起きて出てくれたものだが、もう起きてくれないで床の中でわざとらしく睡られぬ冴えたこゑをして、
「どなた。」
と、さういふんで、閉口したと頭を掻きながら、
「ドウナツもさんざんでしたね、」と言つた。
「とにかく國太には叶はないよ。」
秋本は我が子に似てゐる國太を、自分の子供も、大きくなつてゐたら、ああいふ鋭い子供になつたらうかと、机にもたれて茫やりしてゐるときに考へて見たりした。



Kの右手

小川未明

自分の手足の自由を奪はれてしまつたといふことに、誰も氣が付かなかつた。

それは、考へれば、不思議なことだつた。全く不思議だ。手や、足は、何處にも着いてゐるのでない、自分の體に着いてゐるのだから、自分の意志で勝手に動かされさうなものなのに、さうはいかない。いつ頃から、こんなに、人間は不自由極まるものとなつてしまつたのだらう。

ちやうど、それは、この地面に造り付けられた機械のやうなものだ。一人、一人が、釘であり、また小さな歯車であり、また留針でもあるやうに、ちつと据え付けられた場處から身動きもされずに、全く、機械のやうに與へられた働きをしてゐる。硝子を拭く女は、朝から晩まで窓の硝子を拭いてゐる。プラットホームに立つ、切符切りは、いつも鋏を動かしてゐる。竹串を削る者は、終日臺の上で竹を削つてゐる。タイプライターを叩く者は明けても暮れてもそれを叩いてゐる。皿を洗ふ者は毎日油臭い皿を洗つてゐなければならない。何といふ單調なことだらう……。

しかし、一旦さういふやうに、役割がきまつてしまつたら、勝手に、自分の意志では、どうすることもできないところに、今日の社會的構成がある。

文筆業のKは、朝から、晩まで机に向つて右手にペンを持つべく餘儀なくされてゐた。彼は、この不自然な生活を思はないのではなかつた。田舍で、廣々とした野原の中で働いてゐる百姓のことを思ふにつけて、青空の下で働くだけでも、その生活の方がいゝやうに思つた。しかし、その生活の樣式だけが自然であらうとも、その勞力が賃金に換算される場合のことを考へると、彼は、自分の仕事をそれに代へようとは思はなかつた。

「やはり、俺のしてゐる仕事の方がいゝやうだ」と、時には、こんなことで、汗を流して、働いてゐる勞働者よりは、割合に金になるので幸福にさへ感じたことがあつた。

「資本主義の世の中は、人間を機械化するものなり」と、自から書きながらも、尙ほ、生を享樂しようとした。その間に、自分の體內では、鬪爭がつゞけられてゐた。

「なんで、私ばかりが、かう働かなければならぬのだらうか。考へて見ても分りさうなものだ。自分だけが、働きつゞけて、他の者が、さながらそれをあたりまへだと思つてゐる時分に、どんな怖しい結果が其處に生じやうとするか分つてゐる筈だ。あの顏の靑い、瘦せた勞働者が、彼等の前に訴へた時に、もしもそれを悟ることができたら、恐らく、怖しい結果を見なかつたらう。いつまで、私ばかりが、休みなく働かなければならぬのか?」と、右の手が叫んだ。

「そんなことを言ふな。この體は、誰れのものでもないぢやないか？自身の體ぢやないか。お前が、さういふやうに働かなければならぬ機能を有してゐるために原因することであつて、何も俺達の知つたことでない。俺にはまた、お前等の想像されないやうな惱みがある。いつたい、お前は、どんなことを考へ得るか。どんな智識を持つてゐるか。また自

から、どんなやうな目的をば持ち得るか、まあ言つて見るがいゝ」と、腦は、右手の不平に對して、高い處から答へた。

右手は、憮然として、過激な勞働の結果から震へてゐた。それは、いつの間にか病的になつてゐる姿でもあつた。

「ちやうど、君は、特權階級が言ひさうなことを私に向つて言ふぢやないか。君の考へがいつたいどれ程の價値があると思ふのだ。それを形にしたり、また、實行するためには、一から十まで私の力ではなかつたか。私逹が働かなかつたら、いつたい君の考へといふやうなものが、何になるのだ。そして、君は、自からを高尚なものと考へてゐる。しかし君の頭の中には、半分下らないものが充滿してゐることを私はよく知つてゐる。かならずしも君の考へることは、生活にとつて必要なものばかりではないだけでなく、却つて、餘計なことや、無駄なことや、有害なことさへある。君は自由に享樂を空想することもできる。またそれによつて自からを樂しませることも知つてゐる。けれど、私逹にはさうしたことは絕對にない。たゞ勞働するばかりだ。私が休みなく働いてゐる時分に、左の手や足や、他の部分は、いつたい何をしてゐるであらうか。炎天下に、汗を浴びて働く勞働者の生活と關係なしに、ブルジョアが、悅樂に耽つてゐるのと同じことではないか？」

「俺が愉快なことを考へたり、空想するといふことがなくて惡いのか。それは、やつぱり體全體――お前逹自からをも――樂しませることではないか。第一體を分けて考へることが誤謬である」と腦は言つた。

「僕も、全く、共同の生活線に立たない譯ではない。いつでも必要がある時は、立つ覺悟を持つてゐるけれども、たゞ、その時が來ないばかりだ。腦の言ふやうに、體全體が、一人を造つてゐる。何も區分をして、それを考へるにはあたるまい」と左手が、この時、言葉をはさんだ。

熱しきつてゐた、そして、常に、疲勞を感じつゝあつた右手は、冷笑つた。

「人間に階級なしと言ふが如く、體の部分に差別なしか？　さういけば、全く圓く收まるであらう。けれど、實際に於てさうはいかないのだ。論より證據、まづ私の姿を見てくれ……」と、右手は言つた。

右手は、體の他の部分の如く均等に肉付いてはゐなかつた。拳のわたりが堅く、腕の上半分が不自然に太く曲つて、中指は極端にねぢれて、奇形を呈してゐた。

これを凝視した時、頭や、左手や、眼や、口は、自分達の組織を造る中にも、こんな奇形物が混つてゐるかといふやうに、不思議さうな面持に見られた。

この有様を、すぐに見て取つた右手は、

「私も、はじめは、すんなりとしてゐた。恐らく、體のどの部分よりか男々しく、健やかに發達してゐる如く見られたにちがひない。なぜなら、重いものは、みんな自分が持ち運んでゐたからだ。日常に起る、生活に必要な外部の事件は、すべて自分の力でもつて捌いて來たからだ。しかし、それは長いことでなかつた。私には、いつしか休みない勞働が投げられたからだ。この勞働は、私の神經を磨り減らし、生血をば吸ひ取つた。殘忍なことに、體全體からでなく、部分的にである。そして、私から、力と幸福とを奪つてしまつた。いま、私は、體のどの部分よりも疲勞しきつてゐる。そして、弱くなつてゐる。もう重いものを持ち上げる力さへなくなつてしまへば、徒らに、かうして間斷なく震へてゐるばかりだ……」と叫んだ。

腦や、左手は、たとへ右手がかう言つてもそれをば、ほんとうとは信じなかつた。神經がつゞき、筋肉が連絡してゐるかぎり、もし右手の言ふことがほんたうだつたら、そのやうな苦痛が自分達にも分りさうなものだ。右手は、自からの苦痛を誇張してゐるのだ。かう彼等は思つてゐた。そして、左手は、其後も樂をして、右手が働いてゐる時に大抵の

場合は遊んでゐたし、腦は、右手にも、また左手にも關係なしに、勝手なことを空想し、享樂してゐたのであつた。

この世界に、冬が來た時に、人間の身にも一樣に寒氣が迫つたのである。街頭には、勞働者が太陽の上るのを待ちながら戰慄してゐた。彼等は、寒く、そして、飢えてゐた。この時、Kの右手は、やはり、彼等と同じやうに痛んでゐた。それは、街頭の寒風の中へ彼等がむき出しになつてゐるやうに、右手の神經が、肉の外部に露出してゐる如く、寒さが刺し、浸みたからであつた。ズキン、ズキンと細かに、刃物で神經を刻むやうであつた。

右手は、寒氣に對してすら、反抗するだけの力がなかつた。右手は、これ程までになるまでに、いくたびか苦痛を腦に訴へたらう。また左手に訴へたらう……。その時分、彼等は、どんな態度を取つたであらうか。

「そんなに、言ふものでない。世間には、右手のない、體も存在しない譯ではない。もし、お前がいよ〳〵駄目になつたらその時は、いくらも仕方があるであらう。まづ、口に働いてもらふのだ。いまお前のしてゐる仕事を他の誰かに筆記してもらふのだ。その方が、却つて能率が上るかも知れない。所詮、生産の問題であるから、必ずしも自身内の組織だけでしなければならぬといふ理由がない。いはゞ國家と同樣に、國際的にやつてもいゝ譯なのだ……」と、腦は嘲笑する如く答へた。すると、傍から、

「さうすれば、僕達で、右手のやつたゞけのことを引受けよう。はじめは未熟練で思つた程に生産はできないかも知れないが、そのうちには、不自由がなくなつてしまふだらう……」と、左手が言つた。

かうして、彼等は、あまり左手には同情しなかつたのである。左手は、隨便すべく右手を擲りつゞけたこともあつた。そして、腦は右手が紙の上で跪いて、痛んでゐる際に、追擊的に仕事を命じた。個々體の生活が、殆んど右手によつて支へられてゐるといふことを、彼等は知らないものゝ如くであつた。

もう、右手は、起たない。そして、文筆業者Kの體は、破滅に近づいた。彼は、腦や、左手の言つたことや、さゝやいたことが、今となつて、何の頼りにもならなかつたことを感じた。他の部分は休息してゐて、一部分だけしか働かない不自然な生活が、この社會にあつても、人類にあつても、畢竟、永續されるものでないことを事實に於て知つたのである。彼は考へた。この社會に於ては、勞働階級は更生する。けれど、智識階級は、ちやうど自分の右手のやうに亡びて行くのであらうと。たとへ、これまで社會の中堅をなして來たとはいへ、そして、それと同時に、これまでの社會全體が駄目になつてしまふのだらうとも思つた。

Kは、しばらく、この働いて、働いて、來た、痛んだ右手を抱いて、この後、どういふやうにしたらいゝだらうかと考へた。

「職業を換へて見るんだね。文筆なんかといふことを止めてしまふんだ。こんどは、體を全的に動かすやうな仕事を撰んだらいゝにちがひない」と、ある人は、Kに向つて注意をしてくれた。しかし、智識階級に生れた自分が、そんなことができるだらうか。たとへば曲つて、錆びた釘が、何か他の役に立つだらうか？せめて、そのまゝで、ぢつとしてゐる分には、また、使ひ途がないこともないと思はれたのだ。

「社會が、人間をこんな鑄型に容れてしまつたことを知らないのか」と、かうKは、其男に、答へた。

「それは分つてゐるさ。しかし、時勢だ。さうするより仕樣がないぢやないかね」

「それができる位なら、何もかうして社會をば呪つてはゐないのさ」

「まだ、君は、年が若いのだよ」

「若くても、もう廢人なんだ！」

其男は、それ以上言ふ必要がないといはぬばかりに、暗い顔をして默つてゐた。

Kの眼には、この時、銀行で、終日札ばかり勘定してゐる、頭髮を奇麗に二分した、色の白い男の顔が浮んだ。運轉台に立つて、片足で鈴を鳴らしながら、片手でブレーキを卷いたり、解いたりしてゐる、兩脚の不格好な男の姿が浮んだ。さうかと思ふと、ビルヂングの內で、多くの女や、男が、靴で、下駄で、汚したり踏んだりしてゐる化粧煉瓦の床上を跪付きながら、一枚、一枚、磨いてゐる哀れな女の姿が浮んだ。そこには、機械になつた、自由といふものを奪はれた、人間がうよ〳〵としてゐる。そして、死ぬまで、彼等は、危險な齒車に取付いて離れまいとする。もし離れたら最後、飢へて死なければならない。どの途死ぬものであつたら、明日を期待されるやうな狀態に於て生きてゐたいと希つてゐる。Kも、やはり、その一人に他ならなかつた。

彼は、スポイトでインキを萬年筆にいれるかはりに、釘箱から、錆びた小さい釘や、打れた釘の頭などを探がして來て管の中に詰込んだ。また、ある時は、往來から小砂利を拾つて來て、それを釘と詰換へて見たりした。疲勞した手頭には、重いもの程、動かしいゝといふ原理によつてゞある。そして、彼は、ペン先を一度毎にインキの壜に浸して充分インキを含せながら字を書いたのであつた。

棚の隅に、置き忘れてあつた、また、曾て顧みられなかつた程の釘屑が、彼の生活にとつて、可なり重要な役割を持つたといふことも、この、赤錆のした鐵片が、彼の手の神經に微妙な關係があつたといふことも、また、つい昨日までは、靑空の下の地面で、日の光を浴びて土中に埋れながら光つてゐた砂が、いま萬年筆の管の中で、さながらラヂウムのやうに、文明の中毒から、廢物となつた哀れな人間に、一種の功德を施しつゝあるといふことを考へると神秘的でもあり、實に痛快事であつたのであつた。

Kは、かうして、苦しみながら、いまゝで從事してきた職業をつゞけてゐた。さうするより生きて行く途がなかつたからである。

「どうか、私の痛い筋を拔き取つて下さい」と、右手は、頻りに訴へるやうになつた。

頭は、そのことについて默つて考へた。左手は、いよ〳〵困つたことになつたと思つた。そして、それからは、何かにつけ右手を慰はつて、自分が右手の代りをするやうにつとめたけれど、やはり右手は、痛みながら、絕えず震へてゐるやうな狀態だつたけれど、左手のされないやうなことをしてゐた。

「どうか、僕のできることをさしてもらひたい。そして、君は、なるたけ休息してゐたらいゝ。」と左手は、言ふやうに言つた。

しかし、右手は、覺悟したのである。

「最後には、自分の疲れきつて、役に立たなくなつた、病める筋を拔き取つてもらはう。さうすれば、もう、その時から痛まないのだ。永久に、自分は、働かなくて濟むやうになつてしまふのだ……」

Kは、右手が、かう獨語するのを聞くたびに氣味惡く感じた。いつたい右手といふやつは何といふ奇怪な姿だらう？臂から上半分だけは、不自然に太くなつて、ペンを支へる中指が、いつしか自分の出した力のために縊れてしまつた。この腕一本だけを體から切り離したらたしかにこの手は畸形な一個の存在である。しかしこの醜い手にも曾て一度は若い時代があつた。その時分には、色は桃色で、皮膚は滑らかで、肉が柔らかであつて、すんなりとしてゐた。小學校の教室で、先生の質問に答へるたびに、その手は、健やかに、希望に輝いて高らかに上つたものだ。また、春の日、道端で柳の枝が新綠を萌した時分、それを捕へようとして、この右手は、空に向つて、躍り上つたことがある。同じ手

が、いまは、重く、重く、痛んで机の上に投げ出された儘の物體の如く、動かうともしなければ、容易に上りもしないのである。

小石や、釘が、手の神經と宿命的な關係があつた如く、蜜蜂の針が、關係のあることを彼は聞いた。この可憐な、常に花から花へと探ねて飛び廻つてゐる生物が、一人の痼疾患者の手に關係のあるといふことは、想像の他でなければならなかつた。とはいふものゝ、これまで發見された人間の病氣を治療する藥品が大抵植物の根とか、莖とか、もしくは、礦石などであることを知るとこの小さい昆蟲の持つてゐる自己防禦の武器である針に含まれてゐる毒が、偶然、萬年筆病の藥りになることもあり得ないことではなかつた。彼はこゝまで考へると、人間の生活といふものは、單に自分達が造つた制度や、組織によつてのみ幸福が來たされるものでなく、多くは大自然の神秘な、未知な調和と關係することによつて保たれてゐるのだといふのを悟らざるを得なかつた。

Kは、養蜂家のBを知つてゐる。ある日、彼を訪ねて、一本の棒のやうな、右手を卓の上へ投げ出しながら語つた。

「この手がだるくて、痛くて、かなはないのだよ」

「酒を飲んだらどうだね、血のまはりがよくはならないかね」

「入浴が一番いゝのさ」

「なる程、あたゝまると具合がいゝんだな。そこだけが、衰へてくるといふ理窟なのかい」と、態度さうに見える彼は、さうしたこともあり得るものかと疑ふやうな目付をして、前に置かれたKの石膏のやうな右手を見てゐた。

「それで、お願があるのだ。蜜蜂の針に含まれてゐる毒が、この病氣に効くといふ話だ。毎日、一疋でいゝのだから、僕の手に刺さしてはくれまいかね」

Kは、かう言つて、相手の角張つた、髭だらけの顏を見つめてゐた。すると、Bは、冷やかな笑ひを口許に浮べながら、

「毎日一疋でいゝと言ふ位だから、君もまんさらそのことを知つてゐないのでもないだらうが、蜂は、一度針で敵を刺すと、その蜂は、死んでしまふのだよ。一日や、二日ならばいゝけれど、毎日、君のために貴重な蜂の命を一つ宛奪つてしまつたら、一つの巣が直に絕えてしまふぢやないか。だが君、毒が効く譯でない、刺戟がいゝのだらう。按摩に針を打つてもらひたまへ！」と、Bは、最後に敎へるやうな口調で言つた。

一疋の蜂が、たゞ一度その敵を刺すと自分の命がなくなるのだと聞いて、あまりに、事實の眞劍なのに打たれた。Kは、その上Bに向つて賴まなかつた。

ふと眼をやると、靑い、澄んだ空の色であつた。空の下の圃には、いろ〱の花が美しく咲き亂れてゐた。そして、どこからともなく、花の香りが漂つてゐた。この時、Kは、異樣のうなり音を聞いたのである。

「あの音は、何だらう？」

Bは、赤味を帶びた顏に微笑をたゝへて、

「あれは、蜂が、巣の換氣作業をやつてゐるのだよ。なか〱勤勉で、秩序的なものさ」と、言つた。

Kは、これを聞くと、さらに奇怪な想像に耽らせられたのである。あの群蜂の中へ、あの渦卷き憤る蜂の中へ、この俺のだるい右手を差しいれたら、一時に、幾十、幾百の蜂が集つて來て刺すことだらうか？　さうしたら、その瞬間からどんなに毒がまはつて、たちまち右手の倦怠と鈍痛と疲勞とが癒されてしまふのだ……Kは、いつしか、Bの許を辭したのであつた。けれど、步きながら、Kは、この奇怪にして、痛快な空想を幾たびも恍惚として描いたのである。

そして耳から、無數の蜂の金屬性のうなり音を拭ひ去ることができなかつた。

按摩の針に、電氣マッサージに、苦痛を和らげようとしてゐた時に、かの大震火災が、この都會を見舞つたのである。

彼は、右手の痛みを忘れて、一夜のうちに焦土となつてしまつた、熱灰の中を衆人と共に彷徨してゐた。髮や、皮膚や、豐滿な肉體が燒けつくしてしまつた後まで、痼疾の絡まつた右手だけが、瘤のやうに黑くなつて殘つてゐるのと同じく、積み重ねられた物資や、また、それを飾つてゐた、華麗だつた街々の商店などが烏有に歸してしまつた跡に、まだどこのかビルヂングの鐵筋だけが、曲りくねつて、ちやうど右手を高く空にさし擧げてゐるやうな形で突立つてゐた。

荒寥とした廢墟に渦卷いてゐる、腥臭い風と、熱灰から立ち上つて、呼吸を塞がうとする蒸れとが、いつの間にか、狂人の笑ひのやうに、太陽が何物にも反響なしに輝いてゐた空に、雷を呼び起したかと思ふ間に、だん／＼その雷の音が、烈しく近くなつたのであつた。

「雷だ」

「雨が降りさうな氣はひもない。あんなに、空は晴れてゐるぢやないか？　蛸坊主のやうな、厭な雲が澤山出てはゐるが……」

「ダイナマイトで、燒け殘つた、危かしい建物を爆破してゐるんだらう……」

「棺に釘を打ち込むひゞきのやうに、あの建物を破壞する音は、ほんたうに堪らない滅入るやうな氣がするな―」

多くの人々は、空を仰ぎながら、Kの前を過ぎて行つた。Kに、いまゝで氣付かなかつたが、注意すると、歩るいた

ために右手は、重く、重く垂れて、鈍痛が、さながら鐵棒のやうに、中指の先から、肩のあたりまで内部を、硬直に貫き通つてゐた。この時、彼は、發作的に、右手の手頸を曲げて、空中に、あちらの曲つた鐵筋の○れた姿を影繪の如く眞似て見たのである。

雷は、だん〳〵近づいて來た。自然が、電氣マッサージを廢墟の中で、縺れた右手にかけてゐるやうに、青白い怪火は、蛇の舌の如く、空に突き立つた鐵筋を掠めてゐる。

「こゝへも！　こゝへも！」と、Kは、熱灰の中に立つて、自分の右手を、できるだけ高く空に差しのべてゐた。

資本主義は、まだ斷末魔でなかつた。嘗て物質文明で華かだつた都會は、やがて以前の如く復活した。しかし、犧牲者Kの肉體は、二たび生れ出た當時のやうに、若返へることはなかつた。右の手は、ます〳〵惡くなつていくばかりだつた。

「どうか、私の内部で、燃えつくやうに、熱して、痛んでゐる筋を拔き取つて下さい。そして、私に永久の休息を與へて下さい」と、右の手は、訴へた。

曾て、右の手にたいして同情をしなかつたばかりか、これを酷使した、腦や、左手は、いまは右手の切なる希望に對して、何うすることもできなかつた。僅かに、理性が、それを抑へようとしたけれど、右手は、だん〳〵苦痛に堪へられなくなつて、日夜、このことを叫ぶやうになつた。

頭と手の分裂に、理性と感情の衝突に、體全體の反目と鬪爭のために、Kは、氣狂ひのやうになつてしまつた。

彼は、ある日、重くて、痛む右手に刺戟を與へたいばかりに、飼つてゐる猫の鋭い牙で、嚙み付かせて見たいといふ衝動を感じた。哀れな動物を縛つて、無理に室内を引摺り廻はして怒らせて、右手に嚙みつかせようとした。しかし、

そのことは、成功しなかつた。動物は、彼を怖れて、二たび決して、近づいてこなかつたからである。モヒ注射をしてもらひに、醫者の處へ、三度目に行つた時であつた。この注射の方が怖しい。やがて、この劇藥は、腦も、手も、足も、體一切を殺してしまふだらう。それよりは、まだ右手の筋を拔き取つた方がいゝと醫者が言つた。

Kは、このことを最も事件に關係の深い、腦や、左手に諜つた。彼等は、流石に、自からの死を欲しなかつた。

「いや、私達は、あまり右手を酷使し過ぎて惡かつたといふことを、今に至つて悟つてゐる。これから後は、いまゝで右手がしたゞけのことを私達がやるから、私達の生活までも奪つてしまふモヒ注射を止めてもらひたい」と、言つた。

Kは、永久に、右手を失はなければならぬことを寂しく感じた。右手を失つてしまへば、自分は、この社會にあつて、一つの機械として、これまでの如く働くことができなくなるだらう。その時はどうしたらいゝのか。左手が、果して自負するやうに、それ程役に立つだらうか？

彼が、手術臺に上つて、筋を拔いてしまふまでには、まだ空想する時間が可なりあつた。

動力によつて廻轉してゐる機械を止ようと思へば、止めることができたものは右の手であつた。目標を的つて確實に射撃したものは右の手であつた。劍を握ることも、ピストルを摑むことも、なし得たものは右の手であつた。炎天の下で鍬を採り、鶴嘴を振ひ、鎌で刈る、それ等のことをなし得たものも、右の手であつた。そして、自分は、この右の手をどんな仕事のために使つたであらう。實際の生産に與らなかつたかはりに、また、戰爭のためにも使はなかつた。ただ生活するために文字を書くためであつた。そして、何を自分は書いたらう？　智識階級のために、ブチブルジョアのために、いま、その智識階級は滅びつゝあるのだ。

水のやうに冴えた、青い空が、病院の窓の外に垂れ懸つてゐた。暖かな日であつた。次の頭へ投げられた灰色の樹目の

やうに、渡鳥の影が、窓の硝子の上に映つて消えた。

いよいよKの右手の筋を拔く時が來たのだ。

彼は、なぜこの手で、たゞ一度でもダイナマイトを握ることがなかつたかと、後悔したのである。しかし、すべてが希望すべく遲い。催睡藥の蠍が、すでに彼の鼻先にあつたではないか？

彼は、青い蠍を、ぢつと見詰てゐた。

ビルディングの一番下の室で、黑い洋服を着て、頭髮を奇麗に分けた男が、一生懸命で貳拾圓札を幾度も、幾度も間違ひのないように數へ直してゐる。海綿に指頭を濕しながら、一種の强迫觀念に驅られて、またはじめから數へ直してゐる。

たちまちにして、そこは汽船のデツキのやうな處であつた。青白い顏をした、痩せた別の男が、白壁のやうな板面に、無格好な右手の拳を翳しながら、いまにも何かに掴みかゝらうとしてゐる、黑い、その影を映じてゐた。

「君は、誰だ？」

「僕は無線電信の技師だ。手の幽靈を見てくれ」

Kは、聲を立てやうとした。しかし、聲が出せなかつた。彼は、一生懸命に其處から逃げ出した。ふと傍を振向くと、ビルディングの下の室で、まだ先刻の黑い洋服の男が、札を數へてゐる。

彼は、もう氣味惡さに堪へられなかつた。建物と建物の間を拔けて、もつと明るい場處へと求めながら驅けたのであつた。

橋の上まで來ると、水の上には、幾つも荷を積んだ船が動きつゝあつた。地上を離れて、そこには、別種の生活があ

るやうにさへ憧れたのであるが、それが空想にすぎないことは分りきつてゐるのだ。

まだ、十二三にもなつたばかりの少女であつた。欄干に倚りかゝつてゐた。その子供の顏を見ると老婆のやうに小皺さへ寄つてゐる。頭髮は、赤く薄くて、腰は曲つてゐるやうにさへ見られた。そして、兩方の肩のところに瘤の如く、肉が隆起してゐた。Kは、奇妙な、また怖しいものを發見したと思ひながら、彼女の方に近づいた。

「お前は、生れつきこんなだつたのか？」

「六つ、七つから他家へ子守にやらされて、重い子供を負つたからです……」

彼は、これを聞くと、無意識の裡に、自分の痛む右手を撫でやうとした。

この時、醫者は、ピンセットで彼の腕から抜き出した、灰色に光る筋を摘み上げるところであつた。



果樹

水上瀧太郎

相原新吉夫婦が玉窓寺の離家を借りて入つたのは九月の末だつた。殘暑の酷しい年で、寺の境内は汗をかいたやうな晝日中、いまだに油蟬の聲を聞いた。

ふたりは、それ迄は飯倉の烟草屋の二階に、一緒になつて間もなくの、あんまり親しくするのも羞しいやうな他人行儀の失せ切れない、心持でくらして居た。ひとの家の室借をして居ると、何かにつけて心づかひが多く、その爲めに夫婦の間に夫は妻に對し、妻は夫に對して、あたりまへ以上の遠慮があつた。

田舍の商業學校を卒業して、暫く役場に勤めて居たけれど、將來の望も無く、もともとあととりの身の上では無かつたから、東京に出て運をためして見ようといふ氣になつて、新吉が故鄕を出てから十二年になる。小學校では級長をつとめた事もあるし、商業學校でも何時も平均點は甲だつたから、若しも學資が豐かならば、大學迄行き度いのだつたが、それは許されない望だつた。鄕里の先輩で、相當の地位の役人をして居るのに口をきいて貰つて、現在勤めて居る銀行の最下級の行員とな

つて、夜は神田の私立大學に通つた。東京に行きさへすれば、うで次第でどしどし偉くなれるやうに考へたり、級長だつたといふ丈の事で人に勝れて居るやうに思ひ込んで居たのなどは、夢よりもはかなく消えてしまつた。いゝ學校と惡い學校の區別も無く、大學といふ名前の魅力に誘はれて、大したものゝやうに想像して居たところも、いたつて無責任なものであつた。三年間の夜學を卒へて免狀を貰つた時も、これで明日から苦しいおもひをしず、銀行がひけさへすれば樂々と手足が延ばせるといふ安心があつたばかりだ。別に學力が增したとも考へられなかつた。それでも銀行の方は人一倍眞面目につとめ、おとなしい正直な事務員として上役にも目をかけられ、毎年三圓五圓と昇給して、僅かながらも貯金も出來た。いつたいに辛抱のいゝ方でその間六年間烟草屋の二階に居た。

朝は早く、夕方はきちんと歸り、夜遊などは一度もした事がなかつた。月々の雜誌を二三冊とつて、始めから終まで丹念に讀むのが樂みのひとつで、日曜祭日にも郊外を散歩する位がせきのやまだつた。烟草屋のお婆さんは、いかに新吉が眞面目で勉强家で身持が正しいかを隣近所に吹聽して廻つた。お婆さんには息子が一人あるのだが、或保險會社の台灣支部に勤めて居た。孫の顏も見られない寂しさから、新吉を我子の樣に可愛がつた。新吉に妻を世話したのもお婆さんだつた。

おときはお婆さんの念佛友達の、近所の菓子屋の隱居の遠緣の者の娘だつた。うちは日本橋の裏通のちいさな下駄屋で、女學校には三年迄通つたが、生意氣になつては困るといふ兩親の意見で、學校をやめて大名華族の邸に行儀見習にやられた。十六の年から二十迄つとめたが、病氣をして宿に下つてからずるずるになつて、母親の手助をしてゐた。菓子屋の隱居が何かのついでにおときの話をした時、烟草屋のお婆さんは直に新吉と結びつけて考へた。最初のうちこそ未だ早いとか、二人になつては暮しが樂でないとかうじ〳〵して居たが、お婆さんが借りて來て見せた寫眞はまんざら

で無く、みす〳〵斷るのは惜い氣がした。どうせ一度は貰ふものならと云ふ氣になつて、案外手取早く話はきまつてしまつた。それを機會に一軒うちを持ち度いとも考へたが、先方でも當分は二階借で結構だといふので、その儘烟草屋の二階の六疊に、不自由ながらも樂しい日を送る事になつた。それが今年の春の事だつた。

最初のうちはお婆さんも、自分のうちに嫁が來たやうなもの珍しい喜びを感じたが、それは長くは續かなかつた。二階の二人が自分を邪魔にして居るといふ疑念に煩はされるやうになつた。

「うちの相原さんも先の頃とは變りましたよ。」

などと近所の者にも告口するやうになつた。

ほんとに新吉の生活も、以前とは少しは變つた。たまには二人で活動寫眞を見に行つたり、相原の銀行の歸りをおときが途中で待うけて、何處かで御飯を食べて來る事もあつた。それがいち〳〵お婆さんの氣に入らなかつた。

二階の二人も、室借の窮屈に惱んでゐた。殊に新吉は、六年間お婆さんの親切には心から感謝して居たのに、俄にいやな事ばかり目に立つて、しみ〴〵他人の家の狹さを思ひ知つた。

それでも長い間世話になり、もと〳〵おときと一緒になつたのもお婆さんのおかげなのだから、結婚して間も無く出て行くのは心がとがめていひ出せなかつた。その點にかけてはおときの方は、さほど世話になつたと云ふ考も深くは無いので、どんな裏長屋でもいゝから一軒構へ度いと年中せがんで居た。せがまれると、おときを喜ばせ度い心が強くなつて、新吉もいつそ思ひ切つてさうしやうかとも思ふのだが、生來のおとなしさと、人一倍義理や恩義には堅い方なので、愚圖々々に一日々々延びて居た。

ところが幸ひな事に、台灣に行つて居たお婆さんの息子が突然本店詰になつて引上て來る事になつた。いづれは別に

一軒構へる事になるかも知れないが、當分の間お婆さんと一緒に住むといふ事で、新吉夫婦はお婆さんのいやな顔を見ずに引越す事が出來るやうになつた。

いざ探すとなると、貸家も思ふやうには見つからなかつた。新聞の廣告欄を見たり、周旋屋の前に貼出てある掲示に足をとゞめたり、日曜には二人であても無く山の手を歩いたりしたが、結局銀行の同僚が、白金の寺の離家があいて居ると教へてくれたので、夫婦で行つて見てきめてしまつた。

御寺は高台の崖に臨んだところにあつた。古川をさしはさむ町々を見下し、雜木の多い麻布台と向あつて居た。たいして大きな寺では無かつたが、庭は廣く、貸家の目的で建てた離家は、六疊と四疊半と三疊といふさゝやかなもので、普請も粗末だつたが、日當も風通もよく、樹木や草花の夥しく植てあるのを我ものにして、夫婦二人きりの住居には此上も無く思はれた。今迄居た飯倉の烟草屋の二階では、障子をあけると目の下の神谷町から西久保へかけて亞鉛葺の屋根の照返しが強く、息の詰るおもひをしたのに比べると、籠から逃げた小鳥の氣持だつた。他人まぜずの朝夕を迎へて、二人はほんとの夫婦の情愛を始めて知つた。

少しづつ所帶道具を買ふ樂みも深かつた。三田の縁日の晩に、兼々欲いと思つて居た長火鉢を買つた時は、新吉もおときもすつかり興奮して、歸途はお互に話す聲も高くなり、人通の少ないところでは固く手を握合つた。双方から感謝し度い感激で胸がいつぱいだつた。次の日、新吉が銀行から歸ると、留守の間に拭いて居た長火鉢に鐵瓶をかけて、おときは赤坊に御湯をつかはせる母親のやうに、殆んど抱きかゝへる形で、大事に大事に布巾をかけて居た。

二人にとつての苦手は、お寺の梵妻のしつつこい程口數の多い事だつた。六十近い和尚と、先夫の子だといふ十六七の娘と、たつた一人の弟子坊主を意のまゝに動かして居るしつかり者で、自分の目から見れば世間も無い夫婦を、指導

してやらうとする心持が露骨だつた。未だよそゆきらしい夫婦仲を、先輩が後輩にのぞむ態度で面白がつて居た。

無口で羞しがりのおときは、まるつきり威壓されて、梵妻と顏を合はせることを避けやう避けやうと努めてゐた。晝間新吉の留守に、裏の井戸端で洗濯してゐる時などは、向も退屈しきつて居るので、下駄をつつかけて來ては側でおしやべりをして居た。和尚は門番の寺男と年中碁を打つて居るし、娘は女學校に通ひ、弟子坊主も四角い帽子をかぶつて宗教大學に通つて居るので、梵妻は話相手に飢ゑて居た。諸式が高くなつてお寺の經濟の苦しい事、和尚がぼけてしまつて賴りにならない事、此の前離家を借て居た小學教員夫婦の惡口などを繰返してきかされるのはまだしもだつたが、新吉夫婦にかゝはる内輪の事を、根堀葉堀訊かれるのには、おときもよはり切つて居た。何時、どういふ風にしていつしよになつたかとか、新吉の月々の收入はどの位だとか、立入つた質問を受けると、おときは顏をあかくしてうなだれる外に活路を見出せなかつた。

「あたしお寺の奥さんにはほんとに困つてしまふのよ。あなたの月給はいくらだなんて訊くんですもの。」

新吉が歸つて來ると、救はれたやうに氣强くなつて、おときは晝間梵妻にしつつこく惱まされる事を訴へるのであつた。つい言葉に力が入り過ぎると、御寺の離家に住むのを厭ふやうな口ぶりさへ漏らした。

「そりやあひどいな。だけど其位の事は爲方がないよ。こんな借家は一寸ないぜ。僕は飯倉に居た時に比べると、頭腦はやすまるし食慾は旺盛になるし、めきめき健康がよくなつたやうに思ふ。」

「そりやあさうですけどね、だつてあんまりなんですもの。」

さうは云ふものゝ、新吉と差向で晩飯を喰べ、日がかげると俄かに涼しくなる頃の緣側で、蟲の聲の外には何の物音もしない廣い庭から、崖の下の町に灯のともる景色を見て居ると、湯治場にでも行つたやうなゆたかな心持になる。

「銀行の連中で、こんな廣い庭を持つてる人なんかありやあしない。先づ頭取と支配人丈だらう。僕は田舍に育つて、子供の時分植物や昆蟲の興味を先生に吹き込まれたが、久しぶりでかうしたところに住むと、樹や草を見るだけでも氣が清々する。それにしても飯倉はひどかつたからなあ。」

烟草屋の二階の窓に据えて置いた朝顔の鉢は、引越の時に持つて來て椽先に置いたが、今では花もすがれてしまつた。はかない其の一鉢さへ、亞鉛屋根の景色を背景にしては、毎朝開く花の色に相當深い愛着を持つたのであつた。

「あたしは騷々しい町の中で生れたので、木の名なんか何も知らないんですよ。」

「だつて邸に居た時は、廣い庭があつたらう。」

「そりやあ何千坪つていふんですから、廣いには廣いんですけれど、たゞ立派な御庭だと思つただけでしたわ。よく御庭掃除のぢいやさんが、あの松一本でも千圓の値うちがあるなんて云つてましたけれど。」

「此の御寺には珍しくいろんな樹がある。僕がひとつひとつ教へてやらうかな。」

「えゝ教へて頂だい。」

二人は椽側に並んで腰かけて、たそがれた庭に向つて居た。

「あの門を入ると直ぐ右手の樹は知つてるだらう。」

「あれなら知つてるわ。ぎんなんの樹でせう。」

「そんなら本堂の前のは。」

「さるすべり。」

「なかなか知つてるぢやあないか。それではあすこに見える一番背の高いのは。」

「あゝ。あの澤山鳥の來る樹ですね。わからないわ。」

「榎さ。」

すつかり夜になつて、こほろぎの聲のしげくなる迄、あきずに植物や蟲や鳥の話をした。

新吉は、殆んど何も知らないと云つてもいいおときに對して、自分の知識の豐富なのが嬉しかつた。おときにしても、何を訊いても知つて居る新吉が、たよりがあつて嬉しかつた。

それがきつかけになつて、新吉はいろいろの樹や草や鳥や蟲の名を、おときに敎へるのが樂みのひとつになつた。寺の地面うちだけでも、松杉楓銀杏などの外に、椎櫟榎椋橡朴槐などの大木にまじつて、櫻梅桃李ゆすらうめ栗枇杷柿などの、季節々々の花樹や果樹があつた。草花には萩桔梗菊芒雞頭などの秋のものゝ外に西洋種も多く、今はサルビヤが眞紅に咲きほこつて居た。

椋の高い梢には鴉が群つて來た。銀杏のてつぺんで百舌の高啼く日もあつた。竹むらにからまる烏瓜をつつきに來る鵯、緣側の上迄寄つて來る雀、庭木の細かい枝をくぐる鶲や四十雀の姿も目に止つた。

おときは新吉の指さす樹の枝に、可愛らしい小鳥の姿を見つけた時などは、聲をあげて喜んだ。さういふ事に喜ぶ自分といふものを始めて知つた。自分が喜べば、夫が滿足する事も一層嬉しかつた。全く今迄知らなかつた興味が、野原にも藪の中にもある事がわかつた。

けれどもおときが弱つたのは蟲の多い事だつた。蚊帳の用意が無かつたので、十月のなかば迄難澁した。蚊ばかりではない。名も知らない蟲が、あかりを慕つて來る。蝶々や蛾の類に屬するもの、うんか、かまきり、金ぶんぶんなどはおときの顏にぶつかつたり、髮にとまる事もあつた。仰山な聲を立て顏色を變て逃廻つたが、新吉は平氣で指でつまん

で緣側から捨てた。彼は決して殺さなかつた。

「蟲なんてそんなに怖いものぢやあない。よく見てごらん。みんな素晴しく巧妙に出來て居る。僕なんか、可愛らしくて堪らないな。小鳥だの金魚だの、あゝいふものを可愛がるのと同じやうに、こんなちいさな蟲も可愛らしいと思ふ。」

さう云つて、吹けば飛ぶやうな蟲を手の平に乘せて、長い間見て居る事もあつた。羽を微妙に震はせたり、脚を擦合せたり、目玉をくるくる動かして居るのを、新吉はおときにも見せて面白がつた。

「いくらあなただつて、かまきりは憎らしいでしよ。」

「あいつはいい奴だよ。大きな時代遲れの武器を持つて威張つて居るくせに、何處かにひようきんなところがある。蟲でいやなものは先づないなあ。」

「あらいやだ。あたし蛇を見るとぞつとするわ。」

「蛇は綺麗だ。地面を火の波のやうにうねつて行くところなんか、人間のダンスなんかより餘程いいや。」

「あなたつて變な方ねえ。」

おときは全く理解出來ないやうに云つたが、心の中では夫の何事にも細かい觀察を忘れないで、面白味を見出すのは廣い心の故だと思つて感心した。

「相原は不思議なんで御座いますよ。植木だの草花が好きなのはわかつてゐますけれど、ちいさな蟲まで可愛がつて決して殺すやうな事は致しませんの。」

何時も向ふから話かけられて、うけこたへばかりして居るおときもひそかに自分の夫をほこる心持をまじへて梵妻に話した。

「蝶々や蜻蛉ならよござんすけれど、蛇だの百足だの金ぶんぶん迄お友達かなんかのやうに思つて居るんですもの。」

「まあ蛇ですつて。いやだいやだ。あたしなんか聞いた丈でもぞつとしますよ。」

梵妻はうすい眉毛を寄せて、おびえた表情をして見せた。それがおときに、ひどく勝ほこつた氣持を與へた。

「いたゞくものにしましても、お魚や肉よりも野菜の方が好きですし、お菓子なんぞには手も出しませんが、果物は大好物でしてねえ、自分は山家育だから、なんでも土に近いものが好きだなんて申して居りますの。」

新吉にきいて始めて知つた樹や草の名前を口にしたり、指して示す時は、すくなからず得意だつた。

十月もなかばを過ると、落葉の早い梧桐朴櫻などは殆んど散盡し、外の樹木も枝がうすくなつて、透いて見える秋の空がくつきりと高かつた。

夫婦が借て居る離室の前の、黄ばみ始めた雜木にまじつて、美事な柿の木が一本あつた。鈍重な感じのする大きな厚い葉に、夏中は日光が鋭く照返したが、今はその葉も艶と光を失つて、黄色く乾いたのは力無く土に落ち始めた。そのかはり葉かげにかくれて居た柿の實は色づいて、枝は重さを支へ兼るやうに撓んで來た。

「あの柿の實が毎日赤くなつて行くのを樂みにしてゐましてねえ。朝雨戸をあけると、きつと縁側に立つて見て居りますの。」

故郷の家の背戸によく生る柿の木があつたので、目の前に柿の實の赤らんで行くのを見て居ると、子供の頃の事迄思ひ出すと云つて、新吉は朝日に光る梢をなつかしさうに仰ぎ見て居た。おときはその柿の木を指さして、此の寺内に果樹の多い事が、如何に自分達夫婦の心を樂しくさせるかを梵妻に話した。

「へえゝ、相原さんはそんなにも樹木が御好きなんですか。それでもあの柿は見かけばかりで澁柿なんですよ。」

梵妻も、西日にてらてら光つて居る柿の實の鈴生りに生つて居る梢を見上た。

「まあ、あんなに大きな美事な柿が澁いんですか。」

あれ程赤く熟したのが澁いとは全く思ひもかけなかつたので、おときは何のわだかまりもなく目をみはつた。

「えゝほんとに見かけ倒しなんですよ。澁いの澁くないのつて。」

「おやおや、それぢやあ喰べられないのですか。」

「喰べられるもんですかね。」

梵妻は現在口の中が澁くて堪らなさうに、大きな先の太い鼻を中心にして顔中をしかめた。その様子が眞に迫つて居ると云つて、おときは背中を車海老のやうにして笑つた。

その日新吉が歸つて來て、差向で樂しい食事をした後で、何時もの通り縁側に蒲團を並べて茶を飲みながら、おときは庭前の柿が澁柿だといふ事を傳へた

「さうかしら。僕はさうは思はなかつたがなあ。」

新吉は腑に落ちない様子で、暮殘る空に柿の實のつぶつぶ數へられるのを見上て、首を傾けた。

「だつて今日の御齋、お寺の奥さんがさう云つてゐましたもの。あの人つたら、こんな顔をして、ほんとにをかしかつたわ。」

おときは梵妻がして見せた澁い顔を眞似して、自分でをかしくなつて吹出してしまつた。

柿の實は、その葉が黄色く枯れて散れば散る程赤さを増して、晩秋の空に、いかにも日本特有らしい風情を見せて居た。新吉は、それが澁柿だらうとなからうと、何のかゝはりも無く、晴れた日の空の色と、ちつとも歪の無い柿の實の

光と、脱俗した枝ぶりとを愛した。

寺の門の外の往來からも、その梢の赤い實は、土塀を越て見えた。近所の空地に集る子供達の冒險と慾張とのまじつたいたづら本能は、その爲めに刺戟されたものと見えて、眞晝間、ひつそりした寺内の様子をうかゞつて、鼬鼠のやうに注意深い目を四方にくばりながら、竹竿を持つて忍び込んで來た。石を投るもの、竹竿で叩き落さうとするもの、みんなが狡猾な顔つきをして、緊張した手足を迅速に動かして居た。寺の者は氣がつかなかつたが、縁近い日あたりで縫物をして居たおときは、子供達の狼籍をいちはやく認めた。

「そんな事しちやあいけませんよ。」

相手は小學生だとは思つても、それ丈いふのがせいいつぱいだつた。いつてしまつてから、自分の顔のあかくなるのを感じた。不意に聲をかけられたので、子供は一齊にふりかへつて、一時は一寸ためらつたが、おときの氣勢を見て取ると、相手によつて現金に變る子供特有の圖太さで、平氣で又竹竿を振廻した。實際の重量よりも重たい響を立てゝ、眞赤な柿が土に落ちる。

「かまふもんかい。」

「やれやれ。」

流石に聲はひそめながら、お互に唆かしあつて、ばらばら石つぶてを打つ者もあつた。おときは膝の上の縫物を疊に置いて、縁側迄出て行つた。

「およしなさいつたら、叱られますよ。」

一生懸命でもう一度聲をかけたが、何の甲斐も無かつた。子供達の素振には、馬鹿にし切つて居る色が明かだつた。

「あんたがたそんなものとつたつて喰べられやしないのよ。澁柿ですとさ。」

「うそだい、喰べらあ。」

一人の奴は懷に盜んでしまつてあつたのを取出して、いきなりがぶりとかじりついた。

おときは自分の意氣地のないのをなさけなく思ひながら、途方にくれて、子供達の暴虐に枝をふるはせて居る柿の木を、いたいたしく眺めて居た。相手は大人には違ひ無いが、聲も顏つきも優しい女なので、いたづらつ兒はすつかり呑んでかゝつて居た。咎める人の目の前で平氣で柿を叩き落してやるのが、自分達の勇氣を示す事のやうに痛快に思はれた。何のはゞかりも無く、かけ聲をして、柿の枝をばさばさ打つた。

「こら、何をする。」

突然庫裏の方から、聲を震はせて梵妻が現はれた。手に鍬の柄のやうな堅い棒を持ち、肥つた體を不恰好に波うたせ、血相かへて來た。その勢にすつかり脅えて、子供達は干潟の寄居蟲のやうにあわてゝ逃出した

「鬼婆あ。」

梵妻は何處迄もと追かけて行つたが、子供の方が素早くて、忽ち門の外にちりぢりに散つてしまつた。

「とつたぞ、とつたぞ、柿六つ。」

塀の外でふしをつけてはやした奴があつた。

「とつたぞとつたぞ柿八つ。」

今度は獲物の數をふやして、二三人聲を合せてからかつた。その合唱をしつつこく繰返しながら、子供達は遠くへ逃げて行つてしまつた。

「畜生、育ちの悪いがきつたらありやしない。」

未練らしく往來の方を振かへりふりかへり、せいせい呼吸をはずませて、梵妻は漸く戻つて來た。

「まあこんなに荒して行つてさ。」

柿の木の下に立つて、落散つた枝や葉を忌々しさうに見ながら、ぶつぶつ云つてゐるのが、おときにとつては自分の監督不行屆を叱られて居るやうに感じられた。いつたん部屋の中に入つて、障子もしめてしまはふかと思つた程だつたのが、殊更緣側へ出て、自分の方から聲をかけないでは濟まされなくなつた。

「ほんとにひどいんですよ。いくらあたしがいたづらしてはいけないつて云つてもきかないんですもの。」

「そんなこつてきくもんですかね。今度來たらひつぱたいてやるから。」

何時迄も、寂しくなつた木の梢を見上て、誰にでも當りちらしたい肚の中をあからさまに、きびしい事を云ふのであつた。

「子供つて爲方の無いものですねえ。あたしがそれは澁柿だから、取つたつて食べられやしないつて云つたんですけれど、がりがりかじつて見せたりして。」

おときはいひわけがましく、氣の弱い事を繰返して、心の中ではなさけなく思つた。

新吉が歸つて來ると、待構へて居て、その日の出來事を話した。

「だつて、いかにもあたしが意氣地が無いから柿を盜られたんだつて云ふやうな口ぶりなんですもの。あの梵妻さんも隨分だわ。」

味方を得た嬉しさで、しきりに自分の辯護と、梵妻のどぎつい態度を非難した。ふだんはお寺の奥さんと呼んでゐ

のが、梵妻さんだの梵妻だのと云つた。

「子供は爲方がないなあ、すつかり葉の落盡した骨のやうな枝のさきに、熟し切つたあかい奴の鈴生りになつてゐる景色が秋の風情なんだがなあ。」

あく迄も自分の目を樂しませ、心をなぐさめるものとして、なつかしがつてゐたのだから、子供の狼藉のあとを、わざわざ庭に出て見屆けて來た。

「なあに、それ程の事はないよ。たかゞ五つか六つ落された丈だらう。」

さも安心したらしい樣子で家の中へ引返して來た。

「澁柿なんか少し位とられたつていいぢやありませんかねえ。」

梵妻の態度が何時迄も心に殘つて居て、樂しい食事の間にも、おときは口惜がつて居た。

その頃、おときは始めて自分の體にただならぬ變化の起た事に氣がついた。末の妹の生れる時、産褥で母のあさましく苦むのを見たり、その後もひよわくて年中兩親に心配ばかりかけて居るその子の事を思ふと心配だつた。何といふ事もなく、夫に大きな負擔をおはせてしまつたやうな氣がして、濟まないと思ふと、いひ出し惡くかつた。それでも默つても居られないので、

「あたし、子供が出來たのかと思ふの。濟みませんが……」

と夫の顏色をうかがひながら切出すと新吉は上機嫌で、

「濟みませんとは何の事だい。僕は子供は大好だ。」

と云つてさも面白さうにおときの言葉を笑つた。さうきくと、おときは自分の體内に夫の愛情が形になつて宿つたや

うた氣持がして、俄に我身がいとしくなつた。

「あなたに似て悧巧だといゝわねえ。」

などと云つて、心から樂しみに思ふやうになつた。夜が寒くなつて、たゞさへ人肌の戀しい頃、妻がたゞならぬ體になつたといふ事が、夫婦の仲を一層こまやかにした。

子供達が最初に柿を盜みに來てから四五日しかたゝないのに、二度目の冒險を企てゝ、又忍び込んだ。その時は幸ひに、いつもは裏の墓地で草をむしつて居る門番のぢいやがたまたま見つけて追拂つた。急をきいて馳けつけた梵妻は、又してもおときの耳の痛くなるやうな聲を張上て、いたづらつこを罵つた。自分の心持からも多少神經質になつて居るおときは、それをひどく氣にした。

「あなたみたやうに眺めて樂む氣もないくせに、どうしてあんなに惜いのでせう。澁くて澁くて喰べられないつていふのに。」

たかだか柿を盜みに來る子供のいたづらに、和尚も弟子坊主も娘も寺男も呼集めて、いきり立つ梵妻を、をかしがる丈の餘裕は無く、自分自身が罵られたやうに忌々しがつた。誰も知らないうちに、子供達がみんなとつてしまへばいゝなどと、腹の中では考へて居た。

その日、寺の者は柿の木の下に集つて、しばらく評議して居たが、やがて弟子坊主と寺男は梯子をかついで來て、若い方が學生服のヅボンにシャツといふ姿になつて高い枝に登つた。下では梵妻と娘が莫蓙の四隅を持ち、上からちぎつて落す柿を受けて居た。老僧も監督するやうな形で、懷手をしながら日向に立つて眺めて居た。

おときはかかりあひになるのを愼れて、障子の中で針仕事をしながら、時々隙間からのぞいて見た。餘程たつて、何

かがやがや話しながらみんなの足音が入まじつて庫裏の方へ引上て行つた後で、障子をあけて縁側に出て見たら、無數に赤く日に光つて居たのが、ひとつ殘らず、もぎとられて居た。

銀行から歸つて來た新吉は、寺の門を入ると直に、柿の梢の荒らされたのに氣が付いた。時が來て、熟し切つて土に落たのとは違つて、人間の手が無理にもぎとつた爲めか、一層いたましく見えるのであつた。

「どうしたんだらう、みんな柿をとつちやつたのかしら。」

出迎へたおときの顏を見るや否や、面白くない樣子で訊いた。

「えゝ、又子供達が荒らしに來たものですから、お寺の人が總出でとつてしまつたんです。若い坊さんがてつぺん迄登つて、枝なんか惜氣も無く折つて下に落して居ました。」

いひつけ口をする時の早口で、おときは晝間の光景をつぶさに描寫して見せた。

「澁をぬいて喰べる氣かなあ。これからすつかり葉の落盡した眺めが何よりいゝのだが、惜い事をしてしまつたなあ。」

暮かゝる縁側で、枝の折口の生々しく見える柿の木をいたいたしさうに、未練な事を云つて居た。彼の心には、村中に柿の木が澤山あつて、秋の今頃の美しい故郷の景色が、繪よりも鮮かに映つて來た。

その郷里の家からは、烟草屋の二階に室借をして居た獨身時代にも、時々林檎や柿を寄越してくれたが、今年は初茸と濕地茸を送つて來た。きのこを炊込んだ御飯は、新吉が子供の頃の好物だつたと嫂が代筆した母の言葉を書添へてあつた。

「まあ、あたし初茸御飯なんて始めてゞすわ。どんなでせう。松茸ならおいしいと思ひますけれど。今晩直に炊いて見ませうか。」

粗い竹籠の中からあふれるやうに出て來たのを手にのせて、おときは珍らしさうに見て居た。十一月の始めの、時雨の降つた後の寒い日であつた。たきまぜの御飯の香は殊になつかしく思はれた。

「そりやあ松茸のやうにうまくは無いさ。くにの方にはそんな上等なものはありやしない。初茸飯か、久しぶりで田舍に歸つたやうな氣がする。御豆腐の御つゆがほしいな。」

新吉には、いかにも晩の食卓が樂みらしく、勤に出て行くにも張合のある姿だつた。おときもそれが嬉しかつた。格子の外に出て、舗石の上に靴の音が聞えたが、新吉は又戻つて來た。

「あの初茸だの濕地茸ねえ、隨分澤山あるから御寺の人にも分けてやらうぢやあないか。くにから來たものですつて。」

わざわざさう云ひに來て、おときのうなづくのを見て行つた。

夕方新吉は、

「あゝ今日程忙しい事は無かつた。すつかり疲れて御腹も減つてしまつた。初茸御飯が待遠しいな。」

靴を脱ぐ間もそんな事を云つてゐたが、さう直ぐとはいかないときくと、手拭をさげて湯に出かけた。

めつきり日脚も短くなり、かなり遠い湯屋から歸つて來る道では、湯上でも肌寒く感じるやうになつた。晝間仕事のたてこんだ爲めに、すつかりくたぶれたのが、湯に入つて一層空腹を感じた。宵闇の中を歩きながら、塒に騷ぐ鳥の聲を聞いて、此の季節に著しく感じる澄んだ寂しさが腹の底迄沁みるのを知つた。うちのあかりの障子に映るのを見た時は、新吉の心は喜びに震へるやうだつた。

あつたかい初茸飯の湯氣の立つのをふうふう吹きながら、故郷の秋のあわたゞしく暮れて、早い初霜が來て冬籠の季節となる頃を、涙ぐましい程なつかしく思ひ出した。

「あたし始めてゞすけれど、おいしいわねえ。」

おときも、初茸の淡い香、滑かなやうでしやきしやきする齒ざはり、噛みしめると何處かに土のつめたさを含む味をほめた。

「今朝出がけにさう云つた通り、お寺の人にも分けてやつたかい。」

「えゝ、御寺の奧さん大變喜んで居ました。それでね、おうつりのしるしだつて、柿を持つて來てくれましたよ。」

「柿？」

「それがをかしいんですよ。庭の柿なんですつて。あんなに澁い澁いと云つて居たのに如何したんでせう。あたし達が盗るといけないとでも思つて、そんな事を云つたんぢやないでせうか。」

「さうかもしれない。」

「なんて憎らしいんでせう。そんな事云はなくたつて盗りやしませんわね。」

此處に引越して來て以來、何べん梵妻の口づから聞かされたかわからないのを思ひ出して、おときはしきりに忌々しがつた。

「あゝ喰つた喰つた。久しぶりで實にうまかつた。初茸飯なんて田舎めかしいものを喰ふと、おやぢやおふくろの顔が目に見えるやうな氣がするなあ。」

番茶の焙じた香ばしいのをすゝりながら、新吉は滿腹して重たい體をもてあつかふやうに、食卓にもたせかけ、おときの顏を見て笑つた。すべての事にみち足りた時、おのづから浮んで來る微笑だつた。

「あたしもほんとに頂けちやつたわ。まぜごはんは食が進むと思つて、今日は餘計に炊いたんですけれど、この通りですわ。」

おはちの蓋をとつて傾けて見せると、中はからからになつて居た。

臺所でおときが食事のあとしまつをして居る間に、新吉は緣側の雨戶をしめ、銀行の歸りに買つて來た夕刊を丹念に讀んで居た。水底のやうに冷く靑い月の夜で、庭の樹々は心あるものが强いて沈默を守つて居るやうな靜けさで、蟲々と空に裸の枝を延ばして居た。その靜けさは雨戶をしめ切つた室の內までも泌みて來た。

臺所で水を流す音や、瀨戶物の觸れあふ音が耳に入ると、新吉は讀んで居る新聞の記事が頭に入らなかつた。其處で働いて居るおときのお腹の中に子供が生育しつゝあるといふ事が、妙に頭にこびりついて居た。一人の女が自分によつて子供を生むといふ事が、不思議の念をまじへた期待で、心の底をくすぐつて居た。

「あなた、うたゝ寢なんかして風邪を引きますよ。」

何時の間にかこくりこくりやつて居たのをおときに起されて、新吉は噫をしながら身を起した。

「ほら御らんなさい、もう風邪を引いてしまつたんですよ。」

とたしなめて、長火鉢に炭をつぎながら、おときは眉をひそめた。

「今日はしんが疲れたんだなあ。こんな時は早寢にしよう。ほんとに風邪なんか引いては馬鹿々々しいや。」

「それがいいわ。夜はすつかり寒くなりましたからねえ。」

二人は長火鉢を兩方からさしはさんで手をあつためた。何氣ないふりをして、新吉は妻の柔い手に自分の手の甲をちよいちよい觸れて見た。ほんの僅かな浮いた心が、ひつそりした秋の宵の澄んだ心境の表面にさゞ波をたてた。

「あなた、柿めし上つて見ない。」

「お寺でくれたのかい。喰べて見ようか。」

「ほんとに澁くなかつたら、隨分をかしいわねえ。」

おときはいそいそと台所に立つて行つて、塗盆の上に四つのせてある柿に庖丁を添へて持つて來た。艶々した果實の

肌は、あかりの下にくもりの無い色を光らせた。するするとおときの指輪の光る指の間から、細く長い皮が垂下つて、水氣のある肉はあからさまになつた。それを四つに切つて新吉にもすゝめ、自分も口に入れた。澁い澁いときかされて居たので、始めは用心深く齒をあてたが、直ぐに甘い汁が舌を浸した。

「どう?ちつとも澁くはないわねえ。」

「うまいや。いゝ甘味だ。」

齒に沁みる冷い甘さを嚙みしめながら、二人は笑をとりかはした。

「矢張あたし達が盗つて喰べると思つて、わざと澁柿だなんて云つてたんですわねえ。」

馬鹿々々しい梵妻の淺智惠を忌々しく思ふのを通り越して、わだかまりのないをかしさを感じた。

「うまいなあ。」

それには返事をしずに、新吉は自分で庖丁をとつて別の一つをむき始めた。

四つの柿は、すつかり皮と種子になつてしまつた。二人の舌には果物のみが持つ淸々しい味が殘つて居た。何の不滿足も無い瞬間だつた。嫉妬して居るといふ事實が心を咬る爲めか、此頃妻の姿體が俄かに艶かしさを增して來たやうに思つて居が、今もその感じが鋭く襲つて來た。新吉は火鉢の上で、妻の兩手を輕く握つた。火氣の爲めに掌は直ぐに汗ばんだが、霜の多さうな夜で、背中や膝はつめたかつた。

崖の下の町の方で、しきりに犬が吠えて居たが、それが聞えなくなると、しんとした雨戸に月の迫るのを感じるばかりだつた。何處で啼くのか、風邪を引いて居るやうな蟋蟀の聲が聞えた。何時も此の室に並べて敷く二つの蒲團を、ひとつにし度いやうな夜であつた。新吉があくびをすると、おときも、つい誘はれて、なるべく口を大きくはあくまいとつとめながら、たうとう堪へきれなかつた。目のふちをあかくしながら、夫の顏を見て首をふしげて微笑した。（大正十四年十一月八日）

悲しき願ひ

悦田喜和雄

1

彼がイリコの入つたザルを擕で、高い處にポツラ／＼ある家を探して行つて、『イリコいりませんか？』と訊くと、きつと『あるのでよ、』と云つた。そのたび彼はだくつ、とした。同時に、星が飛ぶやうに、頭の血が足の方へ向つて走る。――何故買つて與れないのか知ら、今晩はだうでも宿銭だけでも賣りたい、また野宿と來てはたまらない。彼は仕方なく次の家へ行く道を訊く、上つたり下つたり、道を迷つては後返して、やつと探しあてる

『イリコだうでございます？』と云ふ。又同じ風に斷られる。もう次の家を訊く元氣もない、――だうせ道がある處を行つたら家はあるだらう、だうにでもなれ！

彼は又ぴよくり／＼と下つて河端を奥へ上つた。と行きつまつた。道がなくなつた。前は河だ。右を見、左を見、後を見た。――ナニ！やけだ、こゝで休んでやれ！

彼はやゝ廣い處へイリコのザルを置た。そしてそこへ投つけられたやうに坐つた。

『初めて商賣をする者は何て云ふてもこのイリコに限る。これは損するめはない。十日や二十日擱で廻つても腐らないのが第一えゝ！』と魚問屋の主人が云つたことや、父と喧嘩した時、父に云はれたことが、ムラ〳〵と頭をもたげて來た。

――どうせ二人はこの世では！

しかし、彼は腹が空て來た。ザルの蓋を取つてイリコを握りだしてそれを食つた。

――ナニ！考へまい、これでよいのだ。何にも苦るしいことはない！

花の咲かない枯れすゝき！

彼はかう唄つた。と急にさよ子が頭の中へ入り込んで來た。――エイ！考へまい！もうかうして困つて困つて困りぬいてやる、ナニ！この位のこと、この身體を、たゝいたり蹴つたりして、眼も鼻も、足も手も、粉にしてその上から小便でもたれかけてやればよい、ナニ！この位のこと苦るしいうちではない！

彼は後頭部で兩手を組んで、そこへごろりと仰向に寢た。――ナニ！何にも考へまい、恥かしいも苦しいもない……

――腦味噌を取つてしまつて、からつぽの頭で『イリコはいりませんか？』と云つて歩く、買つて呉れたらお金を貰つて次の家へ行く、買つて呉れなかつても、又同樣に次の家へ行く、買つて呉れたつて呉れなかつたつて平氣でゐる。たゞさうして歩いてゐるだけ……それよりイリコ賣りなどやめたがえゝ、思ひ切つて死んでしまつたら何にもしなくてえゝ……ナニ！もう考へまい、氣が小さいからだ、賣れたつて賣れなかつたつて何んだ。賣れないと思つてびく〳〵するからだ。日が暮れたらそこで野宿すればよいのだ。ナニ！困ることにない……しかし、寒いぞ、又野宿か？

太陽が傾て寒むくなつたので腕の時計を見た。四時であつた。――春の日と叔父の物とくれさうでくれぬとか云ふ、ナニ、まだ大丈夫だ。歩てやらう？もう野宿はこり〳〵だ！彼は立つた。イリコを食つた鹽辛い口は飯がほしかつた。

――どこかに水でもあつたら呑んでやらう？と思つて彼は後返りしだした。

もう太陽はなくなつたが家を見つけることは出來なかつた。行つては戻り、又行きしてゐた。昨日の朝食つたきり飯は食はないので何だかぽかんとして來た。腹が張れてゐるが、身體がだるかつた。――今晩も野宿か、寒いぞ、いや今夜はぜひ家を探して泊つてやる。どこかに木賃宿でもありさうなものだ。だうにか家が見つかつたら宿錢はなかつたつてよい、又その時だうにかなるだらう？彼は立とまつてどつちへ行つたらよいかを考へた。もう幾里ほど山奥へ這入たか、又出てゐるのかさつぱり見當がつかない。左手は大きな河だ。その左岸も右岸も、十年位前に植付たらしい杉ばかりだ。行つても戻つても杉の中だ。

――ナニ！あの山をよぢのぼつて、動けなくなつたらあの山のてつぺんで野宿だ。彼は上へ行く道をとつてぼと〳〵歩きだした。一町位上るとこんどはやゝ廣い道に出た。――しめたぞ！と彼は喜んだ。廣い道を左にとつてどん〳〵行つた。と明るい處に出た。杉が小さくなつた。植付て二三年位らしかつた。少し行くと煙草の匂ひがした。そして、峠のやうな處へ出た。峠には五十位の大きな男が休んで煙草を吸つてゐた。――助かつた！と彼は思つた。

『あゝ！えらい〳〵、なか〳〵だ。』と云つて彼はその男の傍に荷を置た。男は自分の前に置てゐる風呂敷包に手をかけて、彼の顔をジロ〳〵見た。

『あゝ！何處か近くに宿屋はありませんか？』

『この下へ行けばすぐあります。』

『泊めて呉れるでせうか知らぬ者でも？』

『そりや泊めるどころぢやないわいな、先方は商賣ぢやもん！』

『あゝ！よかつた。始めてこんな山の中へ來て困つた。』

『魚屋さんかな？此頃はどうぞへ、よく賣れますか？』

『あゝ、あかぬ、たまで賣れません！』

『何でも同じやなア、こりや不景氣がこんだけ續たら貧乏人はほせ死ぬ。』

『あゝ！あゝ！』彼は安心して男の傍へしやがんだ。

2

『だうも此節は不景氣であきまへんなア。』

『さうです。』

彼はこの人は藥屋だな、と思つた。藥の匂ひを嗅ぎながらぼと／＼ついて行つた。大きな杉林の中の暗い道を通りぬけると又上つた。そして、田のある處へ出た。田と云つても二坪ぐらゐから大きいので十坪位の田だつた。田の中に田より大きい石があつたりした。無論麥も蒔てなかつた。田植から田植まで忘れられてゐるのだらう。其田の中の道を通つて小さい峠へ出た。そこからは下の家が見えた。

『アヽ！來た／＼、もう休まずに行かうが、あれが村長でございます。この、まん中の大きなソギ葺の家がさうでございます。』彼は其通りの大きな家を見た。

『こゝは何と云ふ處ですか？』

『こゝは次郎ケ谷つて處々にモリ〳〵した處があるでせう、あそこにもみな家があるんでよ、』藥屋は俯向て道ばかり見て歩た。そして下りになると立停つた。

『おまはん先行つて下さらんかい、わたしや足の工合が惡いので下りになるんだらも。』藥屋は山岸に避けて左の太股をたゝいた。

『さう？』と云つて彼は先になつて歩た。彼が後を見ながらかげんして歩てもまだ立ち停つて待たなければならなかつた。

『やれ〳〵、アヽ！』藥屋は彼の傍へ來ると吐息をしながら立ち停つて太股をトン〳〵たゝいた。そして、彼が歩きだすとすぐついて歩た。

『あゝ！若い主とは一緒に歩けん！』下りつくすと藥屋はかう云つて元氣になつて歩いた。

『あなた足はだうしたんです。』

『わたしや戰爭に行つて腰を射貫かれて、若い時は何でもなかつたんですが年をとるとだらも、いやもうこりやだんだん駄目になるで』

宿屋が近くなると彼は後になるために小便をした。

『あゝ！お達者かいな、皆さん！』土間に這入ると藥屋はかう云つてすぐあがりたてへ荷物を置た。彼も土間に這入つてザルを置た。

『あゝ、小父さん珍らしいな、』若いおかみさんらしい女が出て來てペコと頭を下げて彼の顔をジロ〳〵見た。

『御主人は達者なかへ?』

『へえ、ありがたう、お蔭で、この人も泊るのかいな?』

彼は顔を見られるのが氣持が惡いので俯向て腕時計を見た。

『このお方に道で一緒になつてつれて來たんじや、』藥屋が又彼の顏を見た。

『どうぞ今晩お願します。』彼はかう云つて頭を下げた。

『下駄こゝにあります。足洗ふてつかされ!』女はかう云つて奥へ還入つて行つた。彼は手造りの竹の皮の緒の下駄を提げて藥屋の後から戸口の小便處の前に行つて立つてゐた。と、十六七の娘が、顏を眞赤にして湯を持つて來た。藥屋は小便處の上の棚から盥を下した。

『大きくなつたなう、ハハハハゝゝゝ』藥屋は笑ひながら娘のお尻をたゝいた。

『小父さん長い間こなんだなア!』と云つて娘は手桶の湯を盥にうつした。

『へゝア、大きなお尻になつたでないか、一寸見ないうちに、よく太つた!』藥屋は又娘のお尻をたゝいた。

『どうしたん、この人つちや!』娘は笑ひながら奥へ行つた。

『さア洗ふてつかされ!』

『どうぞあなたから!』彼は下駄を提げたまゝ少し後へ引た。

『そんなら一緒に洗はんかへ一緒に!』藥屋は片足を盥の中へ入れ彼の顏を見て云つた。

『あゝ!』彼も片足を盥に入れた。そして二人は頭を並べて洗つた。

二人が足を洗つて奥へは入ると洋燈がついてゐた。彼はザルを土間の隅へ持つて行つて、ザルの殻をとり合せてから

爐の傍へ上つた。と、戸外で人音がした。

しばらくすると山で働く人らしい男が這入つて來た。藥屋と話してゐるのを聞てゐるとそれが主人らしかつた。

『山も不景氣になつてあきまへんが、まアだうにかかうにかじや。』主人はかう云つて出て行つた。

『一本つくらうかへ、たゞ見たやうなもんじや安いもんじや！』

『罰があたるは、このせちがらいせつに鰹一本も食つたりしては！』戸口でこんなに云ひあつてゐた。

『じや一本つくつて吳れんかへ、崖から飛んだと思て一本はりこむ！』主人は二度目に這入つて來ると戸口の方へ向てかう云つた。そして右の手の手ゴの紐を口で解きだした。彼は主人の手のないのを見て驚いた。

『外の人はもういらぬか知ら？あんたは魚屋さん？』元氣さうな、眼のクリ〱した魚屋が奥へ這入つて來て彼の顏を見た。

『えゝ、いりません！』

『藥屋さんは魚は厭だし、』主人は彼の顏を見て云つた。彼は俯向た。

『どら、やれ〱！』武力カンを持つて商人らしい老人が這入つて來た。

『爺さん、鰹のつくりはだうぞへ？いるならつくるが！』戸口の方で魚屋が云つた。

『半分だけつくつて吳れるかへ、どらやれやれ！』武力カンを爐の傍へ置くと老人はすぐ出て行つても一つ武力カンを持つて來た。

『爺さんだけ達者であつたら子供もいらんそんだけ年とつても一人前働くんじやもん！』

『ヤア、子供つて、あつてもなくても同じや私しや七人も子供があるけんど、八十が來てまだこの山中へ菓子を擔で來

るんじや、やれ〳〵、親は子と云ふてたずねもするが、親をたずねる子はまれな、つてよく云ふたもんじや、やれやれ、』爺さんはカンを重ねてから又出て行つた。

『なんぞ鉢のやうな物でも出して呉れんかへおかみさん？』戸口の方で魚屋が聲を張上げて云つた。

『今晩は！今日こゝへ藥屋さん來とるで？』

『來てゐます。』

『さうだらう思ふたんじや、家から見たんじやけんど』

『だうした。誰か惡いのかへ？

『えゝ一寸』

『そりやいかんな、』

『やれ〳〵やれ〳〵！』

『やれ〳〵の爺さんは百になつてもやれ〳〵はやめんな、死んでもやめんだらう、オイ、も一つ鉢じや、鉢がなかつたら皿でもえゝ！』魚屋は大きな聲で云つた。

少しして手拭を冠つた二十五六の女が入つて來た。

『どなたも今晩は！あの藥屋さん！』と云つて女は赤い顏してペコ〳〵頭を下げた。

『皆お達者なかへ？』

『へエ、ありがたうございます。』と云つて女は俯向てから續けた。

『あの、だうしたのか頭が痛ふて困つてゐますんじや寝まへんがお熱がしてつかはらんでは

『さうかえ、そりやいかぬ、誰ぞえ、安さんかえ?』

『ヘエ!』

『そりやいかん早よう癒さぬと、お聟さんは大切じや、いつからぞへ?』

『ヘエ、四五日前から始めは風邪のやうな云ふて色々風邪藥を呑んだけどだうも藥が合ひまへいで、』

『そりやいかぬ?』藥屋はかう云つて自分の後の風呂敷包を解た。

『やれ〳〵、あゝ!わしに火鉢を一つ呉れんかへ、それと大根おろしと、あゝ!やれやれ!』爺さんは片々の下駄を穿て赤い魚肉の入つた皿を持つて土間に立つて云つた。

藥屋は隱すやうにして風呂敷包の中で藥を合した。

『これ三服あるのつてなア、今夜寢る時一服と、明日の朝と、晝と、水で呑んだらえゝ、用心せんと悪い風邪がはやりよるのつてなア、』藥屋は藥の包を折りながら云つた。

『ヘエ!今夜一服と明日の朝と、晝と、なんぼぞいな?』

『三十錢でえゝ、五十錢もらはにやあわんのじやが外の人でなし。』

『ありがたうございました。』女はお金を拂ふとペコ〳〵頭をさげて出て行つた。

『わしに一本つけといて呉れんかい!』魚屋は爐の傍へつくりの入つた鉢を置てかう云つた。足にはまだわらぢがくつついてゐた。

『あゝ!やれ〳〵!やれ〳〵!』爺さんは火鉢と小さい鍋を上りたてに置てから、又女達のぶつ〳〵云つてゐる炊事場の方へ行つた。

主人は爐の傍に上つて來た。そして又ジロジロ彼の顏を見た。彼は視線を避けて腕時計を見た。

『あゝ！やれ／＼！』爺さんは燗徳利を持つて來て皆より少し離れて火鉢をかゝへた。

『兄さんは何處で？』主人にかう問はれて彼は時計をいぢりながら頭を上げた。主人は彼のいぢつてゐる時計を見た。

『えゝわたしや日和佐で、』

『あゝさうかへ日和佐？』主人は彼の眼を覗きこんだ。彼は顏を振つた。

『やれ／＼、大根おろしと大根と與れんかへ、やれ／＼！』爺さんは火鉢に鍋をかけてかう云つた。

『今日は疲れた。損する時はよけつかれる。』上つて來た魚屋が又彼の顏を見た。彼は俯向て、火箸で爐の灰をいぢつた。

『兄さんはいりこじやなア、えゝいりこじやあの位で、このこれかへ？』彼はかう訊かれて頭を上げた。魚屋は手を出してゐた。

『わりに高い！』彼はかう云ふとすぐ又俯向た。

『えゝいりこじや、俺もこの次にはいりこにしよう、よく賣れるだらうな！』

『えゝぼつ／＼！』

『えゝいりこじや、ありや、賣れる。匂もよし色もえゝ、ありやうまい。』

『あゝ、やれ／＼、こりやいかぬ、ちつと醉つとる。いかぬ／＼、いや、あゝ！頭が痛い！』

『何云ふとんぞへ、誰と話しよんぞへ爺さん？』主人は笑ひながら大きな聲で云つた。

『わたしや、鍋と話してゐます。あゝ！やれやれ！こりやいかぬ！』

『およしさんよ、まだ[illegible]出來んか？』魚屋は炊事場の方へ向いて大きな聲を張上げて云つた。

『今出來ます。』遠い處へ云ふようにおかみさんは云つた。

『どなたも、御飯なんぼづゝ持つて來ませうぞいな？』若い女が出て來て云つた。

『俺に一升くれんか、』

『あなたは？』

『わたしも一升、』彼は何だかわかならかつたが人眞似してから云つた。

『五合食つて五合は辨當じや！』魚屋はこんなことを云つた。そして彼の顔を見た。

『………』彼は笑つて見せた。

『あなたは五合稀さんは？』

『五合！』

『藥屋さんは又前のやうにうちと同じだらうなア！』

彼は何が何かわからなかつた。——二度に一升も食ふか知ら？辨當にするつて辨當箱はないし、それよりお金がないのが大變だ。彼はお金がないことを心の內で主人に云つた。——いい、だうにかなるだらう？彼は默つて座つてゐた。

やがて、一人一人に小さいお櫃を持つて來た。

夜飯が濟むと二階の八疊間に四つの寢床を作つて吳れて皆は一緒に寢た。

3

寢ると彼は色々の夢を見た。夢から醒めて氣がついた時には一緒に寢てゐた人達はゐなかつた。よく眠つてゐた

だと彼は眼をこすつた。しかしまだ眠かつた。欠伸をして、體を伸びるだけ伸した。と、二階の梯子を上つて來るやうな音がした。彼はあわてゝ身體を小さくして布團をかき上げ眼をつぶつた。足音はだん〱近くなつて來る。來るぞ來るぞと思つてゐるうちに障子の開く音がした。

『まだ寝てゐる。寝ごたつてまア！』彼はおかみさんが小聲でかう云つたのを聞た。

『若い者つてしようのないもんぢや、商賣つて早く行かにやあかぬのにまア！』おかみさんは又かうこぼして障子を手荒く締めて行つた。

彼は布團から頭を出した。宿錢のないことが又氣になりだした。――起て行つて素直に云つてお金の代りにイリコでも渡さう、そして早く商賣に出かけよう。彼は頭もとの腕時計をとつて腕につけた。そして、ねぢをかけながら時間を見た。八時だつた。

彼は仰向になつて天井を見たまゝだう云つたらよいかを考へた。――初めにお金のないことを藥屋さんに話して、藥屋さんからおかみさんに話して貰う、何と云つたらよいか知ら、實はその、私はお金が一文もないので、と藥屋に話しこむ、それで宿錢のかわりにイリコを渡します。つて云ふ、ナニ！だうにかなるだらう。彼は起きた。着物も股引もそのまゝで寝てゐたのではつぴだけを引つかけて下りて行つた。

下には誰もゐなかつた。しかし、藥屋の荷物だけは昨日のまゝ置てあつた。

彼は戸外に出た。戸外には雪のやうな霜がおりてまばゆかつた。

『何處で顔洗つたらえゝ？』彼は小便をしながら桶を提げて出た若い女に訊た。

『あつちの方の溝、それそこの。』

彼は首を伸ばして女の指ざす方を覗た。

空には白い雲が飛んでゐた。時々つめたい風が吹て行つた。――こちらは三月節句にも雪の降ることは珍らしくないだらう、もうひがん頃じやないか知ら、それにこの寒さだ。彼は顔を洗ふと急で家にはいつた。

『よう寝たなア兄さん！』おかみさんは彼が土間に這入るとすぐニタ〳〵笑ひながら云つた。

『あゝ！』彼は笑つて見せた。

『わたしの行つたの知つてゐた。知らなんだのだらう？』

『……』

『わたしが障子を締めたのに眼が開たのだらう、だうもよう寝る。』

『よく疲れて！』

『初めての商賣じやなア兄さん？』

『ヘエ！初めてゞ、下手糞で！』彼はかう云つた後でお金を持つてゐないことを云つてのけよと思つたが云へなかつた。

『商賣はなか〳〵むつかしい、初めには損せんと商賣の味がわからん』

『どんなことでもそれで食つて行かうと思ふとなか〳〵むつかしいもんじや、今まで何してゐたんで？』

『百姓であつて、大阪へ行つたりして、歸つてこんなことをやり出してゐます。』

『まア！百姓やめて商賣、わたしや又百姓にならうかと思ふとる。わたしらも百姓であつたんでよ、それをこんなことかえゝと思ふて百姓はやめて了ふてこんなことを始めたがだうもいかぬ、商人は氣のえゝことではあきまへんぜ、他人

の眼に指をつつこむぐらゐの元氣がないと、』おかみさんはかう云つて炊事場の方へ行つて膳を持つて來て呉れた。
『もう他の人は二時間も前に食べて行つて了ふたのつて味噌も冷たくなつて了ふた。』
彼はおかみさんから膳をもらつた。膳には燒き味噌にたくあんがついてゐた。
『えゝ結構！』
『御飯はその一番上のがさうだらう』おかみさんはかう云つてすぐ炊事場の方へ行つて了つた。彼は昨夜の殘りの飯を食ひだした。食つてゐるうちにでもお金のないことが氣になつた。——宿錢のかわりにイリコをとつて呉れんで、わたしやお金がないんじや。あつさりかう云つて見よう？おかみさんは炊事場から出て來て戶外の方へ行つた。——こんどは入て來たら思ひ切つて云つてやる。彼はいつの間にか殘つてゐた飯を全部食つて了つた。一升を二回でもさう苦るしくはなかつた。
『この邉いつ來てみても寒いな、たまらぬ！』
『今年はいつもより寒むいのでよ、』
藥屋は小さい鞄を提げて這入つて來た。後から昨夜の藥買ひに來た女がついて來た。
『オヽ起きたな、』藥屋は彼を見るとかう云つた。
『アヽ！』と云つて彼はてれかくしに笑つた。
『お早うございます。』女は彼を見ると頭の手拭をとつておじぎした。
『だうもあれはたちのよくない風邪じや、用心せねといかん。』藥屋はかう云つて一週間分位を彈きだした。
『あの、私がうてもだんないのつて、だうぞえゝお藥をつかはれ、わたしやもう日分ございよりつかいたいんや！——』女は

泣くやうに云つた。

『昨夜のもあれやなか〳〵田舎の醫者は使はないやうな高藥じやけんど、きゝめが見えぬとすると、かうつと?』藥屋は考へるやうにした。

『癒るでせうかありや?』

『あゝ癒るとも、わたしが癒してあげます。かうつと?今度は?』藥屋は首をひねりながら藥を拵へると、『今度は高藥の新藥じや、近頃ドイツに出來た藥じや、そのかいにや高い、一遍五十錢になるぞよ、』

『えゝ、五十錢でも一圓でも早よう癒しませんと、』

『そんならこれ、やはりご飯の一時間位前になア水で呑むんぢや、又正午ご飯が濟んだらもう一遍行つて見てあげませう!。』

『ありがたうございます。そんなら正午ご飯頃にだうぞおたのみ申します。私ら素人ばつかりで傍についてゐたつてよくなるものやら惡るなるものやら一寸ともわかりまへんので、そんならおたのみしますで、どなたも!』又彼の方へおぢぎをしてから女は出て行つた。——この藥屋が應診するのじやな?と思つて彼は藥屋の顔を見た。

『あの兄さん、いりこ二升だけ呉れませんか?なんぼで?』おかみさんは土間から彼の顔を見て云つた。

『五十錢に賣つたりもしたんですが四十錢でよろしい!』かう云つて嬉しさに飛上つた。

『そんなに安いの?まア!』

『もう損してゐるのです。だうでもえゝ。』彼はうまく來たぞと思つた。これで宿錢はあると思ひながら喜んで土間に下りた。

4

――今日はよいかも知れないぞ、朝よかつたから。彼は宿を出る時から思つた。そして元氣よく、そこらあたりにてん／＼とある家をたづねて廻つた。しかし駄目だつた。一つつまんで味を見て吳れる人もなかつた。彼はがつかりして又奥へ向いて山を上つた。

行つても行つても杉林ばつかりだつた。谷を渡つて又山へ上り、又谷へ下つた。西とも東とも見當がつかない。腹が空つて來ていりこでも食つてやらうと思つた時は午后二時だつた。朝のうち宿屋の近處をうろついて家を見たきり、まだ小屋一つ見つからなかつた。しかし、道があるからには家もありさうなものだと思つた。もう何里上つてゐるのか何里下つてゐるのかさつぱりわからない。彼は大きな杉の根もとに休んだ。そして、いりこを摑出して一つ一つ叮嚀に食つた。――又後返りしてあの宿屋へ行つてやらうか、そして、あそこのお世話になつて山働でもしようか、あの親切なおかみさんにたのんで？いやそれは卑怯だ、ナニ飢え死んだつて人樣の厄介にはなるまい。彼はそこへ仰向に寢た。すると眼に淚がたまつて來た。彼はすぐ、兩腕で頭を挾んで俯向になつた。――あゝ、もうから苦しまなくても歸らう、歸つて百姓しよう、父母達は許して吳れるだらうから。しかしこのまゝ歸つては家を出る時、父が云つた通り乞食になつて歸つたのだ。いやそれでもえゝ歸らう……しかし、あの清水とさよ子が仲よく一緒に田で働てゐるのを見て平氣でゐられるか。清水とさよ子はあの仲に又子供が出來る、だん／＼幸福になつて來る。俺はそれを見て嫉妬をやく、淋しがる、何につけてもあたりちらす家の中がいつも暗い、だん／＼不幸に不幸にと落ちて行く。さよ子と清水とがそれを見て嘲ふ。さよ子は心ひそかに、まあよかつた。承さんと結婚しなくつてよかつた、と俺と結婚しなかつたこ

とを喜ぶ。ナンで歸られるものか。死んだつて歸らない。このまゝのたれ死だ。俺がこのまゝ死んでも父母達は俺のために泣て呉れるか知ら。彼は立つて撫でゐたいりこを投捨てゝ大きな聲を出して泣いた。

しばらくして又坐つた。——ナニ！そんな馬鹿らしいこと考へて泣たつて何になる。何處かでよい仕事を探してうんと働かう。そして偉くなつてさよ子が羨しがるやうになつて歸つてやらう。そしたら父母達も喜んで呉れるだらう？さア行かう。休んでゐてもしかたない。彼はいりこのざるを擔で又どん〳〵奥へ行つた。

5

もう日が暮れかゝつて寒むくなつて來た。何か怖ろしいものに追ひたてられるやうにおど〳〵しながら道を急だ。——朝よかつたかわりに今日は夕方はよくないだらう。どつかの大きな木の下で野宿だ。さう思ひながらもどこかに家はありさうなものだとうろ〳〵見た。と、一つ小さい家が見つかつた。もし泊て呉れなかつたら？と思いながら心のうちでだうたのんだらよいかと文句を考た。そして、行つて見た。そこは避病院らしかつた。小さい小屋だが床下に石灰が白くまいてあつた。それでも彼は喜んだ、戸口の戸を引て見た。中には板ばかりで作つた寢臺が三つあるきりで其他は何もなかつた。彼は地下足袋のまゝいりこの荷をその病室にかつぎこんだ。早速奥の寢臺にいりこのざると棒を置き彼は中の寢臺に腰をかけた。そして何か着て寢るものはないか知ら？と思つて寢臺の下を見た。と、ゴザがグルグル巻にして置てあつた。彼はすぐそれを出した。そして、それを板ばかりの寢臺の上に敷てその上に寢ころんだ。地下足袋を穿たまゝである。寒むいので足を縮めて小さくなつた。やがて坐つて着物の上から身體を擦つた。それから寢て、右へ返し左へ返ししきりに寢返りを打つた。と少しあたゝかくなつて眠むくなつて來た。彼は又起きて今度はゴザ

を身體へグル〳〵卷にしてごろりと寢た。といつか眠つて了つた。次に氣がついた時は寒さに身體がブル〳〵慄えた。ゴザを卷た身體を寢臺の上でごろ〳〵ころがした。と人音がした。何だか戶外が明るくなつて來た。彼は息を止めて首を延して聞た。馬の足音がして來た。

『オヽ！オヽダオヽ〳〵〳〵！』から云つた。――急に病人が出來てつれて來たのかも知れない馬に乘せて、しかし、寒い時に何病だらうよもや赤痢やコレラじやあるまい、何か知ら！何病であつても自分は追ひ出される。ナニ！は入つて來るまで寢てゐたれ、だうせ怒られたらそれで濟むのだ。彼は首を引こめて仰向になつて眼をつぶつた。

『オヽ〳〵〳〵！ぢつとしとれ、畜生のくせにこそ〳〵動く！』

『どらへ！があきや！ぢつとしとれ！』

戶外ではしきりに騷いだ。やがて戶が開た。彼は見た。

『こらしよ！』と云ふと大きな重い物を置た音がした。すると提灯を持つて上つて來た。彼はあわてゝ坐つた。

『オヽ！びつくりした。あなたこゝで泊り、魚屋さんかへ？』四十位の色の黑い男がクリ〳〵した眼で彼の顏をジロジロ見て云つた。

『えゝ！』彼は恥かしいやうな氣がして身體に卷てゐたゴザをのけた。

『まだこちらへ來たら莚が澤山あります。』男は奧の方の押入を開けた。そして莚を四五枚ほり出した。

『わしやもうこゝでよく寢るのでよう知つとるのじや』から云つて男は彼の頭の上をきよろ〳〵見て天井から垂れてゐる針金に提灯をかけた。そして出て行つた。

――この男はいつたい何を商賣する人だらう？彼は男が出て行つた後で頭の上の提灯を見た。

『これからゆつくり飯を食つて、あゝあなたご飯たべた？』男は入つて來るとかう云つて彼の隣の寢臺に腰をかけて又彼の顏をジロジロ見た。そして續けた。

『若い主、本當にご飯たべんかえ、これ、こんだけもわしや一人で食へぬ、麥も混つてゐるけんど、菜は梅干じや、たべんかへ？』

『えゝ、ありがたう！』彼は食ひたかつた。食つてゐるのを見ないやうにしてゐても口がびたびた云ふのが聞えて口に唾がわき出して來た。

『本當ぜ若い主、出て行つて何か箸探して來たらえゝ、それ食べんぜ。』男は飯のいつぱいつまつた行李の片側を彼の寢臺の上に置いた。

『わたしや今朝食べたまゝじや、そんならよばれます。』彼は寢臺から下りて戸外へ箸を折りに出た。

『フフ……』出るとすぐ馬が鳴た。彼はびつくりした。大きな馬ががりがり土をかいた。

彼が木の枝を折つて家に歸つて來ると男は食つて了つてゐた。

『あゝ、これで腹が起きた。あゝ！あれ食べんせ！』男は彼の顏を見て、飯のいつぱいつまつた行李をゆび指した。

『あゝ、ありがたうあんたは？』

『わたしやもう十分、これよりは食へぬ！』男はかう云つてキョップをした。

『あゝさうじや、いりこがあつたんじや、忘れてゐた、食べんで。』彼はいりこのザルを男の傍へ待つて行つた。

『いりこ賣りかへ若い主は？』かう云つて男はいりこを掴んで食つた。

彼は箸を揃えて飯を食ひだした。

『だうぞえ賣れるかえいりこは?』

『あゝ、あまり賣れまへん!』彼は食ひながら云つた。

『だうも此節は不景氣であけへん、わたしやもう若い時から何でもかんでも手あたり次第にやつた、此頃は馬喰の眞似をやつてゐる、だうぞえ若い主、えゝ儲口があるんじや!』

『……』彼は默つてゐた。

『そりや一寸したことじや、一つ若い主わたしを助けて呉れんかえ、なんでもないことじや、あんたがよしつて承知して呉れりや、一つ相談にのつてわたしを助けてお呉れ!』

『えゝ?』彼はわからないので馬喰の顔を見た。

『わたしやあんたを土佐の山奥の若さんて云ふのじや、そして、あの馬をあなたの乘馬にするんじや、だうぞえ?若い主には迷惑はかけぬわい、わたしが『若さん』と云へば、あんたは『オイ』とでも『やい!』とでも云つて居りやえゝんじや、そして、うるさいことでもあつたら『勝手にさらせ!』とでも云つて鼻であしらつて居ればわたしがうまくきりまわす、だうぞえ、たのむ若い主、わしに一と儲させて下さい、なア若い主!』

『わたしやむつかしいことはえゝしませんが默つて居てえゝことなら!……』彼は笑ひながら云つた。

『ところがなもし、あの馬奴が駄なのであれをだうかしてうまく賣りつけるんじや、からつと』と云つて馬喰は考へた。やがて手をたゝいて續けた。『出來た。大丈夫、あなたはたゞ酒を呑んで居ればえゝ、よし來た。私はかう云ひます『若さん、若さん』て、そして、「この若さんは百姓長者の一人息子じやつて、毎日馬に乘つて遊んで居ればえゝんじ

や、それに俺のやうな惡者と一緒に、こんな着物を着てこゝまで來るつて、この若さんもこりやいよく運のつきじや、何程でもえゝのつて今お金が入るんじやこの馬を賣れ、つて云はれるんじや、こりやもとは二百圓かゝつたのじやが百圓でもえゝんじや、乘つて見い、乘工合はよし、こりやひらひ物だ、買つといてくれ。つて云やきつとひつかゝる、あんたはたゞ酒だけ吞んでゐたらえゝんじや、何！心配はいらぬ、うまくわしがきりまわすから。』馬喰はニヤく笑ひながら彼の顏ばかり見て云つた。

『うまく行つたらあんたにもうんとお禮はするでよ、向ふの奴らは何でも馬ならお金だす、何分牛より見たことのない奴らじやのつてなア』

馬喰は彼の顏色を見てとると又續けた。

『ナニ！うまく行く、何分あの馬がもと二十圓で買つたもんなんで五十圓に賣つても大の儲もんじやたのむぜ若い主、じやらじやないんぜ！』

『えゝ、でもいりこを攜では？』

『そりや又、こりやこゝへ置て行かう、わたしが云ふて居る處はこゝから近いのじや、この山を一つ越せば行ける處なんじや、このザルをこゝに置て若さんでめかしごんで行けばえゝんじや、馬に乘つて行つてもえゝんじやけんど乘ると跛が限だつていかん！』

『えゝ若さんじやなア！』彼は笑つた。

『着物がちつとおかしいが、それその時計などえゝ、こゝらの者は、そんなもの見たこともないのつてな』

『若さんか！』彼は又笑ひながら時計をいぢつた。

『明日は若さんに早變り、今日のいりこ屋さんが！』馬喰はかう云つて出て行つた。
『フ、、、、』馬が嗚てガリ／＼土をかいた。
『どら待つとれ、これでも食つとれ！』かう云つて馬喰は木の枝を折る音がした。
『若さんか！』彼はおかしくなつて來て一人でかう云つて笑つた。
やがて馬喰はは入つて來た。
『そんでな若い主、あんたはたゞ酒でも呑んで若さんになりすまして居ればえゝんじや！』馬喰は又彼の顔をジロ／＼見てさつき云つたやうなことを繰返した。
『ハヽヽハツ！』彼はおかしくて笑つた。
『大丈夫でよ若い主、わたしがついて居れば、明日だけは若さんにせずにや置かぬ、これあんたにあげよ、二枚、わたしも二枚！』馬喰は莚を彼の寢臺の上に置てから空になつた行李をかたづけた。
『これから云ふ風にしてギリ／＼巻くんじや一枚は後ろからあてるとえゝ。』馬喰は立つてゐて莚をグル／＼巻くとそこへ倒れた。そして殘の一枚を其上にあてた。
彼はゴザだけを巻て其上から二枚の莚をあてゝ寢た。しかし寒むくてなか／＼眠れなかつた。

『若い主、若い主！』
『ウン、ウウ、、、、』彼は寢たまゝで手を伸ばして欠伸をした。

『寒むくないかえ、若い主？』

『あ、あゝア寒むい寒むい、足が凍つしもとる、あ、あゝゝア！』彼は敷てゐたゴザをのけて坐つて、足をすつた。

『そんでも若いだけでよう眠つてゐたらしかつた。こつちはもう寒くて、まんぢりともせなんだ。だうせ若い主？よべからたのんだことやつて呉れるかえ？』

『まだ暗いなア』

『もうけんどぢき夜が明けるだらう、そろ〳〵こしらへをするうちに、』馬喰は立つて、提灯の中を覗た。

『あゝ、少し頭が痛い、あ、あゝゝゝア！』彼は欠伸をしながら提灯はつけたまゝであつたのか知ら、それとも眠つてゐた時は消してあつたかも知れない、と思つて提灯を見た。

『この山を一つ越せばわりにえゝ處があるんぜ、宿家もあるし、十軒位家があつて一寸町づくつて居る、そりやうまい物も食える。早よう向ふへ行つて寢ませう、お金がなかつてもうまくやれば世の中つてありがたいもんじや、だんなだんなで渡つて行けるもんじや本當ぜ若い主、』

『さうかなア？』

『さうとも、どんなことしてだつてうまく食つて行くだけとくぜ、だうせ人間つてどんな人でも自分がえゝようにばつかり云ひあつて他人の惡口を云ふて居るんじや、ナニ！惡いえゝつてうまくせしめた方をえゝにするよりしかたないでなア！』

『こちらはだうも下手なのか馬鹿なのかだうにもかうにも動きがとれぬ！』

『そりや若い主、若いのつてじや、だん〳〵世の中がわかつて來るにつれてさうむざ〳〵損はせぬやうになるはえ、正

直つてありや阿呆のこつちようじやのってなア、』

急に提灯が明るくなつた。馬喰は立つて提灯の火を吹き消した。

『提灯はこれぢやによつてあぶないんじや、眠つてゐたら火事を起すのであつた、もう戸外は明るいだらう、行きませう！』馬喰はかう云つて提灯をガサ〳〵云はせて出て行つた。彼は暗い中へ又寢た。そして思ひ切り大きな欠伸をした。

『若い主、行きませう、もう行ける。』戸外から大きな聲でかう云つた。

『ソフ、、、、、』馬は鳴てゴリ〳〵土をかいた。

『戸外へ來たら明るいでよ、早よう行きませう？』

『あゝ！』彼は立つと又欠伸をして戸外に出て行つた。戸外はまだ暗かつた。

『早よう行かんと向ふへ行つたら晩になる！』

『そんなに遠いので？』

『まあ五里はあるだらう、それが馬をつれるとなほ遲い、道は山ばかりだし！』

『あのいりこはだうしようか知ら？』彼はここの枯草の中へ小便をしながら云つた。

『あのまゝにして置たらえゝだら、こゝは誰も來る處でないのつて、夏でないといらぬ家じや、あゝして置けば大丈夫じや！』馬喰は馬に荷物をつけると、ペツとそこへ唾を吐てからシャア〳〵小便をした。

彼は這入つて行つて暗い中でザルを重ねて紐と紐をくゝり合せた。そして、其上から蓆をもたせかけて戸外へ出た。

『向ふへ行つたら大きいことばかり吹てゐたらえゝぜ、わたしが若さん若さんて云ふのつて！』馬喰は彼の顔を見た。

彼はニヤ〳〵笑つた。

『ほんとでよ！』馬喰は念を押すように云つた。

『ハヽヽヽ、、、、』彼は大な聲を出して笑つた。

『さア行きませう！』馬喰は馬を引いて歩きだした。彼は後からぼと〳〵ついて行つた。

7

『よう！久しぶりじや達者なかい？』馬喰は戸口に立つてから怒鳴つた。

カラ〳〵〳〵〳〵と緒のたるんだ下駄を引きづつておかみさんが出て來た。

『オッ！だうぞへえゝお金儲を探して來て呉れたかへ？』おかみさんはかう云つて馬喰の顔を覗いた。

『若さん、まアおは入り、ゆつくりお酒でもたべてゐるうちに私がえゝ工合に賣りつけますからだうぞ〳〵！』

『その人はやるんかい、これは？』おかみさんはパチッと指を鳴らしてみせた。

『いやなか〳〵、こりや土佐の大きな金持の家の若さんじや、そんなことはせぬわい！』

『そんでもさんしま位はするだらう？』おかみさんは彼の顔をジロ〳〵見た。

『はゝ！そんな吾々ふうぜいのやうな惡いことはせんわいや、つい多まで上方の學校へ出よつたんぢや！

彼は赤い顔して腕時計をいぢつた。

『さうかい、わしや又何處かの素人バクチをつれて來たんかと思ふて！』

『失敬なこと云ふなよ、百萬長者の若さんじやぞ』少し聲を落して『俺の手にかゝりやこんなもんじや、まア肴でも拵へて酒でも出して呉れ、お金はいくらでも俺がひきうける、この馬を俺が握つて居るからなう！』

『まアねんごばつかりはたかずに馬でもつないで來ては入や、若さんお入り！』

『どら、おは入りなされ若さん、お家のやうに綺麗な處ではありませんが！』

『おすゝぎ取ませうか？』

『遠慮することありません若さん、これじやによつて困るんじや、めんめらの家の若い者であつて見い、ナニ！たまで遠慮つて云ふ物を知らぬは、こゝがえゝ處かな、まア若さんおは入り！』かう云ふと馬喰は右手の方へ馬をつれて行つた。

『さアだうぞ、こゝでおすゝぎ下さい！』若い女中が湯を持つて來た。

彼は狸につまゝれたやうな氣がした。そして怖々は入つて行つた。

『これがお湯に、これが水、下駄こゝに置きます。さアだうぞ！』女中は盥の中へ湯を入れると奥へは入つた。

彼は御料理、と書てある行燈の下で足を洗つた。

『足お洗ひになつたらだうぞ上つて御ゆつくりお休み下さい、だうぞ！』馬喰は這入つて來ると膝をかゞめて云つた。

彼は馬喰の顔を見ないやうにして上つて行つた。

『一號より三號の方が暖かいだらう？』

『オゝ、うんとえゝ部屋でふんと御馳走して呉れよ、なう！』

彼がぼんやり立つてゐると奥の方で酒を飲んでゐる人達が彼の顔を見た。彼は俯向た。

『だうぞこちらへ！』若い女中が火鉢をかゝへて來て彼に部屋の案内をした。

女中は火鉢を置くと彼に座布團をすゝめた。そして、出て行く時、彼の顏をジロ〳〵見た。彼はそこに坐つたが吹き出したくなつた。だうしても狸か狐につまゝれたとより考へられなかつた。

『酒持つて行つて吳れ、ご飯も一緒でもえゝから！』馬喰がかう云つてゐるのを聞くと彼は聲を殺して腹を抱へて笑つた。

足音がしたので頭を上げると、女中が來た。

『お待遠ふさま！』女中はかう云つて膳を置くと出て云つた。

『知らぬわいな、この小父さんちや年寄たてらが！』

『そんなに怒るな、俺にやつて若い主よりえゝ處があるやらわからぬぞ！』

彼は又わけもなくおかしくなつてしのび笑ひをした。

『俺が酒でも持つて行つたるどら？』

馬喰と女中とは彼の前に來て坐つた。

『だうも若さん、遲くなつて濟ません、どらおやすさん、お前若さんの前に行け、俺もう食ふたらよしじや！』

彼はてれかくしに俯向て時計をいぢつた。

『オイ、だうな、あんな時計ほしくないか？』

『又小父さんちや！知らぬわいな！』

『さア、若さんおあがり！』馬喰はかう云つた。彼は頭を上げた。そして、盃を取つた。燗德利の尻をつまんでぐるぐる廻してゐた女中は彼の方へ燗德利を出して酒をついだ。

『一つ行かうかおやすさん、年寄がいやなら若さん、それ、若さん遠慮いらぬでよ、あんたのお金であんたが呑む人じや！あの馬賣りやなア！』

彼は酒もさうほしくはなかつたが、何か呑むかしないときまりが悪いので酒を呑んだり肴を食つたりした。

『あゝ、醉つて來た！』彼は赤くなつた顔を撫て云つた。

『弱いなア若さん、こんなこまい盃で三つ四つ呑んだと思ふたら早金時のやうな顏してる』

『小父さん、歌聞かしてよう！』

『俺りや近頃のやうな氣のきいた歌は知らぬ若さんにやつてもらへ若さんに、あゝ！ある〳〵こりや一人呑みじや！あゝ！若さん、醉つたらそこへお休み、こら枕出して來てあげ若さんに！』

『だうぞおいきなして、』女中は徳利を差出して云つた。

『………』彼は赤い顔をニタ〳〵させて手を振つた。

『枕出して來ませうか？』

『出して來い、若さんは俺の相手にならぬ、俺又寢處で呑むは！あゝハハハ！酒なくてエエ、なんで俺がか、あアキタコラコラか、あゝヘハヘトヽヽ寢たらえゝ寢たら！』彼が坐つたきゝ眠つたふりをしてゐると馬喰はから云つた。

彼は女中から枕をもらつてすぐそこへころりと寢た。

『小父さん、そしたらお寢處の方へ引きませうか？』

『オヽ！あつウ、酒さへあつたらかあゝフウあゝ！』

彼はいつの間にか眠つて了つた。馬喰が居なくなつたじや女中が膳を引いて行つた時には閉つてゐたが、それからは何に

も知らなかつた。

『若さん、若さん！』足をたゝくので氣がつくと、酒に醉つて眼のすわつた馬喰が來てゐた。彼は起きて坐つた。馬喰は彼の耳の傍へ口を持つて來た。酒臭い息が彼の顏へかゝつた。

『えゝいうるさい、どうでもしまれ！つて云ふて吳れ。』馬喰はもう友達のやうな言葉使ひで小聲で云つた。――えゝいうるさい、どうでもしまれ！彼は心の中で云つて見た。

『うるさい、どうでもしまれつて、それが云へないか！』馬喰は怖ろしい眼をして彼を睨んだ。彼はギョッとした。

『えいうるさい、どうでもしまれ！』彼はかう云つた。

『もつと大きな聲で！』馬喰は又小聲で云つた。

『えゝいうるさいどうでもしまれ！』彼は大きな聲でかう云ふところりと寢た。

『かつてにしまれつてまア、棒にも杭にもかゝらぬ。そして早寢た。ためを思ふてこちらは小聲で相談すりやあの通り、布團きないと風邪引きます、おい！おやすさん、若さんに布團出してあげて吳れ！』馬喰は大きな聲で云つた。

『ハアイイ！』遠い處で女の聲がした。

彼は又眠つて了つた。

彼が二度目に眼が醒めた時には家の中はひつそりしてゐた。彼は腹が減てゐた。ふと怖ろしいわなにかゝつてゐるやうに不安になつて來た。――今晩はとても怖しいぞ！彼は布團を引き上げて顏を埋めた。――誰にも知られないやうに逃げ出してやらう、今夜が危いんだ。彼は起きた。そして、時計を見た。二時だつた。――もし逃げたことを馬喰が知つたら『馬鹿な若さんだ』とか『世間なれぬ若さんと云つてまア！』と位云つてごまかすだらう？いや逃げたら馬喰が

追つかけて來るかも知れない、しかし、馬喰は自分がお金を持つてゐないことを知つてゐる。いや何が何でも逃げよう！彼はそつと襖を開けた。臺處の方を見たが誰もゐない、彼はあはてゝ出て行つて地下足袋を穿いた。いよ〳〵人はゐないらしいので怖々戸外に出た。走らうと思つたが走ると氣付かれるやうな氣がした。といつてそろ〳〵してゐてはとつ捕へられてひどい目にあわされさうな氣がする。そこからもここからも自分を捕へやうとねらつてゐるやうな氣がするがうろ〳〵見るわけにもいかずたゞあたりに氣をつけて俯向て歩た。もし人が出て來ても逃げだしては駄目ぞ。ナニ！怖いことはない。

彼は一町ほど來てやつと安心した。——これまで來れば走つてよい、彼は大急ぎで坂を上つた。半町ほど上ると何だか後から呼ぶやうな聲がするので立とまつて後をふり向た。

『オ、イ！〳〵！待つて呉れ！』誰れか知れないが片はだぬいで走つて來る。

『オ、イ！〳〵〳〵！』片手で手拭を振りながら走つて來る。——逃げよう、逃げなきやいかん。彼はかうは思つたが逃げるわけにもいかなかつた。——馬喰かも知れない、いや食逃げしたから怒つて追つかけて來るのだらう？どだい又歩つて逃げ出すつてこつちが悪いんぢや、お金は馬喰さんにもらつて下さいて云て來ればよかつたのだ、こちらが悪かつた。待つてゐて云ひわけをしよう！

『ま、待つて呉れ！』背の高いよく太つた三十五六の男が傍へ來て息を切らしながら云つた。

彼は急に怖くなつて逃げ出さうとした。すると男は彼の手を掴んだ。

『オイ！逃げて見よ、命がないぞ！』と云つたと思ふと大きな手が頬ぺたに一つ來た。身體中が熱くなつて眼が見えなくなつた。

『ナニ！きさま如き者に！』かう云ふと又固い手がぺちやんぺちやんと彼の左右の頬をかわる〳〵毆つた。彼の眼からはタラ〳〵涙が流れた。

『オイ、食ひ逃げしてどうする心算か、いくら逃げたつてきさま如き者、ヘン！むざ〳〵逃がす男じやないぞ、金出せ、金を！』男は彼の右手を痺れるほど力を入れて掴んだ。

『…………』

『オイ、こら、默つてゐても濟まぬぞ、何か出せ、金がなけりやなんでも出せ、それでも若さんか、クソ馬鹿！』男は額の汗を片手で拭いた。だうしても彼を掴んだ手ははなさない。

『シエツ、シエツ、シエツ！』彼は心の内で――馬喰さんが私を欺してつれて來たのです。と云つてゐるのだがだうしても聲が出なかつた。

『泣たつてわかるか、泣くより金を出せ、金を！』男はしつこく云つた。

『バ、馬喰さんに云つて下さい！』

『ナニ！馬喰さん、あんなどてんぐがあてになるか、馬を賣りとばして逃げて了つたでないか！』男はグッと彼の顔を睨んだ。

彼はゾッとした。頭から水をあびせかけられたやうに寒むくなつて慄だして來た。――俺はいよ〳〵わなにかゝつてゐたな！と思つた。

『金がなけりや何でも出せ、その時計でも置て行け！』

彼は時計を見た。そして、掴まれた手で左の手の時計をはずした。

『きさまはまアこれでこらえてやるが、逃げやがつた馬喰奴、俺は告發してやる。もし逢つたらさう云つて置て呉れ！』

男はかう云ひはなすとすた〳〵阪を下つた。

――走つて逃げるかどこか山の中へは入つて隱れたらよかつた。それともあべこべあの男を毆りつけてやつたらよかつた。しかしまアえゝ、あれだけでも渡しをきや後でごた〳〵がなくて濟むだなら。彼は上りながら毆られて熱してゐる頰を撫でゝ見た。赤くなつてゐるやうな氣がした。口の中まで熱いのでペツと唾を吐た。唾が赤かつたのでも一度大きな石の上へ唾を吐て見た。唾には血がまじつてゐた。――齒から出たのだらう、齒のもとから。彼は舌で齒のもとをなめ廻してはペツ〳〵唾を吐てどん〳〵阪を上つた。

8

彼が道を迷つたりして避病院にたどりついた時はもう薄暗かつた。

彼は馬をつないであつた處を通る時、馬の小便や糞をふまないやうにと思つて氣をつけて通つた。彼は入口の柵前の中へペツと唾を吐て小便をしながら、――でも逃げて來てよかつた。晩までゐたらどんな目にあふか知れないのであつた。と思つた。そして、急で家には入つた。

『あら！』と彼は思はず叫んだ。いりこのざるがなかつた。棒もない。『あら！』彼は青くなつた。寢臺の下を一つ一つ覗た。莚を入れてあつた押入を開けて見た。――ない！どこにもない。どこかへ置忘れたやうな氣がするしかし、今朝出る時こゝへ置たのだ、この寢臺の上に、家が違つてゐるのかも知れない、彼は寢臺の上の莚をよく見た。――これに馬喰が來て、これに[illegible]た。[illegible]そのまゝ[illegible]しかし、こんな[illegible]たのは[illegible]のかも知れない、いや

馬をつないだ跡があるからこゝに違ひない。こゝで辨當を食つたぞ。箸を捨てゝあつたらさうだ。彼は寢臺の下を探した。よべ作つた太い箸がころがつてゐた。たしかだ、家をまちがへたのではないあの馬喰に盜まれて了つたのだ。彼は尙あたりをキョロ〳〵見た。――馬をつないだ處を見ればわかる。彼は又戶外に出た。土に鼻をくつけて馬の足跡に雨があたつてゐるかだうかを見た。馬の小便はまだ乾かずにゐる。又糞をつゝいて見た。生々しい匂ひだ。入口をよく見た。やはりこの家にちがひない。中へ這入つて又寢臺の下を見た。――いよ〳〵盜まれた。あの馬喰に違ひない、彼は寢臺に腰をかけて考へた。――いよ〳〵盜まれて了つたあの馬喰はどろぼうだ、俺を欺す心算で馬をつれてきやがつたんだ。彼は又寢臺の下を見た。――いよ〳〵ない明日から乞食だ、この山中で乞食するつて何處に家がある。あつたつてなかつたつて家を探して何でもかんでも貰つて食はなくちや死んで了ふぞ！

『ナニ！ぐず〳〵云ふならどこへでも出て行つてやる。』さよ子が淸水と結婚したのでやけになつて町の料理屋で酒を呑んでゐた時、父が小言を云つたのでかう云つてのけた。

『阿呆！われらが出て行つたら乞食だ、よいなりたれじや、もうお嫁さん貰はにやならぬのに、そんなことではお嫁さんの來手もないは馬鹿たれ！』

『乞食にならうが何にならうが俺が好きでならんじやほつとけ！』

『えゝい！腹のたつ死んで了へ！』

『死なうが生きようがほつとけ、家の財産みなつかいはたしてやる！』

『ナニ！』父が怒つて薪を投げつけたことを思ひだした。それから、――ナニ！俺だつて見て居れ、うんと儲て故郷へは錦を飾つて歸つてやる、さよ子に羨しがられるやうになつてと思つて家を飛び出したが父の云ふ通り乞食だ。彼は

又、よべから今までのことを考へて見た。やはり本當だ。夢ではない。又寢臺の下を一つ〳〵叮嚀に見た。押入も開けてみた。やはりない。彼は又寢臺に歸つて腰をかけた。

『だうしたんなこれは！』彼は自分で自分を毆りつけたいやうな氣になつた。拳骨でうんと寢臺を毆りつけた。手が痛かつた。涙がぽろ〳〵落ちた。

『ナニ！クソ！』又毆つた。そして大きな聲を出して泣いた。

しばらくすると彼は泣き止んだ。泣いたり馬鹿らしい、この位のこと、これから又うんと苦るしい目にあふんだ、何んな、この位のこと、それより早く寢よう！

彼は身體へグル〳〵莚を卷て寢臺の上でころ〳〵ころげた。――どんなに考へたつて考へるだけ馬鹿だ、父親が、出て行つて見よ、きつと乞食になつて歸るは、と云つたから乞食になられないと云ふことはない、乞食になつたつて何事がある。それが何で恥かしい、恥しいもクソもあるものか、しかし、さよ子はよい男と結婚してよい百姓のお嫁さんになつてゐる。俺が乞食になつて歸つたら、さよ子は俺と結婚しなかつたのが仕合であつたことを思ふだらう？そして、うまく逃げたことを喜んであの清水の腕に抱かれて清水に感謝するだらう？それがしやくだ。……だがよい、いくら喜んだつてよい、喜びたいだけ喜べ、俺は乞食になつて歸つてやる。ナニ！おじるものか！彼はごろ〳〵ころげた。そして、眠らうとあせつたが足が冷たくてどうしても眠れない、彼は起きて足にござをまきつけ、その上から莚を卷た。そして餘つたのを頭から冠つてごろりと寢ころんだ。

――もうなんにも怖くない、怖いつて自分をよく見せようと考へるからだ。もうよく見せたくない、なるべく惡く見せてやる。ナニ！安心して眠らう？彼は眼をつぶつて何にも考へまいとつとめた。すると、馬に乘つて走つてゐるやう

に色々の物が頭の中をチラ〳〵チラ〳〵と走つて行つた。と、冠つてゐる莚の臭い處から秋の收穫時のことを思ひだした。もう新甘藷を掘つて食つてゐたこと、柿が甘くなつてゐるのを田へ出て行く時食ひながら鎌を研だこと、隣村へ養子に行つてゐる叔父が土産にまんぢゆを持つて來て與れた子供の時を思ひ出した。まんじゆを食ひながら高く積んである莚の上で遊んでゐると祖母が見付て怒つた。怖くて飛び下りると後から積んであつた莚が崩れて來て尚怒られた。その怒つた祖母の顏はまだ彼の頭の中にはつきり殘つてゐるが今はもう死んでゐる。

『一杯呑んでから眠るは、醉つた間に、』かう云つて叔父が見舞に持つて來た保命酒を盃に一杯呑むと眼をつぶつた。そして眠つて行つた。鼾が高くなつたと思ふともう呼んでも呼んでも返事がなかつた。頭もとにゐた父母達や叔父や叔母が起こすと祖母の鼾は小さくなつてたう〳〵死んで了つた。その時のことがあり〳〵と彼の頭に浮んで來た。

『お醫者さんが死ぬ云ふたんなへ、濕布してよ、してよ！うちいつ死ぬん！』肺炎で去年の夏死んだ妹が又浮んで來た。彼は息が窒るやうになつて來た、又ころ〳〵ころげた。

『久子ちやんと、おつるちやんとが綺麗にして呼びに來とんなへ、うちにも綺麗な着物出して着せてよ、着せてよ！』妹は死んだ友達のことを云つて泣き出した。

彼は起きた。身體に卷てゐた莚をはねのけ、足に卷てゐたござも取つた。

『すみ子！すみ子！』彼は泣きながら死んだ妹の名を呼んだ。

『早くよくなつて、俺と二人で自動車に乘つて津の峯さんへお詣に行かうなう、綺麗な着物着て！』と彼が云つた。

『いつ、明日？兄や、うち死ねへんなア！』妹は息をするたびペコ〳〵動てゐる鼻を、蠟人形のやうな手でこすりながら大きな眼で彼を見つめて云つた。それがあり〳〵と浮んで來た。

『すみ子ーすみ子ー』彼は又妹の名を呼んだ。そして歩きまわつた。

――妹は死んで了つた。もう話も出來ない。

『すみ子、すみ子、俺はお前の傍へ行きたい迎に來て呉れ！』かれはかう云つて寢臺に倒れて大きな聲を出して泣いた。

――だん〳〵かうなつて人間は死んで行くのだ、俺がかうしてゐるうちにでも誰か死んでゐるに違ない。かうしてゐるうちに父母達もいつか死んで了ふのだ。話したくつたつて話も出來なくなるんだ。父母達の顏が見たい、逢ひたい、明日からこつ〳〵歸らう、歸つて父母達と一緒に百姓をしよう？

彼は又身體へ氈を卷た。そして寢た。

9

彼が氣がつくと明るくなつてゐた。しかし起きたくなかつた。凍つて了つた足を縮めた。――ナニ！歸るものか、このまゝ死んで了つたつて！彼は小便がしたいのであるが小便に出るのも大儀であつた。腹はもう馬鹿になつたらしい、空つたやうで空らないやうである。胸が木の枝か松葉か、さもなくば針でも食つてゐるやうにだうかすると、ずきんずきんいたむ。丁度何かさすものを食つたやうに。彼は頭を上げてまたあたりを見廻した。だうしてもいりこはない。馬喰が寢てゐた寢臺を見てゐると寢臺の下に、飯のもぶれた梅干が一つころがつてゐる。彼はあわてゝ起きてそれを拾つて口の中へ投げこんだ。そして其の勢で押入の處へ行つても一度中を檢べた。しかし、いりこのきろはない。彼は戸も締めないで戸外に出た。そして戸口の積雪の中へ小便をした。小便が濟むと馬をつないであつた處へ行つて又檢べてみ

た。やはり食ひ殘つた青い木の枝や、莢は生々しかつた。と、急に横腹が痛みだした。彼は腹を押へて谷へ向いて下りた。そして、ガブ〳〵水を呑んだ。冷たい水が胃へ流れこんで、だん〳〵陽の方へ下つて行つたと思ふともう腹の痛は止んだ。彼はそこで口へ出て來さうになるだけ水を呑んだ。そして、又奥へ向いて山を上つた。

もう太陽が頭の上へ來て、自分の頭のかげをふむやうになつた頃彼はやつと家を見つけた。喜んで彼は家の方へ下つて行つた。そこには色の青い爺さんがぼろ〳〵の着物を着て薪を割つてゐた。

『今日は!』と彼は云つたが爺さんは頭を上げない。

『今日は!』

彼は爺さんの前へ行つて立つた。すると爺さんは斧を持つた手を休めてうるんだ眼で彼を覗いた。

『お偉いな爺さん!』

『え〻、年が寄るとどうも耳は聞えぬし眼こ玉は見えぬやうになり、話も何にも出來まへんは!おまはんはどこで?』

『わたしや日和佐です。』

『え〻?』爺さんは頭を傾けて聞き返した。

『日和佐!』彼は大きな聲で云つた。

『日和佐?』爺さんは又うさんさうな眼つきで彼の顔をジロ〳〵見た。

『爺さん濟ませんが、わたしや昨日から御飯をたべないんじや一杯でもえ〻のつてたべさせて與れんで?』

『それや困つたなう、ま〻こちらへおいで!』爺さんは手を少しかゝんだ腰の上に置てひよこり〳〵家に這入つた。彼もついて行つて上りたてに腰をかけた。

爺さんは土間から這ふやうにして行つて爐の茶釜の蓋を取つて茶びしやくで中をつゝいて見た。そして、又役ずさりして土間に降りると彼の方を見て云つた。

『こつちいおいで、俺も今のさきたべたんじやまだ茶は温いは、そらうまいものはないけんどなう!』爺さんは戸棚から小さいお櫃にたくあんの入つた鉢を出して呉れた。

『ありがたう!』彼はかう云つて爐の傍へ行つて腰をかけた。

『もう膳も出さんぞ、これ!』と云つて茶碗と太い自分で作つたらしい箸を彼の前へ差出した。

『ありがたう!』

『あがりやえゝのに!』爺さんはかう云つて出て行つた。

彼はお櫃の蓋を取つた。中にはまん丸く脹れた黄色い麥ばかりらしい飯が入つてゐた。それでもうまかつた。彼は三杯食つて出て行つた。

爺さんは薪に腰をかけて煙草を吸つてゐた。

『だうも御馳走さまでした。』

『このあたりは田がないので麥やきびばつかり食つとんじや、うまくなかつたらうなう?』

『いやうまかつた、これで助つた。』

『いつたいお前はこんな處へだうして迷ふて來たんな、日和佐のやうな處から?』

彼は百姓が厭で大阪へ逃げて、又大阪が厭になり、山岐まで歸つてこつそり、他國の者のやうな風で魚屋になつて今のやうになつたことを話した。

『いや、若い時は誰でも同ぢや、俺も若い時に、まだ十八位の時じや、こんな山奥がいやで京都まで飛んで、風呂屋の三助をやつたり、車引をやつたりして三十三の時、よごれたふんどし一つはさんで又もとの山の中へまひ戻つて來たんじや、いやもう、木を食ふ蟲は木を食ひ、土いぢる蟲は土をいぢつて居るのが一番えゝ、早よう日和佐へ歸つて百姓ならもとの百姓をするのがえゝぞ！』爺さんはかう云つて彼が何と云ふか聞かうとするやうに頭を傾けて、彼の顏を見た。

『あゝ、わたしも、こんな風で歸つたら恥かしいけんどもう歸らうと思ふてゐます。』

『おゝ、さうするのがえゝ、俺が若いと一緒に行つてお父さんやお母さんに云ひわけしてやるんじやけんどこれだけ年とつてはもう口ばかりですねがたゝんのつてなう、まア思ひ切つて歸つてみい、親つてありがたいもんじや、何にも云えへんぞ、かえつて喜ぶは、それに恥かしいと思つても思ひ切つてそこへいきや思つたほど恥かしいと云ふこともないもんじや！』

『あゝ、歸ります。これからどつちい向て行つたらえゝぞいなア』

『お前は太龍寺さんへお詣に來たことあるか？』

『えゝ二三年前に一遍來たことがあります。』

『そんなら、これからこのあの道を、もう左へも右へも曲らずに五里ほど行きや和食つて云ふ處があろのつて、そこから少し行きや太龍寺へ行く道じや、それまで行きや、日和佐へは六七里ぢや、まア、思ひ切つて歸つてみい、生れた土地ほどよい處はないぞ！』

『ありがたう！そんならあの道を行つたらえゝんじやなア！』

『さうじや、あれをどちらへも曲らずに、一里ほど行くと大きな道路に出るは、そしたらその大きな道路を行けば和食へはひとりでに行く。』爺さんは立つて道をゆび指して敎へて呉れた。

『ありがたうございました。もう歸ります。』彼はかう云つて敎へられた道へ向いて上つて行つた。

彼が一町ほど上つて行つて家が見える處で立止つて家の方を見た時、爺さんはもう薪を割つてゐた。

――ありがたう、親切な爺さん！彼は心の内でかう云つて薪を割つてゐる爺さんの方へ向いておぢぎをした。

――あの爺さんが云ふやうに歸らう、こんな風に落ぶれて歸つても父母達は喜んで呉れるだらう、父母達の傍でまじめに百姓をしよう！彼はかう思ひながら坂を上つた。

10

彼がやつと大きな道路にたどりついた時は夕方だつた。彼はがつたりつかれて了つた。時々膝坊子が折れるやうになつてそこへつき坐りさうになつた。彼は小さい時、いたずりと同じあぢがするのでよく食つてゐたしぶ草を見つけてそれを取つて懐へねぢ込み、それを食ひながらぽと／＼歩た。何處かに家があつたらたのんで納屋にでも泊めて貰ふ、と思つて歩てゐたが山の中なので家は見つからなかつた。自動車がほこりを蹴たてゝ飛んで行つた。ぽと／＼歩てゐるのは彼一人で道きく人もなかつた。でもしぶ草を食ひながら歩く彼には惡くはなかつた。人が澤山通つてゐるなれば彼はとてもしぶ草は食えないのであつた。

だん／＼山が淺くなつて處々小さい田が二三枚あつたり桑畑があつたりするやうになつた。でも家がありさうな處ではなかつた。しかし、もう家がどつかにあることは確だつた。そんなに遠い處へ桑畑を拵る苦がない。だん／＼歩て行

るうちに又畑も田もなくなつて了つた。又山ばかりの道か、もう山はいやぞ！と思つてゐるうちに道路は大きなカーブになつた。さき來た道に手がとゞくやうに近くなつて來て又反對に曲つた。と前は開けた。道路の下には田がずらりとならんでゐた。そして、處々もり〱と黒くなつた處からはチラ〱灯が踊つてゐた。家があつたら薄情な家はあつても親切な家もあるに違ひない、どつかに泊めて異れるだらうと思ひながら彼は喜んで歩た。と、道路から二三間離れた處に掘立小屋があつた。彼は喜んでそこへは入つた。中には藁が一杯つまつてゐたので彼は倚うれしかつた。彼は早速藁の中へもぐりこんだ。全身は藁に埋まつて頭だけ出してゐるので寒くはなかつたがしぶ草を食つた、氣持の悪い、青臭い馬のへのやうなキヨツプがしきりに出た。そして腹の中がグウ〱鳴つてしきりに騒ぎだした。吐き氣がして來たので彼は小屋の戸口へ行つて吐た。腹の中が空になるだけ吐くと氣持よくなつて又小屋へ這入つて藁の中へもぐりこんだ。頭がクワツ〱と熱してサツク〱痛みだして來た。後首をつまんでみたりたゝいてみたがなか〱癒りさうにない、眠つたら癒るだらうと思つて眼をつぶつても眠れない。と、どつかに人音がして話聲が聞えて來た。しかし彼は眼をつぶつたまゝ、早よう眠らうとばかり思つてゐた。

パタ〱戸口を走つた足音だつた。――子供だ、今のは子供の足音だ。彼はかう思つたが眼を開けて見る氣力もなかつた。と又走つた。又、又、

『居らぬなら、藁の中へ隠れたんじやなら、子取爺かも知れぬぞ、』

『盗人ぞ、今夜氣をつけぬといかぬぞ、この頃盗人がじようにある云ふて新聞に出とるだらうがそら、それが廻つて來たんじや！』から云つてからぶつ〱小聲で話してゐた。彼は眼を開けて戸口を見たがすぐ又つぶつてしまつた。

『ド盗人掛てるせ！』

『ド盗人出てうせ!』

『ド盗人出てうせ!』

子供の聲でかう叫んだ。

『いんでと〻(父)に云ふたろ、俺家の小屋盗人の巣になつて了ふ。皆俺家へ行かんか!』かう云つてから子供達は聲がしなくなつた。――だうでもなれ、こ〻追ひ出されたつて父どこかに何かあるだらう!彼はかう思つた。そして、眠らう!としてしきりに頭をつまんだり首をた〻いたりした。

彼が眠りか〻つて、トロ〳〵した頃ドヤドヤ人音がしだした。

『うんなぐつたら出て行くは、』

『どんな人であつたら?』

『大きな男の人であつた。』

『ナニ!うんなぐつてやる、グズ〳〵云やなう!』

小屋の戸口が明るくなつた。彼はなんだか恐くなつて來た。

『オイコラ!出てうせ!乞食奴!』戸口で大きな聲で怒鳴つた。

『何にも悪いことはいたしませんからだうぞ今晩だけこ〻を貸して下さいませ。』彼は怖々かう云つた。

『ナニ!きさまに貸すためにこの小屋は拵てあるのじないわい、出て行きやかれ、こら!ちん畜生』と云つて大きな棒でそこらをとん〳〵た〻いた。土地が慄へて行つて彼の身體まで揺れた。

『ぐず〳〵するとうんなぐるぞ、こら!出てうせやがれ!』太い棒でとん〳〵地面をた〻く音がした。

彼は怖々出て行つた。戸口に行くと二三人の子供の中に大きな男が一人棒を杖にして立つてゐた。彼を見ると提灯は揺れた。するとブンと空を切つて棒が彼の足に來た。

『ア痛！痛い！』彼はそこへばつたり倒れた。

『こん畜生たゝき殺すぞ！』

『ア痛！殺して呉れ！殺して呉れ！もう動けないぞ！』

やがて又棒が來た。しかし彼にはとゞかなかつた。地面をばた／＼三つ四つ續けてたゝいた。彼は——だうでもしやがれ！と云つた氣で動かなかつた。

『こら！行かないかこら！』

『殺せ！殺せ！殺して呉れ！』彼はもうこのまゝなぐり殺されたかつた。

『こん畜生、ゆすり奴！もう一度この小屋へ足一本ふみ込んで見やがれ、今度こそ命がないぞ！もう行け！歸らう？』かう云つて提灯は行つて了つた。

『殺されたらえゝ位だ、殺してもらひたい！』彼はかう呟て立つた。膝坊子の下の方がずきん／＼痛んだが歩くことは出來た

彼は跛をひきながら又小屋に這入つた。

11

彼は五六里の道を三日かゝつて、やつと白濱と云ふ處まで來た。こゝからは日和佐までもう二里である。道はよく知

つてゐる。近道を通れば二時間かゝれば家につく。しかし、熱がして頭が痛む彼はもう動けなかつた。彼は砂磧へ下りて、どこか寢る處はないかと思ひながら步た。と子供が遊んだらしい深い穴があつた。彼はその穴へ這入つて寢た。首筋から砂が流れこんで脊の方まで入つて行つたが着物の前をかき合せて入つて來る砂をふせぐのも大儀だつた。足を縮め、手を胸で組んだまゝ小さくなつた。サック、サック、頭の中で大きな動悸がうつので、その一つ一つに身體が動くやうな氣がした。そして、時々その動悸が稻妻のやうにトキ／＼と二つ續けてうつと、頭の中の太い、血の一杯入つた血管が破けはしないかと思つた。この血管が破ける時、人間は死ぬのかも知れないと思つた。眼をつぶつてゐるのに眼の前を桃色の火の玉や紫の火の玉が流星のやうに、左から右、右から左と飛び散つた。

――これで、こゝで此まゝ死ぬかも知れない。と彼は思つた。藁小屋から出て三日間ふら／＼步くうち、アジ（魚の名）の干物の車にひかれてきれ／＼になつてゐるのを一つ拾つて食つたきり、何にも食はないのに、時々吐氣がして、ギョウ／＼えづいた。

――こゝでこのまゝ死んだら何處の者ともわからずに、村の共同墓地に埋められるだらう？父母達は俺がやはり大阪のどこかに働てゐることを想像してゐるだらう？そして、こゝで死んでゐることを夢にも思はないだらう？いつまでも、いつまでも俺の無事に歸ることを待つてゐるだらう？年取つてもう働けなくなつても、もう歸つて來るだらう、早よう、俺達が眼の黑い內に歸つて來るとよいが、命があれば歸つて來るだらう、死んではゐないだらう、今の世じやどこで死んでも知らせがあるだらう、生きてゐるのなら早く歸つて來るやうにと、いつまでもいつまでも俺の歸るのを待つだらう？あゝ！父母達に済まない申譯に書置がしておきたい、彼は眼をつぶつたまゝ横を[illegible]こみた。小さい手帳を懐で[illegible]つたがもう臨時だし、書く元氣がなかつた。水が呑みたかつたが動くこともいやだつた。暗くなつたから／＼の

口で熱い息を吐き出した。足を穴から出してみても氣持惡かつた。狭い穴の中でバタ〳〵手を動かすと、砂はだん〳〵崩れ落ちて身體を埋める。だん〳〵息苦しくなつて來る。頭がしきりに鳴る。

『あゝ！苦るしい、助けて呉れ！あゝ！……とたう（父）、なぜ泣てゐる。うち死ねへんぜ！さよ子、お前泣てゐるのか。お前が泣くと俺は嬉しい。あゝ！かゝあ（母）起してよう、もう惡いことはせんのつて、よう、起して、』彼はかう云つて足をバタ〳〵させた。

『とたう、かゝあ、餅くれ、よう、もうすしいや、あゝ！起してよう！ばゞ（祖母）脊負つて一寸でえゝのつて！よう、柿うまい！』彼はだん〳〵ひどく熱にうかされた。

やがて又彼は口笛を吹く形をして口をとがらした。

『鳴りよつたのにどうして鳴らぬのだらう？』彼はとがらした口をもご〳〵させて吹かうとはしなかつた。やがて彼は御を撫でた。眼を大きく開けて暗いあたりをキヨロ〳〵見た。

『あゝ！とたう、かゝあ！ばゞ、あゝ！起してよう、すみ子！すみ子！あゝ起して呉れ！身體が痛い！』

彼はしきりにうはごとを云つた。そして夜が明ける頃大きく寢返をすると同時に息が切れて了つた。

12

彼の死體は夜が明けるとすぐ網ほしに來た漁師に見つけられた。彼の住處は彼の懐の小さい手帳によつて知れた。そして、彼の死體は日和佐の自分の家まで運ばれた。彼の手帳には住處の外にこんなことが書てあつた。

一、七圓　あわせ、羽織着物

一、四圓　ひとへ、羽織着物
一、六圓　其他色々
内
一、四圓　ハッピ股引
一、二圓八十錢　其他色々
一、五圓二十錢　イリコ一斗五升
一、一圓十五錢　籠二つ
一、三十錢　棒一本
殘二圓五十錢

それから三四枚中へ入ると、薄い鉛筆で次のやうなことが書いてあつた。

私はお父さまやお母さまに濟ません。私はお父さまやお母さまが云はれることや、なされることに腹をたてゝ町の料理屋でお金を使つたり、お父樣と喧嘩をしたのではありません。私はさよ子と夫婦になる約束をしてゐたのです。それをお父樣やお母樣にお話して、正式に結婚しようと思つてゐたのです。その内私がまだ、お父樣やお母樣にその話をしないうちにさよ子は、こつそり、私に何にも云はずに清水と結婚したのです。清水と私とは小さい時からの友達でせう。それだけ尚私は清水にまかされたやうな氣がするのです。其後のさよ子は私にものも云ひません。私を見ると逃げるやうにするのです。もし、さよ子が私に濟ません。とでも云つて云ひわけでもして呉れたら私はかうやけを起さなくても濟むのでした。清水は私にはものは云つて呉れても、何だか勝ほこつたやうな顔をしてゐるやうに私には見えました。私に取

がたちました。私はさよ子と清水とが仲よく話しながら仕事をしてゐる處をよく見ました。私はたまらなく淋びしくなりました。さよ子と清水のことを思ふと身體が痺れるやうな氣がしました。そしてどうしてもかうしてもゐられなくなりました。やけを起して町の料理屋で酒を呑みはじめました。酒を呑んでゐる時は全部忘れてゐますが酒の醉がさめると一倍淋びしくなつて來るのです。そして、だん〳〵身の置き處がなくなつて來るやうな氣がするのです。それで私は家を逃げだす氣になりました。大阪へ行つて一ケ月ほどゐましたが歸る氣になつて由岐まで歸りました。すると又、ひどくさよ子と清水のことが頭をもたげて來ました。………これまで書てあるのは讀めたが後は消してあつてはつきり讀めなかつた。しかし、これだけでもう色々の想像はついた。それから又、三四枚入るとかう書てあつた。

俺は今死なうと思ふ、こゝからは新野町が見えてゐる。もう家へは五里位だ。俺は今乞食同様になつてこゝまで來たのだ。俺はお前に捨てられてからやけを起して、身をもちくづしたのだ。お前が清水と結婚する時、俺に何とか一言でも云つて與れたら俺はあきらめをつけるのであつたのだ。そしたら今のやうにならなくて濟むのであつたのだ。しかし、かうなつた今、もうなんと云つたつて仕方ない。と云つて今でも俺はお前が清水と仲よく暮してゐるとを思ふと身體が痺れて來る。俺がかうなつたことを、お前と清水が話合つて嗤ふことを思ふと俺はもうこの身體をひき破て了ひたくなる。どうか、いまはのお願だ嗤ずにゐてくれ、俺はお前に嗤れることを思ふと、死にも出來ず、生てもゐられない。どうかお願だ。俺を可愛想な男だと思つて與れ！そしたら俺は嬉しい。今の俺はたゞもうお前に同情してもらつたら、これ以上のことはないのだ。お前は俺がこんな乞食になつてこんな處で自殺をしたことを知つても嗤ふまい、俺に同情して泣て與れるだらう？泣て與れそしたら俺は喜ぶ。そして、俺はお前と清水との幸福を祈つて死ぬことが出來る。泣て與れ、お願はこれだけだ。

こゝまで書いてこれもやめてあつた。

『さよ子さんが來て呉れたらなう、そして末期の水でもやつて呉れたらなう、重吉も喜んでよい佛様になるだらうが。』

叔父はかう云つて泣いた。

『わたしやさよ子さんを恨む、重吉はさよ子さんに殺されたやうなもんじや！』彼の母はかう云つて泣いた。

『ナニ！あれが惡いのぢや、重吉が惡いのぢや！世の中に女は一人ぢやなし、自分を捨てゝよそへ嫁入した女をいつまでも思ひつめて苦るしむ馬鹿があるか、あんなこと書てあつて淸水さんへ氣の毒でないか、もうさよ子さんの噂が村一杯になつただらう？』父は涙を流しながらなぐさめるやうに云つた。

『一方は死ぬほど思ひつめてゐるのに一方はだまつて他へ嫁入するつてまア！薄情な！』彼の母は又かう云つて泣いた。

『あれが氣が狹いんじや、わが身を恨むよりあるか、あれが惡いのじや！』彼の父は又かう云つた。

『まアなう、さよ子さんも他處へ嫁入しとるのつて、さうあかりだつては出來まいが、あの人がさとがへりにでも來た時にこつそり墓參りでもして貰はんか、そしたら重吉も喜んで佛さんになるは、何よりもあれは死ぬまでさよ子さんのことを思ひつゞけてゐたのに逢ひないんじや、さよ子さんにやさしい言葉の一言でも云つてもらひたかつたんじや。何でもなう、あれの心を迷さぬやうになう、えゝ佛さんにしてやらんか、泣くな、泣たつて戻るもんじやなし、あれを喜ばせて極樂へやつてやらんか、』叔父も涙をこぼして皆をなだめた。

『重吉よ、俺がさよ子さんに逢つたら話してやるのつてなう、えゝ佛さんになつて呉れ！そしてなう、お盆やおひがんにはきつとお墓參をして貰ふてやるのつてなう、えゝ佛さんになつて呉れよ！』父はかう云つて、泣きながら、彼の大きな眼を開けた顏を撫でた。

彼の母は俯て了つて頭を上げなかつた。

夕方になつて村の人がだん〳〵悔みを云ひに來だしたので彼の父と叔父は出て挨拶をした。村中たいがいは來たがなぜか淸水とさよ子の家は來なかつた。――氣の毒がつて來ないのだらう？彼の父も叔父もかう思つてゐたがどちらからも思つたばかりで默つてゐた。

暗くなつてゞあつた。近處の夜とぎに來て吳れた人達も、彼の父母達も叔父も佛壇の前に寢た彼の頭もとに坐つてゐた。

『今晚は！』と云つて戶口の障子が開た。彼の叔父は出て行つた。上たてに倒れてさよ子が泣いてゐた。

『オヽ！さよ子さん！』彼の叔父は思はずかう叫んだ。

『濟ません！』さよ子はかう云つて又泣いた。

『だらぞ、さよ子さん、濟ませんが重吉を見てやつて吳れませんか、だらぞ！』彼の叔父は泣てかう云つた。

『あゝ！濟ません！』さよ子はかう云つて、叔父につれられて彼の頭もとに行つて坐つた。

『重吉よ！さよ子さん來て吳れたぞ！』父は口を彼の耳の傍へ持つて行つて泣きながら云つた。母は俯向たまゝ大きな聲を出して泣いた。

『濟ません重さん！濟ません重さん！』さよ子はかう云つて、仰向に寢た彼の身體をしきりに撫た。

『重吉よ！えゝ佛さんになつて吳れよ！さよ子さんが來て吳れてゐるんぞ！』父は又かう云つた。

『ありがたう！さよ子さん！ありがたう！』彼の母は大きな聲でかう云つてさよ子に抱きついて泣いた。

彼の父も、叔父も傍にゐた近處の人達も大きな聲を出して泣いた。

（十月二十日朝了）



しぐれ

——彼についてのおもひで——

久保田万太郎

一

「……その後、I畫伯の個人展覽會が本石町のT美術店で開かれたことがあつた。社から近いので、晝飯後か何かにちよつと覗きに行つたとき、羽織を着てゐない袴なりの、黒いくしや／＼のソフト帽に素足といふいでたちの、學校のノオトだか書物だかの入つてゐる風呂敷包を抱へた一人の學生に紹介された。それが彼だつた。『前彈き』の作者だつた。そのときのおのれの感じは、大ていの讀者の、作品のみを通して知つてゐる彼にはじめて逢つた場合とおそらくは同じであつたらう。」とかれは、ある雜誌へ宛て書いたわたしの「印象」のなかでかういつてゐる。わたしのはうではまるで覺えてゐない。いつ何處で、どうしてかれと知るやうになつたか？——ありやうはこれを讀んで、そんなことがあつたかしら、わたしは不思議に思つたくらゐである。——そのIといふ畫家との附合の、こゝ十年、全くわたしに

うち絶えたこと、Tといふその美術店の存在の、さういはれても直ぐにハッキリ思ひだせないほど遠い以前になつたこと。——さうした理由にそれの蓋しもとづくことはたしかである。

「羽織を着てゐない袴なりの、黒のくしやくしやのソフト帽に素足といふいでたち……」といふのから推してそれが春の末か夏のはじめだつたには違ひない。三田から淺草へかへる途中。——かれと知合になつたあとでも、ずつと、雷門のそばの親たちのうちにわたしはゐた。——そんなことのまだ珍しかつた時分だから、おそらくはもらつた招待狀を後生大事に本石町の角でわざわざ電車を下りたのだらう。さうしていつぱし心得たかほに畫をみてまはつたあと、當の主人のIに逢つて禮でもいつてゐるところへかれの來合せたものだらう。——「社から近いので」といふのは、その時分、本町のB圖書會社につとめて、そこから出る月刊の演藝雜誌をかれは主宰してゐた。

紹介されて、そのとき、おそらくはかれよりわたしのはうが叮嚀に頭を下げたことだらう。——なぜならかれの名まへ、猿男といふかれの名まへは博識な劇評家(といふよりは芝居道のわけしりとでもいつたはうがいゝかも知れない)として、中學の二三年ごろから、鬼太郎だの默阿彌だのと一しよにわたしのあたまに深く刻まれてゐた。——いへば一ト時代も二タ時代もまへの人、容易に自分たちの近づけない國に住んでゐる人としてわたしは特別な尊敬を拂つてゐた。——その人にまのあたり逢つたのである。……

『あ、さうですか……』

わたしが無言で頭を下げたのに對して、必とかれは、むッつり無愛想に、喉にあの引つかゝる感じの聲でさうこたへたに違ひない。それをまた、わたしは、かれの見識だぐらゐに高く買つたに違ひない。——とにかく、いつ何處で、どうしてかれを知るやうになつたかは忘れたが、かれを知つた當初、わたしにとつてかれが、無口な、取ッつきにくい氣

塞な相手だつたことだけはハッキリ記憶に存してゐる。――その以前流行つた劇評家仲間の素人芝居、屢々そのなかに交つて「九段目」のお石だの「日蓮辻説法」の進士太郎だの「戀の病」の七兵衛だのを演つたかれを面とむかつたかれのどこの部分にもわたしはみ出すことは出來なかつた。――短く刈りつめた頭、（それはよく眞砂座時代の井上正夫を思はせた）、固く結んだ唇、冷に澄んだ眼。――骨太のがつしりした感じの、あくまで色の黒いことが無暗に誰でもを許さないといつたかたちをみせてゐた。

無論、だから、その時分わたしの書いたものをかれが讀んでゐるとは夢さら思はなかつた。そのまへにわたしといふものゝしだいさへ眞實には知るまいとわたしは思つた。――といふことは、謙遜でもなく多寡をくゝるのでもなく、同じ芝居をみるにしても、さきは赤いところで、ちび／＼飲りながら幕間の長いのをいつそよろこぶ客、こつちは立見の、押つ返される人いきれのなかゝら夢中で舞臺へありつたけの聲をふりしぼる客。――生れ、育ち、境遇、氣質、年齢、さうしたものゝうへで、いへばおたがひの間にそのくらゐの隔りがあるとばかりわたしは思つてゐた。――もつとさツくにいへば、さきは酸いも甘いも知りぬいた通人、こつちは世間みずのほんたうの書生。――ちつとやそつと新聞で評判されたからつて、そんなまだ駆出しの若いものゝ書いたものが、方面違ひの、緣のないさうした向までさし響く理由がないとわたしは思つてゐた。――それには「演藝畫報」といふものがいまのやうにまだ「文藝雜誌」の色彩を帶びない時代だつたから……

が、結果においてそれはかれを安く買ふものだつた。「……それが僕だつた。『[illegible]彈き』の作者だつた。」とかれみづからいつてゐるやうに、はじめて逢つたときにしてすでにかれはわたしの讀者だつた。一人の、熱心な、有難いわたしの知己だつた。――[illegible]

らう！——同時に、わたしは、決してかれが劇評家。——さうした型の單なる劇評家に安住してゐるのでないことを知つた。かれもまた新しい戯曲のみちを心がける寂しいわたしたちの「仲間」だつた。——それまで、屢々、往來でみた、芝居の廊下で逢つた、無口な、取ツきにくい、氣塞（きよつせい）なかれの代りに、わたしは、よく飲み、よく語る、卒直な懐疑的な、殉情的な「青年」のすがたをかれのうへにそのときみ出したのである。

どうしてその訪問の機會がわたしに來たか？——忘れもしない、それは、自由劇場のN氏が二年あまりの外遊を終つてこつちへかへつて來た日だつた。八月半ばのわけもなく熱い日、いまの汐留（しほどめ）、そのころの新橋の停車場へ出迎へに行つたかへり、さそはれたまゝ八九人の、何とつかずの同勢と一しよに銀座をぶら〳〵した。ライオンだつたか烏龍茶だつたかで、各自それ〳〵好きなことをいつたあと、日ざかりをまた日本橋まで伸（の）し、さらにまた人形町まであるいた。——その間に、一人離れ、二人わかれ、最後にそこで麴町へかへる一人が電車に乘つたとき、あとに殘つたのはT君とわたしの二人だつた。——T君は、そのころ、佃島の海水館に泊つてゐた。

『どうです、君、これから猿男君のところへ行つてみませんか？』

急に、T君は、その人懐（ひとなつ）つこい感じの眼を輝かしていつた。

『………？』

わたしは默つてその顔をみた。

『知つてゐるんでせう、君？』

『それほど深く、しかし……』

『君さへかまはなければ先方（むかう）は構（かま）ひませんよ。』T君は事もなげに『愉快ですよ、かれ……』

そのまゝわたしたちは淺草行の電車に乘つた。雷門で南千住行へ乘りかへた。――吉野橋で下りて今戸へ入り、長松寺のそばといふことをたよりにうろ覺えの番地をあつち此方さがした。――T君はその少しまへ、ある知合の役者のために書いた歌舞伎仕立の戯曲を、望まれてかれの主宰する雜誌によせた。――その緣で、一二度、かれの好きな藝人なりT君の贔負なりの隅田川馬石と三人、吉原で徹宵痛飲したことはあつたもの〻、うちをたづねるのはそれが始めてだつた。入組んだ土地で幾らあるいても分らなかつた。さがしあぐんでふとした露次を入ると、急にまへに廣い空地がひらけた。――傾いた日ざしの、徒に伸びた雜草のかげに、夕づいた空氣が水のやうにすでにながれてゐた。

『君、T……君ぢやアないか？』

だしぬけに背後から呼ばれた。――ふり返ると、そこに、浴衣がけの、犬をつれたかれがとあるうちの門のまへに立つてゐた。

『どこへ行くんだ？』

重ねてかれはいつた。

『君のところへ……』

『僕の……？』

かれは眼鏡の底の眼をすくめるやうにして『こゝだよ、君。――入り給へ……』

すぐにその門のくゞりをあけてかれはわたしたちを導いた。わたしたちはそのあとに從つた。

どこかの隱居所をもつて來て建てたといふ木口のしつかりした、好みの質素な、その代り二タ間しかない座敷の狭いはうへわたしたちはとほされた。――で、通されるとすぐ酒が出た。――早くもたくへついた灯かげに、うすい紙にしら

に、「淺草」のはづれの淋しい空の光のだん／＼消えて行くのに遠く眼をやりながら、三人、水入らずの感じに盃をかさねた。——そこへたま／＼かれの古い友だちのSさんの來て加つたのに、それからそれ、話の枝葉はかるく伸びて行くばかりだつた。——十時すぎるまで、わたしたちは、時間の經つのを全く覺えなかつた。

「……珍客だ。何はともあれ酒になつた。そこへ同じ今戶に住んでゐるおのれ年來の友人Sさんが入つて來た。無論かれもT君も初對面だ。紹介よろしくあつて、Sさんは自ら魚屋へ走つて、いきのいゝ鰹の皮づくりか何かを取つて來るやらで、それこそ文字通りの馳走をしたものだ。但し交際尙日淺きおのれらの、爭か江戶つ兒のかれの刺身を食はざるを知らんやで、あとで考へるとこの馳走、大しくじりのわけだつたが、兎にも角にも話は大にはずんで、その夜の酒は——はじまつたのは晝間だつたが、この酒いふまでもなく夜にわたる——かれ流にいへばしだいよく醉つたものだ。

なぜおのれがこんなことをいふのかといふと、この夜の酒が、かれ及びT君のその後の作品に大した關係があるからである。それは、その自ら走つていきのいゝ鰹の皮づくりを取つて來たらSさんこそ、誰あらう、後にかれの『つゆじも』の主人公になつた人であり、T君の『夜』三部作に「堀留」の旦那としてあらはれるにいたつた人である。

T君の『夜』三部作は、これよりさき既に馬石の歌數首あり、その歌の話が機縁となつて、その後おのれと一しよにさるところで飮明しといふ荒事のをり、そこへ馬石を呼んでT君に會はしたことに據つてだけでも『夜』三部作の存在には十分であつたらうが、それにしてもその夜の酒がなかつたなら、あの作が「堀留」の旦那といふあの副主人公をえてあれだけの生彩は放たなかつたであらう。——同時に、T君に、この夜の酒がなくなつて『夜』三部作が生れたとしても、かれにはこの夜の酒がなかつたら、初期の『前弾き』時代と全くさまのかはつたあの『つゆじも』ならびにそれに屬する幾多の作品へのかれの進展はみられなかつたに違ひない。——由て以てかれの印象としては、おのれには、

この夜のことが最も鮮に映つて來るのである。」と、そのときのことを書いてかれはかういつてゐる。

まさにその通りである。そのとき以來、かれとの附合のみちのそこに開けたと同時に、わたしの藝術のうへの、それまで固くむすばれ解けなかつた思慕のみちの、わたしの將來にむかつて豁然開けるところがあつたのである。——そのころにあつての何萬と擧のかゝる身代、わづかな年月にこと〴〵くそれをつかひ果したものもちの晩年。——み果てぬ夢の、ほの白い、落莫とした生活。——それを取卷く落語家、幇間、發句の宗匠、仕事師、年をとつた藝妓。——さうした稼業の人々の夢のやうに行交ふ「黄昏」のすがたに、わたしの若い魂は、大きな、ふかい、涙ぐましい示唆をうけたのである。

そのときわたしは二十五だつた。かれは三十三だつた。——一ト時代も二タ時代ものけじめを感じたかれも、名乘つてみれば、わたしより三つ年舊のT君とわづか五つしか違つてゐなかつたのである。

二

が、間もなくかれは今戸から龜戸へ越した。——道法にすれば、わたしのうちから、以前とそれほどの違ひではなかつたが、橋を一つ渡らなければならないのが大へん億劫に感じられた。それには足場がわるく、その時分まだ、押上までしか電車が出來てゐなかつた。——そこで下りて俥に乘ると、萩寺のまへを天神さまの裏門まで、その時分で十五錢の丁場だつた。——裏門のまへの華表のわきを右へ切れると藤澤の師匠があり、そのとなりの組合のくゞり門を入ると、突當りに、土間の廣い格子づくりの平家があつた。——それがかれの龜戸に越したうちだつた。

どうして、斯う、氣のきいた、手頃子のいゝうちばかりうまくみつけるだらうとわたしは時に感心した。[illegible]

い。まへのうちよりもつとすべてにきどりをみせた。どこかの矢つ張「隱居所」のあとの、拭込んだ柱、腰張をした壁。——聞かずはなかつたが、二十坪ほどの、燈籠だの、枝折戸だの、あやめの淋しく葉を結んだ小流れだのをもつた庭が靜に緣さきに擴つてゐた。いかにも夫婦懸向ひ。——それも苦勞をし合つた末の人交ぜしない二人の住むのにふさはしいといつた感じのうちだつた。わたしも、T君も、馴れてはその風情にさそはれて、まへより足を近く訪問した。——でわたしたちをみるとすぐかれは酒にした。

冬のはじめの、曇つた、とある日だつた。突然わたしはかれから電話をうけとつた。——何かと思ふと、かれの代理と稱する男の聲で、うちにゐるなら即刻來い。——さういふ呼出しだつた。——勿論、わたしは、心えてすぐうちを出た。

電車を下りたところで蒲鉾屋の見世びらきをみつけた。——そこで土産をつゝませてわたしは俥に乘つた。

『よくゐたな、うちに………』

顏をみるなりかれはいつた。

『ゐるよ、それは……』

わたしはこたへた

『行かないのか、學校へ？』

『この二三日行かない。』

『どうして？』

『行くこともないから。』

『……』

背へない表情でかれの默つたとき逆にわたしはいつた。

『君は?』

『社か?』

『あゝ、』

『一寸、うむ、工合があつて休んだ。』

重い口をしぶるやうに『代りに、いま、内儀さんをつかひにやつた。』

『……』

『いま酒が來る。――男世帯で一杯はじめようといふんだ。』

『だらうと思つて仕入をして來た。』

わたしはそこへ出して『これは見世びらきの景物だ。』

『蒲鉾屋で燐寸をくれる奴もないぢやアないか。――いくら押上村だつて……』

わざと、かれは、みづからくすぐるやうに笑つた。

みた顔の、色の白い、男が茶の間のはうから出て來た。

『知つてるだらう、君、この人……?』

かれはわたしにいつた。

『いゝえ。』

わたしはこたへた。

『ぢやア紹介しよう。――E君だ。――この人にいま君のところへ電話をかけてもらつたんだ。』

若い劇評家のEは無言で頭を下げた。わたしも無言で頭を下げた。

それから、三人、手分けをして炭をついだり、チヤブ臺を出したり、皿小鉢をならべたりした。――わたしが海苔を燒くのを引うけた間にかれは俎だの庖丁だのを出しかけた。――命ぜられたまゝ、Eは、覺束ない手つきで只管かつぶしをかいた。

『さア、よし……』

段取がつき、やがて三人、かれの書齋にチヤブ臺を圍んでそれ〴〵すわつたとき、いつかしつとり庭のうへの濡れてゐるのにわたしは驚いた。暗いしぐれが音もなく忍びよつてゐた。

『あ、ふつて來た。』

わたしはつがれた盃を下に置いた。

『今日は、もう、大丈夫ふると思つてゐた。』

さういつてかれはEのはうへ酌をした。――默つて、Eは、つがれた盃を口に運んだ。

しばらく、わたしたちは、遣つたりとつたりをつゞけた。いつもさうのやうに話はすべて芝居のうへにあつた。一杯は二杯と身うちにだん〴〵酒の沁みるにつれ、かれの舌は熱を帶びて來た。言葉はいよ〴〵滑になつた。藝術座の「モンナ・ワンナ」公衆劇團の「エレクトラ」、近代劇協會の「マクベス」。――それからそれ潮さきに乘つて起つた新しい芝居の團體の、さうしたいろ〴〵の仕事のあまりに根ざしが淺く、でたらめにすぎるのを口をきはめてかれは罵つた。

それに對して、わたしは、わたしたち祖先のもつたすぐれた戯曲の傳統の、もの知らずの興行師や役者のために慘めに瀆されてゐることを心から悲しんだ。新しい時代の黎明はまだ來ない、それをかれもいへばわたしもいつた。まづ默阿彌に返れ、わたしもさういへばかれもいつた。――その間にあつて、Eは、はじめのうちこそ、とも〴〵無駄をいつてゐた、だん〳〵口かずが少くなると一しよに、とき〴〵空しい眼をあげて漸く繁くなつた雨脚をぼんやりみまもつた――と思ふうち、ぐつたり、灰のくづれるやうに、そのまゝそこへ横になつた。――犀利、奔放、誰とでも相手構はずやり合ふので評判のE。――これがそのうはさに聞いたEのさまかとわたしはあやしんだ。

『疲れ切つてゐるんだ。』

冷に、ほき出すやうに、だが、どこかいたはるやうにかれはいつた。

『…………？』

わたしはEのはうへむけた眼をかれにうつした。

『この男、こゝんところずつとロクに寢てゐないんだ。』

『寢てゐない？』

『四五日まへ親父と喧嘩してうちを飛出したんだ。――自棄で方々ほツつきあるいたあげく、上方へ行くといつて、昨夜十二時すぎに、ぺろ〳〵でうちへ飛込んで來たんだ。』

『では、うちぢやア……？』

『心配してゐるだらうと思つて、今朝、はがきをやつて置いた。』かれはいつた。『いくらカン〳〵になつてゐたつて親子だ。――[illegible]……』

『………………』

『俺のところにゐるとさへなりやア安心する。――信用があるんだからね、俺は……』

Eの父親も新聞の古い演藝記者だつた。――とき〲その片手間に書いた滑稽小説を、子供の時分、よくわたしは讀んんだことがある。………

『ほんたうに、しかし、上方へ……?』

もう一度、わたしは、Eのはうをみた。

『行きやアしないさ。』いつそかれは打捨るやうに『あてもないのに上方へ行つたつてはじまらないぢやアないか。』

『あてがなくつて、しかし……』

『ないんだよ。――景氣にたゞさういつたゞけさ。』かれはわらつて『行けつたつて行くもんか。――でなくつたつて未練があるんだ。』

『未練?』

『夢中になつてゐる女があるんだ、淺草に……』

『………』

『親父と喧嘩したのもつまりはその女のためなんだ。――なつちやアゐねえんだ。』

『………』

『そのくせ逢へねえんだ、女に。――いくらやきもきしても……』

『どうしてね?』

『世かれて逢はれぬ身となり果てよ。——さういふと、豪儀氣がきいてゐるが、さきぢやアどう思つてゐるか分らねえよ。——女が男に惚れるなんてことは、爲永春水以來御法度になつたことだ。』

かれは、また、探るやうに、——といふことは（わたしは、いま、はつきりかういふだらう）自ら嘲けるやうにさびしくわらつた。

……いたづらに評判の高くなつたことゝ、Eのまだ部屋住といふことゝで、急に女のうちで警戒し出した。さうしてEの足ぶみする一切の出さきへ女を送らなくなつた。——逢へない紛れ、Eは、いろんな無理もすれば惡法もかいた。——結果がうちを飛出す切迫になつて、それにしても一ト日と、あらゆる智慧をしぼつたが駄目だつた。逢へなかつた。——で、一昨日の晩、夜明しのおでんやでとう〳〵行きどころのない夜を明したあと、どこをどうしたか、氣のついたときには、當席の疊のうへに綿のやうになつた體を投出してゐた。高座には松鯉が上つてゐた。忽ちEの眼からとめどなく涙がながれた。——それは悲しいからでもなかつた。口惜しいからでもなかつた。——いつにかはらない松鯉の至藝のまへに、零落し切つた、惨めに世間から突つ放されてしまつた孤獨の自分をゆくりなくそこにEはみ出した。——いそいでEは外へ出た。——さうして、また、わけもなく酒を飲んだ。

Eについての、かれの、さうした話のうへに蒼白く日に暮れて來た。草も、木も、石も、すべてしとゞに濡れつくしたなかで、池のうへだけ、ほのかに、哀しい光をうかべてゐた。——話が切れると、冷めたい、情ない雨の音がひとへにあたりを籠めてゐた。

『すつかり、これはほん降りだ。』

わたしは自分にいつた。

『寒くなるんだ、これで……』

さういふと、かれは、立つて押入から掻巻を出して來た。密とそれをEのうへに擴げた。――ふと、Eは、眼をあけたが、すぐまた閉ぢてさびしい眠りをつゞけた。

『今日は、おもてのお師匠さんが休みだからしづかだ。』

いひながら、かれは、茶の間の銅壺から新しい燗をつひでに取つて來た。

このときのけしきほど、わたしに、かれの亀戸のうちを、可懐しく、しみ〴〵思ひ返させるものはないのである。……

三

わたしが馬石に逢つたのは、Eにその逢つたのよりもつとまへのことだつた。かれが亀戸へ越して間もなく。――わたしの記憶にもしあやまりがなければ、はじめてそれはT君と、何かのつひで、ほんの檢分のかたちに門までよつてみたときだつた。日曜だか祭日だかで生憎かれはうちにゐた。そのまゝ二三時間話込んだあと、天氣の好かつたのに乘つて、夕方、つまりは一しよに外へ出た。――かれの智慧で、柳島から業平まで船に乘ると、水のうへふく風がしつとり頸に觸れた。

『すつかりもう秋だ。』

點けたやうに灯つた橋本の二階を心細く、うか〳〵しちやアゐられない、さういつた感じに、ともにふと料簡のしんみりしたのを覺えてゐる。……

業平で船を上り、吾妻橋をわたつて、仲見世を富士横町のはうへわたしたちはあるいた。――どうして、そのとき、馬石をたづねることになつたのか甚たしかでないが、何でもはじめに病院を出たあとで、だん〴〵また惡いはなだといふうはさの傳つてゐる時分だつた。――つまりは、どんなだか見舞に行つてやらうぢやアないか、ついした工合にさうなつて。――ことによると、夫人の手前、それをいひたてにかれ、うちを出たのか知れなかつた。――仲見世をそのまゝ富士横町へ入ることになつたに違ひなかつた。――そのころ、馬石は、富士神社の境内を田町のはうへ下りた露次に妹と二人で住んでゐた。

『馬石さん。………』

兩側にならんだ。――月に暗く。――長屋の、とツつきの、宵からもう戸を閉めたうちのまへにかれは立つた。

『どなた………？』

高座でいつも聞く聲がなかゝらきこえた。

『わたしだよ。――わたし……』

かれはいつた。

『どうぞお入んなすつて………』

直ぐなかの聲は應へた。

入るとうちのなかは眞つ暗だつた。默つてさきに立つかれにしたがつて、障子をあけると、蠟燭と西洋燈を枕もとにつけて、一人、馬石は、蒲團のうへに起直つてゐた。――妹はどこかへ使に出てゐなかつた。

うはさとは違つて案外元氣だつた。高座と同じ姿勢に、間斷なく頭で拍子をとりながら、あたまの工合の惡くなつた

時分の話から、そのころの身のまはりを取卷いてゐた、蛇の茂兵衞だの、白玉だのといふ人たちの話。――眼がさめて夜中に水を飲まうとすると、水さしが口をきいて、その白玉といふ女の死んだことを知らしてくれた。――さうした夢のやうな不思議な話を、決して夢と思はせず、不思議と感じさせず馬石は話した。――その、容な、とりとめのない世界へ完全にわたしたちは誘はれた。

そのあとで、馬石は、前の晩眠られなかつたまゝ工夫したといふ落語のことをいひ出した。――燐寸の殼をそれ〳〵のメドにして、それを疊のうへにならべ、こゝをかう持つて行つて、こゝで調子をかう張れば、と、いち〳〵例をあげてそれを説明した。――かれ本來の「藝」に對する熱さと、早く體をもとにして高座へ返りたい一トすぢの念願とがはつきりそこに感じられた

が、それからそれ、こつちにはまるで口をきかせず、さきでばかり立續けに饒舌るのが、いかにもわたしたちへ勤めてゐる痛々しいさまにわたしたちにはみえた。わたしたちは幾たびか顏をみ合せた。でも、立つ隙をかれは與へなかつた。――見舞を置いて、無理からやがて立上ると、馬石は、わざ〳〵蒲團から立つて門まで送つて來た。――かれの持つた豆洋燈の鈍い灯影をふり仰ぐ蟲の音がほそ〴〵とつゞいた。

それからわたしたちは、象潟町の、其角堂の宗匠がみつけ出したといふ小さな天麩羅屋で遲い夕飯を喰べた。――今度もし、馬石の體がほんたうになつて、獨演會でもするときがあつたら、そのときには一つ連中でもしてやらう。――わたしたちはさうしたことを話合つた。

そのつぎ、もう一度馬石をたづねたのは、その年ずつと押しつまつて、自由劇場が第六回の公演を帝國劇場でやつたときだつた。――くはしくいへば三日間やつた興行の三日目をみたあくる日だつた。――ありやうは、その晩、その

演出された『夜の宿』をみて極度の昂奮をしたわたしは、かれと、T君と、外にもまだ二三人ゐた、N氏のため、自由劇場のために一時すぎまで祝盃をあげた。揚句夜の明けるまで東京中をあてなくほツつきあるいた。——そのあとでだつた。

勿論、それは、N氏歸朝後はじめての演出として無條件に期待してゐたものだつた。これによつて日本の新しい芝居の價値(ねうち)のはつきり闡明されることゝわたしは固く信じてゐた。それは「西洋の芝居を單に「紹介」するといふ時代はすぎました。單に「やつてみる」「試みてみる」といふ時代はすぎました。現今東京にある幾多の新劇團は頻々として西洋の名作を舞臺の上に紹介してをります。西洋の芝居を單に「紹介」するだけが自由劇場の使命なら、同劇場の存在の餘地はもう無くなつてゐるといつて好いだらうと存じます。私共はそろ〳〵「技藝」の時代に入らなければなりません。今まで單なる「紹介」として皆さんのまへに動かした戯曲を、これからは「技藝」として——演劇としての獨立的價値を有する技藝として皆さんのまへに展開しなければならないことになりました。私共がいまゝでやつたことは無謀でした、粗笨でした、野蠻でした。これからは一つの戯曲を一節から一節と深く長く細く研究して、段々に自分の氣に入るやうなものを仕上げて行かなければなりません。」といふ公演まへN氏によつて發表されたその宣言書を讀んだゞけでわたしは胸の痞への下りるのを感じた位である。——が、公演のその日が來て、まのあたりその舞臺に接したとき、すでに空想した何十倍かのものがわたしに返つて來た。ワシカの眞つ紅な襯衣に、陰暗なラムプの瞬きに、「牢屋は暗い……」の涙ぐましい合唱に、わたしは——わたしばかりではない、かれも、T君も、こと〴〵くもう醉つたやうになつた。——芝居の終つて外へ出たとき、暗い、雨の滿ちた空にむかつて、實際、わたしたちには、何か大きな聲で叫ばなくつてはゐられないものを感じた。——て、わたしたちは、わけもなく飲んだくれた。

暗い、長い、冬の夜も、淺草へわたしたちの着いたときにはさすがに東が白んでゐた。漸く昂奮からさめたわたしたちは足の重さを覿面に感じてゐた。――そこでかれのしぼつた智慧が、今戸の、Sさんのうちへ朝駈(あさがけ)することだつた。T君も、わたしも、その思ひつきをえてわづかに救はれた。

『緋縅しの落武者たち……』

Sさんは顏をみるなりさういつてわらつた。朝の早いSさんはすでに座敷の掃除をすましてゐた。――わたしたちは庭のはうからそこへ通された。

すぐに酒になつた。湯豆腐から立つしづかな湯氣に、間もなく、朝の日がほのかにさして來た。消えかねた霜のうへに空のいろが濃く匂つた。――靑木の實が赤く、昨夜(ゆうべ)のことは、すべてが遠い國の夢だつた。

晝近くなつて、わたしたちは、Sさんを入れて四人、醉ひ痴れて外へ出た。――最近田町から吉野町へ越した馬石をあはよくば引つ張り出さうといふたくみをわたしたちはもつてゐた。

Sさんの記憶のまゝ四十七番地といつて方々探した。とび〳〵の分らない番地をそのあたりが持つものゝ、どこをどうしてもわたしたちは四十七番地にぶつからなかつた。露次といふ露次をいち〳〵入つてみたが分らなかつた。と、只(と)ある露次に紺屋の張場(はりば)があつた。一人(ひとり)職人が仕事をしてゐた。――Sさんはそばへよつてその職人に訊いた。

『四十七番地にはうちは一軒もありませんよ。』

膠もなくその職人はいつた。

『うちがない……？』

Sさんは訊き返した。

「寺の墓地だからね。」

決して職人は旗を張る手を休めなかつた。――わたしたちは顔をみ合せた。

斷念めてわたしたちは電車通りへ出た。

「新宿へ行く華魁の師走かな……」

ふとSさんは古い馬石の句をつぶやくやうにいつた。――T君も、かれも、わたしも、三人は無言のまゝあるいた。

それから間もなくだつた、かれの社を止したのは……

さうすることによつて、かれは、背景をもたないかれみづからのほんたうの價値を世に問はうとした。（十四年十一月）



入れ札（戯曲）

菊池寛

――自作小説「入れ札」を尾上菊五郎氏の囑に依つて戯曲化したるもの也――

人物

國定忠次

稲荷の九郎助

板割の淺太郎

島村の嘉助

松井田の喜藏

玉村の彌助

並河の才助

河童の吉藏

閑雲の牛松

釋迦の十藏

その他三名

時所。上州より信州へかゝる山中。天保初年の秋。

情景。

ある秋の日の早曉、小松のはへた山の中腹。地には小笹がしげつてゐる。日の出前、雲のない西の空に、赤城山が仄かに見える。幕が開くと、才助と淺太郎とが出て來る。二人ともうす汚れた袷の裾をからげ、脚絆をはき、わらぢをつけてゐる。めい／＼腰に一本の長脇差をさしてゐる。淺太郎の方は、割れかゝつた笠を紐で括つてゐる。二人が舞臺の中央にかゝつた時、後ろから呼ぶ聲が聞える。

呼ぶ聲。おうい、淺兄い、待てえッ。
淺太郎。おうい、何ぢやい。
呼ぶ聲。おうい／＼。淺兄い。
淺太郎。おうい、何ぢやい。
呼ぶ聲。少し足を止めてくれ。あんまり離れるな。
淺太郎。ようし、分つたぞ、待つてゐるぞ。（傍らを振り向いて、才助に）おい才助、一休みしようぢやねえか。
才助。大丈夫かなあ、こゝいらで足を止めてゐて。
淺太郎。大丈夫だとも。大戸の關を破つたのが。昨夜の五つ頃だ。あれから歩き通したもの。もうかれこれ十里近くも

突つ走してらあ。
才助。みんなよく足がつゞいたものだ。
淺太郎。俺たちは、これ位の事ではビクともしねいが、九郎助や牛松などの年寄は、あれでいゝ加減へこたれてゐらな。
才助。だがよく辛抱してついて來たなあ。
淺太郎。常日頃口幅つたいことを云つてゐる連中だ。ついて來ずにはゐられめえぢやねえか。
（二人が話してゐる間、九郎助と彌助並んで出て來る。九郎助は五十に近き老人、彌助は四十前後、）
才助。（九郎助に）やあ、稻荷の兄い、足は大丈夫かい。
九郎助。何を世迷言を云ひやがる。かう見えたつて若い時は、賭場が立つと聞いた時は、十里二十里の夜道は平氣で歩いたものだ。いくら年が寄つても足腰だけはお前達にひけは取らせねえや。
淺太郎。兄い、あんまりさうでもなささうぢやねえか。榛名の山越えぢや、少々參つてゐたやうだぜ。
九郎助。何を云つてやがらあ。それあお前達のことだらう。この頃の若い奴等はまだ修業が足りねえや。俺ら若い時にや、忠次の兄いと一緒に、信州から甲州へ旅人で、賭場から賭場をかせぎ廻つたもんだ。その頃にあ、日に十里や二十里は朝飯前だつたよ。
彌助。さうだつたなあ、稻荷の兄いの若い時は豪勢なもんだつた。今の忠次の親分だつて、ばくち打の式作法は、まあお前に教はつたやうなものだなあ。
淺太郎。ふうん。さうかなあ。式作法は稻荷の兄いに敎はつたかも知れねえが、あの度胸骨と腕つ節は、まさか敎は

やしねえだらうねえ。

九郎助。（一寸色をかへて）何だと、おつなことを云ふなよ。

淺太郎。何にもおつなことは云ひやしねえ。よくお前さんは昔は〳〵と云ふが、幾ら云つたつて昔は昔さ。昔は親分より一枚上のばくち打だつたか知らねえが、今ぢや盃を貰つて子分になつてりや、俺達とは朋輩だ。あんまり昔のことを振廻しなさんなよ。

（九郎助、默る。）

彌助。だが淺太郎、お前はな。幾ら親分の氣受がいゝからと云つて、あんまり年寄のことをつんけん云ひなさんなよ。もう少し俺達をいたはつてくれたつて罰は當るめえ。

淺太郎。ふゝん、いたはつてくれか笑はせやがらあ。

九郎助。野郎、何だと、何がどうしたと。

才助。おい〳〵、阿兄達どうしたんだ、こんな時、仲間喧嘩をする時ぢやねえぢやねえか。

淺太郎。だが、あんまり相手が年寄風を吹かすからだ。

九郎助。なあに、どちらがどちらだか。手前の方がよつぽど若い者風を吹かしてやがるぢやねえ。

彌助。まあ、いゝぢやないか。今に若い者が役に立つか、年寄が役に立つか分る時が來らあ。

才助。（ふと近づいて來る忠次を見つけ）やあ親方がお見えになつたぜ。

（四人とも立上る。忠次、嘉助、要藏、牛松などの乾兒を伴つて登場。小鬢の所に傷痕のある淺黒い顏、少し窶れが見えるため一層凄味を見せてゐる。關東縞の袷に獻上帶を締めて、鮫鞘の長脇差を落し差の[illegible]きトしの笠を冠ぶつ

てゐる。）

才助。親分お疲れでございませう。

忠次。うゝむ、心配するな。まだ五里十里は大丈夫歩けるぜ。

淺太郎。親分、此方の方へおかけなせいませ。此方の方が草がキレいですぜ。

忠次。足は疲れねえが、ねむいよ。

嘉助。ほんとうだ。それやみんな同じことですぜ。

喜藏。だが、安心はならねえ。足腰の立つ中は、早く信州境をこしてしめいていものだ。

忠次。おい、赤城山が見えるぢやねえか。

（みんな氣がつく。）

淺太郎。雲がちつともねえものだから、あんなにハツキリ見えてゐらあ。

忠次。なつかしい山だ。もう彼處が死場所だと思つたが、神佛の冥護とでも云ふか、よく千人近い八州の捕方を斬りひらくことが出來たものだ。

喜藏。親分、神佛が俺達をかまつて下さるものかねえ。みんな俺達の腕つぷしだよ。

忠次。あはゝゝゝ、それもさうか。とにかく、みんなよく働いてくれたな。改めて、禮を云ふぜ。

一同。何を云はつしやる。とんでもねえことだ。

忠次。（小笹の上に腰を下しながら）赤城の山も、これが見收めだな。おい、此處いらで一服しようか。

（みんな忠次を圍つて腰をおろす。乾分河童の吉藏後を追つて登場する）

吉藏。親分、朝飯は手に入りましたぜ。下の百姓家で、折よく御飯を焚いてゐましたので、すつかりにぎりめしにして貰ふことにしました。

忠次。そいつは有がたい。鳥目を充分に置いてやれよ。

吉藏。かしこまりました。

（吉藏かけさる）

喜藏。飯が出來るまで、ゆつくり休めると云ふものだ。

（みんな暫く無言）

九郎助。飯が來るまで、一ね入りしようかな。

彌助。そいつはいゝ考へだ。

嘉助。おいらも一ね入りしようかな。

忠次。おい！　一寸待つてくれ！

嘉助。何だ親分、改まつて？

忠次。おい！　みんな。

（忠次が、緊張してゐるので、みんな居ずまゐを正す。）

忠次。おい！　みんな。一寸耳を貸して貰ひてえのだが、俺これから信州へ一人で落ちて行かうと思ふのだ。お前達を連れて行きてえのは山々だが、お役人を叩き斬つて天下のお關所を破つた俺達が、お天道さまの下を十人二十人つながつて歩くことは、許されねえことだ。もつとも、二三人に一所に行つて貰ひてえとも思ふのだが、今日が日まで、附

と辛苦をしたお前達みんなの中から、汝は行けわれは來るなと云ふ區別はつけたくねえのだ。連れて行くからなら一人殘らず、みんな連れて行きてえのだ。別れるからなら恨みつこのないやうに、みんな一樣に別れてしまひてえのだ。さあ、玆に使ひ殘りの金が百五十兩ばかりあらあ、みんな十二兩づゝ呉れてやつて殘つたのは、俺が貰つて行くんだ。めいめいに當を考へて落ちてくれ！　いゝか隨分身體に氣をつけて、たつしやでゐてくれ！　忠次が何處かで捕まつて江戸送りにでもなつたと聞いたら、線香の一本でも上げてくれ……あはゝゝゝ……（喜藏に）おい、その金をみんなに別けてやれ！

喜藏。そりや親分！　惡い了簡だらうぜ。一體、俺達が妻子眷族を捨てゝ此處までお前さんについて來たのは、何の爲だと思ふんだ。みんな、お前さんの身の上を氣づかつて、お前さんの落着く所を見屆けたい一心からぢやねえか。

淺太郎。さうだとも。いくら大戸の御番所をこして、もうこれから信州までは、大丈夫と云つたところで、お前さんばかりを手放すことは、出來るものぢやねえよ。

嘉助。ほんとうだ。尤も、から物騷な野郎ばかりが、つながつて歩けねえのは道理なのだから、お前さんが此奴と思ふ野郎を名指しておくんなせえ。何も親分、乾兒の間で、遠慮することなんかありやしねえ。お前さんの大事な場合だ。恨らみつらみを云ふやうなケチな野郎は一人だつてありやしねえ。なあ！　兄弟。

多勢。さうだとも。さうだとも。

忠次。（だまつてゐる）………。

淺太郎。なあ！　あつさりと名指をしてくんねえか。

忠次。（だまつてゐたが）名指しをする位なら、手前達に相談はかけねえや。みんな命を捨てゝ働いてくれた手前だち

だ。俺の口から差別はつけたくねえのだ。

九郎助。こりや、尤もだ。親分の云ふのが尤もだ。こんなまさかの場合に、捨てゝ置かれちや誰だつていゝ氣持は、しねえからな。

淺太郎。（九郎助に）手前のやうな人がゐるから物事が面倒になるのだ。年寄は足手まといですから、親分わしや茲でお暇をいたゞきますと、あつさり出ちやどうだい。

九郎助。何だと野郎、手前こそまだ年若でお役に立ちませんから、此度の御用は外さまへねがひますと云つて引き下れ。

淺太郎。何だと

忠次。おい！　淺！　手前出すぎるぞ。だまつてゐろ！

淺太郎。はい。はい。

（釋迦の十藏、ふとひざをすゝめて）

十藏。なあ、親分いゝことがあらあ。

二、三人。何だ、何だ。云つて見ろ。

十藏。籤引がいゝや。みんなで、籤を引いて當つたものが親分のお伴をするんだ。

忠次。なるほどな。こいつは恨みつこいがなくていゝや。

嘉助。親分何を云ふんだい。こんな青二才の云ふことを聞いちや、ダメぢやねえか。籤引だつて、馬鹿な。もし籤が十藏のやうな青二才に當つて見ろ、親分のお仲どころか、親分の足手まといぢやねえか。籤引なん俺ア眞平だ。こんなとき、一番物を云ふのは腕つ節だ！　なあ、親分！　くだらねえ、遠慮なんかしねえで、たつた一言俺について來いつ！

と云つておくんなせい！

喜藏。嘉助の野郎、大きいことを云ふない。腕つ節ばかりで、世間さまは渡れねえぞ。まして、これから知らねえ土地を遍めぐつて、上州の國定忠次でございと云つて歩くには、駈引萬端の軍師がついてゐねえことには、動きはとれねえのだ。幾ら手前が、大めし喰ひの大力だからと云つて、ドヂばかりを踏んでゐちや旅先で飯にはならねえぞ。

九郎助。（今までだまつてゐたが）腕つ節だとか駈引だとか、そんなことを云つてゐちや限がねえ。こんなときは、盃を貰つた年代順だ。それが、まつとうな順番だ。盃を貰つたのは、俺が一番古いんだ。その次ぎは彌助だつた、なあおい！（彌助の方を見る。）

淺太郎。九郎助ぢいさん、何を云ふんだい。葬禮のお伴ぢやねえんだぞ。年寄ばかりが、ついてゐていざとなつたときはどうするんだ。

九郎助。手前達にそんな心配をさせるものか、かう見えたつて稲荷の九郎助だ。

淺太郎。その睨みが、あんまり利かなくなつてゐるのだ。まあ、爺さんさう力味なさんなよ。

九郎助。此野郎！

喜藏。けんかをしちやいけねえつたら！

牛松。親分、俺あお供は出來ねえかね。俺あ腕節は強くはねえ。又、喜藏のやうに軍師ぢやねえ。が、お前さんの爲には、一命を捨てゝもいゝと心の内で、とつくに覺悟をきめてゐるんだ。……

三四人。何を云ひやがるんだ。親分のために命を投げ出してゐるのは手前一人ぢやねえぞ。ふざけたことをぬかすねえ。

（牛松しよげて頭をかきながらだまつてしまふ。）

忠次。お前達のやうに、さうザワ〳〵騒いでゐちや、何時が來たつて果てしがありやしねえ。俺一人を手放すのが不安心だと云ふのなら、お前達の間で入れ札をしてみたらどうだい。札數の多い者から、三人丈つれて行かうぢやねえか。こりや一番恨みつこいがなくつて、いゝだらうぜ。

喜藏。こいつあ思ひ付だ。

淺太郎。そいつあ趣向だ。

三四人。なるほど、名案だな。

忠次。ぢや一つ入れ札できめて貰はうかな。

四五人。ようがす。合點だ。

（吉藏、にぎりめしを入れた、大きいざるを持つて出て來る。）

吉藏。親分、めしが來ましたぜ。

忠次。こいつはいゝ所へ來た。みんなめしを喰ひながら、誰を入れるか思案をして貰ふのだ。

（吉藏、めしをみんなに配る。）

吉藏。さあ、みんな二つ宛だぞ。澤庵は、三切れづつだ。

みんな。ありがたえ、ありがたえ。

喜藏。久し振りに、あたゝかい飯が喰へらあ。

忠次。（にぎりめしを手にしながら）俺、水が飲みたえや。

吉藏。水なら、半町ばかり向ふに流れがありますぜ。

忠次。さうか、ぢや行つてのんで來よう。
吉藏。とつてもねえ、いゝ水だよ。
三四人。ぢや俺達も行つて來よう。
淺太郎。俺も、顏を一つ洗ひたいや。
（みんな、どや〳〵と流の方へ行く。後には九郎助と彌助と丈がのこる。）
九郎助。（にぎりめしを、まづさうに喰つてしまつた後）、あゝいやだ、いやだ。どう考へてもおらあ入れ札はいやだな！
彌助。なぜだい、阿兄！
九郎助。入れ札ぢや、俺三人の中へはへ入れねえや。
彌助。そんなにお前、自分を見限るにも當らねえぢやねえか。忠次の一の乾兒と云へばお前さんに定まつてゐるぢやねえか。
九郎助。上部はさうなつてゐる。だが、俺去年大前田との出入りのとき、喧嘩場からひつかゞれてから、ひどく人望をなくしてしまつたんだ。それが俺にはよく分るんだ。上部は、阿兄〳〵と立てゝ居てくれても、心の底ぢや俺を輕るんじてゐるんだ。入れ札なんかになつて見ろ！　それがアリ〳〵と札數に出るんだからな。
彌助。……………………
九郎助。何ぞと云へば、俺を年寄扱ひにしやがるあの淺太郎への意地にだつて、俺捨てゝ行かれたくねえや。
彌助。尤もだ。だが、心配することは入らねえや。お前が、落つこちる心配はねえ。
九郎助。さうぢやねえ。怪しいものだ。どうも俺に札を入れてくれさうな心當りはねえや。

彌助。並河の才助が居るぢやねえか。あの男はお前によつぽど世話になつてゐるだらう。

九郎助。いやあ、此頃の若い奴は、恩を忘れるのは早いや。あいつは此頃ぢや、「淺阿兄〳〵」と、淺にばつかりくつついてゐやがる。

彌助。…………

九郎助。俺、から思ふんだ。淺には四枚へ入らあ。喜藏には三枚だ。すると後に四枚殘るだらう、その四枚の中で俺二枚取りていのだ。お前は俺に入れてくれるとして（九郎ぢつと彌助の顏を見る）

彌助。（だまつてうなづく）…………

九郎助。お前が俺に入れてくれるとして、アトの一枚だ。俺、此の一枚をとるためには、片腕でも捨てたいのだが。

彌助。冗談云つちやいけねえ！ さう思ひつめなくても大丈夫だよ。喜藏だつて、お前に入れねえものぢやねえよ。

九郎助。あいつは、淺と此頃仲がいゝからなあ！ アト一枚だ。あ、アト一枚だ！（ぢつと腕をくむ）

（水を飲みに行つた人々、どや〳〵と歸つて來る。）

喜助。あんなにぎりめしを、もう十五、六喰ひていや。

淺太郎。あれでも、一時の蟲抑へにはありがたい。さあ、飯はすんだ。入れ札を早くやつて貰はうか。

喜藏。心得た。

（彼は、懷中より懷紙を出し、脇差をぬいて幾片かに切斷する。みんなに一枚宛渡す。）

喜藏。矢立の筆は、一本しかねえぞ。なるべく早くかいて廻してくれ。かいたやつは、小さく折つて、此割籠の中に入れてくれ。

淺太。札の多い者から三人だぜ。

十藏。えゝ承知しました。
喜藏。十藏、お前からかけ！
（十藏に筆を渡す。めい〳〵次ぎ〳〵に筆を借りてかく。彌助書き終へ九郎助に近よりて）
彌助。そら阿兄、筆をやるぜ。
（彌助、約束を果したる如くニツコリ笑ふ）
九郎助。ありがたえ。
（九郎助筆を取る。煩惱の情、あり〳〵と顔に浮びしばらく考へ込む）
淺太郎。おい、爺さん。早く筆を廻してくんねえか。
九郎助。何だと！
淺太郎。考へるなら、筆を外へ廻してくれ！
九郎助。だまつてゐろ、入らねえ口をたゝくなよ！
（九郎助、憤然として筆を下す。）
才助。爺さん、俺にかしてくれ。
九郎助。ほら。（筆を投げる）
（才助、それを受取り、彌助の傍へ行く）
才助。なあ、彌助兄！　字を敎へてくれ。
彌助。敎へてやる！　何と云ふ字だ。
才助。（彌助の耳の傍で何かさゝやく。）……。

彌助。よし、かうかくのだ。（指先で、才助の持つてゐる紙面の上にかいてやる）
才助。分つた。ありがてえ。
（みんな、つぎ〳〵にかき了へる。）
喜藏。さあ、みんな書いたか。まだ書かねえ人はねえか。（周圍を見廻す）よし、みんな書いたのだな。親分、みんなかきました。
忠次。われ、讀み上げて見ねえ。
喜藏。よし、合點だ。
（皆は、緊張して眼をかがやかし、壺皿を見つめるやうな目付で、喜藏の手許を睨んでゐる。）
喜藏。（折つた紙片をひらきながら）いゝか。みんな聞いてゐてくれ。あさ。假名であさとしか書いてねえや。だが、淺太郞に違ひねえ！　淺太郞が一枚！　（みんなに紙片を見せる。）おや、今度も淺太郞だ。淺太郞が二枚！
忠次、（わが意を得たりと云ふやうに、ニッコリ笑ふ）
喜藏。今度は、喜藏だ（紙片を見せながら）何うだい。ウソちやねえだらう。喜藏が一枚！　おや、その文がまた、喜藏だ！　ありがたい！　みんなは、やつぱり目が高いや。どうだい！　喜藏が二枚だ！
（喜藏は、得意げに紙片を高く示す。九郞助は、やうやく焦燥の色を現す。）
喜藏。おや何だ。丸で、金くぎだ。何だ、く－ろ－す－けか。九郞助だ。九郞助だ。九郞助が一枚だ。
（九郞助、狼狽し、はげしく動搖す。）
喜藏。その文はまた淺だ。これで淺太郞三枚だ。おやありがてい、その文はまた喜藏だぞ。喜藏は三枚だ。この文は淺太郞だ。淺太郞四枚。おやその文はまた此の俺さまだ。喜藏四枚だ。これで俺と淺太郞はたしかだぞ。おれこの次ぎ

嘉助だ。

嘉助。しめた！

喜藏。これで淺と俺とが、四枚づつ、九郎助と嘉助とが一枚づつだ。二人の勝負だ。

嘉助。アト一枚だな。一寸持つてくれ、俺と出るか九郎助と出るか。

九郎助。俺だとも。なあ、きまつてらな彌助！

彌助。(默つて答へず)……

喜藏。さあ！ あけるぞ。どつちだ丁か半か。九郎助か嘉助か。あゝ、……嘉助だ。

九郎助。なに、嘉助だつて。

(九郎助身をもがいてくやしがる。)

淺太郎。やつぱり、みんなは正直だ。ありがてい。やつぱり親分のためを思つてらあ。みんなありがたう。お禮を云ふぞ。親分のことは俺達が引受けた。

才助。ぢや、淺兄たのんだぜ。

忠次。ぢや、みんな腑に落ちたんだな。それぢや、淺と喜藏と嘉助とを連れて行くぜ。九郎助は一枚入つてゐるから、連れて行きていが、最初云つた言を變改することは出來ねえから、勘辨しな。さあ、先刻からえらう、手間を取つた。ぢや、みんな金を分けて、めい〲に志すところへ行つてくれ。

喜藏。(五十兩包みをこはしながら) さあ、みんな遠慮なく取つてくれ。

(喜藏。遠慮する乾兒達に、分けてやる) 九郎助阿兄、何を考へてゐるのだ、われも手を出しなせえ。

(九郎助、不承無承に手をさし出す。)

忠次。ちや、俺達は、一足先に立つぜ。みんな氣をつけて、行つてくれ。

一同。親分、御きげんよう。お氣をおつけなせえませ。

才助。淺兄貴頼んだぜ。

淺太郎。安心してゐろよ。

十藏。喜藏兄たのんだぜ。

喜藏。合點だ。親分の身體は、俺達の、目の黒い中は、大丈夫だ。

(口々に、呼びかはしながら、三人山上の方へとかくれる。)

牛松。淺達がついてゐりや、ていした間違はありやしない。

才助。親分の胸の中だつて、あの三人をめざしてゐたに違えねえや。

十藏。違いねえや。あいつらをつけて置けば大丈夫だ。

牛松。さあ、俺これから草津の方へ落ちてやらあ。

才助。おいらも、草津だ。

十藏。おいらも草津へ出よう。

牛松。ちや草津組は一しよに出かけようや。九郎助阿兄！ お前は、何處へ行くんだ。

九郎助。おいら、もう半割者へよう。

牛松。思案は、早い方が勝だぜ。

(入れ札の紙、風にふかれ[illegible]とする。)

九郎助。もういけねえ、こん[illegible]、とんだ事ばかりになつちまつた[illegible](九郎助[illegible]て幕)

に丸める）

牛松。ぢや、稲荷の阿兄、ごきげんよう。」

九郎助。もう行くのか、あばよ。

十藏。彌助阿兄、ごきげんよう。

彌助。ごきげんよう。

（みんな口々に、別れの言葉を交し、四人は最初みんなが來た方へ引つ返す。後に、九郎助と彌助と丈がのこる。
九郎助の顏は、凄いほど、蒼い。默然として考へてゐる。）

彌助。おい阿兄！　お前は、どの方角へ行くんだ。

九郎助。うるせえや、今考へてゐると云ふに。

彌助。おらあよつぽど、草津から越後へ出ようと思つたが、よく考へて見ると、熊谷在に伯父がゐるのだ。少しは、熊谷はあぶねえかと思ふが、故郷へ歸る足溜りには持つて來いだ。それで俺武州の方へ出るつもりだが、お前はどうする氣だ。

九郎助。（默して答へず）………

彌助。お前、よつぽど入れ札が、氣に入らなかつたのだな。もつともだ、俺も今日の入れ札は、最初からいやだつた。親分も親分だ！　餓鬼の時から、一緒に育つたお前を捨て、行くと云ふ方はねえや。淺や嘉助は、いくら腕つぷしが強くつてもお前に比ぶれば、ホンの小僧つ子だ。また、たとひ入れ札をするにしたところで、野郎達がお前を入れねえと云ふ方はありやしねえ。十一人の中で、お前の名をかいたのは、この彌助一人だと思ふと、おらあ彼奴等の心根が全く分らねえや。

九郎助。（憤然として）此の野郎、手前ほんとうにかいたのか。

彌助。かいたとも、俺より外にお前の名をかく奴なんかありやしねえぢやねか。

九郎助。ほんとうに書いたか。

彌助。かいたとも、俺より外に誰がかくと思ふ。

九郎助。手前、ウソをつくと叩つ切るぞ。

彌助。論より證據、お前の名が一枚出たぢやねえか。

九郎助。（先刻、丸めた中より忙しく一の紙片をよりだしながら）これを手前がかいたと云ふのか。仲間の内で能筆の手前が、こんな金くぎの字をかくか。

彌助。うゝむ。（狼狽する）

九郎助。これでもかいたと云ふのか。

彌助。阿兄、かんにんしてくれ。阿兄わるかつた！。ウソをついた俺を叩つ切つてくれ！

九郎助。（脇差に手をかける、が、すぐ思ひ返す）よさう。たつた一人の味方と思ふ手前にだつて、心の中では生氣地なしと見限られてゐるおれだ。手前を叩つきつたつて何にもなりやしねえ。

彌助。だが不思議だな、俺が、かゝないとしたら、それを誰がかいたんだらう。

（彌助紙片をみつめる。九郎助あはてゝ丸める）

彌助。誰がかいたんだらう。（ふと、氣がつく）阿兄、まさかお前が自分でかくやうなケチな眞似はしねえだらうな。

九郎助。なゝ何を云ふ（ふと氣が變つて急に泣く）彌助、かんにんしてくれ。意氣地なしの此伜を手前、親分の代りに勘辨してくれ。

（九郎助[illegible]

……………………幕……………………

央公論大賣捌所

東京京橋區銀座三丁目 東海堂
同 京橋區元數寄屋町 北隆館
同 日本橋區新右衞門町 大東館
大阪市北區梅田町 盛文館
同 北區東梅田町 立盛社
京都市七條停車場前 共盛社
同 新町通七條南入 大誠社
名古屋市富澤町 中京堂
朝鮮京城本町二丁目 日韓書房

◉定價 普通號一冊 金八拾錢 内國郵税 金貳錢五厘
外國郵税 金拾四錢（但、支那を除く）

冊數／國別	内國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金五圓六拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾壹圓貳拾八錢
	以上郵税共	

▲前表は普通號の冊數を示したるものなれば新年號及特別號は其の都度特價を別に申受くべし

一振替貯金 口座番號は東京三四番 長野三二〇五番なり

一郵券代用は謝絶す 但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるゝことを許します

一代金引替 小包の取扱は一切謝絶す

一集金郵便 御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を添へて弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず

一金二圓以上五圓迄 金七錢（集金委托料）
一金拾圓迄 金八錢（及送料共）

一中央公論及婦人公論代金取纏め御拂込みの場合には各誌割當にて金額御指定を乞ふ

一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十四年十一月廿日印刷納本
大正十四年十二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 高野敬録
印刷人 高木島三

發行所 中央公論社
東京市丸ノ内ヒルヂング七階七百七十七區
電話 長丸ノ内三〇二二（當分不通）
牛込 五〇八九
電信略號コウロ

印刷所 株式會社秀英舍
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.